

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第167集

御 山 寺 遺 跡

2011

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第167集

ご さん じ い せ き
御山寺遺跡

2011

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野の東部を大きく蛇行しながら伊勢湾にそそぐ五条川の中程に岩倉市があります。

岩倉市は、戦国時代には岩倉城が築かれ、尾張北半を支配する政治・経済の中心地でありました。当センターでは岩倉市街地を東西に貫通する県道萩原・多気線の建設に先立ち、昭和 62 年から平成 2 年にかけて岩倉城の発掘調査を行い、その偉容を明らかにしました。

この度、岩倉城の北 1.5km ほどの岩倉市街地を東西に貫く緊急地方道路整備事業 3・3・8 号一宮春日井線が計画され、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、御山寺遺跡の発掘調査を平成 16 年から平成 21 年度(平成 20 年度を除く)までの 5 ヶ年にわたって行ってまいりました。それによって再び岩倉市の往古の姿を再び明らかにすることができました。

御山寺遺跡において五条川とともに生きた人々の足跡は、今から約 4000 年前の縄文時代後期に遡り、その後、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、戦国・江戸時代というように連綿と続いています。御山寺遺跡における歴史の重なりが実感できます。

このように人々の営みがほとんど切れ目無く続いたのは、まさに五条川の恩恵があったからでした。しかし、その五条川も時には洪水という試練を人々に与えたことも発掘調査で明らかになりました。

本書にはさまざまな成果が盛り込まれています。地域の歴史の一端を記録したものとして皆様に活用されるとともに、埋蔵文化財への理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者の皆様からのご指導とご配慮、また地域住民の方々のご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成 23 年 3 月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 今井 秀明

例言

1. 本書は、愛知県岩倉市中野町・鈴井町に所在する御山寺（ごさんじ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 御山寺遺跡の発掘調査は、「緊急地方道路整備事業 3・3・8 号一宮春日井線」に伴う事前調査であり、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが、平成 16 年度に範囲確認調査及び本調査を行い、引き続き翌平成 17 年から平成 19 年までと平成 21 年の、のべ五カ年にわたって行ったものである。調査面積は 13,970㎡である。
整理・報告は平成 21 年から平成 22 年の 2 カ年で実施し、平成 23 年 3 月に報告書を刊行した。
3. 調査・記録方式は愛知県埋蔵文化財センター・マニュアルに則っている。平成 19 年度に改訂があり記録方式に若干の変更を生じたが、本書は改定前の方式で編集した。
4. 調査担当は以下のとおりである。
 - ・平成 16 年度 調査課長：福岡晃彦、主査：石黒立人、調査研究員：蔭山誠一・範囲確認調査、加藤博紀・本調査（支援業者：（株）島田組）
 - ・平成 17 年度 調査課長：福岡晃彦、主査：石黒立人、調査研究員：永井邦仁（支援業者：（株）加藤建設）
 - ・平成 18 年度 調査課長：城ヶ谷和宏、主査：石黒立人、調査研究員：蔭山誠一（支援業者：（株）島田組）
 - ・平成 19 年度 調査課長：城ヶ谷和宏、主査：石黒立人、調査研究員：川添和暁（支援業者：（株）島田組）
 - ・平成 21 年度 調査課長：赤塚次郎、調査研究専門員：樋上昇、調査研究員：蔭山誠一（支援業者：（株）アーキジオ）
5. 整理・報告担当は以下のとおりである。
 - ・平成 21 年度 統括専門員：石黒立人
 - ・平成 22 年度 統括専門員：石黒立人整理報告にあたって、以下に支援業務を委託した。
 - ・自然科学分析：（株）パレオ・ラボ
（株）パリノ・サーベイ
 - ・遺物実測・デジタルトレース：（株）加藤建設
（株）イビソク
（株）文化財サービス
 - ・写真撮影：写真工房 遊
 - ・編集：（株）文化財サービス
6. 埋葬人骨の歯の分析について、山田博之（元愛知学院大学歯学部解剖学教室講師）氏にご協力を賜った。
7. 調査にあたっては、愛知県教育員会学習教育部文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県建設部都市整備課、愛知県一宮建設事務所、岩倉市教育委員会、岩倉市土木部、中野町区長及び役員、鈴井町区長および役員、周辺地域住民の皆様のご理解・ご協力をえて円滑に進めることができた。このことに対し深く感謝申し上げる。
8. 本書の執筆分担は以下のとおりで、必要があれば文頭に記した。編集は石黒が行った。
石黒：1、2、3（(1) A.d.を除く）、6、川添：3. (1) A.d.及び 5. (2)、永井：5. (1)、鬼頭 剛：5. (3)、堀木真美子・山田博之：4. (6)、4. (1)：新山雅広（パレオ・ラボ）、4. (2)：パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、4. (3)：パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、4. (4)：黒沼保子（パレオ・ラボ）、4. (5)：金井慎司（パリノ・サーベイ）
9. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（0567-67-4164）が、写真を含めた記録類は公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター（0567-67-4161）が保管している。

両機関の所在地 〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

凡例

1. 用語のうち、「検 1」「検 2」「検・・・」は作業工程のうち、遺構検出のための包含層掘削の順序を示す。つまり、1 面目の遺構面精査までが「検 1」、次に遺構掘削、その次ぎに掘り下げを始めて 2 面目の遺構精査までが「検 2」、そして次、というように作業手順に対応している。基本的にそれぞれの「面」は作業面であり層位区分には対応せず、ましてや有意な地表面を意味するわけではない。
2. 時期区分は、縄文後期後葉、晩期前葉、弥生中期、弥生後期中葉、弥生後期終末、古墳 1 期、古墳 2 期、古墳 3 期、5 世紀、6 世紀・・・・・・18 世紀として、必要があれば特定型式名や窯式名を用いる。
3. 調査時に付与した遺構の種別記号に変更は加えない。しかし、建物跡や複数調査区にまたがる遺構については、記述の便宜上、「建物 1」「大溝」「河道」というように、別に名称を与える。
4. 遺構図や文中の標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。
5. 遺物実測図は、土器（拓図を含む）・陶器・土製品を基本 1/4 とする（そして、羽口：1/2、土鍾：1/3、石器：1/2・1/3、鉄器：1/2 とする）。拓図については、必要があれば 1/2 図を追加する。古代以降の土師器は清郷形甕を除き断面にアミ掛けをした。また、土鍾については、陶製について断面にアミ掛け表現を加えた。

目次

1. 調査の経緯と経過	1
(1) 経緯と諸手続き	1
(2) 経過と調査方針	2
2. 遺跡の環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境	5
3. 調査の概要	8
(1) 遺構と遺物	8
A. 西区	8
09・07D・07E 区	8
a. 中世～近世の遺構と遺物	9
b. 古代の遺構と遺物	20
c. 古墳前期の遺構と遺物	22
d. 縄文後期～弥生中期の遺構と遺物	51
B. 中央区	68
07F・07C・07B・07A・06D 区	68
C. 東1区	76
05A・05B・04A 区	76
a. 中世以降の遺構と遺物	76
b. 古代以前の遺構と遺物	87
04B・05C・05D 区	100
a. 中世以降の遺構と遺物	100
b. 古代の遺構と遺物	107
c. 古墳以前の遺構と遺物	120
05Ea・05Eb・06Ea・06Eb 区	140
a. 中世以降の遺構と遺物	140
b. 古代の遺構と遺物	149
c. 古墳以前の遺構と遺物	150

D. 東 2 区	162
06Ca・06Cb・06B・06A 区	162
a. 中世以降の遺構と遺物	162
b. 弥生後期後半から終末期の遺構と遺物	163
(2) 小結	173
4. 自然科学分析	181
(1) 御山寺遺跡の花粉化石群集	181
(2) 放射性炭素年代測定 - その 1	185
(3) 放射性炭素年代測定 - その 2	187
(4) 御山寺遺跡出土木製品の樹種同定	190
(5) 御山寺遺跡出土骨の自然科学分析	198
(6) 御山寺遺跡出土人骨について	201
5. 考察	213
(1) 御山寺遺跡の古代	209
(2) 尾張低地帯の縄文時代晩期の様相について	217
(3) 御山寺遺跡の地下層序と表層地形解析	224
6. 総 括	235

写真図版

抄録

挿図

1.	
1-1	発掘調査対象範囲 (1/10000) 1
1-2	調査区配置図 (1/1000) メッシュは 5m 単位 2
1-3	平成 16 年度：05B・C 区で開催した地元説明会風景 3
1-4	平成 19 年度：07D 区で開催した地元説明会風景 3
1-5	明治 24 年地図における濃尾平野の土地利用環境 4
1-6	明治 17 年地籍図における遺跡周辺 4
2.	
2-1	遺跡分布図 1/25000 6
3.	
3-1	07D-SD216 8
3-2	07D-SD216・266・254 9
3-3	07D-SE101 9
3-4	07D-SE101 土層セクション 1/100 9
3-5	07D 区 1 面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100 . . . 10,11
3-6	07D・E 区礫群プランと断面 1/100 12
3-7	07E 区礫群検出状況 12
3-8	07E 区河道右岸土層セクション 1/100 13
3-9	07E 区北壁土層セクション 1/80 14
3-10	07E-NR024 下層土坑群検出状況 14
3-11	07E-NR024 下層土坑群掘削状況 14
3-12	07E-SK146 15
3-13	07E-SK111 15
3-14	07E-SK111 15
3-15	07D 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2) . . 16
3-16	07D 区遺構内出土遺物 (2) (石器 1/2) 17
3-17	07E 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4) 18
3-18	07D 区遺構内出土遺物 (3) (石器 1/3) 19
2-19	07D 区基本土層図 19
3-20	07D 区 4 面検出状況 (07D-SD526 検出状況) 19
3-21	07D 区 2 面遺構プラン 1/150・個別遺構土層セクション 1/100 . . 20
3-22	07D-SK009 検出状況 20
3-23	07D 区 SB300 及び関連遺構土層セクション 1/50 21
3-24	07E-SD068 24
3-25	07E-SD125 25
3-26	07D-SB474 26
3-27	07D 区 3 面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100 . . 24,25
3-28	07D・E 区竪穴建物跡等先後関係図：下が古く上が新しい 24
3-29	07D 区溝土層セクション 1/50 26
3-30	07D 区竪穴建物跡群東西土層セクション 1/50 27
3-31	07E 区竪穴建物跡群南北土層セクション 1/50 28
3-32	SB350 埋め石炉 29
3-33	07D 区 SB350 付近遺構プラン 1/100・関連土層セクション 1/50 . . 29
3-34	07D 区 SU310 関連小グリッド区分図 30
3-35	07D 区 SU310 関連主要土器出土分布図 30
3-36	07D-SU310 出土状況 31
3-37	07D-SU347 出土状況 31
3-38	09 区出土遺物 (1) (石器 1/3) 32
3-39	07D 区遺構内出土遺物 (2) (鉄器 1/2) 33
3-40	07D 区遺構内出土遺物 (3) 34
3-41	07D 区遺構内出土遺物 (4) 35
3-42	07D 区遺構内出土遺物 (5) 36
3-43	07D 区遺構内出土遺物 (6) 37
3-44	07D 区遺構内出土遺物 (7) 複数以降にまたがって接合した土器 . . 38
3-45	07D 区遺構内出土遺物 (8) 複数以降にまたがって接合した土器 . . 39
3-46	07D 区遺構内出土遺物 (9) 40
3-47	07D 区遺構内出土遺物 (10) 41
3-48	07D 区遺構内出土遺物 (11) (石器 1/3) 42
3-49	07D 区遺構外出土遺物 (1) 43
3-50	07D 区遺構外出土遺物 (2) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2) . 44
3-51	07D 区遺構外出土遺物 (3) 45
3-52	07D 区遺構外出土遺物 (4) 46
3-53	07E 区遺構外出土遺物 (1) (石器 1/3) 46
3-54	07D 区遺構外出土遺物 (5) (加工円盤 1/4・石器 1/3・鉄器 1/2) . 47
3-55	07E 区遺構内出土遺物 (2) 48
3-56	07E 区遺構内出土遺物 (3) (土錘 1/3・鉄器 1/2) 49
3-57	07D 区古墳前期最古段階の遺構群プラン 1/200 50
3-58	07E-SX162 51
3-59	07E-SX235 51
3-60	07D・E 区黒色シルト上面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100 52,53
3-61	07E-SD124・SX144 53
3-62	07D 区遺物出土状況 54
3-63	07D 区土器出土状況 55
3-64	07D 区石器出土状況 56
3-65	07D 区 4 面出土土器 (1) 57
3-66	07D 区 4 面出土土器 (2) 58
3-67	07D 区 4 面出土土器 (3) 59
3-68	07D 区 4 面出土土器 (4) 60
3-69	07D 区 4 面出土石器 (1) 61
3-70	07D 区南壁土層セクション 1/100 64
3-71	07E 区西・北壁土層セクション 1/100 66
3-72	07B 区全景 68
3-73	07・A・B・C・Fa・Fb 区遺構プラン 1/400 69
3-74	07Fb-NR027 69
3-75	07Fb 区全景 70
3-76	07Fb-ST010 70
3-77	07A 区出土石臼 (1/3) 70
3-78	07A・B・Fa・Fb 区出土遺物 1/4 (加工円盤 1/4・石器 1/2・羽口 1/2) . 71
3-79	06D 区遺構プラン・変遷 1/400 72
3-80	06D 区 4 面全景 73
3-81	06D 区出土遺物 (土錘 1/3) 73
3-82	07Fa 区北壁土層セクション 1/100 74
3-83	07Fb 区西壁土層セクション 1/100 75
3-84	05B 区北壁西部における基盤礫層の露出状況 76
3-85	05A 区上面全景 77
3-86	04A 区上面全景 77
3-87	05A・B 区遺構プラン 1/200 78,79
3-88	04A-SD004・SD005 他 80
3-89	04A 区上面遺構プラン 1/200 80
3-90	04A-SK012 81
3-91	04A-SK013 81
3-92	04A 区上面プラン時期区分図 1/200・溝群横断土層セクション 1/100 . 81
3-93	04A 区建物関係プラン 1/100 82

3-94	04A 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・石器 1/3・鉄器 1/2)・83
3-95	04A 区遺構内出土遺物 (2) (加工円盤 1/4・鉄器 1/2)・84
3-96	04A 区遺構内出土遺物 (3)・85
3-97	05A 区遺構内出土遺物 (1) (鉄器 1/2・羽口 1/2)・86
3-98	05A 区古墳時代関係遺構群 1/200・土層セクション 1/80・87
3-99	05A-SX2002・2004・87
3-100	05B 区遺構内出土遺物 (1) (鉄器 1/2・土錘 1/3)・88
3-101	05B 区竪穴建物跡床面高度横断図・89
3-102	05B 区出土両孔土錘・89
3-103	05B 区古墳前期竪穴建物跡群・89
3-104	05B-SB1029 遺物出土状況・90
3-105	05B-SB1029 完掘状況・90
3-106	04A-SB003 西壁土層セクション・90
3-107	05B 区出土玉類・双孔円盤・91
3-108	05B 区竪穴建物群 1/100・91
3-109	05B 区遺構内出土遺物 (2) (石器 1/3)・92
3-110	04A 区東部竪穴建物群プラン 1/100・土層セクション 1/50・93
3-111	04A-SB004 遺物出土状況・94
3-112	04A 区遺構内出土遺物 (1)・94
3-113	04A 区遺構内出土遺物 (2) SB004 (加工円盤 1/4)・94
3-114	05A 区北壁土層セクション 1/100・96
3-115	05A 区南壁土層セクション 1/100・97
3-116	05B 区南壁土層セクション 1/100・98
3-117	04A 区東壁土層セクション 1/100・99
3-118	04B 区 1 面遺構 1/200・土層セクション 1/100・101
3-119	04B-SD004・SD006 土層セクション 1/50・102
3-120	04B-SE001 検出状況・102
3-121	04B-SE001 土層セクション 1/50・102
3-122	04B-SK532 山茶碗検出状況・103
3-123	04B 区下面遺構群プラン 1/150・104,105
3-124	04B・05C 区中世建物 1/100・106
3-125	05C-SB2001 柱穴土層セクション 1/50・107
3-126	05C-SB2001・107
3-127	05C-SB2001 柱穴土層セクション 1/50・107
3-128	05C・D 区遺構プラン・変遷 1/200・108,109
3-129	04B 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・鉄器 1/2・土錘 1/3)・110
3-130	05C 区遺構内出土遺物 (1)・111
3-131	05C 区遺構内出土遺物 (2)・112
3-132	05C 区遺構内出土遺物 (3) (土錘 1/3)・113
3-133	04B 区古代以前の遺構群プラン 1/200・114
3-134	04B 区個別遺構土層セクション 1/50・115
3-135	04B-SF001 検出状況・115
3-136	04B-SK092 遺物出土状況・115
3-137	04B-SB008 プラン 1/100・土層セクション 1/50・116
3-138	04B-SB008 検出状況・116
3-139	04B-柵 1・総柱建物プラン 1/100・柱穴土層セクション 1/50・117
3-140	04B-SK340 土錘出土状況・117
3-141	05D 区遺構プラン 1/100・SB3001 周辺土層セクション 1/50・118
3-142	04B 区遺構内出土遺物 (2) 04B-SK502 (1/3)・119
3-143	05D-SB3001 検出状況・119
3-144	04B 区検 1：丸靱片・120
3-145	04B 区検 1：青銅製品・120
3-146	05C-SD1012：熔銅滴・120
3-147	04B 区遺構内出土遺物 (3) (土錘 1/3)・121

3-148	04B 区遺構内出土遺物 (4) (加工円盤 1/4・土錘 1/3)・122
3-149	04B 区遺構内出土遺物 (5) (加工円盤 1/4・鉄器 1/2・土錘 1/3)・123
3-150	04B 区遺構内出土遺物 (6) (加工円盤 1/4・土錘 1/3)・124
3-151	04B 区遺構内出土遺物 (7) SK340 出土土錘 (1/3)・125
3-152	04B-SK340 出土土錘・125
3-153	04B 区遺構外出土遺物 (1)・126
3-154	04B 区遺構外出土遺物 (2) (羽口 1/2・土錘 1/3)・127
3-155	05C 区遺構内出土遺物 (4) SDD001 出土の先行する遺物群 (石器を除く) (加工円盤 1/4 羽口 1/2・石器 1/3・土錘 1/3)・128
3-156	05C 区遺構外出土遺物 (1) (羽口 1/2・土錘 1/3・石器 1/3)・129
3-157	04B 区出土鉄器 (1/2)・130
3-158	05C 区出土鉄器 (1/2)・131
3-159	05D 区出土遺物 (鉄器 1/2・土錘 1/3)・132
3-160	04B 区西壁土層セクション 1/100・133
3-161	04B 中央ベルト・北壁土層セクション 1/100・134
3-162	05C 区南壁土層セクション 1/100・136
3-163	05C 区北壁・東壁土層セクション 1/100・137
3-164	05D 区北壁土層セクション 1/100・138
3-165	05C 区 2 面東部・139
3-166	05D 区 1 面・139
3-167	05Ea 区 SX1001 出土遺物・140
3-168	05Eb 区 SX1001 出土遺物・140
3-169	05Ea・Eb 区上面全景他・141
3-170	05Ea・Eb 区／06Ea・Eb 区上面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100・142,143
3-171	05Ea・Eb 区／06Ea・Eb 区下面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100・144,145
3-172	05Ea 区遺構内出土遺物 (1) (土錘 1/3・鉄器 1/2)・146
3-173	05Eb 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2)・147
3-174	05Eb 区遺構内出土遺物 (2) (土錘 1/3)・148
3-175	05Ea-SE2001・149
3-176	05Ea-SK2023 (カマド)・149
3-177	05Ea 区西部の谷地形上部の掘削状況・150
3-178	05Ea 区遺構外出土遺物 (1) (土錘 1/3・鉄器 1/2)・151
3-179	05Eb 区遺構内出土遺物 (3)・152
3-180	05Eb 区遺構内出土遺物 (4) (鉄器 1/2)・153
3-181	05Eb 区遺構内出土遺物 (5)・154
3-182	06Ea 区出土遺物 (1) (鉄器 1/2)・155
3-183	05Ea 区北・西・南壁土層セクション 1/100・156
3-184	05Eb 区北壁土層セクション 1/100・157
3-185	05Eb 区南壁・東壁土層セクション 1/100・158
3-186	06Eb 区南壁土層セクション 1/100・159
3-187	06Ea 区大型壺出土状況・160
3-188	06Ea 区南壁土層セクション 1/100・160
3-189	06E 区全景・161
3-190	06Ea 区 SE1001・161
3-191	06Ca・Cb 区遺構プラン 1/200・162,163
3-192	06Cb 区個別遺構土層セクション 1/50・164
3-193	06Ca 区 SD2001 土器出土状況 (1)・164
3-194	06Ca 区 SD2001 土器出土状況 (2)・165
3-195	06Cb 区赤彩壺出土状況・165
3-196	06C 区方形周溝墓推定図及び出土土器・165
3-197	06A・B 区遺構プラン 1/200・166
3-198	06Cb 区全景・166

3-199	06A 区全景	166
3-200	06B 区全景	166
3-201	06Ca 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2)・	167
3-202	06Cb 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・羽口 1/2)・	168
3-203	06Cb 区遺構内出土遺物 (2)	169
3-204	06A 区遺構内出土遺物 (1)	170
3-205	06Cb 区南壁土層セクション 1/100	171
3-206	06A・B 区土層セクション 1/100	172
3-207	須恵器大型器種の分布 1/1000	174,175
3-208	瓦 (1/4)・墨書陶器 (1/4)・銭貨 (1/2)	176
3-209	諸資料の分布	178,179
4.		
4-1	御山寺遺跡 06D 区 IX 120o グリッドの花粉化石分布図	182
4-2	御山寺遺跡 06D 区 T11 北側 1m 地点の花粉化石分布図	183
4-3	産出した花粉化石	184
4-4	暦年較正結果	186
4-5	暦年較正結果	189
4-6	御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (1)	194
4-7	御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (2)	195
4-8	御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (3)	196
4-9	御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (4)	207
4-10	ウマの骨格 (全身骨格は、加藤・山内 2003 に加筆)	198
4-11	出土骨	200
4-12	05B 区 人骨出土位置図	201
4-13	SK1011 出土状況	201
4-14	SK1012 出土状況	202
4-15	SK1098・SK1112 出土状況	203
4-16	SK1106 出土状況	204
4-17	SK1108 出土状況	204
4-18	SK1115 出土状況	204
4-19	SK1118 出土状況	206
4-20	SK1139 出土状況	207
4-21	SK1141 出土状況	208
5.		
5-1	江戸時代末期の岩倉市域の用水路 (『岩倉市史』をもとに作成)	210
5-2	御山寺遺跡における古代の造成層と建物配置	211
5-3	尾張平野の伊勢神宮領の分布 (水野 1959 を改変)	212
5-4	丹羽郡南西部地域の自然地形と条里地割 (金田 1980 を改変)	213
5-5	岩倉市天神移籍出土土器・石製模造品実測図	214
5-6	御山寺遺跡および尾張低地帯縄文時代主要遺跡	217
5-7	三ツ井遺跡出土土器	218
5-8	馬見塚遺跡出土土器	218
5-9	板倉遺跡出土土器	219
5-10	大平遺跡出土土器	219
5-11	下津城跡 (下津遺跡) 出土土器	220
5-12	御山寺遺跡における深掘調査地点	224
5-13	御山寺遺跡における深掘層序断面図	226
5-14	04A 区における試錐柱状図	227
5-15	御山寺遺跡周辺の表層地形等高線図	228
5-16	表層地形等高線図を基にした御山寺遺跡周辺の鳥瞰図	231
5-17	調査区範囲を通る東西地形断面図	233
6.		
6-1	御山寺遺跡西区・中央区概念図 1/1000	236,237
6-2	御山寺遺跡東 1 区概念図 1/1000	238,239
6-3	御山寺遺跡東 2 区概念図 1/1000	240

表

1.	
1-1	調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
4.	
4-1	花粉化石産出一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・182
4-2	測定試料及び処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
4-3	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果・・・・・・・・・・・・・185
4-4	測定試料及び処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
4-5	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果・・・・・・・・・・・・・・188
4-6	調査区別の樹種同定結果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・190
4-7	樹種同定結果一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
4-8	抽出分類群一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199
4-9	骨同定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199
4-10	SK1011 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・201
4-11	SK1012 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・202
4-12	SK1098 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・203
4-13	SK1106 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・204
4-14	SK1108 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・204
4-15	SK1115 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・205
4-16	SK1118 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・216
4-17	SK1139 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・207
4-18	SK1141 出土人骨 計測値及び観察結果・・・・・・・・・・・・・・・・・208
5.	
5-1	御山寺遺物集中区土器器面調整の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・222
5-2	深掘層序の放射性炭素年代測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・223
5-3	深掘層序の放射性炭素年代測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・223

写真図版

遺構図版

- 1 上段：09A 区 2 面西部、下段：07D 区 1 面
- 2 07D 区 1 面全景
- 3 07D 区 NR138 礫群
- 4 上段：07D 区 NR138 礫群、下段：07D 区 NR138 礫群細部
- 5 上・中段：07D 区 SB300、下段：07D 区 SB300 出土須恵器
- 6 上段：07D 区 SB331、中段：07D 区 SB331、下段：07D 区 SB350 他
- 7 07D 区黒色シルト上面遺構検出状況
- 8 上段：07D 区西部黒色シルト上面検出遺構、下段：07D 区東部 同
- 9 1 段：07D 区 SB472・474、2 段：07D 区 SB491・492、3 段：07D 区中央 部黒色シルト上面、4 段：07D 区 SD312
- 10 上段：07D 区 SU310 遺物出土状況、下段：07D 区 SU347 遺物出土状況
- 11 上段：07D 区 SD367 遺物出土状況、中段：07D 区 SU426 遺物出土状況、下段：07D 区 SD428 遺物出土状況
- 12 07E 区 1 面全景
- 13 上段：07E 区 1 面、下段 07E 区 1 面西部近景
- 14 07E 区 NR024 礫群
- 15 上段：07E 区 NR024 土層セクション、下段：07E 区 NR024 下部礫群と土坑
- 16 上段：07E 区 2 面、下段：07E 区 2 面西部
- 17 07E 区西部 2 面近景
- 18 上段：07E 区 SB070、中段：07E 区 SB072、下段：07E 区 SB082
- 19 上・中段：07E 区 SE124・SB082、下段：07E 区 SE124 土層セクション
- 20 07E 区溝
- 21 07E 区 3 面全景
- 22 07E 区 3 面遺物出土状況
- 23 07E 区 SX162 土層セクション
- 24 07Fa・0Fb 区 全景
- 25 07Fb 区 NR027
- 26 上段：05A 区遠景、下段：05A 区大溝
- 27 上段：05A 区 SD2002・2003、下段：05A 区 SD2003
- 28 上段：05A 区 SD2001、中段：05A 区土坑群、下段：SX2004 土器出土状況
- 29 上段：05B 区全景、下段：05B 区近景
- 30 05B 区遺構（SB）
- 31 05B 区遺構（SD・SK）
- 32 04A 区全景
- 33 04A 区遺構
- 34 04A 区東部上面
- 35 04B 区西部上面
- 36 04B 区西部下面
- 37 04B 区遺構
- 38 04B 区遺構（SB・SF）
- 39 04B 区古墳中期遺構、05C：D 区 1 面・2 面
- 40 05Ea 区遺構
- 41 05Ea 区 SK2023（カマド）
- 42 05Eb 区西部上面
- 43 上段：05Eb 区東部、下段：05Eb 区東部 SK2074 遺物出土状況
- 44 上段：05Eb 区東部、下段：05Eb 区東部 SX2001
- 45 上段：06Ca 区上面、下段：06Ca 区下面 SD2001

カラー図版

- 46 上段：07D 区南壁、下段：07D 区から東の眺望
- 47 上段：07D 区 3・4 面、下段：05B 区全景
- 48 上段：04A 区全景、下段：カマド
- 49 上段：04B 区西壁土器（04B-1742）出土状況、下段：遺物出土状況

遺物図版

- 1 縄文土器 768～786
- 2 縄文土器 794～843
- 3 縄文土器 856～878
- 4 石器 9～25
- 5 07D 区
- 6 07D 区・07E 区・05A 区・05B 区
- 7 04A 区・04B 区
- 8 04B 区・05C 区
- 9 05D 区・05Ea 区
- 10 05Eb 区・06Cb 区

1. 調査の経緯と経過

(1) 経緯と諸手続き

本発掘調査の原因となった県道一宮春日井線街路新設改良工事（平成 17 年度以降は「緊急地方道路整備事業 3・3・8 号一宮春日井線」）は、名鉄本線（犬山線）を越える高架橋の建設と、東西で接続する県道部分の整備事業である。用地買収が進み、工事日程が具体化する中で、愛知県教育委員会と岩倉市教育委員会は平成 15 年 11 月に試掘調査を行い遺跡の存在を確認した。そこで、平成 16 年度に範囲確認調査を実施して面積を確定した上で、引き続き同年度中に一部の本調査を開始することとした。

平成 16 年 4 月に愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託をうけた愛知県埋蔵文化財センター（以下当センター）では、東西 600m の範囲に 25 ヶ所のトレンチを設定して範囲確認調査に臨んだ。その結果、かなりの頻度で遺構・遺物を検出した。とくに注目されたのが西端での縄文土器の出土であった。

当センターはこの結果を愛知県埋蔵文化財調査センター（以下調査センター）および愛知県教育委員会に報告し、それを承けて愛知県教育委員会と愛知県建設部の協議が行われて調査対象地を確定した。

平成 16 年 5 月からの本調査の着手にあたっては、岩倉市教育委員会・岩倉市土木部・一宮建設事務所・調査センター・当センター等諸機関の担当者による事前協議が行われた。その後、事業地である岩倉市中野町区長以下の役員へ説明を行い、より具体的な実施計画に修正して本調査を開始した*1。

なお、初年度（平成 16 年度）には名鉄本線の両側に調査区が設けられたため、とくに隣接する西側調査区（04A 区）については名古屋鉄道株式会社に作業届を提出して、作業方式についての了承と安全確保の為に指示を受け、作業に着手した。

●諸手続き

発掘届（15 埋セ第 115 号・2004.3.2、16 埋セ第 113 号・2005.3.8、17 埋セ第 123 号・2006.3.20、18 埋セ第 106 号・2007.3.20、21 埋セ第 2 号・2009.3.30）

通知（15 教生第 72-12 号・2004.3.17、16 教生第 2082 号・2005.3.11、18 教生第 44 号・2006.4.12、19 教生第 1 号・2007.4.3、21 教生第 115 号・2009.4.13）

終了届・保管証・発見届（16 埋セ第 55 号・2004.9.30、17 埋セ第 61 号・2005.10.3、18 埋セ第 63 号・2006.11.14、19 埋セ第 113 号・2008.3.11、21 埋セ第 37 号・2009.6.29）



図 1-1 発掘調査対象範囲（1/10000）

*1 調査の開始に先立ち関係者一同が会する打ち合わせは、その後の基本方式となり、各年度調査開始前に行われた。

(2) 経過と調査方針

御山寺遺跡の発掘調査は平成 16 年度を初年度とし、平成 20 年度の休止期を挟んで平成 21 年度の最終年度に至る、都合 5 カ年の長期にわたる。

各年度の内容は右に示したように、平成 16 年度当初に範囲確認調査が行われて東西 600m に及ぶ遺跡調査範囲を確定し、引き続き本調査に移行した。

各調査区は特段の理由がなければ現状の生活道路や既設水路等を移設することなく、また住宅と隣接する場合には安全対策上の措置を講じて設定した。そのため、下図のように相当数の調査区に分割して調査を進めることになったし、極めて矮小な調査区を設定することになった。また地下水の湧出も予想されたが、通常のポンプ排水を基本とし、特別の措置を講ずること無く進めた。

調査区はすべてネットフェンスで囲み、調査区ではない作業ヤードや現地事務所の周囲にもネットフェンスを設置した。不測の事故等に対する管理責任や安全対策等の必要範囲を明示するために必要であり、場合によっては調査終了後も撤去せず、一定期間設置することがあった。切り回しのための仮設道については砂埃対策の為に散水やアスファルト塗布を行うなどの措置を講じた。

調査区の表記は当センターのマニュアルに則り、西暦の下二桁とアルファベット大文字を組み合わせ、さらに小調査区への分割が必要になった場合には小文字を組み合わせることとした。

なお、遺構表記については平成 19 年度に、それまでの遺構分類ごとに番号を付していた方式から、検出順に通番を付して後に記号を記載する方式に変更があった。07・09 調査区がそれに該当している。本書においては従前の記載方式に統一したが、与えるべき記号については調査時の判断を踏襲した。

平成 16 年度と平成 19 年度には調査期間中に地元説明会を行い、地元住民多数の参加を得た。

調査期間	調査面積	調整	担当
2004.4 (範囲確認) 2004.6～9 (本調査)	2,580㎡	主査：石黒立人	藤山誠一 (範囲確認) 加藤博紀 (本調査)
2005.4～9	3,890㎡	主査：石黒立人	永井邦仁
2006.5～11	3,000㎡	主査：石黒立人	藤山誠一
2007.4～2008.2	4,150㎡	主査：石黒立人	川添和暁
2009.5～6	350㎡	調査研究員：樋上 昇	藤山誠一

表 1-1 調査経過

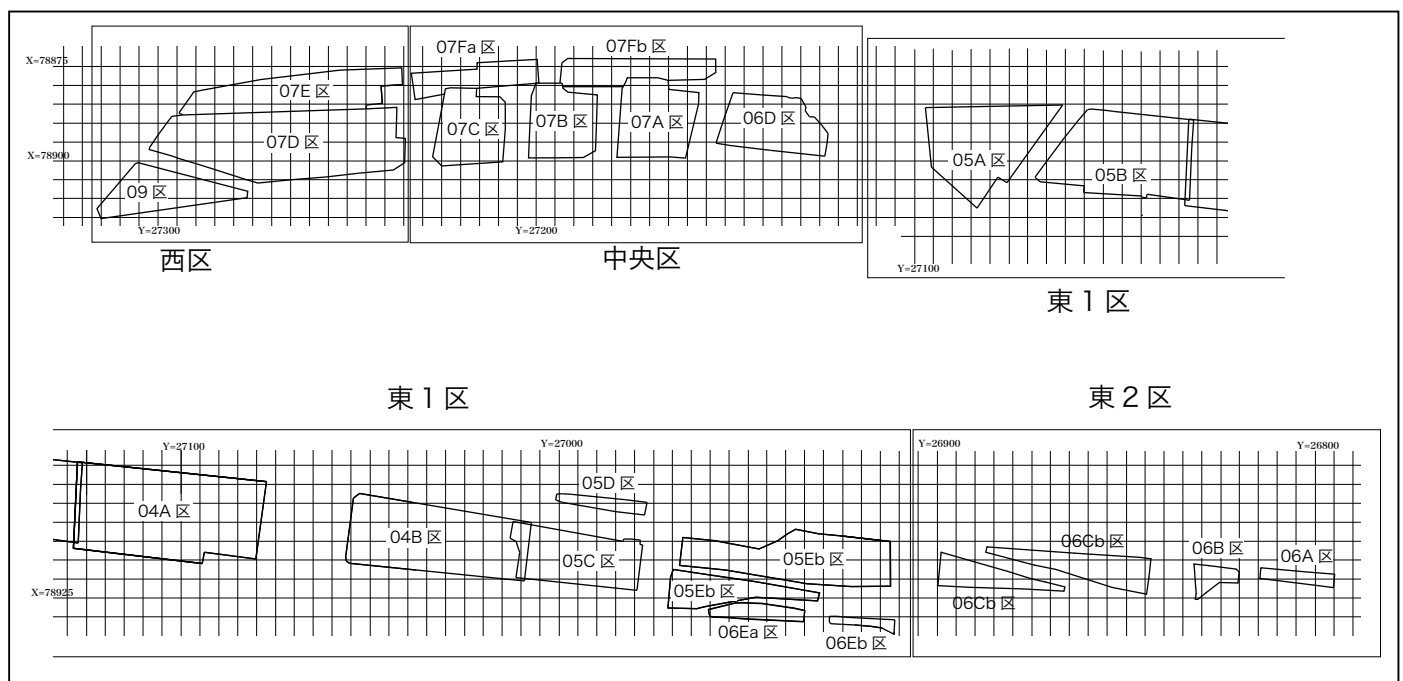


図 1-3 平成 16 年度：05B・
C 区で開催した地元説明会風景

平成 17 年
7/23
午前 11:00 ~
80 名



図 1-4 平成 19 年度：07D
区で開催した地元説明会風景

平成 19 年
9/1
午前 11:00 ~
90 名



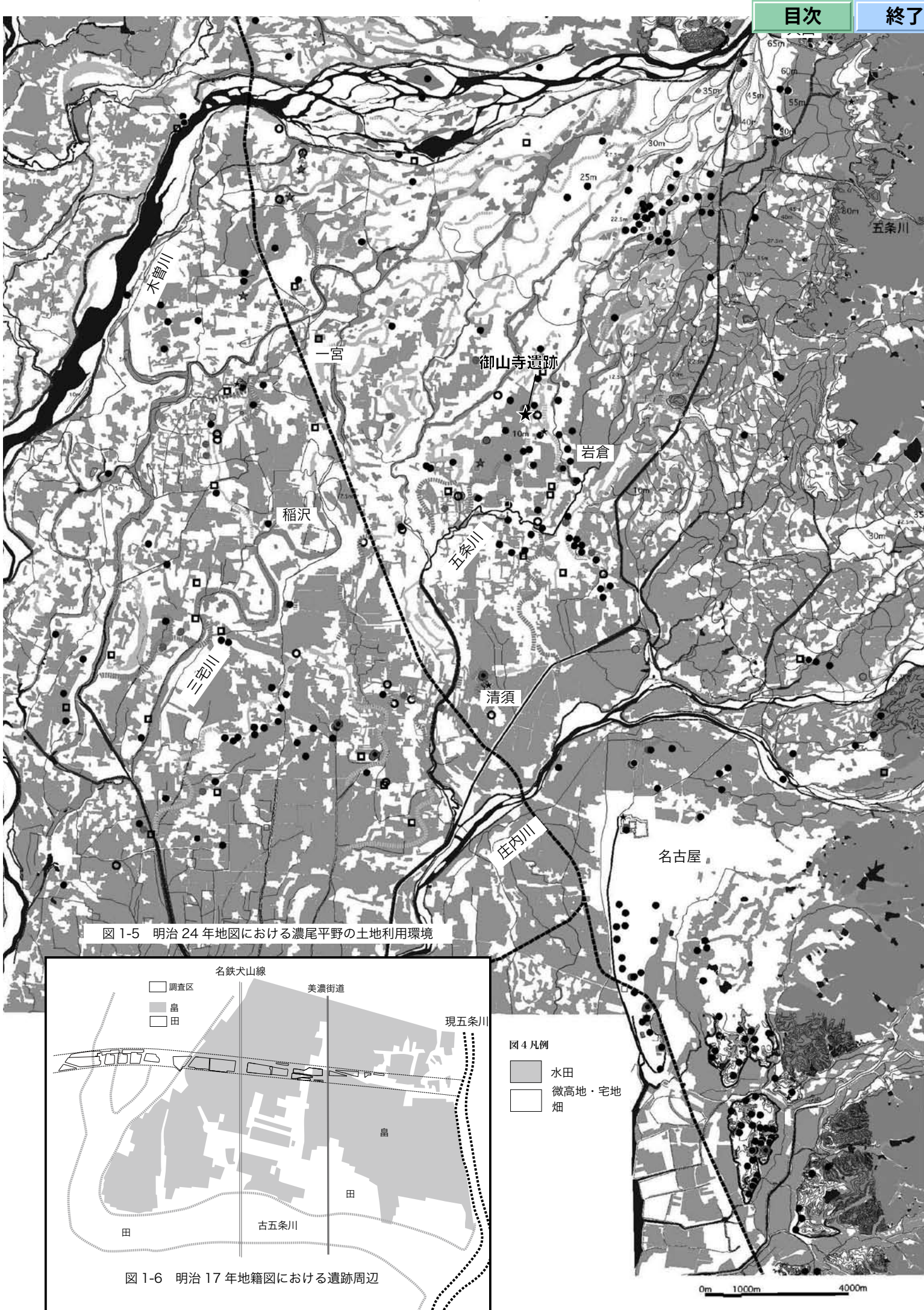


図 4 凡例

- 水田
- 微高地・宅地
- 畑

2. 遺跡の環境

(1) 地理的環境

濃尾平野北東部に位置する犬山扇状地は、60m を超える頂部から 11m の端部に至る径 10km を超える広がりをもつ。その端部の標高 10 ～ 11m のあたりに御山寺遺跡がある。御山寺遺跡の東部が含まれる岩倉市中野町の中心は大半が住宅街であり、往時の地形を窺うことは難しい。しかし、その西部から鈴井町にかけても畑や水田が広がるとはいえ、すでに区画整理が行われ、やはり旧地形を窺うことは容易ではない。

明治 17 年の地籍図をみると、北東から南西に向けて二つの川筋があり、それが御山寺遺跡の西部ではほぼ真東に、鋭角に折れているのがわかる。昭和 50 年代の航空写真でも微高地と低地がつくる起伏と水田の並びから川筋は明瞭に浮かび上がる。つまり、御山寺遺跡の立地の要点は河道沿いの微高地に位置していることである。扇状地では頂部から中央部にかけては傾斜に対応して直線傾向であった河道も、端部から低平地に至ると急に蛇行を始める、御山寺遺跡はそういう場所にある。水量が定常値を超えれば簡単に溢れてしまうような、また河岸の浸食と堆積のどちらも急激に進むような、そういう変化を生み出す環境であった。調査によって現われた古墳前期に属す複数の河道はそれを物語り、05B 区で基盤礫層が上昇して、特異な微高地を形成したことも同様である。そこには古墳前期後半に堅穴建物群が一時的に展開したが、その後はある意味で「空白」となった場所である。

(2) 歴史的環境

遺跡形成は自然環境に影響を受ける。人々が生活を営むのは地表面だから、まず平坦なのか、斜面なのか、乾燥しているのか、湿潤なのか、土は砂質なのか、粘土質なのか、そこにどんな植物が生えているのか、草地なのか、樹林が繁茂しているのか、等々の条件と、当時の人々の生活形態によって遺跡には変異が生じる。縄文時代の遺跡に多様性が認められるのはそのためである。そうした自然環境の制約を初めて乗り越えようとしたのが水田稲作である。

縄文時代以来採集・狩猟、漁撈を生業としていた人々は、条件がよければ定住民となったが、安定した定住を実現できない場合もあり、定住と非定住を繰り返した。縄文晩期後葉になって一部の地域で集住化が始まり、水田稲作導入の条件を準備した。しかし、それで稲作が全面的に広まったわけではない。稲作民と非稲作民の共存は長期にわたり、稲作定住民が社会を主導するにはかなりの期間を必要とした。ここで重要なのは、「どのように稲作民になったのか」(同一化)ではなく「どのような稲作民になったのか」(差異化)である。

水源を確保し、溝を掘り、水田を造成し、生活の基盤である集落をととのえる。そして、その土地と生産技術を子孫に継承する稲作定住民の生活は、その後の人々の生活を規定するようになった。社会・政治が変わっても、近代を迎えるまでは大きな変化はなかった。

御山寺遺跡が位置する濃尾平野における人々の生活も大差はない。しかし、濃尾平野は広大であったから、人々の生活単位が小さくまとまることはなかった。関係の基本は縦横に走る川筋に沿うものであり、それは戦国時代まで変わらない。御山寺遺跡を規定したのは五条川であり、その時々の川筋の有様が、人々のつながりを規定した。

五条川の西隣には青木川がある。木曽川につながっていたことが確かだとすれば、濃尾平野のうちにとどまる五条川より、はるかに豊かな水量を誇っていたはずである。逆に、五条川の方が季節的な水量変動が小さいだけに制御しやすかったといえるかもしれない。制御不能な暴れ川の木曽川水系と制御しやすい五条川水系、それぞれに関わって固有の歴史が営まれた。御山寺遺跡に残されたのはその一端である。



3. 調査の概要

(1) 遺構と遺物

A. 西区

09・07D・07E 区

●概要

07D 区と 07E 区は生活道路の確保のために分割して調査したもので、南北に接する。後者の面積は狭いが、調査期間が地下水の低位期にあたったので最下面での詳細な調査が実現できた。とくに黒色シルト上面、及び下面落ち込み部分の調査ができたことは重要である。09 区はほとんどが水田削平部分にあたり、黒色シルト上面での調査が主となった。黒色シルト下部の落ち込みを掘削したが関係遺物は僅かで、人為性の乏しいことが追認できた。

さて、主要部分を占める 07D 区では、遺構検出を全体で 3 面、部分的に 4 面で行った。

まず、造成土や畠土を除去して 1 面となる。北端では建物の基礎が方格に設置されており、その除去の結果、碁盤目状の攪乱溝が遺構を寸断することになった。

南部では洪水砂層が認められたので、それを目安に遺構検出を上下で行ったが、上部で検出した小穴の中にも下部で掘り残し状態で見つかったものがあり、上下での峻別はできていないのが実情である。この洪水砂層は北部には及んでおらず部分的で、面を確定する根拠とはならなかった。小穴には並ぶものも多いが、04A 区や 04B 区のように建物を復元するには至らなかった。建物であったとしても、構造が異なるものであろう。

調査区東部では別種の砂層が検出され、古墳前期土器がその下部で認められたが、1 面遺構の掘削の際に不注意から掘り出してしまうこともままあった。調査区中央部では黒色化の強い土層が集中して堆積しており、それを堅穴状遺構と認定したが、最終的には下部の堅穴建物(SB300) 覆土の上層部分と区別ができなかった。

東部の旧河道部分では調査期間が夏期で地下水位の高位期に相当した為に湧水が激しく、上部の礫群を調査できたに過ぎない。07E 区で秋期になってようやく下部の調査が可能となり、土坑群を検出した。

2 面は黒色極細粒砂を埋土とする遺構に対しての部分的な調査となった。結果として、堅穴建物跡 (07D-SB300)、土坑 (07D-SK009・SK148)、溝 (07D-SD225) 等を検出した。

3 面は古墳前期の堅穴建物群や溝群を検出した。重複が激しく平面的な把握が難しかったので、サブトレンチを設定して、土層断面で切り合い関係を確認しながらの検出となった。堅穴建物跡の認定要件は薄い炭化物層および焼土層であり、それを床面と認定して検出に努めた。しかし、床面での柱穴検出は難しく、掘り方面での確認となったものが多い。なお、東部では堆積層上面が高かったために 2 面までの調査で遺物を

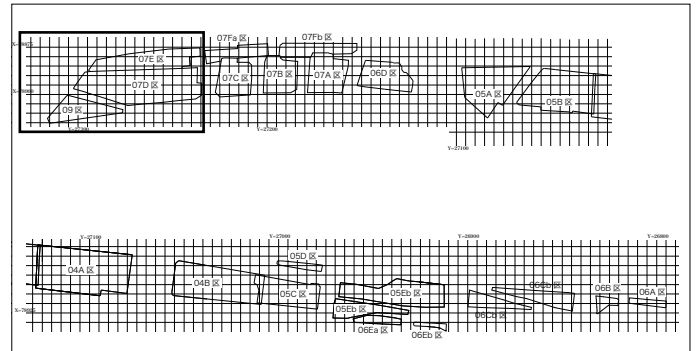


図 3-1 07D-SD216



図 3-2 07D-SD216・266・254

掘り出してしまうことがあった。

4面は黒色シルト上面で、3面の竪穴建物の掘り方や柱穴の最終確認と水田の有無確認等を行った。しかし、夏期の湧水期であったために黒色シルト上面は水位面とほぼ同じであり、そのために基盤目状に排水路を掘削して常時排水を行いながら調査を進めた。黒色シルト下部に認められた落ち込みについて、湧水による土層の流動化が頻発したために、十分な調査を行えなかったのが悔やまれる。

a. 中世～近世の遺構と遺物

07E-SD021、07D-SD216・SD266：南溝

07E-SD019、07D-SD254：北溝 1

07D-SD259 北溝 2

西北西から東南東に並行してのびる2列の溝で、西端ではわずかに両溝間が狭まる。東端は近世水田につながっていた可能性がある。両溝とも西に向かって幅が狭くなっている。検出面が水平に近かったからだとすれば、地表面の傾斜が原因であろう。

西端の終息部分に接して直交する段差があり、この部分にも溝が存在して、L字の区画を形成していた可能性がある。南溝の断面は逆台形で、SD266が先行する。陶器片が出土しており、開口していたと考えられる。それに対して北溝1は幅も狭く箱形であり、木堀の基礎であったと考えられる。北溝2は西部で終息し、断面形も南溝に近いので、両者は性格が異なると考えられる。

この他、周辺には方位を共有する土坑群や、やや方位を異にする溝が展開するが、廃棄土坑は存在しない。

●遺構

07D-SE101

攪乱下部から礫集積として検出されたもので、当初は井戸とは判断できなかった。径2mの掘り方で、井筒は遺存していなかった。底面は基盤の礫層で終息している。



図 3-3 07D-SE101

07D-SD197

断面逆台形で、微高地東端の傾斜変換点を南北に走る。07D-NR138と接するあたりで小さく屈曲し、以北で谷に合流する可能性はあるが詳細は不明。礫群に先行する遺構と思われる。自然埋没で、流水の痕跡は認められない。

07D 区土坑および小穴群

1面では多数の小穴を検出したが、根石等から掘立柱建物を構成するものは抽出できず、柵列状の配置も抽出できるが根拠は無い。遺構出土の遺物量は極めて少なく、居住地の様相は窺えない。畠に伴う簡便な

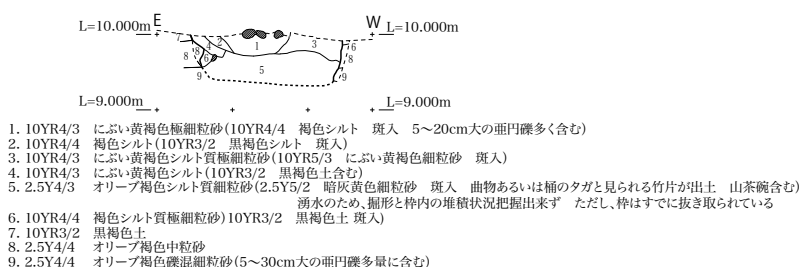
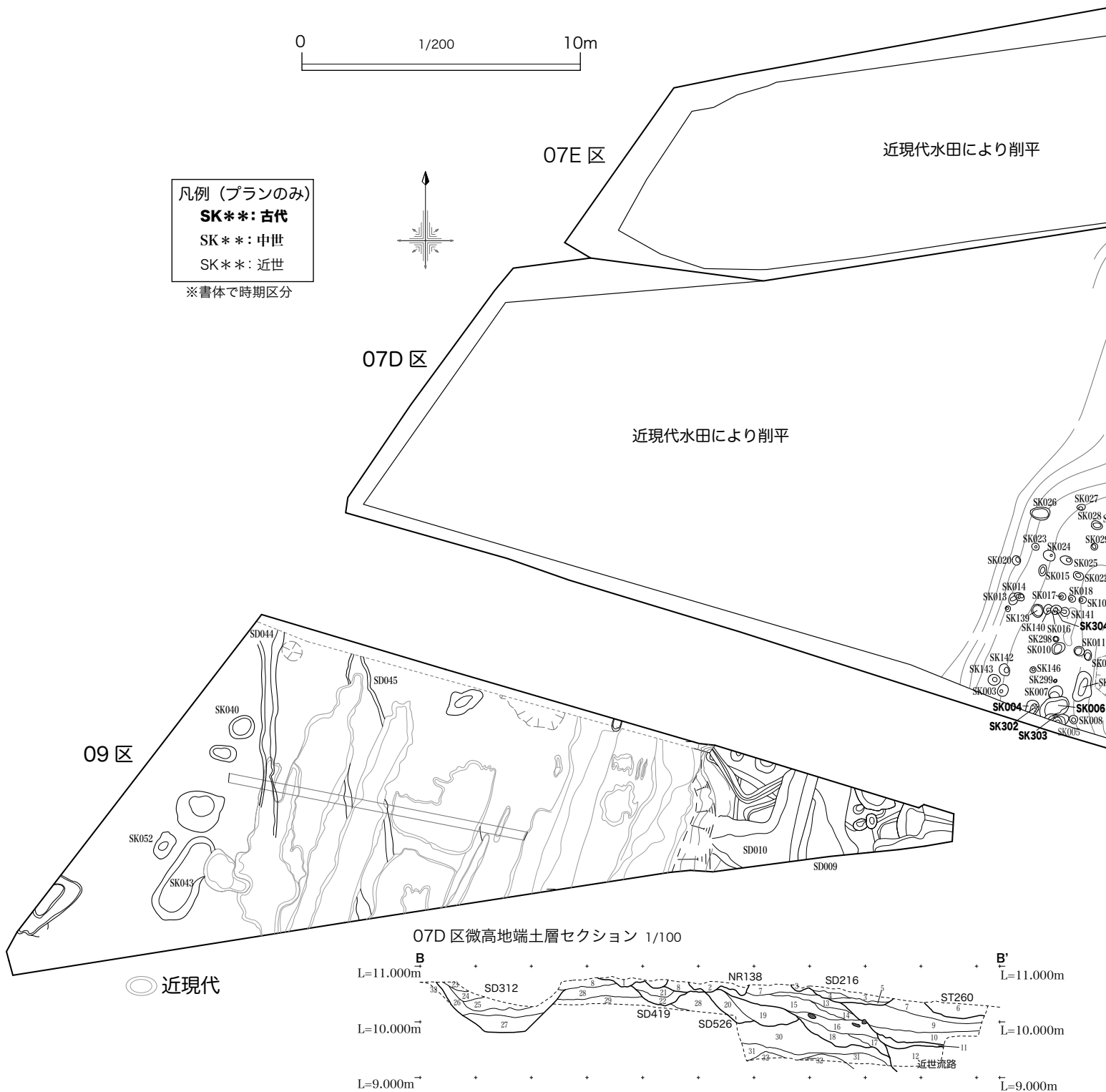
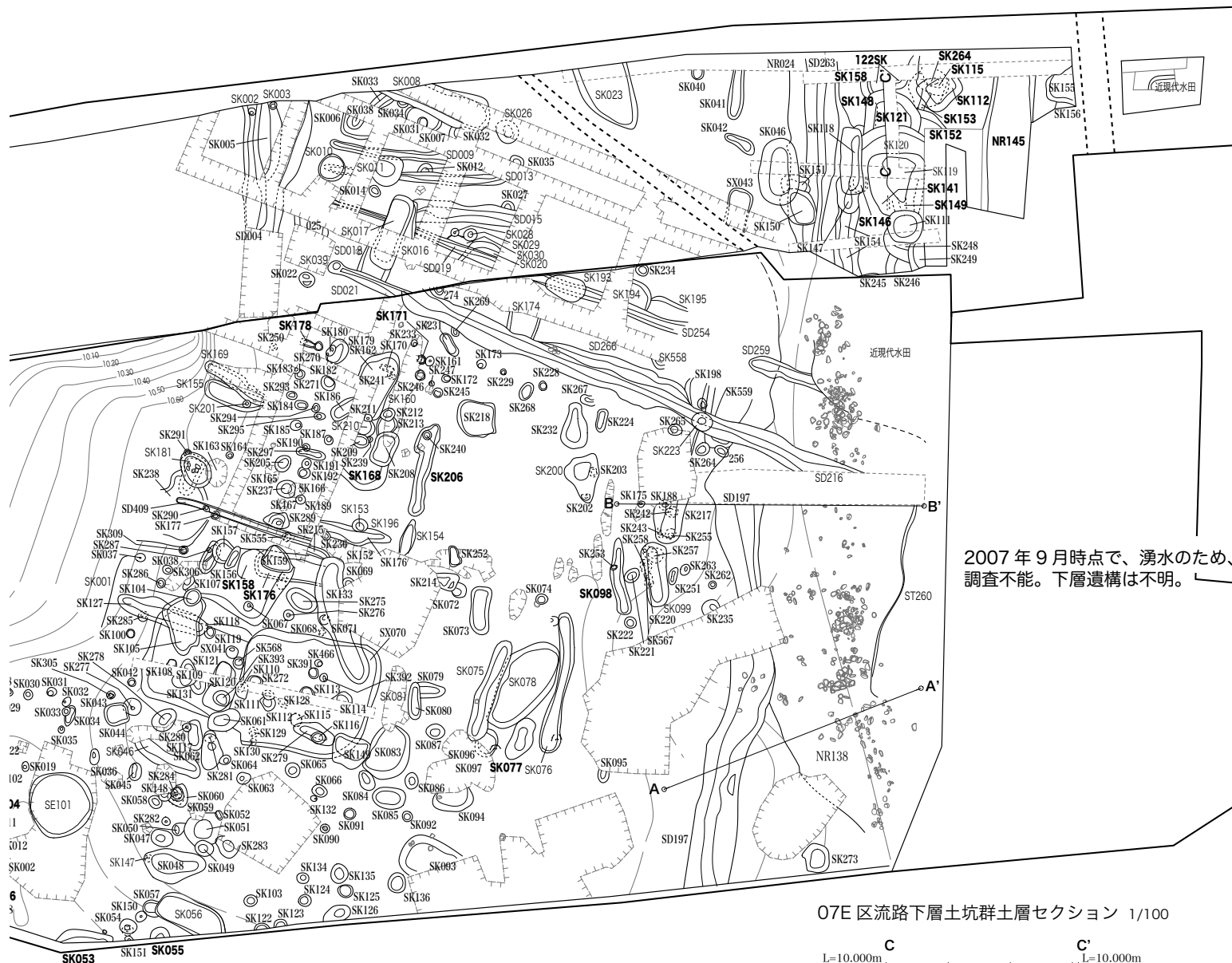


図 3-4 07D-SE101 土層セクション 1/100

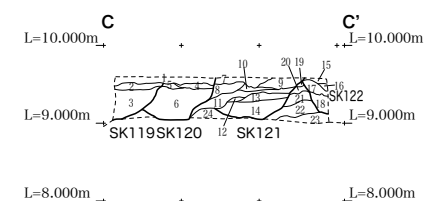


- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂(10YR4/3 にふい黄褐色シルト混入)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト混入)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂(10YR4/3 にふい黄褐色シルト混入)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
- 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂混入 鉄斑認められる) 近世水田耕作土
- 10YR4/4 褐色砂質シルト(10YR4/3 にふい黄褐色シルト混入) 近世
- 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂混入) 中～近世陶磁器含む
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト 中～近世陶磁器含む
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細粒砂 中～近世陶磁器含む
- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト(2.5Y5/3 黄褐色粗粒砂含む) 中～近世陶磁器含む
- 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 中～近世陶磁器含む
- 10YR4/4 褐色極細粒砂
- 10YR4/4 褐色シルト
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(マンガン斑認められる) 山茶碗含む
- 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト(マンガン斑認められる)
- 10YR4/3 にふい黄褐色シルト質極細粒砂(鉄斑、マンガン斑認められる)
- 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト(マンガン斑認められる)
- 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(10YR4/3 にふい黄褐色シルト含む)
- 10YR4/3 にふい黄褐色中粒砂(10YR5/4 にふい黄褐色シルト含む)
- 10YR4/4 褐色砂質シルト(10YR4/3 にふい黄褐色シルト混入) SD419埋土
- 10YR4/3 にふい褐色砂質シルト(10YR4/4 褐色シルト混入) SD419埋土
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒(10YR4/3 にふい黄褐色シルト含む) SD312埋土
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂 SD312埋土
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂(10YR4/2 暗灰黄色シルト混入)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂(10YR4/3 にふい黄褐色シルト混入) SD312埋土
- 10YR4/3 にふい黄褐色中粒砂(10YR4/3 にふい黄褐色シルト質極細粒砂含む) SD312埋土
- 10YR5/4 にふい黄褐色砂質シルト(鉄斑が認められる)
- 10YR4/4 褐色シルト(10YR4/3 にふい黄褐色シルト含む)
- 10YR6/4 にふい黄褐色砂質シルト(鉄斑、マンガン斑が顕著に認められる)
- 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR5/2 灰黄褐色シルトと10YR4/4 褐色シルト含む)
- 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂(10YR5/3 にふい黄褐色シルトブロック・10YR3/2 黒褐色シルト含む)

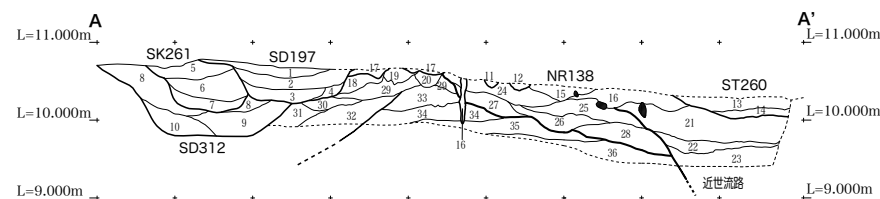


2007年9月時点で、湧水のため、調査不能。下層遺構は不明。

07E 区流路下層土坑群土層セクション 1/100



07D 区微高地端土層セクション 1/100



1. 10YR4/4 褐色細粒砂 SD197埋土
2. 10YR4/3 黄褐色細粒砂(10YR4/4褐色シルト混入) SD197埋土
3. 10YR4/3 黄褐色細粒砂(2に比べ粘性、しまりとともに強い) SD197埋土
4. 10YR4/3 黄褐色細粒砂(2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂混入) SD197埋土
5. 10YR4/2 暗灰黄色細粒砂 SK261埋土
6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂(10YR4/4褐色シルト含む) SK261埋土
7. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂(2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂含む) SD312埋土
8. 10YR4/3 黄褐色中粒砂(10YR4/4 褐色シルト混入) SD312埋土
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂(10YR4/4 褐色シルト混入) SD312埋土
10. 10YR4/3 黄褐色中粒砂(10YR4/3 黄褐色シルト質極細粒砂含む) SD312埋土
11. 10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂
12. 10YR4/4 褐色砂質シルト
13. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(鉄斑が認められる) ST260埋土 近現代水田耕作土
14. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂混入 鉄斑が認められる) ST260埋土 近現代水田耕作土
15. 10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂(2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト混入)
16. 10YR4/3 黄褐色シルト質極細粒砂
17. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト混入)
18. 10YR4/4 褐色砂質シルト(10YR5/4 黄褐色細粒砂混入)
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂混入)
20. 10YR4/4 褐色シルト
21. 10YR4/3 黄褐色シルト質極細粒砂(0.1~0.3m大の垂門礫含む)
22. 10YR4/2 灰黄色細粒砂(10YR5/3 黄褐色シルト混入)
23. 2.5Y3/2 黒褐色中粒砂(0.1~0.2m大の礫含む)
24. 10YR4/3 黄褐色砂質シルト
25. 10YR4/4 褐色砂質シルト
26. 10YR4/3 黄褐色シルト(10YR3/2 黒褐色シルト混入)
27. 10YR4/3 黄褐色砂質シルト(10YR3/2 黒褐色シルト混入)
28. 10YR4/3 黄褐色砂質シルト(10YR3/2 黒褐色シルト混入 マンガン斑が認められる)
29. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト(10YR4/3 黄褐色シルト混入)
30. 10YR4/4 褐色砂質シルト
31. 10YR4/3 黄褐色シルト(10YR3/2 黒褐色シルト混入)
32. 10YR4/4 褐色シルト
33. 10YR4/4 褐色シルト(10YR4/3 黄褐色シルト混入)
34. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 黒褐色シルト混入)
35. 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR5/2 灰黄色シルト・10YR4/4 褐色シルト混入)
36. 10YR6/4 黄褐色砂質シルト(マンガン斑が認められる)

図3-5 07D 区1面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100

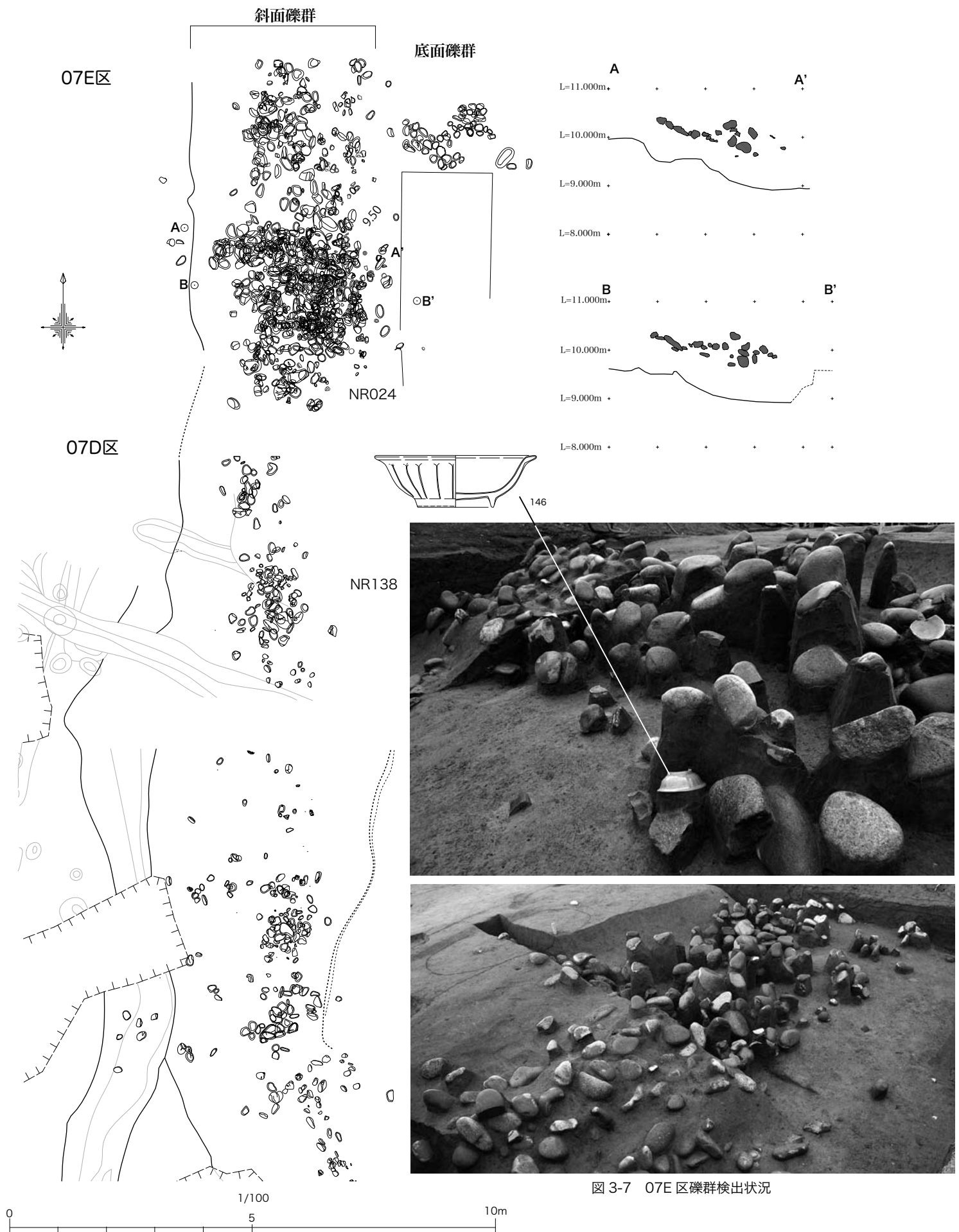


図 3-7 07E 区礫群検出状況

図 3-6 07D・E 区礫群プランと断面 1/100

点に相違を認めることができる。なお、管玉 S-1 が出土している。古墳前期に属するのであろう。

07D-NR138・07E-NR024

07D 区では上部に近世の水田 ST260 があり、下部では近世の流路が中世の堆積層を大きく削っていた。厚い中粒砂層の形成は水流による浸食があったことを示している。

07E 区では礫を含む堆積状況が上部で確認できた。基本的には包含層の再堆積であり、砂層が顕著に形成されることはなく、直接流路に接続する状況ではなかったであろう。そして、次に述べる土坑群によって掘り込まれた流路堆積物の形成主体を NR024-2、土坑埋没後の流路

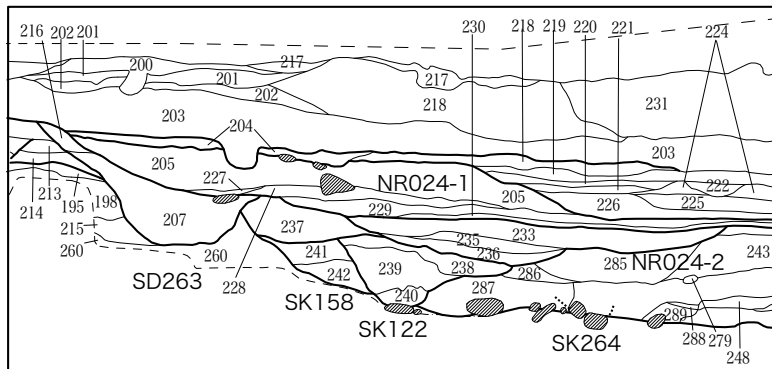


図 3-9 07E 区北壁土層セクション 1/80

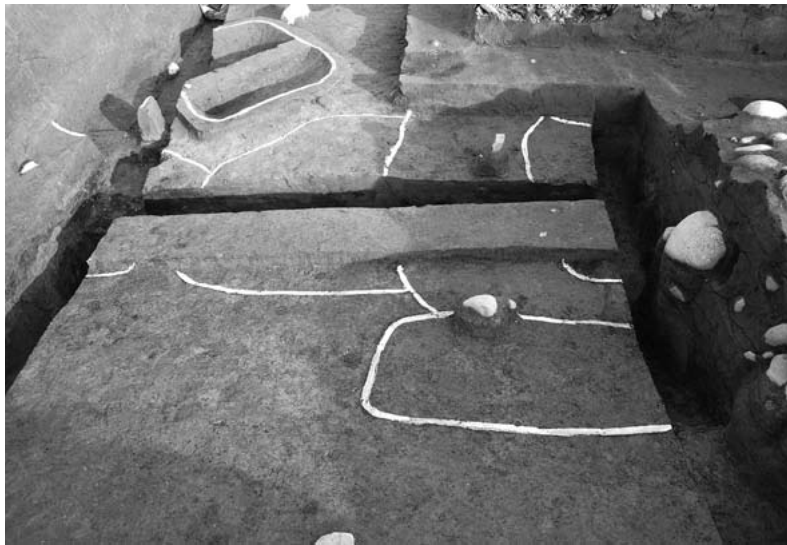


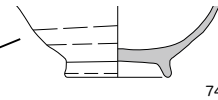
図 3-10 07E-NR024 下層土坑群検出状況



図 3-11 07E-NR024 下層土坑群掘削状況



図 3-12 07E-SK146



746

形成主体を NR024-2 とすれば、前者が古代、後者は中世となる。よって、検出された礫群は中世に属することになるのだが、すでに述べたように微高地東端における礫群の形成は古代に始まって中世に継続し、最終的に斜面へと押し出されることになったと考えられる。礫群については、杭群を伴う等の築堤の痕跡はないので、土坑群の形成と対をなす非日常的性格が考えられる。

07E-NR024 下土坑群

近世の流路に削られること無く残った遺構群である。多数の土坑が重複関係をもち、切り合いは顕著である。07E-NR024-1 堆積後に掘削、廃棄、整地の繰り返しが行われた。常時湛水状態ではなく、水位の季節的変動に対応して土坑掘削が行われたのであろう。

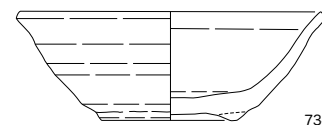
一部を除き内部から遺物の出土は無く、SK111 は山茶碗が、SK146 からは古代末の土師器の碗が出土した。注目されるのは SK115 で、桃の果核と曲物底板が出土したことである。この点からいえば、他の土坑でも有機質の廃棄物が存在したかもしれない。少なくとも、墓坑ではないだろう。



図 3-13 07E-SK111



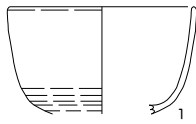
図 3-14 07E-SK111



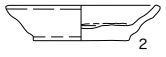
734

07D区

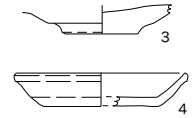
SK003



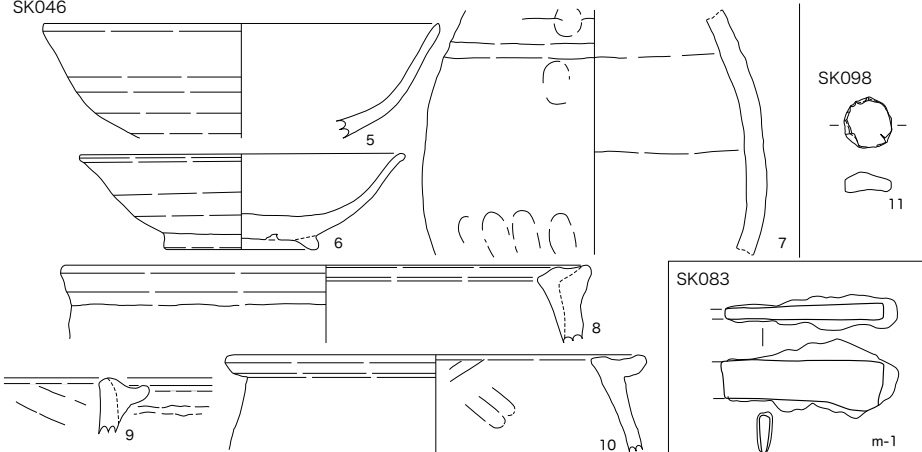
SX070



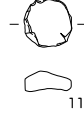
SD127



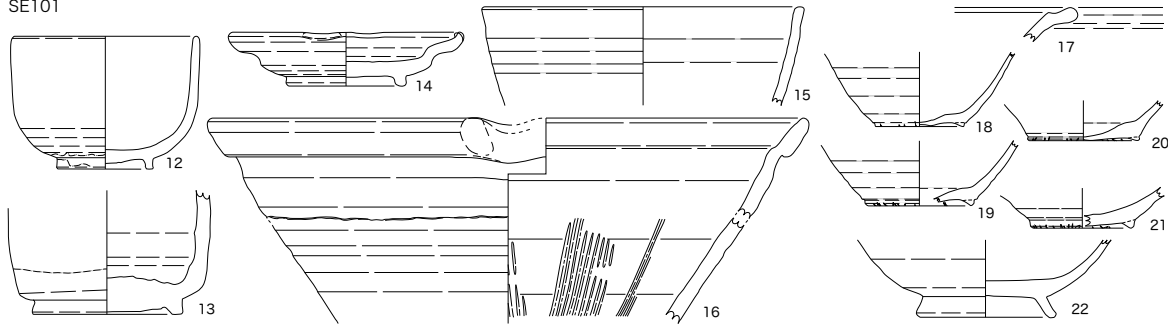
SK046



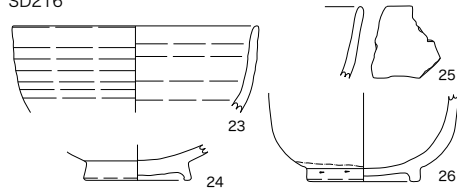
SK098



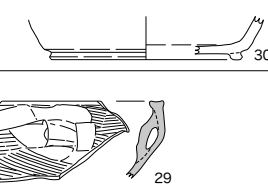
SE101



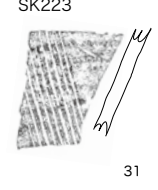
SD216



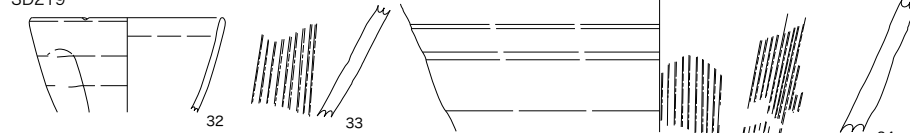
SK110



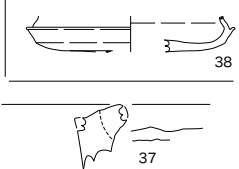
SK223



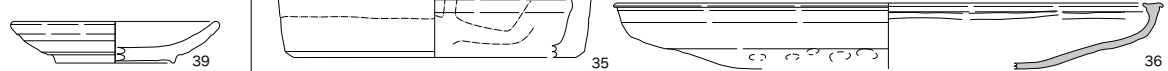
SD219



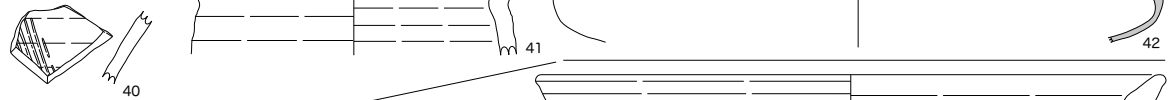
NR225



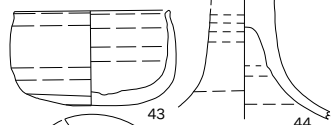
SD254



SD259



SB300



NR138



ST260

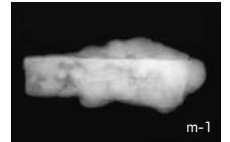
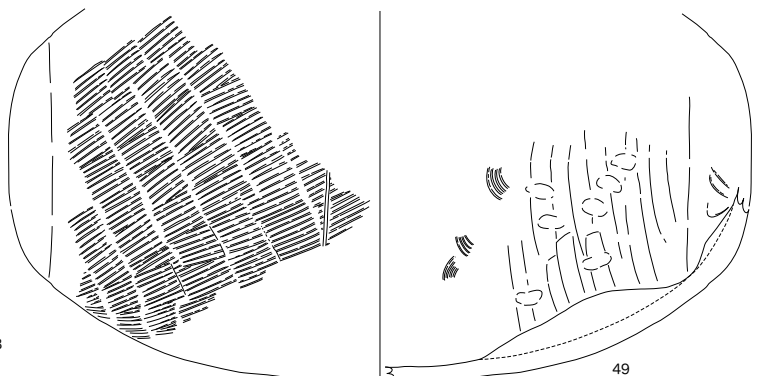
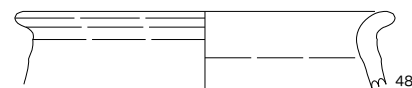
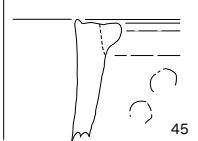


図 3-15 07D 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2)

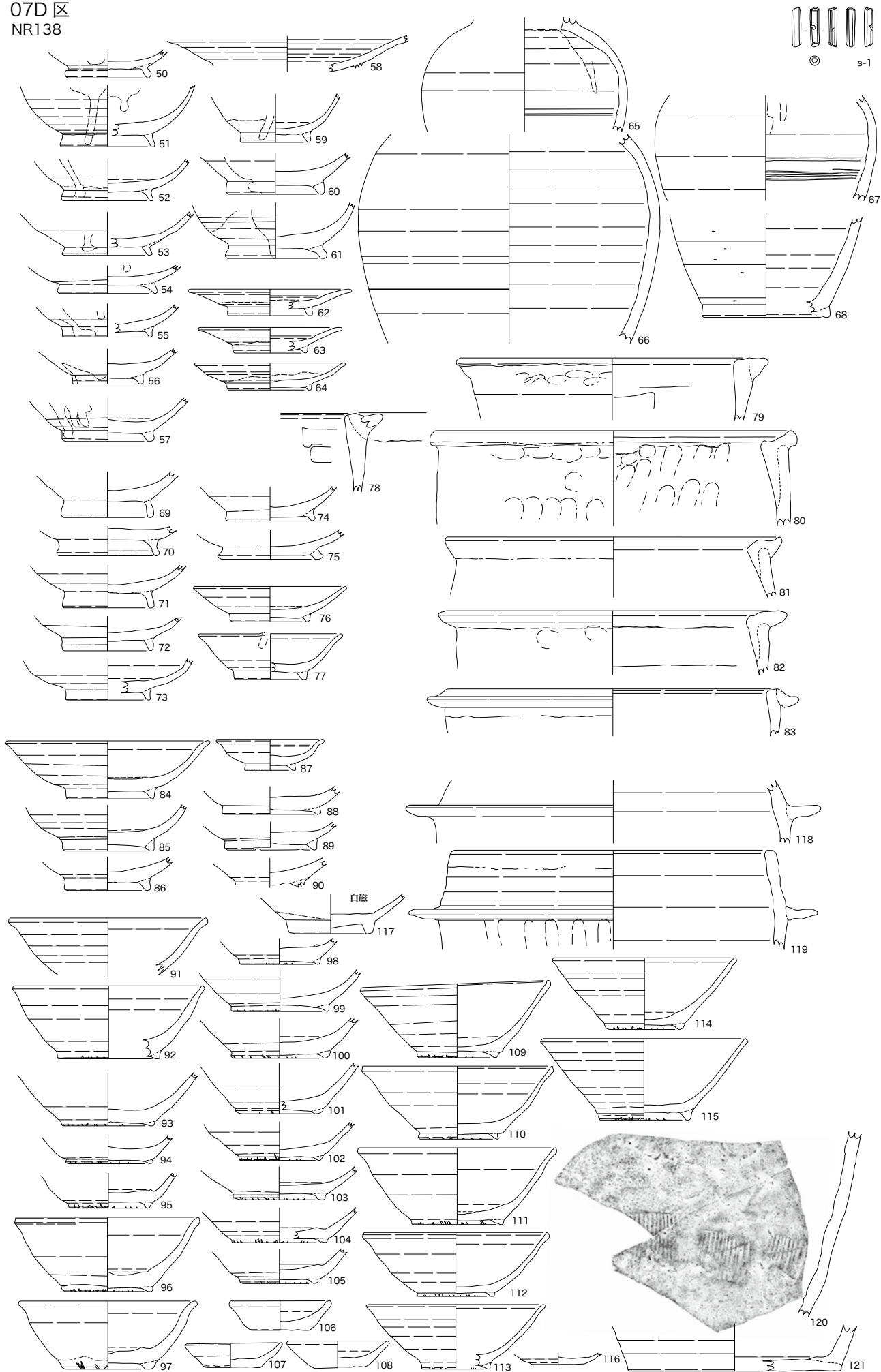
07D 区
NR138

图 3-16 07D 区遺構内出土遺物 (2) (石器 1/2)

07E 区
NR024

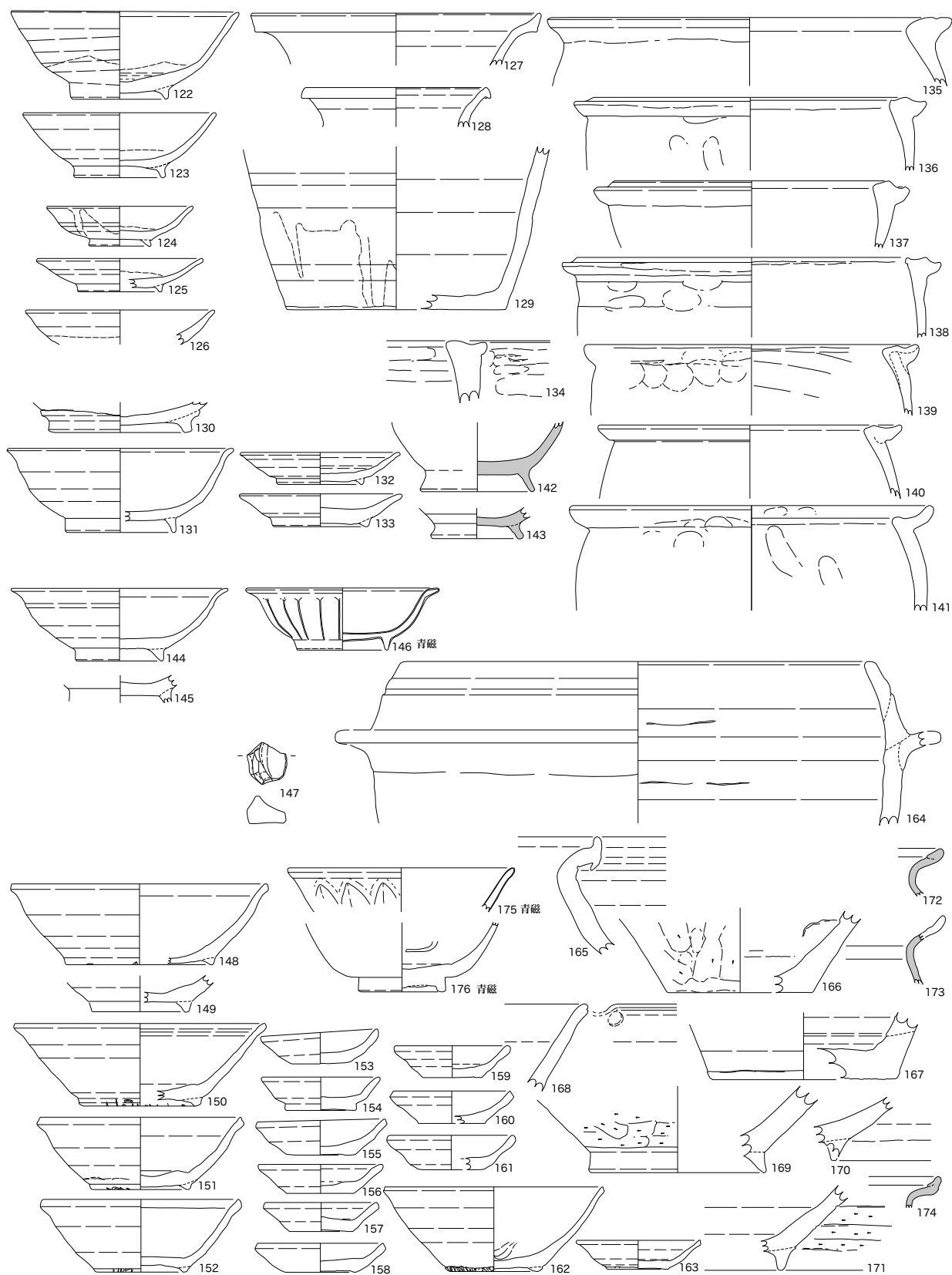


図 3-17 07E 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4)

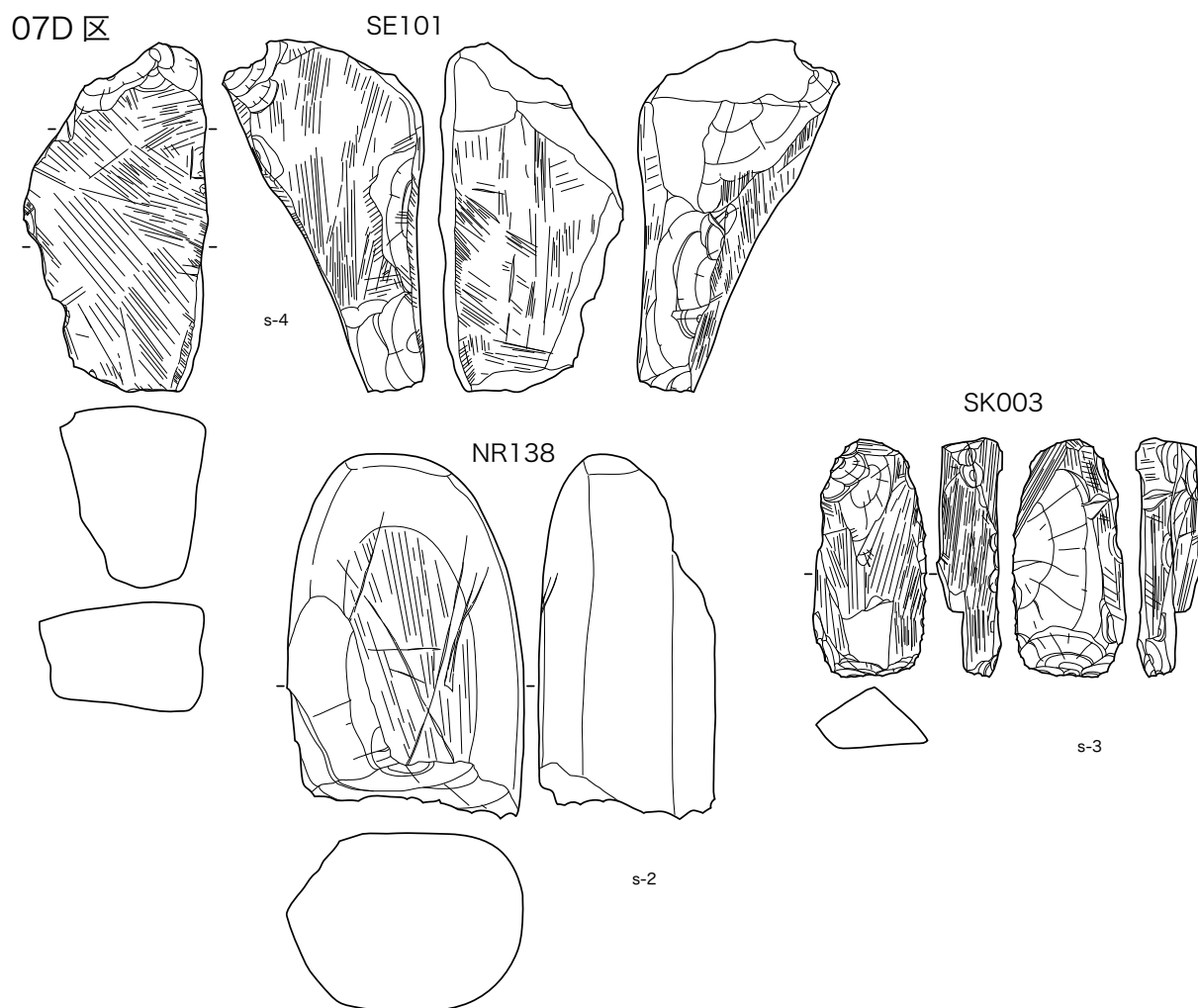


図 3-18 07D 区遺構内出土遺物 (3) (石器 1/3)



07D 区南壁土層断面

古代末～近世	表土
古代前半	黄灰色細粒砂
古墳前期	黒色細粒砂
縄文晩期前葉～弥生中期	黄灰色中粒砂
	黄灰色シルト
	黒色シルト
	極細粒～細粒砂
	砂礫 (大型円礫含む)

図 3-19 07D 区基本土層図

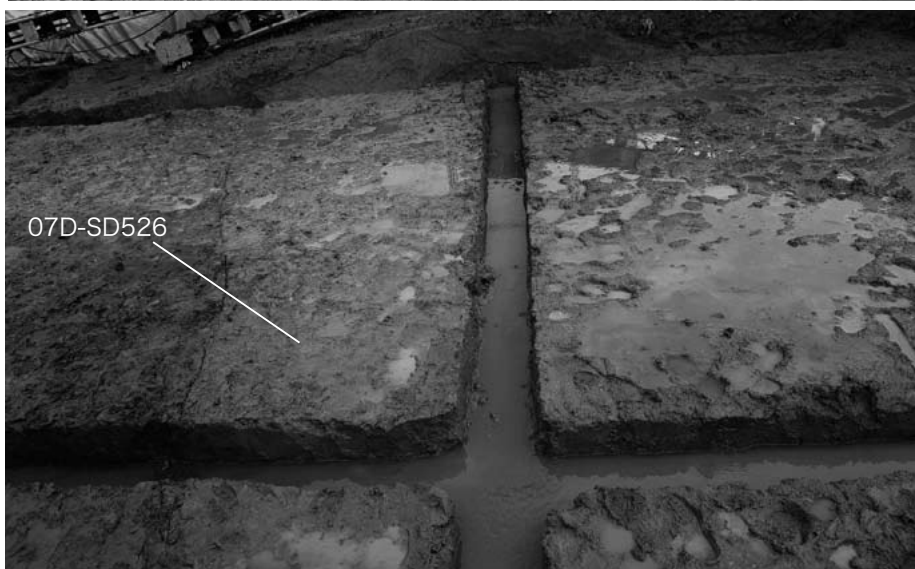


図 3-20 07D 区 4 面検出状況 (07D-SD526 検出状況)

※ 07D 区における 4 面検出作業は調査期間が地下水位の高い夏期にあたった為に、毛細管効果も加わって絶えず湧き出す地下水対策に迫られ、決して良好な調査環境ではなかった。

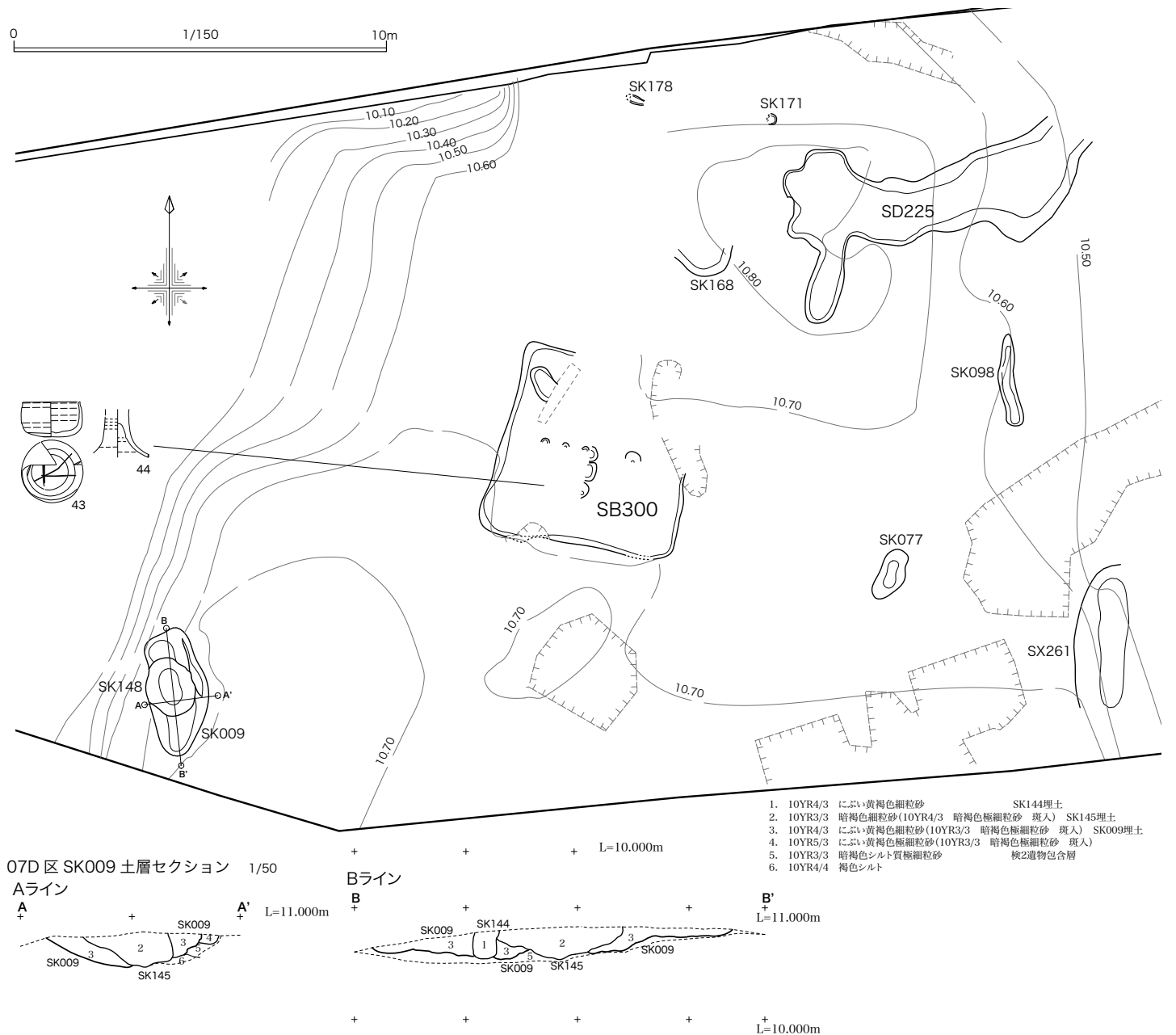


図 3-21 07D区 2面遺構プラン 1/150・個別遺構土層セクション 1/100

b. 古代の遺構と遺物

●概要

黒色化層の存在から、同一面の存在を想定したもので、遺構検出の作業上では単一面ではない。1面下部で検出した小穴にも該当するものもあるだろうが、区別はできていない。

07D区内ではSB300を中心に南西に細長い土坑のSK009とそれを切り込むSK145、北東にSD225とその他の土坑がある。相伴遺物はわずかで、SB300から杯と高杯片が出土しているのみである。近接して建物が展開する状況は窺えない。

07D-SB300

黒色土層を埋土とし、方形プランを呈していることから竪穴建物と認定したが、丁度カマドのくる位置には土坑が掘られ、また床面の把握にも困難を伴った。柱穴は4本検出でき、床面



図 3-22 07D-SK009 検出状況

c. 古墳前期の遺構と遺物

●概要

3面では古墳前期に属す竪穴建物跡を、09区で1棟、07D区で16棟、07E区で8棟の計25棟を検出した。調査区西部における水田造成による削平を考慮すれば、さらに増える可能性は高い。3棟～4棟の重複もあり、濃尾平野では珍しく立て込んでいることを考えれば、同時並存数も多くなるであろう。近現代水田によって削平された範囲では掘り方部分の検出にとどまったが、東側では薄い炭化物層を指標に床面の検出を進め、炉も検出することができた。しかし、柱穴については床面ではなく4面上面での検出となったものがある。また、炭化物層の形成が薄く、4面での検出となった竪穴建物跡もある。柱穴が確実に把握できる4面でも柱穴状の小穴はわずかで、掘立柱建物は調査区内では未検出である。

注目すべき点としてあげられるのは、いくつかの竪穴建物跡から「埋め石炉」と、掘り方底面で「幅広周溝」を確認したことである。いわゆる竪穴建物跡の床面周囲で検出される溝ではなく、掘り方まで掘り下げた時に検出される、主柱の内側を除く周囲に認められる帯状の窪みである。「埋め石炉」は地床炉の一方に棒状もしくは長い板状の礫を埋め込むもので、「枕石」「炉縁石」と呼ばれることもある。しかし、「枕」でも設置場所が縁でもないので、本書では「埋め石炉」と呼ぶ。この「幅広周溝」と「埋め石炉」の存在は、それが優勢な矢作川流域、もしくは山間地域との関係を窺わせるものである。

上述したように掘立柱建物については未検出で、4面でも柱穴の並びを確認することはできなかった。掘立柱建物は竪穴建物との重複をさける傾向にあることを示すものであろう。

古墳前期の溝は、調査区内を南北に貫くものが西部に2条、東部に3条あり、部分的に確認できたものが6条以上である。特に微高地東端では重複が顕著で、下部には07D-SD528のように斜行するものもあるが、上部で平坦面から傾斜面への変換点に繰り返し溝が掘削されていることは、居住域設定範囲との関連を窺わせる。このうち07D-SD355・07E-SD068は断面が箱葉研状を呈し、また上方を削平されているとはいえSD125も溝の両側は急傾斜で立ち上がる様相を見せており、埋土も均質なので人為的に埋め立てられたものと考えられる。07E区ではSB070を切っているが、07D区では竪穴建物SB350と重複しており、居住域の拡張というには狭い範囲での動きとなる。むしろ構造や性格に関わる違いとして、こうした溝と断面逆台形で幅が広く開口したまま自然埋没となる溝とは区別する必要がある。

溝壁面が急傾斜な溝は、07D-SD355を除き概ね底面標高が10m以上である。断面逆台形にも底面標高が9.8m前後のものと10m以上のものがあり、竪穴建物床面より高い（より浅い）ものまであることは、それが地表に関わっていること、つまり一時的な表層水の排水機能や、区画の機能が想定できる。他方、後者は地下水位の上昇にも対応した排水（排湿）機能が想定できる。

さて、今回の調査ではいわゆる廃棄土坑の類いは明確ではない。開口する溝内への廃棄も僅かである。

大型土坑として浅い07D-SK412を検出した。形状から当初は竪穴建物跡の可能性を考えたが、炭化物層の形成が不明確であり、除外した。07D区南西部で検出したSSK322も類似した形状で、概ね軸線もそう。どちらからもまとまった遺物の出土は無かった。



図3-24 07E-SD068



図-25 07E-SD125

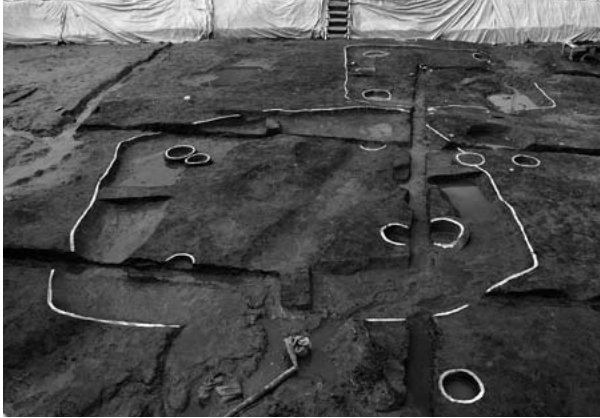


図 3-26 07D-SB474

一方、若干の窪地に土器片等の集積が行われた SU310・347・426 の存在が注目される。とりわけ多量に集積した SU310 は当初、上部が 1 面に露出していたことなど、地表面廃棄の可能性も窺わせた。しかし、竪穴建物床面の地表面からの深度を考慮すれば地表面に近い状態での廃棄とは言えず、やはり浅い土坑状の凹みを設け、そこに廃棄されたものであろう。

●遺構

07D-SB331

SB336 や SB398 に重複する最終段階の竪穴建物跡。明確な土層までは形成しないが、炭化物の散布が認められたので

竪穴建物跡と認定した。南北に長い台形で、支柱穴は不明。北よりの床面直上で棒状の円礫が出土した。埋め込まれてはいないので、置き石炉の可能性はある。

なお、部分的に基盤の礫層が隆起して堆積層に乱れが生じており、遺跡形成後に物理的圧力が加えられたことが窺える。

07D-SB350

SB411 や SD355 に重複する最終段階の竪穴建物跡。地床炉を 2 ヶ所で検出した。北辺寄りの SF437 は小さく、焼土面といったほうが適切である。SF433 は東西軸の西寄り中間に位置している。床面に埋め込まれて棒状の円礫が出土した。「埋め石炉」としては最終段階に相当する。支柱穴は 2 本を確認した。幅広周溝は未確認である。

07D-SB411

プランは不整形で、南北に長い台形を呈する。支柱穴は南辺に沿う 2 本を確認した。

07D-SB472

上部は近現代水田で削平され、掘り方部分のみ残存のため、床面は不明である。支柱穴を 3 本確認したが、南東部は不明。床下の幅広周溝は北部と西部、南部の西端で検出した。

07D-SB474

上部は近現代水田で削平され、掘り方部分のみ残存のため床面は不明である。支柱穴を 4 本確認した。床下の幅広周溝はほぼ全周するようである

07D-SB492

西・北・東辺を検出した。南辺は 07D-SB498 ほかと重複のため不明である。支柱穴は 3 本を確認した。07D-SB523 を切り、07D-SB352 に切られる。なお、この竪穴建物跡に切られる 07D-SB523 が重複関係ではもっとも先行すると思われるが、延長方向にある 07E-SB075・SB076 との関係は不明である。位置関係は 07E-SB076 との関係を示唆するが、東辺が合わない。

07E-SB082

上部は近現代水田で削平され、掘り方部分のみ検出できたに過ぎない。支柱穴を 2 本確認したが、南東柱穴は複数の土坑と重複している。床下の幅広周溝を 3 方で確認した。

07E-SB070

東西軸で 6m を超え、調査区内では最大規模である。07E-SD068・084 に切られる。

07E-SB073

支柱穴を 2 本確認した。

07D-SD467・09-SD027

東部で検出した南北方向の溝で、やや蛇行する。検出面での幅は 1.5m で、削平分を加えれば、幅 2m、深さも 1m はあったろう。堆積状況は自然埋没を示す。溝底面の標高は 9.8m である。

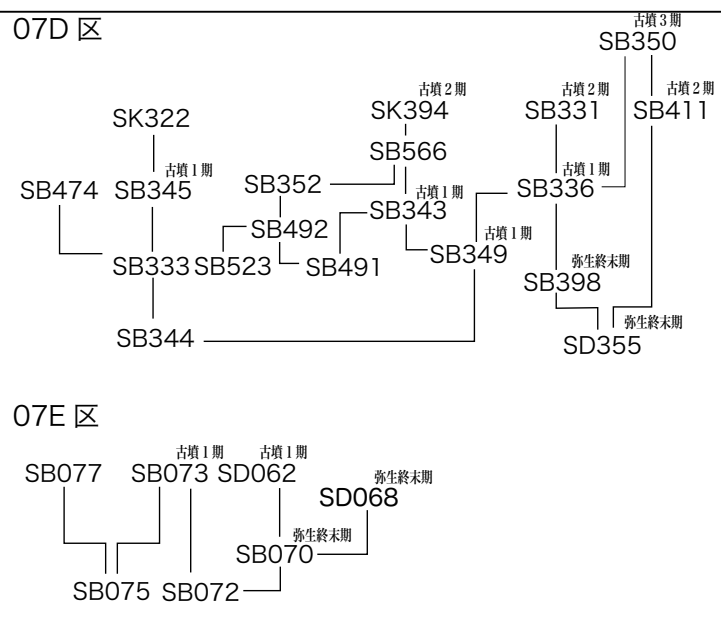
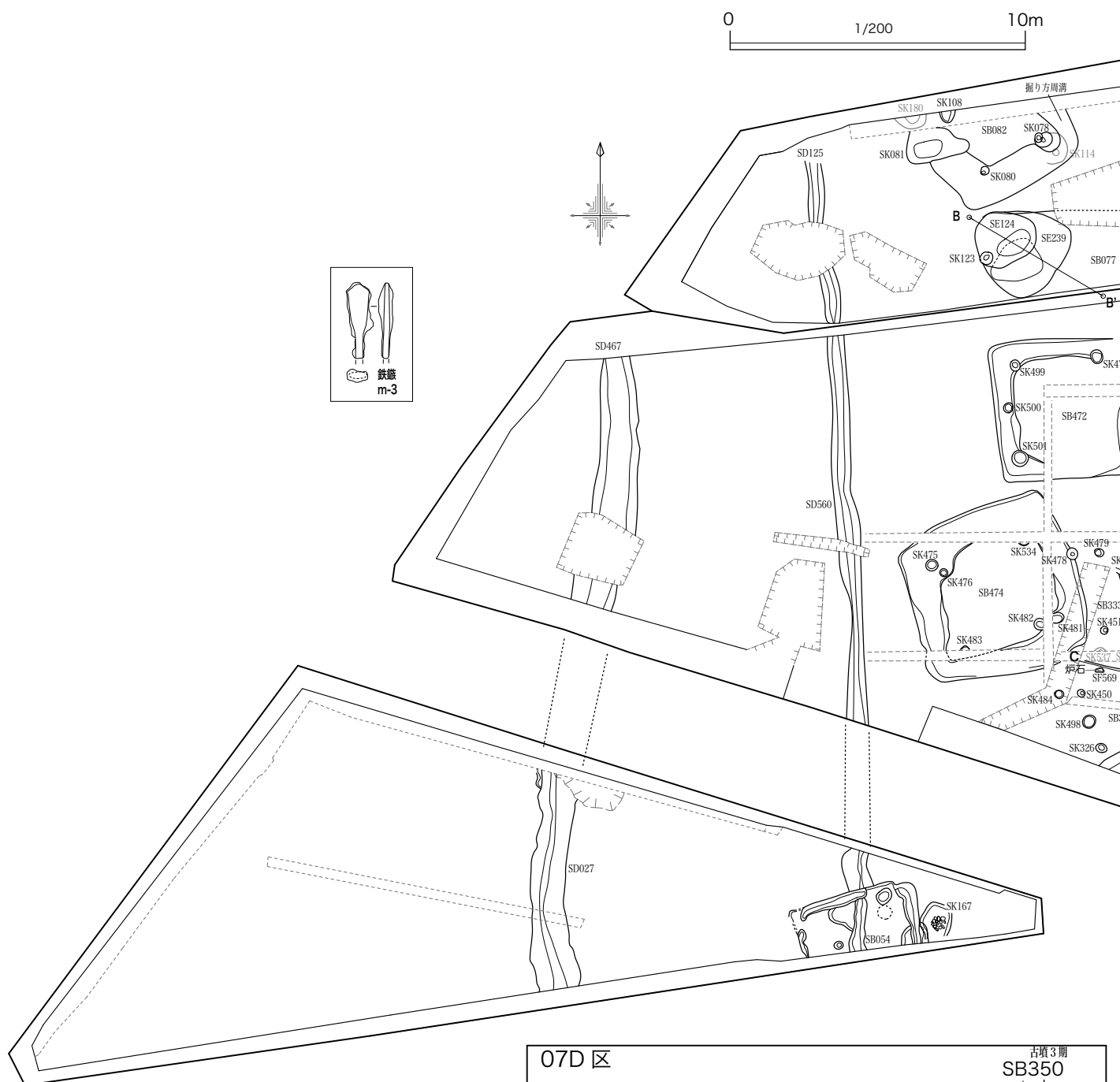


図 3-28 07D・E 区竪穴建物跡等先後関係図：下が古く上が新しい

07D区SD467土層セクション

1/50

L=11.000m + + + L=11.000m

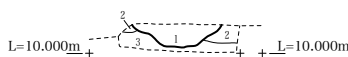


1. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 黒褐色土含む) SD467埋土
2. 10YR4/4 褐色砂質シルト(10YR3/2 黒褐色土含む)
3. 10YR3/2 黒褐色土
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂(円礫含む)

07D区SD560土層セクション

1/50

L=11.000m + + +

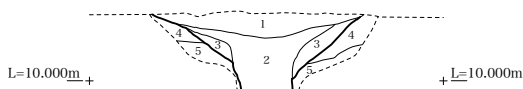


1. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 黒褐色土 斑入) SD464埋土
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂(円礫含む)

07D区SD355土層セクション

1/50

L=11.000m + + + L=11.000m



1. 10YR4/4 褐色砂質シルト
2. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 黒褐色土 斑入・10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 斑入)
3. 10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂(10YR3/2 黒褐色土 斑入)
4. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 黒褐色土含む)
5. 10YR3/2 黒褐色土

07D区SD528土層セクション

1/50

L=10.000m + + L=10.000m



1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト(10YR3/2 黒褐色土含む) SD528埋土
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト(10YR3/2 黒褐色土含む) SD528埋土
3. 10YR3/2 黒褐色土
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂

図 3-29 07D 区溝土層セクション 1/50

07D-SD560・07E-SD125

07D-SD560 の断面形は壁面の立ち上がり
のやや緩やかな部分もあるが、07E-SD125
は急な傾斜で溝幅も SD467 に比べて狭く、
形状は異なっていたらう。溝底面は標高
10.05m である。

07D-SD355・07E-SD068

下部の断面は箱形で、上部は溝の両壁面
ともに傾斜は緩やかだが、断面逆台形の溝
が下部にあり、それが埋没途中で再掘削さ
れたされたためにこのような形状になった
と考えられる。溝底面の標高は 07E-SD068
北端で 9.8m、07D 区南部で 9.75m と微妙
な傾斜である。

07D-SD371・07E-SD062

断面は皿形で、底面標高は 10.2m を測
りかなり高い。東隣の 07D-SD382・07E-
SD055 (07D-SK421?) もほぼ同じ底面標
高で、一連で同類と思われるが、断続して
いることは底面標高が一定しないことを示
していると考えられる。両者の先後関係は
不明である。

07D-SD312・07E-SD049

断面形は逆台形を呈し、幅約 3m、底面
標高は 9.8m である。北から南へわずかに
傾斜している。埋土は最下部から中粒砂で
あり、当初から河道と接続していたものと
思われる。07E 区では東側に並行して同様
に中粒砂が堆積する 07E-SD089・047 が
あるが、断面観察によれば先行する可能性
が高い。07D 区では湧水の為に延長部の検

出はできなかったが、同様に南北にのびていた可能性は高い。底面標高や方向からみて 07D-
SD526 が該当しそうだが、堆積状況に差異があり、同一の溝とは断定できない。

07D-SD528

検出面での幅は 0.35m と狭かったが、溝両壁面の傾斜は急であり、形状は 07E-SD125 に
近い。多くの溝とは異なり東の低地（河道）方向へのびている。区画ではなく、排水路的な役
割が想定できる。

07E-SD084

底面標高は 10.2m と高い。SD068 からのびるのであれば上層に対応しよう。先行する溝を
指標に再掘削したものであろう。

07D-SD086

07E-SD046 に切られる溝で、底面標高は 10.1m と浅く、同性格の先行する溝である可能性
は低い。

図 3-32 SB350 埋め石炉

SB350内SF433(埋め石炉) 1/50

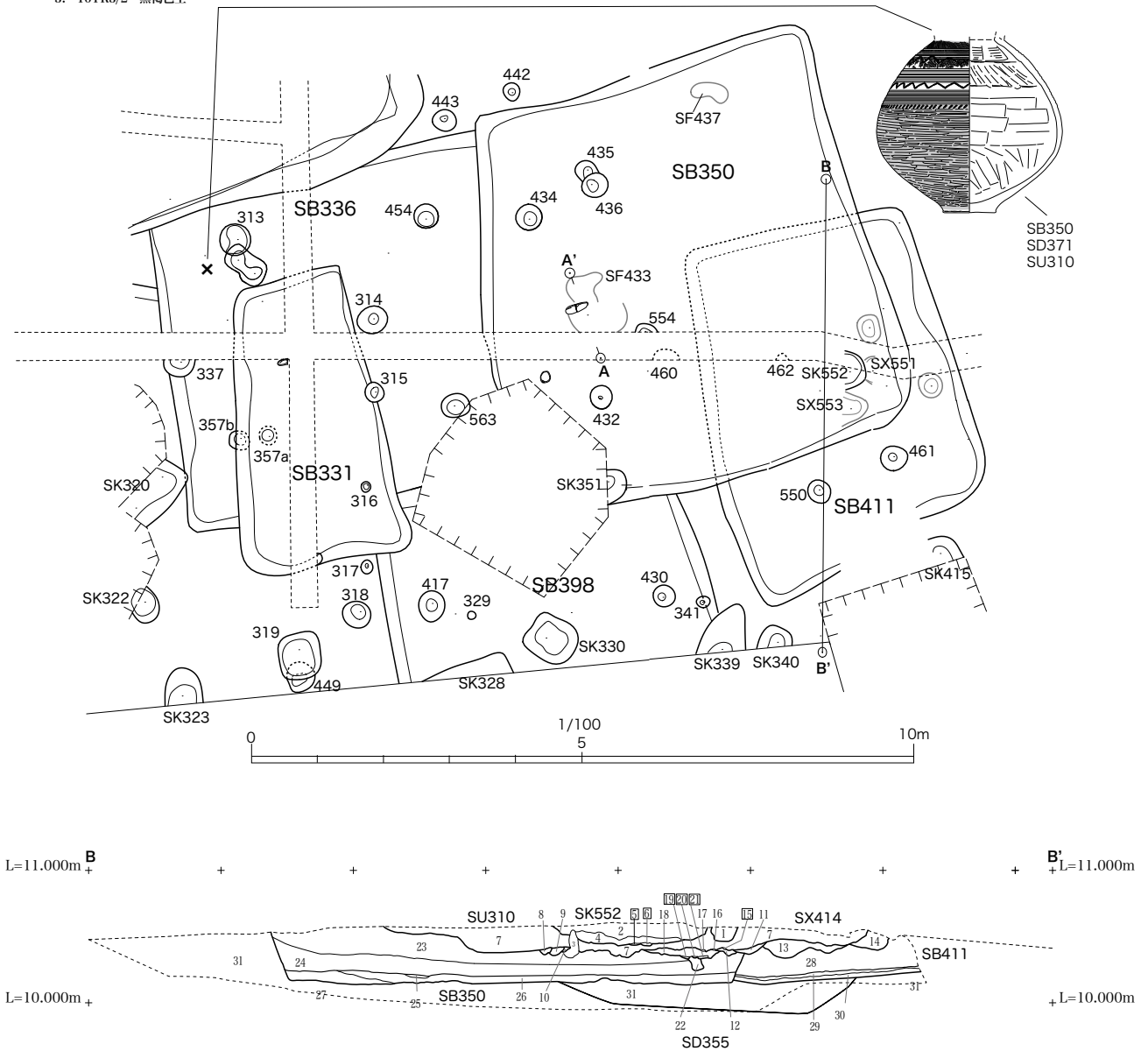
A + A' L=11.000m

+ L=10.000m

1. 10YR4/4 褐色シルト 10YR3/2 黒褐色炭化物多く含む 7.5YR褐色焼土ブロック 10YR5/3 にふい黄褐色シルト(灰層)含む
2. 10YR4/4 褐色シルト 10YR3/2 黒褐色土含む 350SB貼床
3. 10YR3/2 黒褐色土



※弥生後期中頃の赤彩壺が破片となって散在する状況で出土しており、遺構造成により移動したことが窺える。



1. 10YR3/3 暗褐色シルト(2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂 斑入・10YR2/1 炭化物少量含む) SU310埋土
2. 10YR3/3 暗褐色シルト(2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂 炭化物少量含む 遺物多量含む) SK552
3. 10YR4/4 褐色シルト(10YR5/6 黄褐色シルト 斑入 炭化物少量含む)
4. 10YR3/4 暗褐色シルト(2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂 斑入) SK552
5. 7.5YR5/6 明褐色焼土(10YR2/2 黒褐色炭化物・10YR5/2 灰黄褐色シルト・灰層) SK552
6. 5と同じ
7. 10YR4/4 褐色シルト(10YR4/2 灰黄褐色シルト 斑入 炭化物少量含む 土師器多量に含む) SU310
8. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(10YR2/1 黒色炭化物少量含む)
9. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(10YR2/1 黒色炭化物少量含む 8に比べやや粘性が強い)
10. 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト
11. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(10YR2/1 黒色炭化物少量含む)
12. 7.5YR5/6 焼土(10YR2/2 黒褐色炭化物含む)
13. 10YR4/4 褐色シルト(10YR4/2 灰黄褐色シルト 斑入・10YR2/1 黒色炭化物少量含む)
14. 10YR4/4 褐色砂質シルト(10YR4/2 灰黄褐色シルト 斑入)
15. 7.5YR5/6 焼土(10YR2/1 黒色炭化物・10YR5/2 灰黄褐色シルト・灰層)
16. 15と同じ
17. 15と同じ
18. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 黒褐色炭化物・7.5YR4/4 褐色焼土・10YR5/3 にふい黄褐色シルト・灰層含む) SX414埋土
19. 7.5YR5/4 焼土(10YR2/1 黒色炭化物・10YR5/3 にふい黄褐色シルト・灰層) SX414埋土
20. 19と同じ
21. 19と同じ
22. 10YR4/4 褐色シルト(10YR3/2 暗褐色シルト・10YR2/1 黒色炭化物含む)
23. 10YR4/4 褐色シルト(10YR4/3 にふい黄褐色シルト含む) SB350埋土
24. 10YR4/4 褐色シルト(炭化物少量含む 23に比べ粘性強い) SB350覆土
25. 10YR2/1 黒色炭化物(10YR4/4 褐色シルト含む) SB350床面
26. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(10YR2/1 黒色炭化物・7.5YR4/3 褐色焼土含む) SB350貼床
27. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト質極細粒砂 SB350貼床
28. 10YR4/4 褐色砂質シルト(10YR4/3 にふい黄褐色シルト 斑入) SB411覆土
29. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(10YR3/2 黒褐色炭化物・7.5YR5/4 にふい褐色焼土) SB411貼床
30. 10YR4/4 褐色シルト(10YR4/3 にふい黄褐色細粒砂 斑入) SB411掘形埋土
31. 10YR4/3 にふい黄褐色シルト(10YR3/3 暗褐色シルト・10YR3/2 黒褐色土含む) SD355埋土

図 3-33 07D 区 SB350 付近遺構プラン 1/100・関連土層セクション 1/50

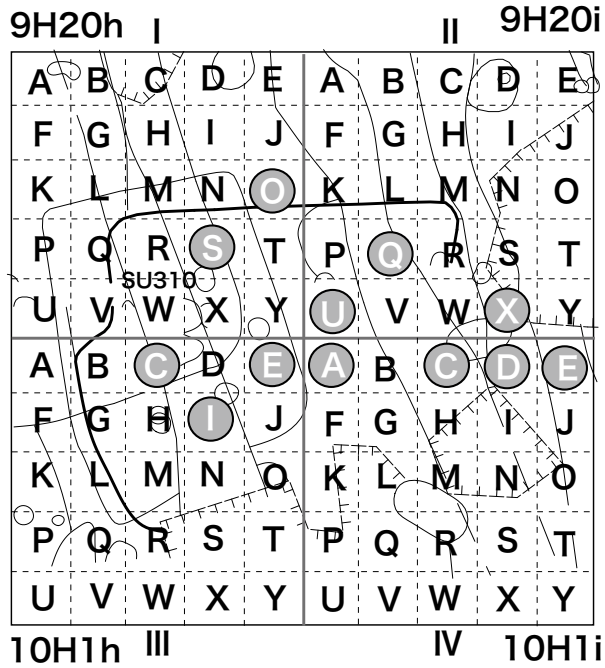


図 3-34 07D 区 SU310 関連小グリッド区分図

※左図の○アミ掛け白抜きアルファベットは土器を取り上げた小グリッドを示す。層位を無視すれば SU310 より広い範囲で土器が出土した。なお、SU310 の形成時期は古墳 3 期である。

SU310 底面レベルは、SD350 床面から 0.7m の高さがあり、堅穴の深さが 1m とすれば、地表面から 0.3m 程度の深さはあったと思われる。ただ、東側は浅くなっており、形状が調えられていたという形跡は無い。

SU310 として取り上げた土器群には時期幅があり、破片状態での集積が中心であった。接合片の分散状況をみると、一時的な廃棄に加えて、堅穴建物の造成等に伴い出土した破片等も集積されたと考えられる。土器の取り上げについて、最初は SU310 で一括していたが、作業が進む中で土器の多量さを考慮して、全点記録ではなく、形のわかる主要資料について地点上げ、多量の破片については 5m の基本メッシュを 1m メッ

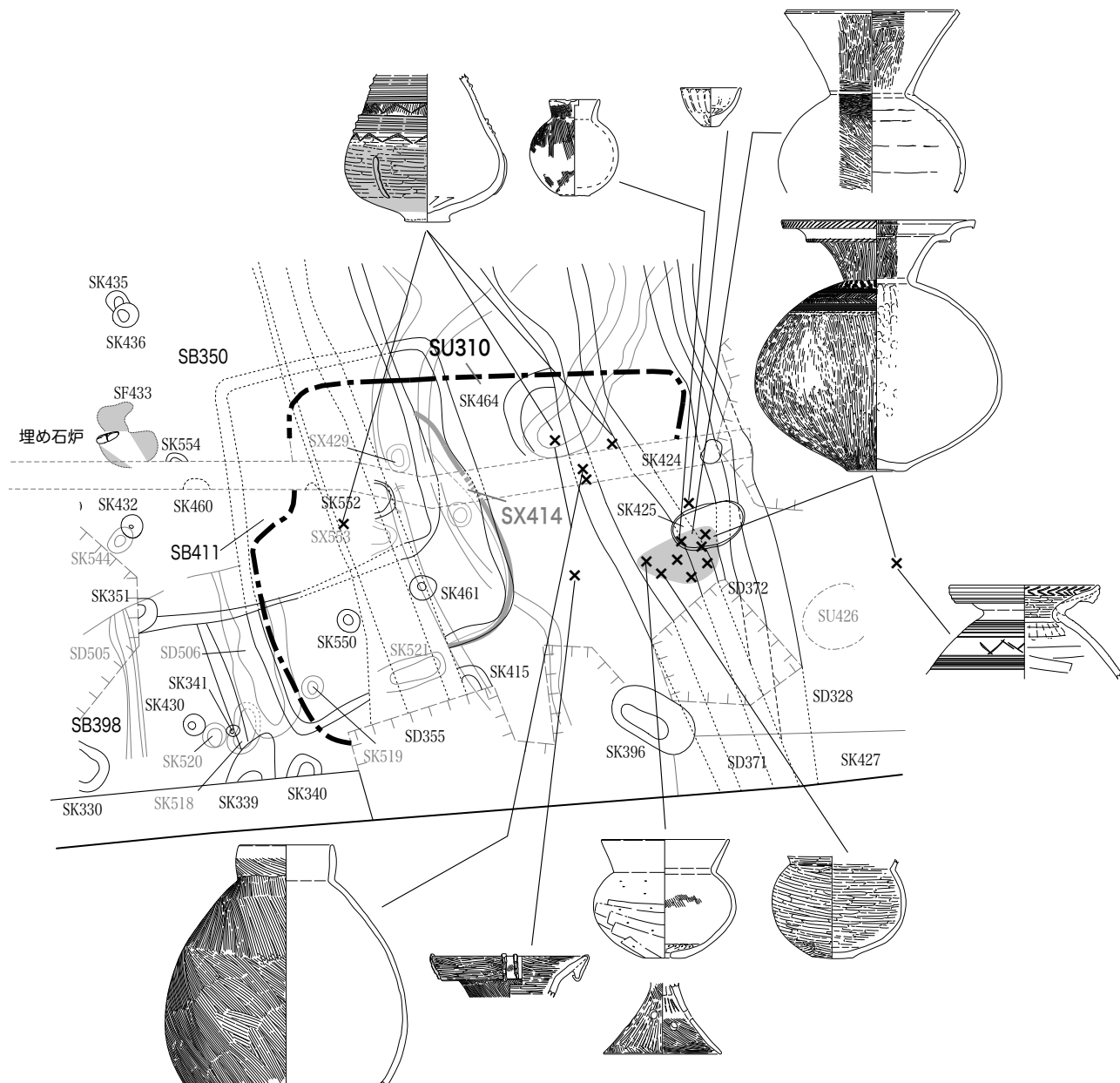


図 3-35 07D 区 SU310 関連主要土器出土分布図

シュで区切った小グリッド単位で取り上げを進めた。

SX414 は炭化物・灰層・焼土が堆積し、底面の形状は一定せず竪穴建物の床面とは明らかに異なる。部分的に焼土面も形成され、燃焼行為が行われている。SU310 下面に同様の痕跡は確認できなかったが、上部にある SK552 下面にも焼土面が形成されており、廃棄行為主体の SU310 とは異なる燃焼行為の継続が窺える。有機物等の焼却が行われたものと思われる。居住域の東端にあることは、火・煙について風下の位置を選択したといえる。

SU347

SD382 に東側で、3 面の下部遺構を精査中に検出した土器群である。関連する遺構の輪郭や形状は不明である。

土器の検出レベルは 10.65m ～ 10.8m であり、SU310 よりは高い。かなり地表面に近いレ



図 3-36 07D-SU310 出土状況

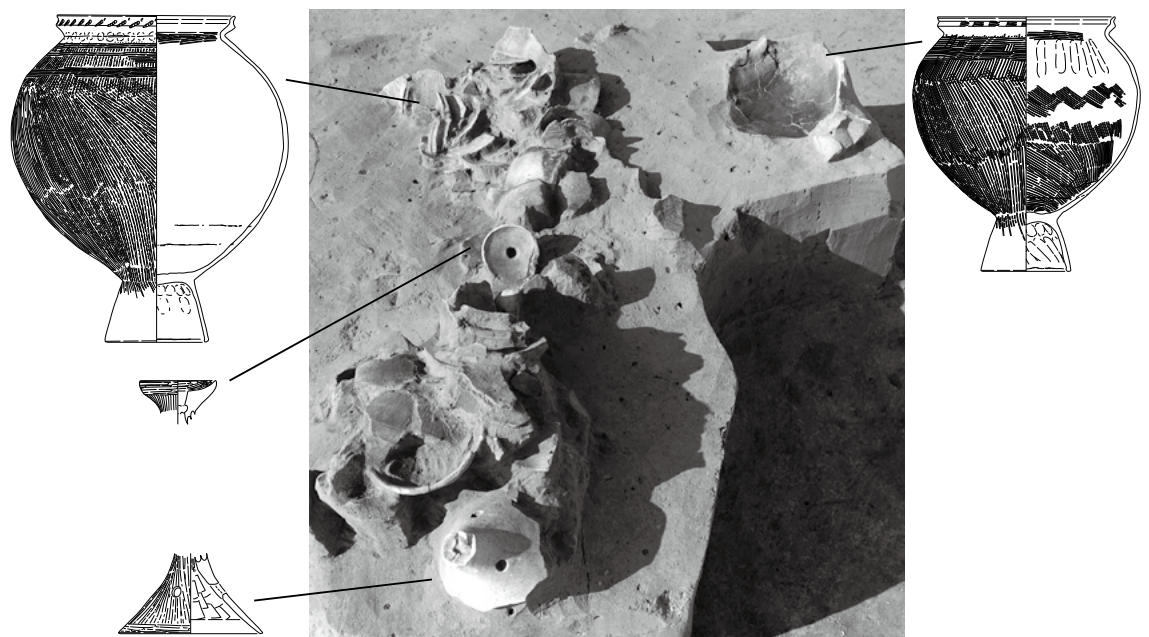


図 3-37 07D-SU347 出土状況

ベルであったと思われる。周辺の土層も炭化物や焼土をほとんど含まず、SU310 と性格は異なる一時的な廃棄であろう。

●遺物概要

07D・E 区では堅穴建物跡への廃棄はまとまったかたちでは行われておらず、そのために廃棄場所を必要とすることになり、それが 07D-SU310 や 07D-SU347 ということなのだろう。ならば、それらから出土した遺物に祭儀的な性格は無いと看做すこともできる。

07D-SU310 からは古墳 1 期から古墳 3 期までの遺物が出土している。単純にみれば時期幅は長期で、あたかも廃棄に継続性があるようだが、主な資料は古墳 2 期に属して、それ以前も僅かである。つまり、通常の廃棄と掘削・整地等で出土した先行する古墳 2 期以前の土器をあわせて廃棄したということだろう。

居住域の形成中での廃棄であり、祭儀と無関係とはいえ、注目される資料に 2 段の 3 条突帯をめぐらす長胴形赤彩壺 422、伊勢湾西岸形二重口緑壺 409 がある。どちらも破片となつて複数地点から散在して出土したもので、前者は白っぽい胎土の在地品で、後者は丁寧な作りで胎土も異なるので搬入品である。

09 区

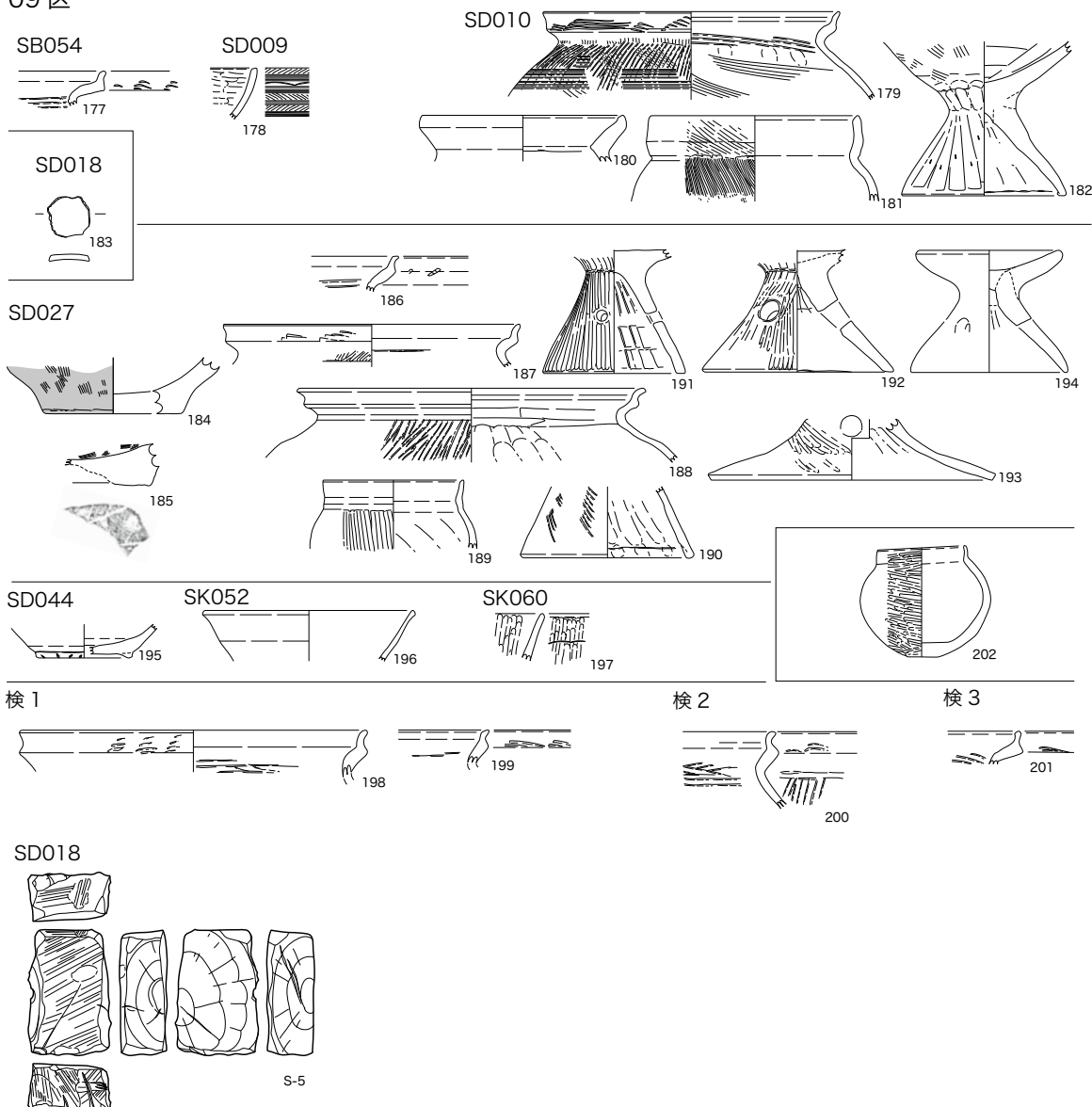
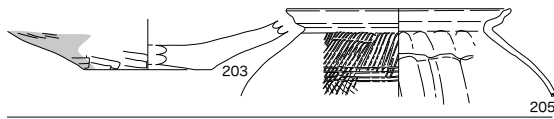


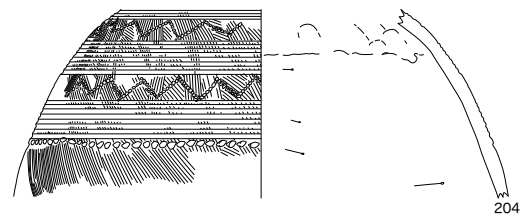
図 3-38 09 区出土遺物 (1) (石器 1/3)

07D 区

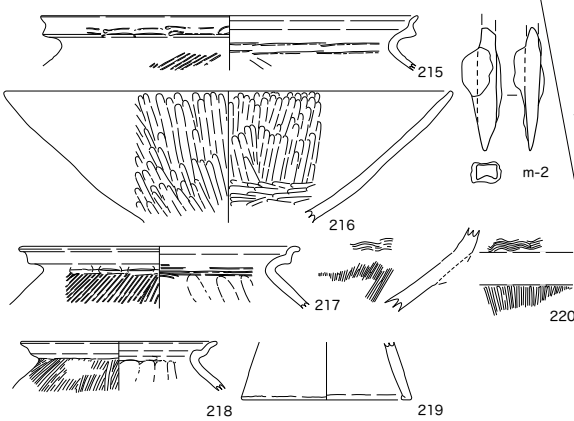
SB331



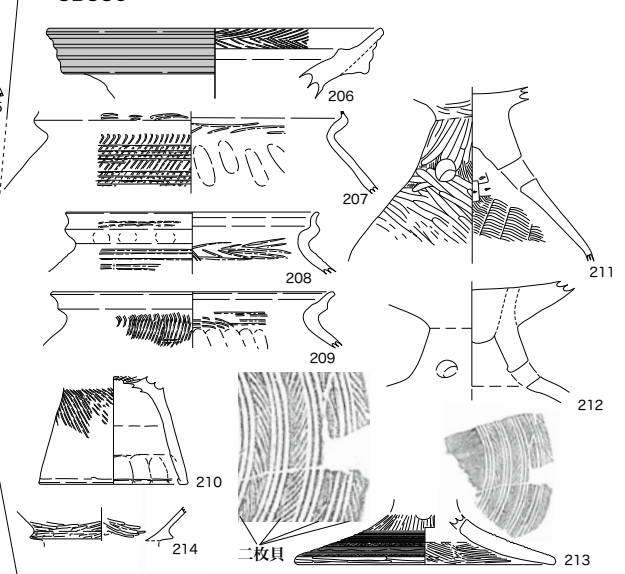
SB331-SB336



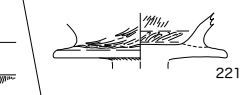
SB343



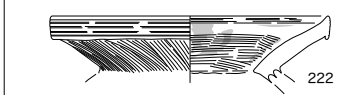
SB336



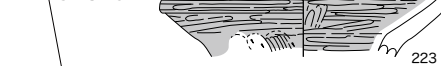
SB345



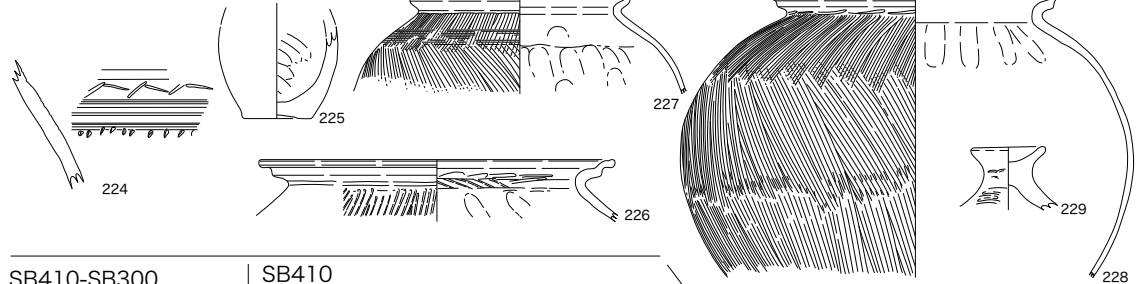
SB345-SB336-SD371



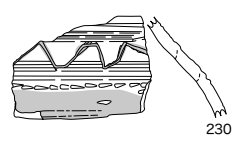
SB349



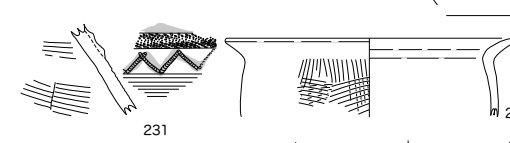
SB350



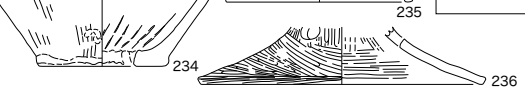
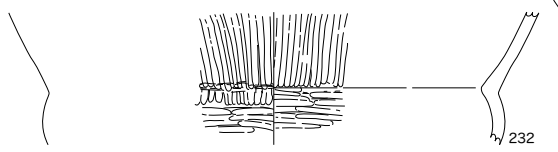
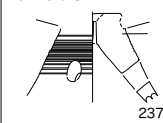
SB410-SB300



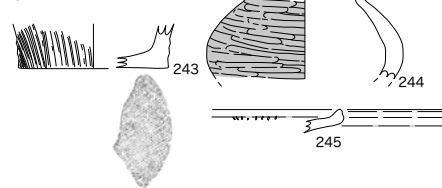
SB410



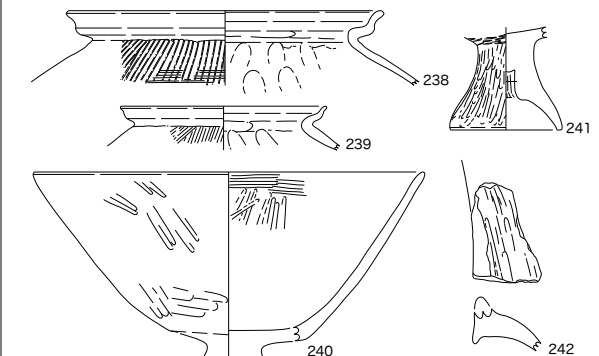
SB398



SB472



SB411



SB491

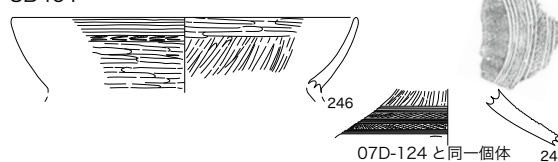


図 3-39 07D 区遺構内出土遺物 (2) (鉄器 1/2)

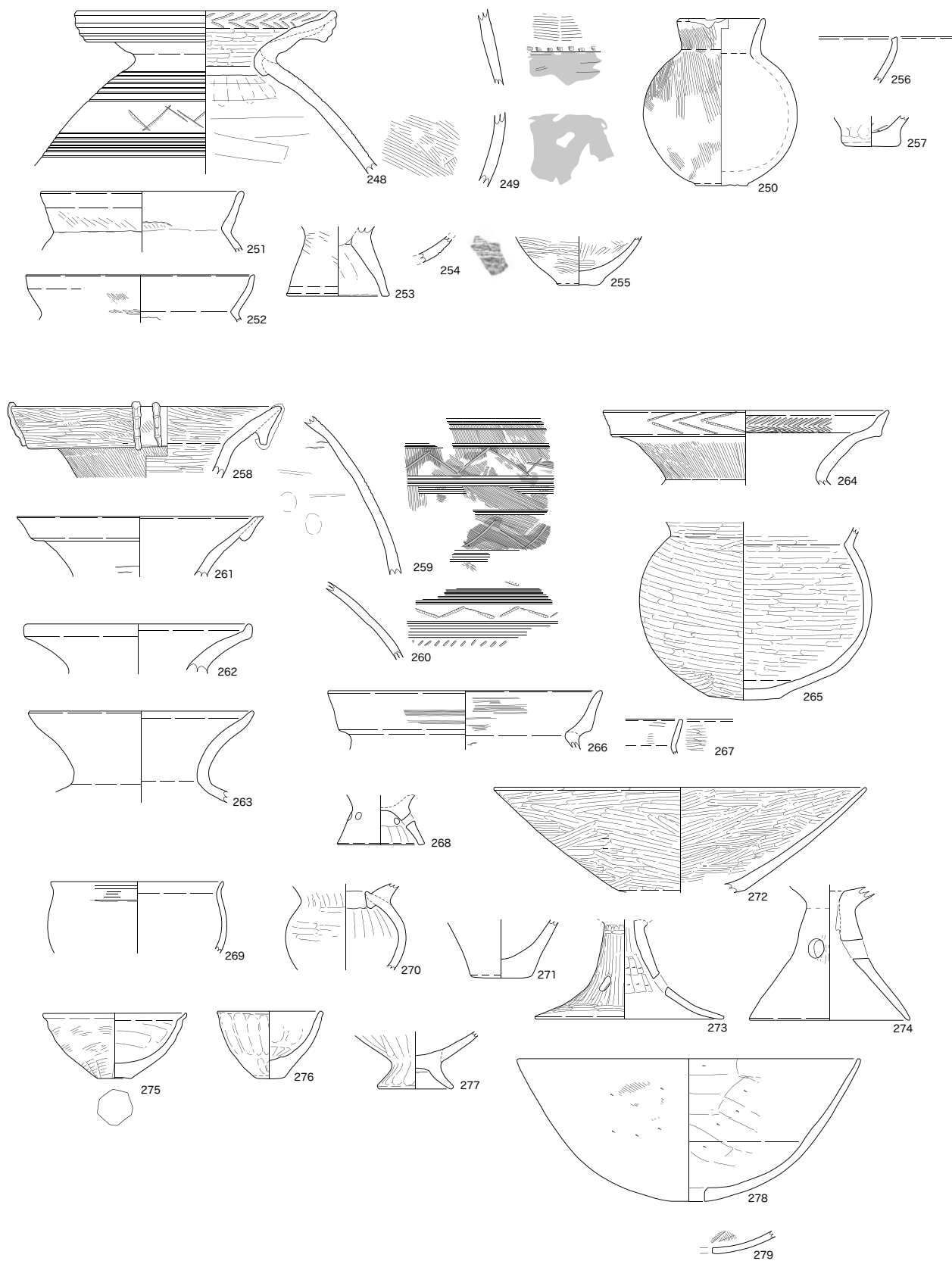
07D 区
SU310

図 3-40 07D 区遺構内出土遺物 (3)

07D 区
SU310

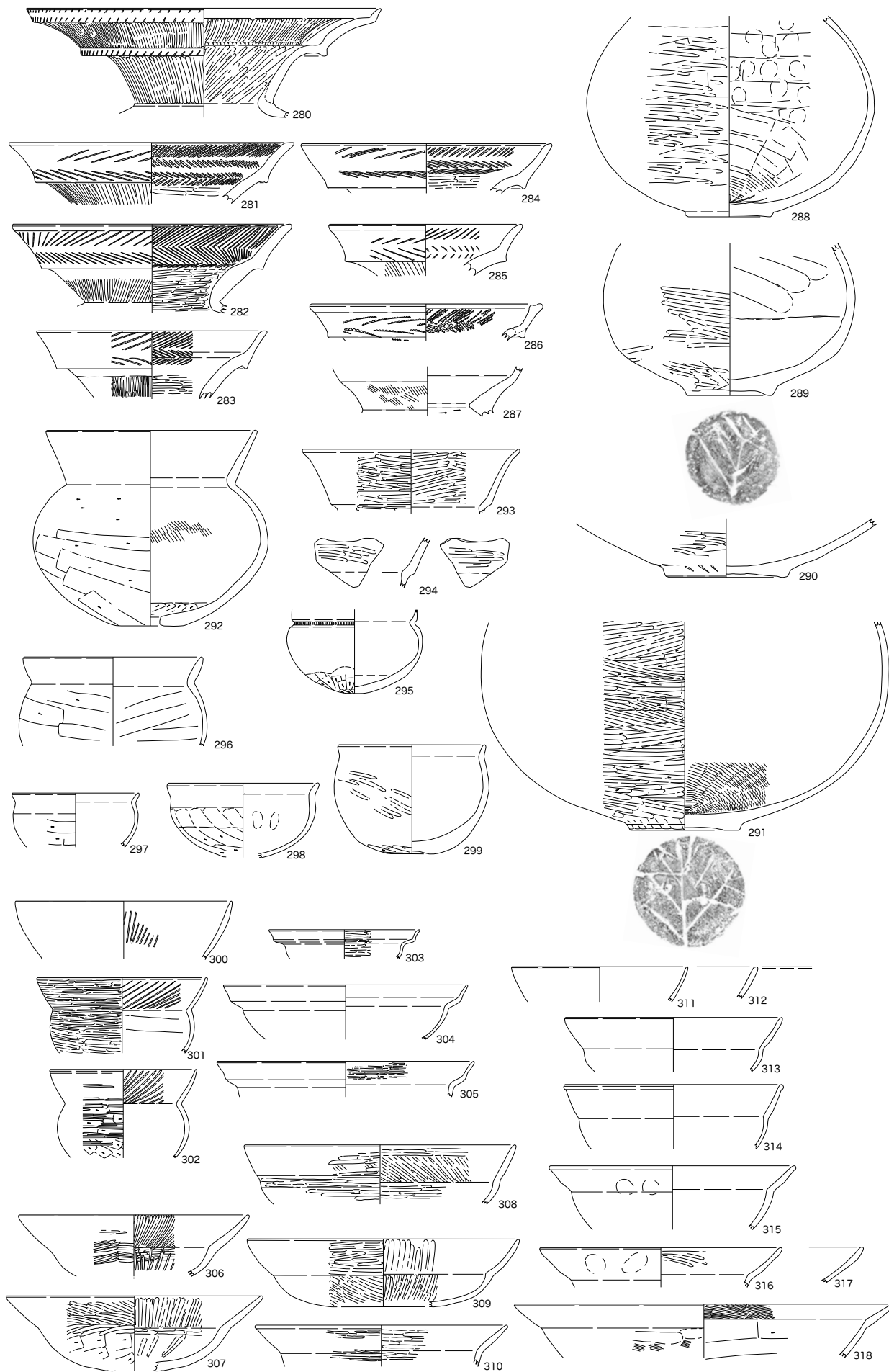
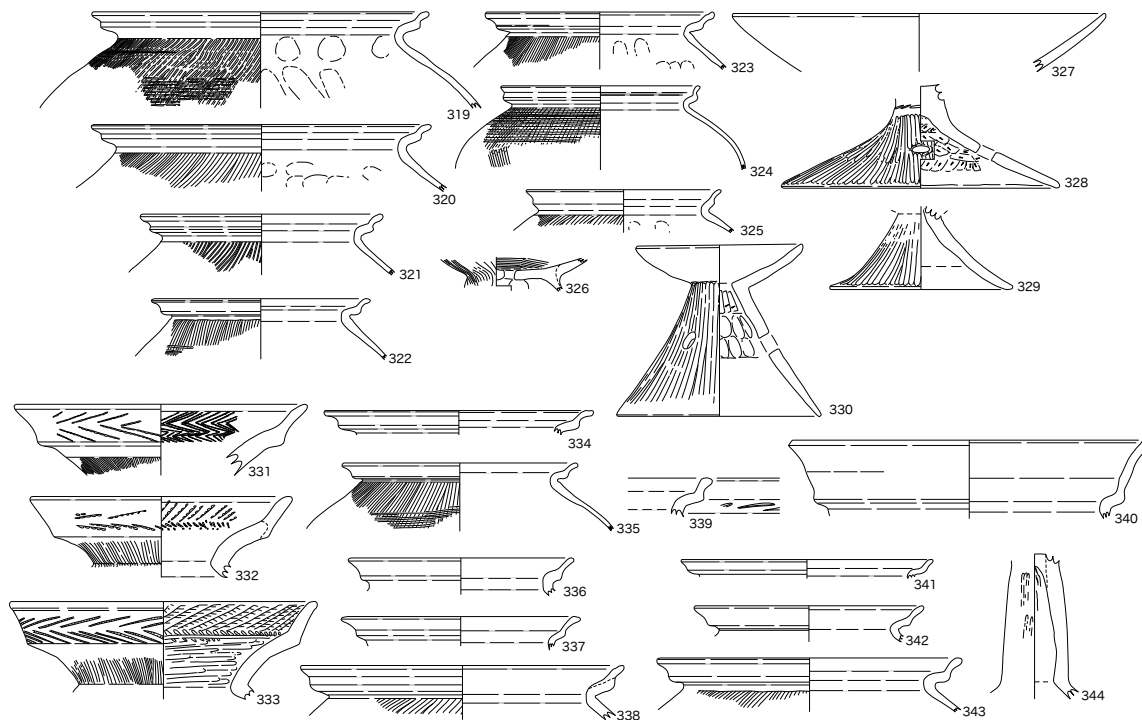


図 3-41 07D 区遺構内出土遺物 (4)

07D 区
SU310

SU310A

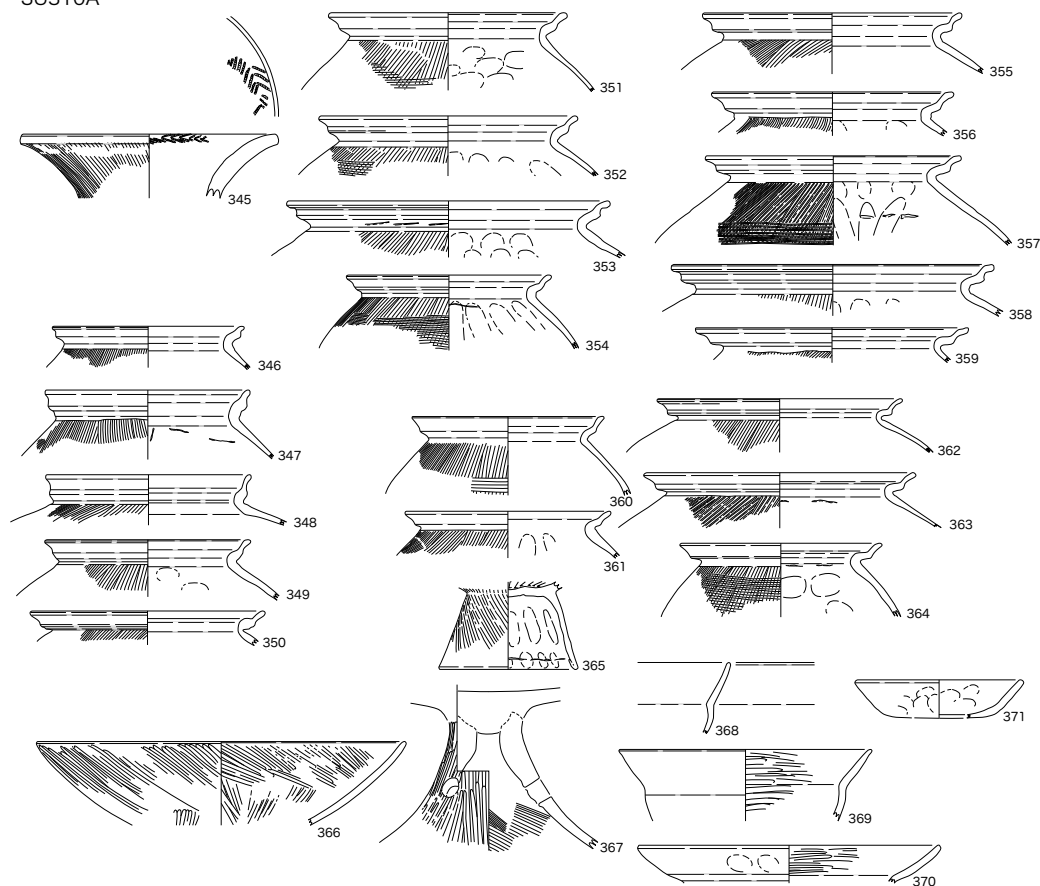
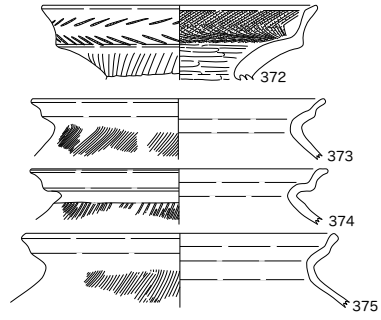
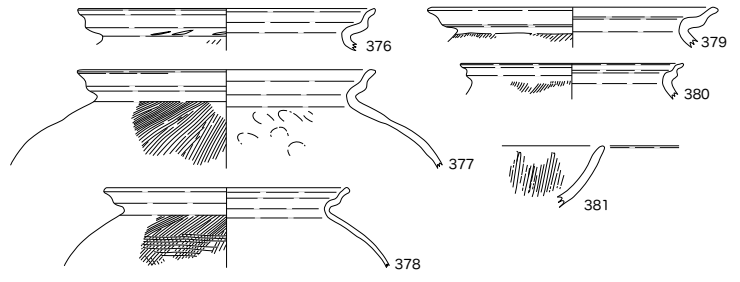


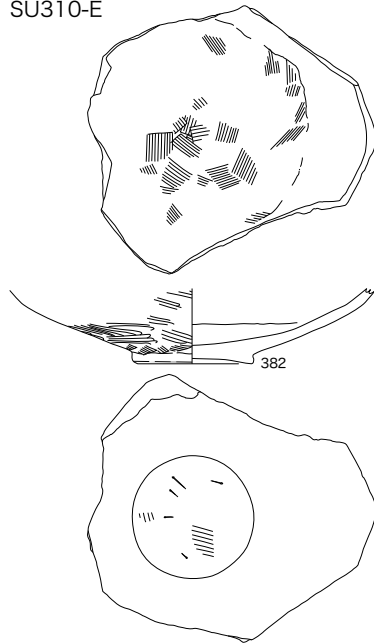
図 3-42 07D 区遺構内出土遺物 (5)

07D 区
SU310-C

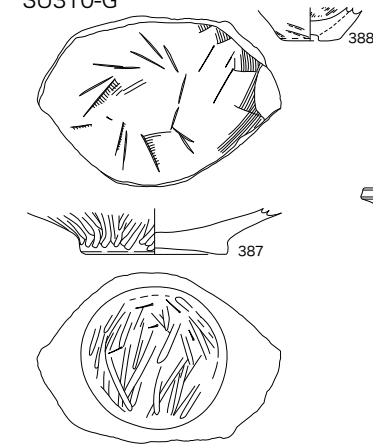
SU310-D



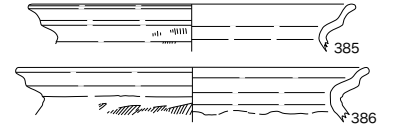
SU310-E



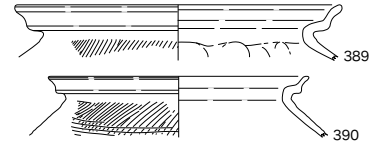
SU310-G



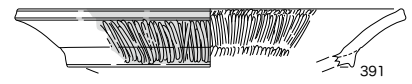
SU310-F



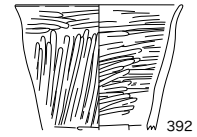
SU310-I



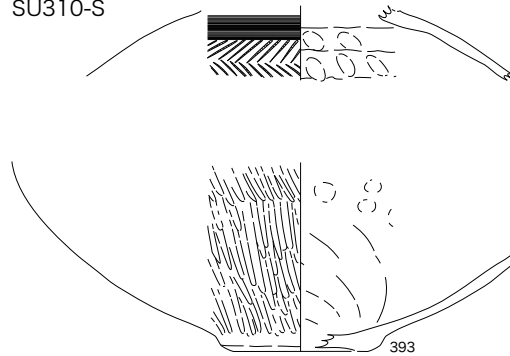
SU310-O



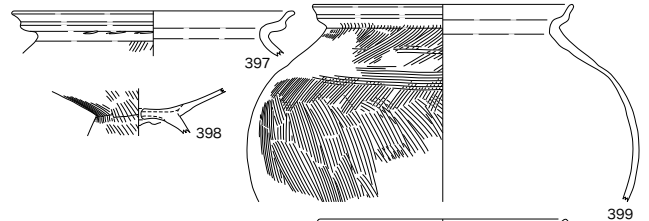
SU310-Q



SU310-S



SU310-U



SU310-X

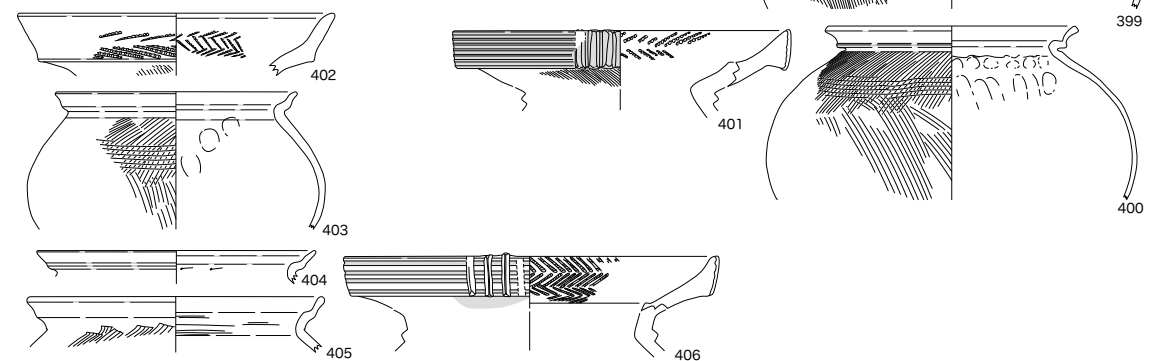
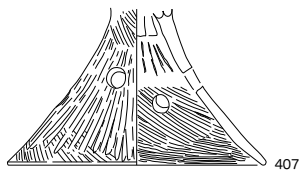
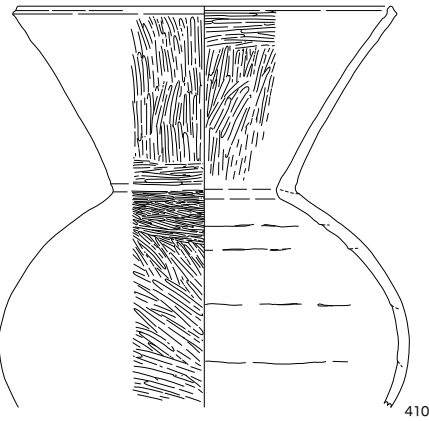
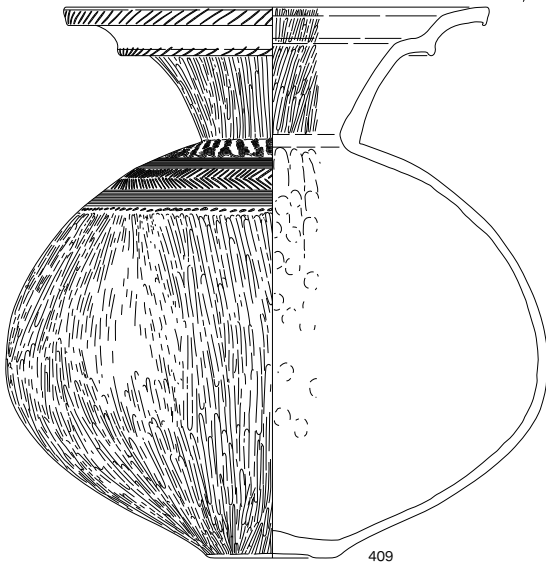
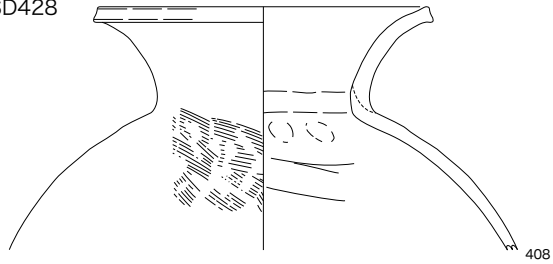


図 3-43 07D 区遺構内出土遺物 (6)

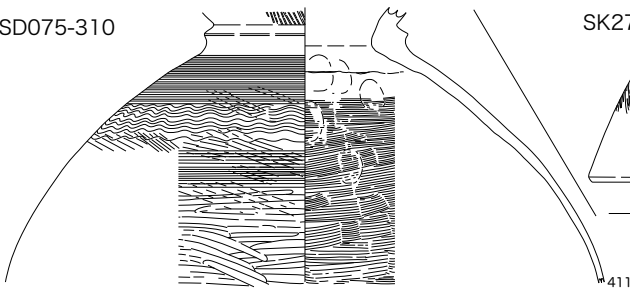
SU310-SP375



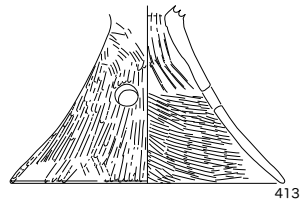
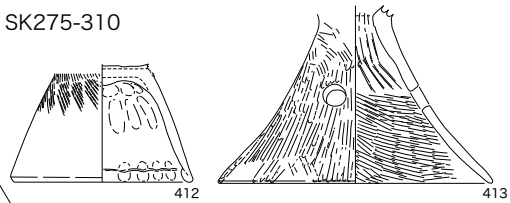
SU310-SD428



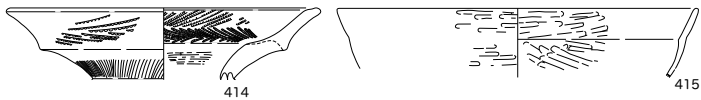
SD075-310



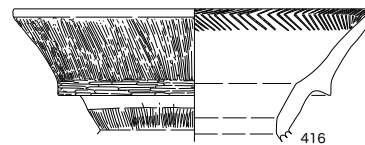
SK275-310



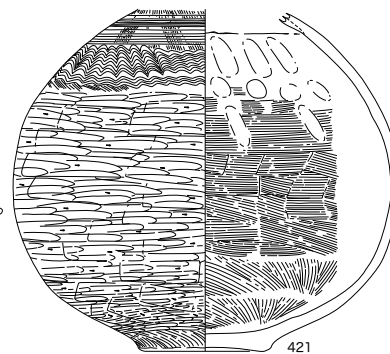
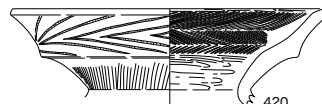
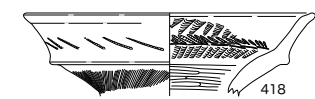
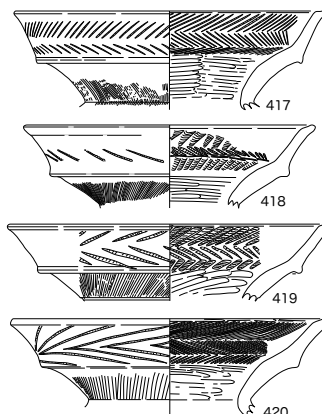
SD075



SD075-SK275



SK275 (SU310)



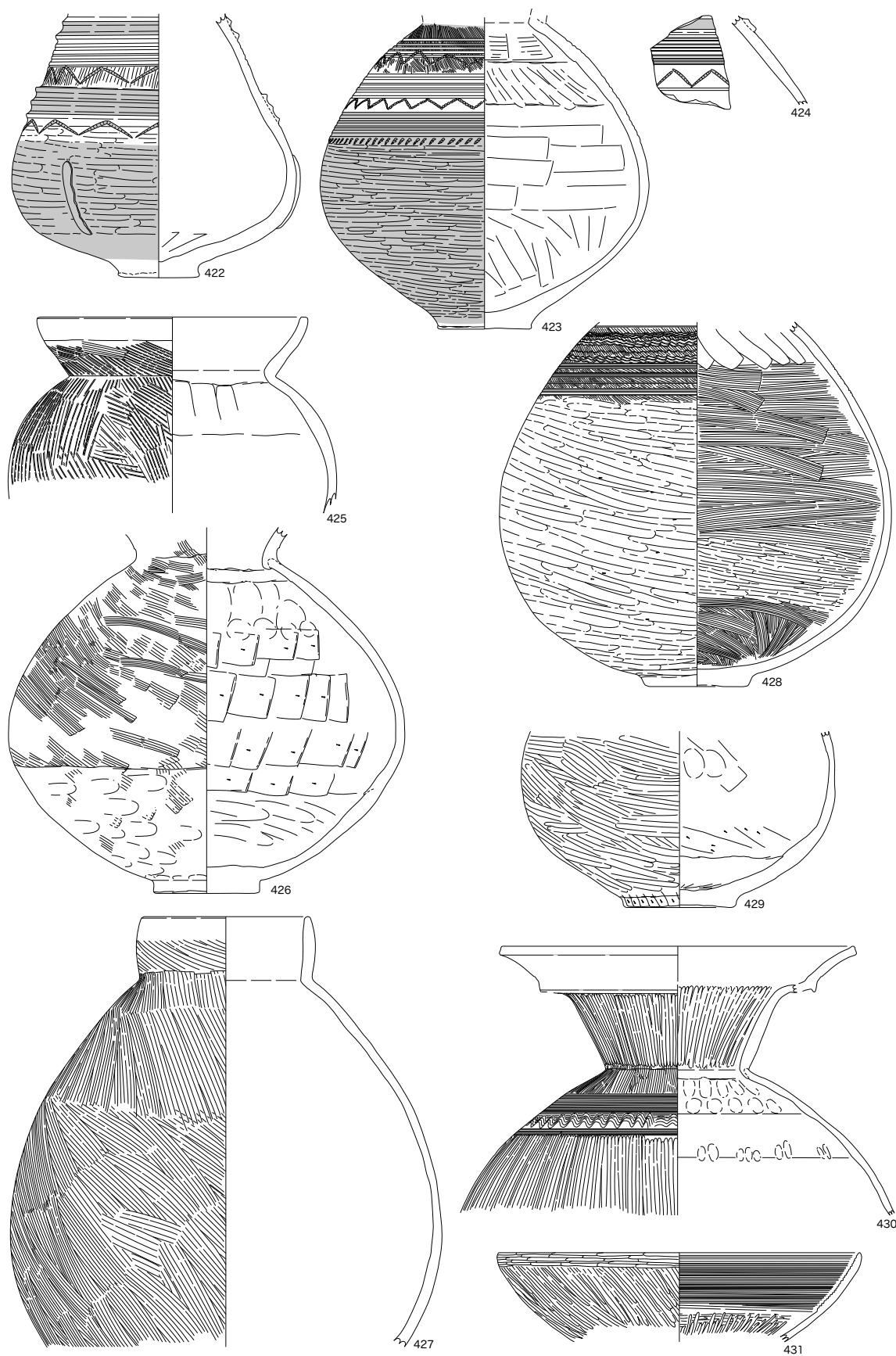


図 3-45 07D 区遺構内出土遺物 (8) 複数以降にまたがって接合した土器

07D 区
SD312

SK320

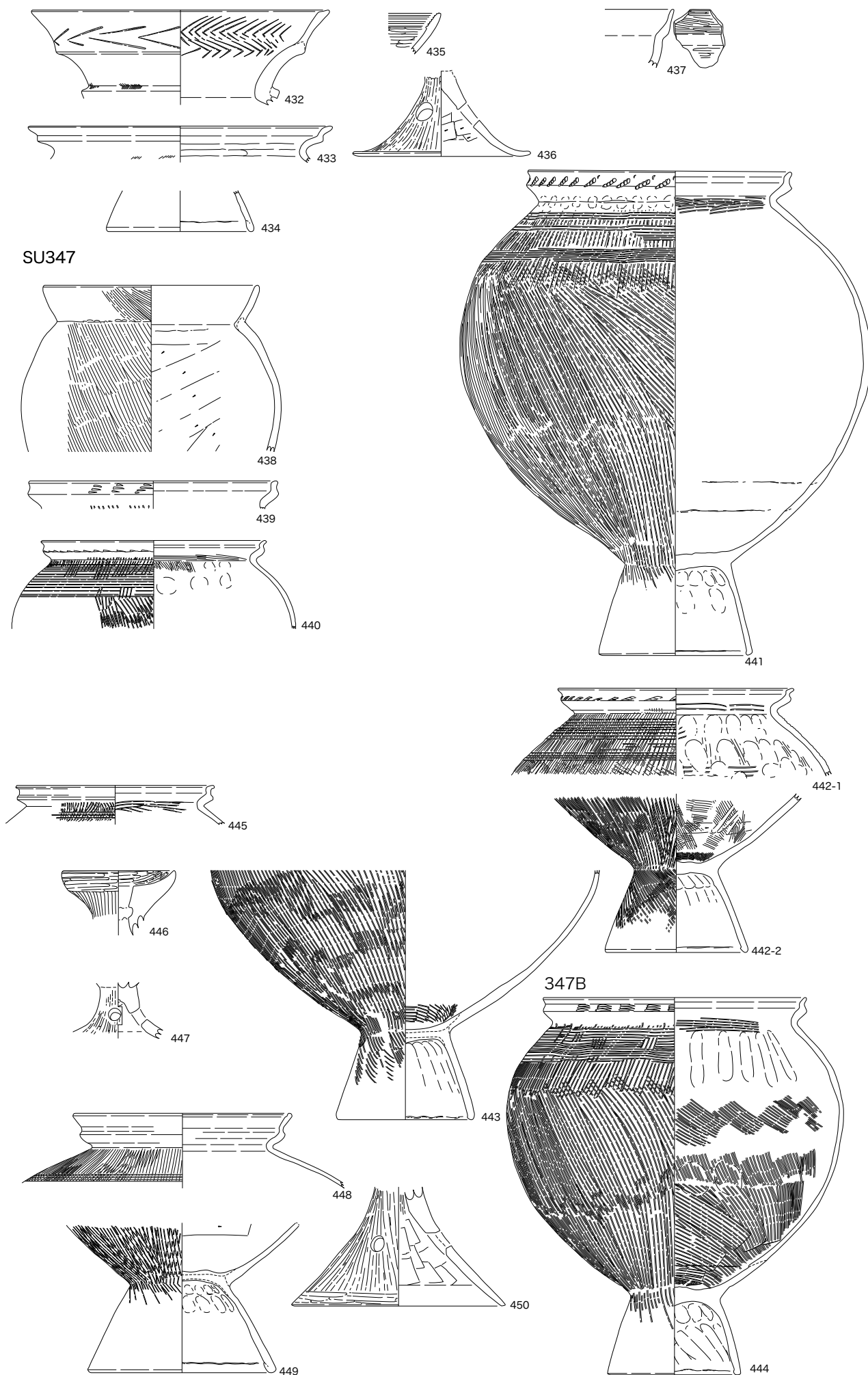
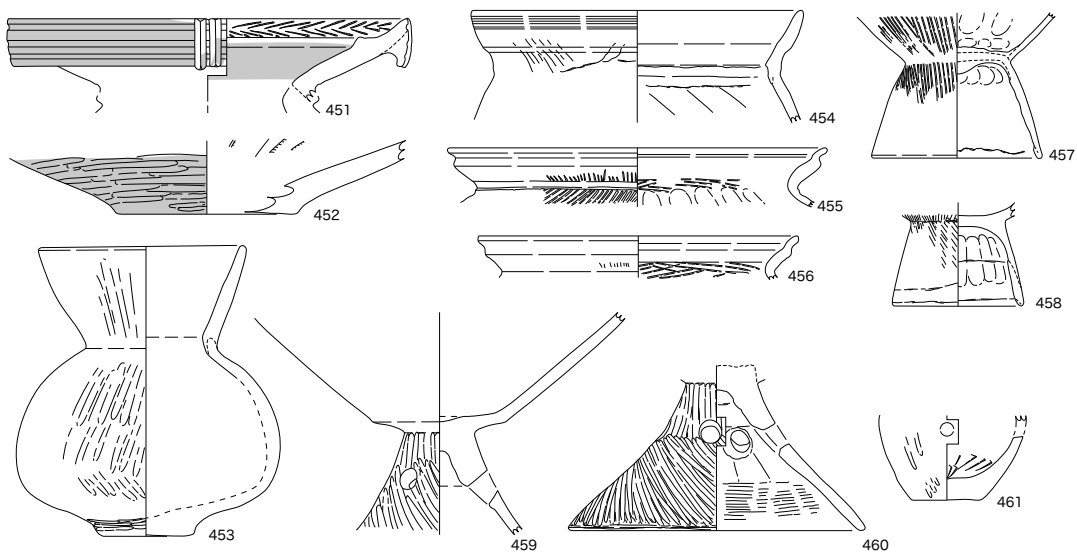
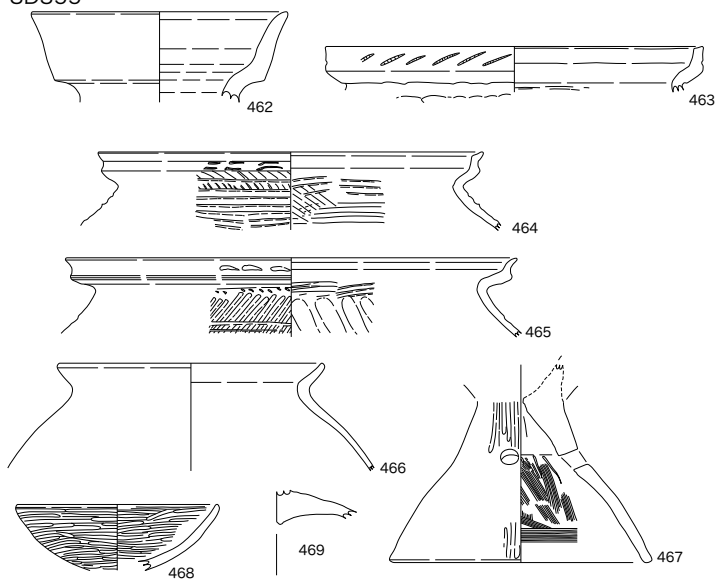


図 3-46 07D 区遺構内出土遺物 (9)

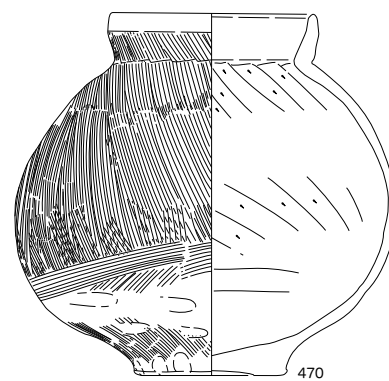
07D 区
SD371



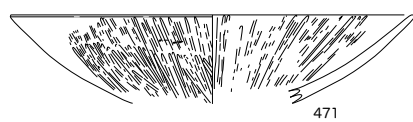
SD355



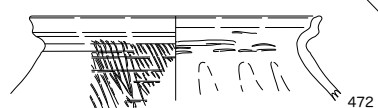
SK351-SD371



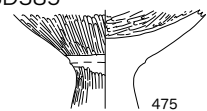
SP357



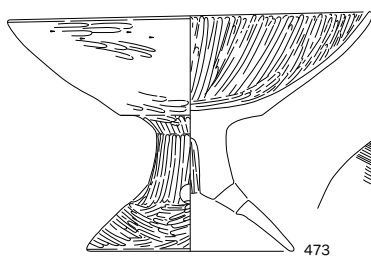
SK358



SD385



SD382



SD382-SD385

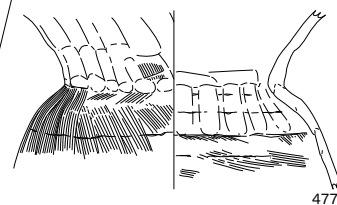
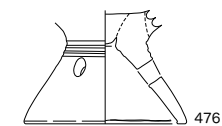
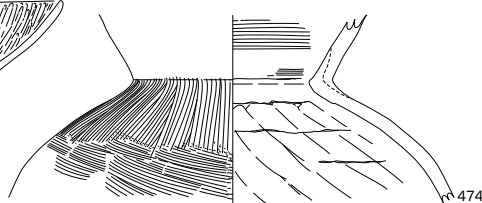
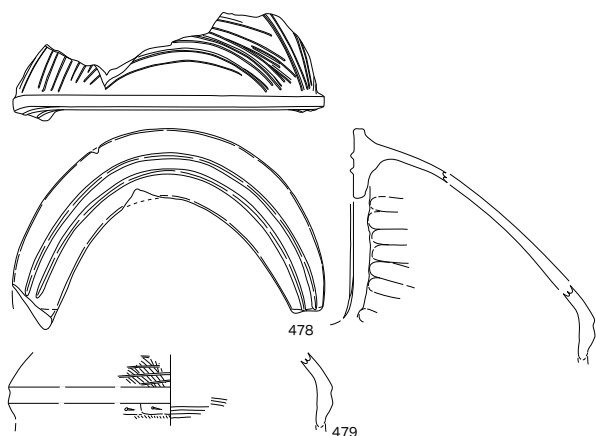
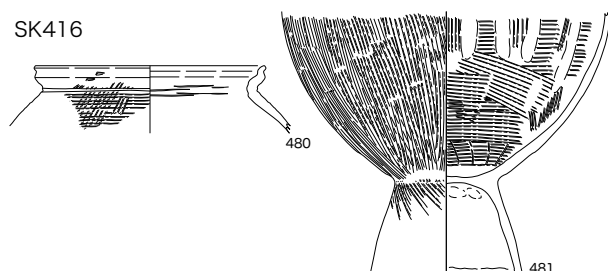


図 3-47 07D 区遺構内出土遺物 (10)

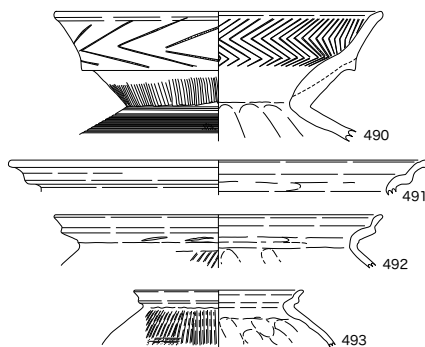
07D 区
SK394



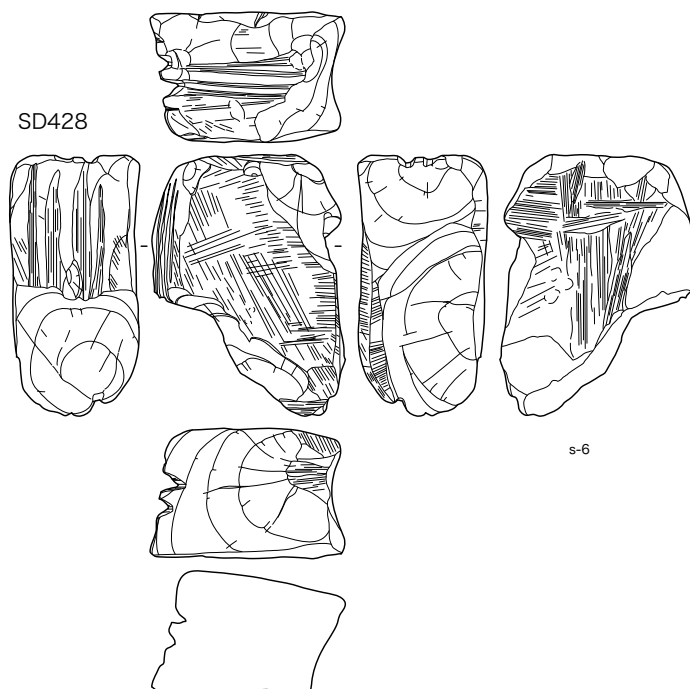
SK416



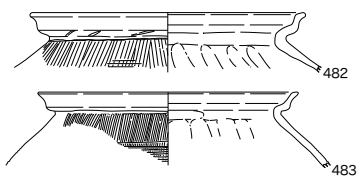
SD428



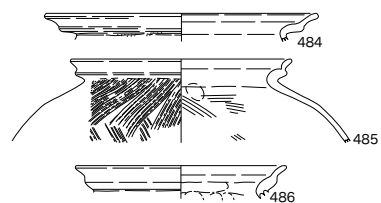
SD428



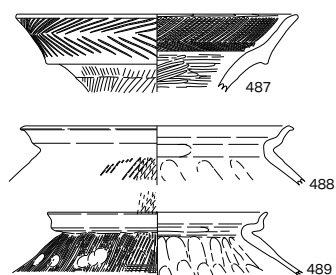
SK413



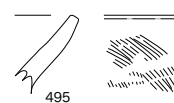
SX414



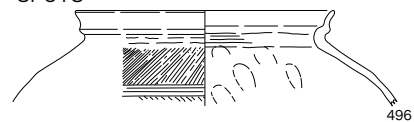
SK427



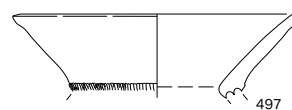
SD526



SP513



SK518



SK521

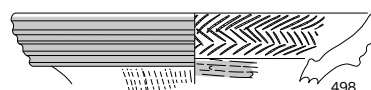


図 3-48 07D 区遺構内出土遺物 (11) (石器 1/3)

SU347 からは S 字甕 A2 類が出土した。この居住域では最古段階の遺物集積である。

この他、07D 区では弥生後期終末に遡る赤彩壺片が広く分布して出土した。

07D 区 T2 トレンチ出土の鉄族 **m-3** は、出土地点の対応関係から古墳前期の竪穴建物跡 07D-SB566 に帰属する。SB566 は重複関係の最後に近いが、鉄鏃の時期は下っても古墳 3 期となろう。

●遺構群の関係

遺構の重複関係と出土遺物からみて、最古段階の遺構はまず 07E-SB070・072 であり、07D-SD355・07E-SD068 に切られている。次ぎが 07D-SB398、07D-SD355 であり、東隣の 07D-SD371 がやや遅れて埋没を始めたと考えればこの時期に属す。07D-SB345・SB336・SD371 にまたがる土器 **222**、07D-SB336・SB491 にまたがる土器 **239** の存在も近時性を裏

07D 区 検 2

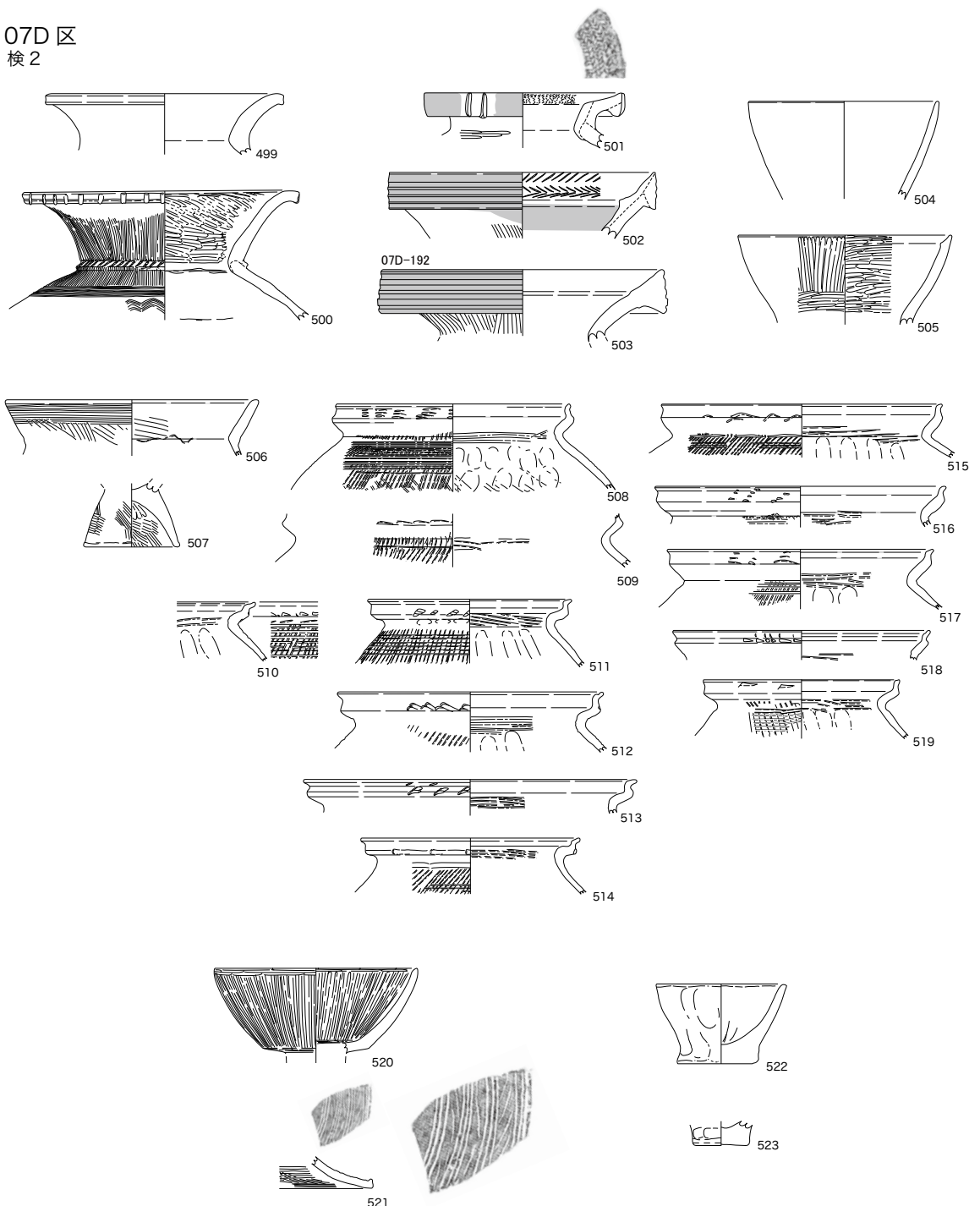


図 3-49 07D 区遺構外出土遺物 (1)

打ちする。

軸線を異にする 07E-SB070・072 が 07D-SD355・07E-SD068 に切られるのに対して、それ以後の遺構群は重複関係にある 07D-SB350 を含めて、方位のわずかなばらつきをもちながら基本的には同じ軸線を共有する関係が溝掘削によって生まれていることは、そこに面期があることを示している。

07D 区

検 2

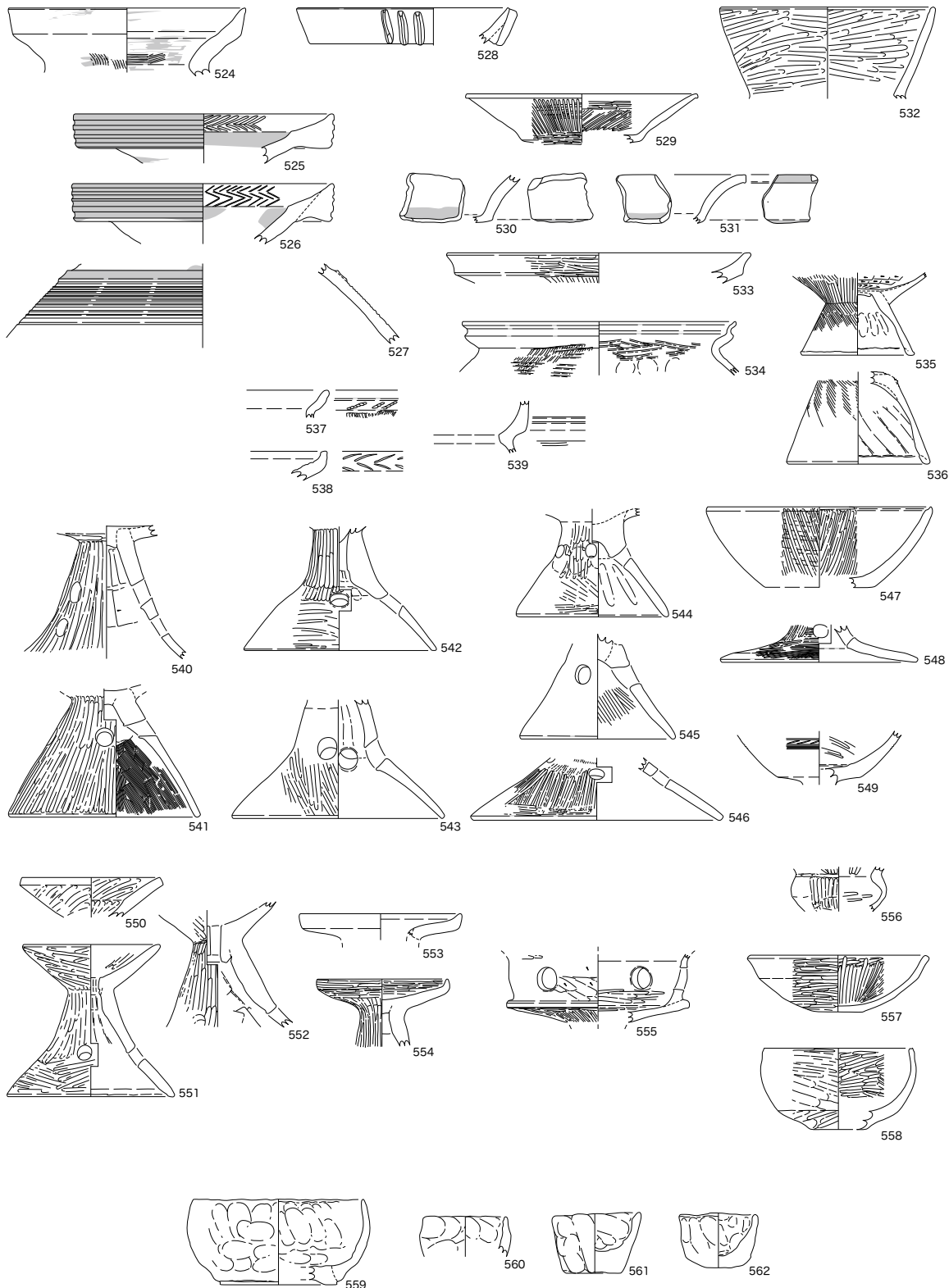
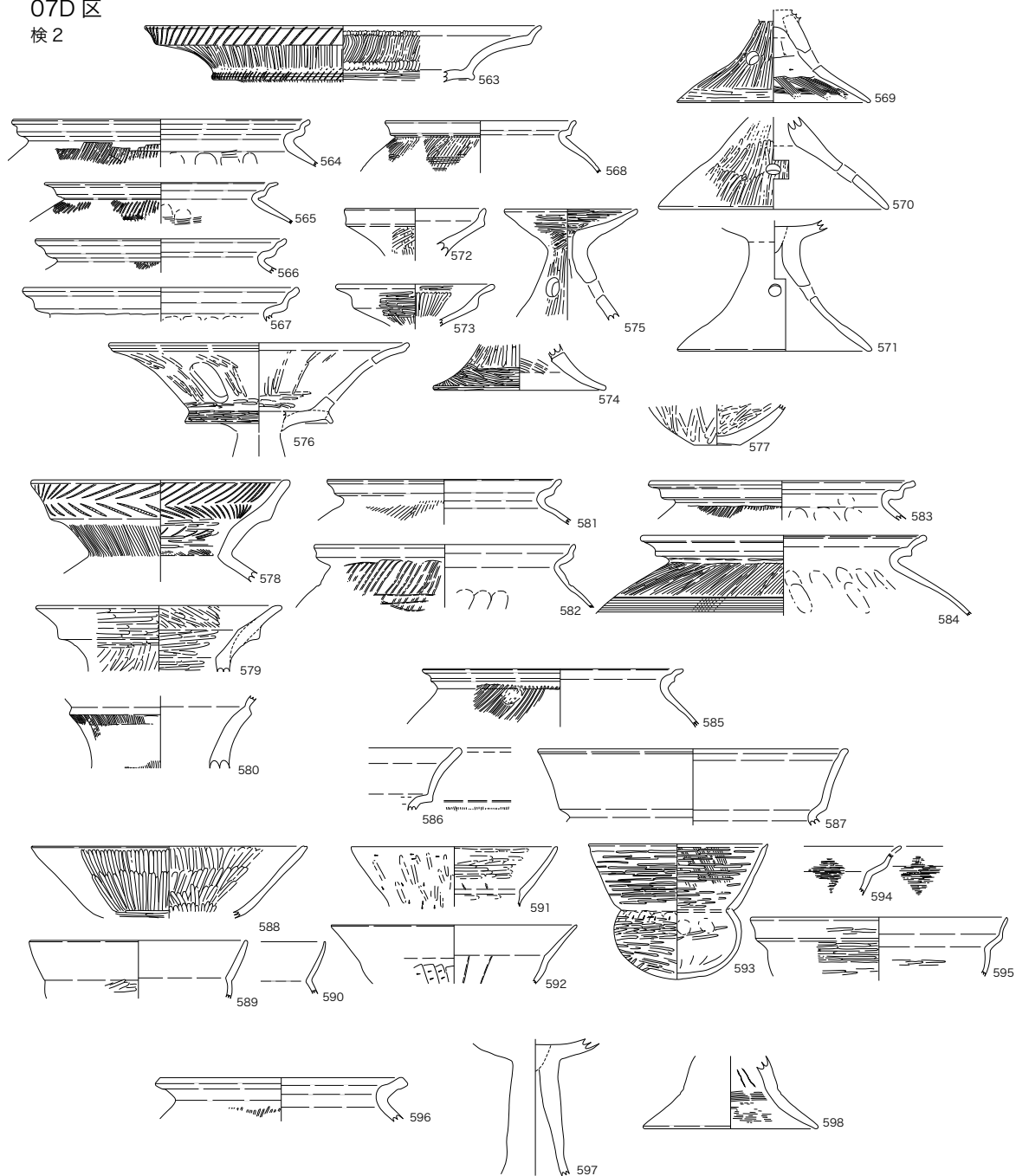


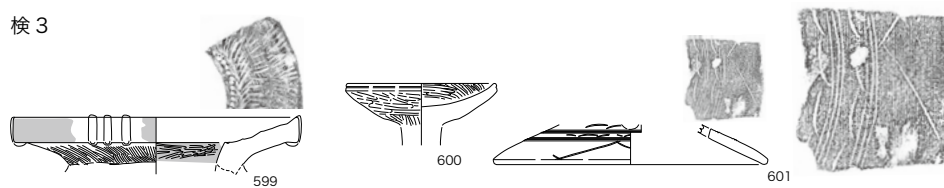
図 3-50 07D 区遺構外出土遺物 (2) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2)

07D 区

検 2



検 3



検 4

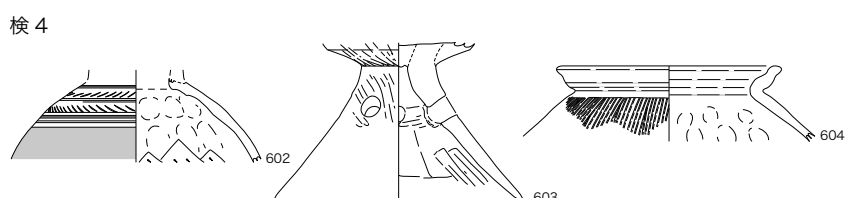
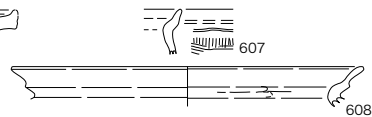


図 3-51 07D 区遺構外出土遺物 (3)

07D 区
SK041

SK063

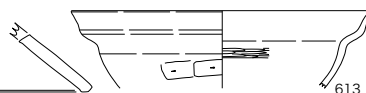
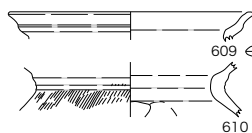
SK073



SK093

SK182

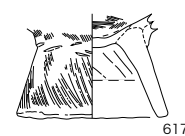
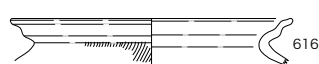
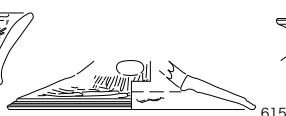
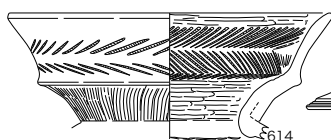
SK139



SD197

SK210

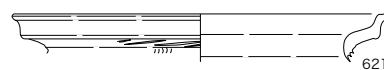
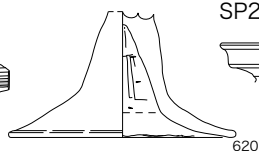
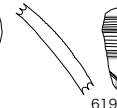
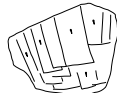
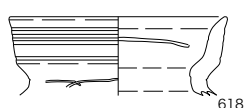
SD216



SD219

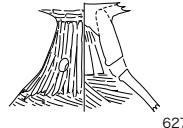
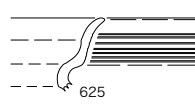
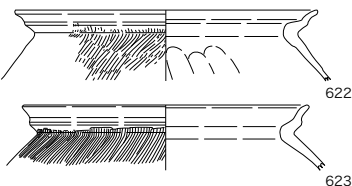
NR225

SP233



SX261

SB300



NR138

SP311

SD409

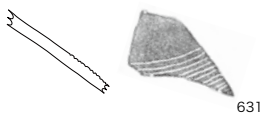
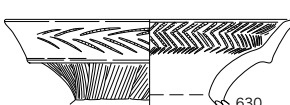
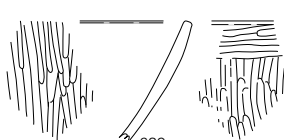
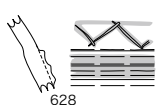


図 3-52 07D 区遺構外出土遺物 (4)

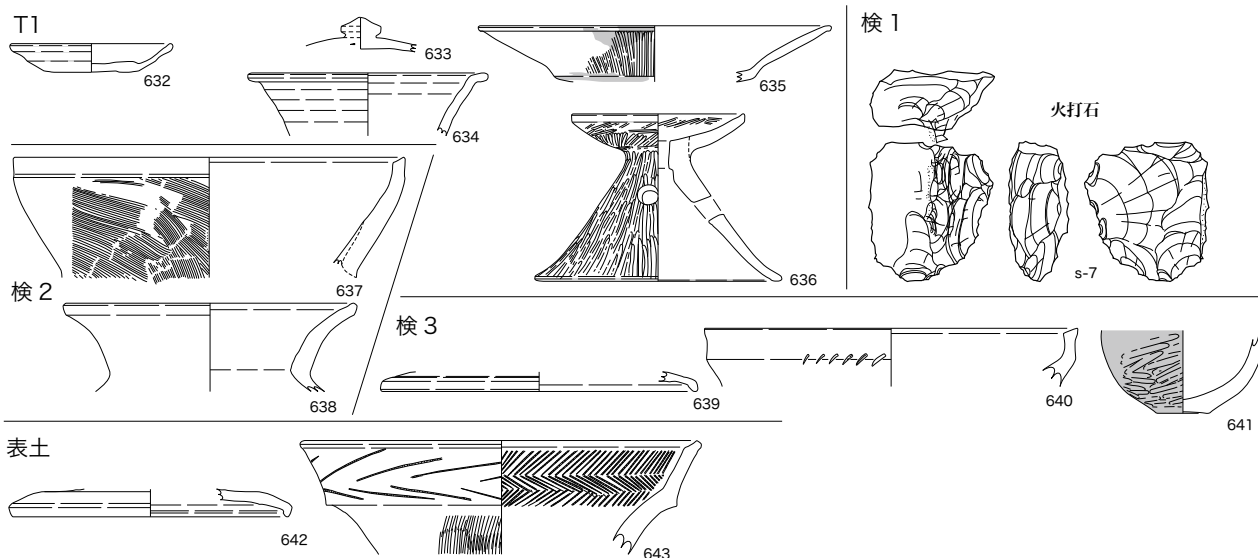
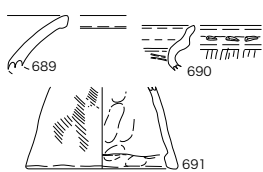


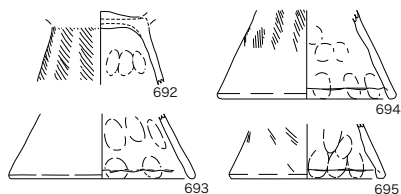
図 3-53 07E 区遺構外出土遺物 (1) (石器 1/3)

07E 区
SB070

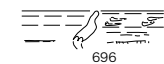
SB072



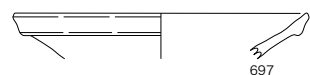
SB073



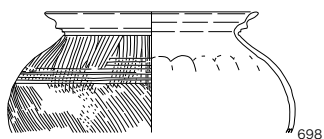
SB076



SD009



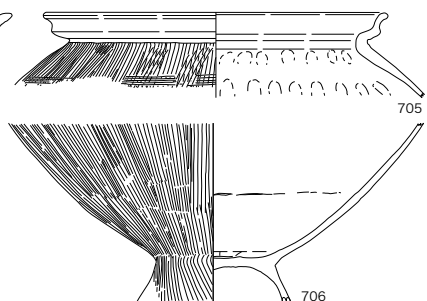
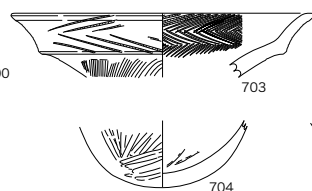
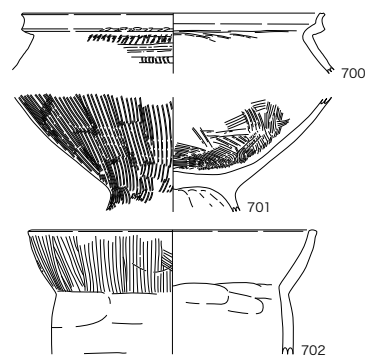
SD44



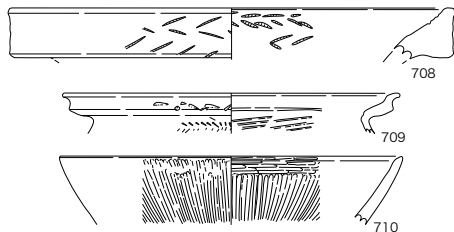
SD055



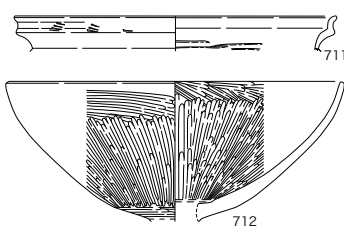
SD047



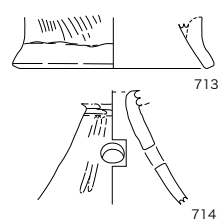
SD062



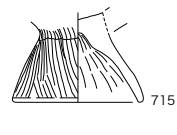
SD068



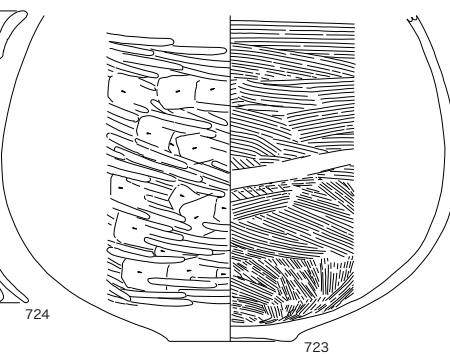
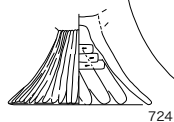
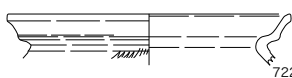
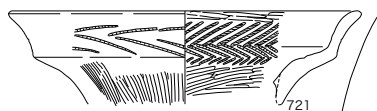
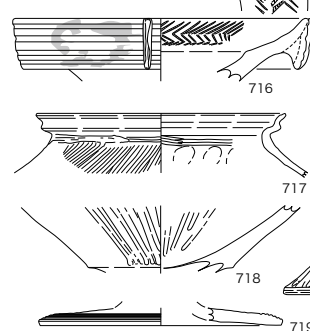
SD071

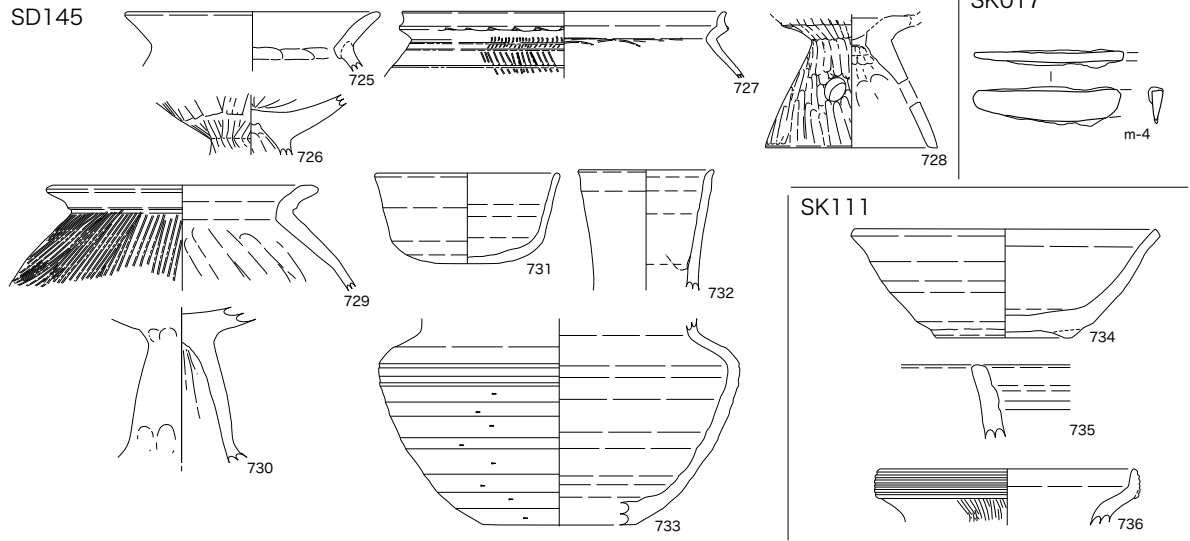


SD084



SD086



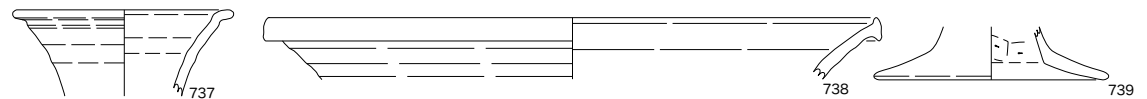
07E 区
SD145

SK017

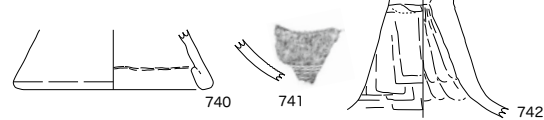
m-4

SK111

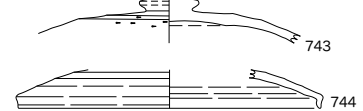
SK115



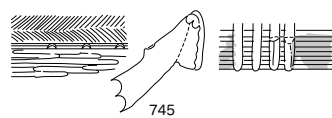
SK120



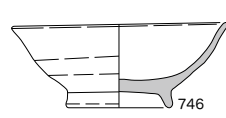
SK121



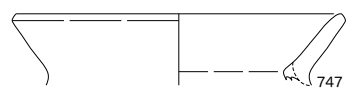
SK141



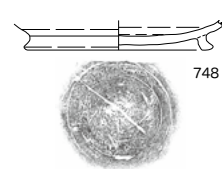
SK146



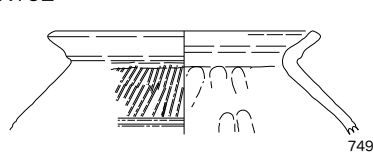
SK147



SK150



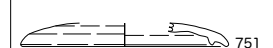
SK152



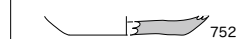
ST015



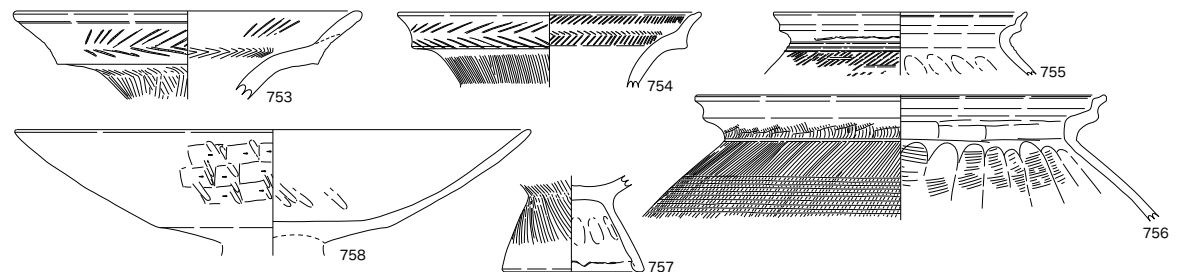
ST036



ST104



SU044



NR024

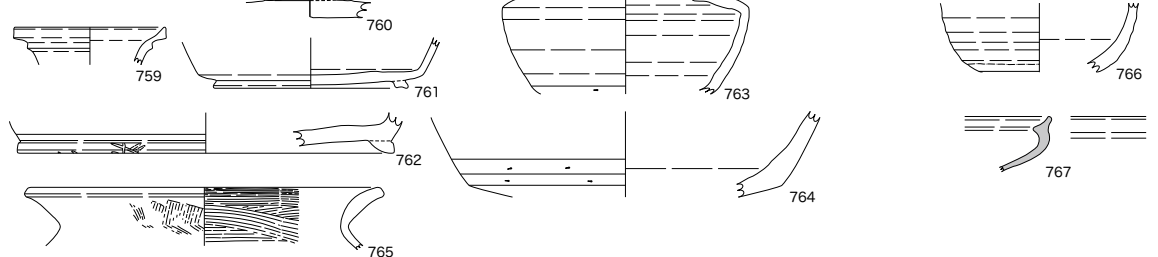


図 3-56 07E 区遺構内出土遺物 (3) (土錘 1/3・鉄器 1/3)

建物の軸線が基準ではなく、並行する2条の溝が基準になるとすれば、この両溝の性格とは何であろう。両溝のうち、建物群側は深く、河道側は浅くてやや埋没が遅れる。東側の溝も2条単位のようにあり、さらにその後も居住域が幅20mの範囲に収まって東側へ展開しないにもかかわらず溝は掘削され続けている点、杭群が無いことを重視すると、2条の溝間は「堤」ではなく「道」であった可能性が高い。旧地表の傾斜変換点は視覚的にも明確であり、そのことも継続した理由かもしれない。ここは、居住域の縁辺であったとしても、一種、街村的ではある。

そして、07D-SD312・07E-SD094は洪水砂で埋没して最終段階を迎える。後述する05B区、04A区を含めて遺跡の変遷に、ひいては社会にも関わる自然の脅威であったろう。



図 3-57 07D 区古墳前期最古段階の遺構群プラン 1/200

d. 縄文晩期～弥生中期の遺構と遺物

●概要

4面は、07D区では上面に大きな起伏があり、07E区や09区では下面で不定形な落ち込みを検出した。明らかに遺物が伴うものはなく、通常的人為的遺構の様相は窺えない。

このうち、07E区ではSD142が4面を削るように形成されていたが、07D区の延長部は不明で、南壁土層セクションでも確認できていない。おそらくは表層水の流下に伴うもので、部分的に深く掘り込んだ痕跡なのであろう。SD記号は付したが、自然流路であろう。

遺物は、ほとんどが黒色シルト層上部から出土し、縄文晩期前葉から弥生中期まで、ほとんど高度差はない。したがって、地表面の更新はなく、同一面の時期が長期にわたって続いたのであろう。濃尾平野北部の基本的様相であり、人為性の薄い遺構の共存も同様である。

●遺物の特徴

出土状況

ここでは、遺物の出土状況について散布図を基に報告する。出土遺物には土器と石器がある。

遺物の出土は、07D・07E・09区のなかで、特に07D区中央部とそれに接する07E区北端に集中する範囲が認められる（以下、遺物集中域と呼称する）。この範囲は、現況では25×20mで、より北側の調査区外に向って伸びているものと考えられる。07E区を中心に、調査では、多くの落ち込みが検出されているものの、07E区SX160付近を中心に遺物が出土しているようで、落ち込みと遺物出土との相関関係は高くないようである（図3-62）。遺物集中域南西端付近では、微細な炭化物の散布が、土器776（番号のみは遺物番号を示す。以下同じ。）などとともに認められた。遺物と出土層との関係では、黒色土上面からの出土が多く、一部黒色土内からの出土もあった。

土器について分布を見ていくと、上述した遺物集中域とそれ以外との差が顕著に認められる（図3-63）。第1点目には遺物の帰属時期という点であり、第2点目には遺物の残存状況という点である。遺物の帰属時期については、遺物集中域では、後述するように晩期前半期に収まる一方、それ以外では、後期後葉～弥生前期までの遺物の出土が散在している状況である。遺物の残存状況については、遺物集中域の土器は、細片もあるが、一辺5cm以上を有する土器片の出土が多く、磨滅の程度も低い。一方で、遺物集中域外の土器片

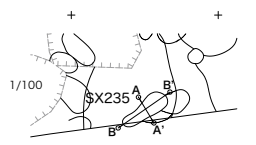
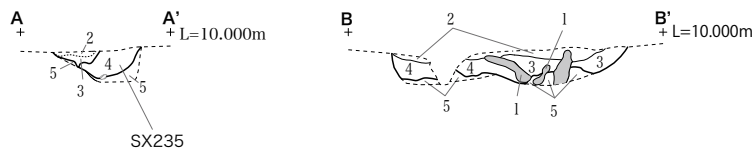


図 3-58 07E-SX162



図 3-59 07E-SX235

SX253 土層セクション 1/50 〰植生痕



1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト 植生痕
2. 10YR2/2 黒褐色土(微粒の炭化物含む)
3. 10YR2/2 黒褐色シルト(微粒の炭化物含む)
4. 10YR2/3 黒褐色シルト(微粒の炭化物含む)
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質極細粒砂

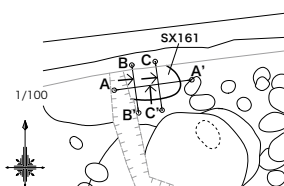
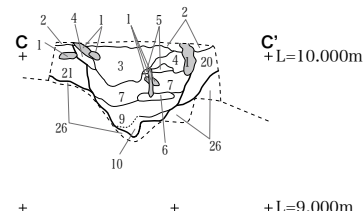
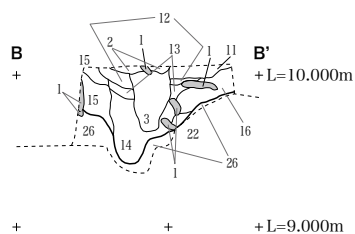
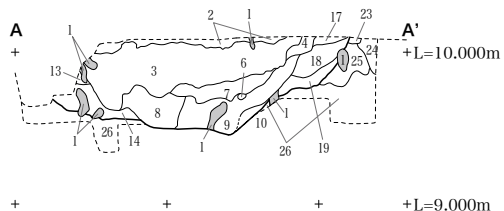


SX161 土層セクション 1/50 〰植生痕

SX161-Aライン

SX161-Bライン

SX161-Cライン



1. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR5/3 において黄褐色細粒砂 斑入) 植生痕
2. 10YR3/3 暗褐色シルト(10YR4/4 褐色シルト含む 微粒の炭化物含む)
3. 10YR3/3 暗褐色シルト(微粒の炭化物含む)
4. 10YR2/1 黒色砂質シルト
5. 10YR2/2 黒褐色土
6. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
7. 10YR2/2 黒褐色土(微粒の炭化物含む)
8. 10YR2/3 黒褐色土(10YR5/3 において黄褐色細粒砂含む)
9. 10YR2/2 黒褐色土(微粒の炭化物含む 7に比べてやや砂質強い)
10. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト(10YR5/3 において黄褐色細粒砂 斑入)
11. 10YR3/2 黒褐色シルト(微粒の炭化物含む)
12. 10YR3/2 黒褐色シルト(10YR5/3 において黄褐色細粒砂 斑入)
13. 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR2/2 黒褐色シルト 斑入)
14. 10YR2/3 黒褐色土(微粒の炭化物含む)
15. 16と同一層
16. 21と同一層
17. 10YR2/3 黒褐色粘質土
18. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト(10YR4/4 褐色シルト 斑入)
19. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR2/1 黒色土 斑入)
20. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(26層 斑入)
21. 10YR2/3 黒褐色シルト(微粒の炭化物含む 26層 斑入)
22. 10YR2/3 黒褐色シルト(10YR4/3 において黄褐色シルト 斑入)
23. 10YR2/2 黒褐色土(10YR4/3 において黄褐色細粒砂 斑入)
24. 北壁138層に対応
25. 10YR3/2 黒褐色極細粒砂(10YR5/3 において黄褐色細粒砂含む)
26. 10YR5/3 において黄褐色細粒砂 地山

図 3-60 07D・E区黒色シルト上面遺構プラン 1/200・個別遺構土層セクション 1/100

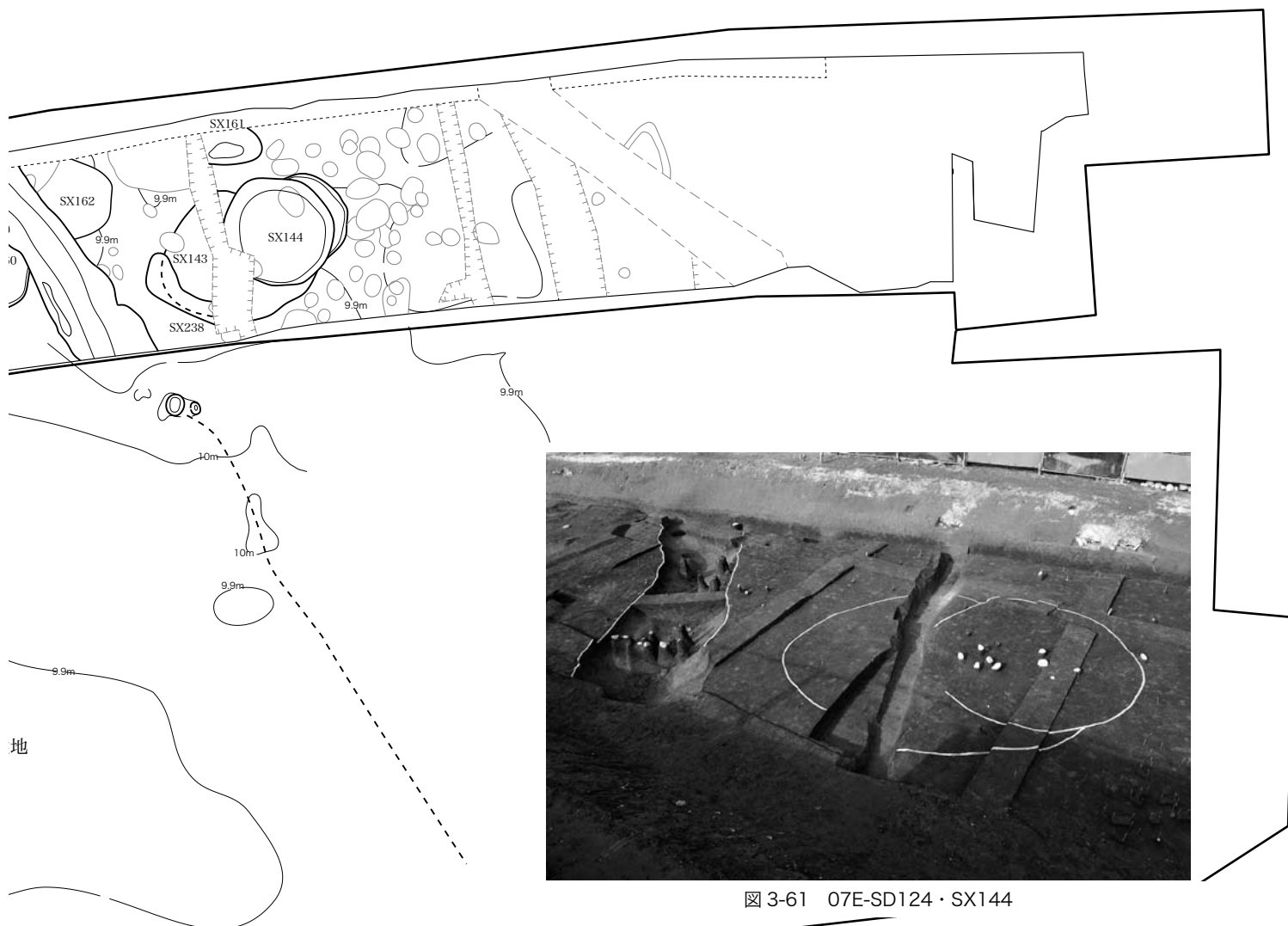
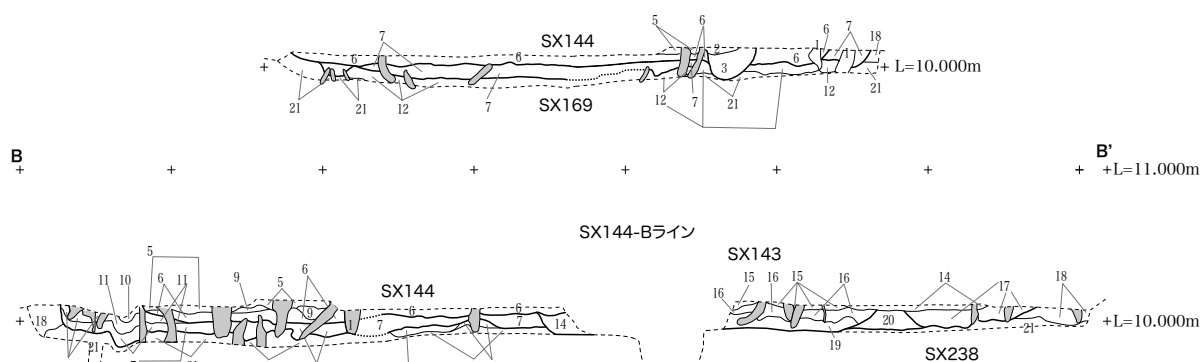
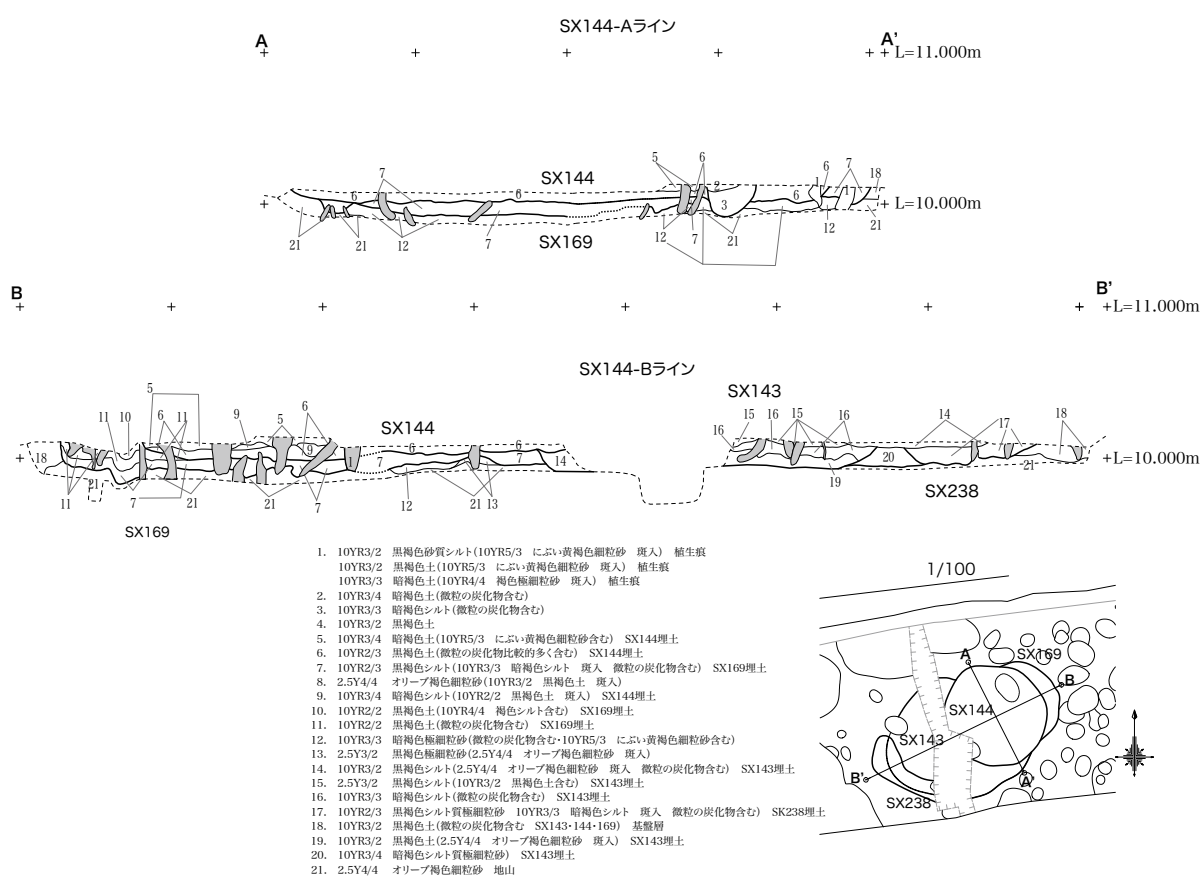
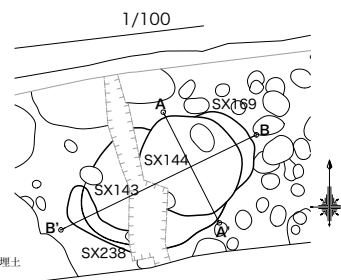


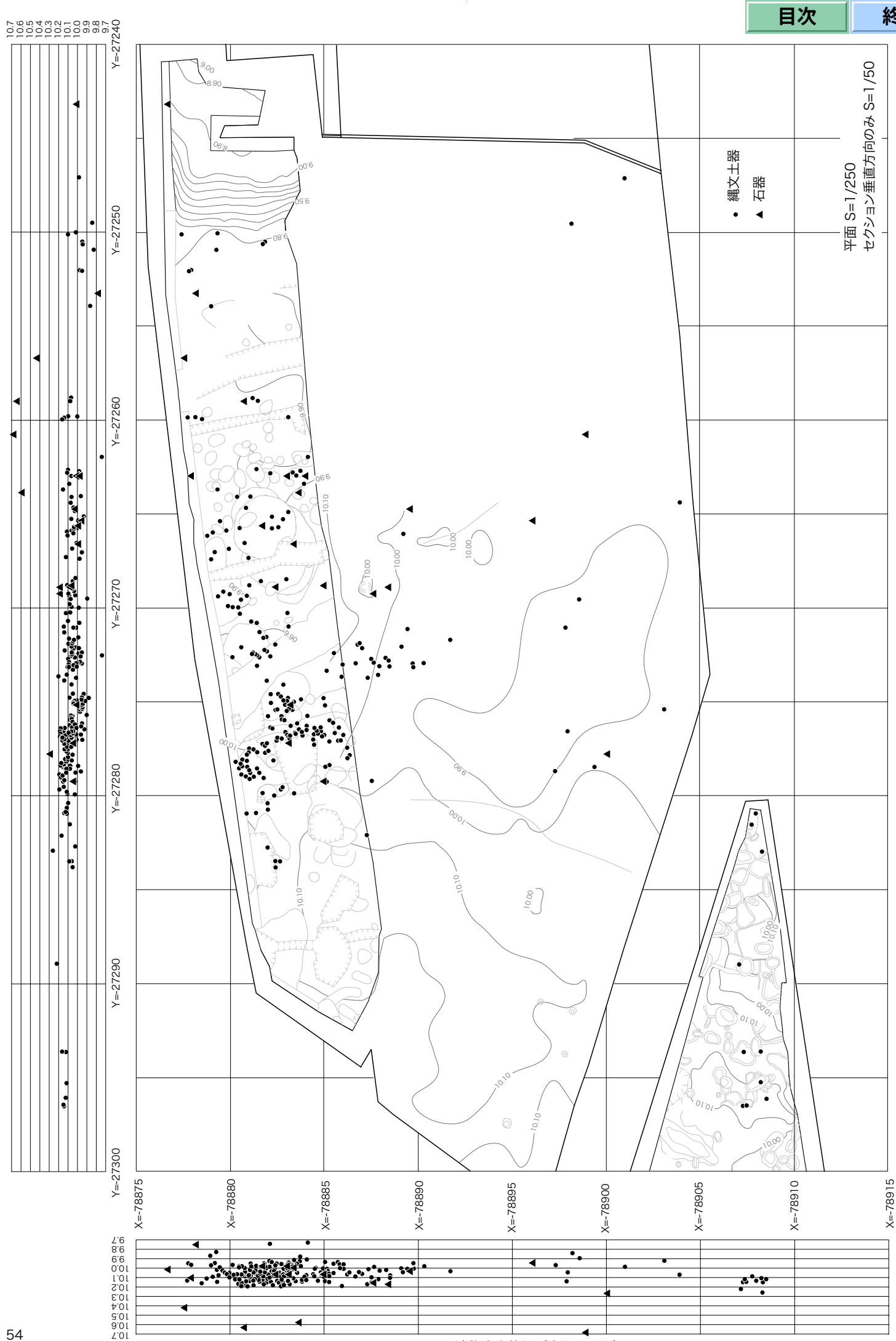
图 3-61 07E-SD124 · SX144

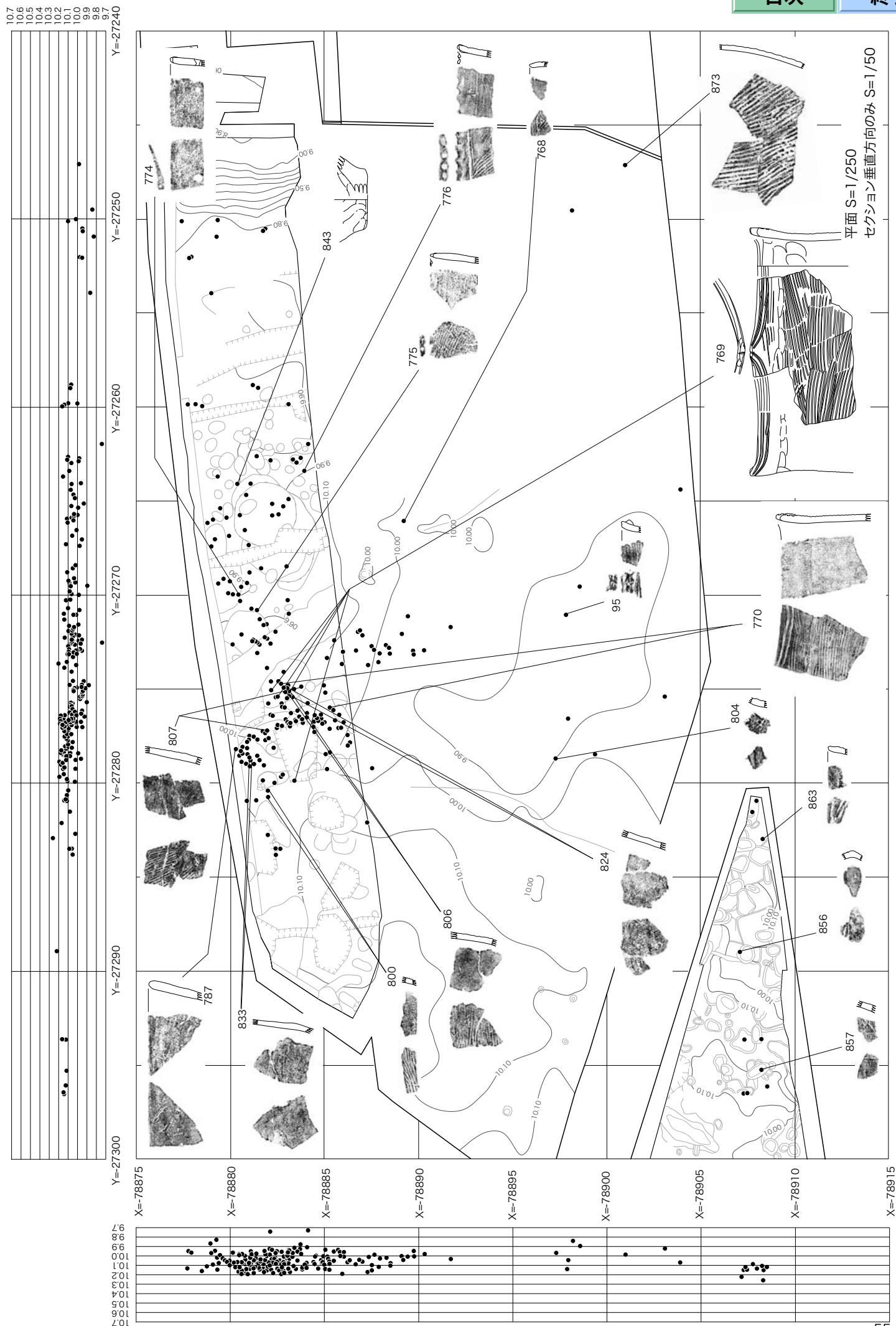
SX144 他土層セクション 1/50 植生痕



- | | | |
|-----|---------|---|
| 1. | 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト(10YR5/3) におよぶ黄褐色細粒砂 珉人 植生痕 |
| 2. | 10YR3/2 | 黒褐色土(10YR5/3) におよぶ黄褐色細粒砂 珉人 植生痕 |
| 3. | 10YR3/4 | 暗褐色土(10YR4/4) 褐色極細粒砂 珉人 植生痕 |
| 4. | 10YR3/4 | 暗褐色土(微粒の炭化物含む) |
| 5. | 10YR3/2 | 黒褐色土 |
| 6. | 10YR3/2 | 暗褐色土(10YR5/3) におよぶ黄褐色細粒砂含む SX144埋土 |
| 7. | 10YR3/2 | 黒褐色土(微粒の炭化物含む)を含む SX144埋土 |
| 8. | 10YR3/4 | 黒褐色シルト(10YR3/3) 暗褐色細粒砂 珉人 微粒の炭化物含む SX169埋土 |
| 9. | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色細粒砂(10YR3/2) 黒褐色土 珉人 |
| 10. | 10YR3/4 | 暗褐色シルト(10YR2/2) 黒褐色土 SX144埋土 |
| 11. | 10YR2/2 | 黒褐色土(10YR4/4) 褐色シルトを含む SX169埋土 |
| 12. | 10YR2/2 | 黒褐色土(微粒の炭化物含む) SX169埋土 |
| 13. | 10YR3/2 | 暗褐色細粒砂(微粒の炭化物含む) 10YR5/3 におよぶ黄褐色細粒砂含む |
| 14. | 2.5Y3/2 | 黄褐色細粒砂(2.5Y4/4) オリーブ褐色細粒砂 珉人 |
| 15. | 10YR3/2 | 黒褐色シルト(2.5Y4/4) オリーブ褐色細粒砂 珉人 微粒の炭化物含む SX143埋土 |
| 16. | 2.5Y3/2 | 黒褐色シルト(10YR3/2) 黒褐色土を含む SX143埋土 |
| 17. | 10YR3/2 | 暗褐色シルト(微粒の炭化物含む) SX143埋土 |
| 18. | 10YR3/2 | 黒褐色土質極細粒砂 10YR3/3 暗褐色細粒砂 珉人 微粒の炭化物含む SX283埋土 |
| 19. | 10YR3/2 | 黒褐色土(微粒の炭化物含む) SX143-144-169) 基盤層 |
| 20. | 10YR3/2 | 黒褐色土(2.5Y4/4) オリーブ褐色細粒砂 珉人 SX143埋土 |
| 21. | 10YR3/4 | 暗褐色土質極細粒砂 SX143埋土 |
| 22. | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色細粒砂 地山 |







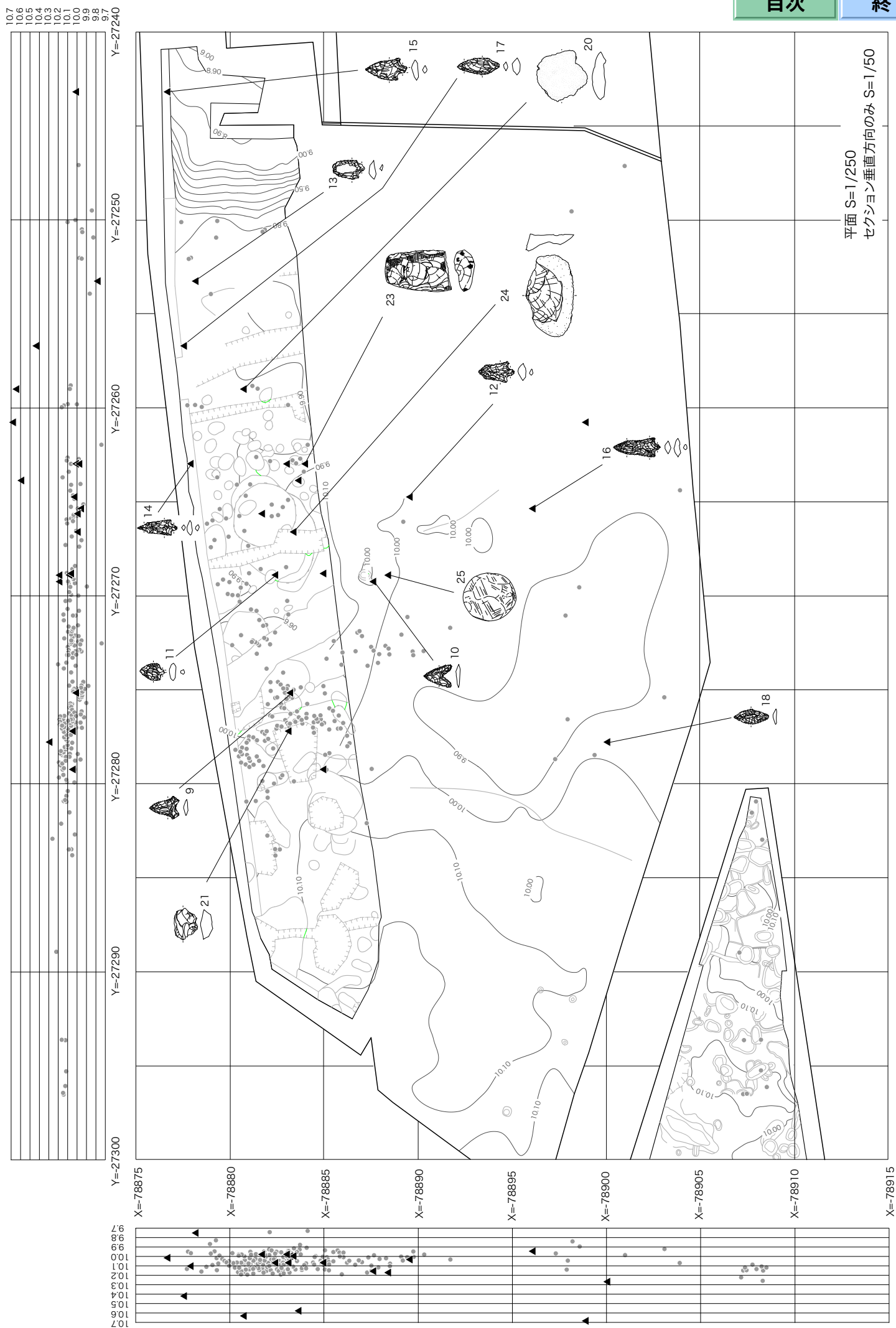


图 3-64 07D·E 区石器出土状况

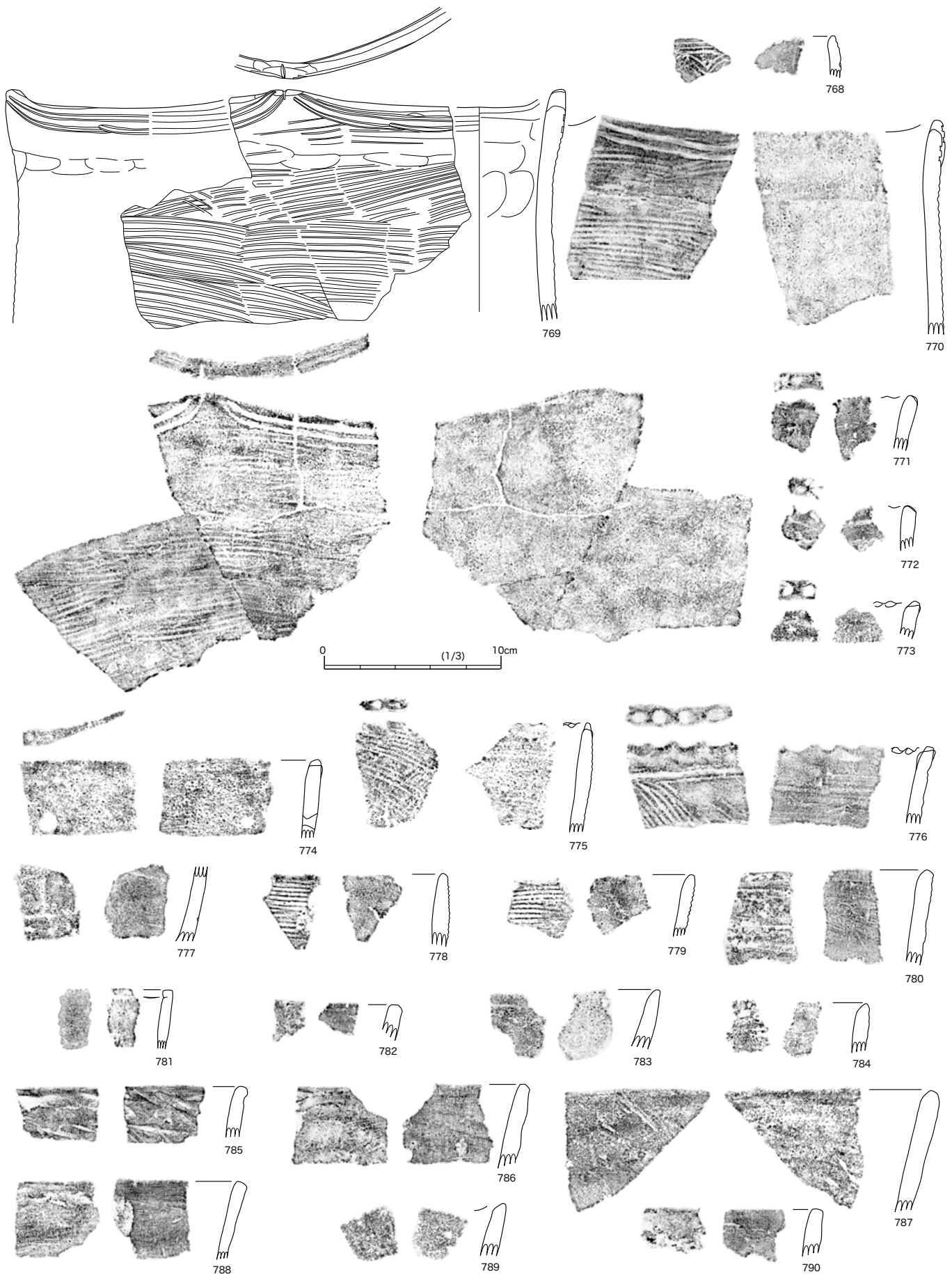


図 3-65 07D・E 区 4 面出土土器 (1)

は一部を除いて細片状態や、磨滅が著しいものが多い傾向にある。遺物集中域内の土器片では、この中で接合関係が認められる資料が5点ある。また、出土レベルをみると、遺物集中域では10.0～10.2mの範囲にほぼ収まっており、この点からもまとまりが認められる一群として捉

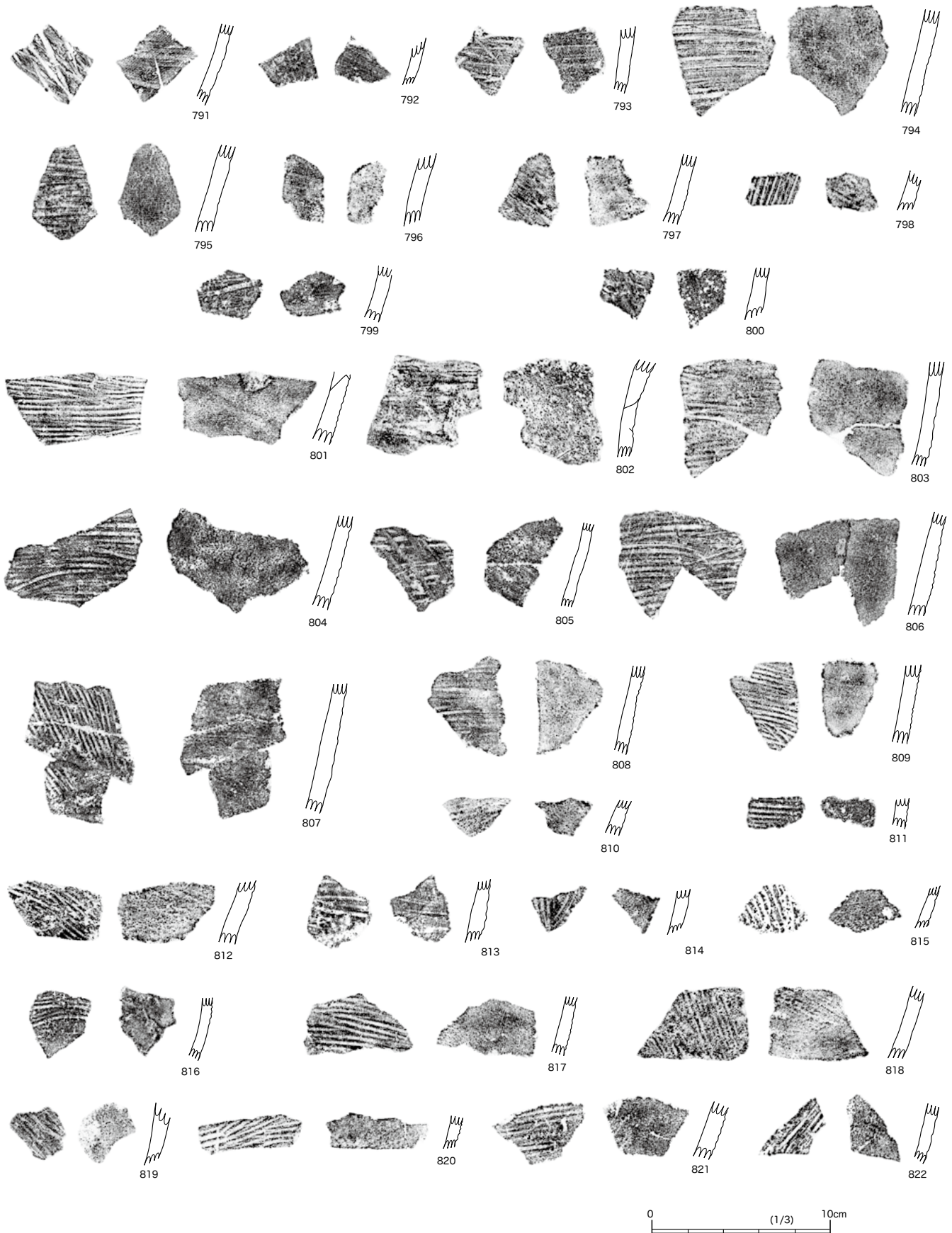


図 3-66 07D・E 区 4 面出土土器 (2)

えることができる。

石器の分布は、土器と比べて散漫な傾向がある（図 3-64）。一見すると土器の遺物集中域に重なってやや集中するように見られるが、出土レベルは土器とは一致しない。土器の遺物集中域に伴う石器としては、石鏃 8・剥片 20・打製石斧 22・刃器 23 や若干の微細剥片など、ごく限定的であると考えられる。

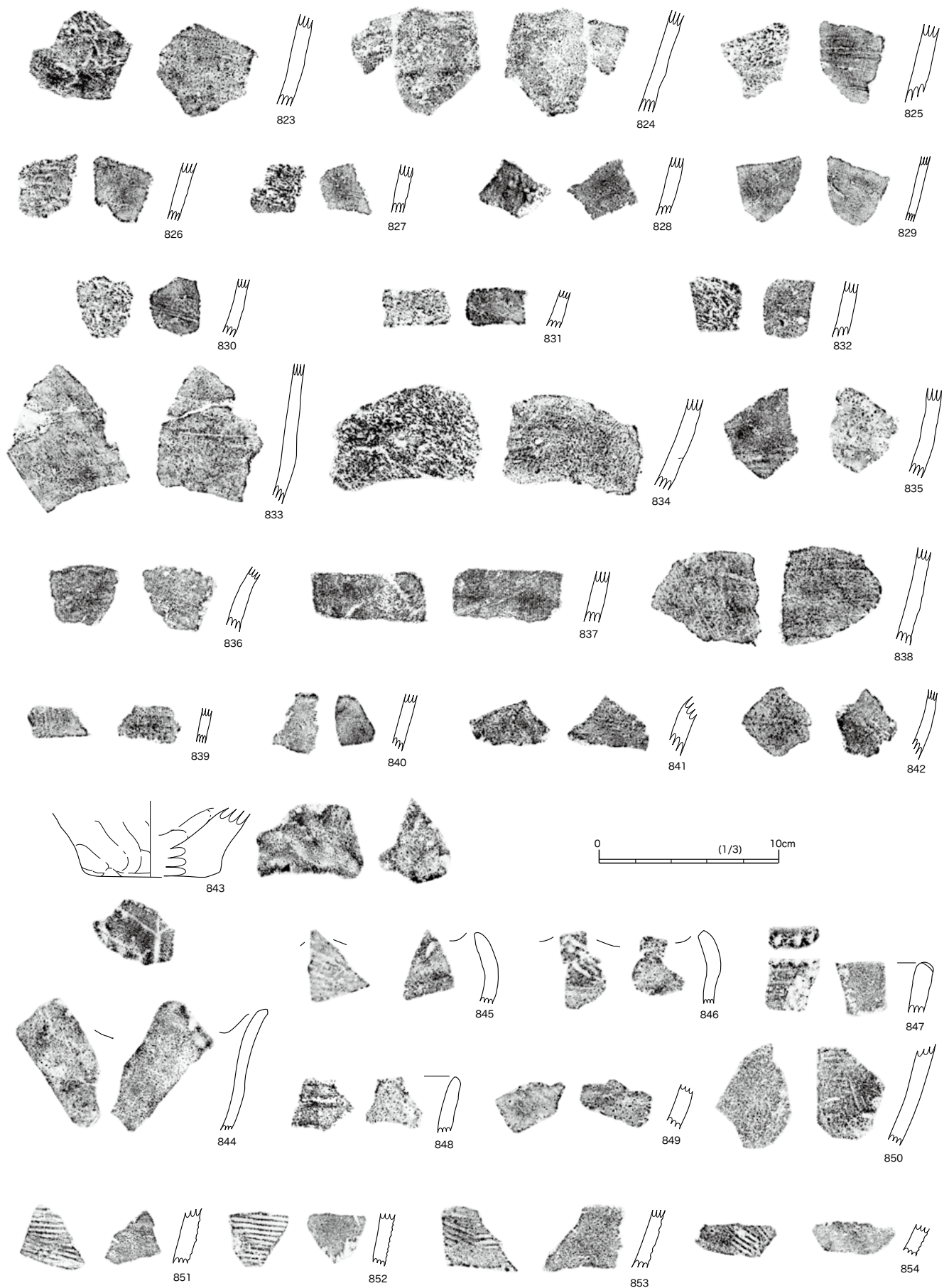


図 3-67 07D・E 区 4 面出土土器 (3)

土器 土器片は、計 236 点出土しており、遺物集中域からは 189 点出土している。器種はいずれも深鉢あるいは鉢と考えられる。今回、すべての土器片のなかから計 116 点を図化した。

768～843 は、遺物集中域から出土した土器群で、858～861 もその可能性が高い。有文土器と呼ばれるものは 7 点 (768～770・776・777・784)、口縁端部上面に刻目・押圧・

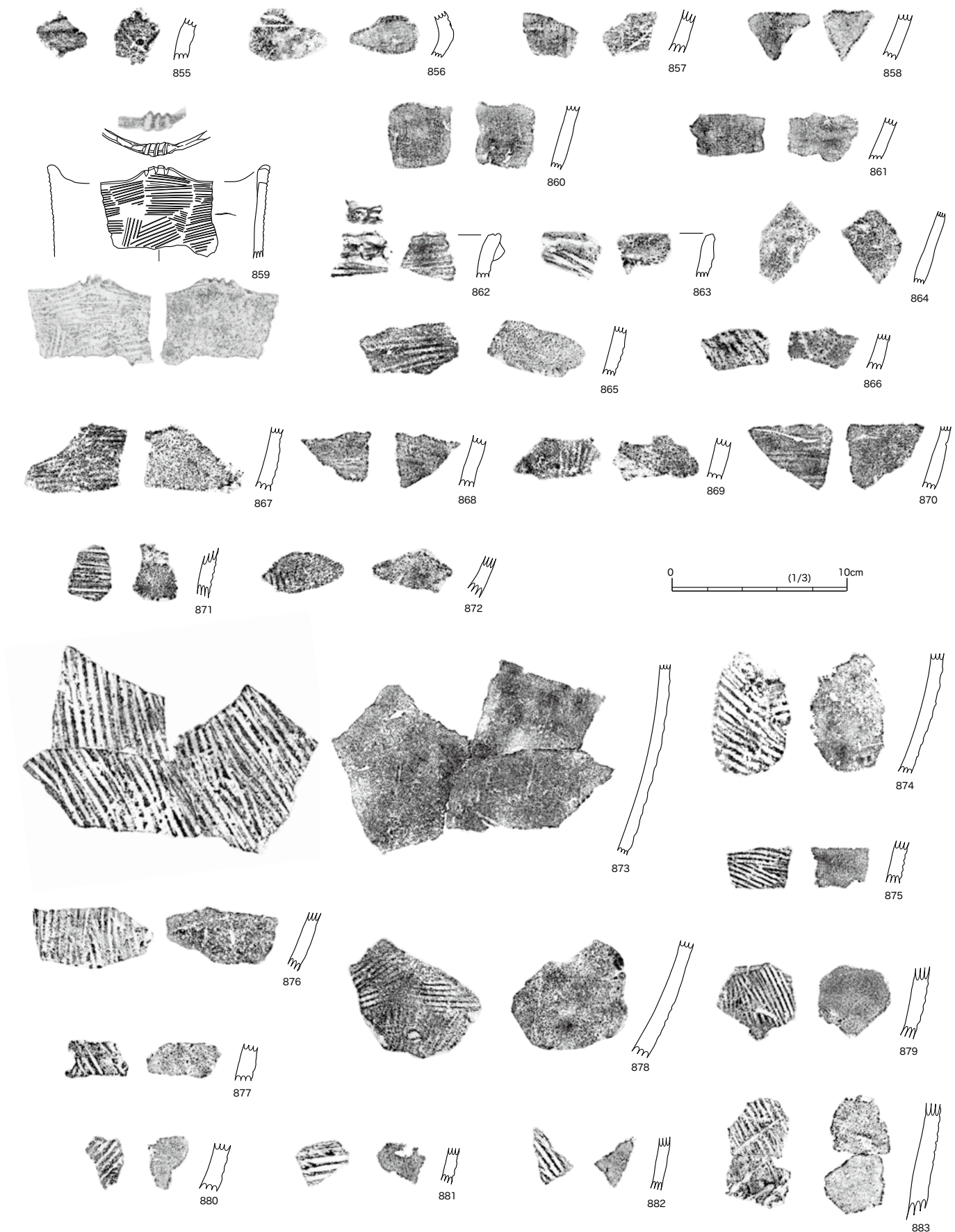
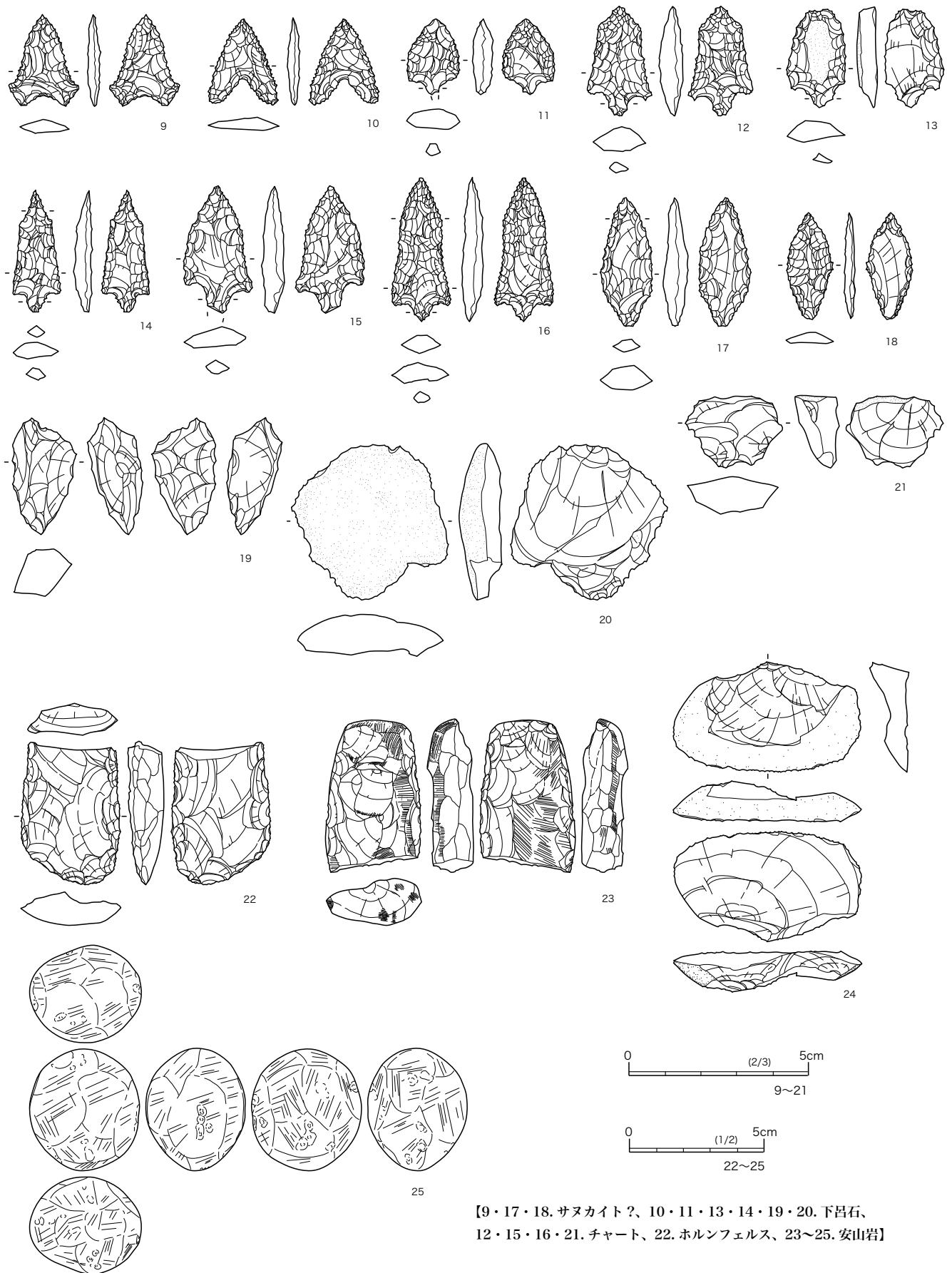


図 3-68 07D・E区4面出土土器(4)

刺突列などを施したものは7点(771～776・859)認められた。768は、くの字屈曲する深鉢口縁部片で、ナデ調整のあとに、外面には3条1単位のいわゆる半截竹管文が横方向に直線あるいは波状に施されている。769・770は4単位の小波状を呈する深鉢で、同一個体と考えられる。胴部の膨らみから口縁部に向って、やや外反する形状を呈し、口縁部付近に若干厚みが認められる。器面調整は、表が横方向の二枚貝条痕、裏がナデで、施文のある口縁部外面



【9・17・18. サヌカイト？、10・11・13・14・19・20. 下呂石、
12・15・16・21. チャート、22. ホルンフェルス、23～25. 安山岩】

図 3-69 07D・E 区 4 面出土石器 (1)

はナデなどによって調整の一部が消されている。施文は、波頂部をつなぐ形で2条1単位の沈線が施されており、波頂部には1条の短沈線による刻みが施されている。771・772は口縁端部上面に工具による刺突列が施されているもので、器面調整は表裏ともに削痕である。恐らく同一個体と考えられる。773は口縁端部上面に、口縁部に直交する形で工具による連続押圧が

認められるものである。器面調整は表裏ともにナデである。774 は、器面の風化が著しく、調整は不明である。口縁端部上面にユビによる押圧が施されているものである。胴部側には補修孔が認められる。775 は、口縁端部上面にユビによる押圧列が施されているもので、器面調整は表が二枚貝条痕・裏がナデである。776 も口縁端部上面にユビによる押圧列が施されているものである。器面表には二枚貝条痕が斜方向に施されており、口縁端部外面にはいわゆる半截竹管文が横方向に施文されている。器面裏は横方向に巻貝条痕が認められ、一部ナデにより消えている。777 はナデ調整ののちに I 字状に沈線が施されているものである。784 は、器面外面にはナデ調整の後に、いわゆる半截竹管文を横方向に施しているものである。器面裏には巻貝条痕調整が認められる。859 は波状を呈する深鉢片で、推定口径が 12cm ほどと小型である。器面外面には二枚貝条痕が認められ、内面はナデである。波頂部には 3 条の短沈線による刻みが施されている

778 ～ 783・785 ～ 790 はいわゆる粗製土器の口縁部である。器面表の調整には、二枚貝条痕 (778・779)、巻貝条痕 (780・785・786・788)、ナデ (783・789・790)、削痕 (782・787) があり、780・785・786・788 は裏面にも巻貝条痕が認められる以外は、裏面はナデ調整である。791 ～ 842 は同じく胴部片である。791 ～ 800 は器面表の調整が巻貝条痕で、裏面の調整は 795・796 がナデ以外は巻貝条痕と、表裏両面ともに巻貝工具が用いられているものが多い。特に 791 は器面表の調整痕の残存状況が良好である。801 ～ 822 は器面表の調整が二枚貝条痕、823 ～ 834・838 が削痕、835 ～ 837・839 ～ 842 はナデである。器面裏の調整は一部削痕もあるがほぼナデ調整で、巻貝条痕との差が顕著に認められる。843 は深鉢底部片である。器面表裏ともに調整はナデで、底部には木葉痕が認められる。

844 ～ 857・862 ～ 883 は、遺物集中区以外の出土である。855 は深鉢胴部片で、横方向に幅広の凹線が認められる。元住吉山 II 式併行に比定できるか。845・846 はやや屈曲する口縁部をもつ深鉢口縁部で、外面には縄文 RL が施されている。晩期初頭の下別所式に併行するものと考えられる。856 は、くの字屈曲する深鉢口縁部付近の破片で、横沈線の上に、連続した半弧線が展開する、いわゆる半截竹管文が認められる。晩期前葉の寺津式に併行するものであろう。器面調整で巻貝条痕が認められるものには、857・868・870 がある。860 は器面裏も巻貝条痕が認められ、860・862 の裏はナデ調整である。

862・863 は晩期後半の土器である。862 は突帯文土器で、口縁端部やや下の外面に突帯が巡り、突帯および口縁端部上面には二枚貝工具による連続した刺突列が施されている。突帯下の器面表の調整は二枚貝条痕、裏はナデである。863 はやや丸みを帯びた口縁端部を有する深鉢で、器面外面には斜方向の荒い条痕が施されている。砲弾形の深鉢になると考えられる。

873 ～ 883 は、弥生前期の深鉢片と考えられる。器面外面にはあたりの深い二枚貝条痕が、斜方向および羽状に認められる。これらの器面内面の調整はほぼすべてナデである。

石器

07D・07E・09 区出土の縄文時代・弥生時代石器は、合計 20 点出土しており、器種別内訳は石鏃 10 点、石核 1 点、剥片 2 点、微細剥片 3 点、打製石斧 2 点、刃器 1 点、磨石・敲石類 1 点である。このうち、微細剥片以外の計 17 点を図化した。先に述べたように、この中で土器の遺物集中域に伴う可能性があるものは、9・21・23・24 である。

石鏃 すべて打製石鏃である。9・10 は無茎鏃である。9 は平面形状で脚部がやや反るよう形を呈しており、脚部端部は微細な剥離調整により直線的な形状になっている。サヌカイト製。10 は基部の挟りがやや深い形状を呈しており、側辺部は細かい鋸歯縁状を呈するものである。下呂石製。11 ～ 18 は有茎鏃で、11 ～ 16 が凹基あるいは平基有茎鏃といわれるものである。11・12・14 ～ 16 はいずれも平面形状で五角形を呈するもので、12・14 は先端部側にやや

作り出すような先端部分を有する。13は製作途上かもしれない。いずれも最大厚部分の断面形状がカマボコ形を呈しており、裏側には幅広の平坦面が認められる。17・18は凸基有茎鏃あるいは柳葉形といわれるものである。これも断面形状では、裏側に幅広の平坦面が認められる。11・13・14は下呂石製、12・15・16はチャート製、17・18はサヌカイト製で、13は下呂石円礫を石材にしている。

剥片・石核 19は周囲から打面を回転させて剥離が行なわれており、石核と考えた。下呂石製である。20・21は剥片である。20は礫の外皮を剥がしたもので、平面形状が隅丸の菱形状を呈するものである。石材は下呂石円礫である。21はやや横長を呈する剥片で、貝殻状を呈している。石材はチャートである。

打製石斧 確認できた打製石斧は、いずれも短冊形といわれるものである。22は刃部側が半分残存した状態である。端部には使用の衝撃によると考えられる不連続な剥離も確認できるが、著しい磨滅や線状痕などは肉眼では確認できない。ホルンフェルス製。23は基部側で、刃部側が欠失した資料と考えられる。凸の部分を中心に、器面全体に擦れたような痕跡が多く認められる。柄に結縛して使用した際に生じたものとも考えられるが、端部および欠失した側の欠損部にも認められることから、別の作用の可能性もあろう。安山岩製。

刃器 24は貝殻状で横長の大型剥片を素材にしたものである。使用された端部には不連続な微細剥離が認められる。安山岩製。

磨石・敲石類 25は4.5×4.0×3.5cm程度の、やや扁平な球状を呈するものである。表面には全体に磨痕やそれに伴う面の形成が認められ、敲打痕も点在して確認できる。安山岩製。

まとめ

今回の報告では、縄文時代晩期前半期の、主に土器片の散布による遺物集中域の報告を行うことができた。この資料群の時期は晩期前半に属すると考えられ、晩期前半でもその後半、雷IIIC式（増子2003ほか）や元刈谷式（新）（佐野2001）などといわれる段階に併行する土器群であると考えられる。粗製土器において、表裏巻貝条痕があるなかで、二枚貝条痕調整の多用は、本土器群の大きな特徴といえよう。778のように、器面表に二枚貝条痕調整で、施文にいわゆる半截竹管文、器面裏は巻貝条痕で口縁端部上面にはユビによる連続押圧という土器の存在は、この問題を代表する土器として大きく取り上げてよいであろう。なお、ここで述べた、いわゆる半截竹管文の原体の多くを、筆者は巻貝工具を想定している。巻貝工具を調整具・施文具とする土器群が東海地域の晩期前半の土器群の大きな特徴であると考えており（川添2008）、半截竹管文系条痕土器の概念は、当初提唱された概念とは異なっているとはいえ（吉田・杉原1939）、佐野 元による問題提起があるものも（佐野2008）現在においても妥当と考えている。

また、遺跡形成の問題に立ち返ると、今回の遺物集中域では、圧倒的に土器の出土が多く、石器の出土は希少であった。当時のヒトたちの活動期間としても決して長いものではない。こうした短期間で活動を終了している遺跡の存在は、当時の人間活動の中でどのような意義を見いだすかが、遺跡間関係など今後の研究において重要になるであろう。

※引用文献は「5. 考察（2）尾張低地帯の縄文時代晩期の様相について」（川添）を参照。

2.	10YR3/1	黒褐色シト質極細粒砂	(焼土含む)造成土 D区西壁6層に対応	51.	10YR3/1	黒褐色シト質極細粒砂	29層底
3.	2.5Y4/3	オリーブ褐色シト質極細粒砂	炭化物少量含む D区西壁7層に対応	52.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
4.	2.5Y4/3	オリーブ褐色細粒砂		53.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
5.	2.5Y4/3	オリーブ褐色細粒砂		54.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
6.	2.5Y4/4	オリーブ褐色細粒砂		55.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
7.	10YR4/2	灰黄色細粒砂		56.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
8.	10YR4/3	暗褐色シト	鉄屑が認められる 水田耕作法	57.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
9.	10YR4/2	灰黄色細粒砂		58.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
10.	2.5Y4/4	オリーブ褐色シト質土	鉄屑・マガリンが認められる 水田耕作法	59.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
11.	2.5Y4/3	オリーブ褐色細粒砂		60.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
12.	10YR3/3	黒褐色シト		61.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
13.	2.5Y4/3	オリーブ褐色細粒砂	洪水堆積層	62.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
14.	10YR2/3	黒褐色シト	微粒の炭化物を含む SX233埋土	63.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
15.	10YR3/3	暗褐色シト	微粒の炭化物を含む SX231埋土	64.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
16.	10YR3/3	暗褐色シト	2.5Y5/4 黄褐色細粒砂含む SX231埋土	65.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
17.	10YR3/2	黒褐色シト	2.5Y5/4 黄褐色細粒砂含む 微粒の炭化物を含む SX231埋土	66.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
18.	10YR2/2	黒褐色シト	2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂含む 微粒の炭化物を含む SX231埋土	67.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
19.	10YR3/2	黒褐色シト	2.5Y5/4 黄褐色細粒砂含む SX233埋土	68.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
20.	10YR3/2	黒褐色シト	2.5Y5/4 黄褐色細粒砂含む SX233埋土	69.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
21.	10YR3/2	黒褐色シト	微粒の炭化物を含む SX232に対応か？	70.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
22.	10YR3/2	黒褐色シト	10YR4/2 灰黄色細粒砂含む	71.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
23.	10YR2/2	黒褐色細粒砂	2.5Y5/4 黄褐色細粒砂含む 22-25の漸移層	72.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
24.	23土同一層			73.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
25.	2.5Y4/3	黄褐色細粒砂～亜面確認中粒砂	D区西壁23層に対応 地山	74.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
26.	造成土			75.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
27.	2.5Y4/3	オリーブ褐色シト質極細粒砂	10YR3/2 黒褐色土層入 水田耕作法	76.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
28.	35土同一層			77.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
29.	5土同一層			78.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
30.	2.5Y4/4	オリーブ褐色砂質シルト	水田耕作法	79.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
31.	75土同一層			80.	10YR3/2	黒褐色シト	29層底
32.	10YR4/3	暗褐色細粒砂	水田耕作法	81.	10YR3/2	暗褐色シト	29層底
33.	10YR4/3	暗褐色細粒砂	水田土	82.	2.5Y4/4	オリーブ褐色細粒砂	鉄屑が認められる
34.	10YR4/2	灰黄色砂質シルト	水田土	83.	10YR4/2	灰黄色細粒砂	鉄屑が認められる
35.	2.5Y4/3	オリーブ褐色シト質極細粒砂	水田耕作法	84.	10YR5/2	灰黄色細粒砂	鉄屑・マガリンが認められる 水田耕作法
36.	23土同一層			85.	2.5Y4/4	オリーブ褐色細粒砂	植生痕
37.	33土同一層			86.	10YR3/2	黒褐色シト	微粒の炭化物を含む
38.	10YR4/4	褐色シト	微粒の炭化物を含む SP108植土	87.	10YR2/2	黒褐色シト	微粒の炭化物を含む 縄文土器含む
39.	10YR4/4	褐色砂質シルト	10YR4/3 暗褐色シト層入 SP108埋土	88.	44層と同一層	同質だが、やや粘性強い	
40.	10YR4/4	褐色細粒砂	10YR4/4 褐色シト層入 SP108埋土	89.	44土同一層		
41.	10YR4/3	暗褐色細粒砂	10YR2/2 黒褐色土層入 SP108埋土	90.	10YR2/2	黒褐色シト	微粒の炭化物を含む
42.	10YR2/2	黒褐色土	2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂含む SX230埋土	91.	10YR2/2	黒褐色シト	25層底
43.	10YR2/2	黒褐色細粒砂	2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂含む 微粒の炭化物を含む SX230埋土	92.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底
44.	10YR2/2	黒褐色細粒砂	2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂含む 微粒の炭化物を含む SX230埋土	93.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底
45.	10YR2/2	黒褐色細粒砂	微粒の炭化物を含む 水田耕作法	94.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底
46.	10YR4/3	暗褐色細粒砂	水田土	95.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底
47.	44土同一層			96.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底
48.	23土同一層			97.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底
49.	造成土			98.	10YR3/2	黒褐色シト	25層底

B. 中央区

07F・07C・07B・07A・06D 区

●概要

07A・B・C区は水田跡地を造成土が厚く覆い、部分的に深い土取りによる攪乱と瓦礫の廃棄坑が掘られていた。

現在の水田面より下部に位置する遺構検出面では春から夏期の調査であったために湧水が激しく、作業全体に困難がともなった。支援業者は地下水位の効率的な低下策を講じたが、それを上回る湧水に悩まされた。それでも、最終的には水田による旧地形の削平が確認され、中世以前に遡る人為的な遺構はほとんど検出できなかった。この結果、中央区は地籍図にも記載があるように、旧河道と中洲であったことが確認できた。

●07A区

遺構検出面は砂礫層で、時期不明の土坑等が点在した。北部には近世水田跡があり、SD001も近世である。調査区の東、西、北では砂礫層面が降下してシルト層が堆積していた。西側に向かっては中央に溝状の窪地があり、堆積ではなく浸食に因る形成が窺えたが、時期は不明である。

遺物は7世紀代の須恵器から近世まで幅がある。基盤礫層中からも須恵器片が出土しており、形成時期を窺わせる。

●07B区

07A区と異なり遺構検出面はシルト層であり、東が高く、西に低くなるテラスの連続を検出した。テラスそれぞれは中洲斜面に設けられた水田跡であり、近世には中洲の高まりに段々に水田が営まれていた状況が復元できた。

遺物は戦国から近世が中心だが、フィゴの羽口が1点出土している。

●07C区

きわめて湧水が激しく、南北方向の近世水田の畦を検出したにとどまる。調査区内で東西方向の畔は見つからなかったため、南北方向の長方形の畦畔区画が推測できる。

中世陶器の小片がわずかに出土した。

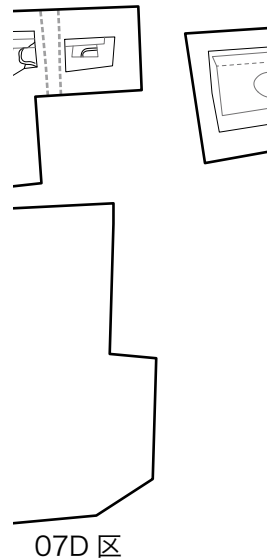
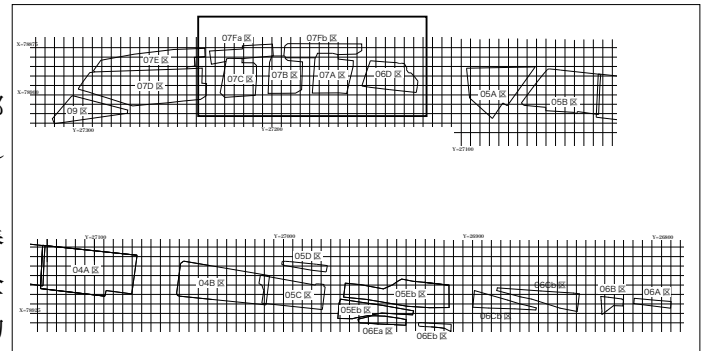


図 3-72 07B 区全景

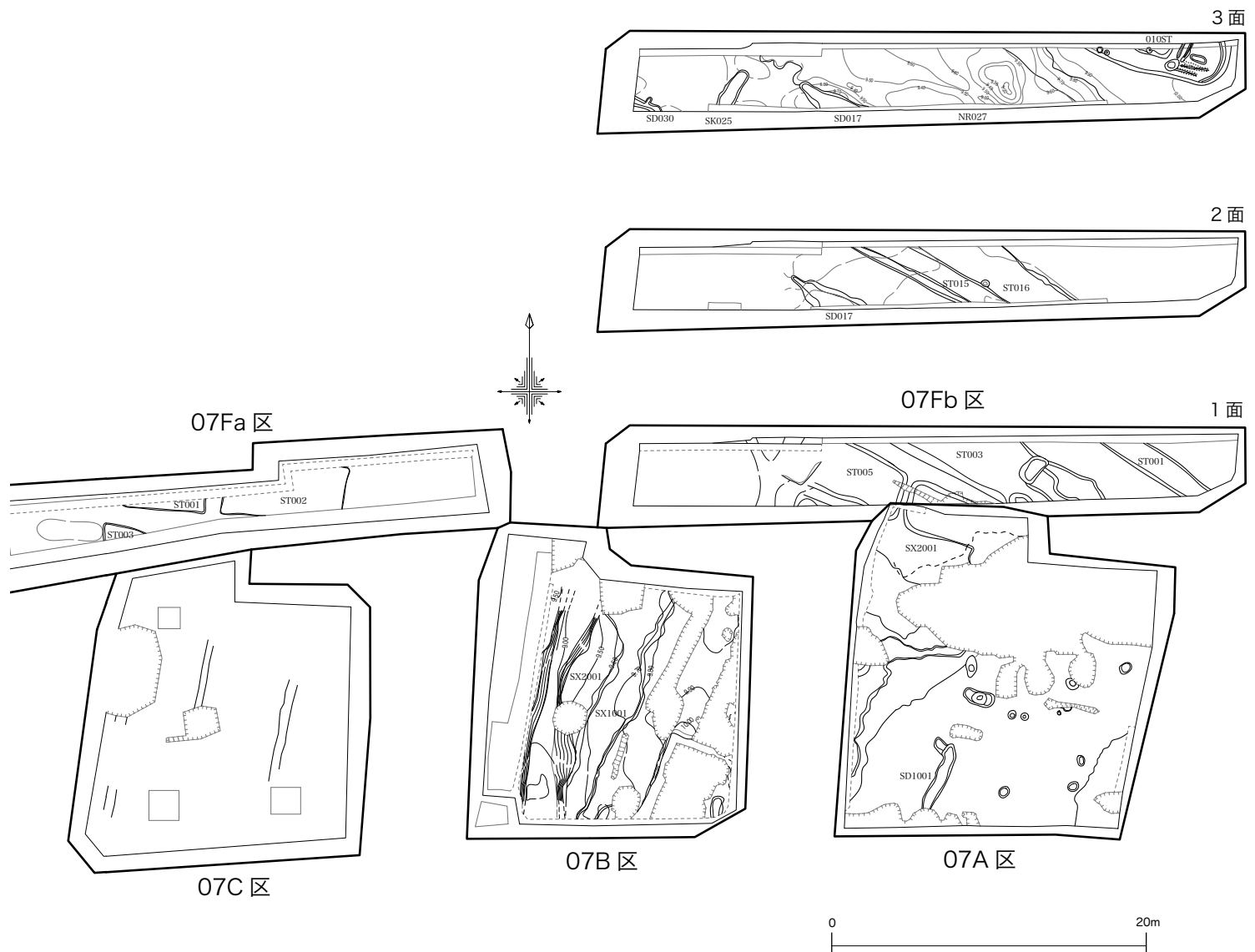


図 3-73 07・A・B・C・Fa・Fb 区遺構プラン 1/400



図 3-74 07Fb-NR027

● 07Fa 区

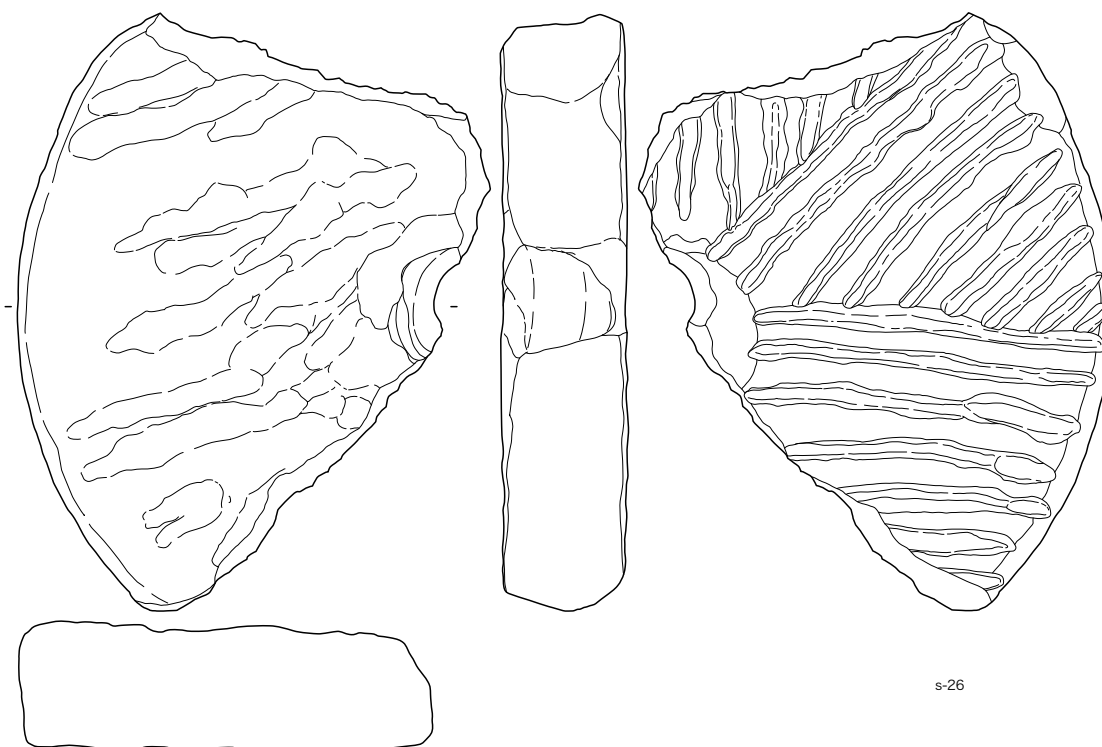
上面で近世水田、西部では下部に基盤の下降が認められ、河道への連続が窺えた。下降部を埋めるのは有機質の強い堆積層であり、河道の曲がり具合からみて内側に相当する、浸食を受けない堆積層であったと推測される。上部の畔は東西方向にのび、07C 区の南北畦に対応して、長方形区画を形成する。



図 3-75 07Fb 区全景

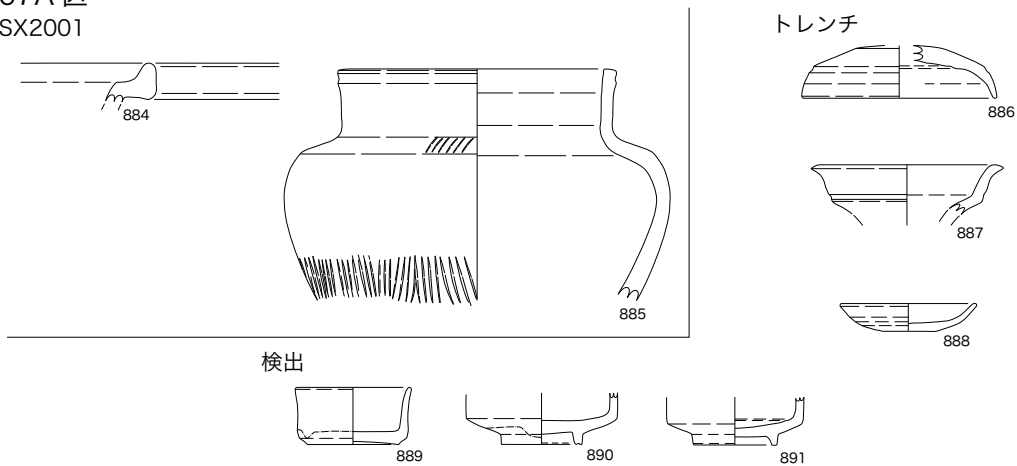
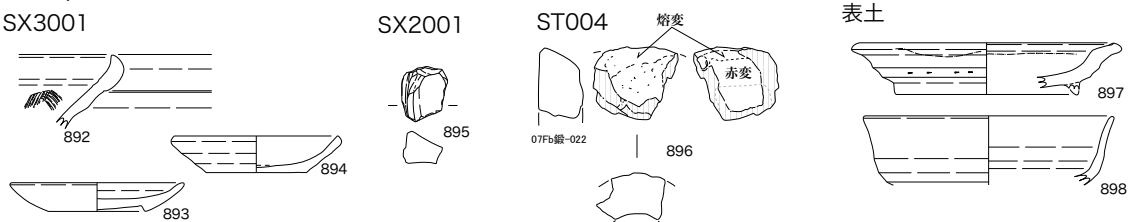


図 3-76 07Fb-ST010

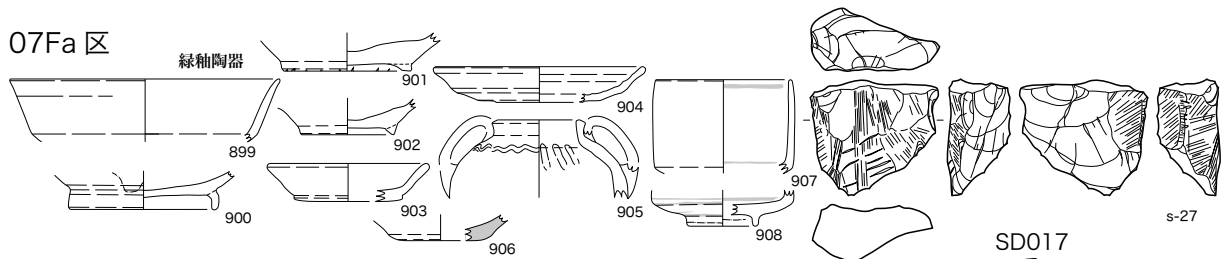
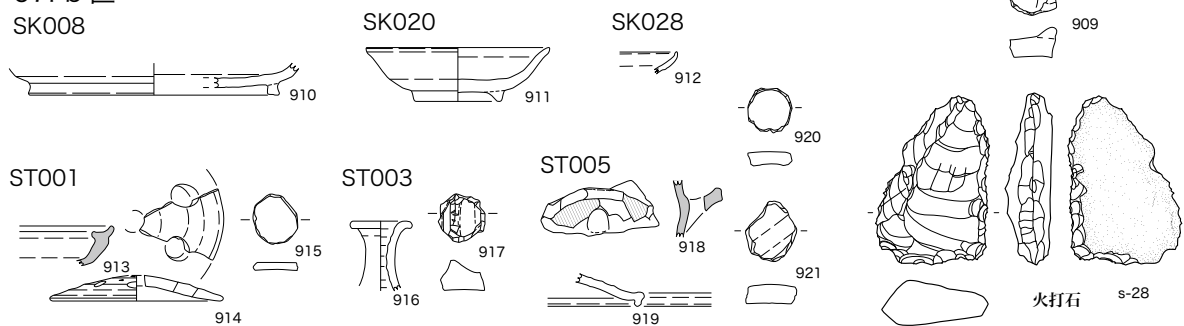


s-26

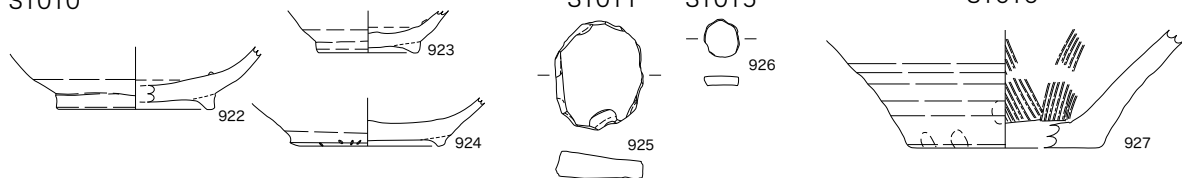
図 3-77 07A 区出土石臼 (1/3)

07A 区
SX200107B 区
SX3001

07Fa 区

07Fb 区
SK008

ST010



NR027

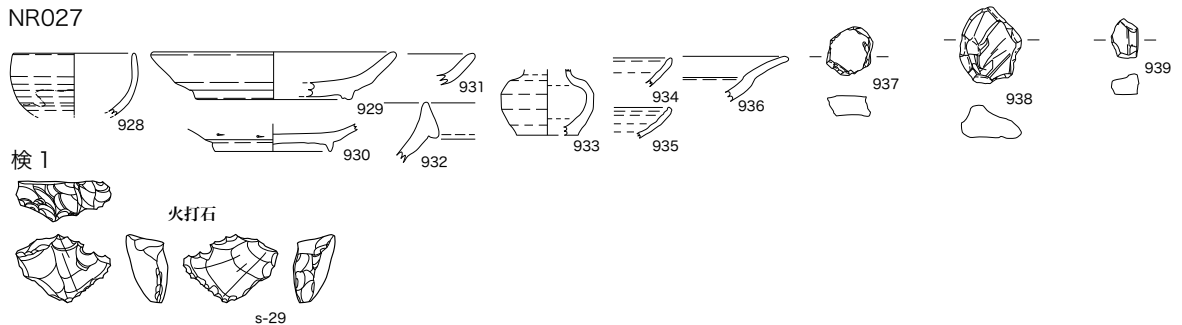
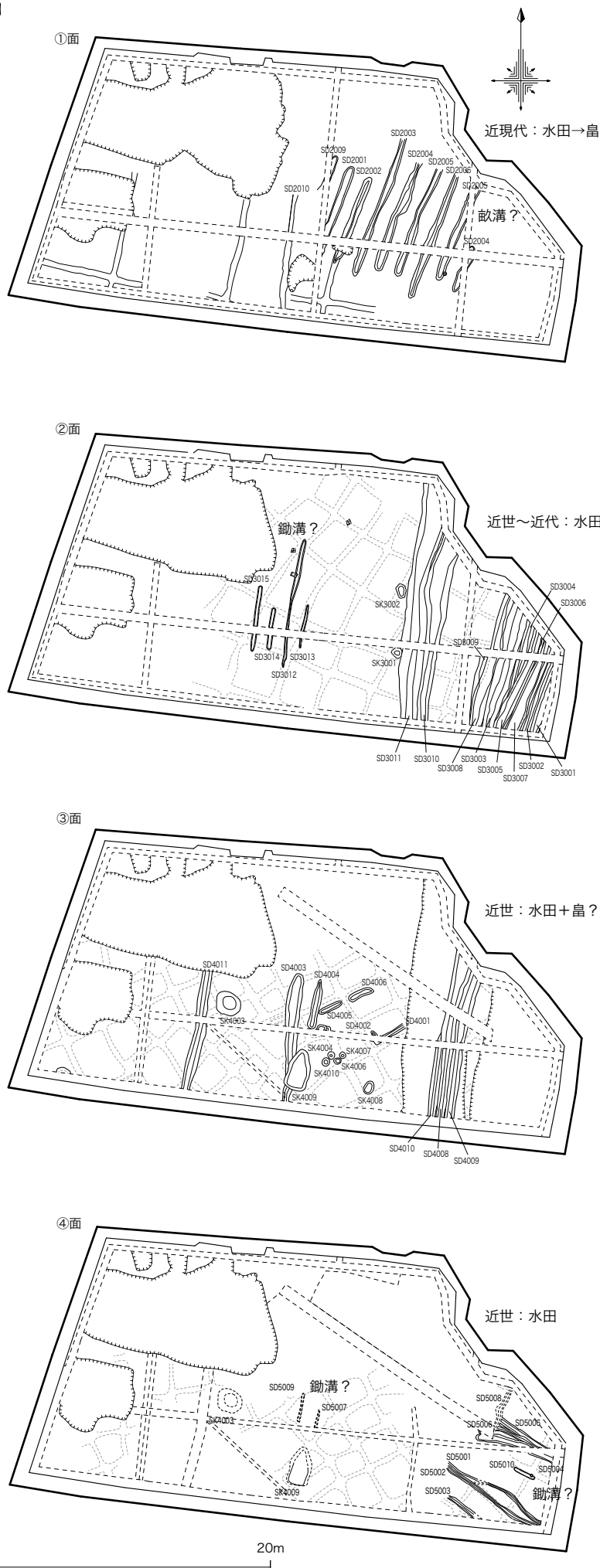


図 3-78 07A・B・Fa・Fb 区出土遺物 (加工円盤 1/4・石器・1/2・羽口 1/2)



遺物は古代から近世にかけての須恵器・陶器片が出土している。緑釉陶器の杯が1点出土している。

●07Fb区

1面は07A区北端の水田に対応する。北西-南西軸の細長い水田跡は島畑間を貫いて水田を連結する水路形水田に共通している。

2面は水路形水田の下部である。

3面は微高地端を削る水田端部と、水路形水田下部の流路NR027である。したがって、水路形水田はもともと流路であったところを水田化したことが明らかになり、この流路は06D区につながる可能性が高い。

遺物は古代から近世まで時期幅が広い。07Fa区を含めて、加工円盤がまとまって出土している。

●06D区

最下部の5面で検出された自然流路から戦国期の陶器片が出土しているので、それより上の4つの面で検出された遺構群は近世以降と推測される。

各面とも、水田畦畔と、それに切り合う溝や土坑が検出されている。つまり、4面にわたって水田面が検出されている一方で、水田と切り合う溝群も3面にわたって水田と切り合い、遺構の変遷は短期で繰り返している。

小区画水田が近世に属すること、鋤溝が検出されていることを含めて、全体の整合性には不確かな部分を残す。

図3-79 06D区遺構プラン・変遷 1/400

遺物は中世から近世にかけての陶器・土師器が出土している。水田造成の際に、混入したものである。



図 3-80 06D 区 4 面全景

06D 区

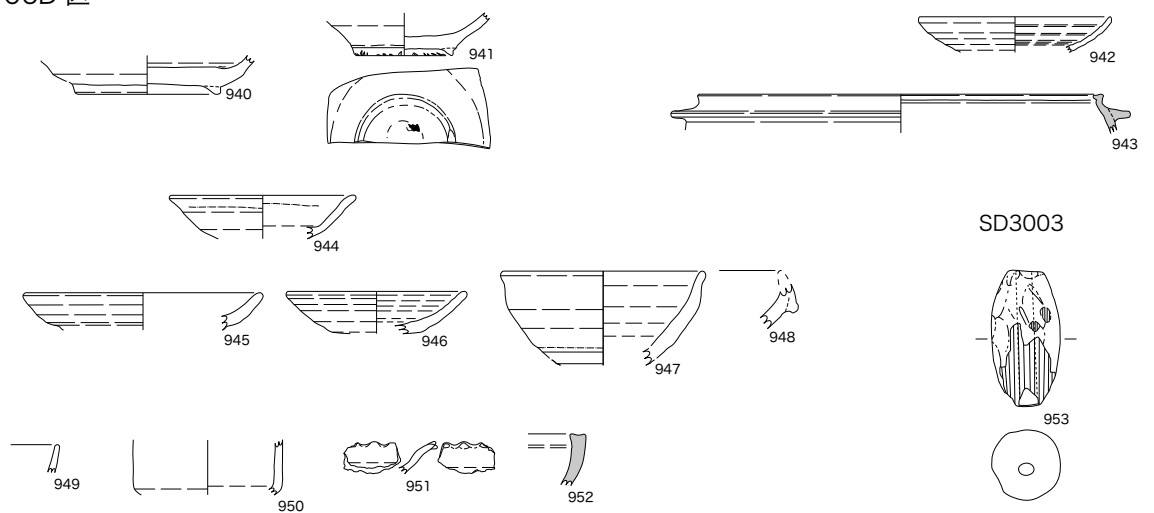


図 3-81 06D 区出土遺物（土鍾 1/3）

07Fb 区

西壁土層セクション 1/100

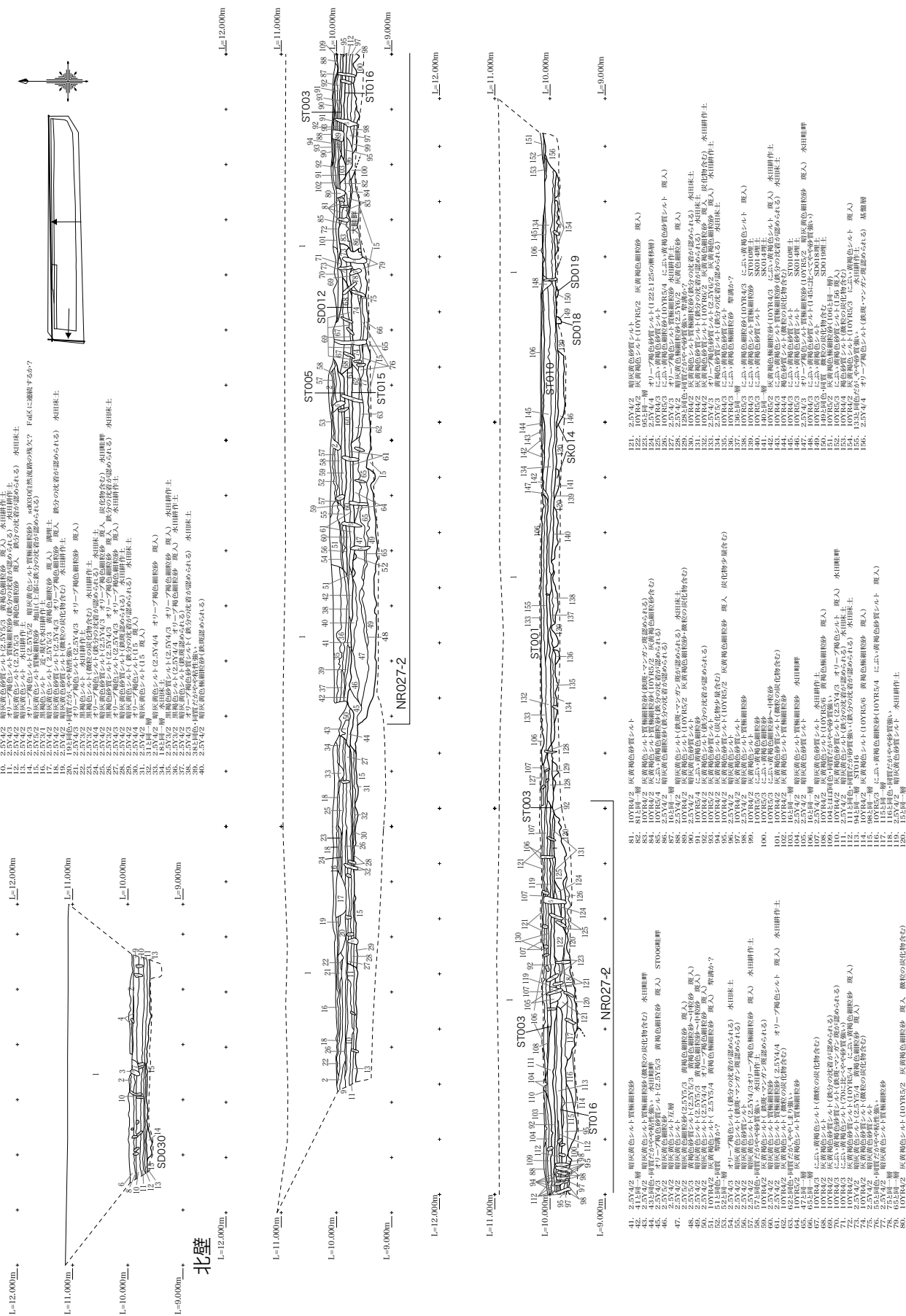


図 3-83 07Fb 区西壁土層セクション 1/100

C. 東 1 区

05A・05B・04A 区

a. 中世以降の遺構と遺物

●概要

05A 区上面は近現代の水田および畠跡に覆われ、その下部で大溝 05A-SD2002 やその西で河道埋土を検出した。河道を埋める黑色シルトには水田の存在を疑ったが、確認できなかった。

調査区東部の河道肩部分では近世の水田造成による削平が深く、部分的に基盤の灰色中粒砂まで露出する状況であった。

北北東から南南東の軸線をもつ幅 10m の大溝 05C-SD2002 は、土層観察上は東から続く大溝 05A-SD2003 より新しく上層の 05A-SD2001 より古いが、縦系列につながるだけでなく、05A-2003 と接続していたものがその後再掘削されて層位の連続性を失った可能性が残る。つまり、05A-SD2003・05B-SD001 の東西大溝は河道際の 05A-SD2002 と一連の溝であり、それらが埋没して後に上部に 05A-SD2001 が掘削されたのであって、その時点で水田化が進行したと考えられる。

現在の農業用水（宮田用水）を挟んだ東隣の 05B 区では、巨礫を含む基盤礫層が急激に上昇し、薄い表土直下から検出された古墳前期に属す遺構群の基盤ともなっていたが、上面高度は一定せず、遺構の深度はそれに左右されていたふしがある。礫層範囲ではほとんど中世遺構は検出できなかったが、後世の削平のために多くの遺構を失ったにしては、溝（05B-SD1005・1008）は礫層が下降する西端以外で検出されておらず、同様に礫層が下降する 04A 区で溝群が検出されていることは、礫層の範囲には主たる遺構が設けられなかった可能性が高い。むしろ、注目すべきは近世初期まで続く墓坑群を検出したことである。遺存状況は決して良くはなかったが、意外にも多くの墓坑から人骨や歯が出土した。同時期と推測されるものには他に、焼土や炭化物を含んだ細長い土坑が検出され、火葬との関連も考えられたが、人骨遺存例はいずれも土葬を示していることから関連は薄いと考えられる。

大溝 05B-SD001・04A-SD001 には巨礫が密に充満する部分が多かったことから人力掘削

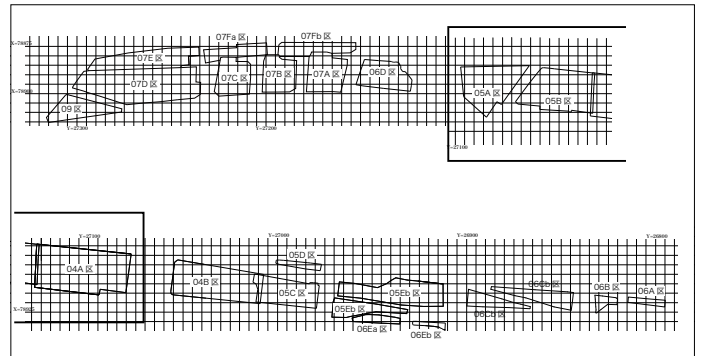


図 3-84 05B 区北壁西部における基盤礫層の露出状況

に困難を伴うと判断して、大溝の輪郭を確定後に幅広のベルトを幾つか残した上で重機掘削をおこなった。しかし、そのために大溝の最終段階に排水用の小規模な溝が設けられていなかったのかどうか等の予想される課題について明確な解答が出せなかったのが悔やまれる*1。

04A 区では方格の溝と土坑、柱穴状の小穴群を検出した。一応、小穴群

*1 この方式を選択したのは先行して調査を担当した石黒である。

から溝群へという景観上の移行が切り合い関係からも想定できる。小穴には確実に柱穴と推定できるものが多く、その配置から建物群を復元した。

●遺構

墓坑群

最終段階の遺構である。人骨や歯の遺存例は11基を数え、遺存しないが墓坑と推定される5基を加えて16基からなる。共伴遺物がほとんど無いので、 ^{14}C 年代測

定をSK1011例について行った。その結果は1440年-1480年におさまり、当初想定していた近世ではなく、大きく遡ることが明らかになった。しかも、大溝SD001との重複もあり、墓坑群は大溝掘削を境に時期的に2分され、後半が近世初期ということになる。よって、前半は後述する04A区以西における建物群に関連することとなった。

埋葬方式は座位（胡座）で、頭部が移動していたことから「棺」の使用が想定できる。坑底は礫層面で止まっている。深さは、底面標高10.3～10.5mであるが、SK1118:10.08m、SK1139:10.18mという深いものもある。当時の地表面を11m超と推定すると、1m程度の深さとなる。

05A-SD2002・SD2001

SD2002は幅10m、深さ1.5m（底面標高8.2m）の大溝である。底面から0.6mあたりに砂の互層が形成されて、底面東よりで落ち込み、溝状の断面を見せている。互層の形成は流路の存在を示すが、溝状に再掘削されたのどうかはわからない。なお、最下部にも互層が形成されており、恒常的に水流があったと考えられる。

SD2001は近世に属す、SD2002の上部に形成された幅3m、深さ0.5mの溝で、底面標高は9.2mである。埋土下層は互層で水流のあったことが窺える。中央部分が一段低くなっており、低水位時の流路、あるいは排水用であったと考えられる。

05A-SD2003・05B-SD001・04A-SD001

西北西から東南東に走る断面逆台形の大溝である。基盤の礫層まで掘り込まれており、埋土に礫が多量に含まれているのも、掘削時の排出土を梅戻したからであろう。出土遺物は古墳前期からと幅広いが、この溝に伴う遺物は少ない。

西端の04A区では東部で一旦曲がりながら、方向を再び東南東に戻すような雰囲気もあるが、名鉄本線沿いのため安全確保から確認できなかった。東端では幅6m深さ1.8mとなり、礫もほと



図 3-85 05A 区上面全景



図 3-86 04A 区上面全景

05A区

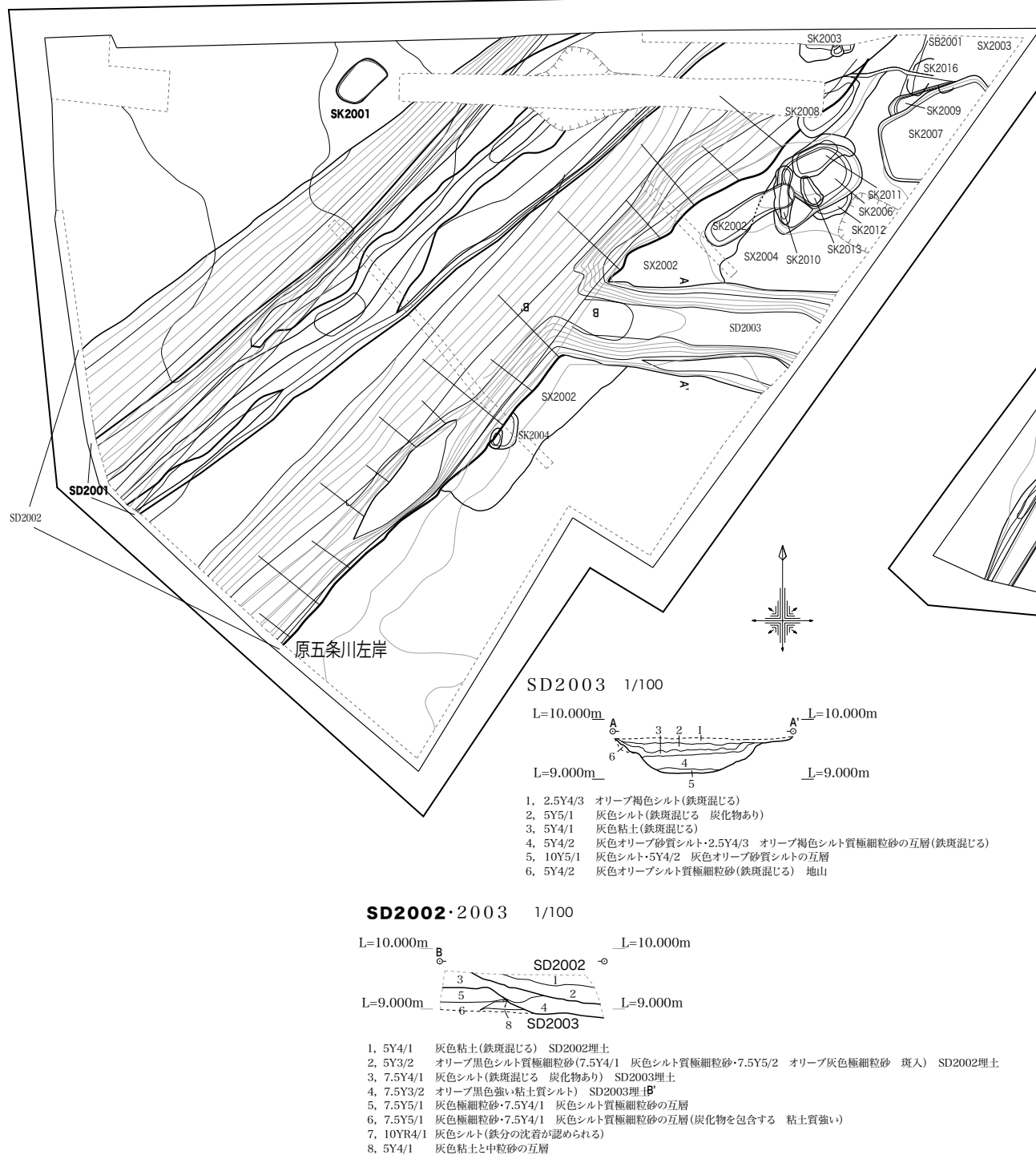


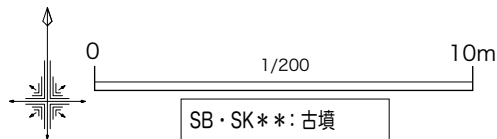
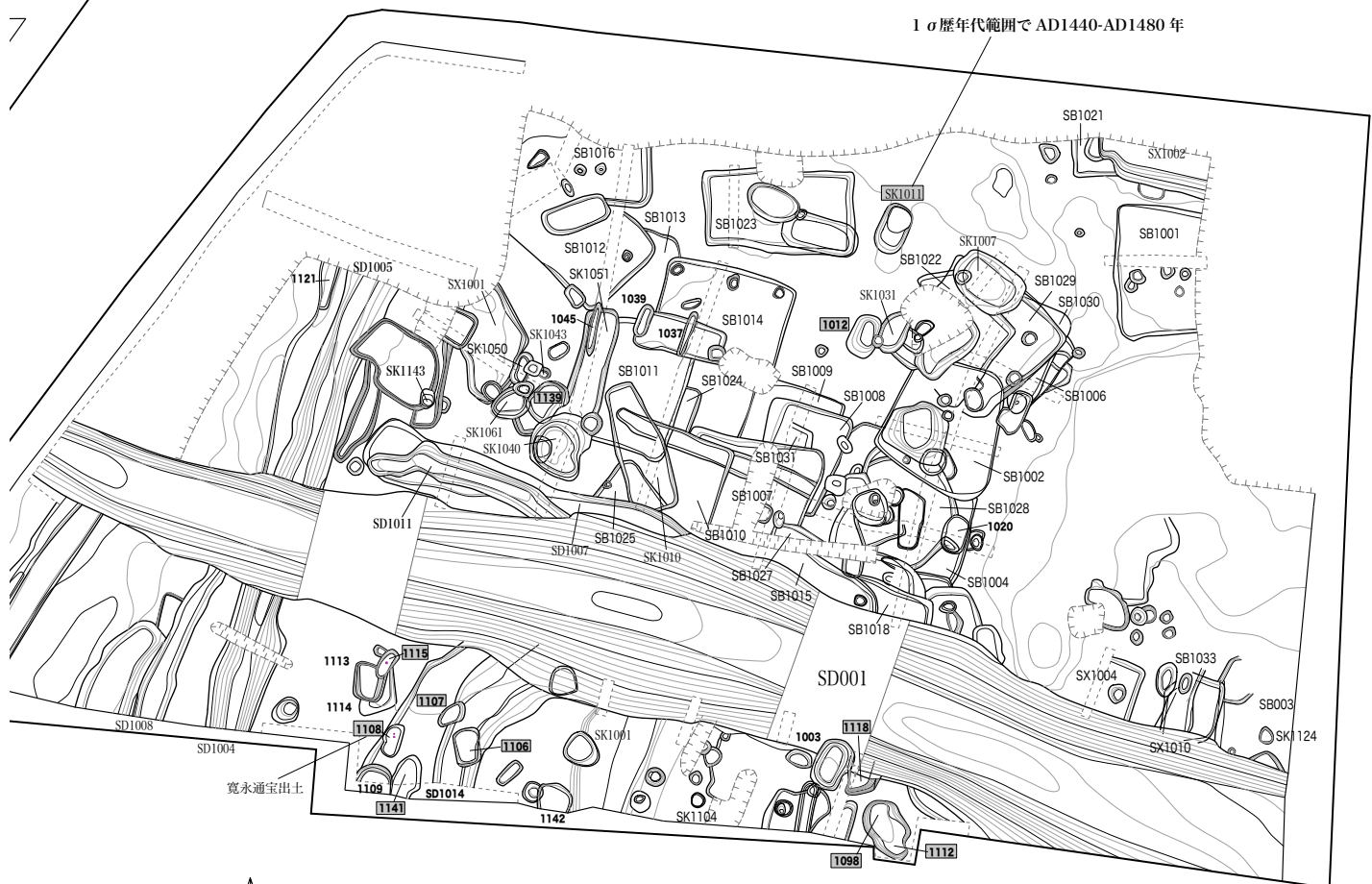
図 3-87 05A・B 区遺構プラン 1/200

んど含まない。プランでは、この部分の 04A-SD001 は南へ弧を描いて曲がっており、西部の SD001 に単純にはつながらないような様相を示していたので、調査区南側を境界までぎりぎり拡張して確認したが、確認はできなかった。

SD001 の下層には互層が形成されており水流のあったことが窺える。また溝の南肩が地滑りを起こして崩落している様子が土層セクションで確認できた。下部からの地下水湧出で壁面が支持力を失って崩落に至ったものだろう。オーバーハングするような浸食ならばブロックの転落となったであろうから、下部壁面の柔軟化が原因であったと考えられる。

下層で地下水の湧出があり、それだけでなく水流のあった可能性がある点、そして中層か

05B 区



SB・SK**：古墳
SD・SK**：中世～戦国
***：近世

※書体の違いで時期差を表示。

墓坑

人骨もしくは歯が出土	形状から推定
SK1011	SK1020
SK1012	SK1109
SK1098	SK1113
SK1106	SK1114
SK1107	SK1142
SK1108 (寛永通宝出土)	
SK1112	
SK1115	
SK1118	
SK1139	
SK1141	

らも礫を含む遺物群が出土して一時期埋没が停止していた可能性がある点、そもそも溝底面の傾斜が東部では弧状に曲がった南方向へ下降し、西部も東方へ下降する点等を考慮すると、04A-SD001 は水路としての機能を有していた可能性が高く、05A-SD2002 へ接続していることは確かだとしても、機能的には単純につながらない余地を示す。

もし、南に T 字形に溝が分岐しているのであれば、不連続な区画溝ではなく水路等の機能を想定する必要がある。なお、上部は基盤土ブロックから構成される斑土で埋められており、礫が含まれていないだけで、この点は西部と同様である。

04A-SD004

切り合いがあるので、先行する溝を SD004a、掘り直しを SD004b と区分した。北部で重複するが南部では分離しており、単純に同一溝の時期差というわけではない。ただし、遺構面が大きく削平されている可能性を考慮しつつ、また 04B 区の状態を参考にすると、両溝の

重複部分と分離部分の外縁幅が同じであることから、おそらくは溝上部では同一の溝となっており、一定程度埋没して後の再掘削のために、底面で位置がずれたというように判断するのが適切におもえる。

この意味で、この溝は基本軸であったと考える。SD004bの埋没は戦国時代（15世紀末から16世紀初め）まで下り、直接の関係は確認できなかったが、SD001と並存していた可能性が高い。

04A-SD004a・SD005・SD008

SD004aとSD005は並行しており、溝肩間は検出面で2mある。削平を考慮しても1.5mの間隔はあったものと推測する。SD008とは切り合い関係は確認できなかったため、同時並存の可能性が高い。よって、このSD004aとSD005は「道」的な空間を構成していたと考えられる。

04A-SD003・SD007

SD004a溝群に切られる点で先行する。方位を共有しており区画を構成して単位となる一群であろう。

04A-SD002

幅の狭い溝で、SD003に重複しつつ南の折れて、方形の区画を形成している。SD003を切



図 3-88 04A-SD004・SD005 他

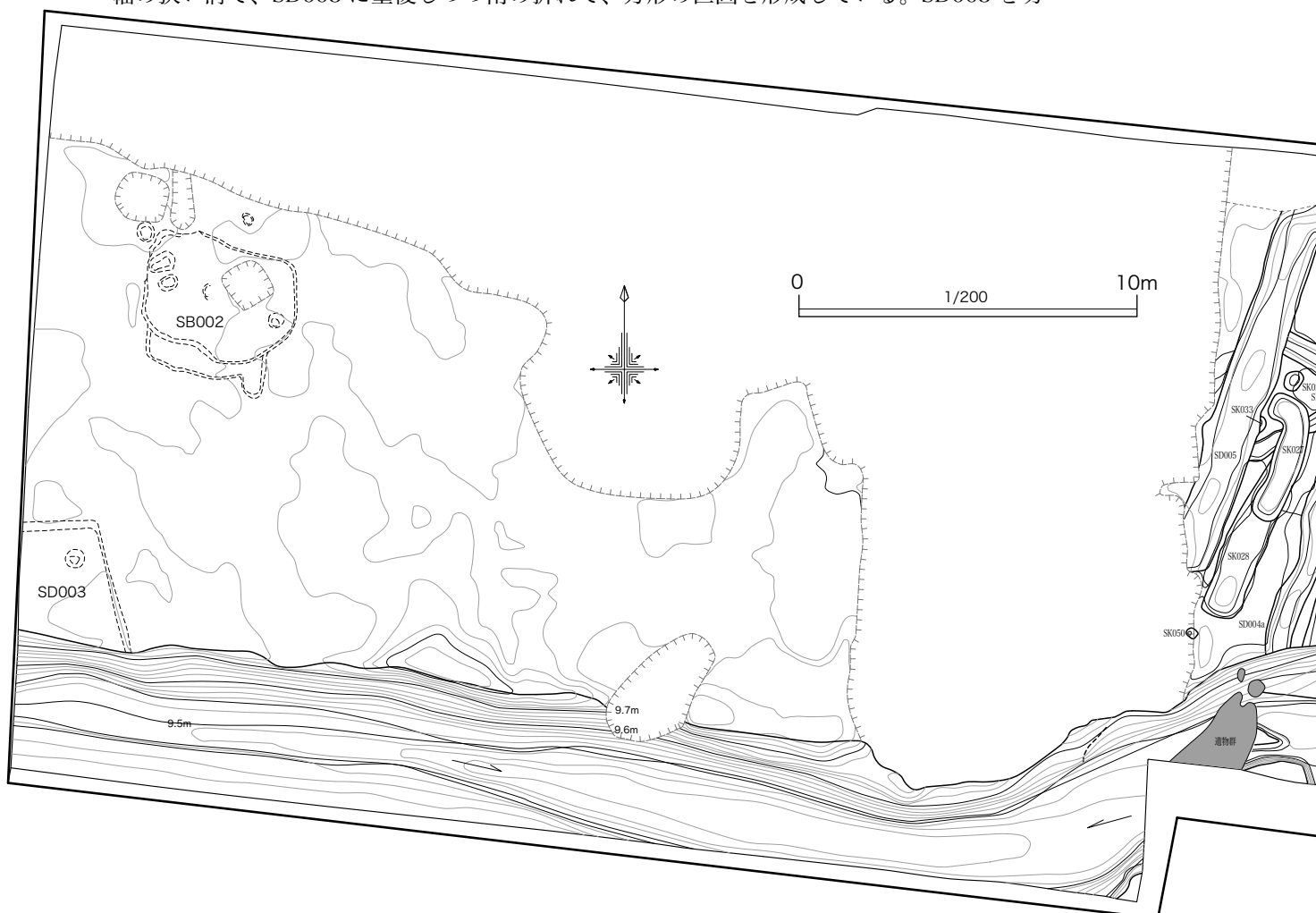
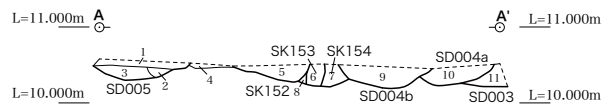


図 3-89 04A 区上面遺構プラン 1/200

SD004・005・SK027 1/100



- 1, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 SD005再掘削後の堆積土
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SD005再掘削後の堆積土
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SD005埋土
- 4, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 斑入) 遺物包含層
- 5, 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂((SK152)埋土)
- 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SK153埋土
- 7, 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SK154埋土
- 8, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入)
- 9, 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SD004a埋土
- 10, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(2.5Y5/6 黄褐色シルト 斑入) SD004b埋土
- 11, 10YR4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SD003埋土



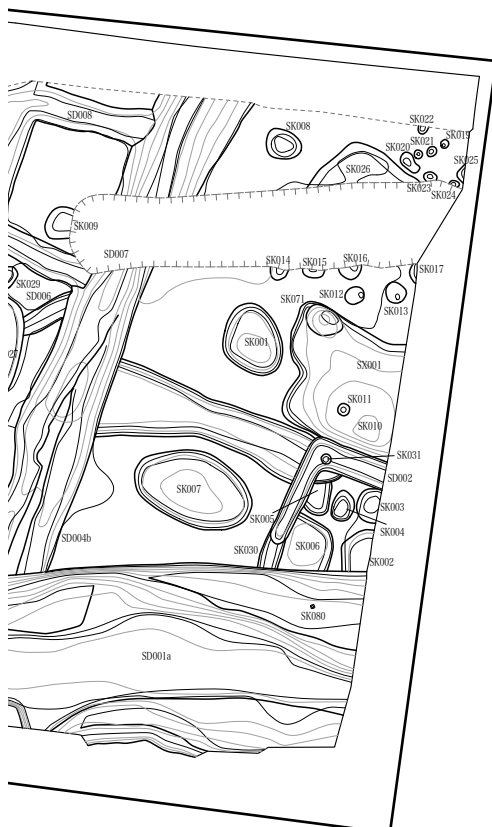
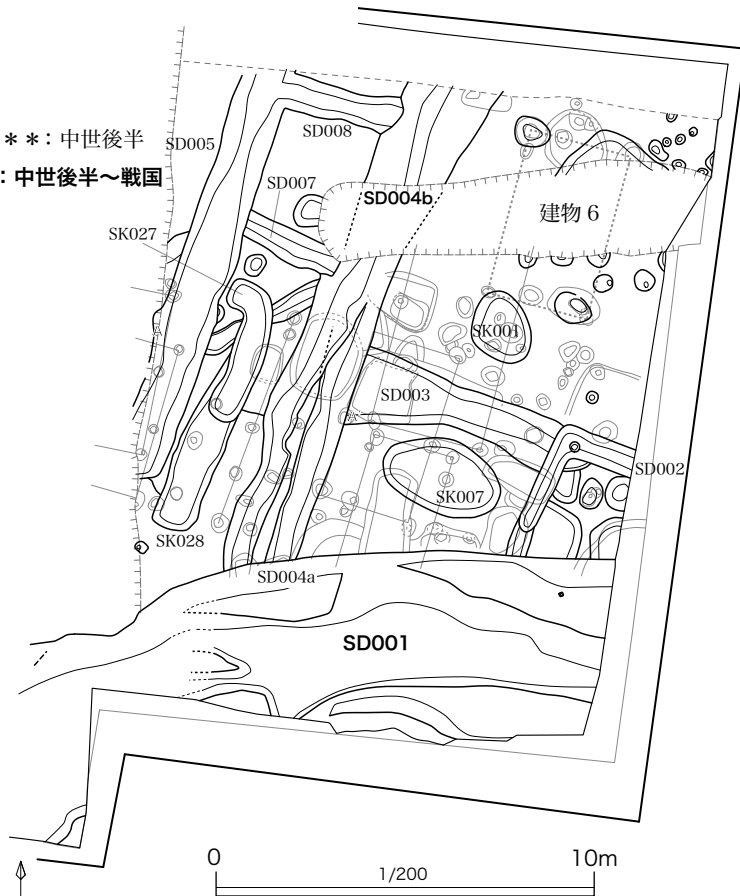
図 3-90 04A-SK012



図 3-91 04A-SK013

SD・SD**：中世後半

SD**：中世後半～戦国



SK**：中世後半

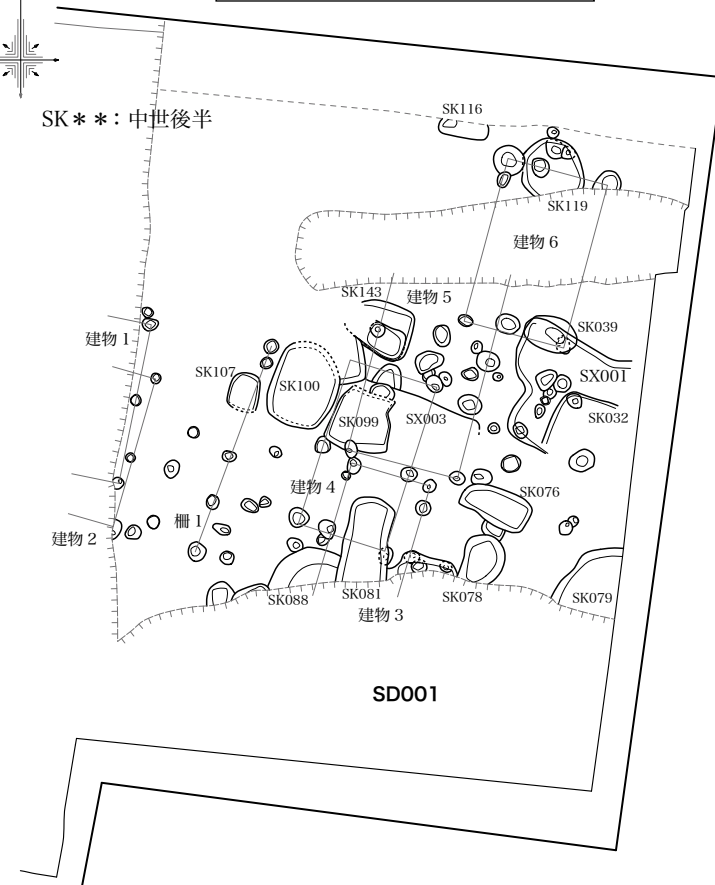


図 3-92 04A 区上面プラン時期区分図 1/200・溝群横断土層セクション 1/100

る SD004a 溝等と並存していた可能性がある。

●中世遺構群の関係

調査区西部が削平されていたために中世の遺構群の展開を把握するには不明な点多々あるが、少なくとも削平されても遺存したであろう井戸が検出されていないことは、SD004a と

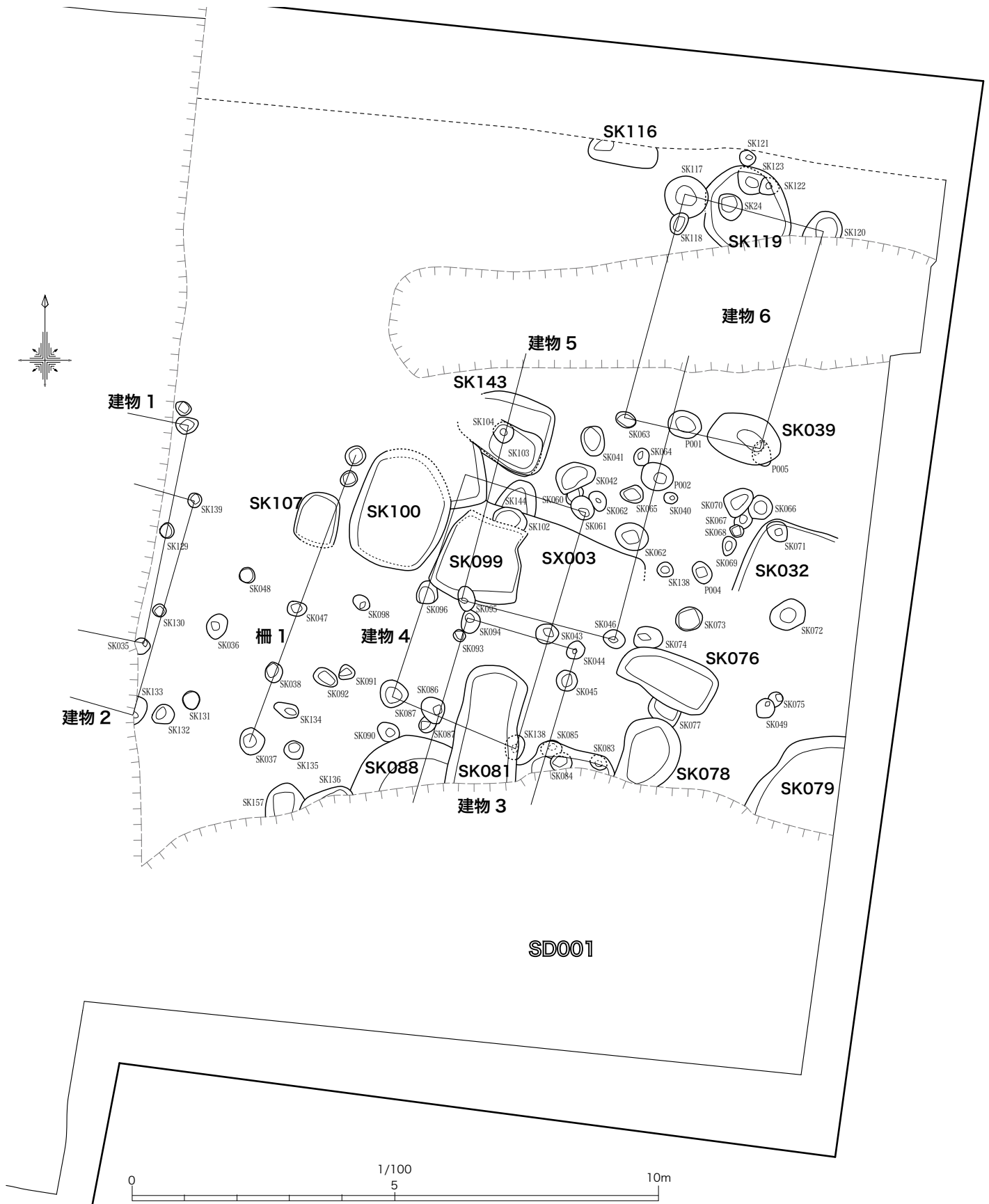


図 3-93 04A 区建物関係プラン 1/100

04A 区 SD001

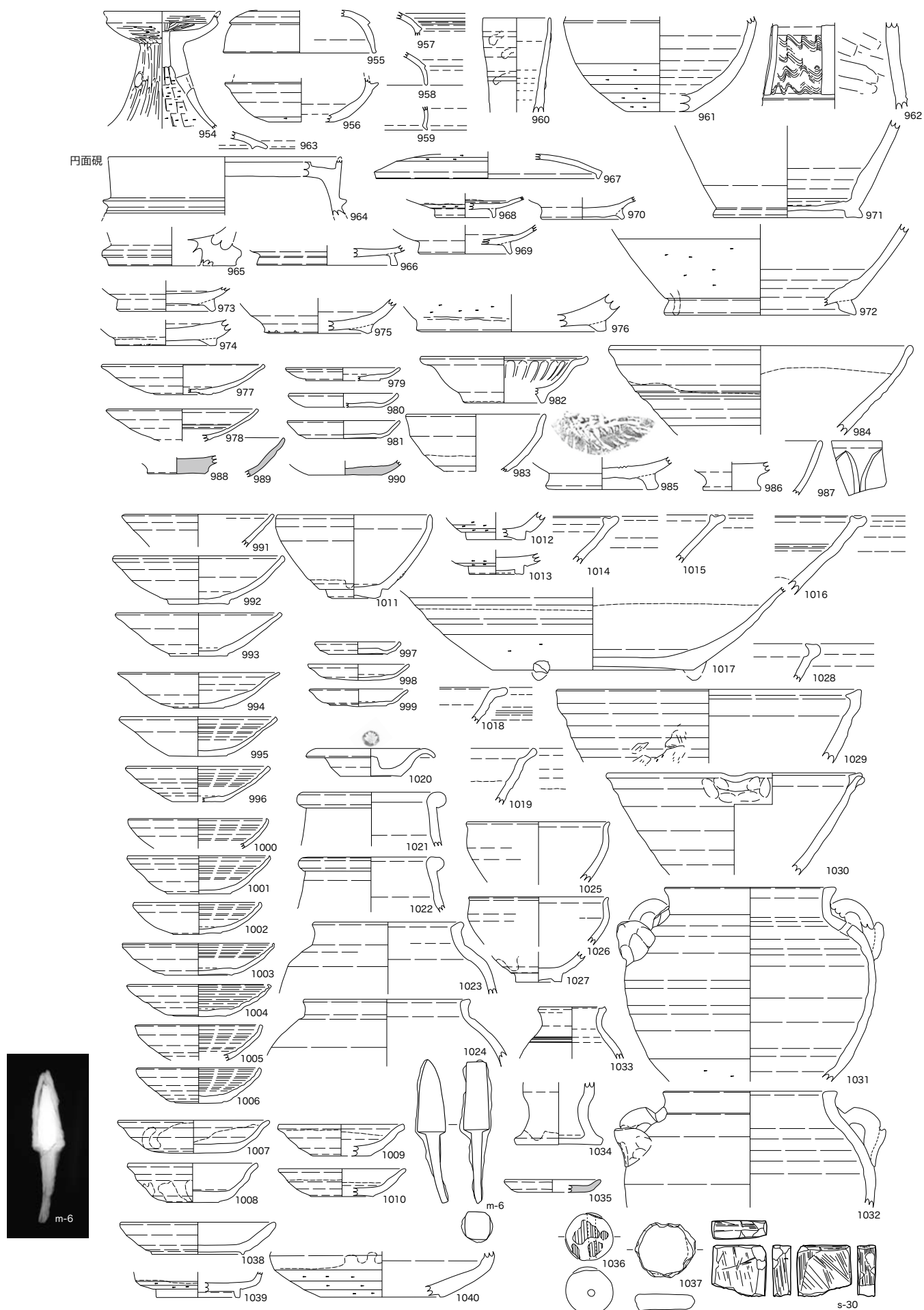


図 3-94 04A 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・石器 1/3・鉄器 1/2)

SD005 の南北軸以西に建物域が広がっていなかったことを示すものとする。集落域の西端として、以西には耕作地（か荒れ地）や墓地が存在したものとする。

05B 区で検出された近世前半の墓群も近世に始まったのではなく、それに先行する中世から引き続いた可能性がある。隣接する畠で 15 世紀前半の碗・小皿が完全な形で出土する点や、そもそもの遺跡名である「御山寺」（呼称は「ごさんじ」、あるいは「ござんじ」）も、墓地にともなう「堂」との関連を示唆する。

一方、以東では狭い範囲であるが遺構が短期に変遷した。戦国期まで下る SD004a と大溝 SD001、山茶碗 11 型式（脇之島）に属す SD008（SD005）、山茶碗 10 型式（大洞東）が出土している SD002 などの溝群と、それらに先行すると推測される建物群である。推定可能な建物で溝群と並存すると推測されるものは、土坑は除き溝との重複関係をもたない建物 6 と柵 1 である。それ以外の建物については溝掘削以前と考えられ、15 世紀前半代に属す。

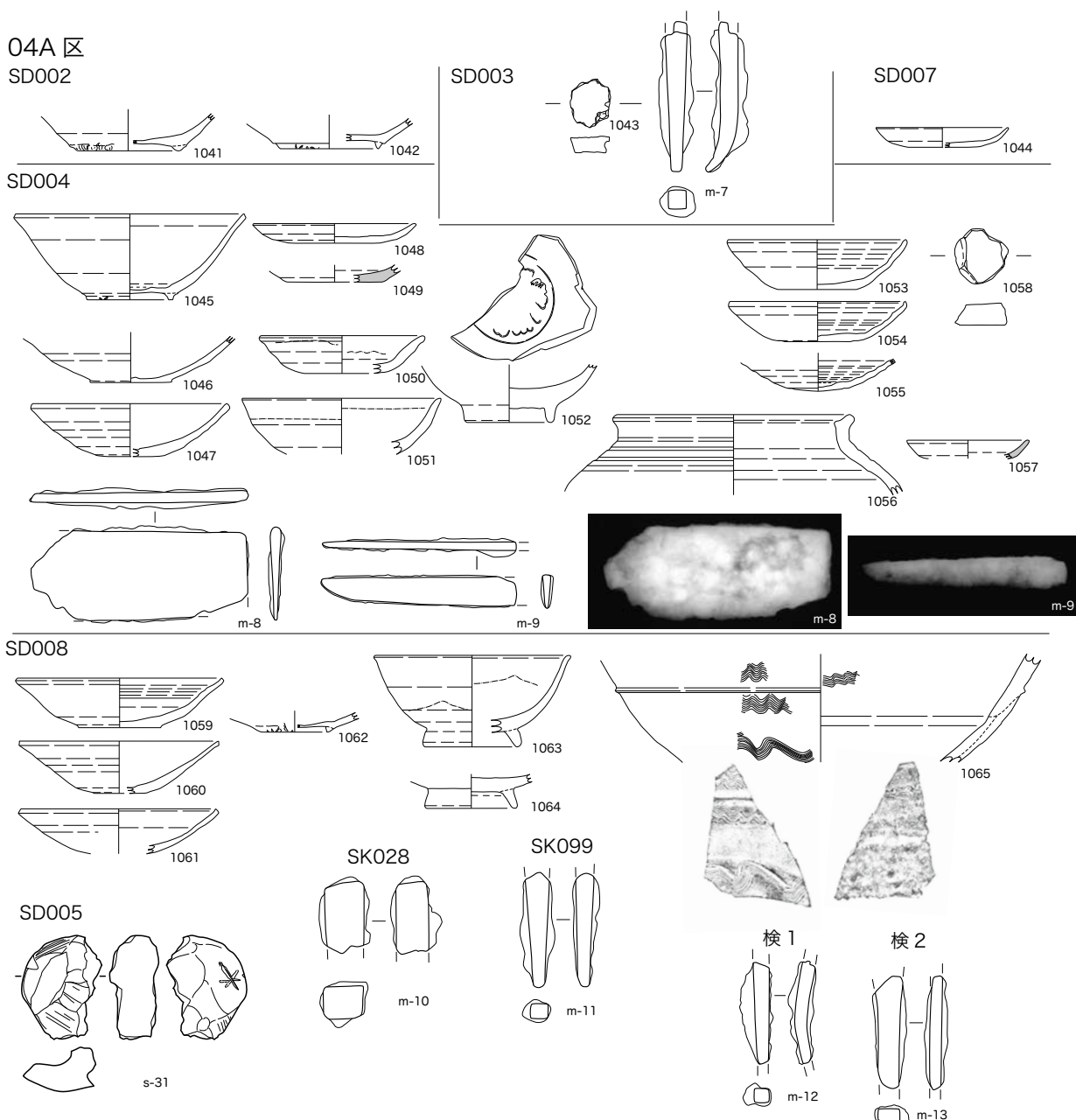
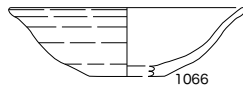


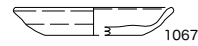
図 3-95 04A 区遺構内出土遺物（2）（加工円盤 1/4・鉄器 1/2）

04A 区

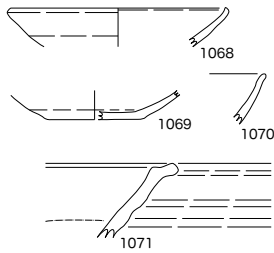
SK001



SK006



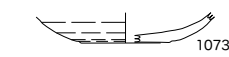
SK007



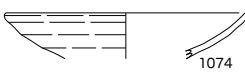
SK012



SK027



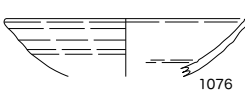
SK032



SK050



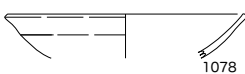
SK081



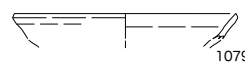
SK082



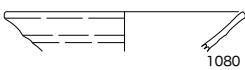
SK086



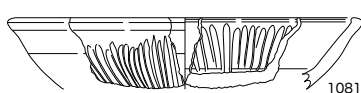
SK101



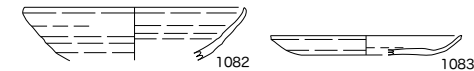
SK103



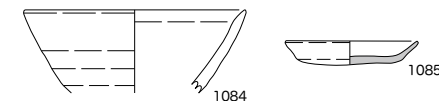
SK119



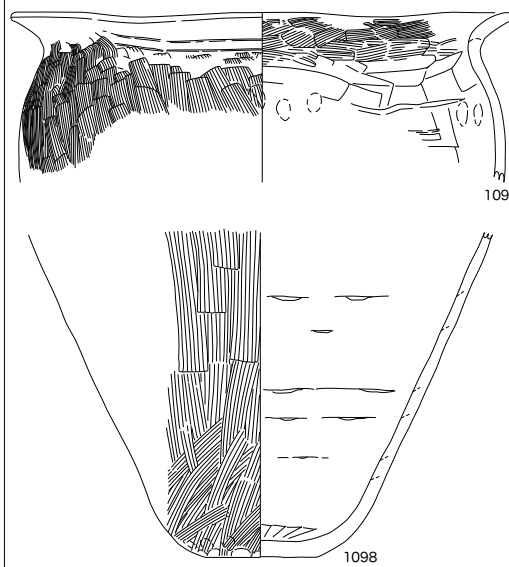
SK120



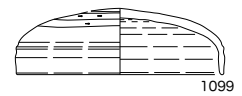
SK124



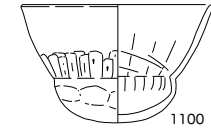
SK002



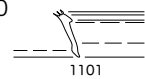
SK045



SK051



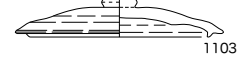
SK090



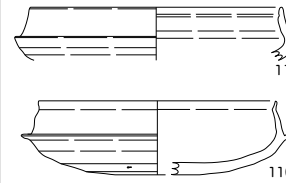
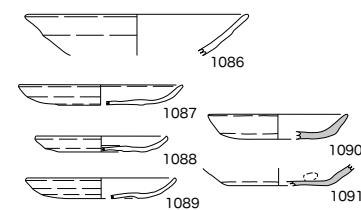
SK100



SK108



SX001



SX002 (SD001 東部中層)

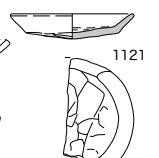
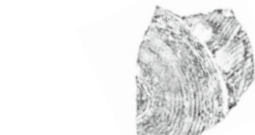
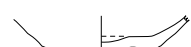
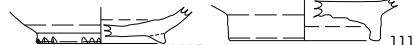
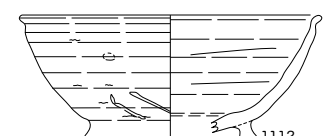
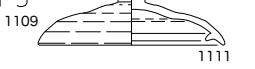
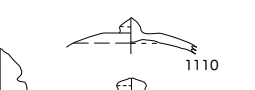
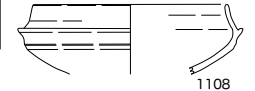
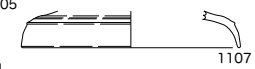
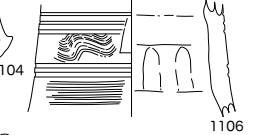
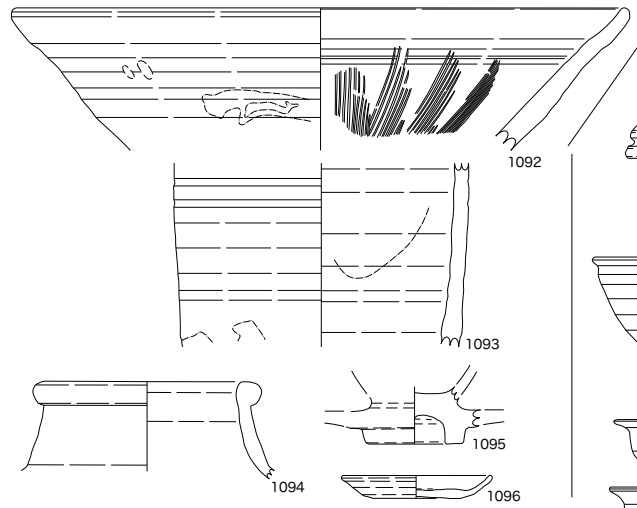
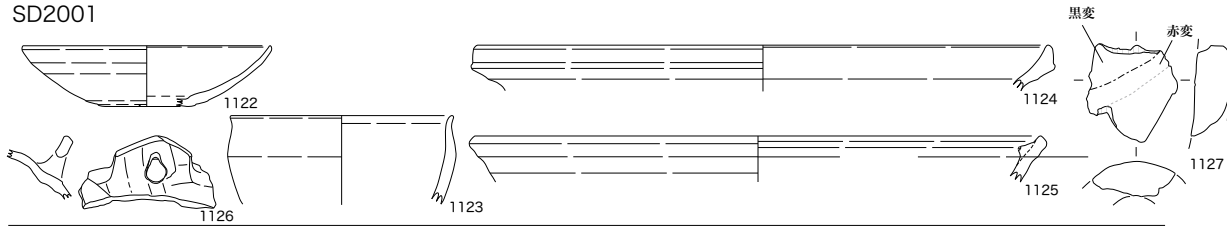


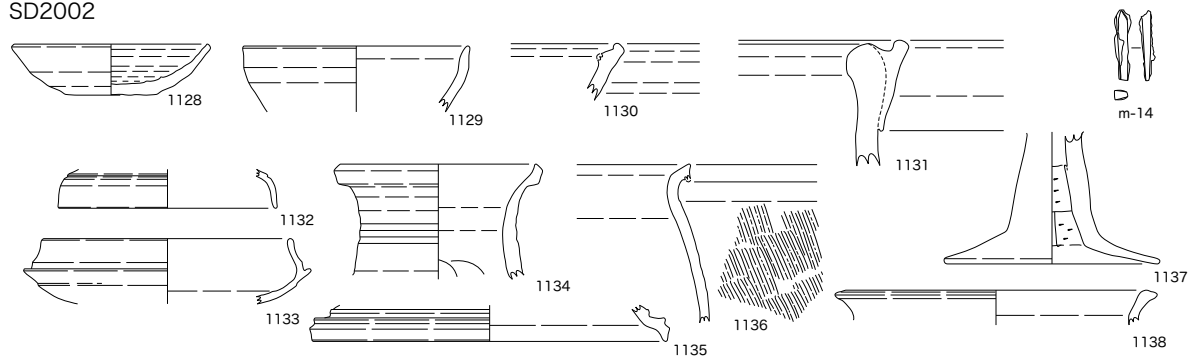
図 3-96 04A 区遺構内出土遺物 (3)

05A 区

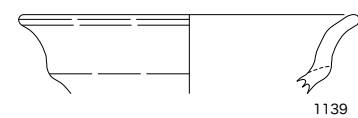
SD2001



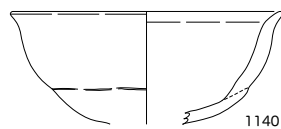
SD2002



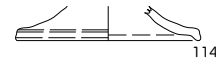
SD2003



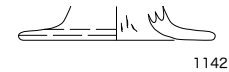
SK2005



SK2007



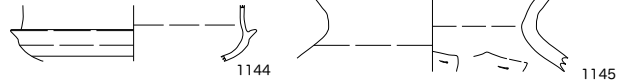
SK2009



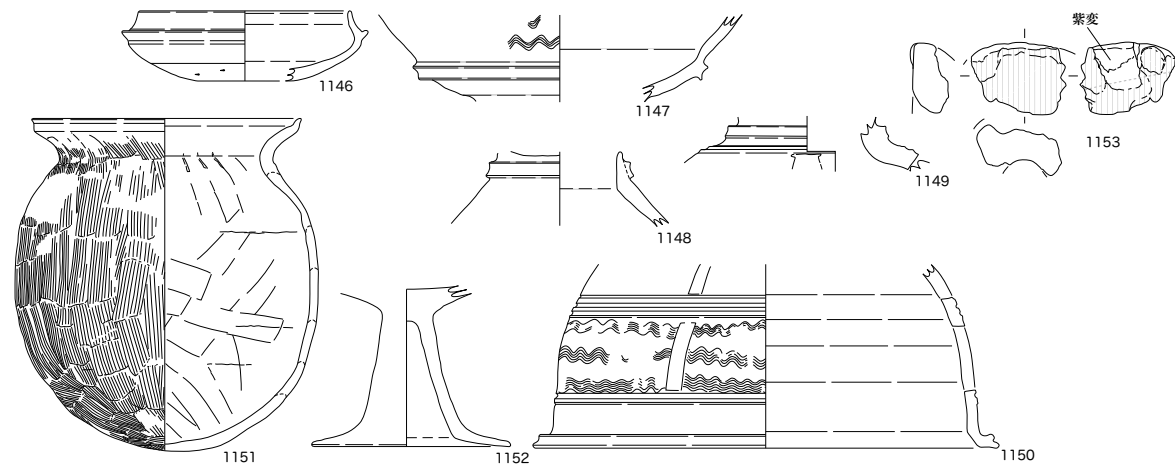
SK1012



SX2001



SX2002



SX2004

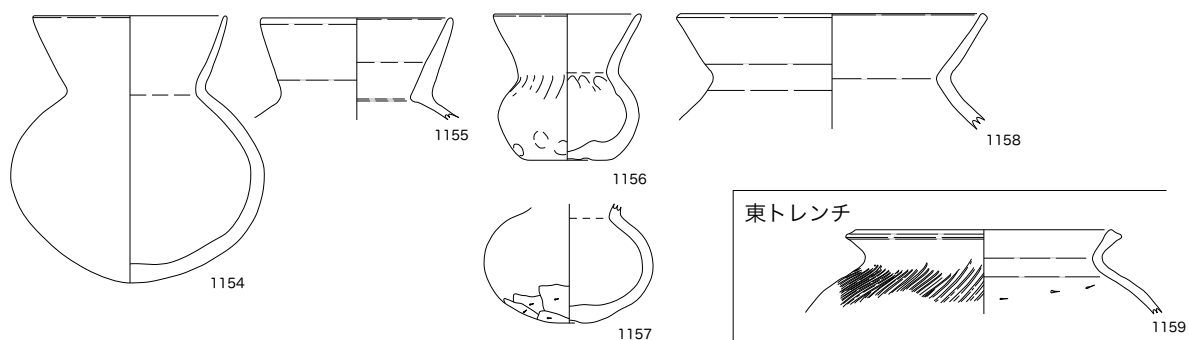
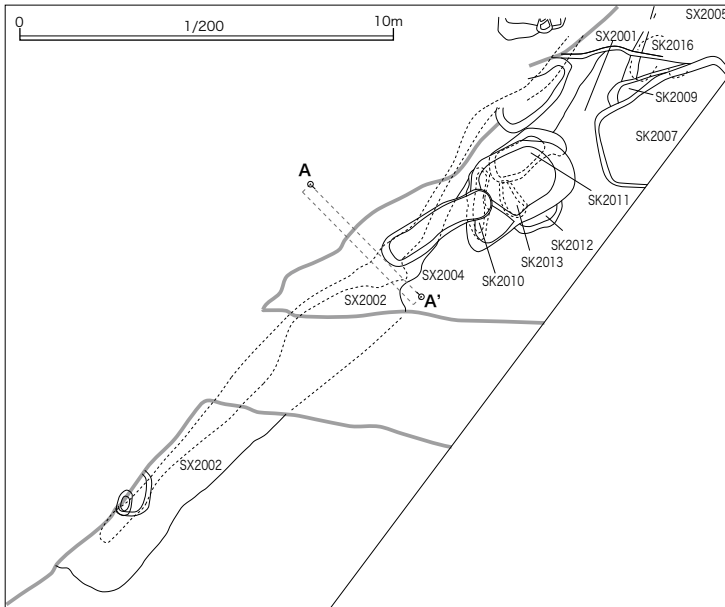


図 3-97 05A 区遺構内出土遺物 (1) (鉄器 1/2・羽口 1/2)



SX2002・2004土層セクション 1/80

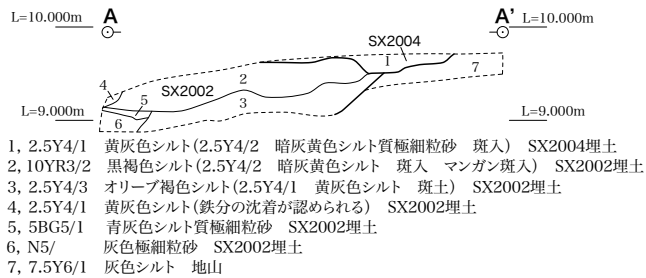


図 3-98 05A 区古墳時代関係遺構群 1/200・土層セクション 1/80

b. 古代以前の遺構と遺物

●河道際の不定形遺構群

05A 区では河道左岸際に、5 世紀から 6 世紀の遺物を含む土坑や帯状の、総じて不定形な遺構群が展開している。

05A-SD2002 に切られるかたちで検出された SX2002・SX2004 は深さが 0.3 ～ 0.4m であり、方向が河道に沿うので流路痕の可能性もある。北壁土層セクションではさらに幾つかの落ち込みが認められる。SX2001 を含めてこれらの堆積層が単に壘重するだけではない、河道際の特種な埋没環境を示している可能性はあるものの、出土遺物を見る限り下層の SX2002 と上層の SX2004 とでは時期的な逆転もあり、堆積層そのものの来歴も問われる。

出土遺物に示されるこれら遺構群の時期は、05B 区で検出された遺構群とは明らかな時期差があり、よって居住域に直接関係しない。

07D 区を含めた河道兩岸の竪穴建物群等を埋没させた洪水後に形成されたものであり、この

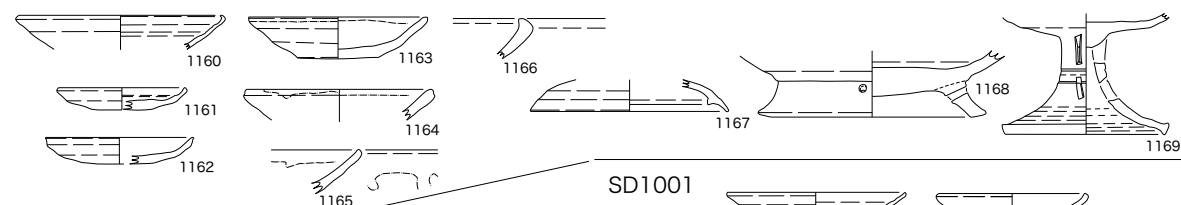
点で北壁から出土した須恵器の器台片は周辺エリアの性格を推測する上で注目に値する。5 ～ 6 世紀の須恵器は 05B 区や 04A 区でも散発的ながら出土しており、器台片 1147 ～ 1150 も



図 3-99 05A-SX2002・2004

05B 区

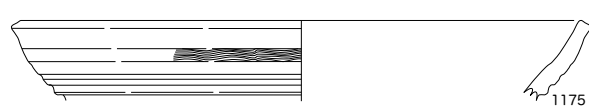
SD001



SD1004



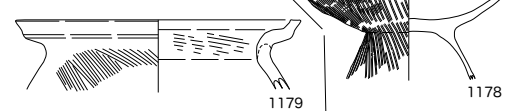
SD1011



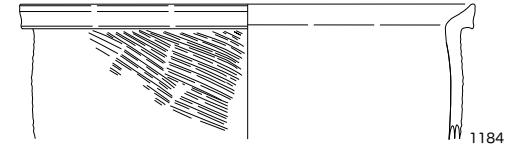
SK1031



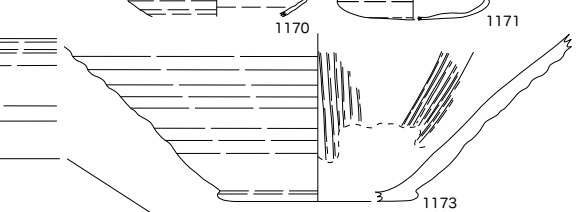
SK1060



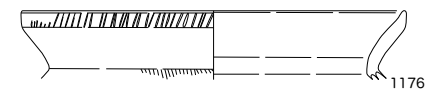
SX1004



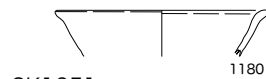
SD1001



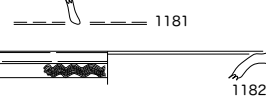
SD1015



SK1043



SK1051

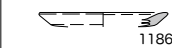


SK1124 (SB003)



墓坑

SK1106

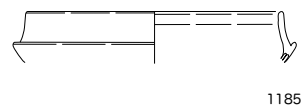


SK1115



白磁

SX1010 (SB1033 上層)



検出

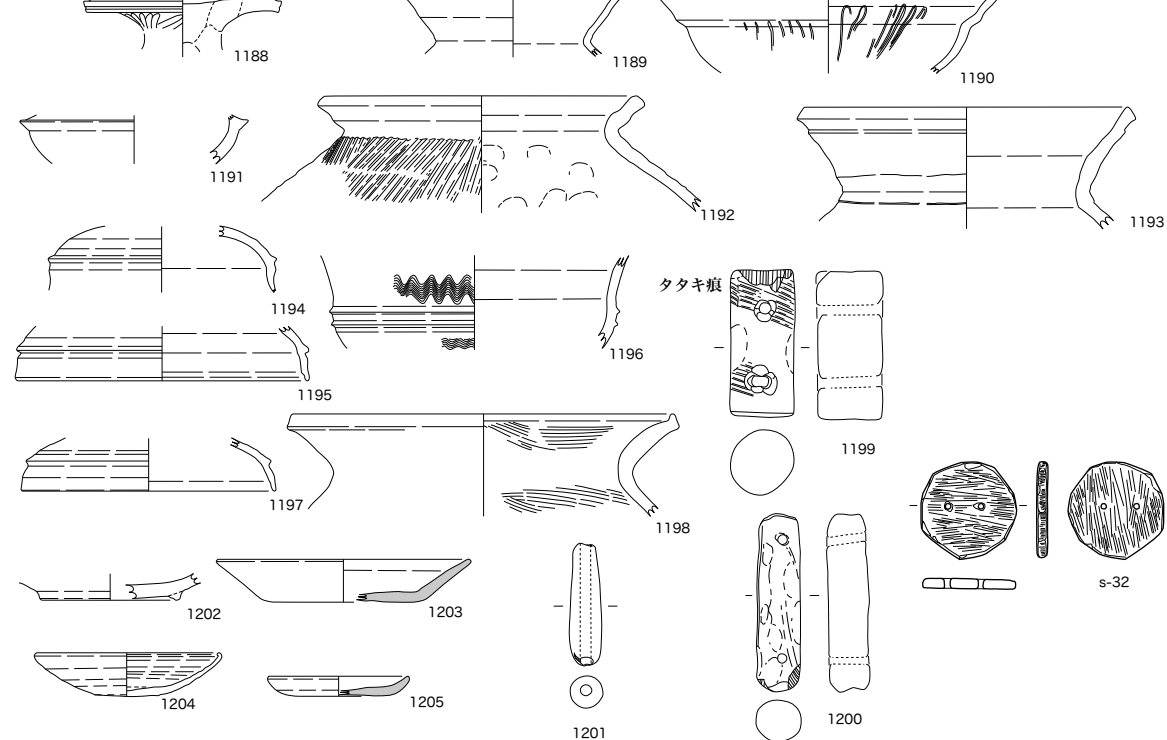


図 3-100 05B 区遺構内出土遺物 (1) (鉄器 1/2・土錘 1/3)

あることから墳墓との関係が疑われる。また、遺構は明確ではなかったが、返り蓋に代表される7世紀以降の遺物も散漫ながら05B区・04A区全域で出土している。注目されるのは04A-SD001から出土した円面硯964で、遺構は04A区に直接結びつかないが、以東の区域とは関係がありそうである。

● 竪穴建物跡群

05B区では表土除去後に直下から竪穴建物跡群が、他の時代の遺構とともに検出された。すでに当時の地表面は失われていたが、05B区・04A区の竪穴建物跡床面高度は、05B区では0.6m程の高度差をもち、竪穴建物の重複度合いからみても十分な地表面の高さが窺える。そして、東の04A区に向かって高度が下降し、さらに東の04B区の遺物集積も標高10m～10.2mの間にあってそれほど高度差はないので、05B区の比高1mが最小値とすれば十分な

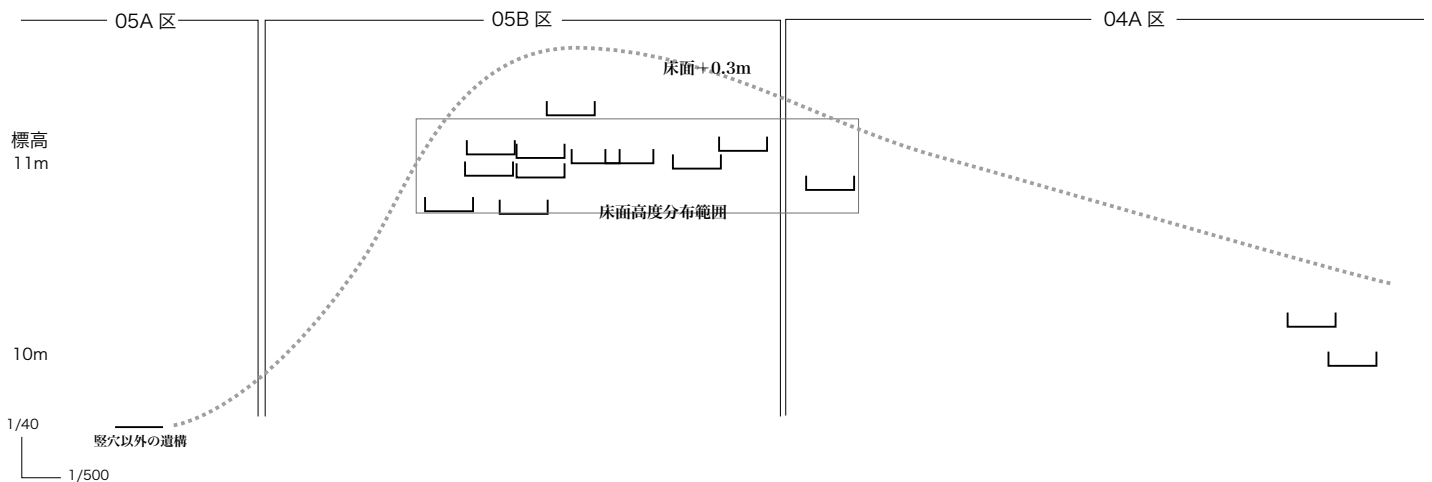


図 3-101 05B 区竪穴建物跡床面高度横断面図

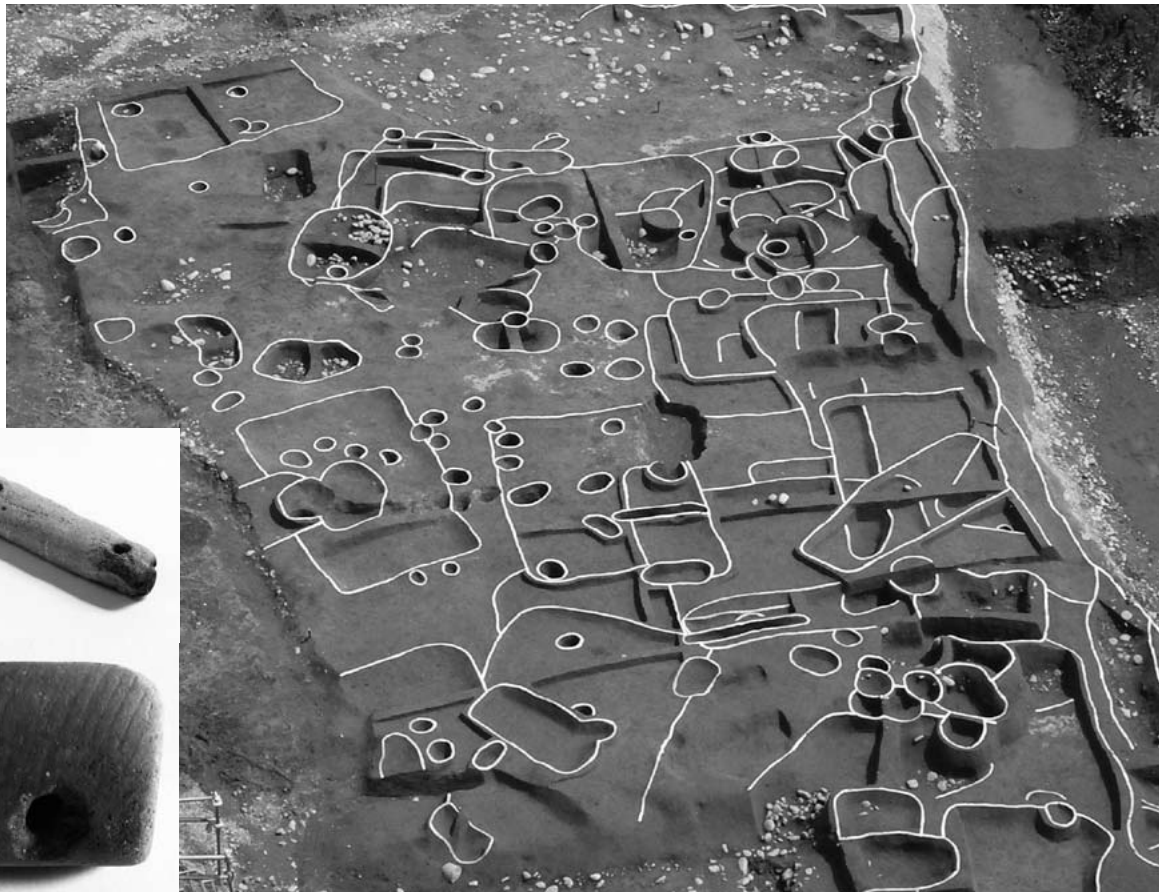


図 3-102 05B 区出土両孔土錘

図 3-103 05B 区古墳前期竪穴建物跡群

高度を保っているといえる。とはいえ、07D 区では標高 11m まで砂層に覆われていたから、洪水の影響から免れていたわけではない。

さて、05B 区で検出された竪穴建物跡は掘り方底面を礫層とし、壁面を砂層とする、きわめて不安定な構造である。07D 区や 04B 区以東が、遺構の壁面下部は別にして上部はシルト層が基盤層であるのとは極めて対照的である。そのため、竪穴建物跡床面は明確な炭化物層を形成（遺存）せず、炉も不確かで認定に困難をともなった。実際、掘り方の検出にとどまったものもある。また、埋土中にしばしば円礫を含むが、単なる覆土層中の礫と床面直上の人為的な遺棄礫なのか、往々にして判断に迷う場面があった。

これら竪穴建物群にともなう若干の土坑は存在するが、07D 区・07E 区で検出されたような溝は伴わない。



図 3-104 05B-SB1029 遺物出土状況



図 3-105 05B-SB1029 完掘状況



図 3-106 04A-SB003 西壁土層セクション

05B-SB1029

下部に SB1030・SB1006、上部に SB1022 が重複して、異様に建て込んでいる。このうち、まとまった遺物が出土したのが SB1029 である。遺物は床面直上からの出土ではないようで、廃絶後の投棄と思われる。掘り方底面では礫層が露出し、柱穴にも礫が含まれていたが、根石ではない。床面からの深さを考慮しても支柱を支えるだけの深さは無いので、上屋も軽量な、簡易な構造であったと考えられる。

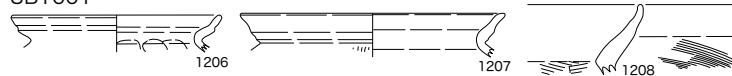
05B-SB003・

04A-SB003

05B 区と 04A 区にまたがる竪穴建物跡で、プランはやや台形状を呈する。床面は遺存せず、掘り方底面からは両面から剥離が施されたマサカリ状の石器が出土した。剥離技術と

05B 区

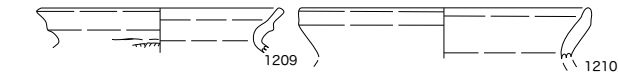
SB1001



SB1003



SB1002



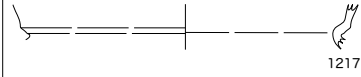
SB1004



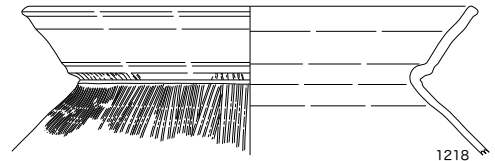
SB1005



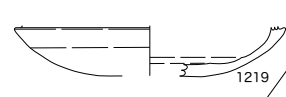
SB1007



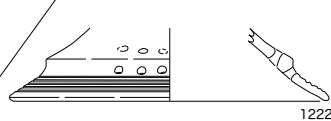
SB1006



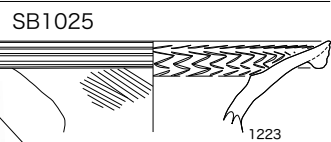
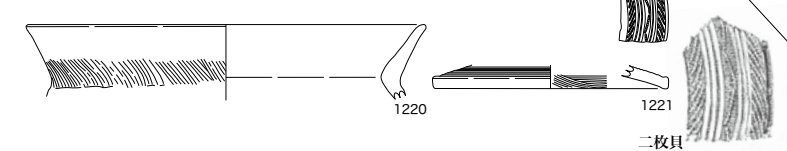
SB1017



SB1028

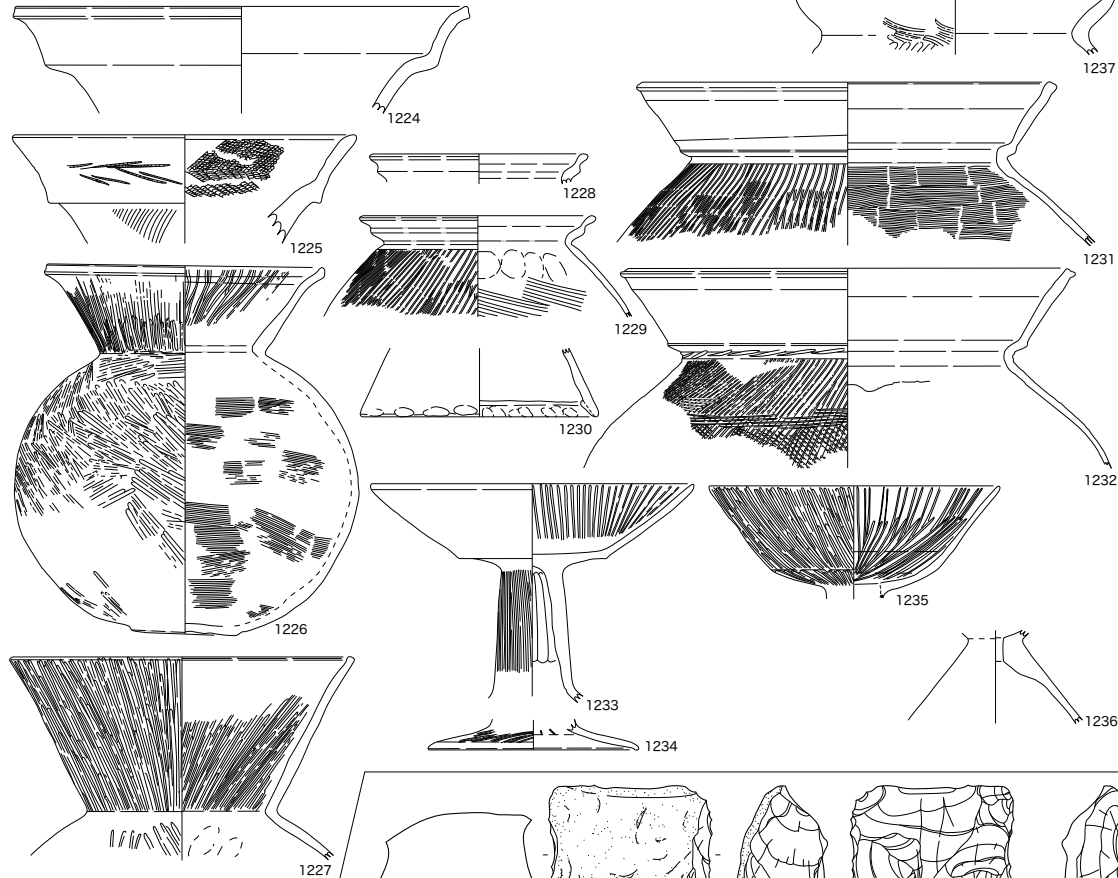


SB1023

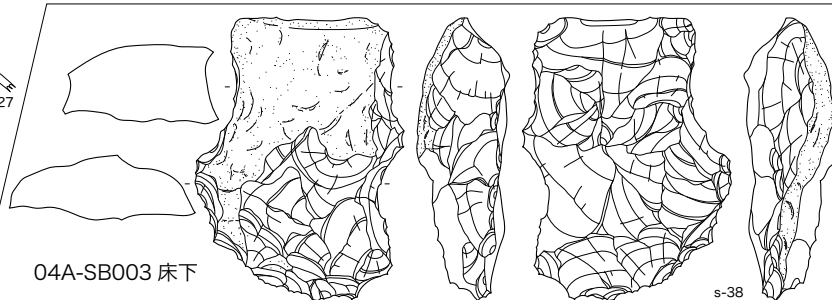


二枚貝

SB1029



04A-SB003 床下



s-38

いう点では古墳前期も終末であり違和感もあるが、居住環境の砂礫のあり方は木曽川中上流域や中部高地に通じるものがある。

04A-SB001・SB004

下部に SB001、上部に SB004 が重複している。SB001 のプランは北西 - 南東の長軸をもつ細長い台形で、07D-SB331 に共通している。SB004 は反対に北東 - 南西に長軸をもつ台形状のプランで、覆土には炭化物が多量に含まれていたが、焼失家屋ではない。竪穴建物の掘削・

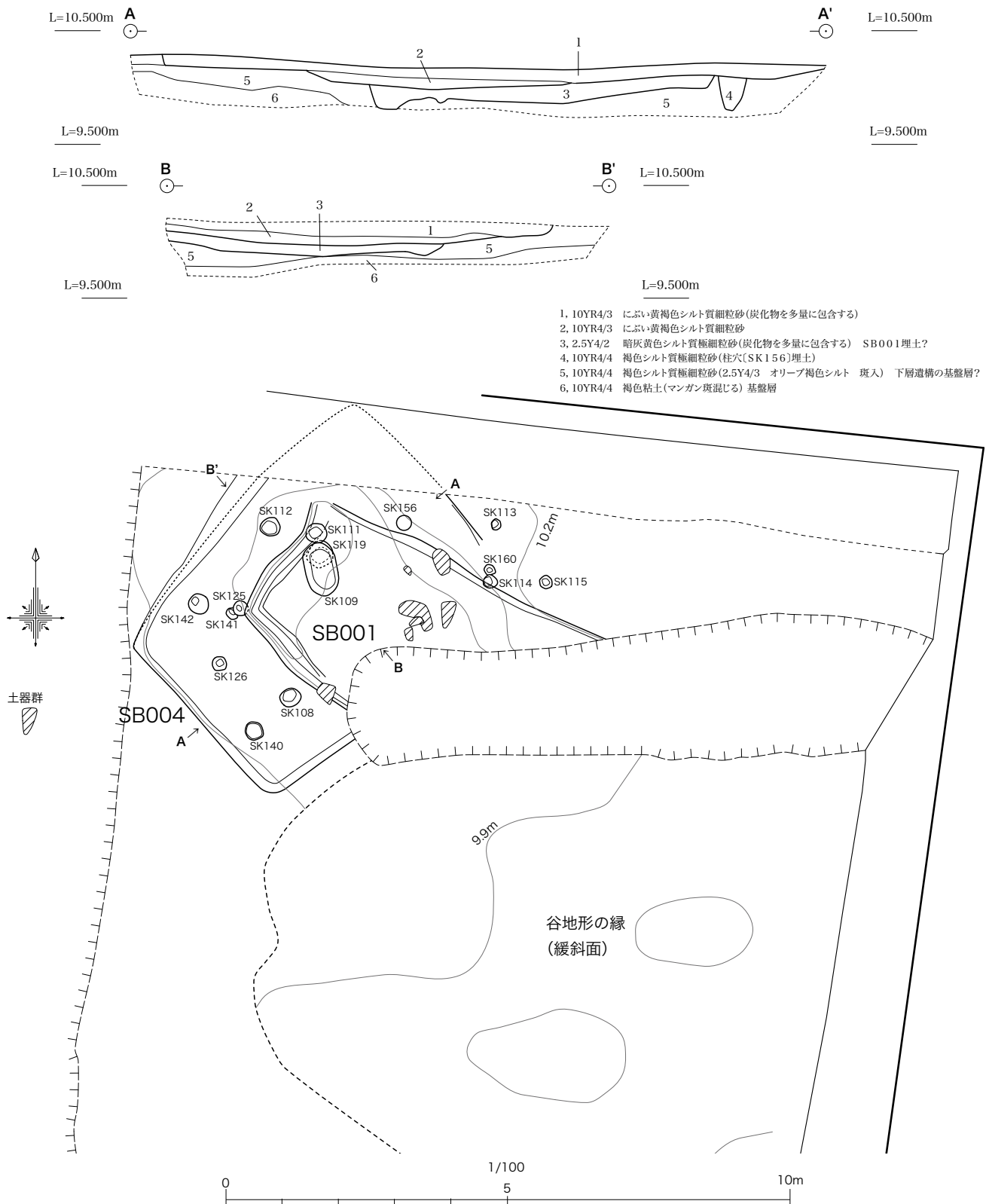


図 3-110 04A 区東部竪穴建物群プラン 1/100・土層セクション 1/50



図 3-111 O4A-SB004 遺物出土状況

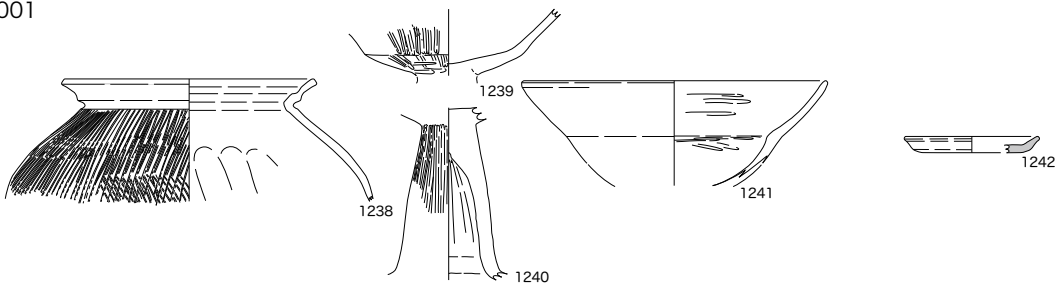
整地の繰り返しの中で炭化物が均質化されたのであろう。

SB004 には多量の土器が投棄され、上部を洪水性の均質な細粒砂が覆っていたので、廃棄の時間幅は別にして、最終段階における埋没の同時性は言えるだろう。

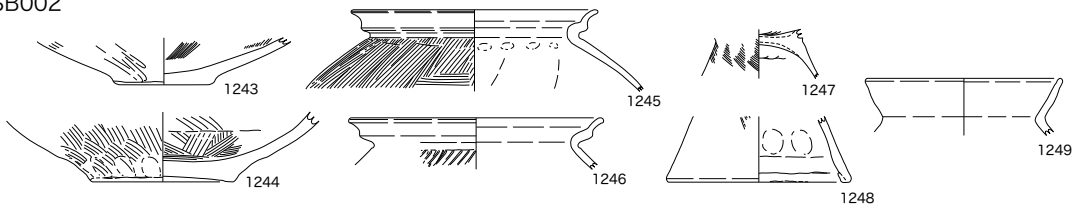
これら竪穴建物跡の南東下部には炭化物や土器片を含む層位が東に下降して堆積していた。調査区内での傾斜は大きくはないが、東に存在したと推定される谷地形(旧

04A 区

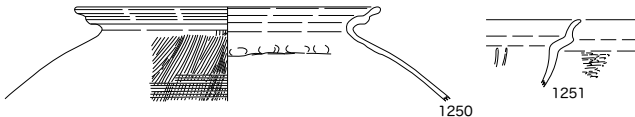
SB001



SB002



SB003



検出

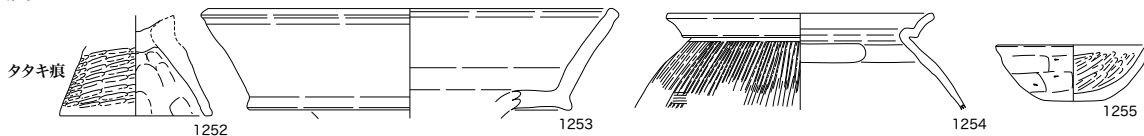


図 3-112 04A 区遺構内出土遺物 (1)

河道) の縁辺にあたると考えられる。堆積層の時期は弥生後期終末である。

旧河道の炭化物や遺物の由来を想像するに、04A 区では同時期の遺構は未検出だから、高度が高くなる調査区以北に当該期の遺構群が展開している可能性は高い。05B 区における竪穴建物跡群の建て込み具合も標高が高かったからだとすれば、より高度を増す調査区以北に中心地区が存在した可能性は高いとみるべきだろう。後述する 04B 区では調査区西壁下部から完形の甕 (図 3-150 : 1742) が転位して出土しており、流れ込みと考えられる。

●遺物の特徴

05B-SB1029

S 字甕 D 類、S 字甕系有段口縁台付甕、屈折脚高杯、小形器台が出土しており、松河戸 1 式のまとまった資料群である。

04A 区
SB004

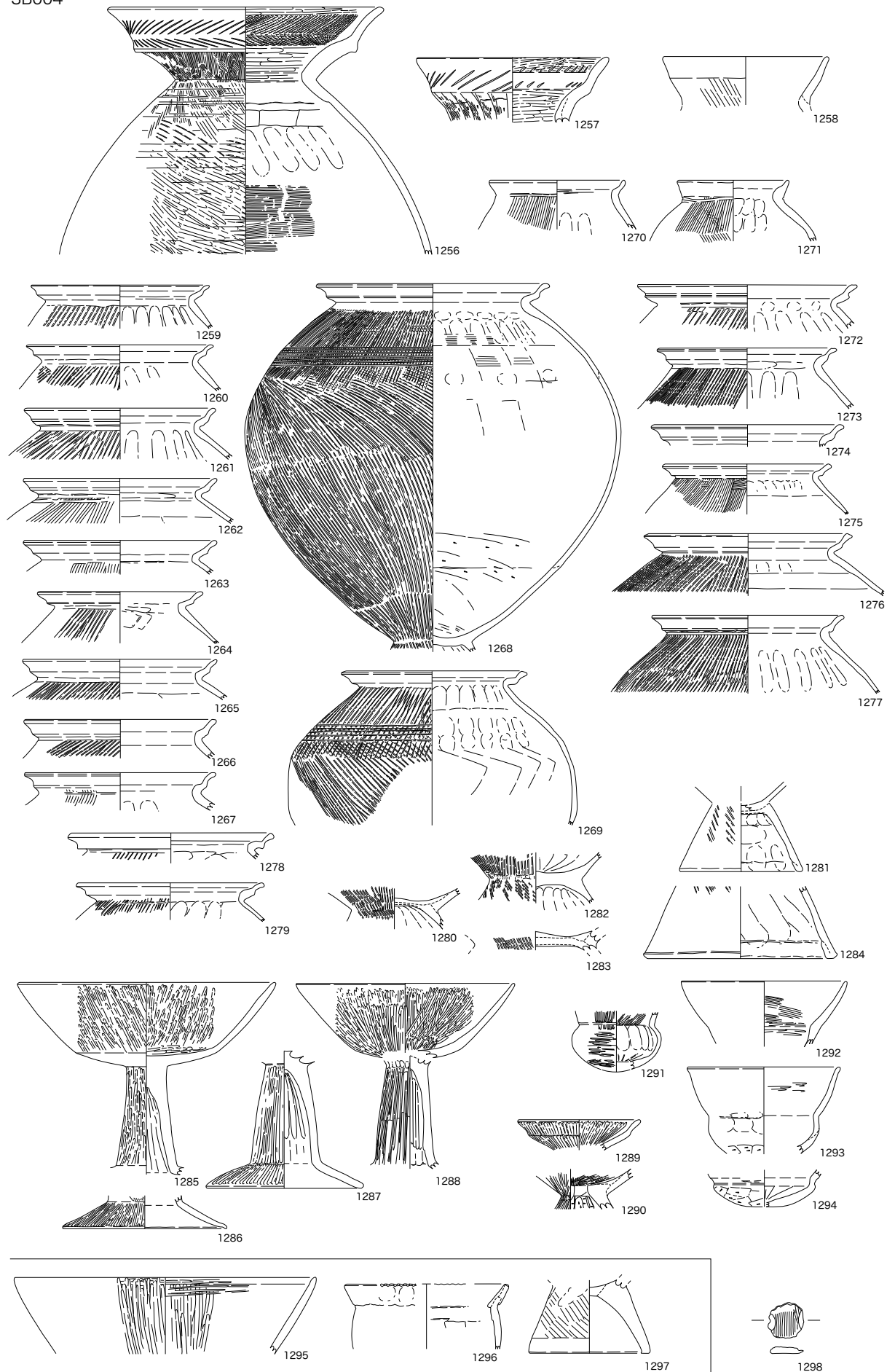


図 3-113 04A 区遺構内出土遺物 (2) (加工円盤 1/4)

04A-SB004

柳ヶ坪形壺、S字甕C類及びD類、屈折脚高杯が出土しており、松河戸1式に属す。柳ヶ坪形壺の1点はへうで羽状紋を施しており、模倣品である。S字甕C類は多量で口縁部形態はバリエーションに富み、口縁端部も丸いものから肥厚するものまで多岐にわたる。そのうち、1269の口縁端部は面取りが明確なのに肩部ヨコハケメが施されC類とD類の中間的様相をもち、肩部ヨコハケメの有無しか両類を識別する指標は無い。高杯はすべて屈折脚をもち、在来形は出土していない。1286は端部が指摘みで繊細に仕上げられ、器壁も薄くミガキも丁寧に精良な作りであるのに対し、他は脚端部は厚いので模倣品であろう。

その他

遺構内では05B-SB1004からガラス玉、05B-SB1011から滑石製白玉が2点出土した。壺

05A区

北壁土層セクション 1/100

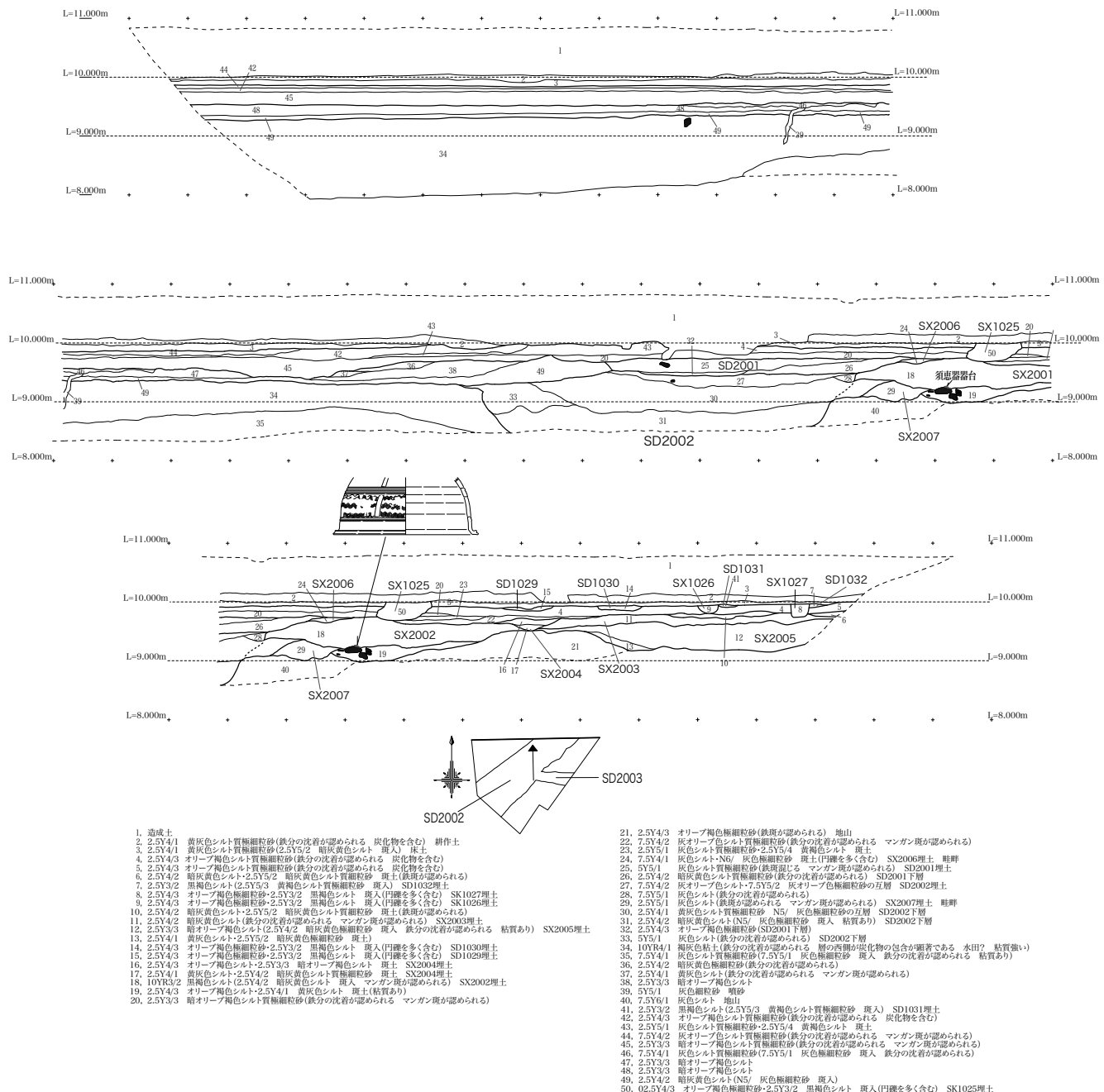


図 3-114 05A区北壁土層セクション 1/100

穴建物跡覆土の篩かけも行ったが追加資料は得られなかったので、包含されていたのは覆土上部であったのかもしれない。。05B-SK319からは滑石製双孔円盤片が出土した。

遺構外では、もう1点の滑石製双孔円盤と両孔土錘が2点出土した。双孔円盤は完形品で

05A 区南壁土層セクション 1/100

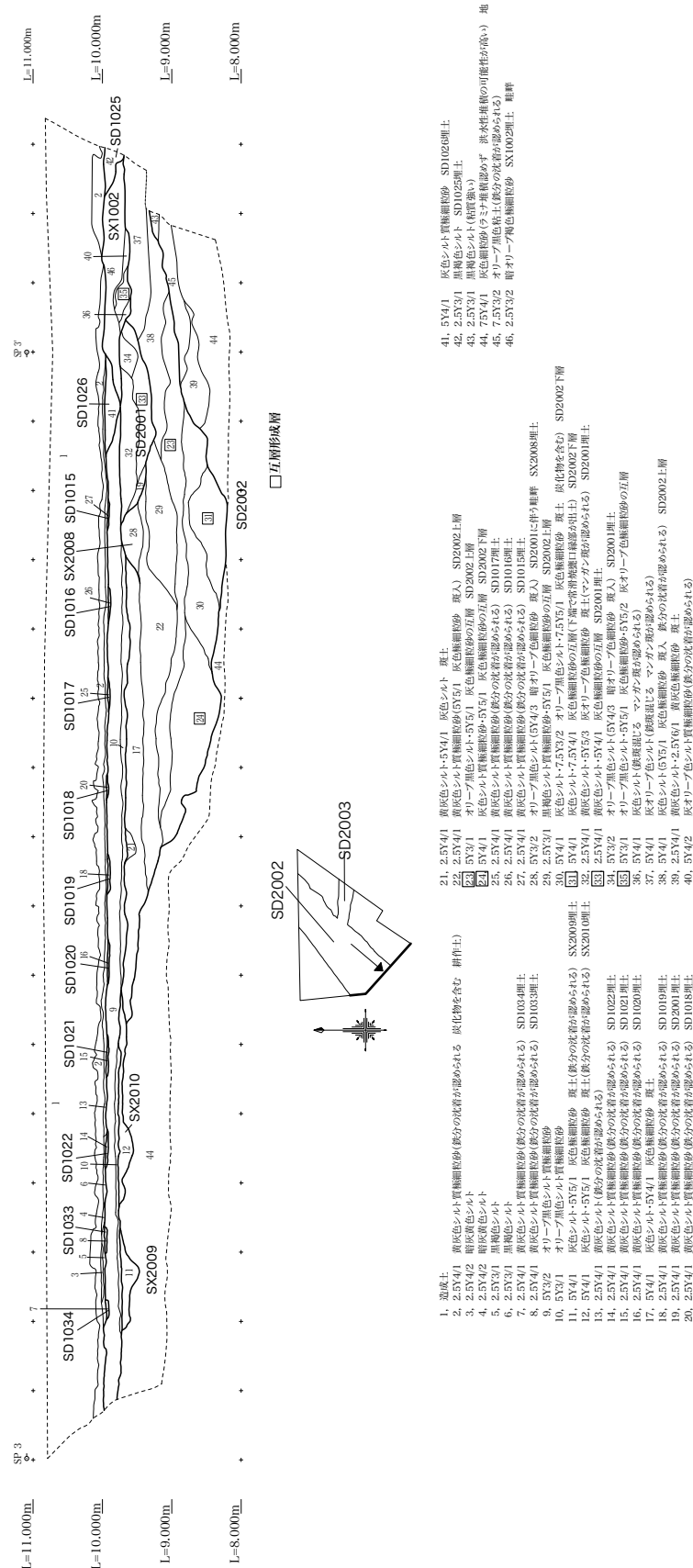


図 3-115 05A 区南壁土層セクション 1/100

05B 区
南壁土層セクション 1/100

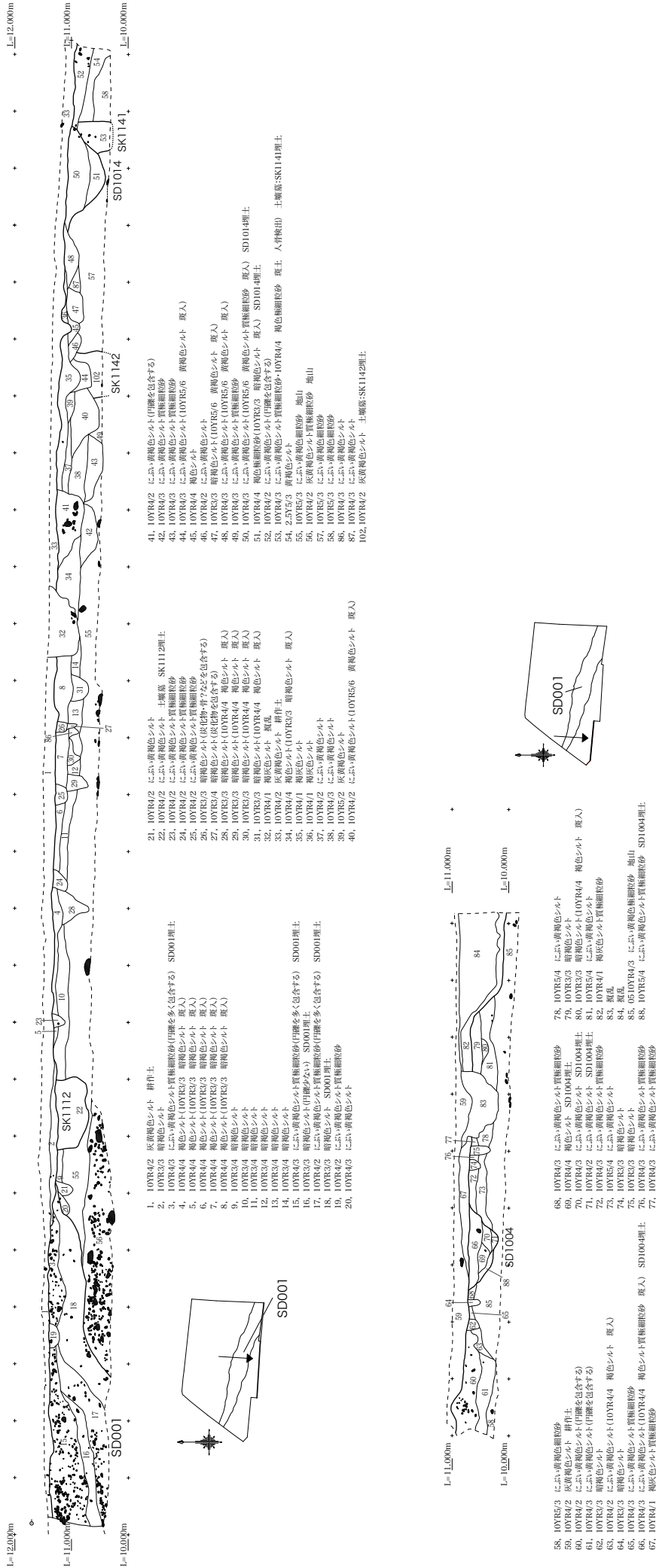


図 3-116 05B 区南壁土層セクション 1/100

あり、周囲は多角形状を呈する。両孔土錘のうち、やや細長い 1200 は手づくね成形で本来の形状と思われるが、太めの 1199 はタタキ様の整形が施されて、胎土も茶褐色系の色調で異なる。

04A区東壁土層セクション 1/100

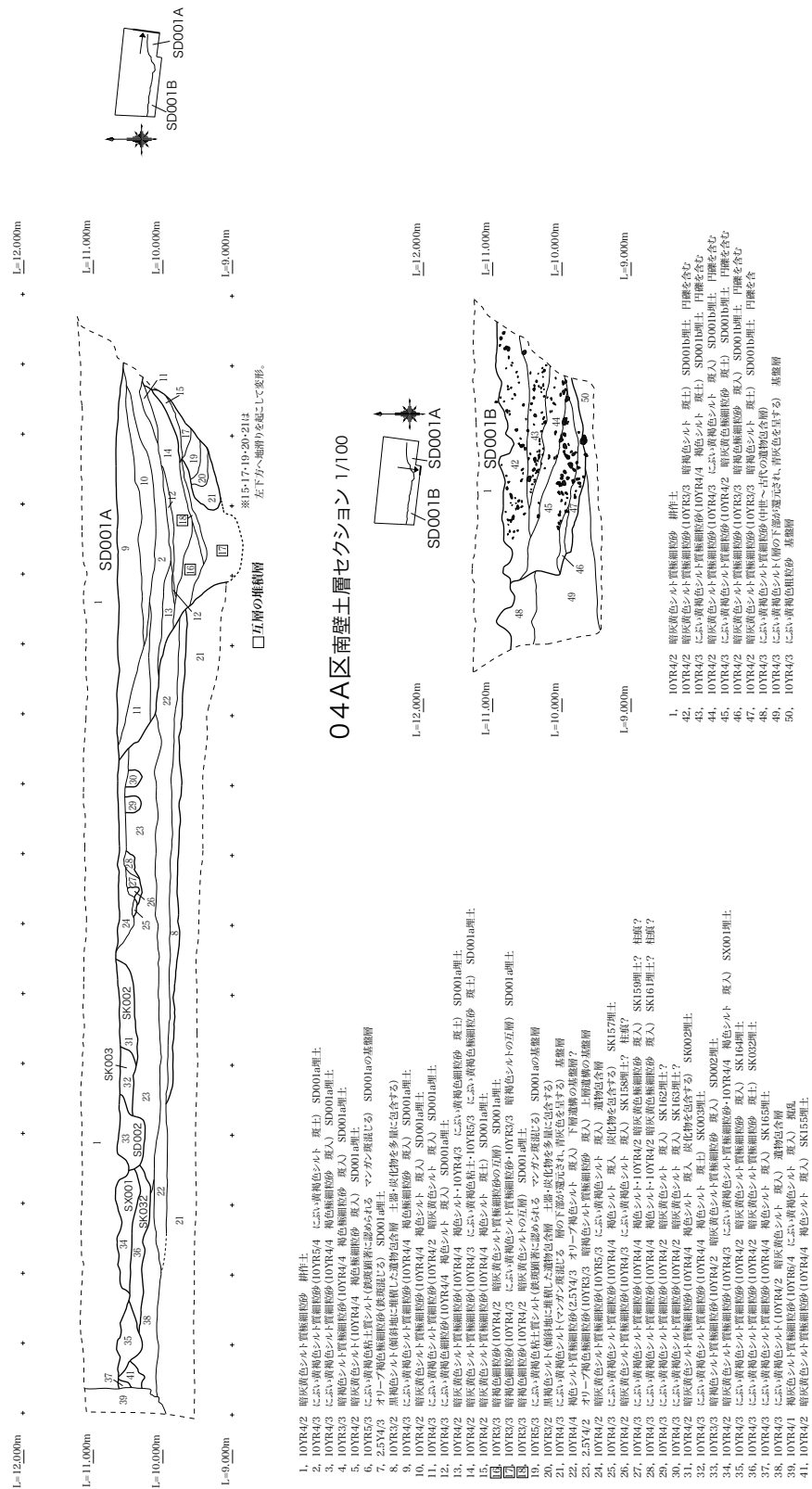


図 3-117 04A 区東壁土層セクション 1/100

04B・05C・05D 区

a. 中世以降の遺構と遺物

●概要

他の調査区に比べて遺構が濃密に分布する。比較的、幅が広い溝は掘り直しが複数回行われ、時期認定に困難を伴った。

04B 区東部から 05C 区では白っぽい色調で、シルトから細粒砂へと粒度変化をみせる洪水性と推測される土層が表土下に部分的に堆積しており、遺構面数の把握に整合性を欠いている可能性がある。

04B 区では中世は上下 2 面で調査し、さらに 3 面目が古代面となったが、2 面目で古代の遺構に遭遇したし、3 面でも中世の土坑を検出した。

●04B 区上面遺構群

山茶碗 11 型式（脇之島）を中心にして、近世初期の土坑や溝、遺物集積までを含む。中世遺構については地表面の更新があり、大窯期まで下る新期と山茶碗 11 型式に収まる古期の 2 時期に区分できる。

近世の土坑のうち大型のもの（SK011・SX001）は、大きな地山土の塊を含んで攪拌した様子は無く、単なる掘り返し（天地返し）のような状況を示すものがある。これらは中世遺構の埋没状況とは無関係に掘削されており、地表面が不連続であった可能性が高い。いっぽう、SD003a と SD006 が交差するあたりに掘られた土坑（SK013・SK347）は不定形だが、もともと窪地状の部分に重複して掘削されているようで、複雑な堆積を示し、下部遺構の検出に手間取るとともに、そのために肝心な情報を逃したことが悔やまれる。遺構相互の関係を整理するのに手間取ったのもこのあたりの遺構群である。

調査区西部に溝群、東部に土坑群が展開し、さらに南部には大溝 SD001・SD002 があり、南壁セクションで SD001 は SD002 がほぼ埋没して後に掘削されていることを確認した。

溝は屈曲しつつ並行する幾筋（SD003a・SD005・SD011）に加えて、北北東から南南西に走る SD004 が空間分割の基軸に沿っている。しかし、後述するように、SD004 以前にも幾筋もの溝が掘削されており、そうした空間であったから SD004 の掘削につながったと考えられる。これらの溝群に囲まれた北西からは、恐らく桶組と推定される井戸：SE001 が検出されている。

SD004 の東では東西・南北に長軸をもつ長方形土坑が展開している。深さは 10cm 程しか無く残欠で、遺物もほとんど出土していないが、配置状況からみて土坑墓群の可能性が高い。

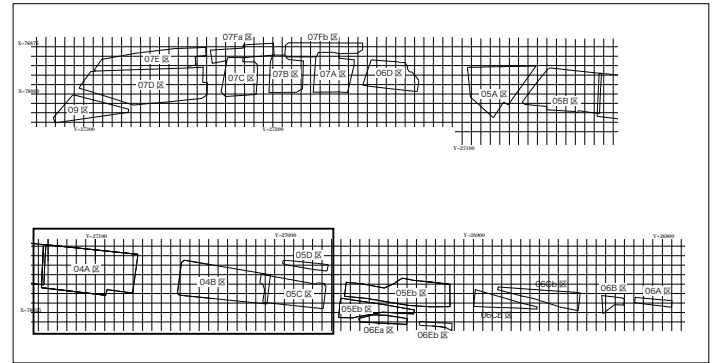
これら土坑群と対になるかのように近世の SD007・008・009 が中世後半の SD021 と方格を構成している。前者が中世後半に遡るのかどうかはわからないが、基本軸の継続を示していると考えられる。

04B-SD002

大溝 04B-SD001 に切られる。湧水のために底面まで掘削できなかったが、標高 9.3m まで掘り下げた。埋土下部は互層になっており、規則的な水流による堆積の進行が窺えるが、果たして溝であったのかどうかは確証が無い。埋土は標高 9.45m ～ 10.65m は斑土からなる整地層で、04B-SD001 の掘削に伴うものであろう。古期に属す。

04B-SD003a・SD011

重複関係では最も新しい溝（幅 1.2m、深さ 0.5m、底面標高 10m）で微妙なカーブを描い



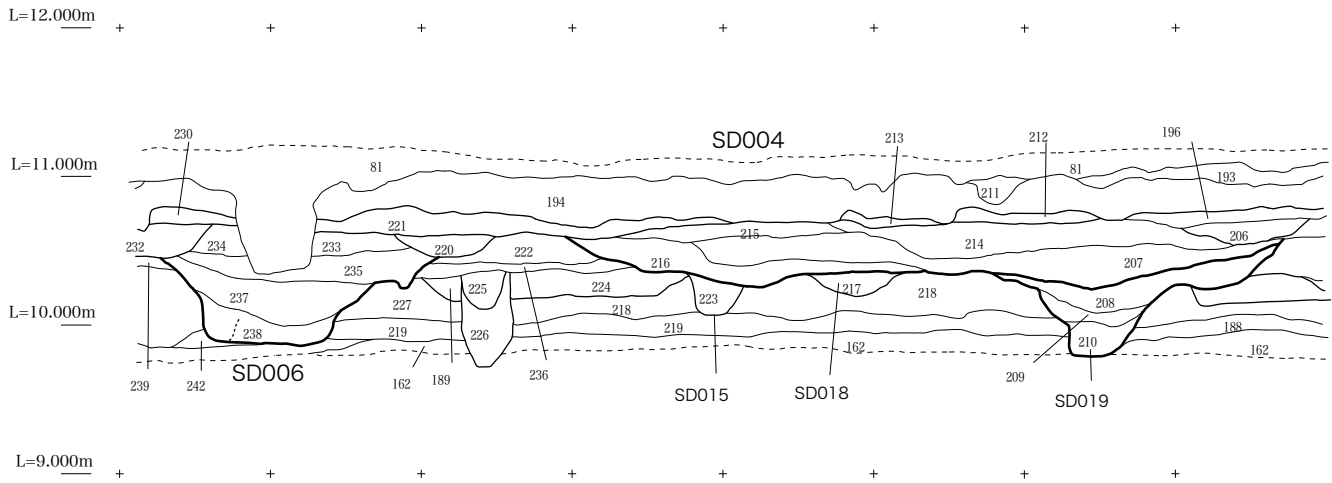


図 3-119 04B-SD004・SD006 土層セクション 1/50



図 3-120 04B-SE001 検出状況

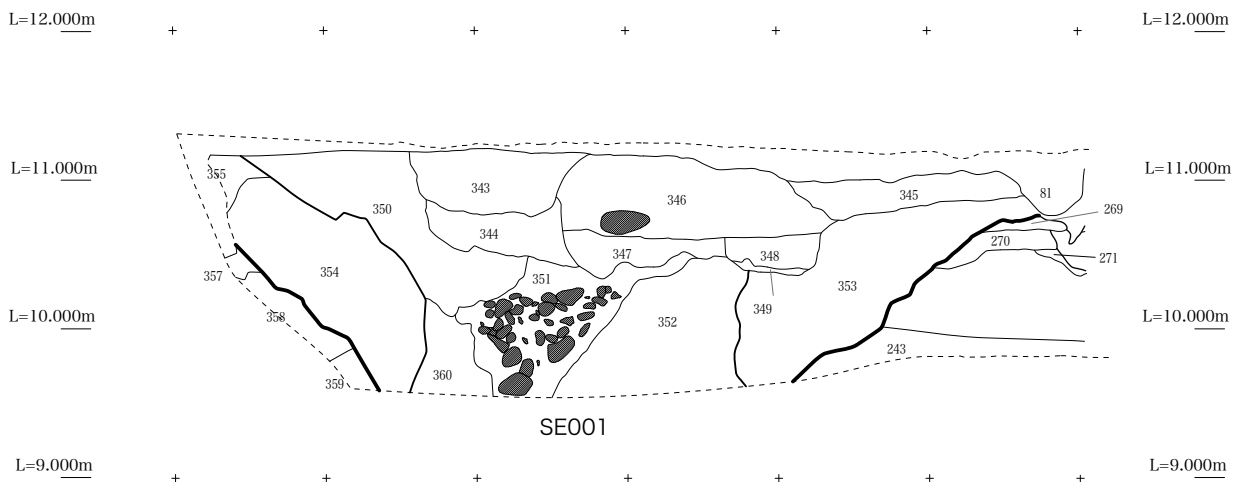


図 3-121 04B-SE001 土層セクション 1/50

ている。恐らく 04B-SD006 上層につながるのであろう。幅が狭く浅い痕跡のような溝である SD011 とは同一面での検出であり、削平を考慮しても近い時期である。この SD003a 以南には標高 10.45 ～ 10.55m にシルトに近い暗褐色細粒砂が堆積しており、窪地を埋める「ぬた」状化しやすい自然堆積層と推測された。SD011 は溝底面に凹凸は認められなかったが、「垣」の基礎であった可能性がある。とすると、東の溝との間は通路か？いずれも新期に属す。

04B-SD003b・SD005

西部では SD003a に重複するが、そのまま東にのびる溝である。04B-SD023 につながるの

かどうかは不明である。断面逆台形で、SD003a 底面より 0.2m 深く、底面標高は 9.8m を測る。SD005 は掘削面から同一時期と推測される。底面標高は 10m を測る。SD003a と並行し、途中で終息して 04B-SD006 にはつながらない。いずれも古期に属す。

04B-SD004

幅が 4.7m の割には深さ 0.5m と浅く、底面標高 10.2m と高い。そして底面にも凹凸があり一定しない。遺物出土量は思いのほか少なく、生活空間に隣接した溝という雰囲気は無い。大窯期の遺物が出土しており、埋没時期は 04B-SD001 と変わらない。両者に切り合い関係も認められないので同時期であろう。新期に属す。

なお、形状は確かに「溝」だが、断面が皿状で浅いことから、扇状地末端の起伏に対応した「道」の可能性も浮上する。

04B-SD006・SD019・SD017

SD006 は断面逆台形で、幅 2m、深さ 0.8m、底面標高 9.85m を測る。東側の斜面の傾斜がやや緩くなって、幅の狭い溝状の掘り込みをもつ。SD019 は上部が SD004 に削られて詳細は不明だが、東側に段をもつ形状のようで、底面標高 9.8m も SD006 とほぼ同じである。南で SD017 に接続すると推測される。いずれも古期に属す。

なお、SD006 と SD019 の間は約 4m あり、後述する小規模な溝を除けば、そこが両側溝をもつ「道」の可能性もでてくる。

04B-SD015・SD018

上部は 04B-SD004 に削られており、下部の痕跡を検出したもので、底面標高はどちらも 10m 以上である。SD015・SD018 とともに途中で切れている。古期に属す。

04B-SE001

上面遺構群の中では、SD003a・SD011 とともにもっとも新しい段階に属す遺構である。調査区北西隅で検出した。湧水のために何度も調査区壁面が崩落し、下部施設の調査は満足に行えなかった。いちおう、桶組の痕跡が確認できた。抜き取り跡埋土の中央に礫群があり、廃絶時の投棄であろう。新期に属す。

● 04B 区下面遺構群

山茶碗 5・6 型式から 9 型式を中心とする時期である。

SD004 の西側で多数の柱穴を検出した。根石をもつものがあることから、それを指標にして掘立柱建物の配置を推定したが、確実には復元できなかった。いちおう、柱穴配置の整合性から建物 1～5 の 5 棟と、L 字をなす柵 1 と弧状をなす柵 2 の 2 つの柵列を推定した。しかし、柱穴の数ははるかに多く、頻繁な建て替えが行われたことが窺える。

SD006 の下部では、溝の方位に一致するように小穴列（柵 1 の南北列）が見つかった。また、SD003a・SD005 のカーブに一致して柵 2 が見つかった。

これらの溝と一致する柵の存在は、空間分割が基本で、方式に時期差が現れることを示していると思われるが、果たしてどうだろうか。

04B-SD013・022

遺構の重複関係では最古段階である。底面標高は 9.9m を測り、柵 1 に並行する。

建物 1

6 本柱で想定したが、桁行間が広すぎるかもしれない。



図 3-122 04B-SK532 山茶碗検出土状況

山茶碗9型式以前

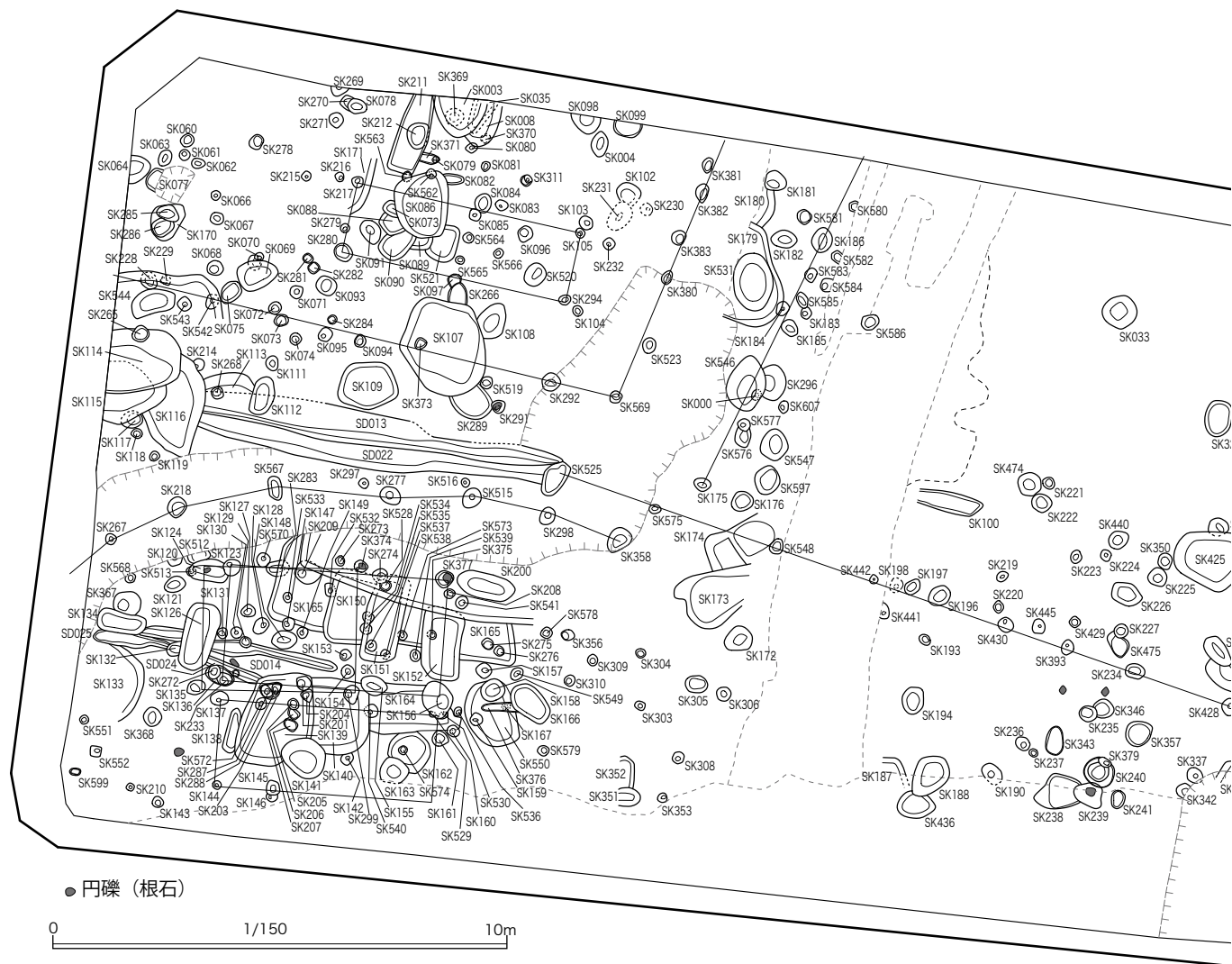


図 3-123 04B 区下面遺構群プラン 1/150

建物 2

根石のある柱穴 04B-SK377 を含めて 8 本柱で想定した。軸線は建物 1 に一致しない。

建物 3

根石のある柱穴 04B-SK374・SK124 を含めて 6 本柱で想定した。軸線は建物 1・柵 1 に一致しない。

建物 4

北辺の柱穴は等間隔だが、南は不揃いで、SD002 に切られて不確かである。軸線は建物 1・柵 1 に一致しない。

建物 5

8 本柱だが、南東端は 04B-SD001 に切られている。軸線は建物 1・柵 1 に一致する。

柵 1

東の南北列は 1 列で、04B-SD006 の最下部で検出した。先行するのであろう。東西列は柱穴が 2 つあり、構築し直した可能性もある。

柵 2

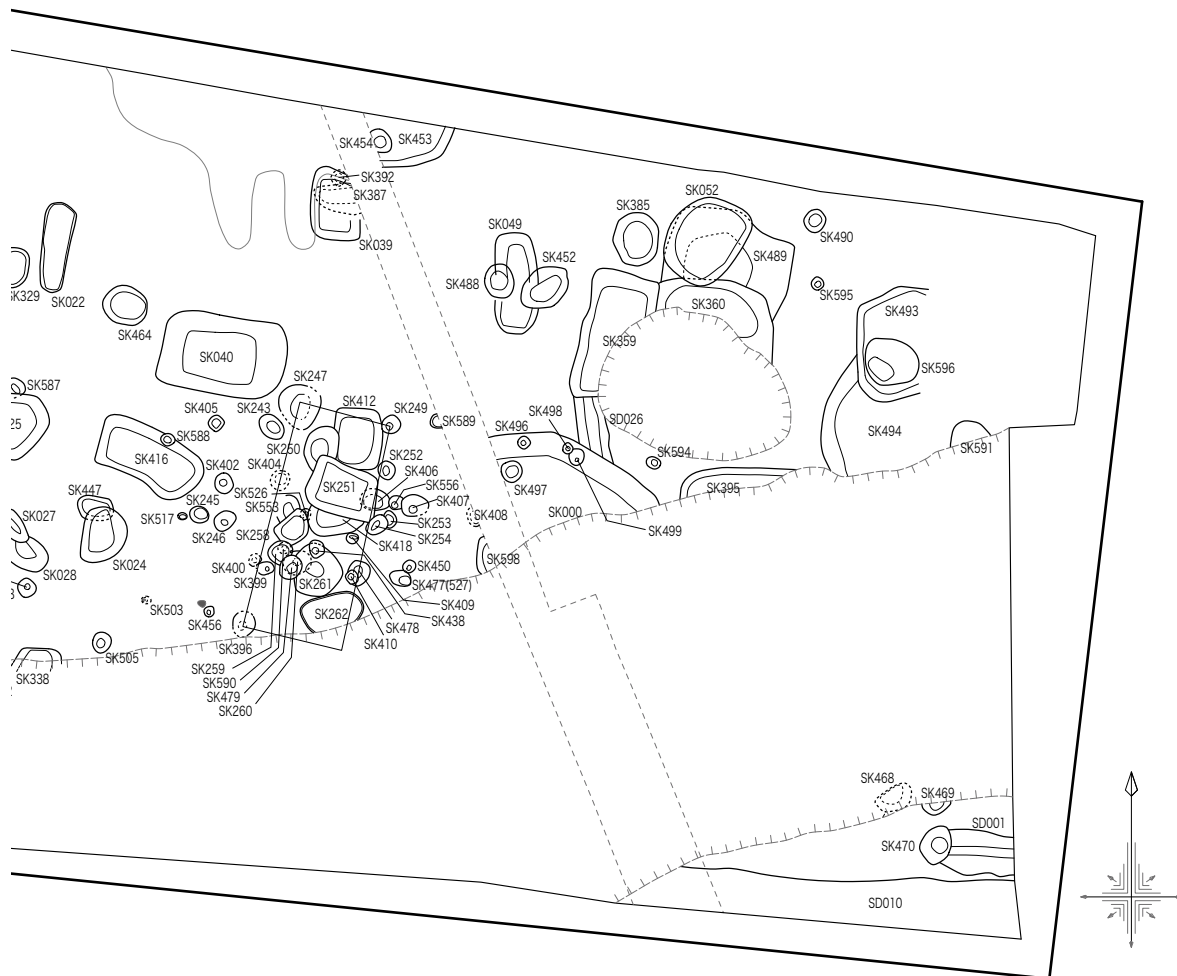
04B-SD003b に一致してカーブしている点でいささか違和感もあるが、建物 2～4 の軸線も柵 1 とは一致しないので整合性は取れていると考える。

● 05C 区中世③面遺構群

戦国期から近世までの幅があるが、18 世紀を大きく下ることはない。

05C 区は中央を SD001 が東西に掘削されており、両側から土坑を中心とする中世の遺構が

検出された。中世③面は戦国期から近世に属し、SD001 埋没後に展開した遺構群である。遺構の軸線は南北 - 東西と西北西 - 東南東の 2 つがあり、SD001 以北の南北溝は近世に属す畠の耕作に伴う畝溝と考えられる。



05C-SD001

SD001 は何段階かに分かれて埋没が進んだようで、SD001 最上層とした範囲は、最後に埋没した土層の縁を示す。基本的には整地による埋没である。この土層の下部に砂層があり、水流があったと思われる。SD001 中層には礫集積があり、重複する溝に伴うようだが、SD001 自体に一定期間開口した時期があった可能性はある。

● 05C 区中世②面遺構群

山茶碗 10 型式以降に属す。

SD001 に先行する遺構群であり、南北軸の溝は地割りに関係するのであろう。SD001 がこの時期まで遡るのかどうかはわからない。

05C-SB2001

調査区南東部端では小規模な総柱建物が検出された。柱穴の配置も少し歪んで、根固めも無く、とても重量に耐える倉庫とはいえない。「堂」程度の建物がふさわしい。

● 05C 区中世①面遺構群

山茶碗 5・6 型式から同 9 型式に対応すると考えられる。

南北 - 東西軸の遺構群と西北西 - 東南東の遺構群、そして北西 - 南東軸の遺構群が検出され、方位がばらつく。遺構検出面はほぼ基盤の砂層であり、形状の保持に苦慮した。このようになり下層まで中世遺構群が展開したところに 05C 区の特徴がある。

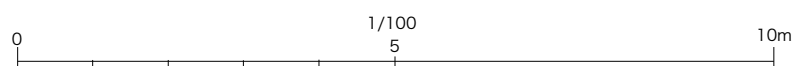
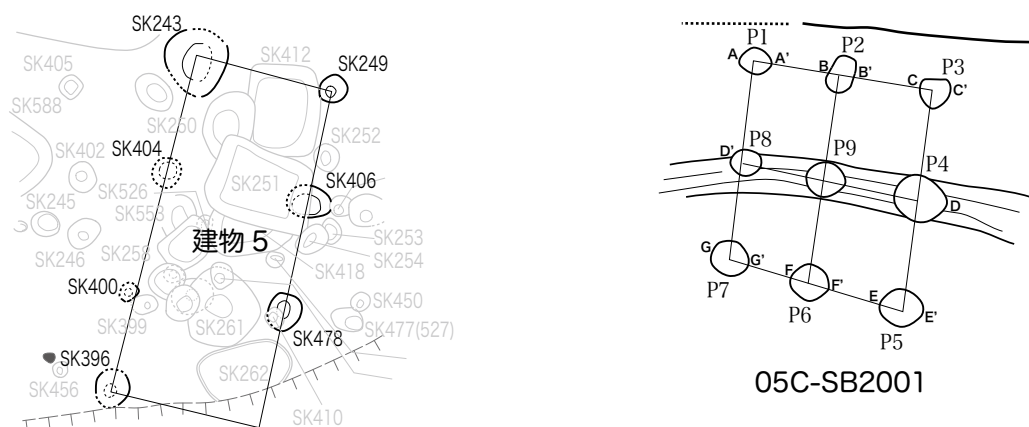
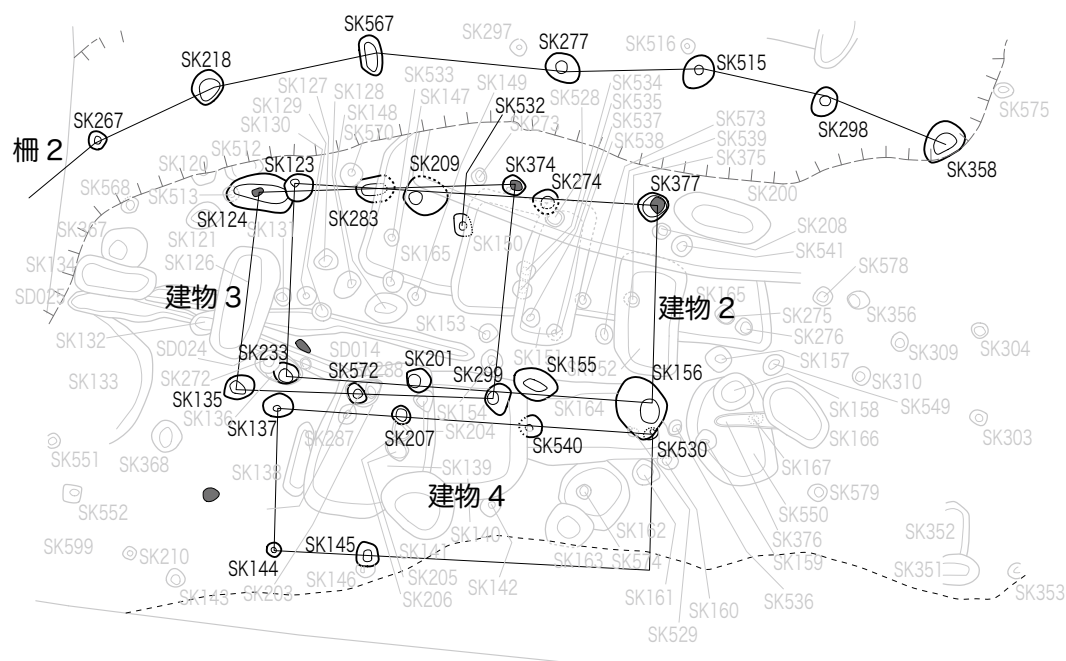
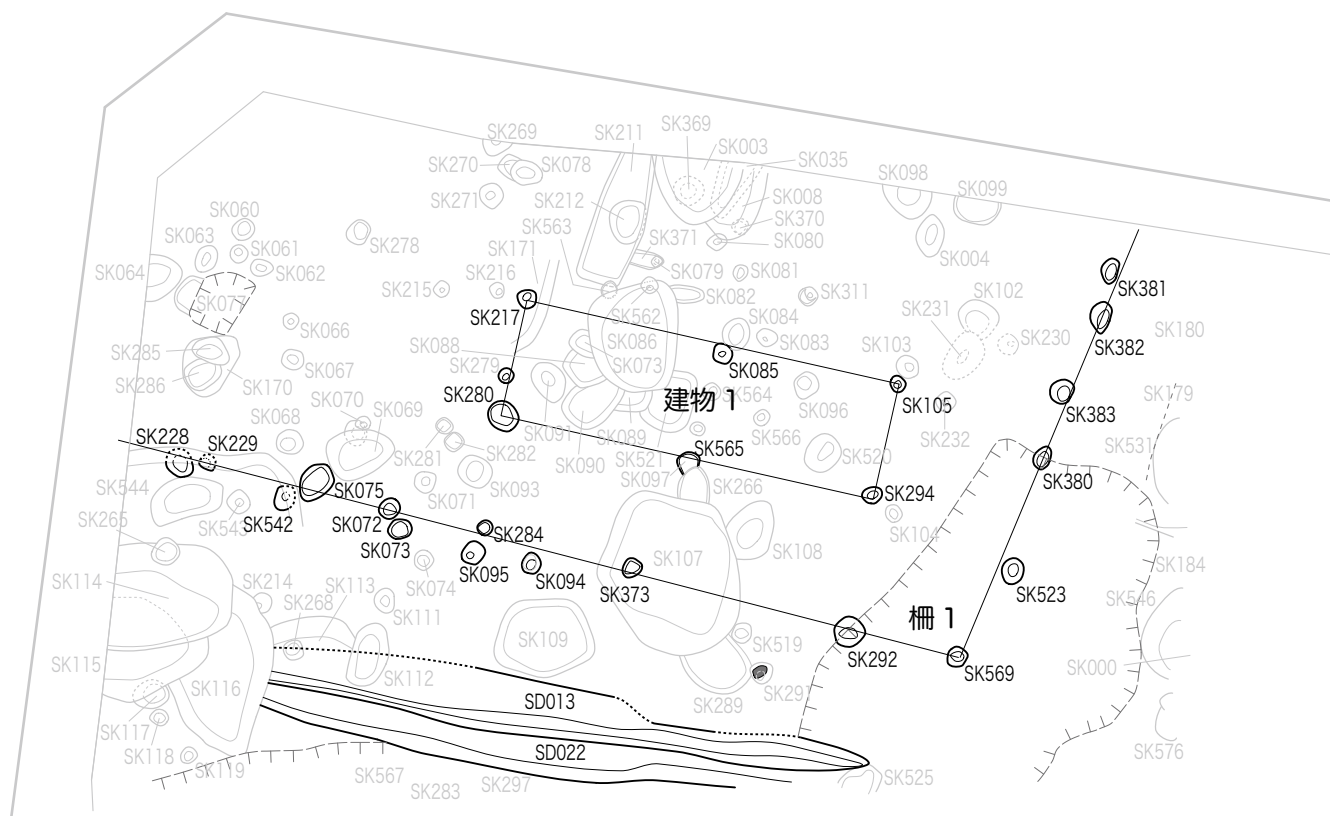


図 3-124 04B・05C 区中世建物 1/100

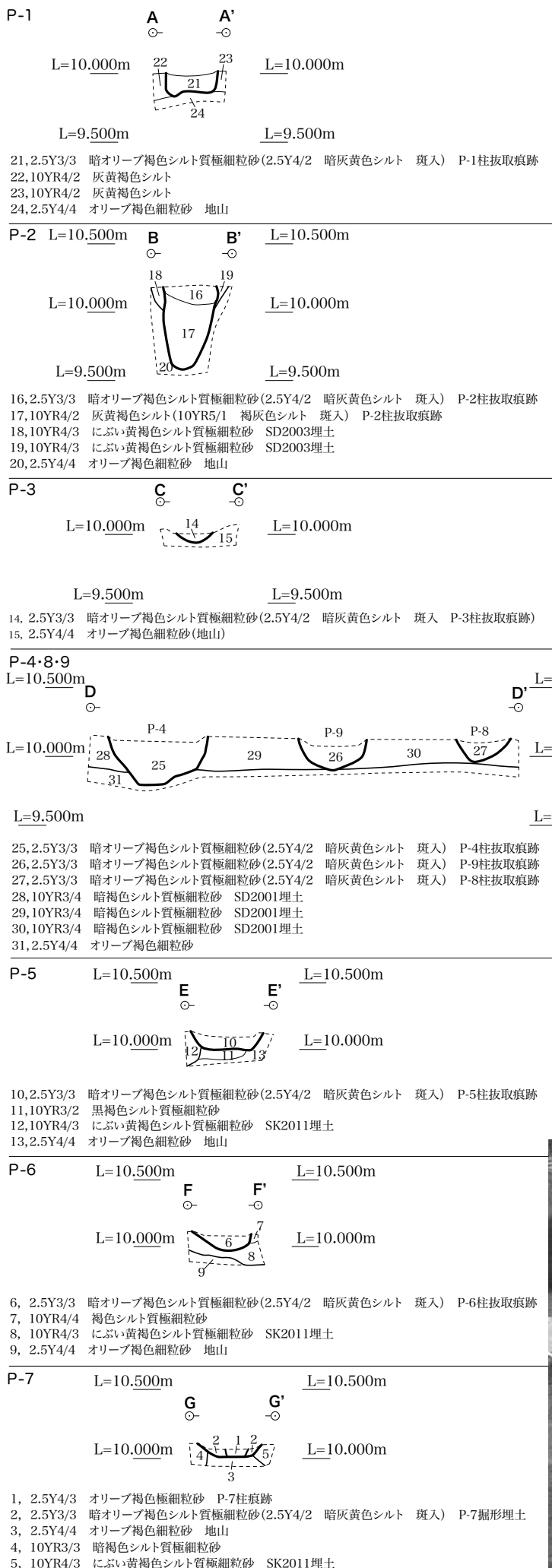


図 3-125 05C-SB2001 柱穴土層セクション 1/50

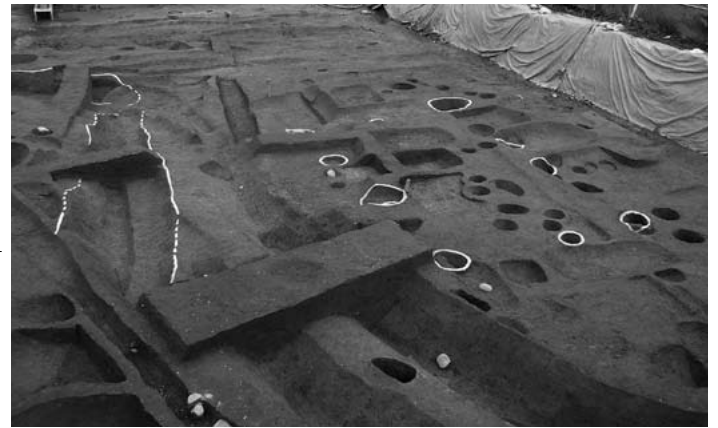


図 3-126 04B 区下面主要遺構

● 05D 区遺構群

05D 区は南北軸の溝群が中心だが、05C 区との接続は不明である。なお、居住関連遺構は未確認である。

● 主要な遺物

05C-SD001

量的に多いのが山茶碗 11 型式 (脇之島)・古瀬戸後期IV (古) であるが、これは周辺の溝と同様であり、大溝が埋没の際に流入した可能性がある。むしろ、古瀬戸後期IV (新) から大窯期の遺物が中層以上に目立ち、内耳鍋のほとんどが大窯期に対応するところに、この大溝が機能した時期が窺える。

最上層では連房 I 期の長石釉皿が出土しており、最上部の削平を考慮すれば、その段階までは窪地になっていたであろう。

b. 古代の遺構と遺物

● 概要

古代の遺構は、04B 区や 05D 区では中世面の下部から同一面で検出された。それに対して 05C 区では中世遺構の展開が濃密で、かろうじて北西端に黒色細粒砂の分布範囲



図 3-127 05C-SB2001

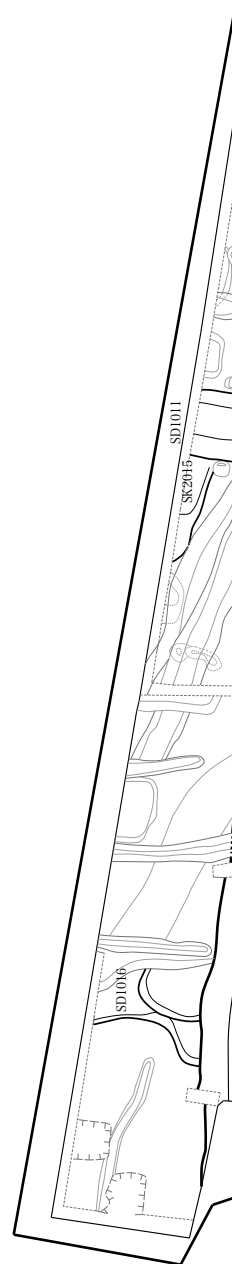
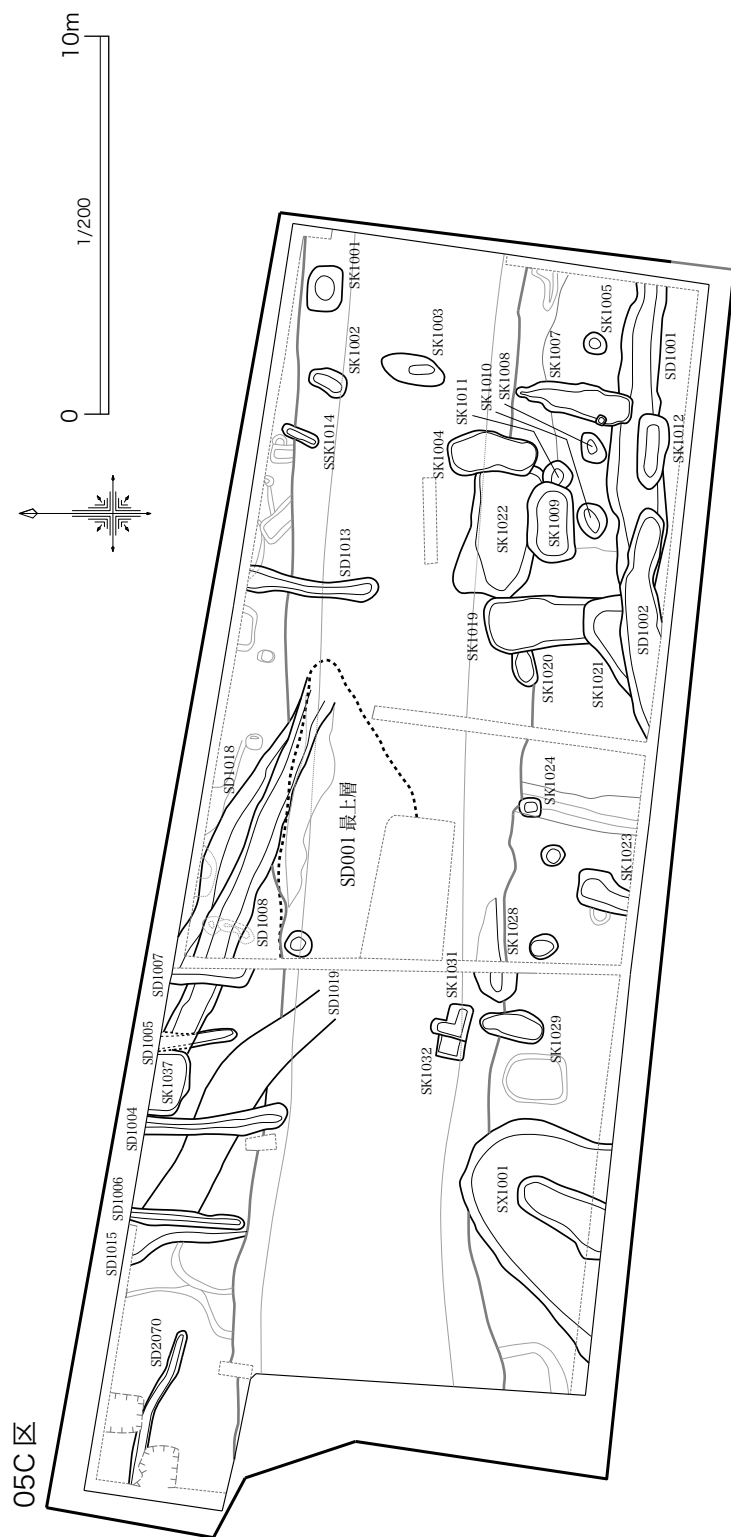
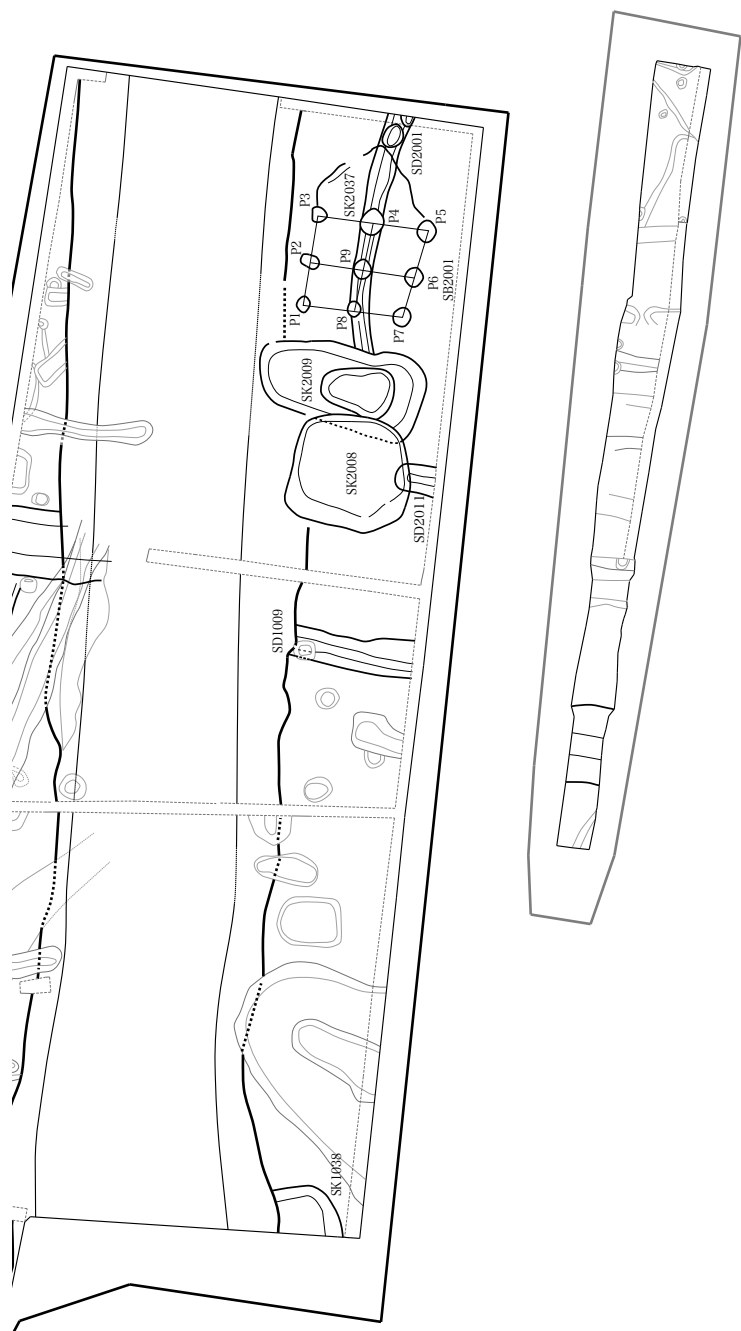
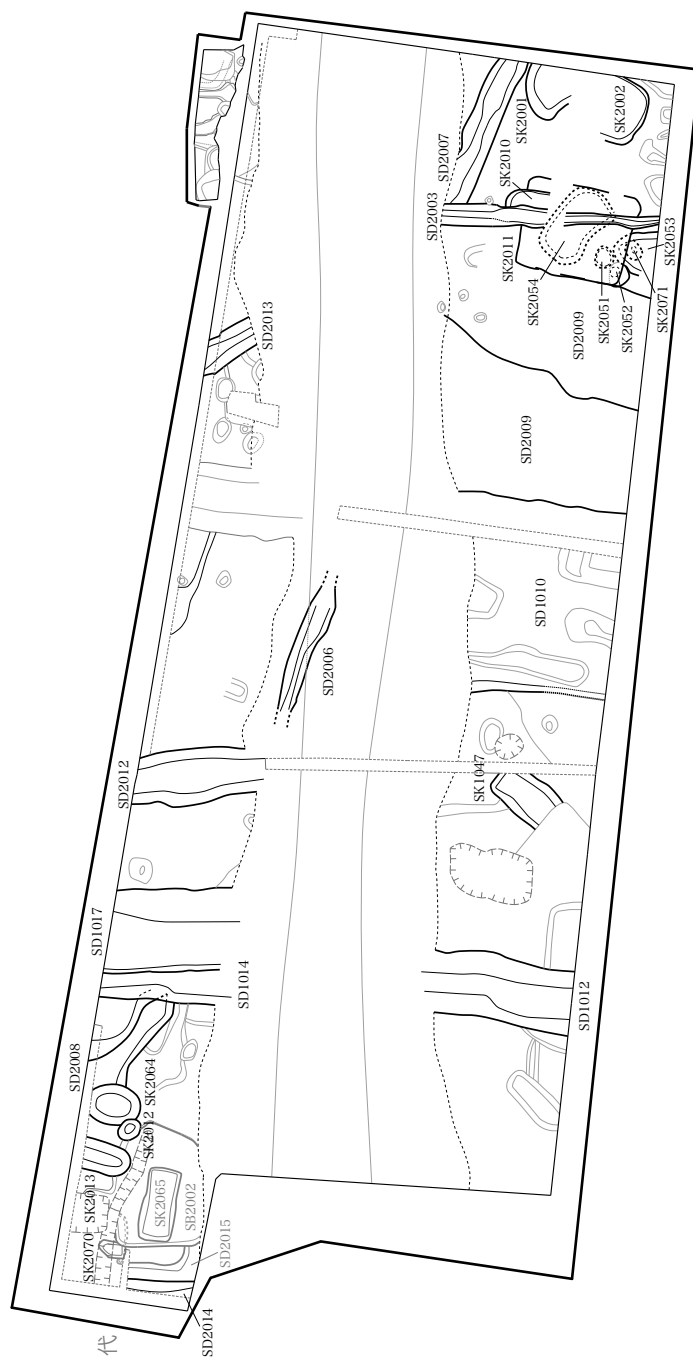


図 3-128 05C・D 区遺構プラン・変遷 1/200



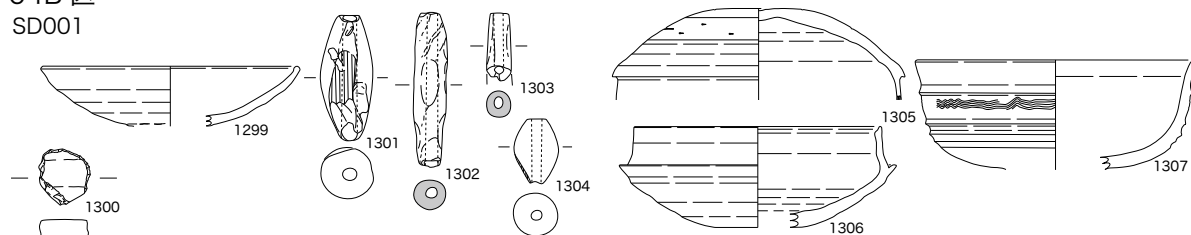
中世①面

※グレー表現は古代

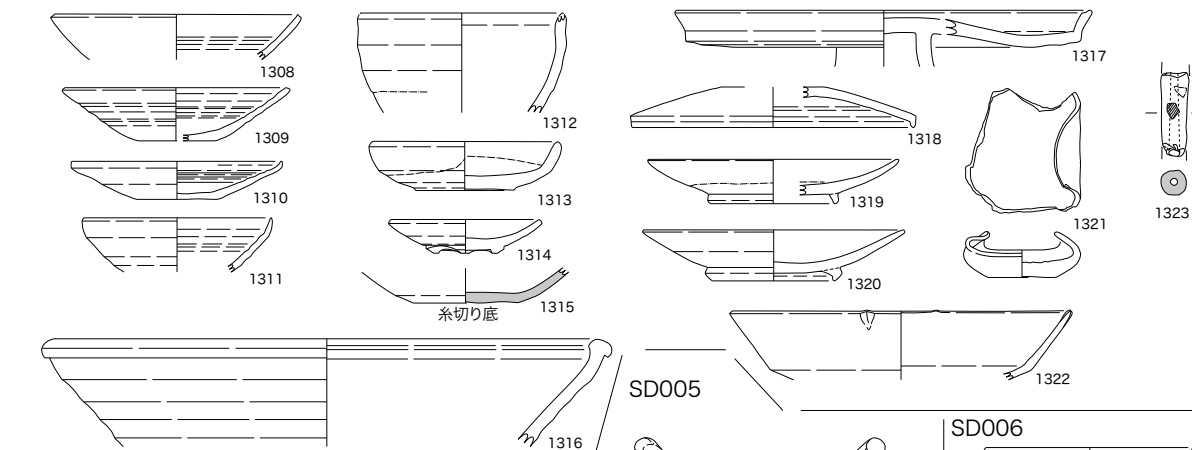


04B 区

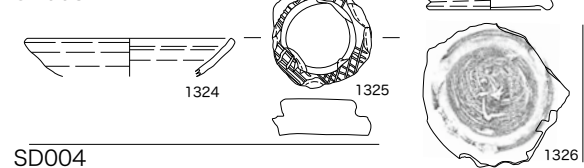
SD001



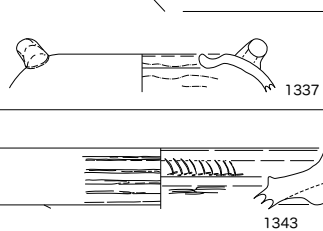
SD002



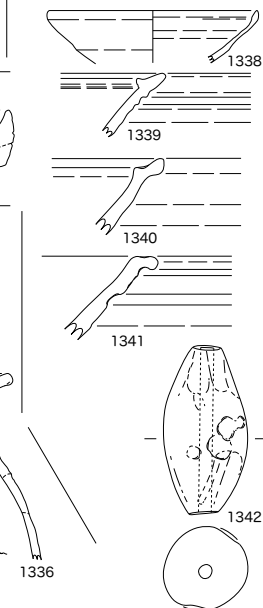
SD003



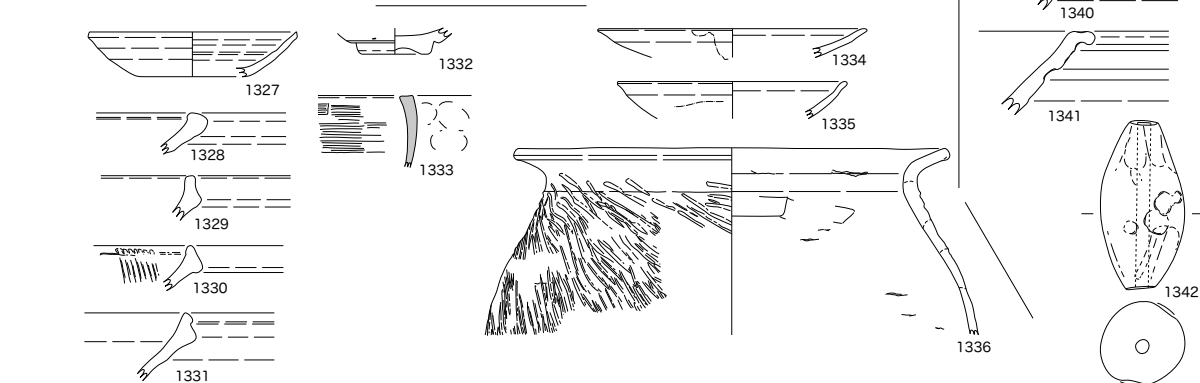
SD005



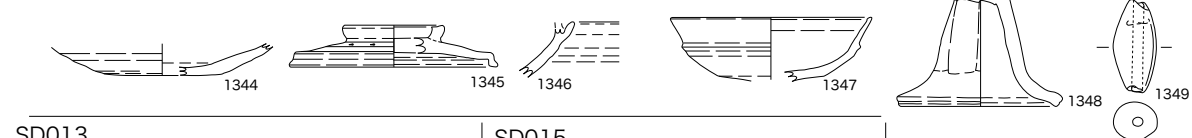
SD006



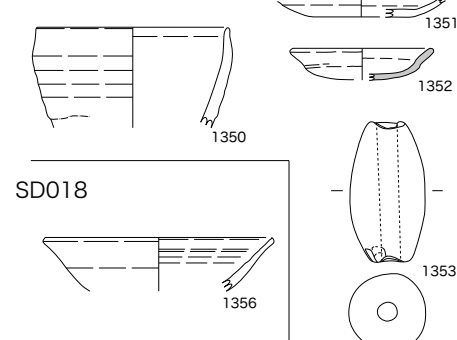
SD004



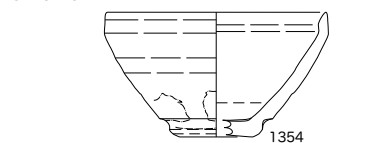
SD010



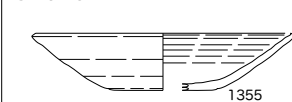
SD013



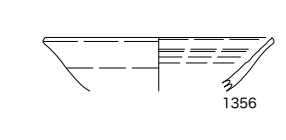
SD015



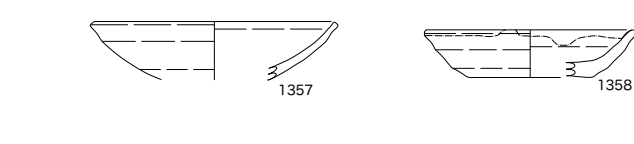
SD016



SD018



SD020



05C 区
SD001

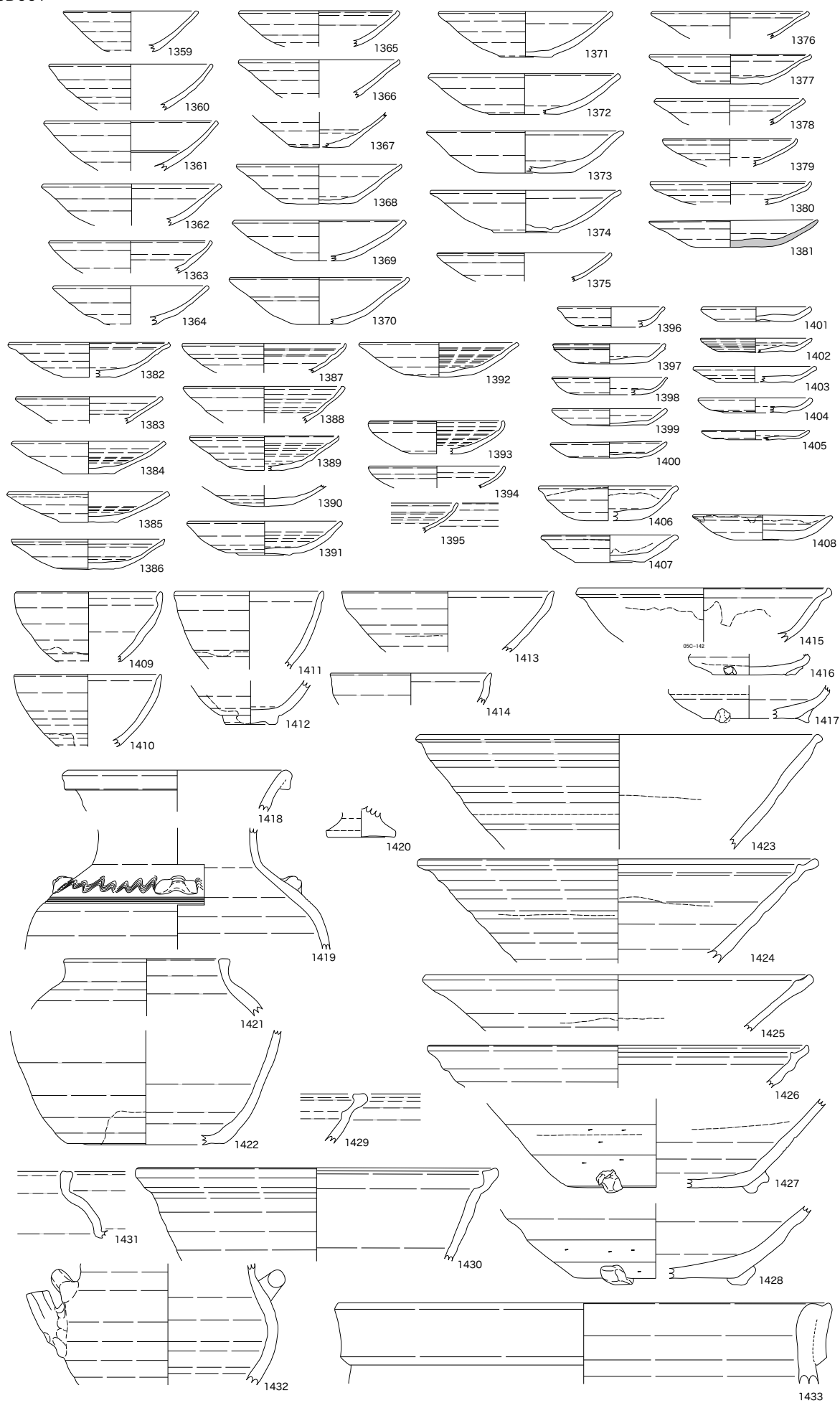


図 3-130 05C 区遺構内出土遺物 (1)

05C 区
SD001

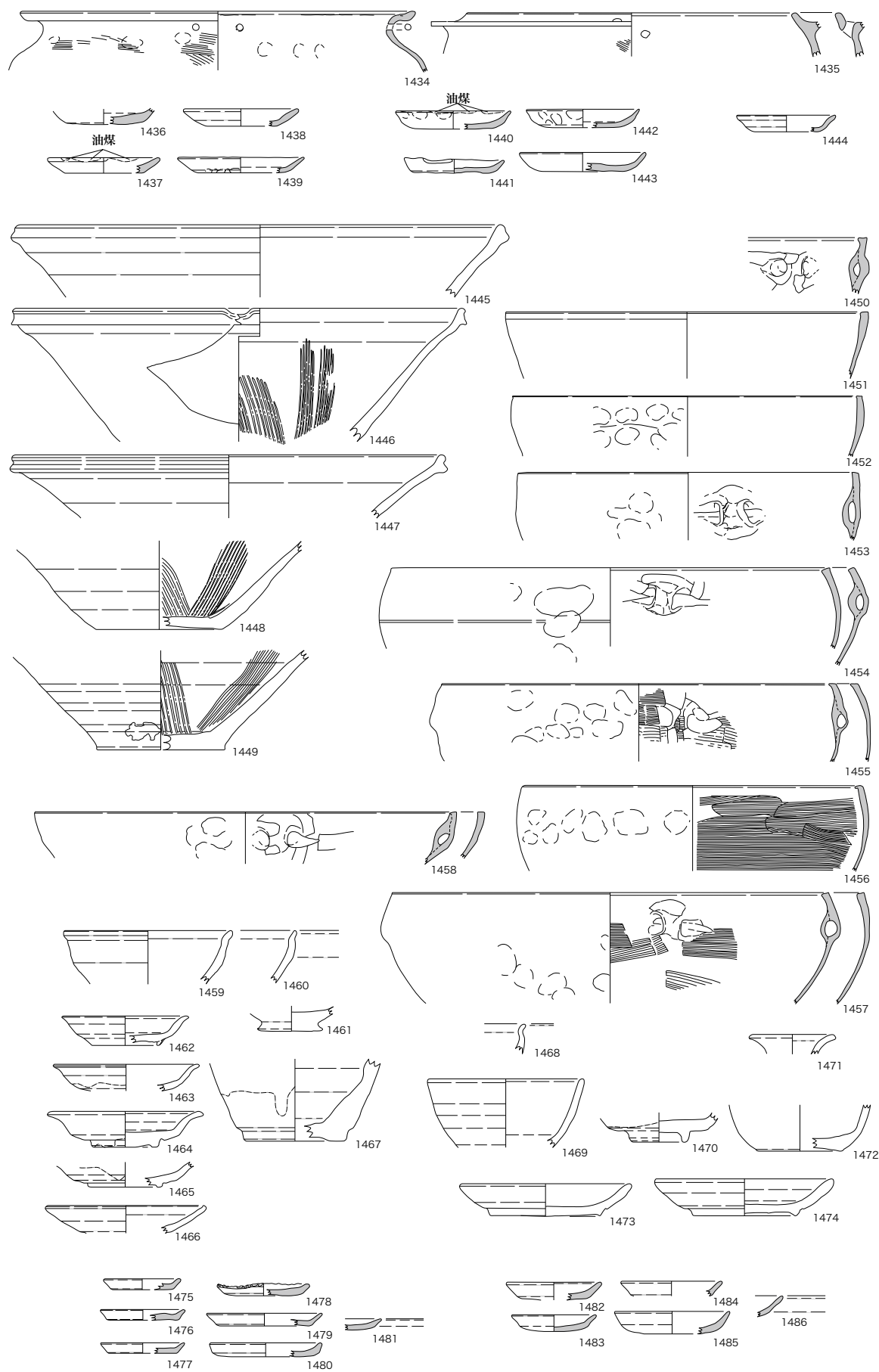
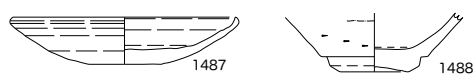
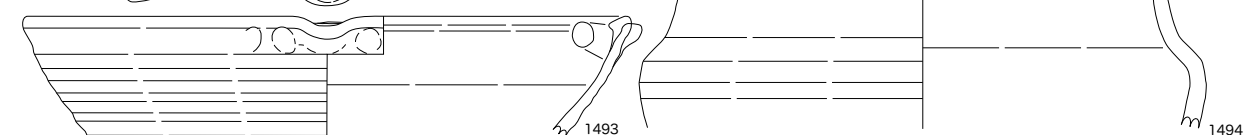
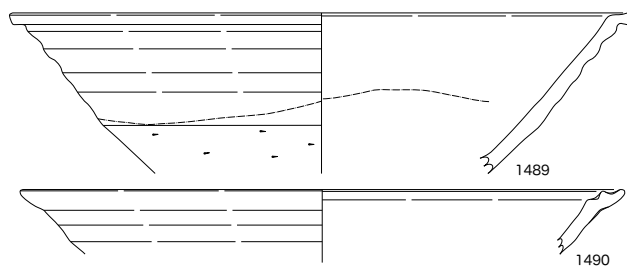
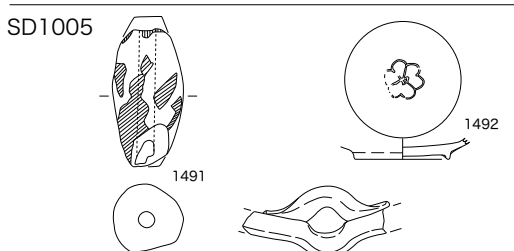


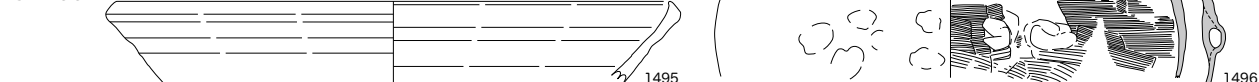
図 3-131 05C 区遺構内出土遺物 (2)

05C 区
SD1004

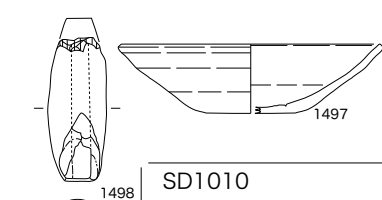
SD1005



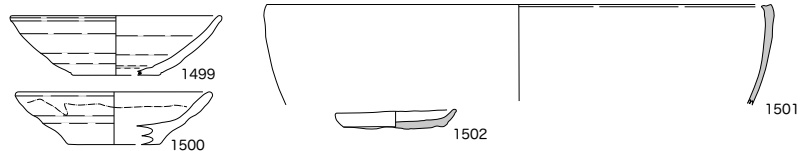
SD1007



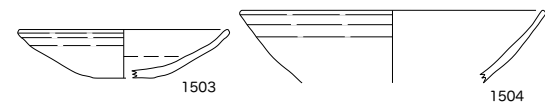
SD1008



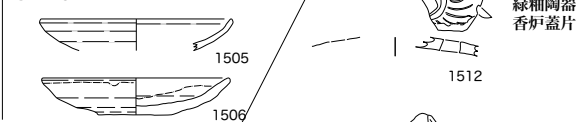
SD1009



SD1010



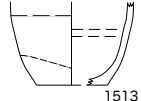
SD1011



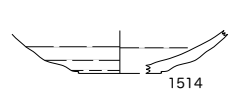
SD1014



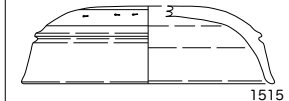
SD1017



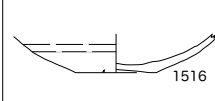
SD1018



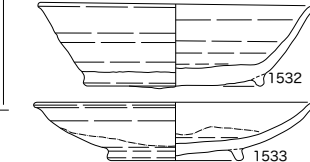
SD1019



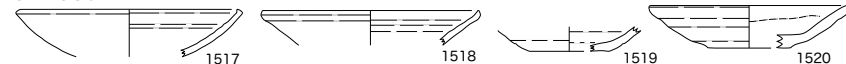
SD2006



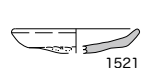
SD2014



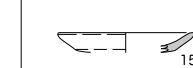
SD2009



SK1004



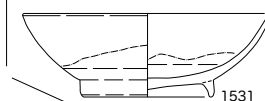
SK1019



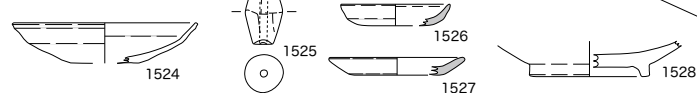
SK2008



SK1027



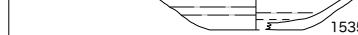
SK2009



SK2010



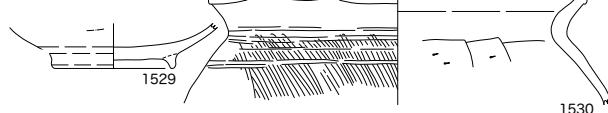
SK2047



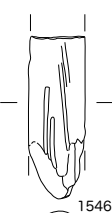
SK2043



SK2065



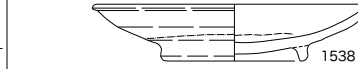
SK2048



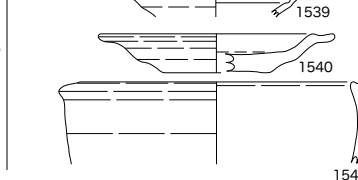
SK2067



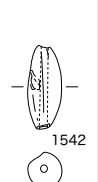
SK5003



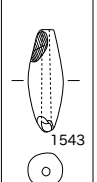
SX1001



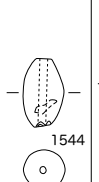
SK2018



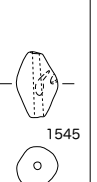
SK2056



SB2002



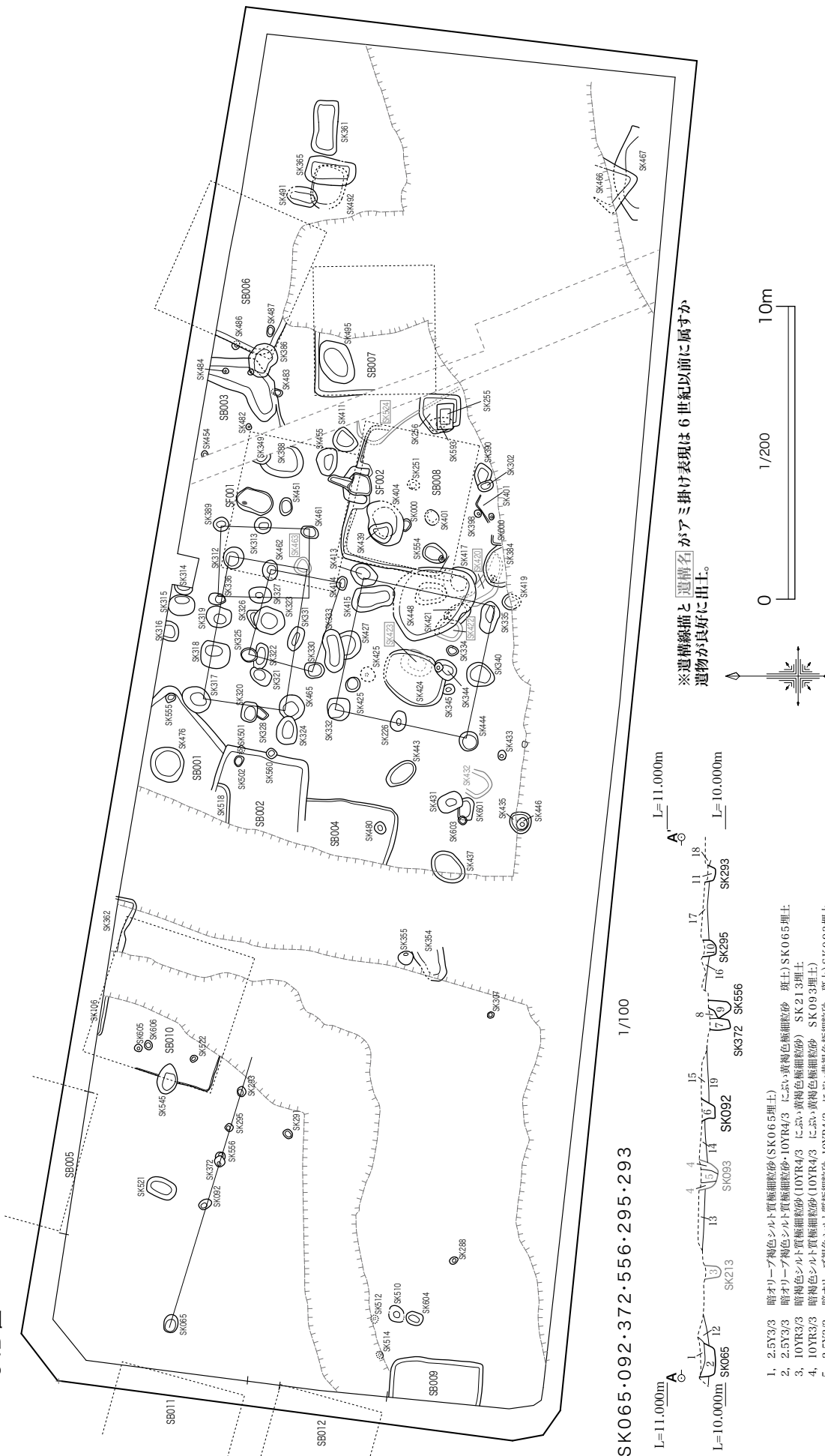
SB2001



1547: 長さ 43.7mm、径 25.1mm

図 3-132 05C 区遺構内出土遺物 (3) (土錘 1/3)

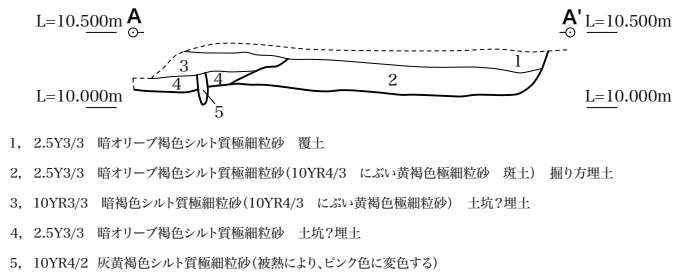
04B 区 古代以前



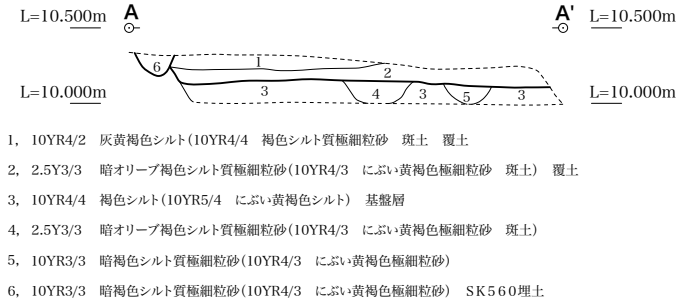
1. 2.5X3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細砂 (SK065埋土)
2. 2.5X3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細砂・10YR4/3 に、黄褐色極細砂 斑土) SK065埋土
3. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR4/3 に、黄褐色極細砂) SK213埋土
4. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR4/3 に、黄褐色極細砂) SK093埋土
5. 2.5X3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細砂・10YR4/3 に、黄褐色極細砂 斑土) SK093埋土
6. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR4/3 に、黄褐色極細砂) SK092埋土
7. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR4/3 に、黄褐色極細砂) SK372埋土
8. 2.5X3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細砂) SK372埋土
9. 2.5X3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR4/3 に、黄褐色極細砂) SK295埋土
10. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR4/3 に、黄褐色極細砂) SK295埋土
11. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 に、黄褐色シルト質極細砂) SK293埋土
12. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
13. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
14. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
15. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
16. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
17. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
18. 10YR4/3 に、黄褐色シルト質極細砂 (10YR5/6 黄褐色シルト質極細砂 斑土) 遺物包含層
19. 10YR4/4 褐色シルト・10YR5/4 に、黄褐色シルト 斑土) 基層層

図3-133 04B区古代以前の遺構群プラン 1/200

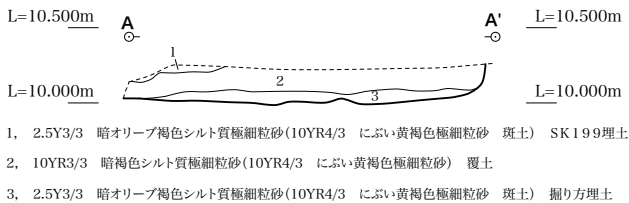
SB001 1/50



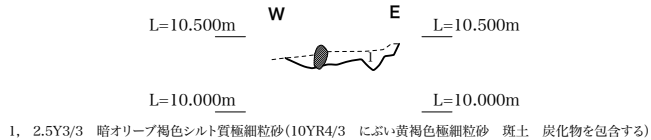
SB002 1/50



SB004 1/50



SF001東西セクション 1/50



SF001南北セクション 1/50

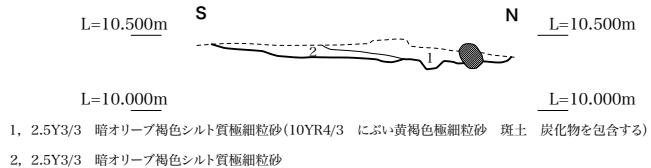


図 3-134 04B 区個別遺構土層セクション 1/50

として限定されていた。色調は 07D 区の下部古代面よりも濃く、異質な印象を受けた。

● 04B 区遺構群

04B 区の 3 面に相当し、古代の竪穴建物跡や掘立柱建物、柵等が検出できた。

竪穴建物跡は、カマドが確認できたのは唯一 SB008 のみで、他は重複等もあって不明である。プランでは検出できなかったが、北壁で 1 棟 (SB005)、西壁で 2 棟 (SB011・SB012) を確認した。

方位からみて、① SB005・008・010、総柱建物 1 (SB006 はやや方位はずれるがこの一群に含まれる、② SB007・SB009、③ プランが不整形の SB001・002・004、の 3 グループに区分できる。①は 9 世紀以降で、以外は先行する。

04B-SB008

東西に長軸をもつ方形で、深さは掘り方から 20cm、床面から 10cm を測る。床面標高は 10.3m である。

北辺にカマドが設けられ、煙道は北にのびている。床面はカマド周辺に炭化物が散布していたので認定に指標にもなったが、南へいくにしたがい薄くなって、床面の検出は困難を伴った。主柱穴は確認できなかった。

04B-SB001

竪穴建物跡の南東コーナーを検出した。床面標高は 10.25m、掘り方底面は 10.05m で、深さは 25cm を測る。炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB002

04B-SB001 を切る竪穴建物跡で、東辺を検出した。床面標高は 10.2m、掘り方底面は 10.01m で、深さは 30cm を測る。炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB003

竪穴建物跡の南東隅を検出した。床面標高は 10.65m、深さは 5cm である。南東隅に幅広周溝があるが、掘り方である。炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB004

04B-SB002 に切られる竪穴建物跡で、東・南辺を検出した。床面標高は 10.1m、掘り方底面は 9.95m で深さは 25cm である。炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB006

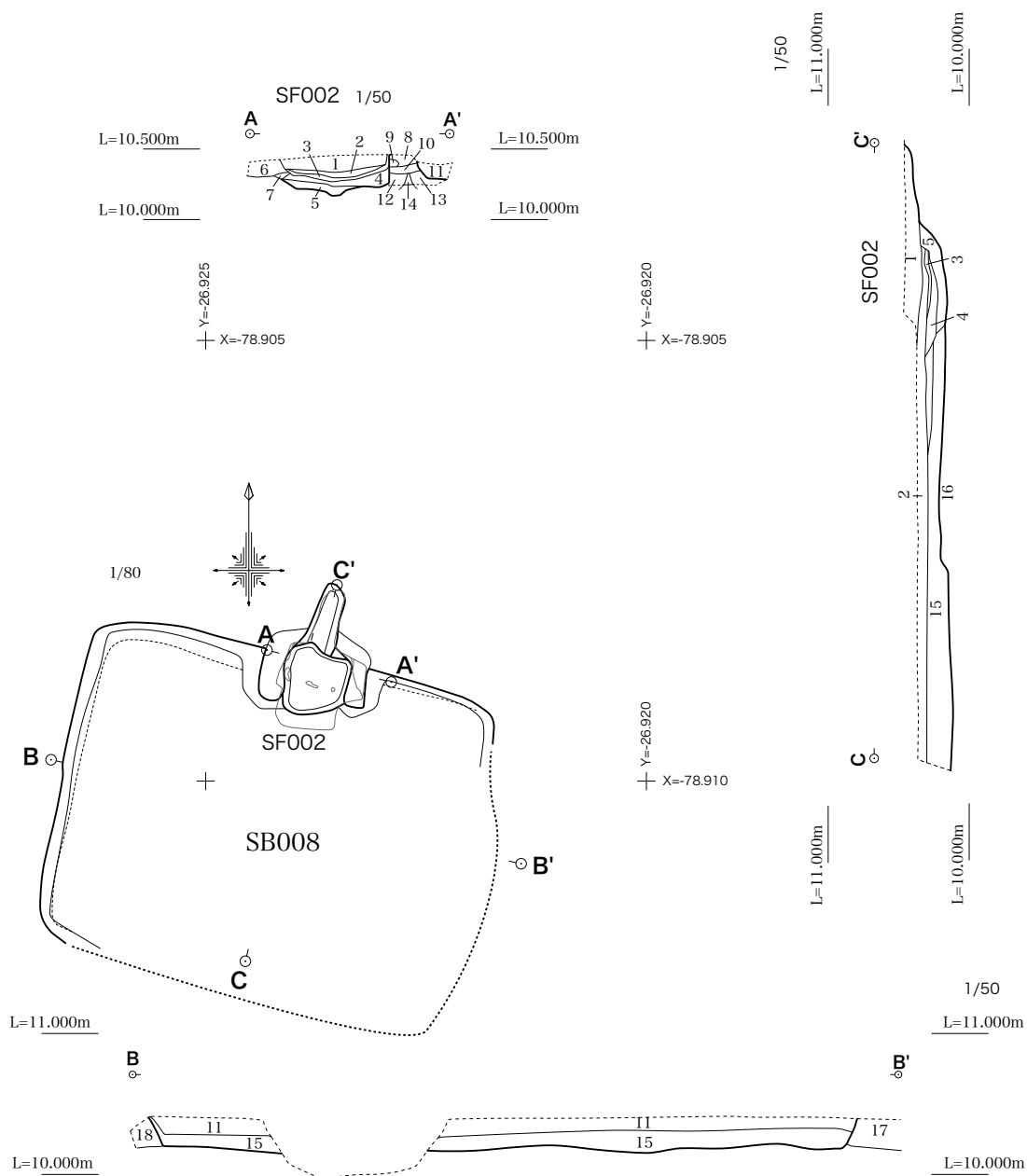
竪穴建物跡の南西隅を検出した。深さは 0.2m で、床面標高は 10.2m である。柱穴等是不明である。炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB007

竪穴建物跡の北東隅を検出した。床面標高は 10.5m、深さは 10cm である。炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB009

南北 3.1m の小規模な竪穴建物である。掘り方底面標高は 10.1m で、深さは 10cm である。



- 1, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂 斑土 炭化物・焼土を多量に包含する) SF002埋土
- 2, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を包含する) SF002埋土
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(被熱により、赤く変色する) SF002埋土 上面が竈床面
- 4, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を包含する) SF002埋土
- 5, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂 斑土 基盤層からなる整地土)
- 6, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 斑入) 竈壁体
- 7, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を多量に包含する)
- 8, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 斑入) 竈壁体
- 9, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(被熱により、赤く変色する)
- 10, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 斑入) SB008掘り方埋土
- 11, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂) SB001覆土
- 12, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 土坑埋土
- 13, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 土坑埋土
- 14, 10YR4/4 褐色シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 斑土) 基盤層
- 15, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 斑入) SB008掘り方埋土
- 16, 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 基盤層
- 17, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 斑入)
- 18, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 斑入)

図 3-137 04B-SB008 プラン 1/100・土層セクション 1/50

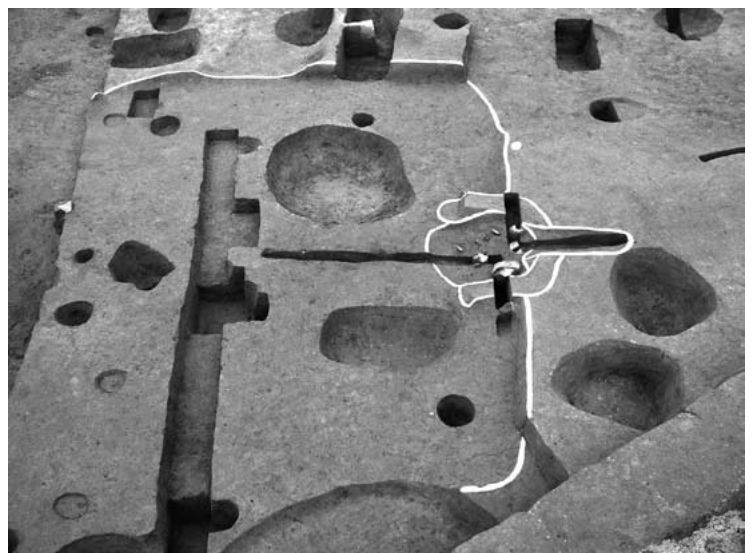
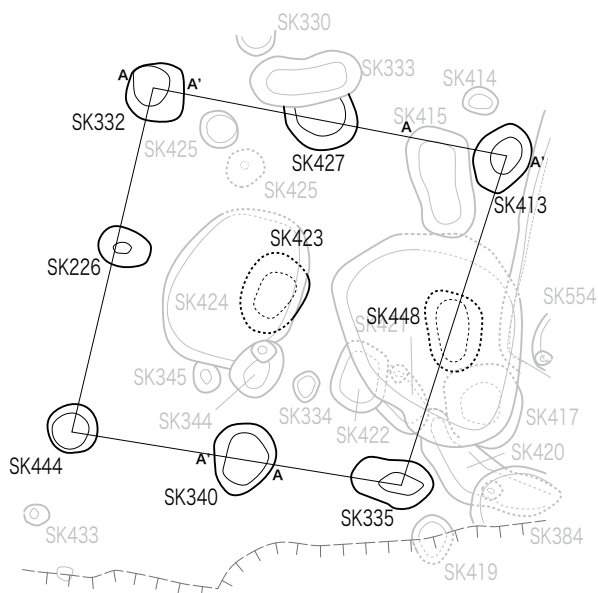
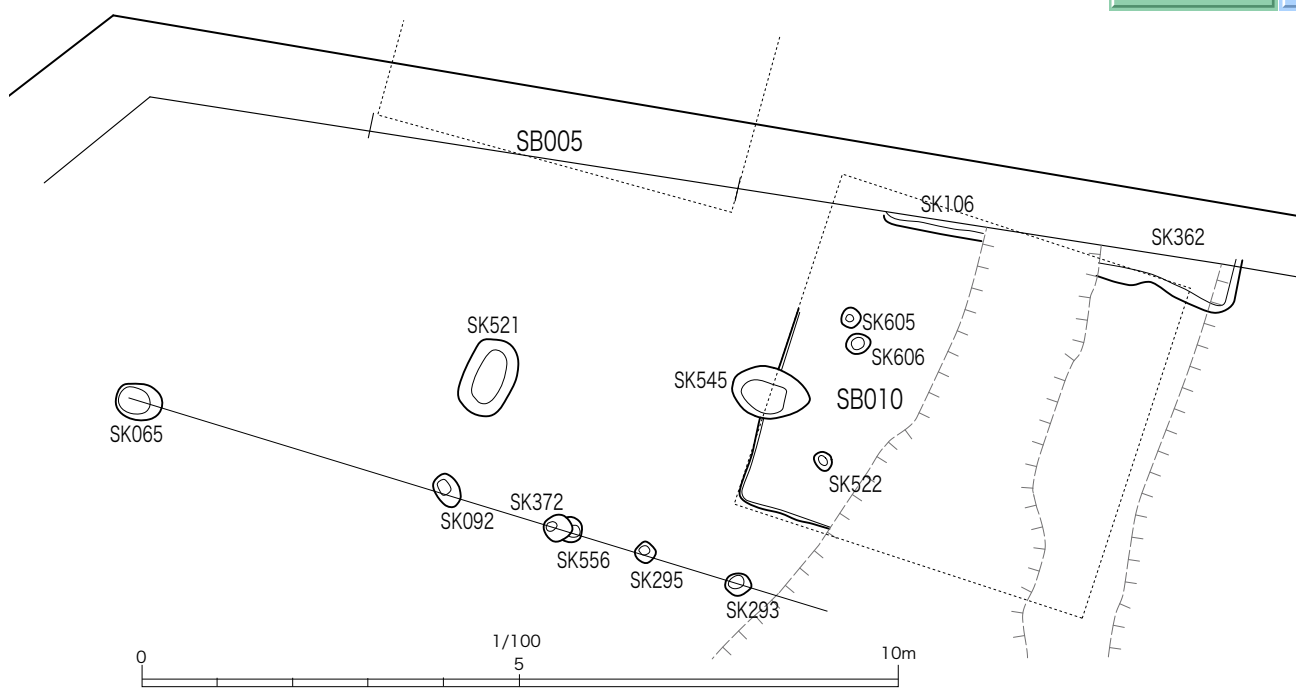


図 3-138 04B-SB008 検出状況



SK332 1/50

L=10.500m

A

A'

L=10.500m

L=10.000m



L=10.000m

- 1, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂
- 2, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂 斑土

SK413 1/50

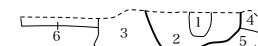
L=10.500m

A

A'

L=10.500m

L=10.000m



L=10.000m

- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂)
- 2, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂 斑土
- 3, 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂 土坑埋土
- 4, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 斑入) 遺物包含層
- 5, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 斑入) 遺物包含層?
- 6, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 斑入) 遺物包含層

SK340 1/50

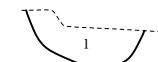
L=10.500m

A

A'

L=10.500m

L=10.000m



L=10.000m

- 1, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(土鍾・炭化物・焼土塊を多量に包含する)

図 3-139 04B-柵1・総柱建物プラン 1/100・柱穴土層セクション 1/50



図 3-140 04B-SK340 土鍾出土状況

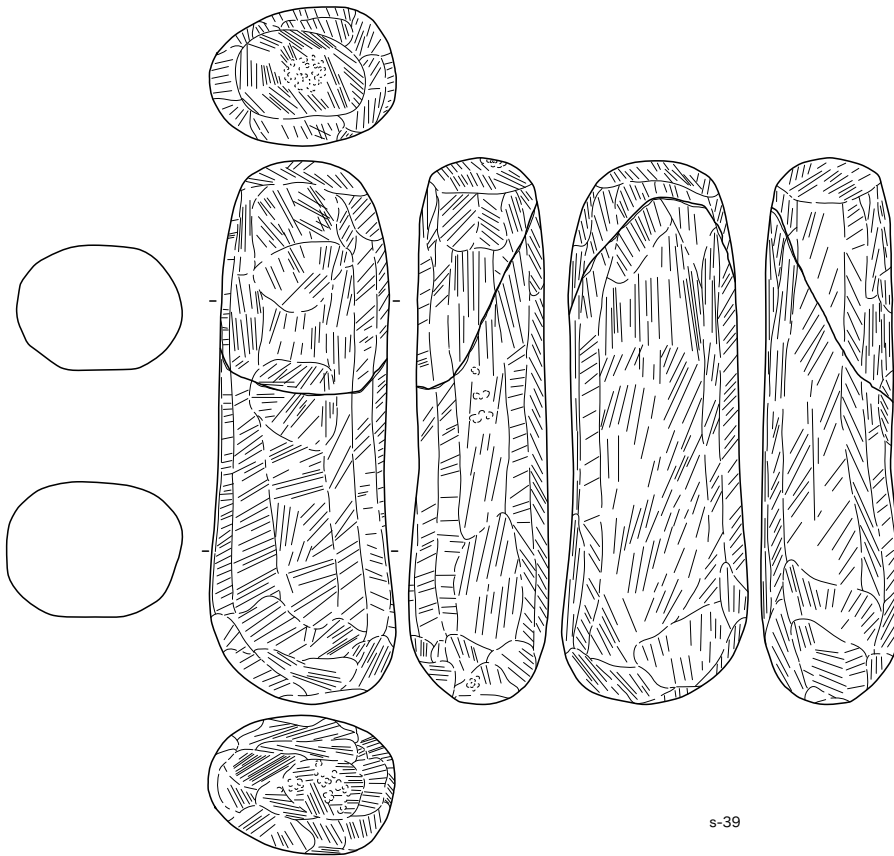


図 3-142 04B 区遺構内出土遺物 (2) 04B-SK502 (1/3)

たとすれば、使用時における単位数量 (1 網分の土鍾数) を示している可能性がある。注目されるのは焼成粘土塊が含まれていたことで、土鍾の焼成遺構の一部であった可能性もある。建物廃絶時に柱が抜き取られ、その後まとめて投棄されたのであろう。

柵 1

柵は一部の柱穴を欠くが、①の方位に沿うので同じグループであろう。柱穴の SK092 からは多量の灰釉陶器が出土した。器種は多岐にわたり土よりも多く、ぎっしり詰めこんだという状況である。

● 05C 区遺構群

05C 区では、古代の遺物は出土するものの、遺構は調査区北西端あたりで竪穴建物跡や土坑が検出できたにとどまり、SD001 を始めとする中世の遺構群に削り取られた可能性が高い。周辺には黒色極細粒砂が堆積しており、07D 区の SB300 関連遺構群と類似した状況である。本調査区で注目されるのは、多量の鉄製品が出土したことで、鉄滓も 26kg を超える量が出土している。ほとんどが SD001 から出土しているとはいえ、それで帰属時期が決定するようにも思えない。むしろ、周辺での造成等で出土した鉄滓を SD001 に投棄したものとすれば時代幅があると考えるが、古代・中世に案分しても膨大な量である。05C 区以北に古代から中世の集落中心地が存在し、その南縁に鍛冶関係の遺構が存在した可能性は高いとみられる。



図 3-135 04B-SF001 検出状況



図 3-136 04B-SK092 遺物出土状況

※ 04B-SK502 は SB002 に重複する土坑である。左図の棒状礫は表面に擦痕があり、疲熱していることから支脚として用いられたと推測される。

炭化物層の形成は微弱である。

04B-SB010

竪穴建物跡西辺のわずかな掘り込みを検出した。深さは 5cm も無く、床面標高は 10.25m である。当初、SK545 をカマド跡かとも想定したが、風向き等を考慮すればその可能性は無いと考えられる。

04B-SF001

竪穴建物跡の輪郭は明確ではないが、円礫の支脚が検出された SF001 は方位が①に属すと考えられる。

総柱建物

主柱のうち、SK340 からは土鍾が 109 点出土している。破損品を含むので使用後に廃棄され

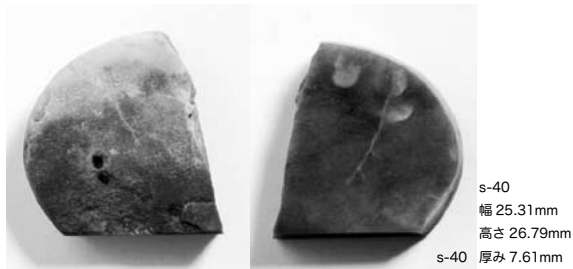


図 3-144 04B 区検 1：丸靱片



図 3-146 05C-SD1012：熔銅滴

● 05D 区遺構群

05D 区の古代遺構群は 2 面と 3 面に相当する。2 面では溝と掘立柱建物の一部を構成する柱穴の並び、3 面から竪穴建物跡が検出された。竪穴建物跡は複数棟が重複して検出されており、04B 区に比べて密集度は高いようである。

05D-SB3001

上部が大きく削平されていたが、東辺南隅よりに設けられたカマドと支脚埋設穴の跡が検出された。カマド周辺からは多くの遺物が出土した。また、下部で見つかった SB3003 からは「新」の墨書が施された須恵器を含む多量の遺物が出土した。なお、「新」の墨書は 05C 区 SD001 からも 1 点 (1971) 出土している。

● 主要遺物

05C 区は 7 世紀代が薄く、K14・K90 段階になると量的に安定し、その後はまた減少する様相を示す。緑釉陶器は 21 点と、他の調査区に比べて格段に多く、小片とはいえ香炉蓋 (1512) の出土が注目される。また、西隣の 04B 区では石帯の丸靱片が出土しており、このエリアの性格を示すものとして重要である。

土鍾については、04B-SK340 で 108 点が集中して出土した点を除けば、04B・05C 区では均質に分散しており、それが二次的な移動によったとしても全体としては他の調査区を圧倒しており、安定した保有状況が推定できる。

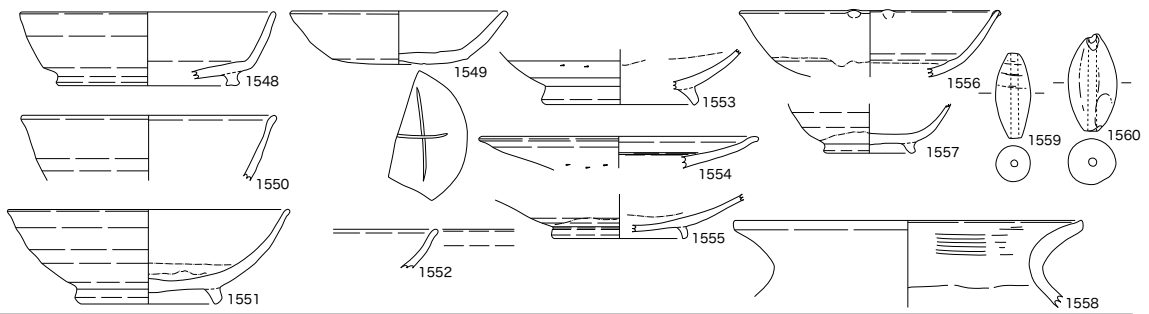
c. 古墳以前の遺構と遺物

● 概要

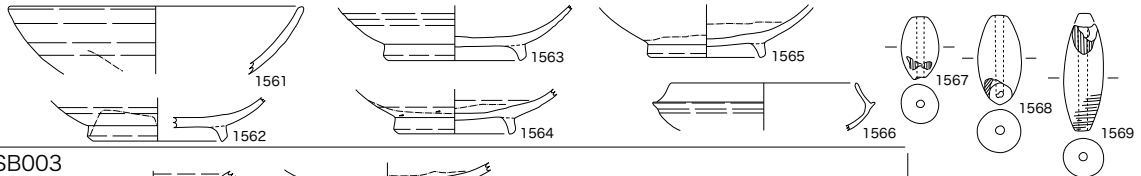
古墳時代に遡る遺構はわずかで、5 世紀から 6 世紀の土師器や須恵器等もほとんどが中世遺構に伴うもので、1 面の SK024 から出土した 5 世紀後葉の高杯も同様である。確実な遺構面が存在しないのは、後世の削平、もしくは洪水による削剥によって消失した可能性がある。



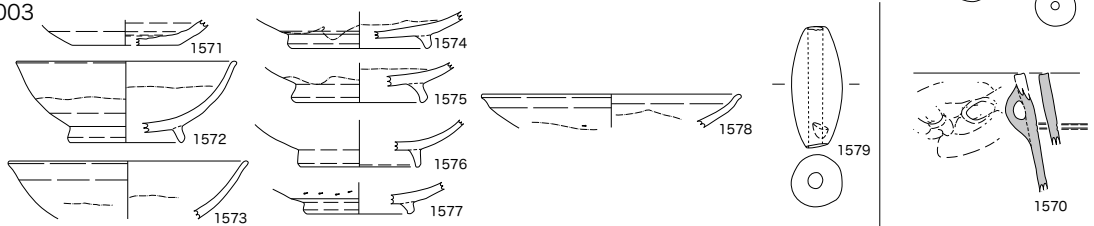
図 3-143 05D-SB3001 検出状況

04B 区
SB001

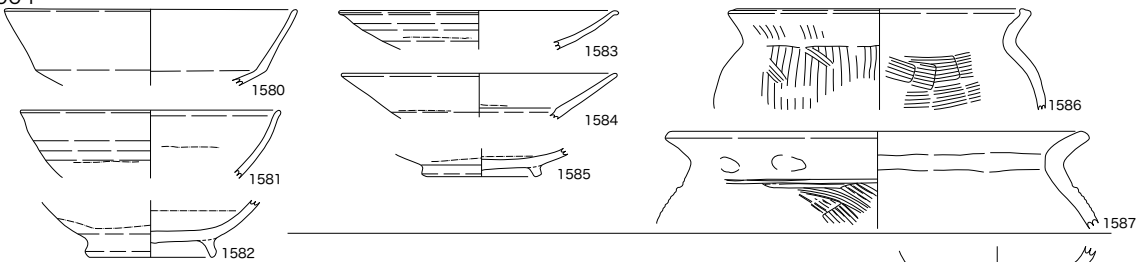
SB002



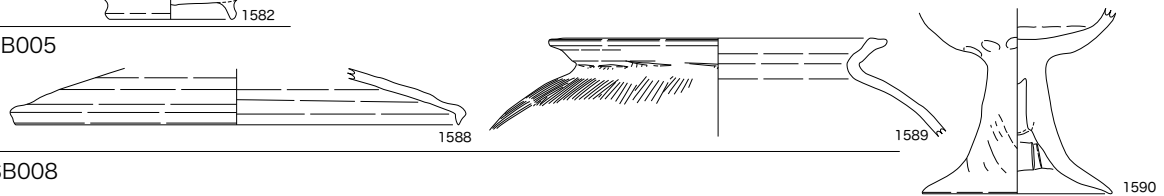
SB003



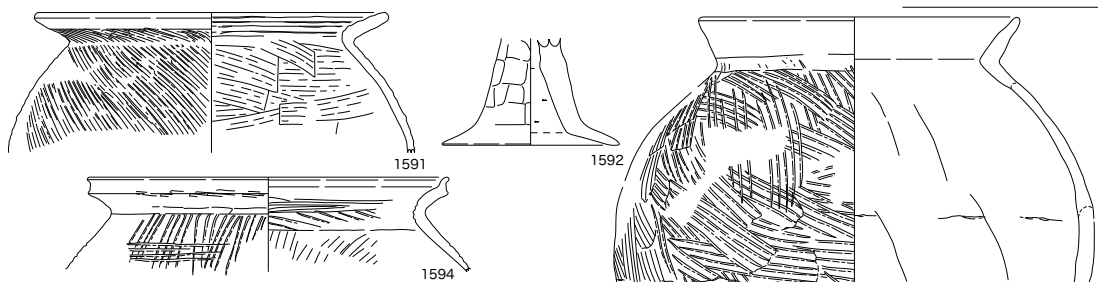
SB004



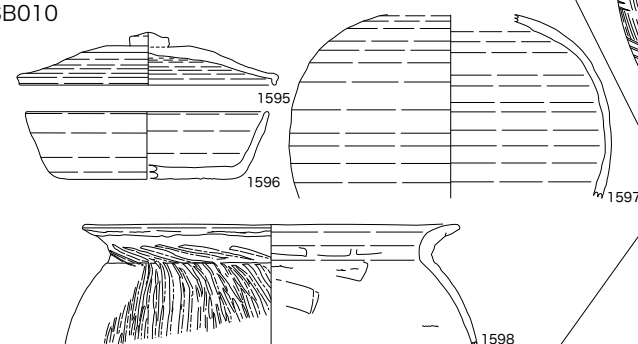
SB005



SB008



SB010



SB013

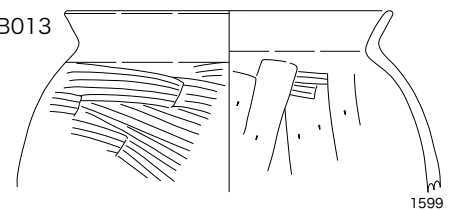
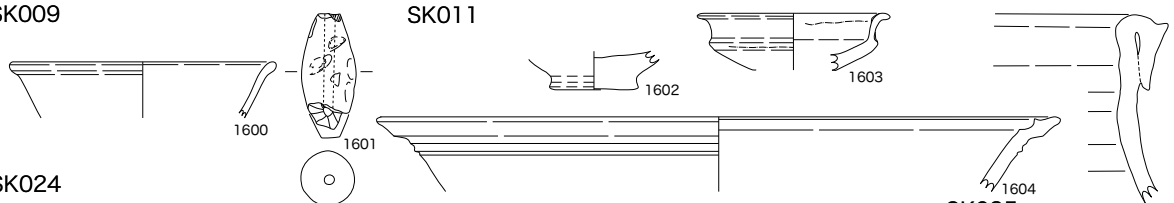
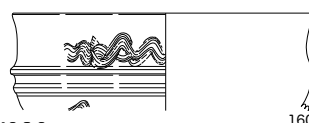


図 3-147 04B 区遺構内出土遺物 (3) (土錘 1/3)

04B 区
SK009

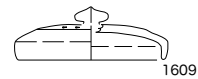
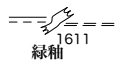
SK024



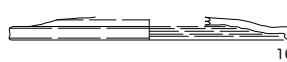
SK027



SK035

SK036
緑釉陶器

SK038



SK051



緑釉陶器

SK013



SK092

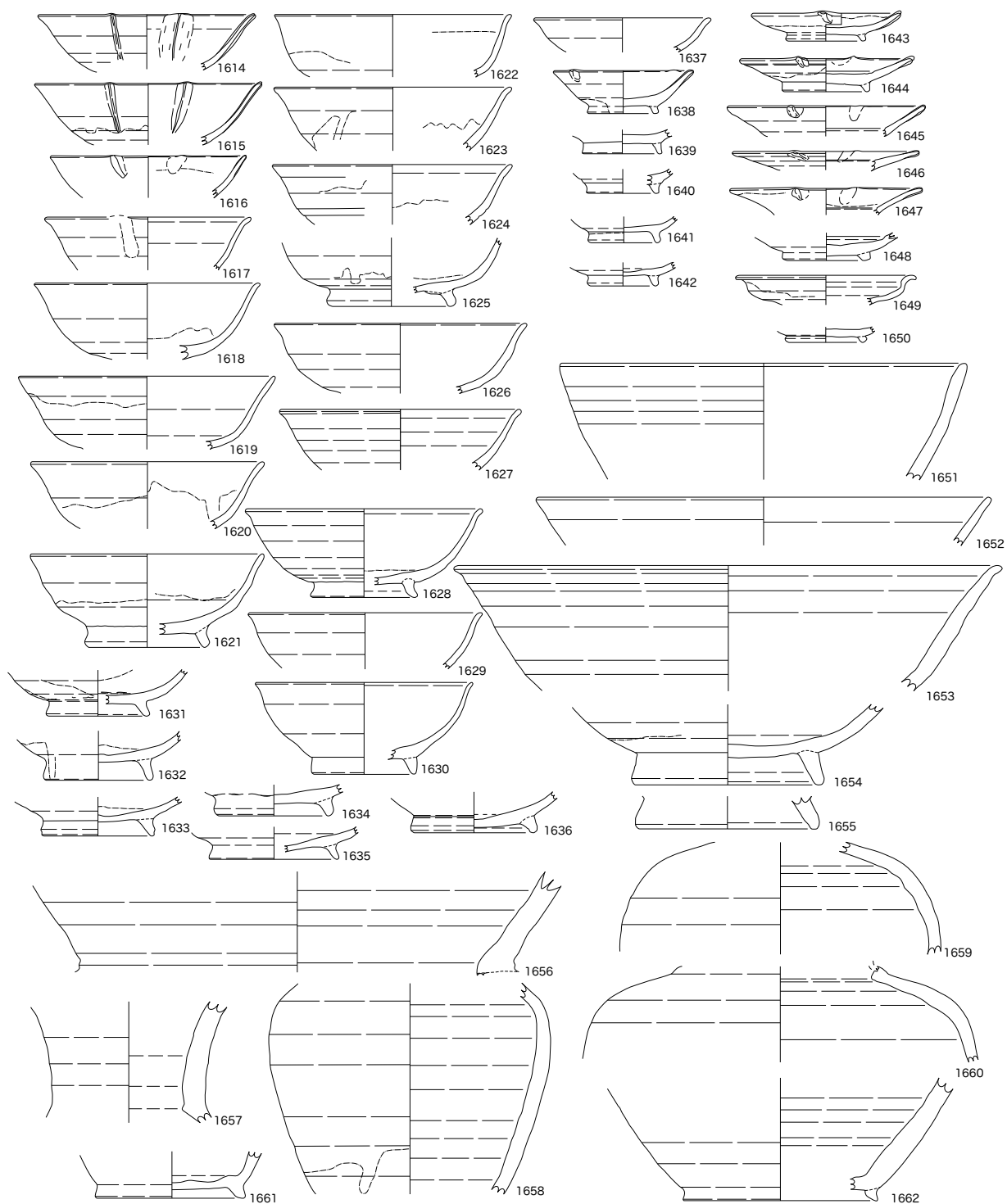


図 3-148 04B 区遺構内出土遺物 (4) (加工円盤 1/4・土錘 1/3)

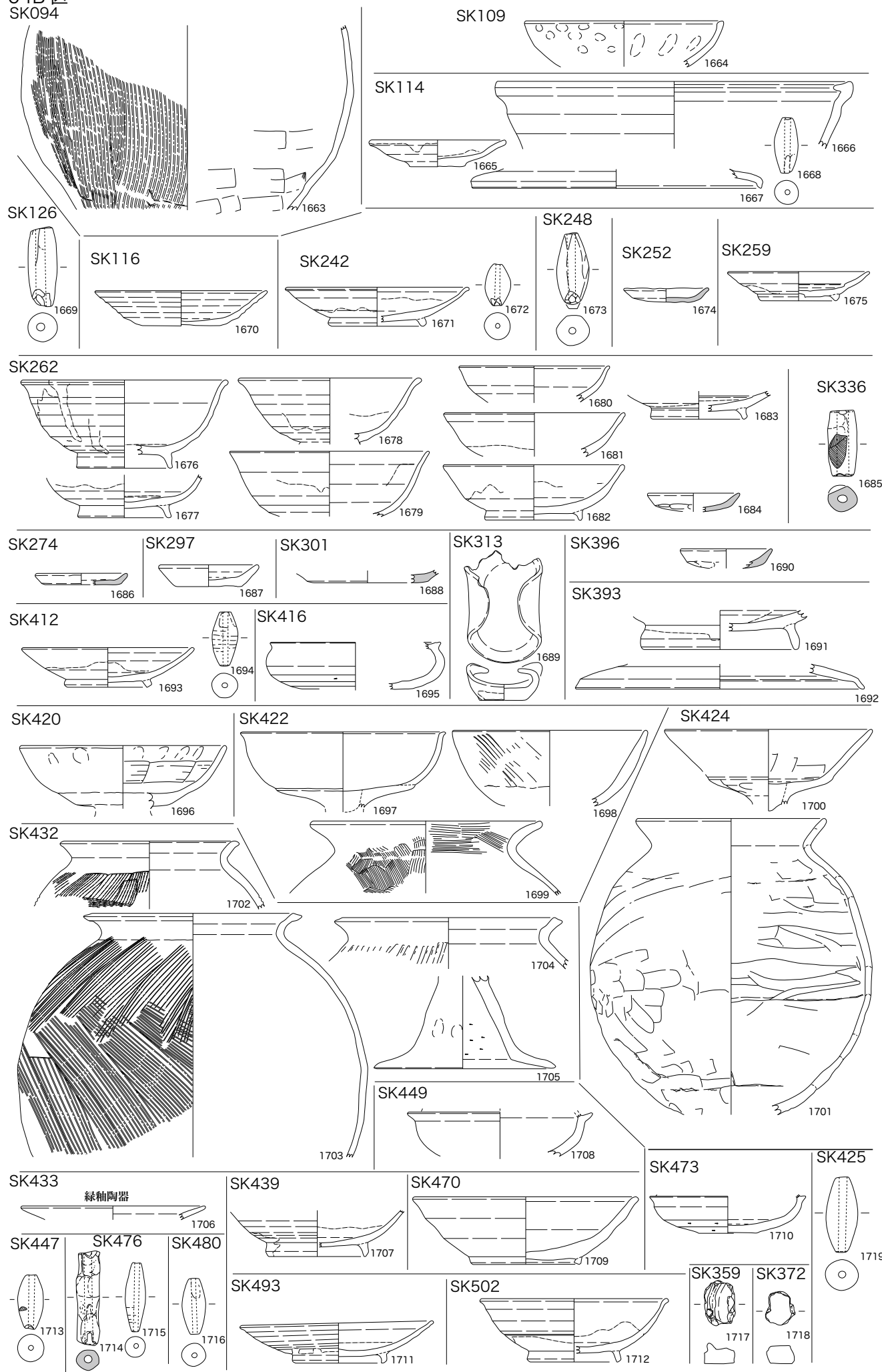
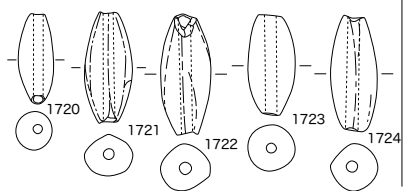
04B 区
SK094

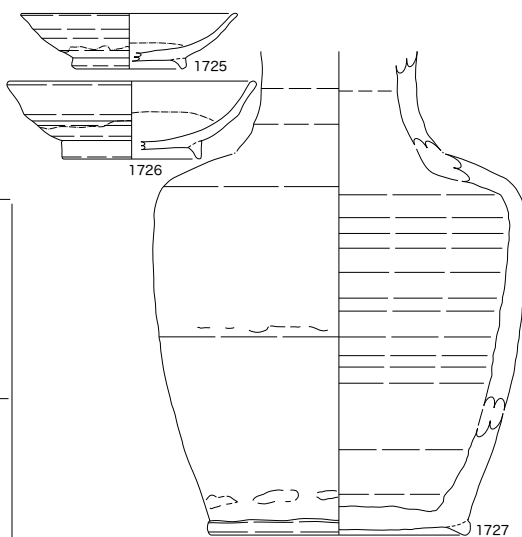
図 3-149 04B 区遺構内出土遺物 (5) (加工円盤 1/4・鉄器 1/2・土鍾 1/3)

04B 区

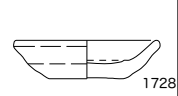
SK481



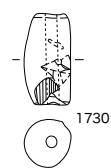
SK503



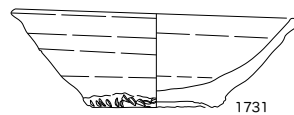
SK515



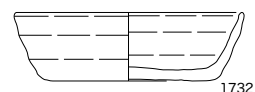
SK519



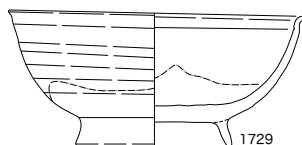
SK532



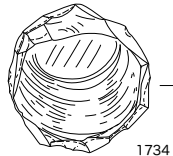
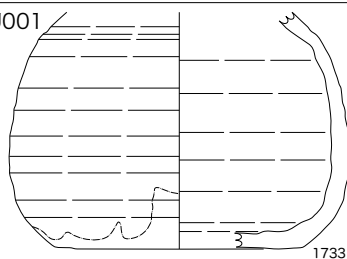
SK545



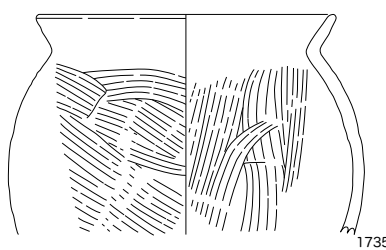
SK517



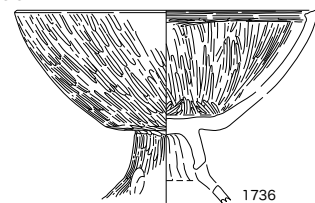
SU001



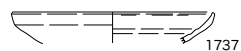
SU003



SU004



SE001



SF001



SF002

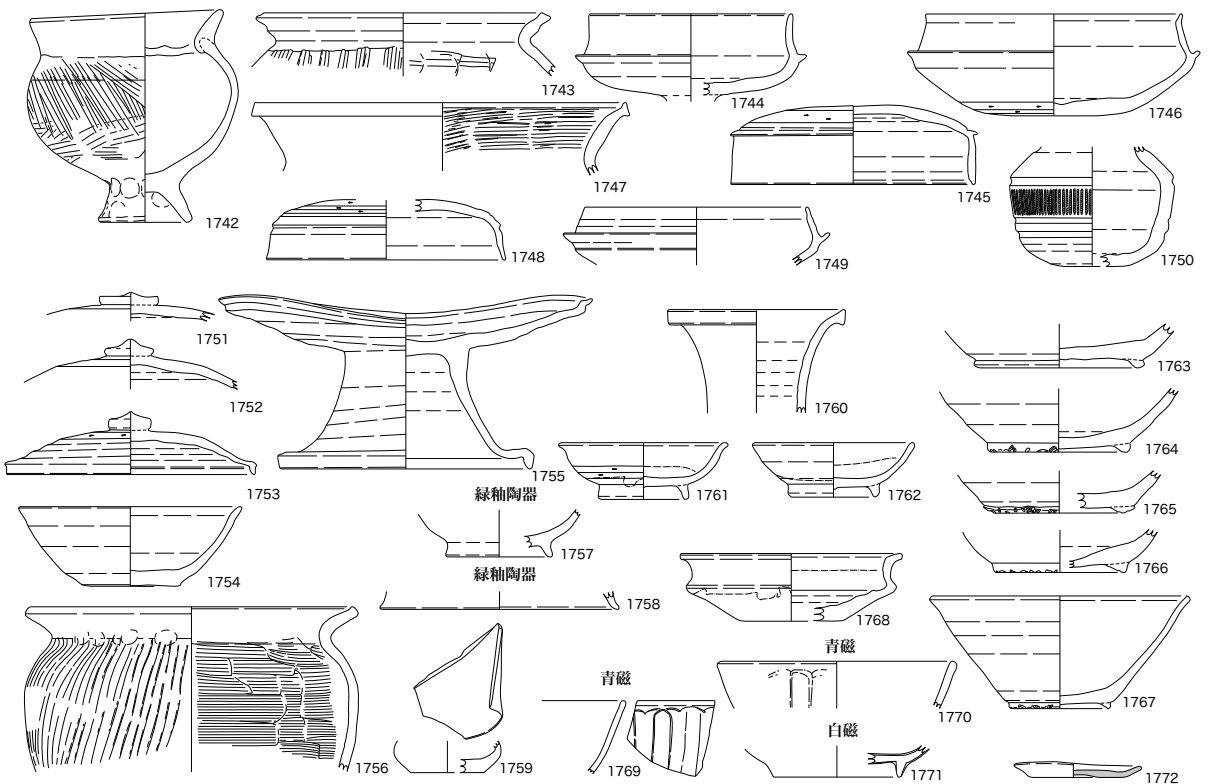
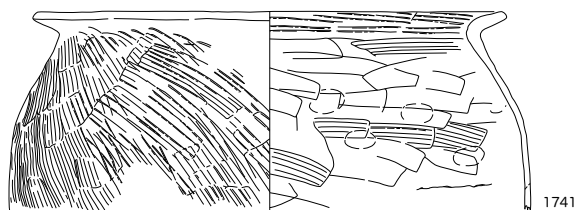


図 3-150 04B 区遺構内出土遺物 (6) (加工円盤 1/4・土錘 1/3)

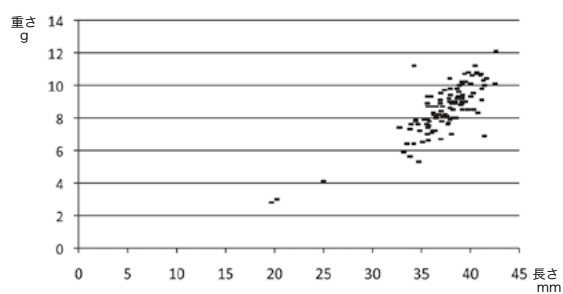
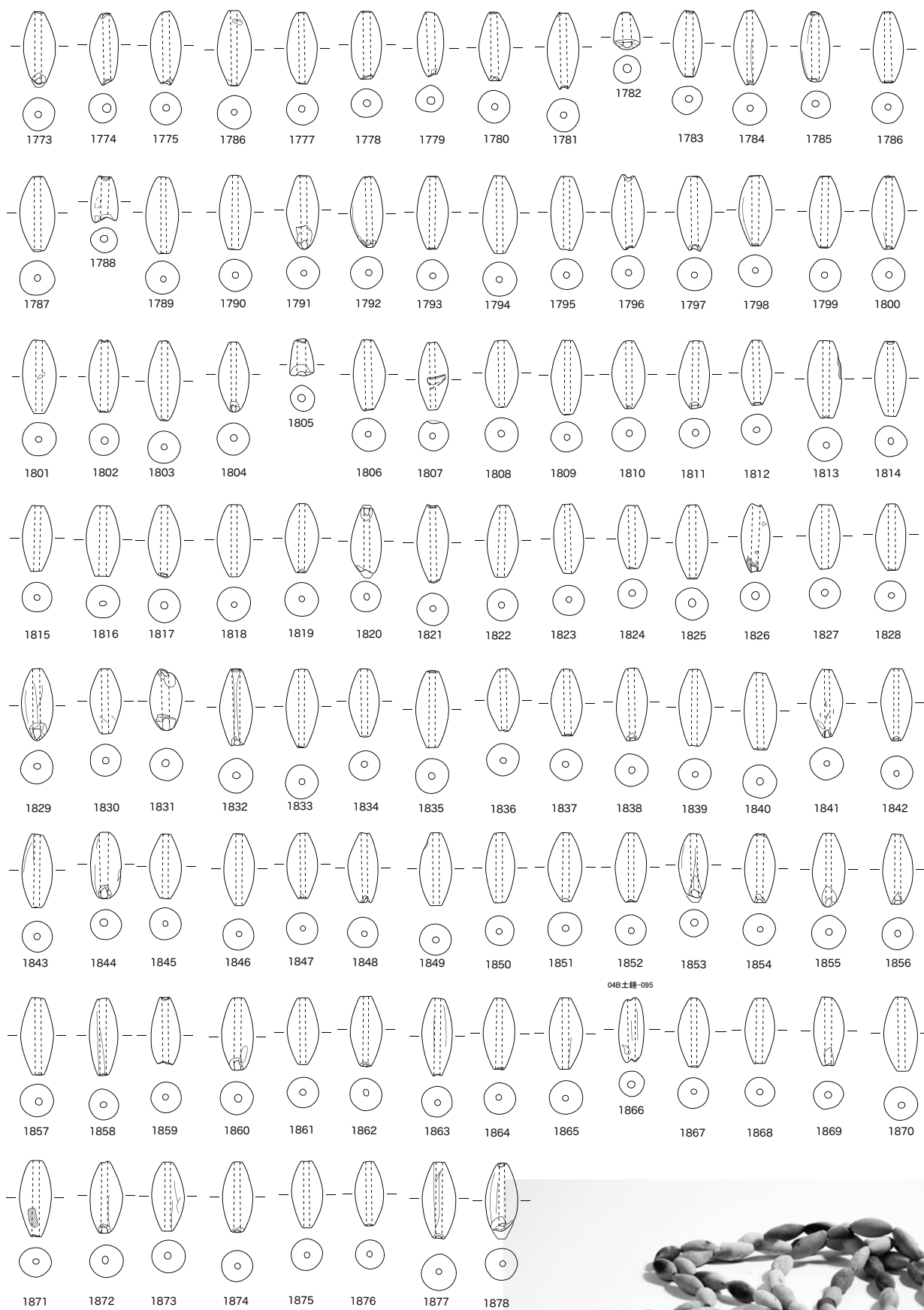


図 3-152 04B-SK340 出土土鉢

図 3-151 04B 区遺構内出土遺物 (7) SK340 出土土鉢 (1/3) とグラフ

04B 区
検 1・2

二枚貝刺突・調整

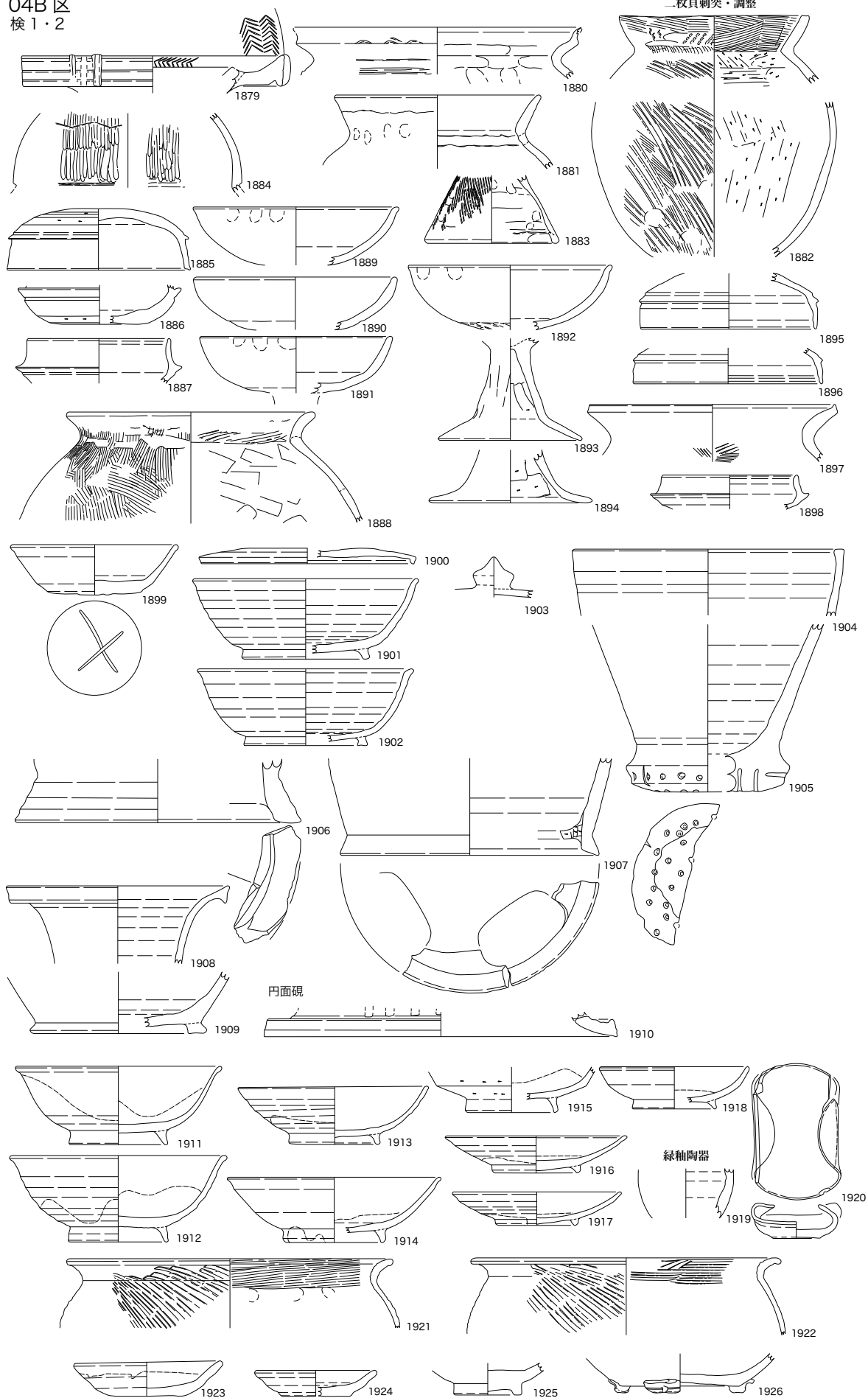
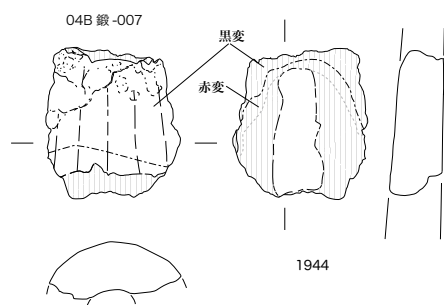
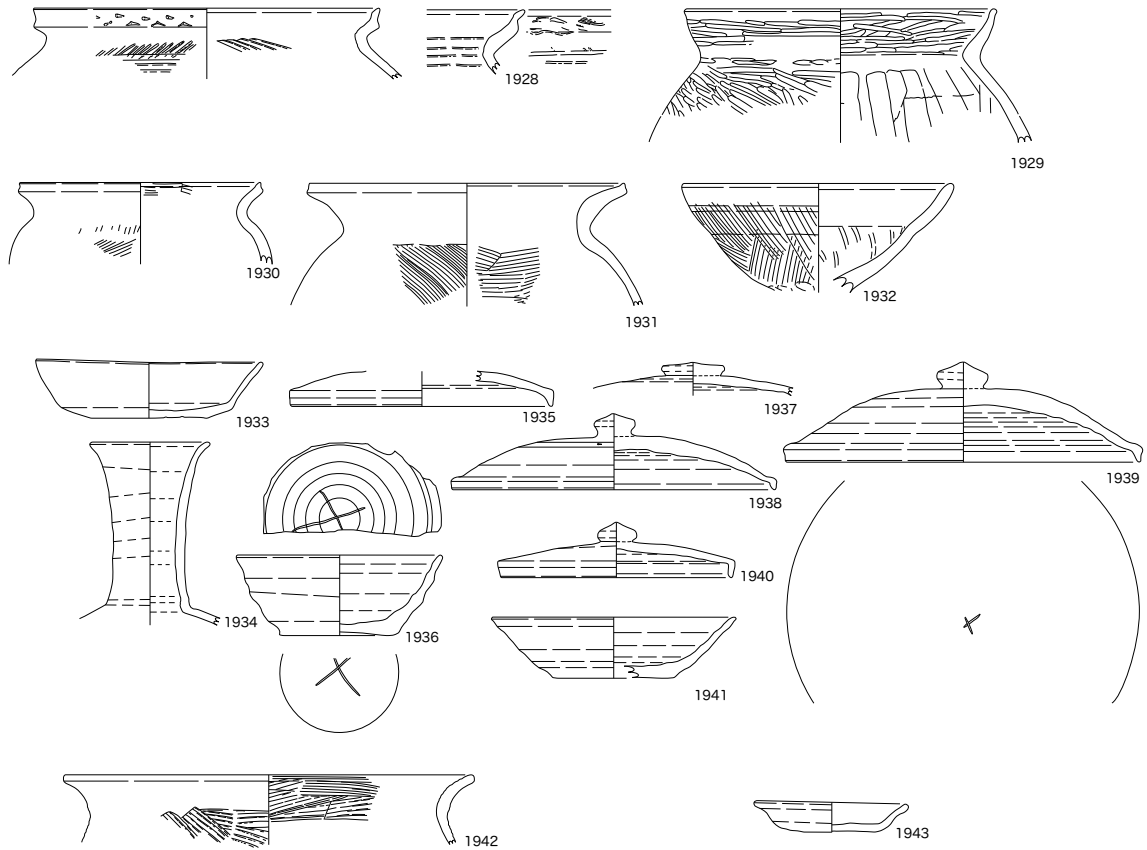


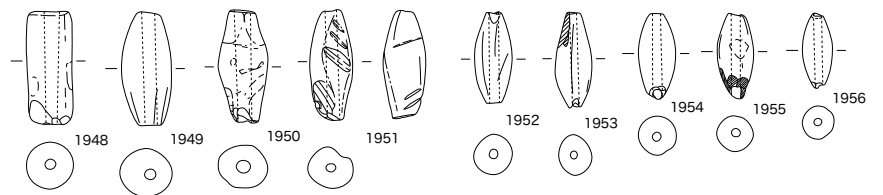
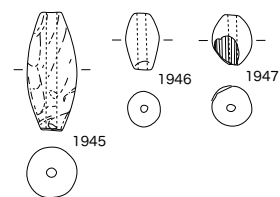
図 3-153 04B 区遺構外出土遺物 (1)

04B 区
検 3



検 2

検 1



検 3

トレンチ

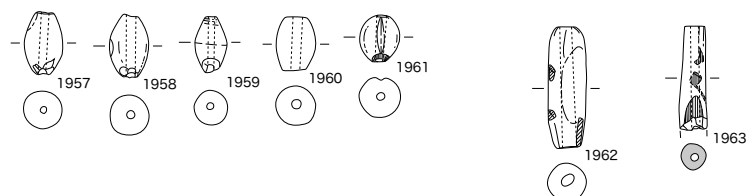


図 3-154 04B 区遺構外出土遺物 (2) (羽口 1/2・土鍾 1/3)

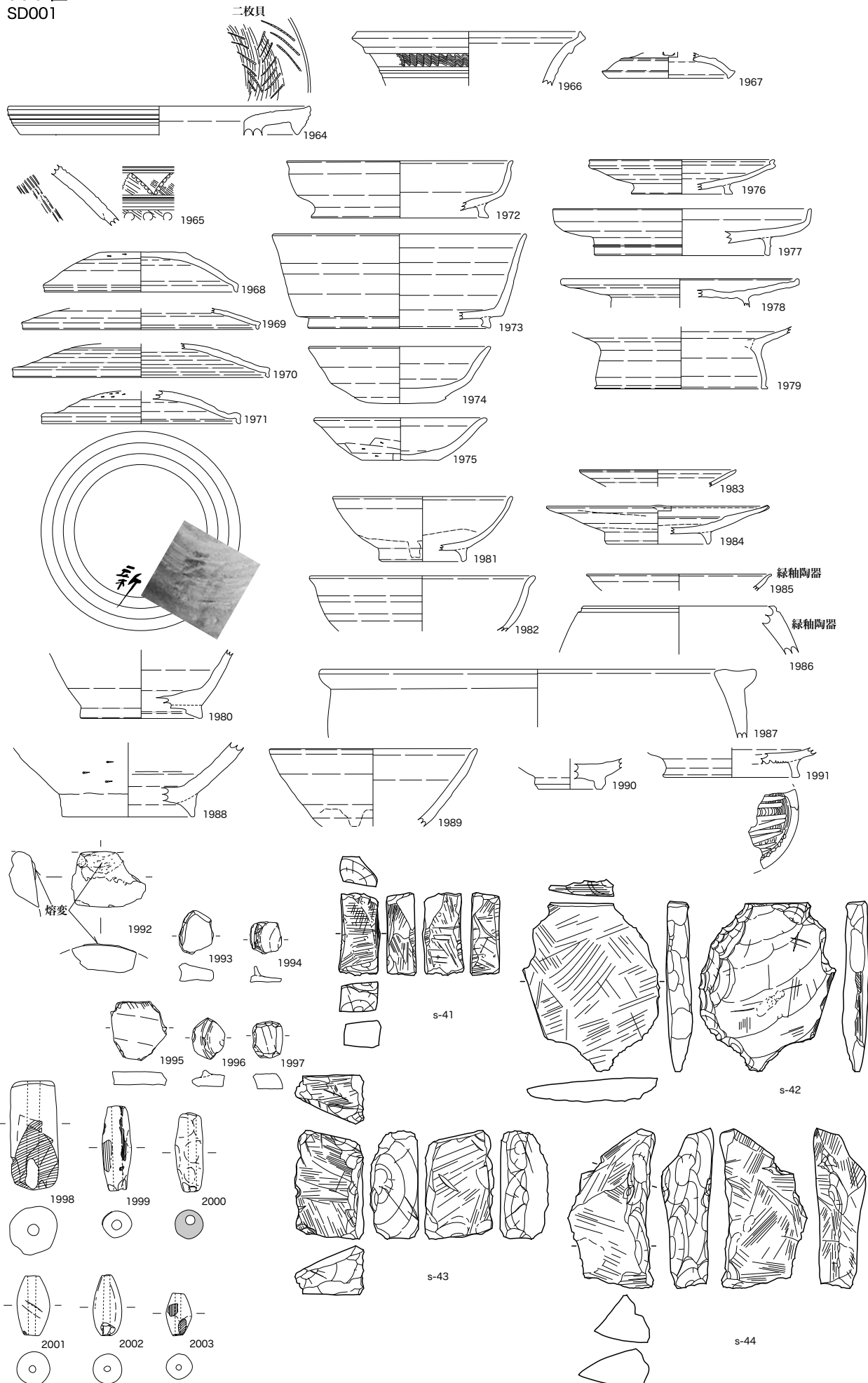
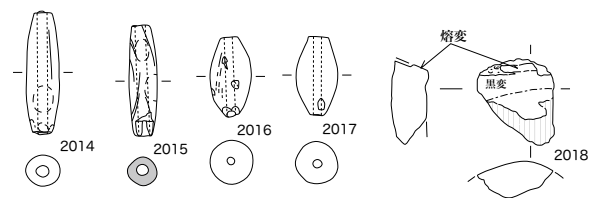
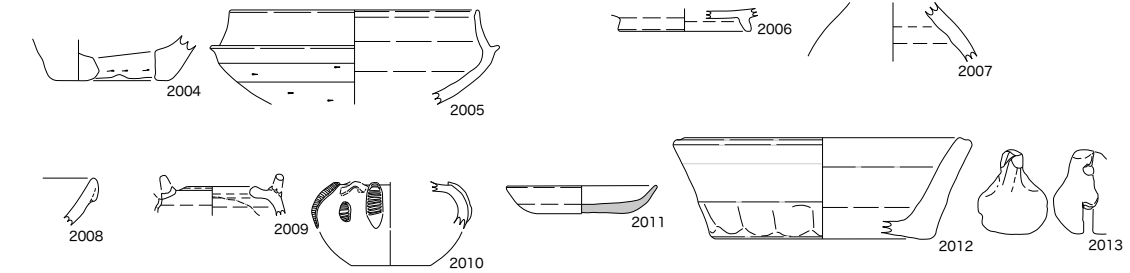
05C 区
SD001

図 3-155 05C 区遺構内出土遺物 (3) SDD001 出土の先行する遺物群 (石器を除く) (加工円盤 1/4 羽口 1/2・石器 1/3・土錘 1/3)

05C 区

検 1



検 3

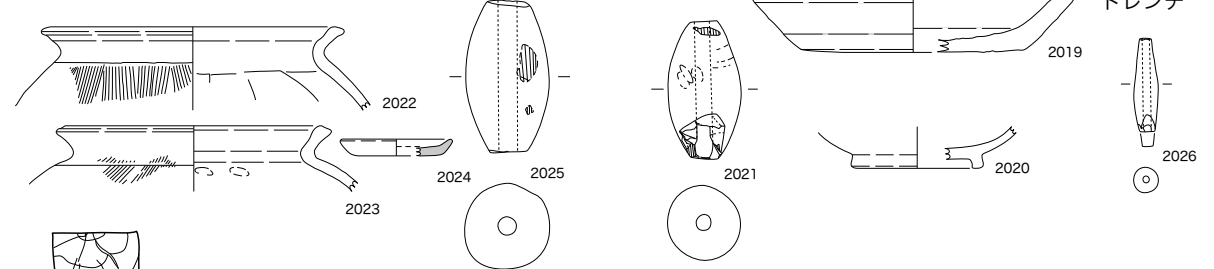
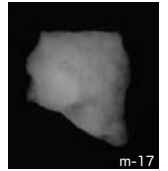
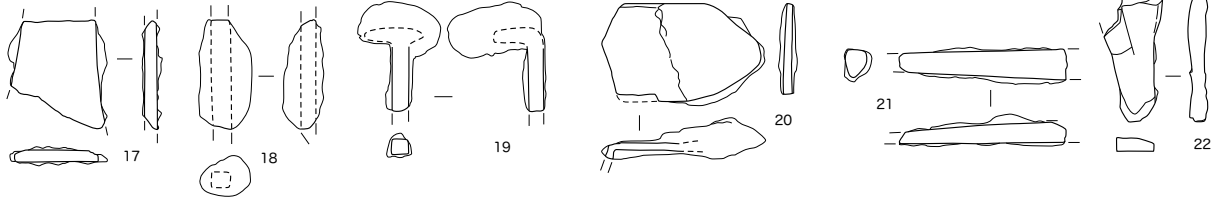


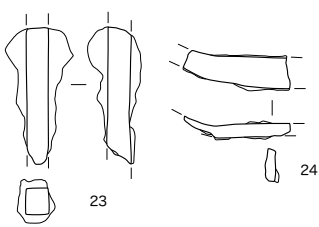
図 3-156 05C 区遺構外出土遺物 (1) (羽口 1/2・土錘 1/3・石器 1/3)

04B 区

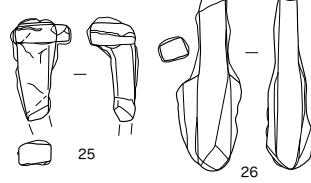
SD001



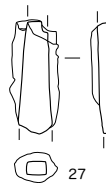
SD003



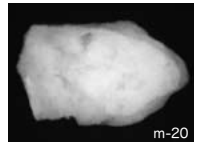
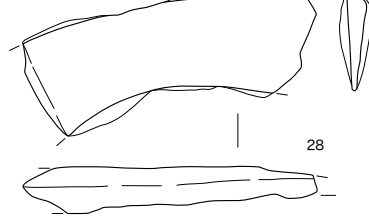
SD004



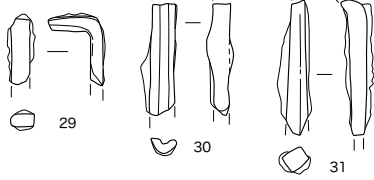
SD005



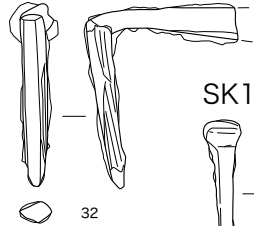
SD007



SD010



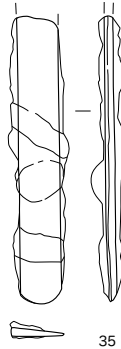
SK019



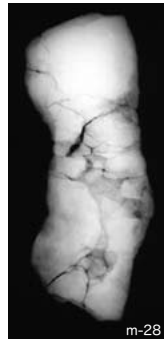
SK135



SK262



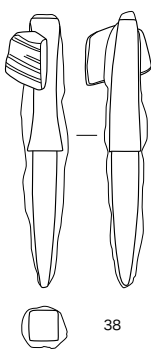
SK466



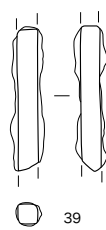
SK323



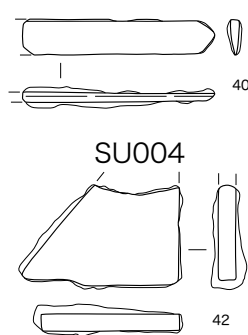
SK489



SK493



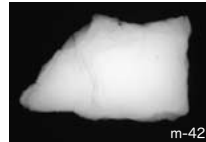
SK509



SB002

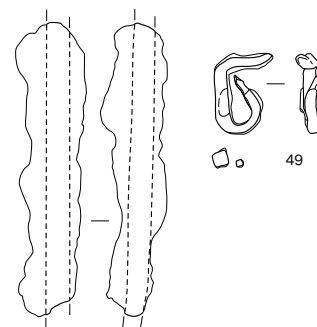
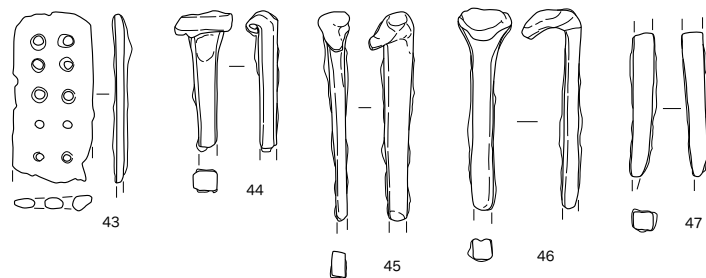
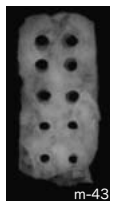


SU004



04B 区

検 1



検 2

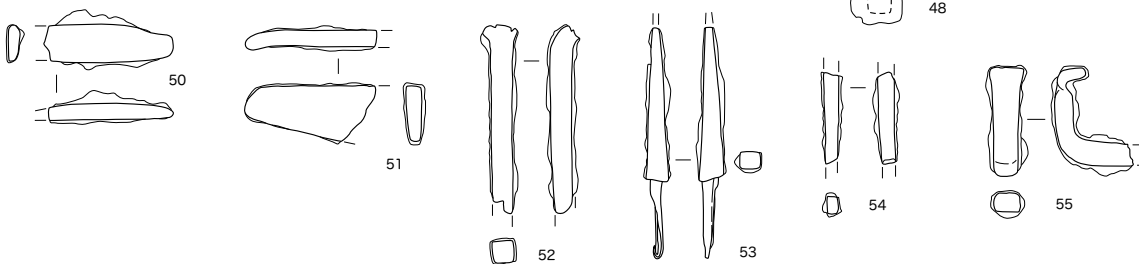


図 3-157 04B 区出土鉄器 (1/2) すべての鉄器なので m 記号は省略

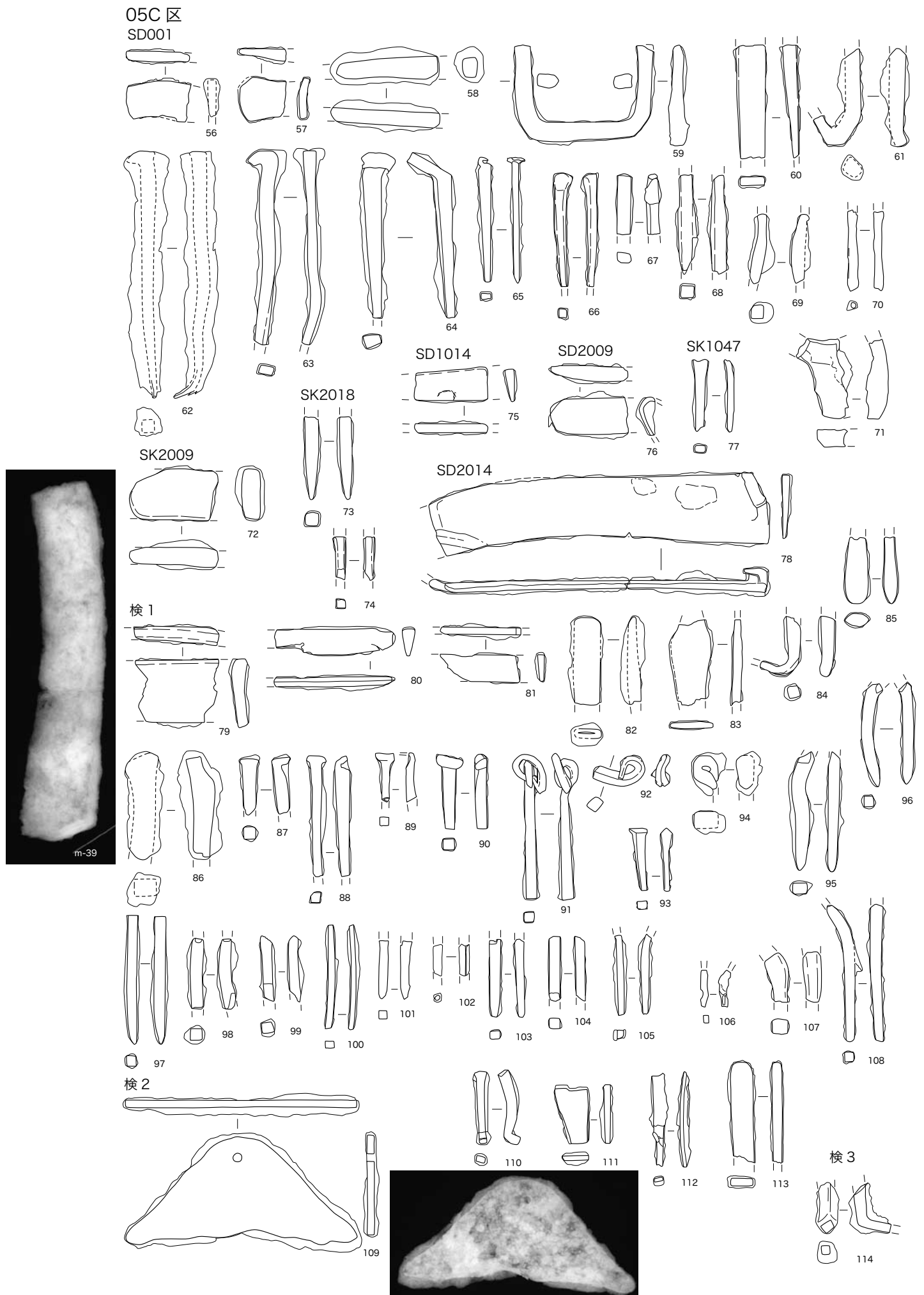
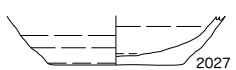


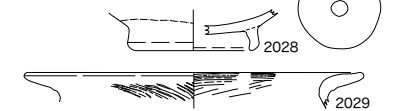
図3-158 05C 区出土鉄器 (1/2) すべて鉄器なので m 記号は省略

05D 区

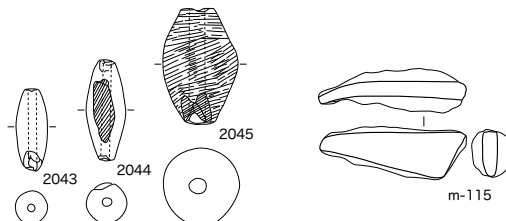
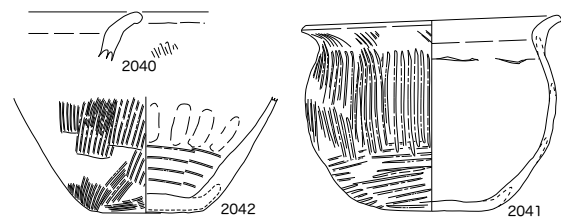
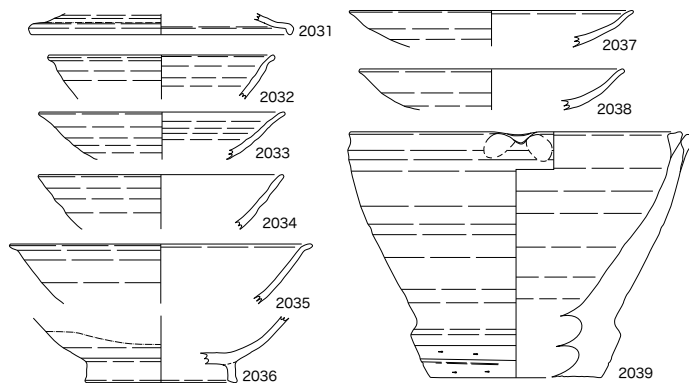
SB2001



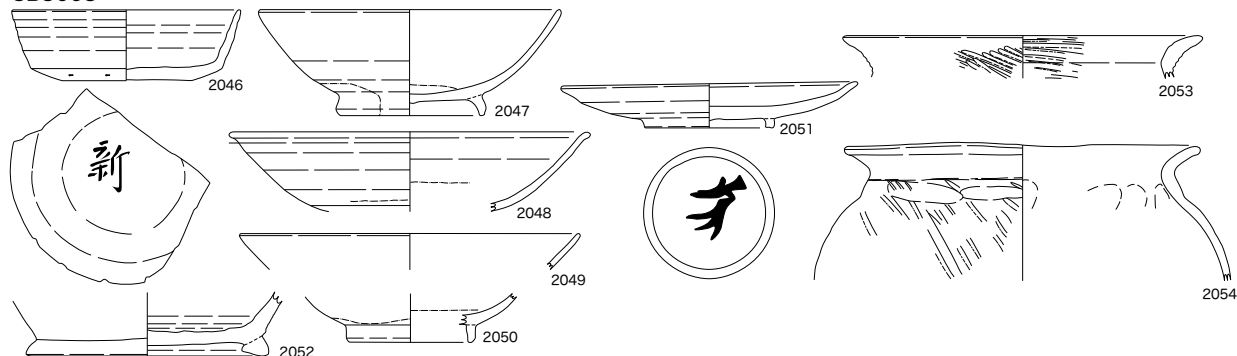
SB2002



SB3001



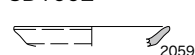
SB3003



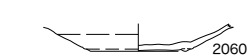
SD1001



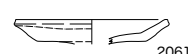
SD1002



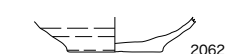
SD1003



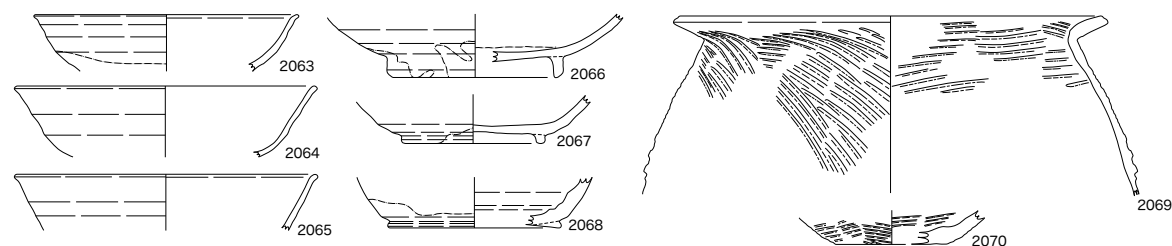
SD1007



SD2001



SD2005



SD2006



SD3003



SK3001

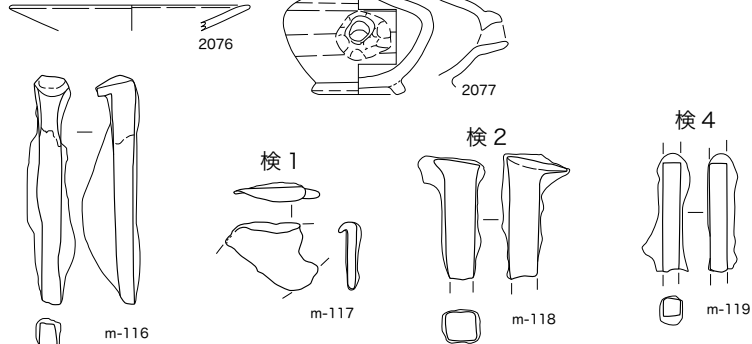


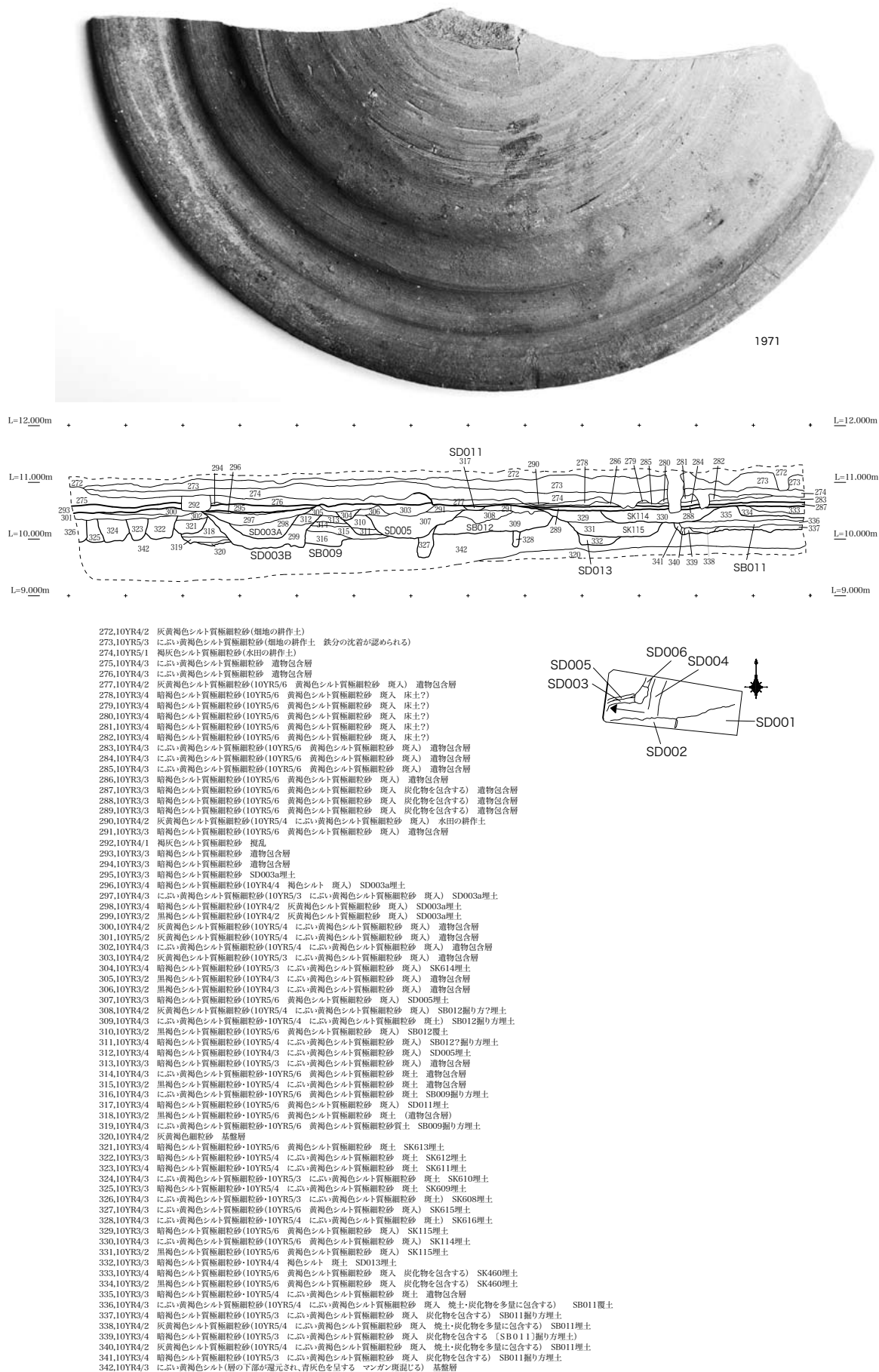
SK3002



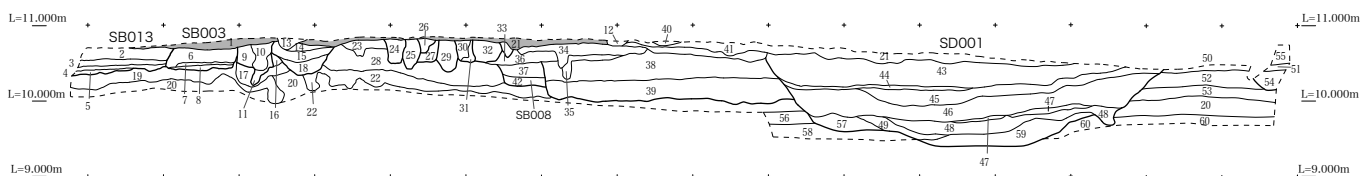
検

緑釉陶器





04B 区中央ベルト土層セクション 1/100



- 1, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) 洪水砂
- 2, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SB013掘り方埋土 上面が第2次床面
- 3, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SB013掘り方埋土 上面が第1次床面
- 4, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色極細粒砂 珉入) SD013掘り方埋土 上面が第1次床面
- 5, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(炭化物を包含する) SB013掘り方埋土
- 6, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SB003覆土
- 7, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SB003覆土
- 8, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(炭化物を包含する) SB003掘り方埋土
- 9, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK667埋土
- 10, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 炭化物を包含する SK667埋土
- 11, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 炭化物を包含する SK667埋土
- 12, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 珉入)
- 13, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入
- 14, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK668埋土
- 15, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK668埋土
- 16, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 珉入)
- 17, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 18, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK668埋土
- 19, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 20, 10YR5/4 について黄褐色細粒砂 基盤層
- 21, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) 洪水砂
- 22, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 23, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 24, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK669埋土
- 25, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK670埋土
- 26, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK589埋土
- 27, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK457埋土
- 28, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 29, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK671埋土
- 30, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK672埋土
- 31, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK672埋土
- 32, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK602埋土
- 33, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK602埋土
- 34, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 炭化物・焼土を包含する
- 35, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/3 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 36, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 37, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 について黄褐色極細粒) SB008埋土
- 38, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR5/3 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK524埋土
- 39, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SK524埋土
- 40, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入
- 41, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入)
- 42, 10YR3/2 黒褐色シルト質細粒砂(10YR4/3 について黄褐色シルト 珉入) SB008掘り方埋土
- 43, 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SD001近世初頭に埋没した層
- 44, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SD001戦国期の埋土
- 45, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SD001戦国期の埋土
- 46, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂・10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入 SD001戦国期の埋土
- 47, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂・10YR5/3 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入 SD001戦国期の埋土
- 48, 10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂・10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂・10YR3/1 黒褐色シルト 珉入 SD001戦国期の埋土
- 49, 10YR5/2 灰黄褐色シルト(10YR5/6 黄褐色シルト 珉入) SD001戦国期の埋土
- 50, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 遺物包含層
- 51, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 遺物包含層
- 52, 10YR3/3 暗褐色シルト質極細粒砂・10YR4/4 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入 遺物包含層
- 53, 10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 遺物包含層
- 54, 10YR3/4 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) SD010埋土
- 55, 10YR4/3 について黄褐色シルト質細粒砂(10YR5/3 について黄褐色シルト質極細粒砂 珉入) 耕作土
- 56, 10YR5/4 について黄褐色極細粒砂 基盤層
- 57, 10YR5/4 について黄褐色細粒砂(10YR4/3 について黄褐色シルト 珉入) 溝沿の崩落
- 58, 10YR5/6 黄褐色極細粒砂(基盤層)
- 59, 10YR5/4 について黄褐色細粒砂(48層がブロックで珉入 浸食による)
- 60, 10YR5/4 について黄褐色極細粒砂 基盤層

04B 区北壁土層セクション 1/100

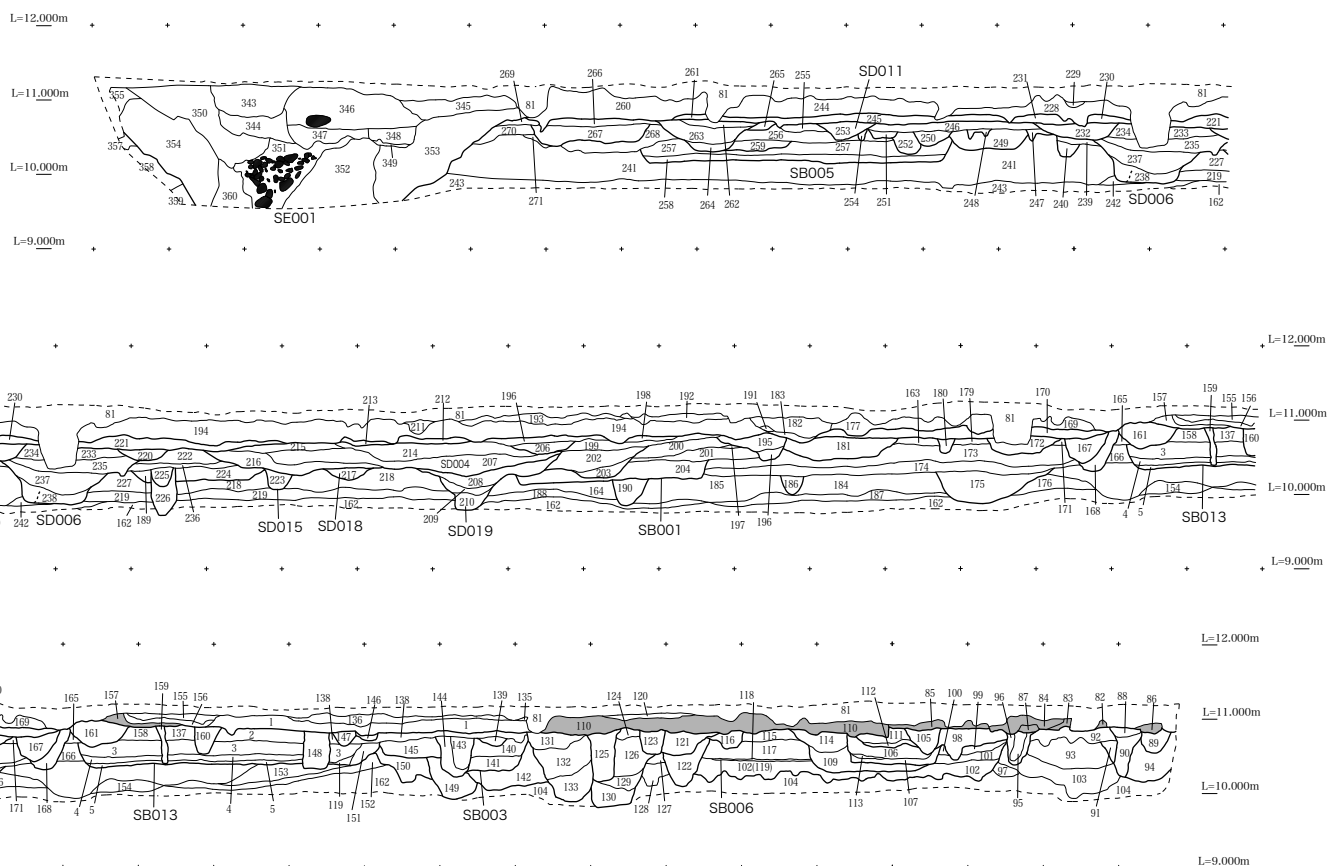
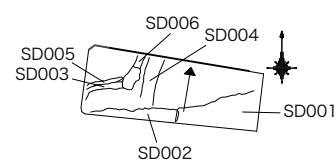


図 3-161 04B 中央ベルト・北壁土層セクション 1/100

中世の遺構は3面でも検出されているために、小片がわずかでも含まれれば後の時代に属するということになるのだが、柱穴と異なり、新しい時代の遺物を含まず数量的にもまとまっている遺構に [SK424・432](#) がある。廃棄土坑と考えられる。宇田期に属し、5世紀代である。現状では堅穴建物跡の存在は窺えず、集落の縁辺であった可能性も窺えない。05A 区の旧河道際の遺構群を含めて御山寺遺跡では散漫である。

05B 区の盛期である古墳 2 期に並行する時期の遺物は出土していないが、07D 区や他の調査区を含めて古墳 1 期までの居住域や方形周溝墓に並行する時期の土器は下層の自然堆積層に含まれている。部分的に遺物集積のかたちで出土するが、炭化物を伴うこともなく、人為性は窺えない。04A 区東端で検出された炭化物を含む堆積層との連続も窺えるが、総体として谷の上部を埋めている自然堆積層中に遺物が含まれていると考えるのが適切であろう。つまり、

81, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
82, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 洪水砂
83, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 洪水砂
84, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (10YR/4/4 褐色シルト質極細粒砂 埋入) 洪水砂
85, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 洪水砂
86, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 洪水砂
87, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 洪水砂
88, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK633埋土
89, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK664埋土
90, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK663埋土
91, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK665埋土
92, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
93, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 (基盤層)
94, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK666埋土 SSKS665と同じ遺構か?)
95, 10YR/4/2 灰黄褐色細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK662埋土
96, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK662埋土
97, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 基盤層
98, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) 遺物包含層
99, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SB006覆土
100, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 SB006覆土)
101, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SB006埋土
102, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) SB006掘り方埋土)
103, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/4 褐色シルト 埋入) ジャリジャリ 基盤層
104, 10YR/5/4 にぶい黄褐色細粒砂 基盤層
105, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK661埋土
106, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK660埋土
107, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK660埋土
108, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 上面上SB006床面
109, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) SK659埋土
110, 10YR/3/3 暗褐色シルト質細粒砂 洪水砂
111, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) 遺物包含層
112, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) 遺物包含層
113, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) SK660埋土
114, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) SK659埋土
115, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
116, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 炭化物を包含する) SK658埋土
117, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SB006覆土
118, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 上面上SB006床面
119, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (炭化物を包含する SB013掘り方埋土
120, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
121, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入 よく締まる) SK655埋土
122, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK657埋土
123, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK654埋土
124, 10YR/3/2 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK656埋土
125, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK653埋土
126, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK656埋土
127, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/4 褐色シルト質極細粒砂 埋入) SB006覆土
128, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SB006掘り方埋土?)
129, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK656埋土
130, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK656埋土
131, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK652埋土
132, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK652埋土
133, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK652埋土)

134, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色極細粒砂 埋入) SB013掘り方埋土 上面上第1次床面
135, 10YR/4/1 暗褐色シルト 畑地の耕作土
136, 10YR/4/1 暗褐色シルト 畑地の耕作土
137, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/4 褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
138, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
139, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK651埋土
140, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SB003覆土
141, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SB003掘り方埋土
142, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK650埋土
143, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK647埋土
144, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK67埋土
145, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SB003掘り方埋土
146, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK645埋土
147, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK644埋土
148, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋土 SK643埋土
149, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK649埋土
150, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK439埋土
151, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SB013掘り方埋土
152, 10YR/5/4 にぶい黄褐色細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト埋入) 基盤層
153, 10YR/3/3 暗褐色シルト (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 基盤層
154, 10YR/5/4 にぶい黄褐色細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト埋入) 基盤層
155, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
156, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
157, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 洪水砂
158, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/4 褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
159, 10YR/4/2 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK651埋土
160, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK642埋土
161, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK640埋土
162, 10YR/5/4 にぶい黄褐色細粒砂 基盤層
163, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
164, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋土) 基盤層
165, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
166, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
167, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK638埋土
168, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK639埋土
169, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
170, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
171, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
172, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK637埋土
173, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
174, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
175, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK636埋土
176, 10YR/5/4 にぶい黄褐色細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト埋入) 基盤層
177, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
178, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK637埋土
179, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK622埋土
180, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK635埋土
181, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK634埋土
182, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質細粒砂 (10YR/4/4 褐色シルト 埋入) 畑地の耕作土
183, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 畑地の耕作土
184, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト 埋土) 基盤層
185, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト 埋土) 基盤層

186, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK648埋土
187, 10YR/5/4 黄褐色極細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト 埋入)
188, 10YR/5/4 黄褐色極細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト 埋入)
189, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK362埋土
190, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK632埋土
191, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
192, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
193, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
194, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
195, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK633埋土
196, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 埋入) SK633埋土
197, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
198, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
199, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
200, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
201, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
202, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK631埋土
203, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK631埋土
204, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SB001覆土
205, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト 埋土) 基盤層
206, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD004埋土
207, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/4/4 にぶい褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD004埋土
208, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD0019埋土
209, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD019埋土
210, 10YR/3/1 黒褐色極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SD019埋土
211, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
212, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
213, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
214, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD004埋土
215, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD004埋土
216, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD004埋土
217, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD018埋土
218, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト 埋土) 基盤層
219, 10YR/5/4 黄褐色細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト埋入) 基盤層
220, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK628埋土
221, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
222, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
223, 10YR/3/1 黒褐色極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD006埋土
224, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK632埋土
225, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK630埋土
226, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK630埋土
227, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト 埋土) 基盤層
228, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
229, 10YR/4/1 褐色色シルト 畑地の耕作土
230, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
231, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
232, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK624埋土
233, 10YR/3/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK660埋土
234, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD006埋土
235, 10YR/4/3 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD006埋土
236, 10YR/3/1 黒褐色極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
237, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SD006埋土

238, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SD006埋土
239, 10YR/3/1 黒褐色極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
240, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK627埋土
241, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 黄褐色シルト 基盤層 (白っぽく土が変化する箇所がある)
242, 10YR/5/4 にぶい黄褐色細粒砂 (10YR/3/3 暗褐色シルト埋入) 基盤層
243, 10YR/4/2 灰黄褐色細粒砂 基盤層
244, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
245, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
246, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
247, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK623埋土
248, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK625埋土
249, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK626埋土
250, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK622埋土
251, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK620埋土
252, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK621埋土
253, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SD011埋土
254, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK646埋土
255, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
256, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
257, 10YR/3/2 黒褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SB005埋土
258, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SB005掘り方埋土
259, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK458埋土
260, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 畑地の耕作土
261, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
262, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK618埋土
263, 10YR/4/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK618埋土
264, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK618埋土
265, 10YR/4/3 暗褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK619埋土
266, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) SK620埋土
267, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 SK617埋土
268, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
269, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
270, 10YR/4/3 暗褐色シルト質質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
271, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 遺物包含層
343, 10YR/4/1 褐色色シルト質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
344, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
345, 10YR/4/1 褐色色シルト質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
346, 10YR/5/2 暗灰黄褐色シルト質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
347, 10YR/4/3 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
348, 10YR/3/4 暗褐色シルト質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
349, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 井戸機能停止後の土埋土
350, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入) 再掘削後の埋土
351, 10YR/4/2 暗灰黄褐色シルト質極細粒砂 (こまごまの凹みで構成される) 再掘削後の埋土
352, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土
353, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 掘り方埋土
354, 10YR/3/3 暗褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土 掘り方埋土
355, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入)
356, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/4 にぶい黄褐色シルト質質極細粒砂 埋入)
357, 10YR/4/3 暗褐色シルト質質極細粒砂 (こまごまの凹みで構成される)
358, 10YR/4/4 褐色シルト (10YR/5/4 黄褐色シルト 基盤層 (白っぽく土が変化する箇所がある)
359, 010YR/4/2 灰黄褐色細粒砂 基盤層
360, 10YR/4/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂 (10YR/5/6 黄褐色シルト質質極細粒砂 埋土

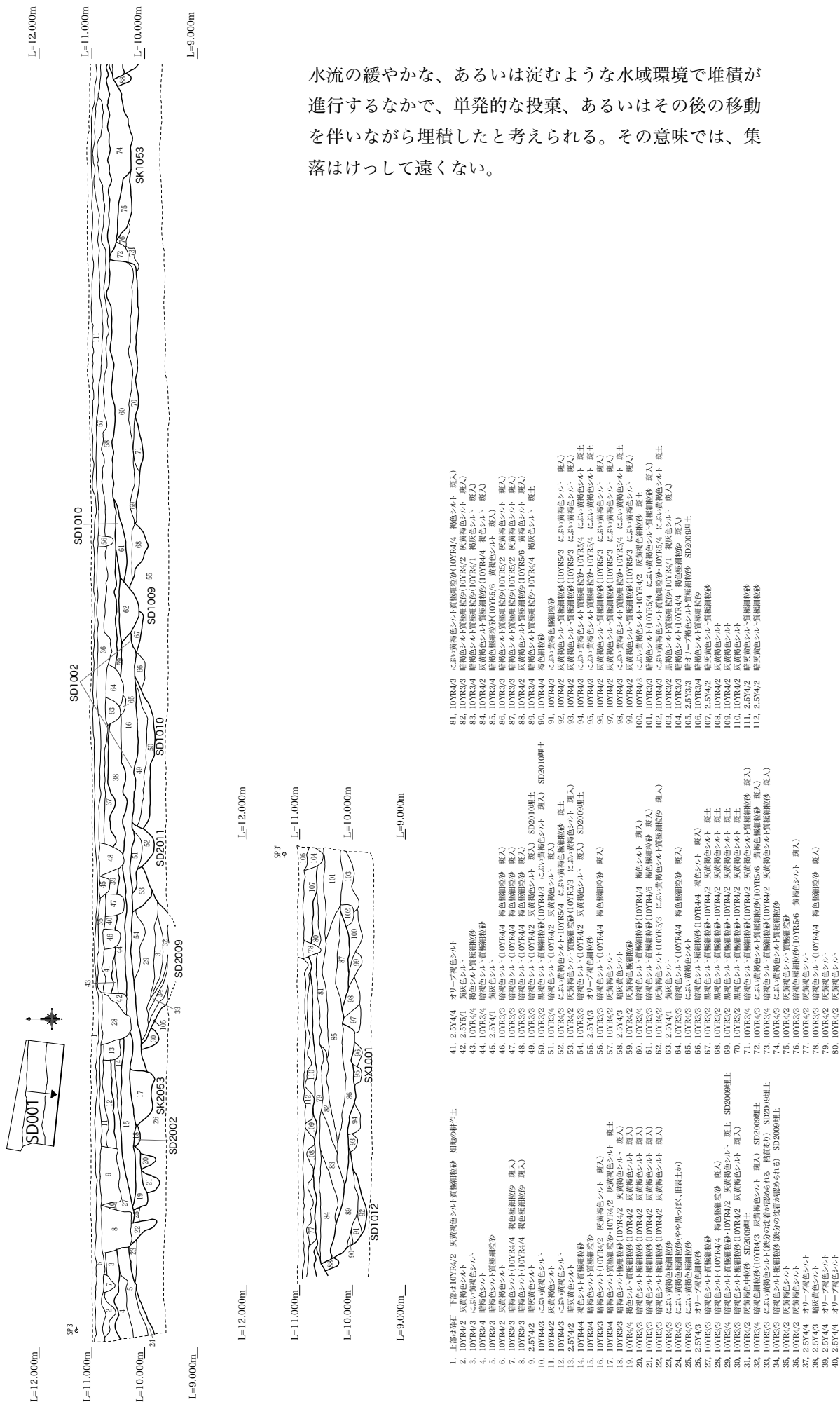


図 3-162 05C 区南壁土層セクション 1/100



図 3-165 05C 区 2 面東部



図 3-166 05D 区 1 面

05Ea・05Eb・06Ea・06Eb 区

●概要

05E 区は生活用通路の確保の為に、南側の幅狭い Ea 区と北側の幅広い Eb 区に分割して調査した。

05Ea 区は南側に池状の大きな掘り込み (SX1001) があり、Eb 区も調査区の中央部が倉庫建設に関わって大きく削られるというように、近世末から近代にかけての開発によってかなりの遺跡情報を失っている。



図 3-167 05Ea 区 SX1001 出土遺物

05Eb 区
SX1001

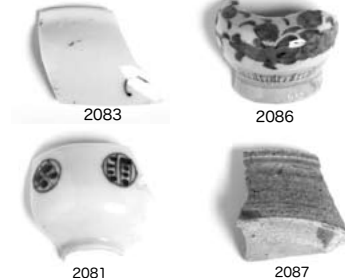
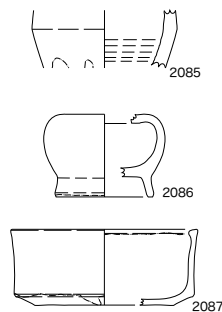
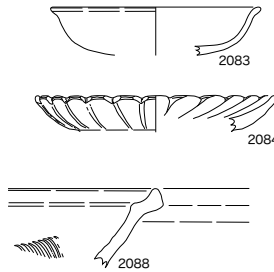
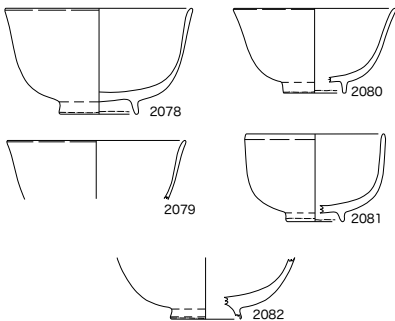
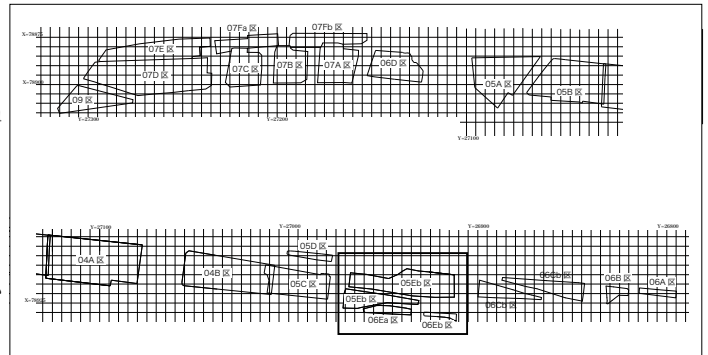


図 3-168 05Eb 区 SX1001 出土遺物



05Eb 区はこの部分の東西に削平を免れたエリアがあるので、記述の便宜上、05Eb 区西部、05Eb 区東部と呼び分けることにする。なお、中央の削平部分からはわずかに中世の井戸 (05Eb-SE1001) がみついている。

06E 区は東西に分かれた細長い調査区である。06Ea 区は 05Eb 区と同じく倉庫建設のために大きく削平され、井戸 (05Ea-SE1001) 下部が遺存していたに過ぎない。反対に 06Eb 区は 05Eb 区東部と同じく複数面にわたる遺構面を検出することができた。

a. 中世以降の遺構と遺物

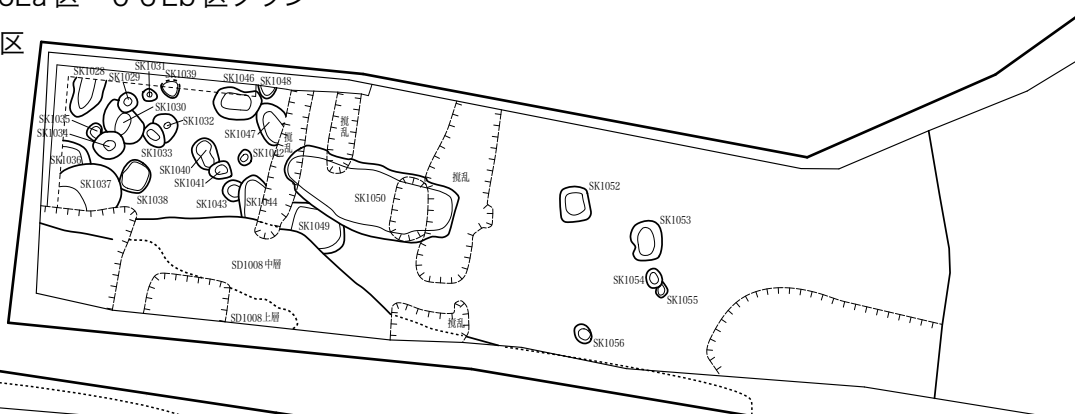
●大溝

05E 区は 05C 区の東に位置する調査区であり、西から続く大溝延長部分の検出を期待したところ、05Eb

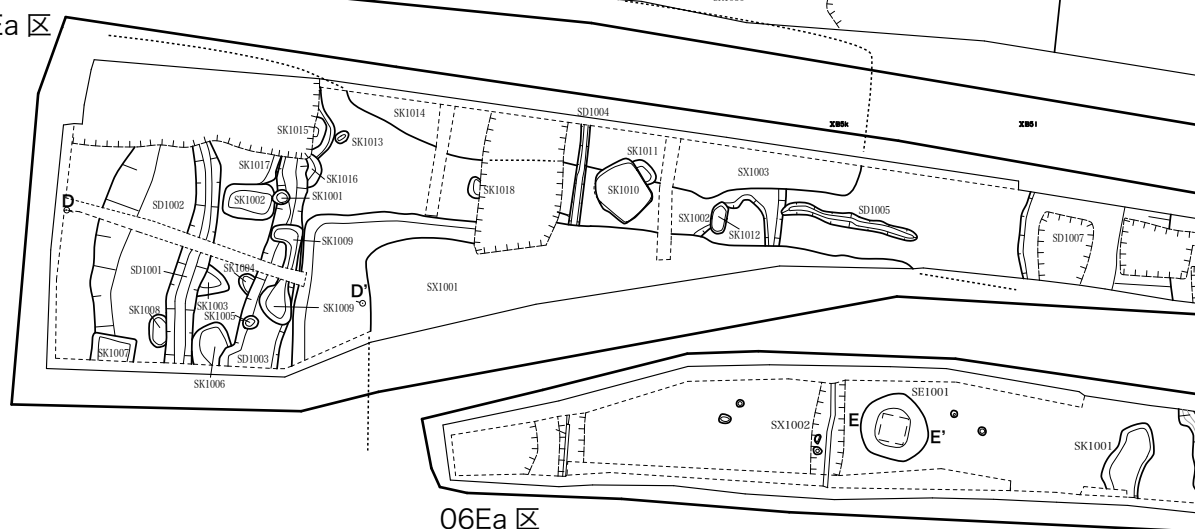


図 3-169 05Ea・Eb 区上面全景他

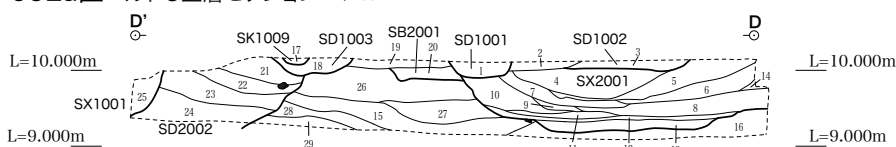
05Ea 区・06Eb 区・06Ea 区・06Eb 区プラン

05Eb ☒

05Ea ☒

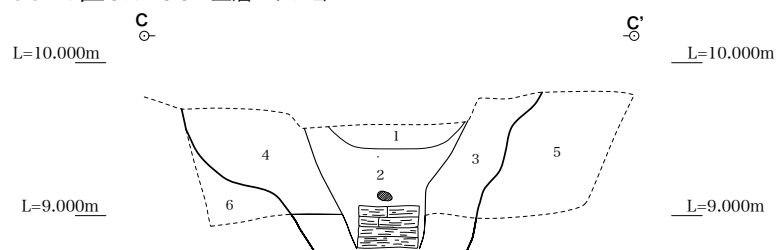
06Ea ☒

05Ea区ベルトC土層セクション 1/100

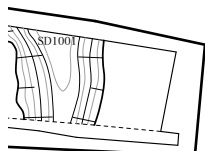
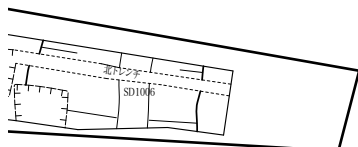
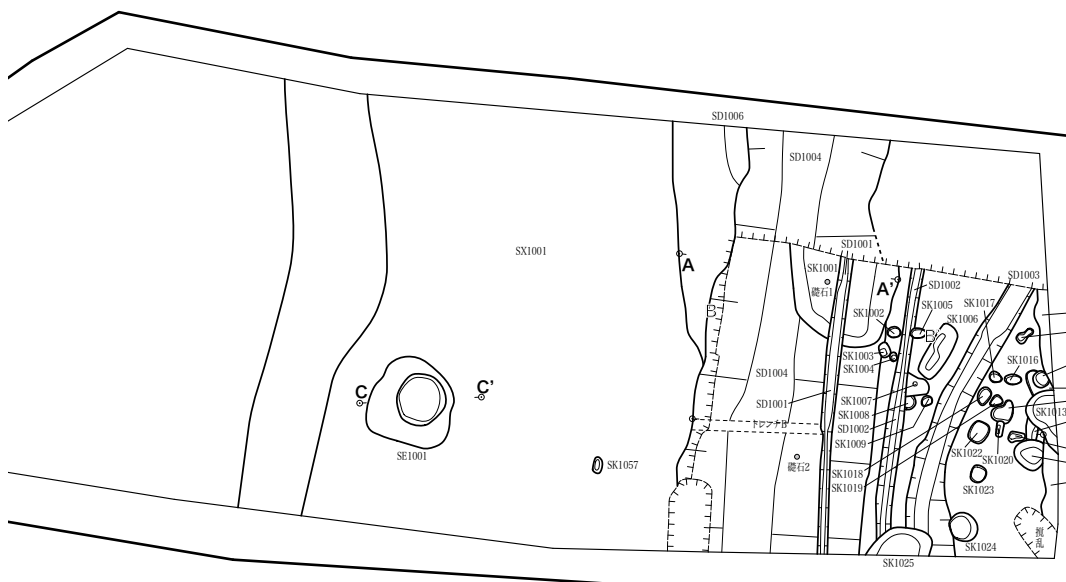


- | | | |
|-------------|---|-----------|
| 1, 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト(10YR5/6 黄褐色シルト 斑入) SD1001埋土 | |
| 2, 10YR3/4 | 暗褐色シルト(10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 斑入) | |
| 3, 10YR3/3 | 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 へい黄褐色シルト 斑入) SD1002埋土 | |
| 4, 10YR3/4 | 暗褐色シルト(10YR4/2 灰黄褐色シルト 斑入) SX2001埋土 | |
| 5, 10YR4/3 | へい黄褐色シルト質極細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂 斑土 SX2001埋土 | |
| 6, 10YR4/2 | 10YR6/4 へい黄橙色シルト質極細粒砂 斑土 SX2001埋土 | |
| 7, 10YR3/2 | 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR5/2 灰黄褐色シルト 斑入 炭化物を包含する) SX2001埋土 | |
| 8, 10YR3/4 | 暗褐色シルト(10YR5/6 黄褐色シルト 斑入 炭化物を包含する) SX2001埋土 | |
| 9, 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト(鉄分の沈着が認められる) SX2001埋土 | |
| 10, 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト・10YR6/4 へい黄橙色シルト質極細粒砂 斑土 SX2001埋土 | |
| 11, 10YR4/1 | 褐灰色シルト質極細粒砂 SX2001埋土 | |
| 12, 10YR3/3 | 暗褐色シルト質極細粒砂(鉄分の沈着が顕著に認められる) SX2001埋土 | |
| 13, 5B6/1 | 青灰色粘土質シルト SX2001埋土 | |
| 14, 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト質極細粒砂 SX2001埋土 | |
| 15, 10YR5/4 | 黄褐色シルト質極細粒砂 | L=10.0 |
| 16, 10YR5/2 | 灰黄褐色シルト(炭化物を多く包含する マンガン斑・鉄分の沈着が認められる) | |
| 17, 10YR4/3 | へい黄褐色シルト(10YR5/3 へい黄褐色シルト 斑入) SK1009埋土 | |
| 18, 10YR3/3 | 暗褐色シルト質極細粒砂(10YR4/4 褐色シルト 斑入) SD1003埋土 | |
| 19, 10YR3/4 | 暗褐色シルト質極細粒砂 | |
| 20, 10YR3/2 | 黒褐色シルト質極細粒砂 SB2001埋土 | |
| 21, 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト(鉄分の沈着が認められる) SD2002埋土 | |
| 22, 2.5Y4/1 | 黄灰色シルト・2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂の互層) SD2002埋土 | |
| 23, 10YR4/4 | 褐色極細粒砂(SD2002埋土) | L=9.0 |
| 24, 2.5Y4/2 | 暗灰黄色極細粒砂(鉄分の沈着が認められる ラミナが認められる) SD2002埋土 | |
| 25, 2.5Y4/2 | 暗灰黄色シルト | |
| 26, 10YR4/3 | へい黄褐色シルト(10YR5/4 へい黄褐色シルト 斑入) | |
| 27, 10YR3/2 | 黒褐色シルト質極細粒砂 | |
| 28, 2.5Y3/2 | 黒褐色シルト質極細粒砂(炭化物を多く包含する) | 1. 2.5Y4 |
| 29, 10YR4/4 | 褐色細粒砂 地山 | 2. 2.5Y3 |
| | | 3. 10Y3/2 |

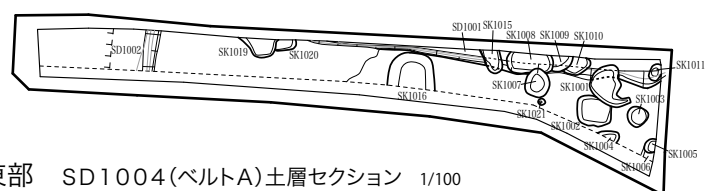
05Eb区SE1001土層セクション 1/100



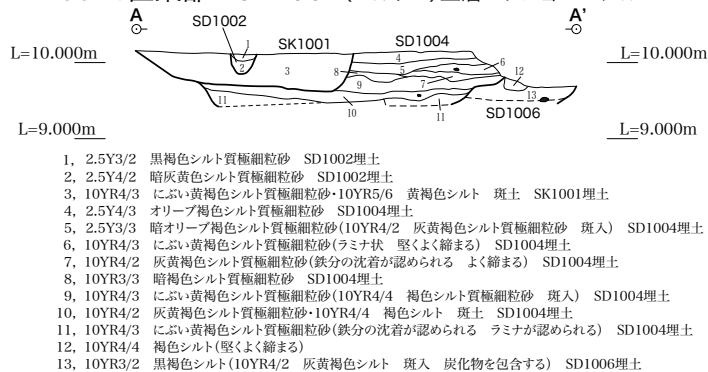
1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂(2.5Y7/6 明黄褐色シルト 斑入 鉄分の沈着が認められる)
2. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂(2.5Y5/4 黄褐色シルト 斑入 鉄分の沈着が認められる)
3. 10YR4/2 灰黄色シルト質極細粒砂・10YR4/4 褐色シルト 斑入 掘形理土
4. 10YR4/2 灰黄色シルト質極細粒砂・10YR4/4 褐色シルト 斑入 掘形理土
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂(地山)
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂(地山)



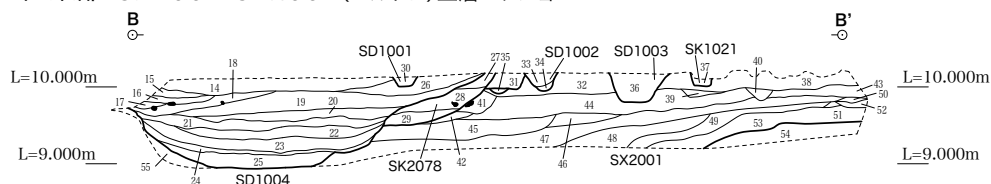
O6Eb 区



O5Eb区東部 SD1004(ベルトA)土層セクション 1/100



O5Eb区東部 SD1004・SX2001(ベルトB)土層セクション 1/100



05Ea 区

SB2002

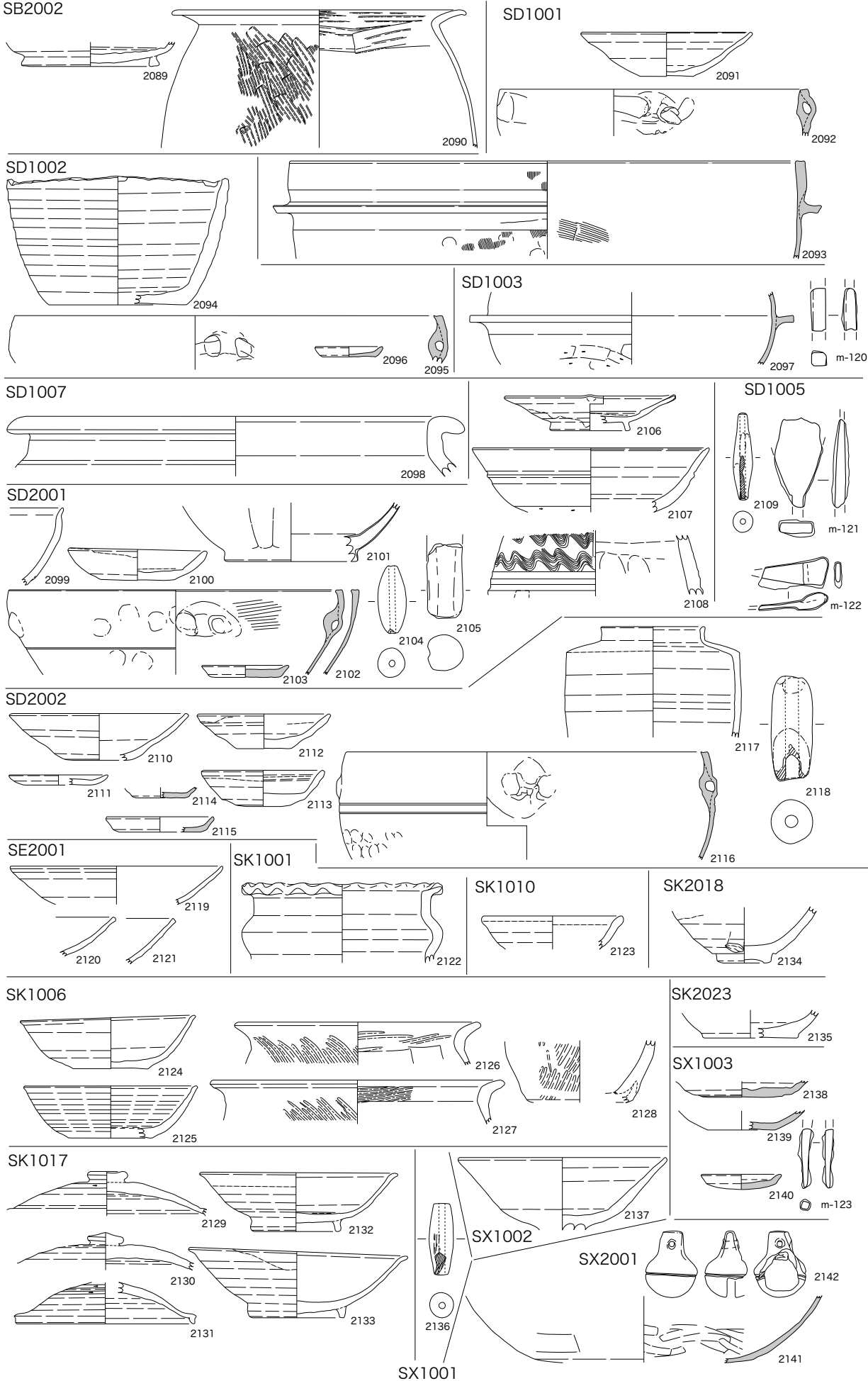
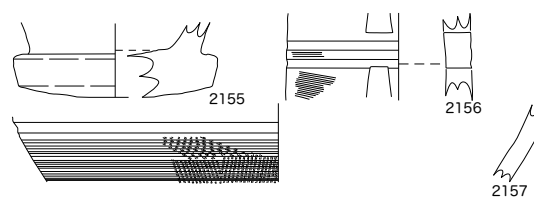
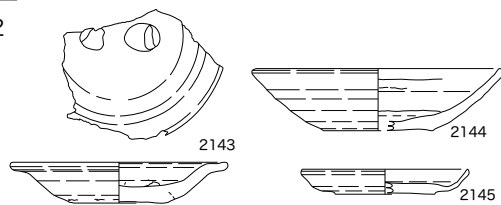


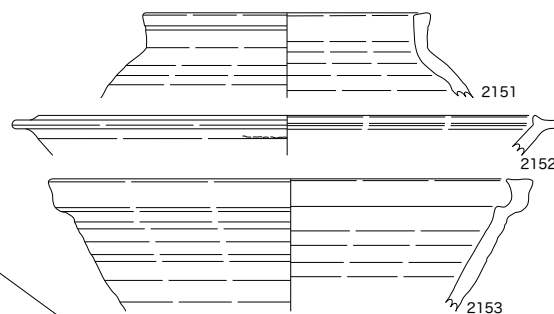
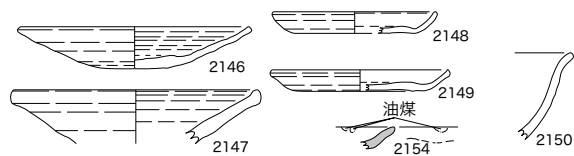
図 3-172 05Ea 区遺構内出土遺物 (1) (土錘 1/3・鉄器 1/2)

05Eb 区

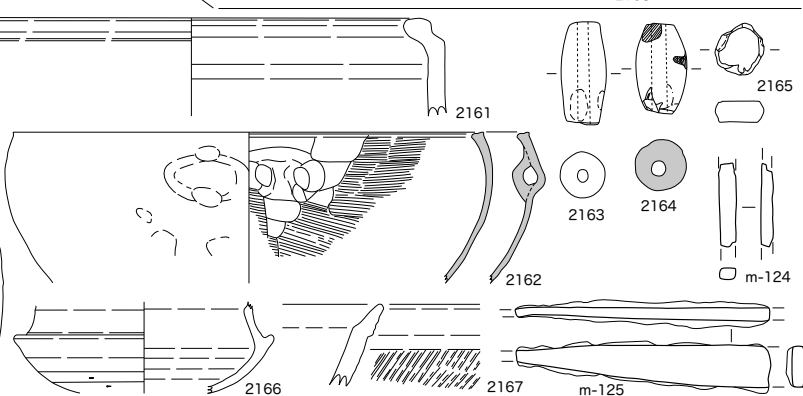
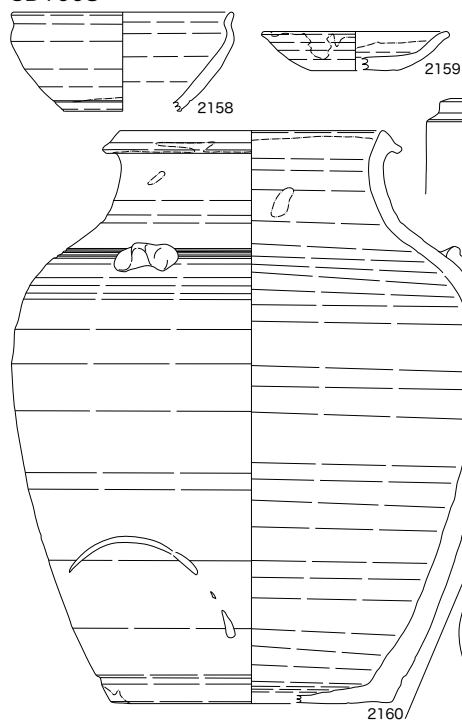
SD1002



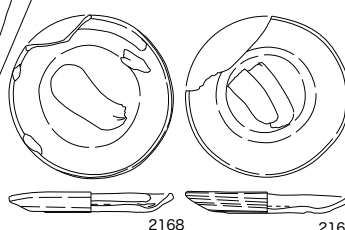
SD1004



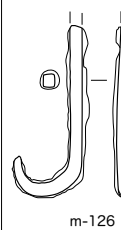
SD1008



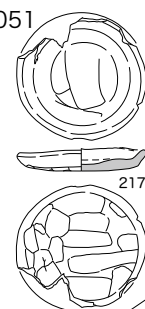
SK1007



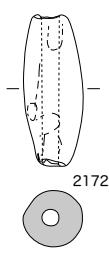
SK1013



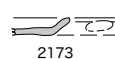
SK1051



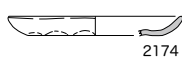
SK1050



SK2004



SK2009



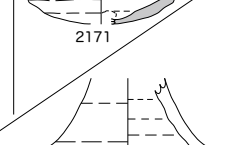
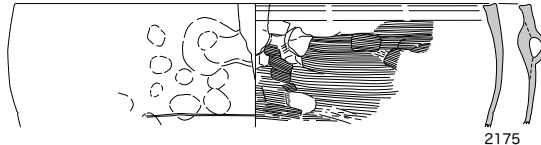
SK2014



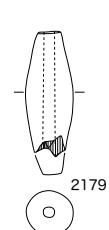
SK2025



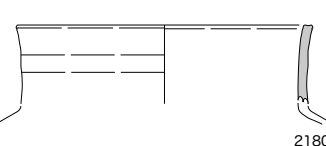
SK2007



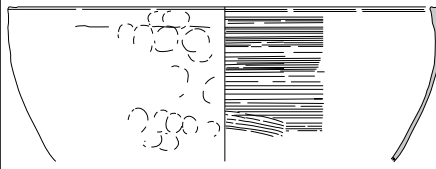
SK2019



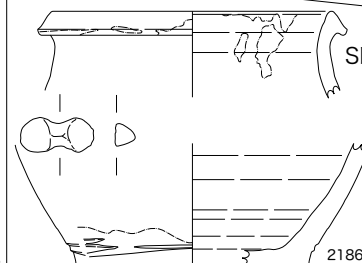
SK2020



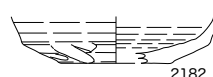
SK2027



SK2041



SK2030



SK2038

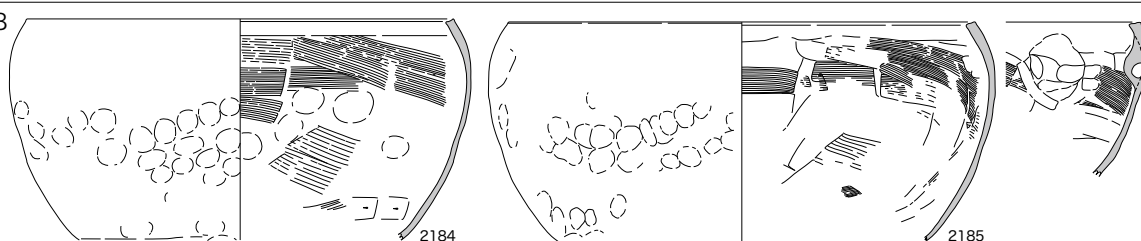
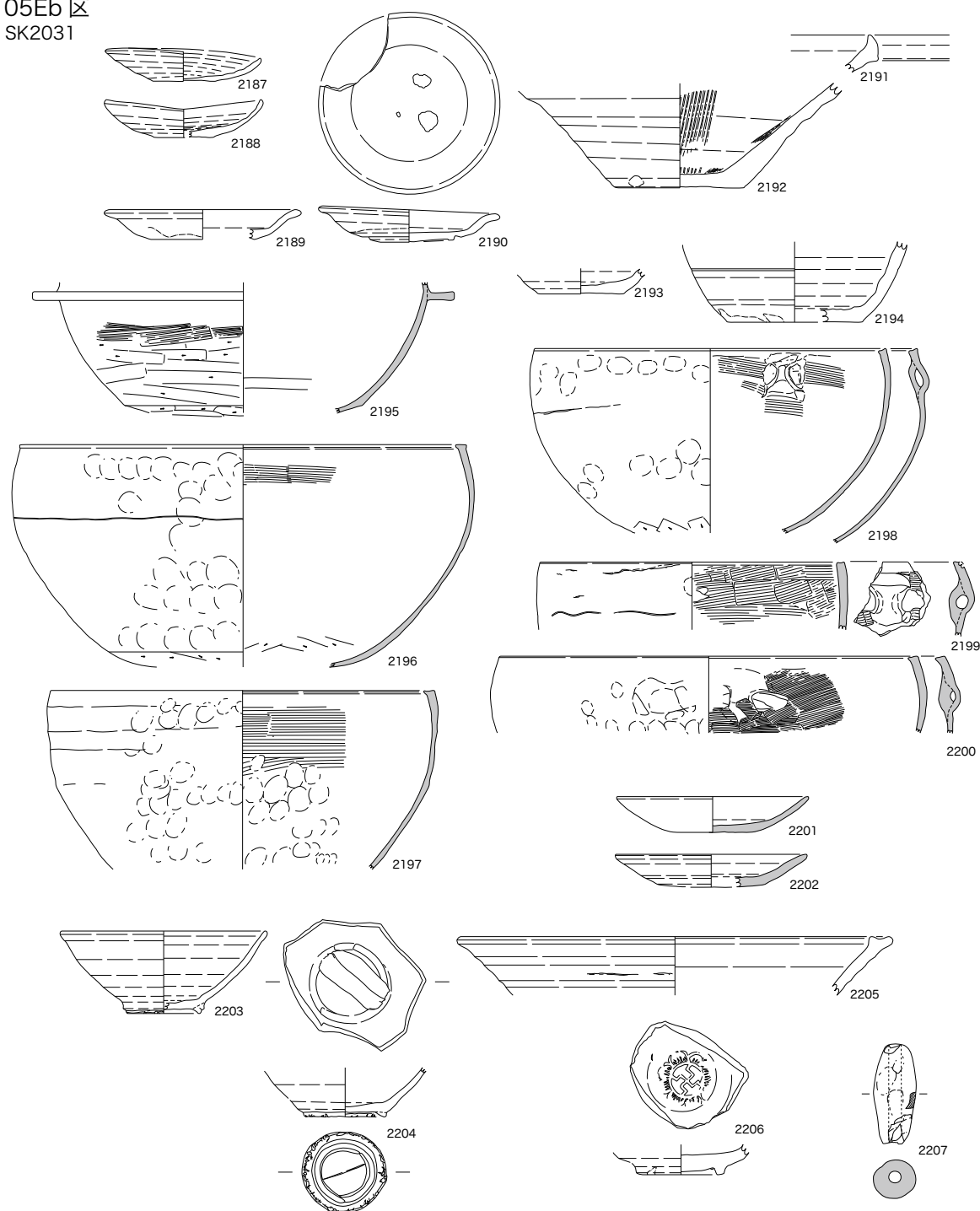
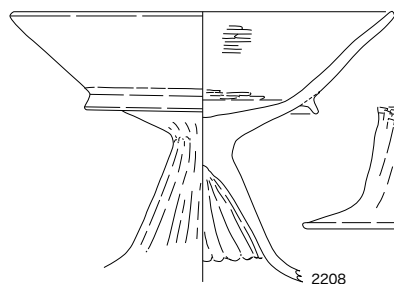


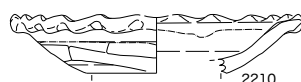
圖 3-173 05Eb 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2)

05Eb 区
SK2031

SK2056



SK2041



SK2052



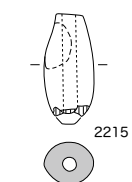
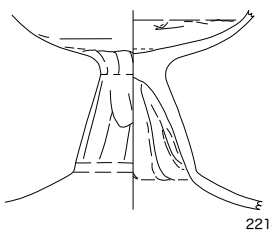
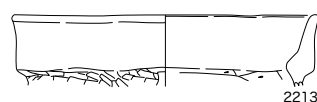
灰色シルト

北トレンチ

SK2073



黄褐色シルト



区 SD008 には確実に、そしておそらく 05Ea 区 SK1014・SX1003 にもつながるだろうと推測した。東西 20m の長さを検出し、わずかに南に振れて、検出面での幅 4m 程度の方形端で終息することが確認できた。しかし、05C 区で西北西に向かった大溝が、果たして分岐する可能性は無いのか、そのまま一条で東にのびるのか、等については明確にできなかった。

● 05Ea 区上面遺構群

いずれも検出深度は浅く、削平後の痕跡に過ぎない。南北軸の溝を中心とし、北部は攪乱のために大溝との関係は不明である。

● 05Ea 区下面遺構群



図 3-175 05Ea-SE2001

2 面には深い遺構が多い。SD2001 は断面逆台形の深さが 1m 近い溝で、北端は大溝に達せず、半円端となる。SX2002 は径 4m ほど、深さ 0.6m の皿状の落ち込みである。SD2002 は大溝延長部の下層で、SE2001 を切っている。

SE2001 は方形縦板組で内側の横桟で支えるタイプで、恐らく曲物の井筒であったろう。湧水が激しく十分な調査が行えなかった。

● 05Eb 区西部上面遺構群

05C 区に比べて小さな遺構の密度が高く、建物関係が展開する可能性は高いが、個別に復元することはできない。

● 05Eb 区西部下面遺構群

一部古代の遺構を含むが、大溝周辺では珍しく土師器の鍋や釜が廃棄された土坑が集中している。SK2020、SK2027、SK2030、SK2031、SK2038 等であり、とりわけ SK2031 は量が多い。大溝ではなく土坑での処理を選択した理由が問題となろう。

● 05Eb 区東部上面

断面箱形の SD1001 は最も新しく、近世末から近代初期に下る。SD1002 はわずかに東に振れ、重複する土坑があるので、両者には時期差があると推測する。そして、礎石 1・礎石 2 は SD1002 に対応しているようにみえる。東の SD1003 は大きく東に振れ、北部は基盤土で埋め戻されている。この面では中世の土坑も検出されているので、複数時期の遺構が同一面で検出されたことになる。

● 05Eb 区東部下面

SD1004 は 5m 近い幅をもつ大溝である。底面は 2 段落ちであり、掘り直しの可能性がある。

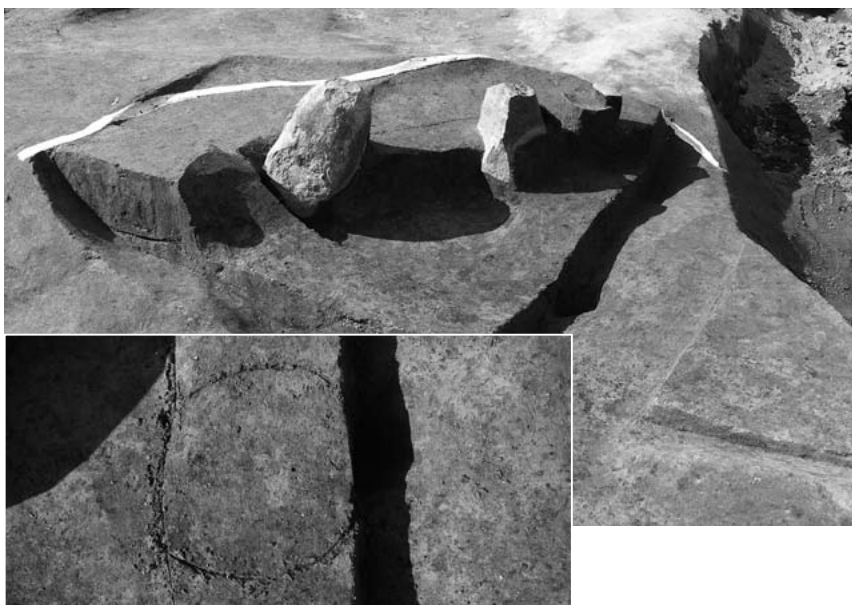


図 3-176 05Ea-SK2023 (カマド) 左写真は支脚の抜き穴

下層にはラミナ層が形成され、明らかに水流がある。下部には弥生後期末に埋没する河道があり、その中央付近に位置しているので、区画溝としての性格よりも、南北にのびる大きな窪地の中央に排水用に掘削された可能性もある。

b. 古代の遺構と遺物

● 概要

2 面では中世とともに古代の遺構もわずかに検出した。

05Ea-SB2001・2002

中世の遺構に重複して残った残欠で、掘り方を検出したものである。両

者は重複しており、2002 北辺で焼土や炭化物の充満した土坑を検出したので、カマドの痕跡と推定した。堅穴建物跡の掘り方底面は標高が 10m ほどであり、十分な高度を保っている。

05Ea-SK2023

部分的な残存であったために当初は焼土や炭化物が充満した土坑と認識していたが、掘り下げた結果、円礫 2 個が立石状に出土したことからカマドの痕跡と推測したものだが、構造には不明な点がある。円礫は焼けており、つまり火を受けているが、2 つもあるので支脚ではない。3 つあれば三点支持が可能だが、南側にある小穴がそれなのかもしれない。煙の排出を問題にしなければ煙道部は必要なく、カマドとも言いがたい施設である。同一ではないが、一宮市大毛遺跡に類似例がある。

c. 古墳以前の遺構と遺物

05Ea 区

●概要

2 面の下部には黒色化の進んだ堆積層が認められ、また古墳前期の土器が出土したので、確認調査を行った。

しかし、湧水のために掘削深度を深くとることはできず、遺物が集中する層位に限定した。その結果、弥生後期終末から古墳前期の遺物がまとまって出土した。時期的には 07D 区堅穴建物群に先行する資料を含み、堆積環境と居住環境の変化が連動している可能性を窺わせるものになっている。

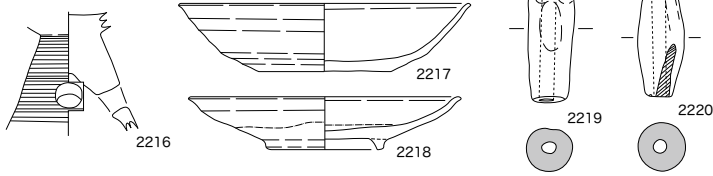
最下部の検 4 資料は、多少の時期幅をもつが弥生後期終末の土器群である。高杯脚部上端には櫛描紋が施されており、濃尾平野的ではない。赤彩壺は頸部が立ち気味で古い様相を示す。二枚貝刺突紋の赤彩壺は口縁内面が平坦で頸部との境界には突帯状を呈する。器台には中実で内湾する受け部をもつものがあり、名古屋台地例に近似する。台付甕には S 字甕 0 類が含まれているが、A 類は出土していない。在来系甕のうち山中式系甕は口縁端部も丸く変化が著しい。確実な浅鉢は含まれていないが、1 点共通する形態が出土している。



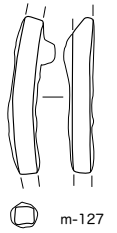
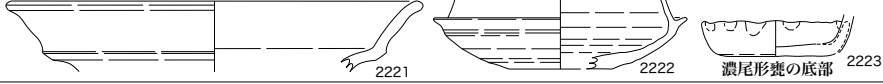
図 3-177 05Ea 区西部の谷地形上部の掘削状況

05Ea 区

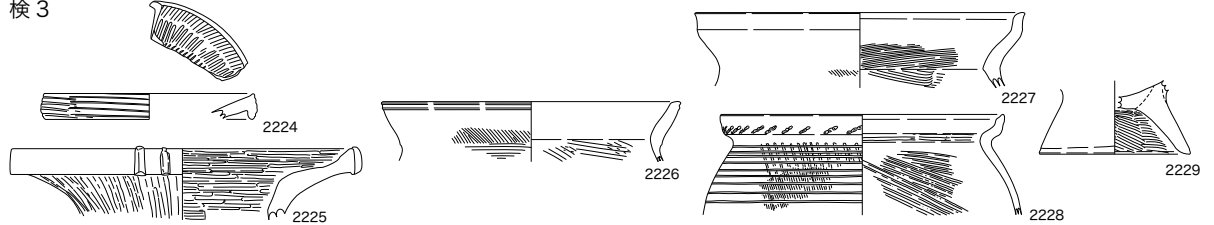
検 1



検 2



検 3



検 4

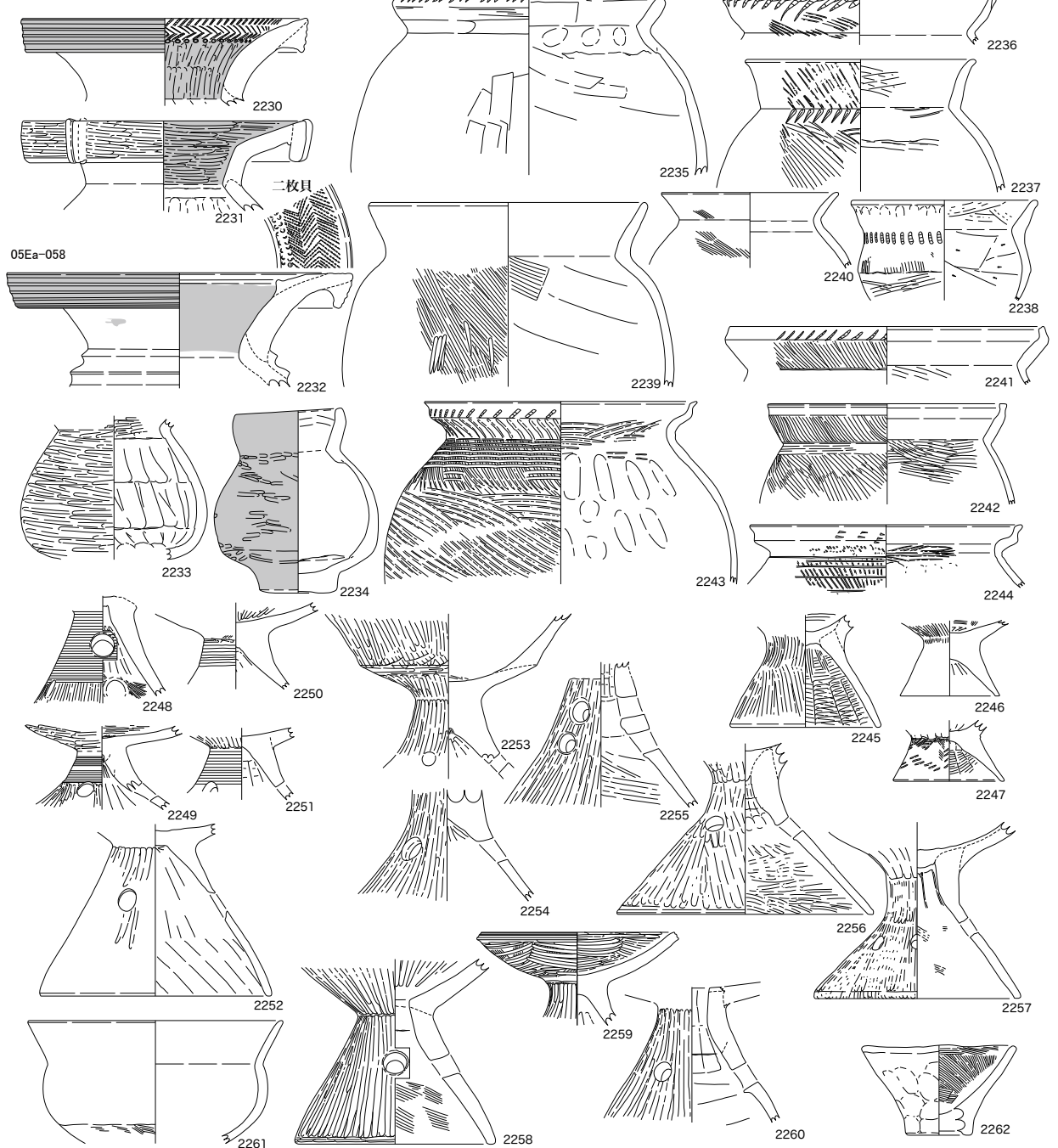


図 3-178 05Ea 区遺構外出土遺物 (1) (土錘 1/3・鉄器 1/2)

05Eb 区

●概要

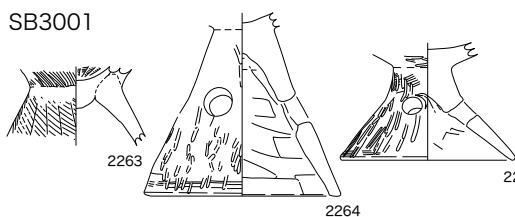
05Ea 区の谷と同じく、弥生終末期に埋没が完了する谷（河道）と、その東側の微高地では弥生後期終末の竪穴建物跡や土坑が検出された。そして、谷埋没後には古墳 3 期以降の遺構と遺物が谷上部に広がっていたようだ。

●東部微高地上の遺構群

竪穴建物跡は弥生後期終末期でも最終段階に属す SB3001、やや先行する SB3002 の 2 棟が検出された。炉や柱穴は不明である。底面標高は 9.7m であり、かなり低い。谷の肩とは 2m ほどしか間隔が無く、ぎりぎりの選地である。SB3002 出土の器台 2266 受け部片は湾曲するタイプのもので名古屋台地の資料群に共通する。

05Eb 区

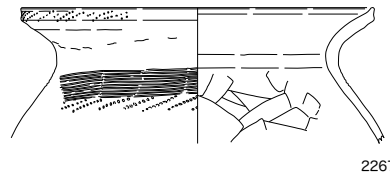
SB3001



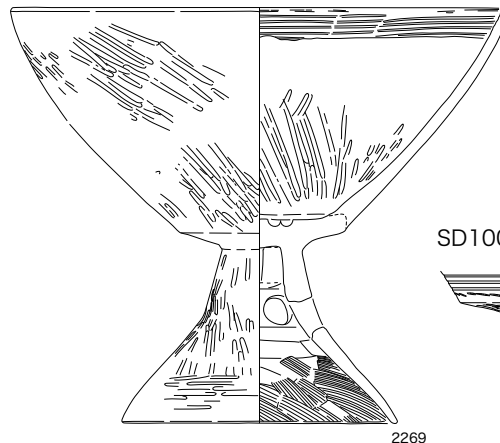
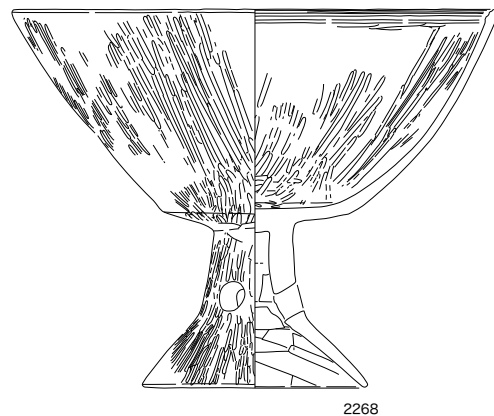
SB3002



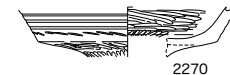
SK3011



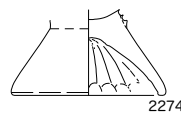
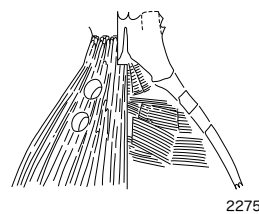
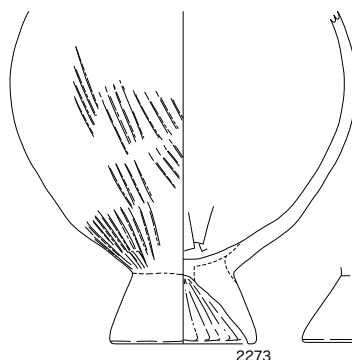
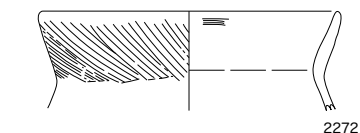
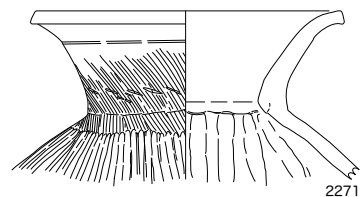
SK2074



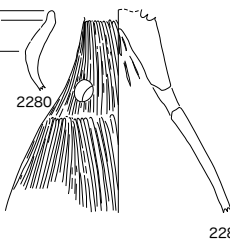
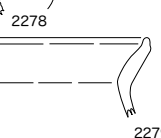
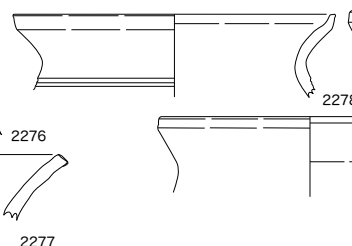
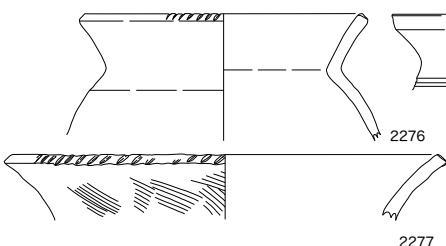
SD1005



NR02



SX2001 下層



2281

図 3-179 05Eb 区遺構内出土遺物 (3)

05Eb 区
SX2001 上層

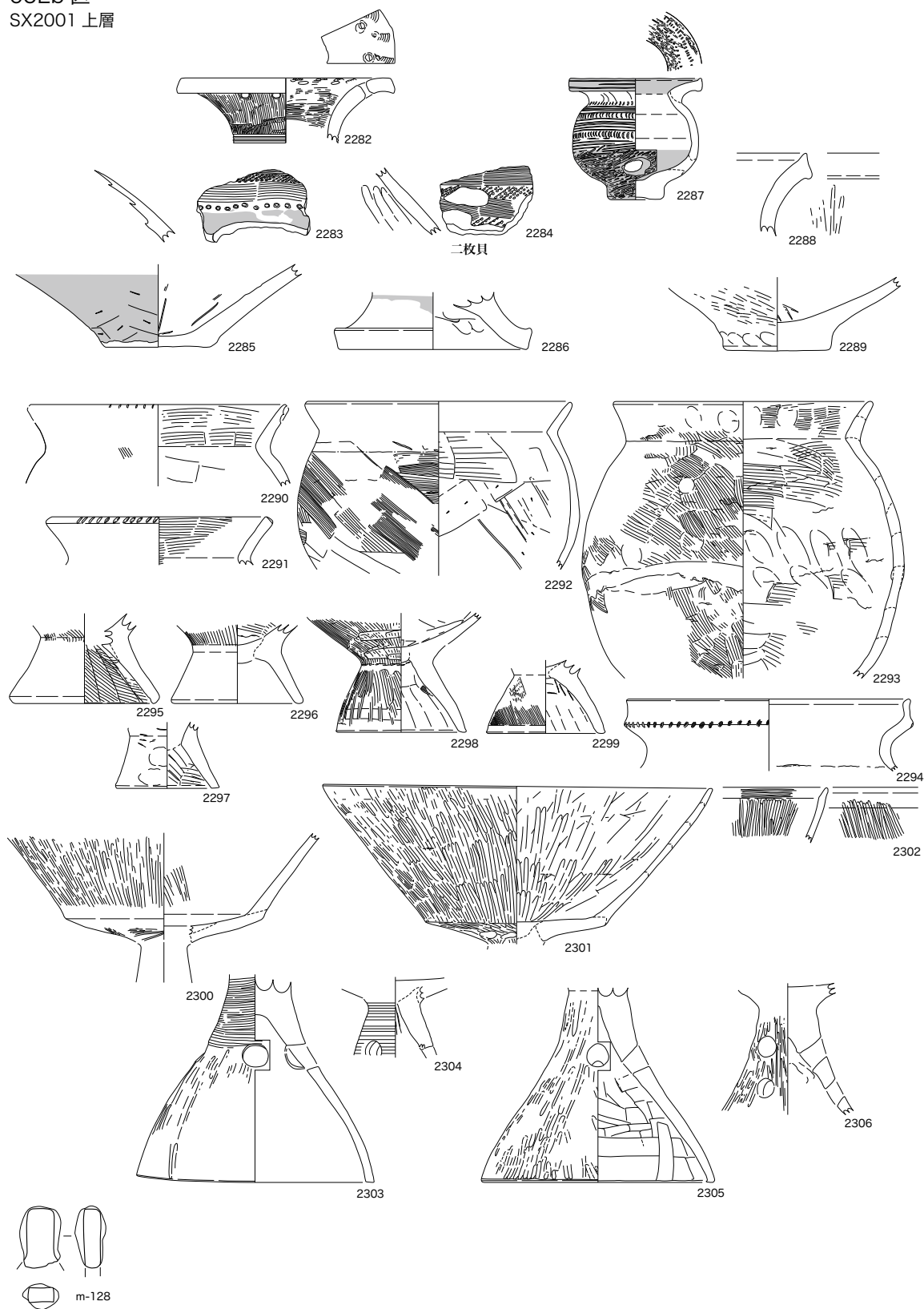


図 3-180 05Eb 区遺構内出土遺物 (4) (鉄器 1/2)

05Eb 区
SX2001 上層

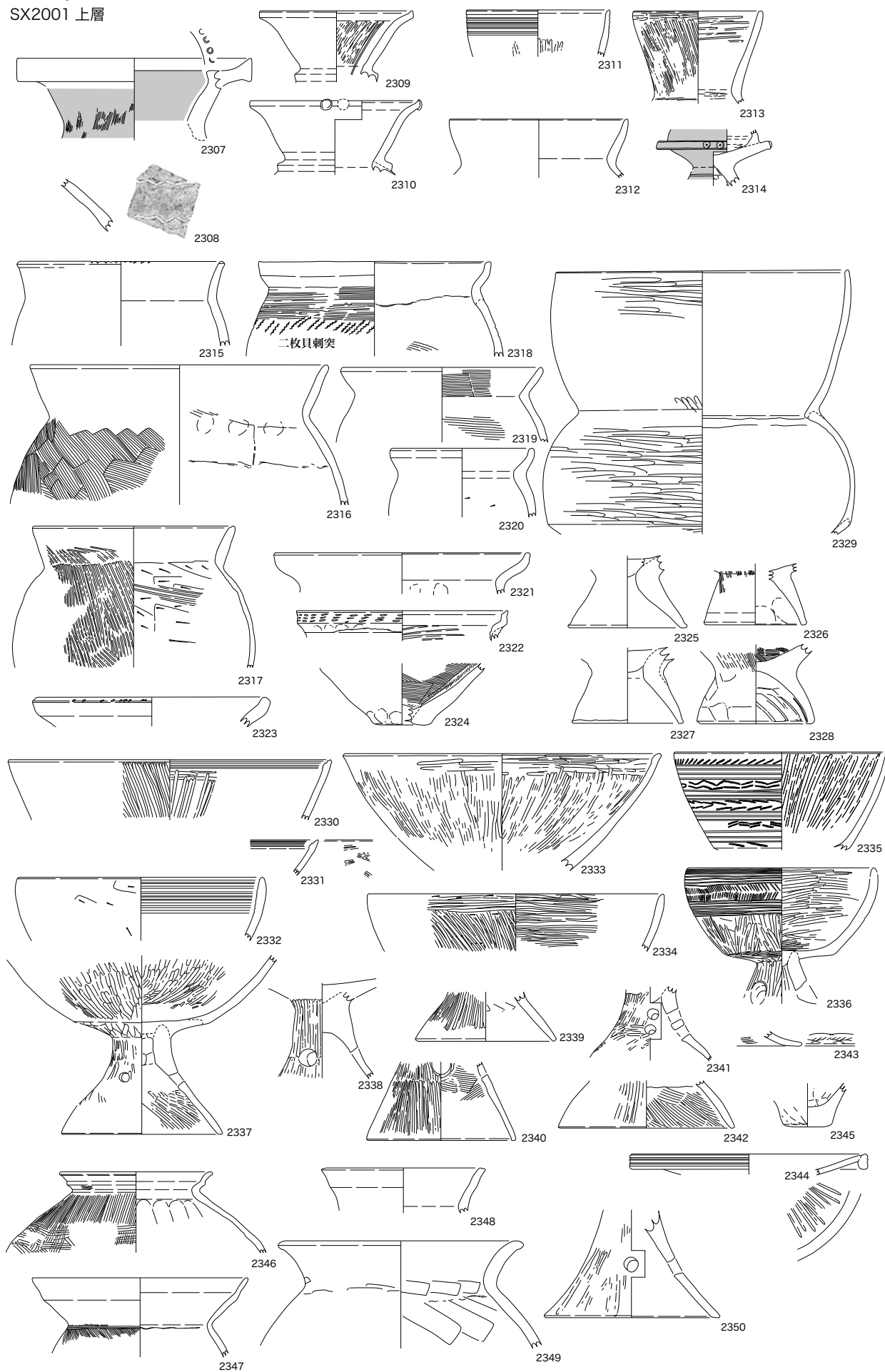
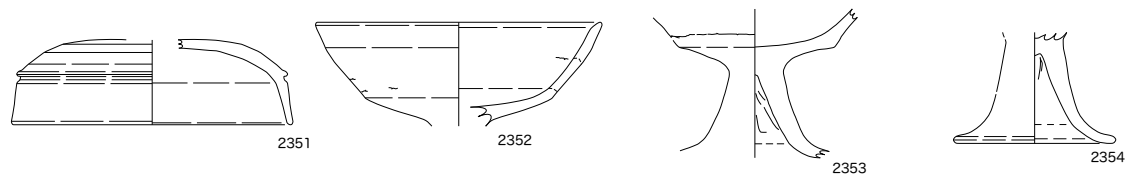
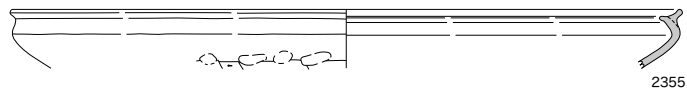


図 3-181 05Eb 区遺構内出土遺物 (5)

06Ea 区
SD2002



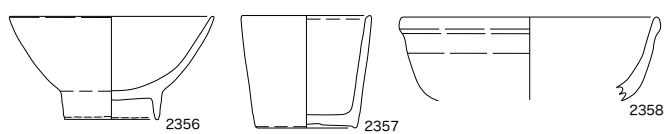
SK1008



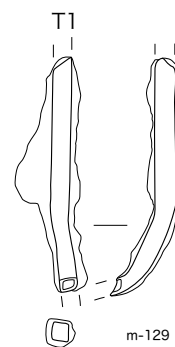
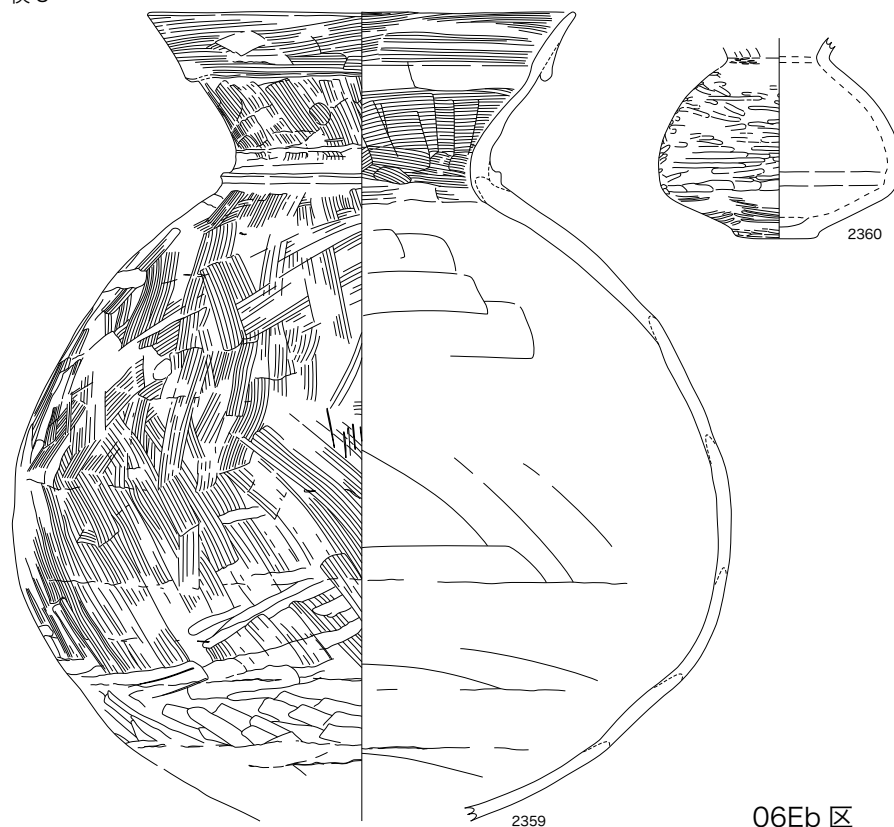
トレンチ



検 1



検 3



06Eb 区

円面碗

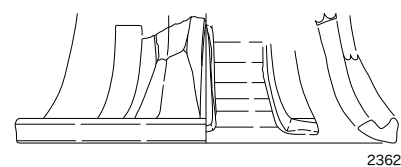
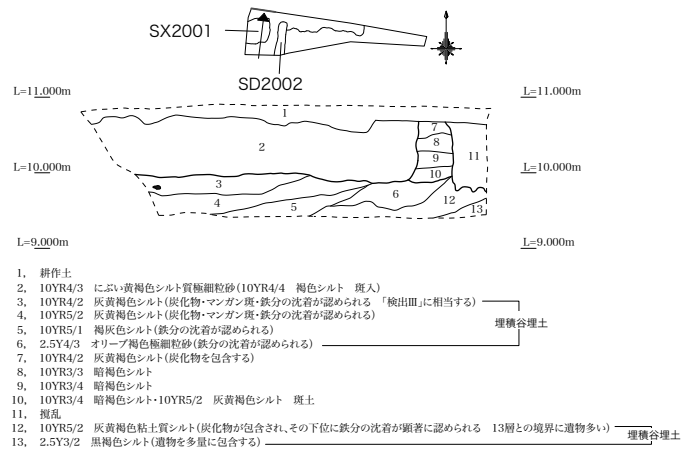
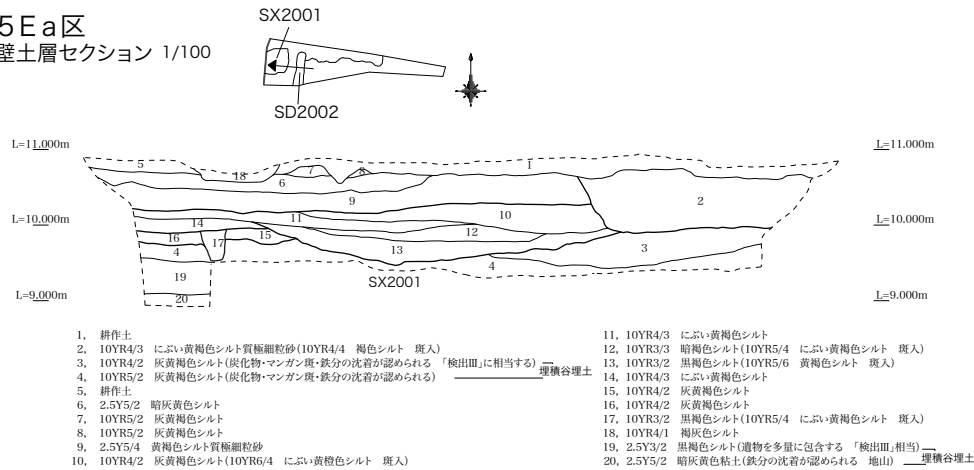


図 3-182 06Ea 区出土遺物 (1) (鉄器 1/2)

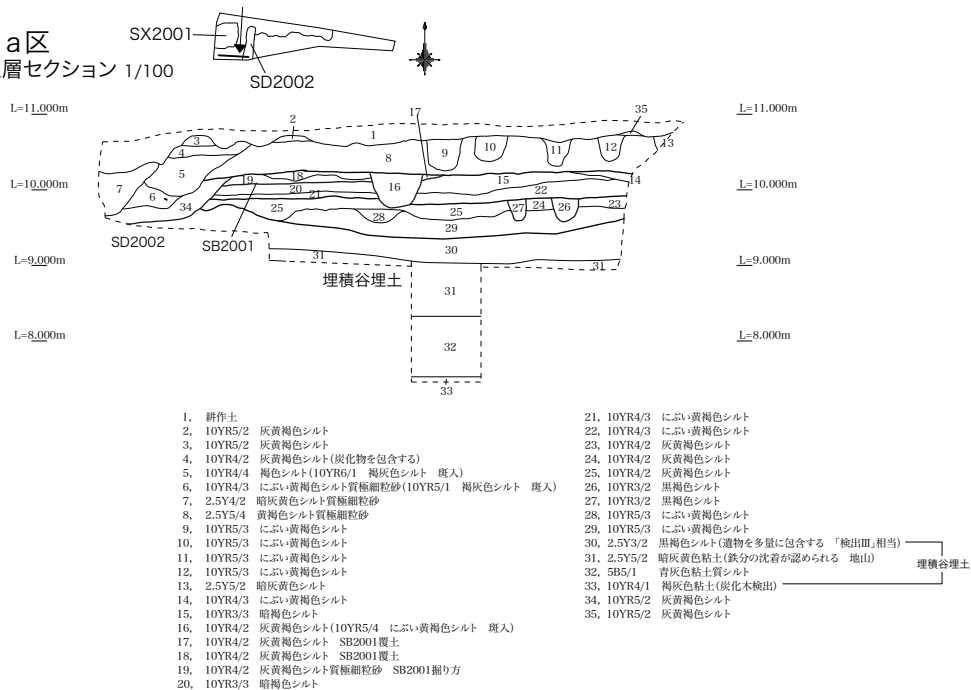
05Ea区 北壁土層セクション 1/100



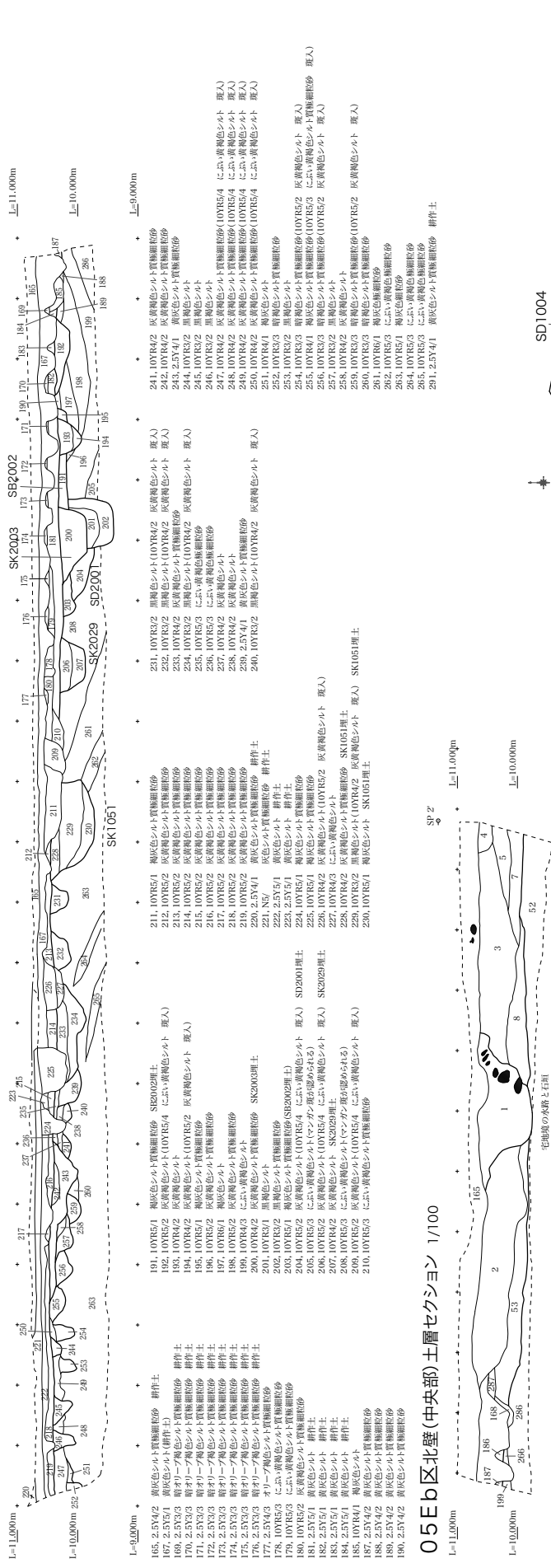
05Ea区 西壁土層セクション 1/100



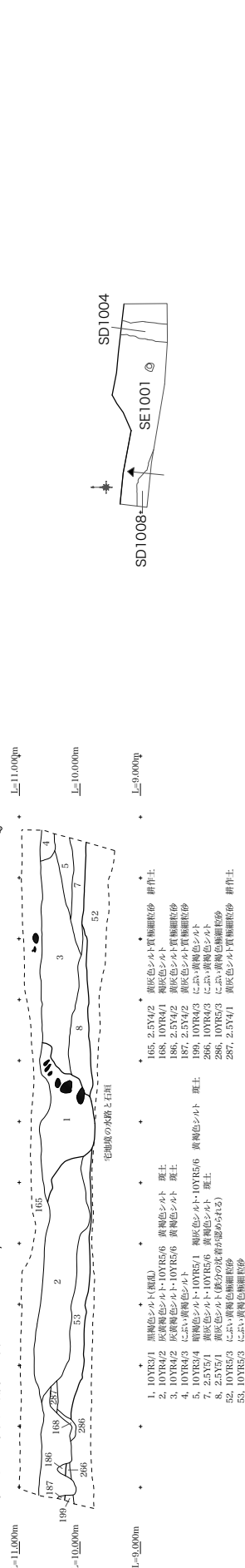
05Ea区 南壁土層セクション 1/100



05Eb区北壁(西部)土層セクション1/100



05Eb区北壁(中央部)土層セクション 1/100



05Eb区北壁(東部)土層セクション1/100

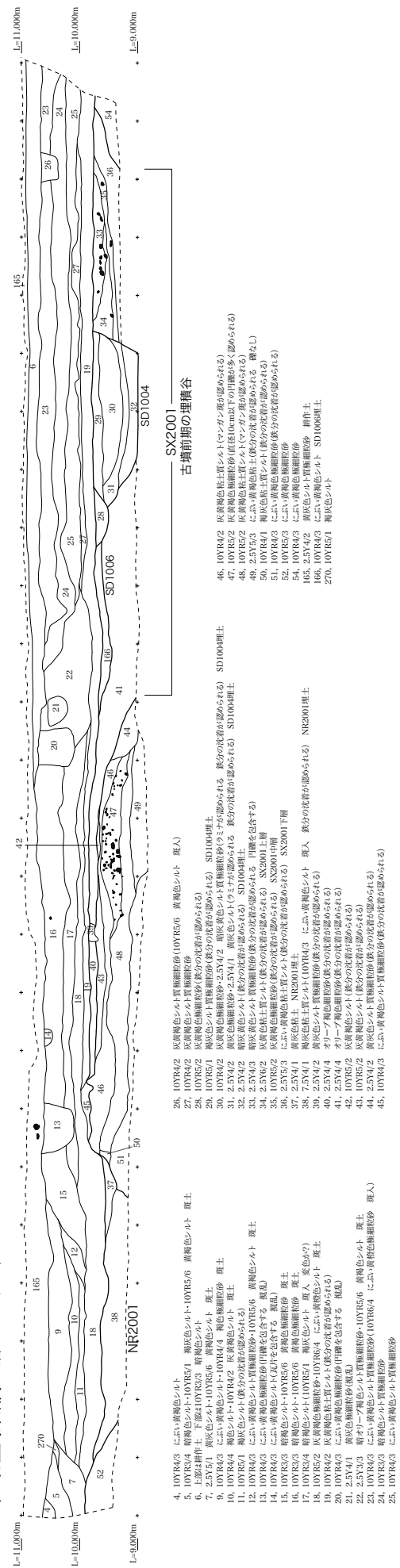
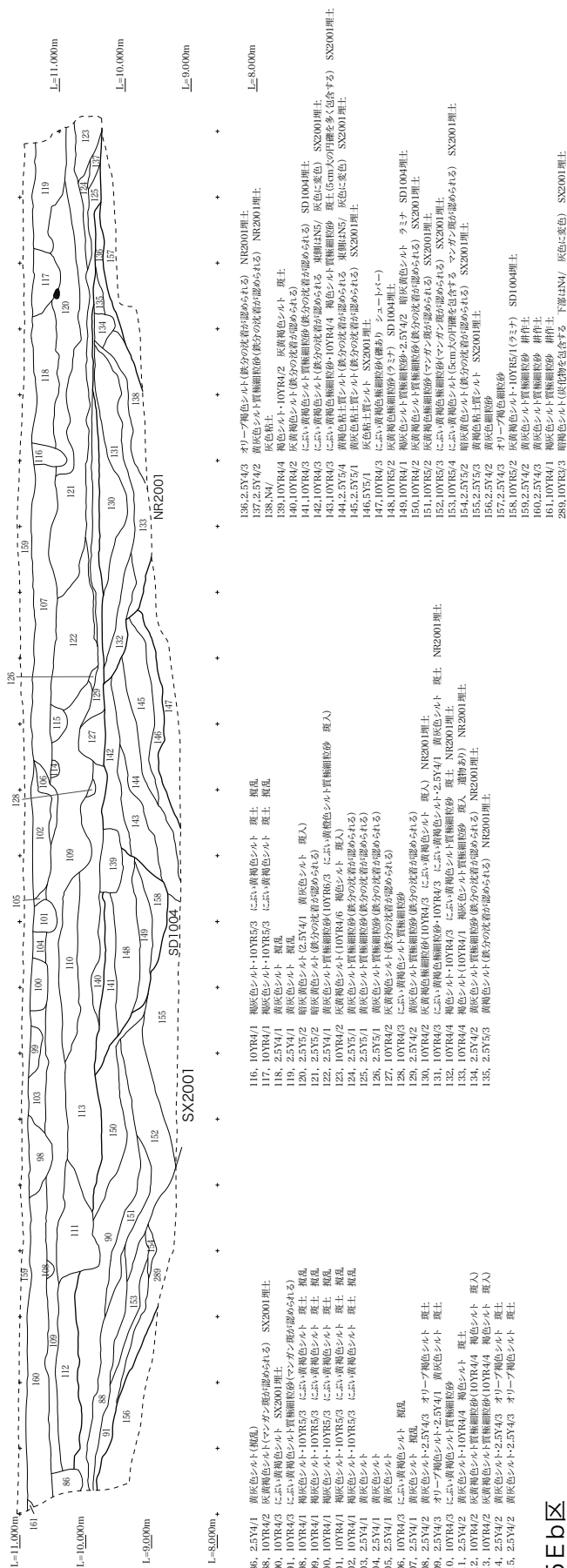


図 3-184 05Eb 区北壁土層セクション 1/100

05E b区

南壁土層セクション 1/100



05E b区

西壁土層セクション 1/100

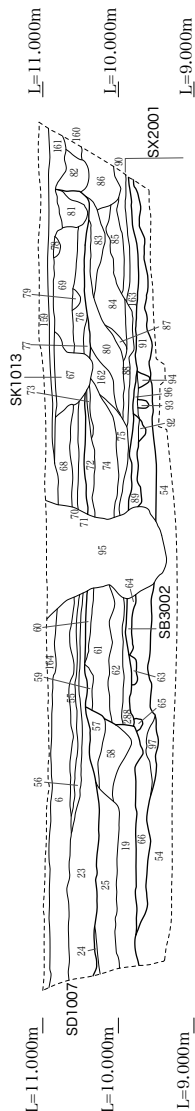


図 3-185 05E b 区南壁・東壁土層セクション 1/100

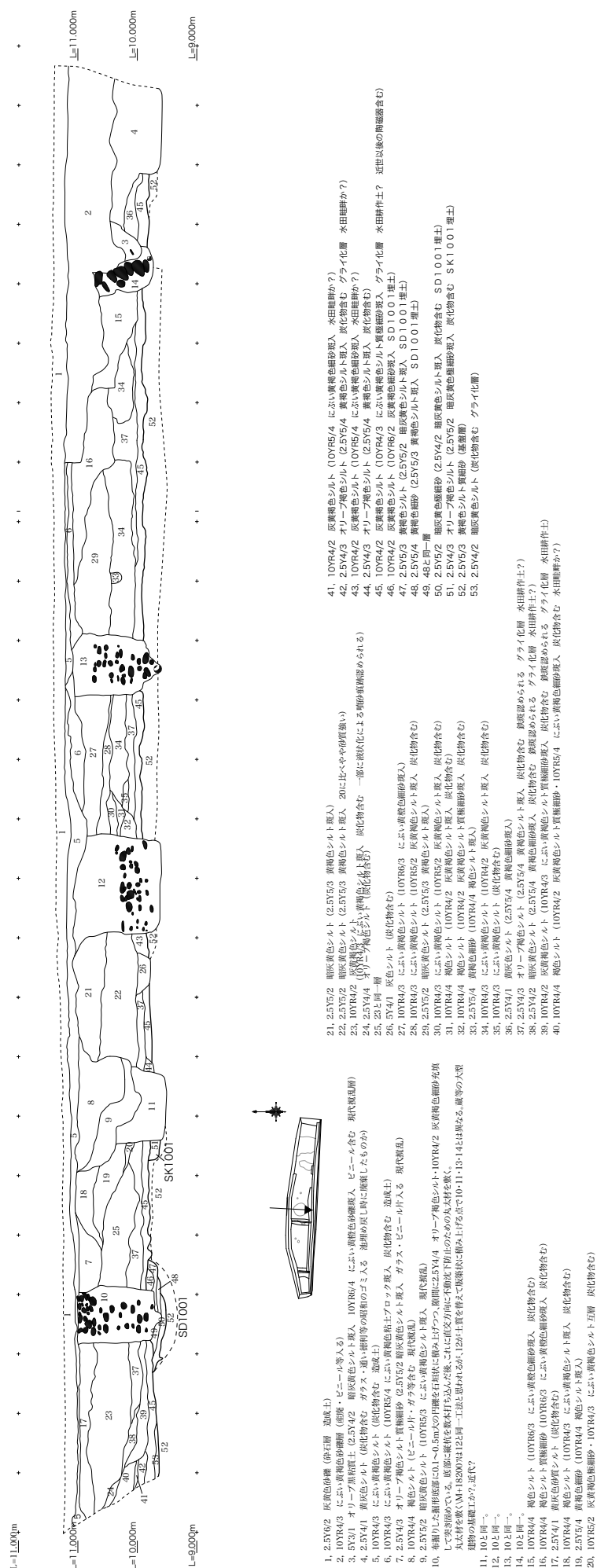


図 3-186 06Eb 区南壁土層セクション 1/100

土坑は、古墳 1 期の SK2074 底面が標高 10m で、
 竪穴建物跡よりも高い。出土した高杯 2 個体はほぼ
 完形で、杯部底面径はかなり小さく、また杯部と脚
 部の比率も逆転している。

古墳3期後半の高杯が出土したSK2056は標高9.4mであり、河道埋没後に掘り込まれた遺構であろう。6世紀前半の杯蓋が出土したSK2073は底面標高が9.9mで、この時期には河道もかなり埋まっていたことが窺える。

●河道

SX2001 は 06Ca 区との間にある幅 45m 程の河道上層に形成された遺物包含層で、基本はシルトであり緩やかな埋積過程を示す。標高 8.6m まで掘り下げたが、それ以下はさすがに湧水も激しく危険であったため断念した。

遺物はほとんどが土器で、上層と下層に分けて取り上げた。下層出土土器は弥生後期終末期でも古相を呈し、今回の調査で出土した終末期の一群の中でも最古段階に属す。上層出土土器は古相から古墳1期までが中心で、若干古墳3期も含む。

終末期古相の土器群についてみると、高杯は杯部底面の径が大きく、脚も高い。脚上部には櫛描紋が施され、古い様相を示す。く字甕も口縁端部の面はしっかりしており、刺突が加えられている。壺は口縁部が緩く外反するものがある。

新しい一群は、甕の口縁部がのびるかやや内湾し、S字甕はほとんど無い。高杯は脚が小さく屈折し、濃尾平野北西部の特徴を共有すが、明確な浅鉢はない。赤彩の器台結合壺が目される。

06Eb ☒

● 06Eb-SD2002

幅が5m 近い溝で、深さは0.7m 程である。宇田期の須恵器・土師器が出土している。下部に05Eb 区の河道につながる堆積層があり、状況は同じである。

河道堆積層の確認の為に掘り下げたところ、古墳3期と思われるやや大型の壺が出土した。掘り方はないので、埋設されたのではなく、河道の埋積渦中に転落したものと思われる。出土標高は9.5mである。



図 3-187 06Ea 区大型壺出土状況

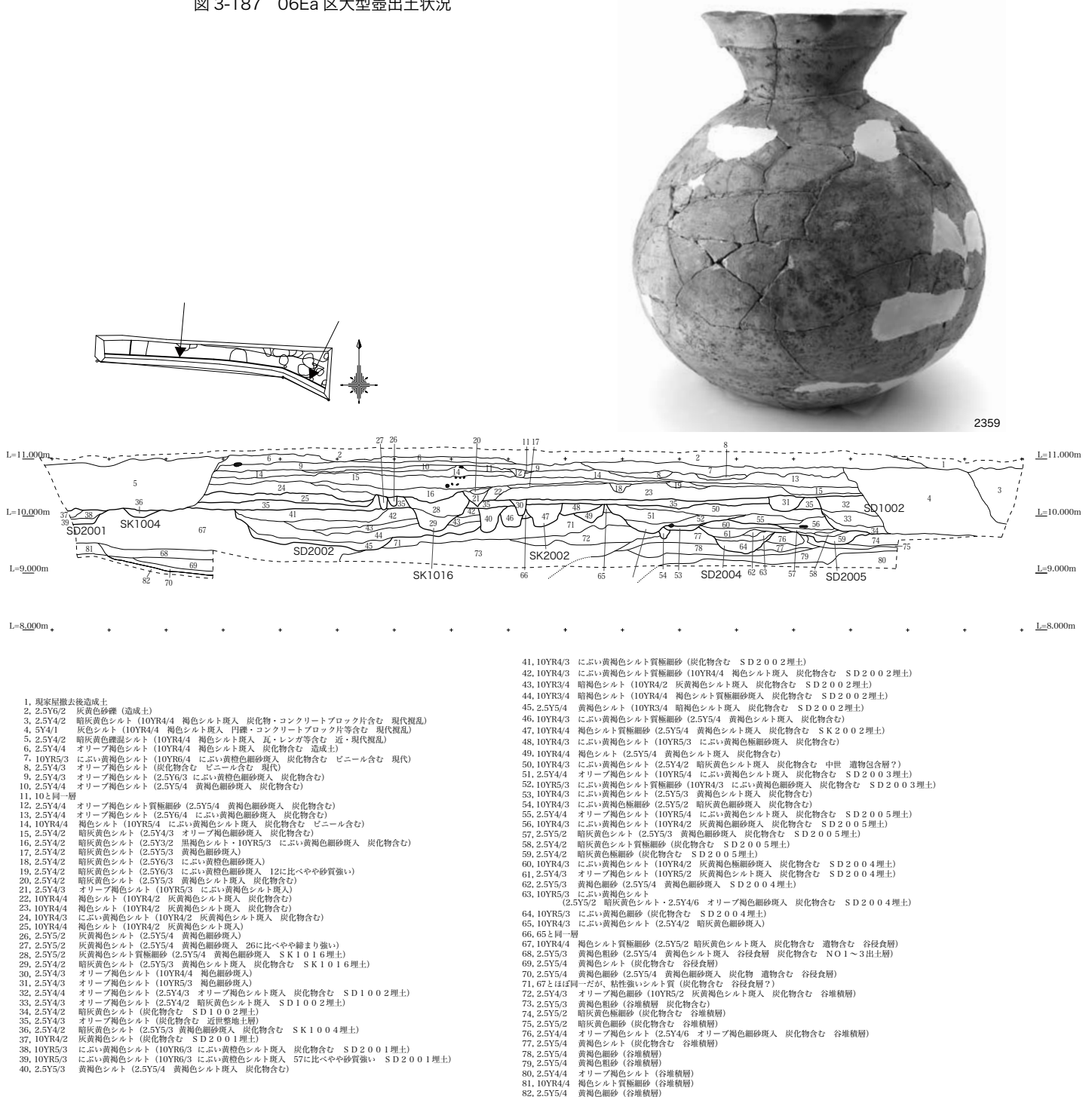


図 3-188 06Ea 区南壁土層セクション 1/100



図 3-190 06Ea 区 SE1001

図 3-189 06E 区全景

過性の洪水に伴うものであった可能性が高い。

b. 弥生後期後半から終末期の遺構と遺物

●概要

確実な弥生終末期、もしくは弥生後期の遺構は 06Cb 区 SD2001（方形周溝墓）のみだが、遺物はそれ以外の地点からも出土している。06A 区では 6 世紀代須恵器の大型器種片が出土しており、同期の墳墓が存在した可能性がある。

●方形周溝墓

06Cb 区で北向きのコ字状に検出された SD2001 がそれである。西北西 - 東南東軸で、南西コーナが切れているが、検出面での状況であり、復元的にみれば底面が浅くなる程度で、溝肩ではつながっていただろう。

注目すべきは、底面に並ぶ土坑状の落ち込みと東部の周溝外縁がやや張り出すことで、B形墳（もしくは前方後方形）の可能性を強く示唆する。確実な供献土器は比較的大型の壺 1 点 2449 で、弥生終末期の様相を示す。土坑については「溝内埋葬」の可能性は無いだろうし、原位置で潰れていた壺に土器棺の可能性もない。

土層セクションによると周溝は掘り直しをうけており、上記の壺はこれに伴う。そして、出

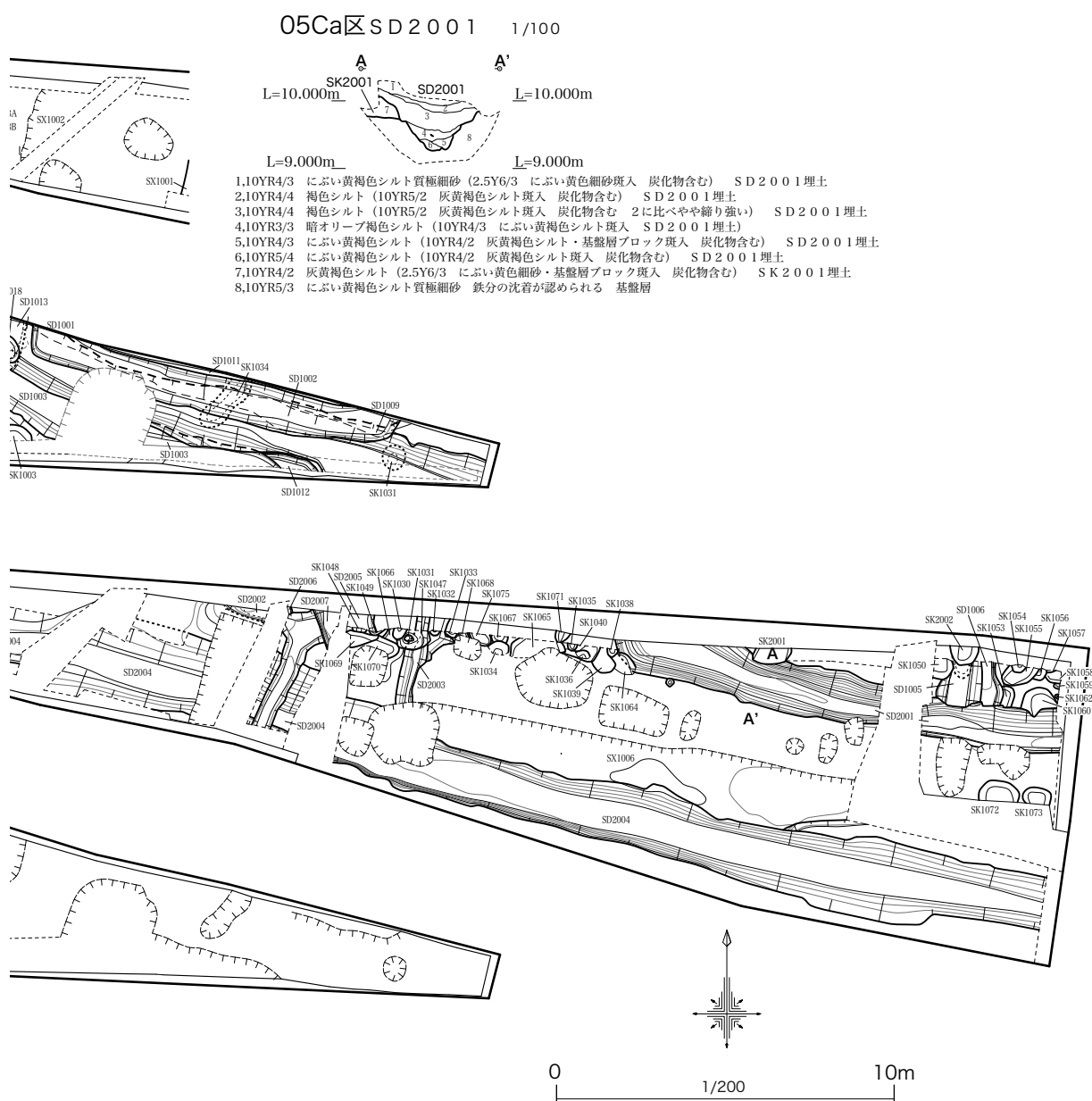
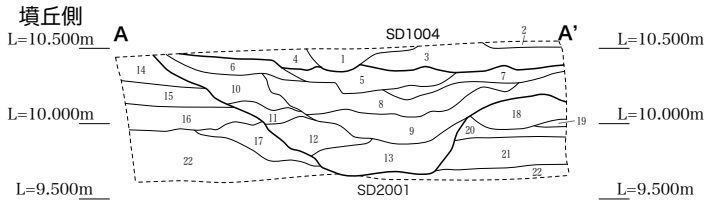


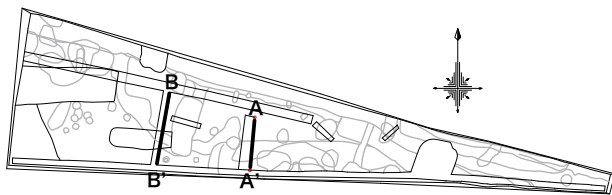


図 3-193 06Ca 区 SD2001 土器出土状況 (1)

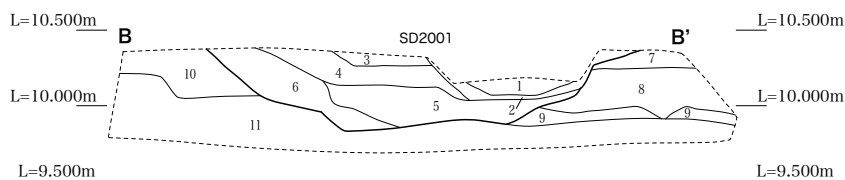
06Cb区SD2001南北土層セクション 1/50



- 1, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (10YR4/2 灰黄褐色シルト斑入 炭化物含む) SD1004埋土
- 2, 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂 (炭化物含む) SD1004埋土
- 3, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (10YR4/2 灰黄褐色シルト斑入 炭化物含む 2に比べ砂質強い) SD1004埋土
- 4, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (10YR4/2 灰黄褐色シルト斑入 SD2001埋土)
- 5, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (2.5Y6/3 にぶい黄色細砂斑入 炭化物含む) SD2001埋土
- 6, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (2.5Y6/3 にぶい黄色細砂斑入 炭化物含む) SD2001埋土
- 7, 10YR4/4 褐色シルト (10YR4/2 灰黄褐色シルト斑入 炭化物多く含む) SD2001埋土
- 8, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (10YR4/2 灰黄褐色極細砂斑入 炭化物含む) SD2001埋土
- 9, 10YR4/4 褐色シルト (10YR4/2 灰黄褐色極細砂斑入 炭化物・土器多く含む) SD2001埋土
- 10, 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂 (2.5Y6/3 にぶい黄色細砂斑入 炭化物多く含む) SD2001埋土
- 11, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (2.5Y6/3 にぶい黄色細砂斑入 炭化物含む) SD2001埋土
- 12, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (炭化物多く含む) SD2001埋土
- 13, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (炭化物含む 12に比べ粘性強い) SD2001埋土
- 14, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (炭化物含む) 谷堆積層
- 15, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (14に比べ砂質強い 炭化物含む) 谷堆積層
- 16, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (炭化物含む) 谷堆積層
- 17, 10YR4/4 褐色シルト (炭化物含む) 谷堆積層
- 18, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 谷堆積層
- 19, 10YR4/4 褐色シルト (炭化物含む) 谷堆積層
- 20, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (炭化物含む) 谷堆積層
- 21, 10YR4/4 褐色シルト 谷堆積層
- 22, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 谷堆積層



06Cb区SD2001南北土層セクション 1/50



- 1, 10YR4/4 褐色極細砂 SD2001埋土
- 2, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 SD2001埋土
- 3, 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂 (2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂斑入 炭化物多く含む) SD2001埋土
- 4, 10YR4/4 褐色シルト質極細砂 (10YR4/2 灰黄褐色シルト 斑入 炭化物含む) SD2001埋土
- 5, 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂 (10YR4/4 褐色極細砂 斑入 炭化物多く含む) SD2001埋土
- 6, 10YR4/4 褐色細砂 SD2001埋土
- 7, 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 斑入) NR2002堆積層
- 8, 2.5Y5/3 黄褐色細砂 (2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質極細砂 斑入) NR2002堆積層
- 9, 10YR4/4 褐色シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂斑入 微粒の炭化物含む) NR2002堆積層
- 10, 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (10YR5/2 灰黄褐色細砂斑入 微粒の炭化物含む) NR2002堆積層
- 11, 10YR4/4 褐色シルト 谷堆積層

図 3-192 06Cb 区個別遺構土層セクション 1/50

土位置は不明確だが、形状復元可能な弥生後期中葉に遡る赤彩壺 2448 が下層から出土しており、この資料が最初の方形周溝墓に伴う可能性が高い。

まず、いずれかのコーナーが切れるプランの方形周溝墓が弥生後期中葉に築造され、終末期にB形（もしくは前方後方形）への周溝改変が行われたと考えられる。

なお、トレンチから横転して出土した赤彩壺 2470 の出土レベルは周溝肩に近いと推定され、周溝外縁がそこまで広がっていたか、隣接する方形周溝墓の周溝の一部であったか、の2点の可能性が考えられる。前者であれば前方後方形であった可能性も生じる。



2365



図 3-194 06Ca 区 SD2001 土器出土状況 (2)



図 3-195 06Cb 区赤彩壺出土状況

06Ca 区 SD1001 出土土器 ※06Ca 区 SD1001 は中世の遺構だが、完形品が含まれていることから
下層に存在した遺構（墓坑 or 土器集積？）の遺物を掘り出した可能性もある。

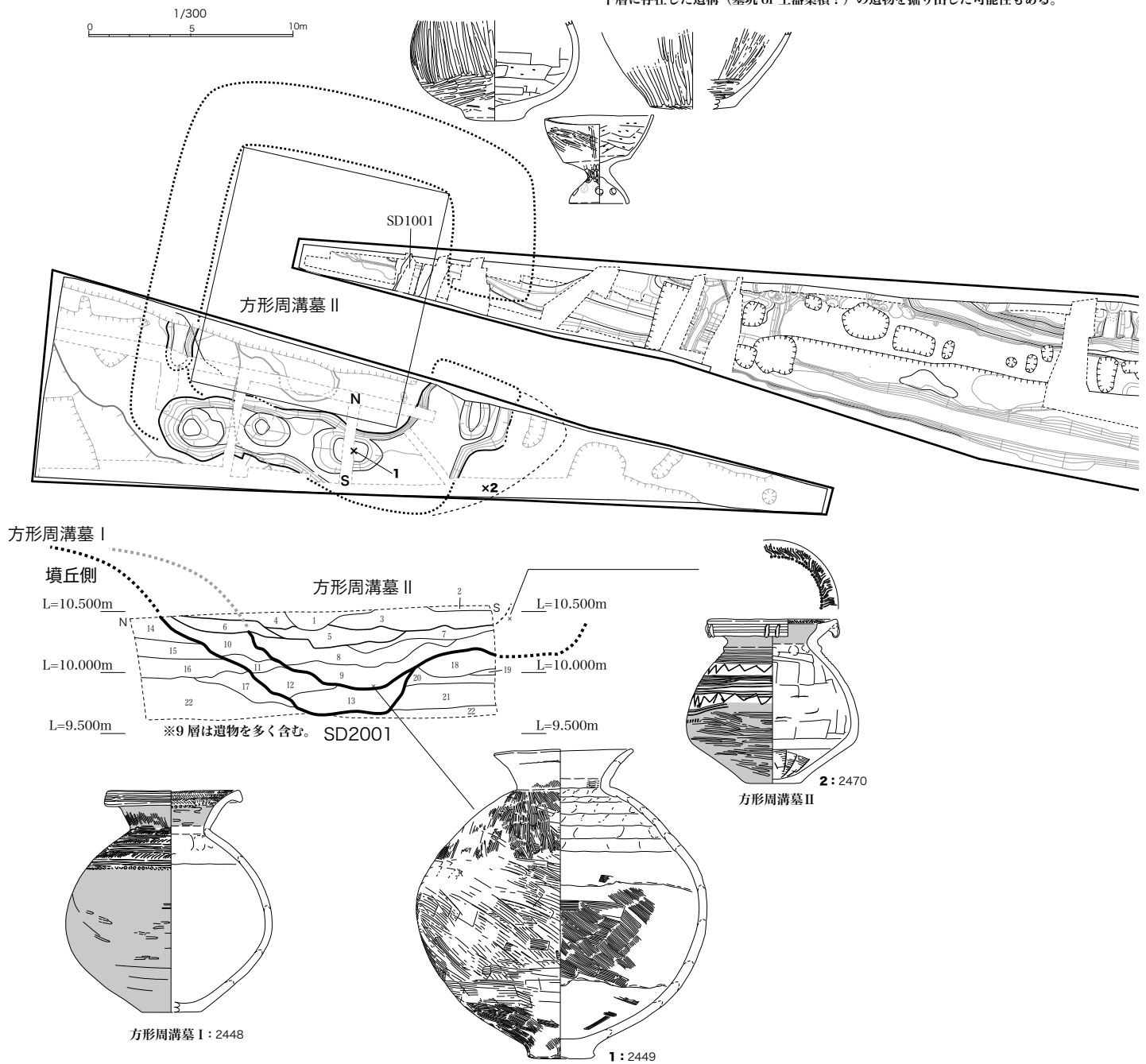
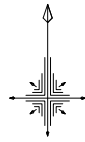
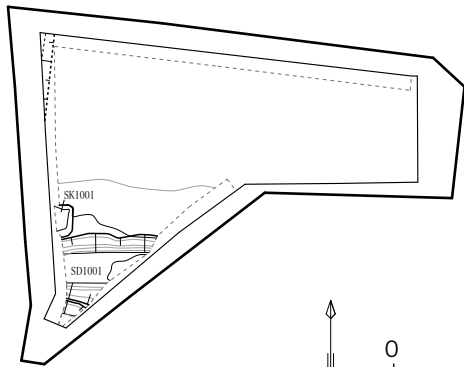


図 3-196 06C 区方形周溝墓推定図及び出土土器

06B 区



0 1/200 10m

06A 区

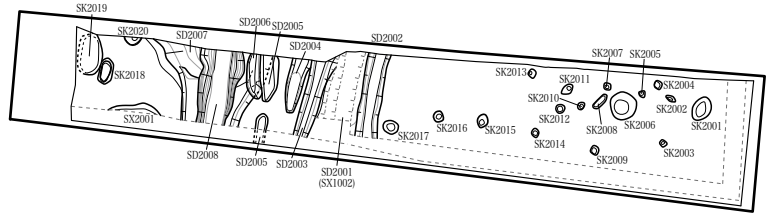


図 197 06A・B 区遺構プラン 1/200



図 3-199 06A 区全景



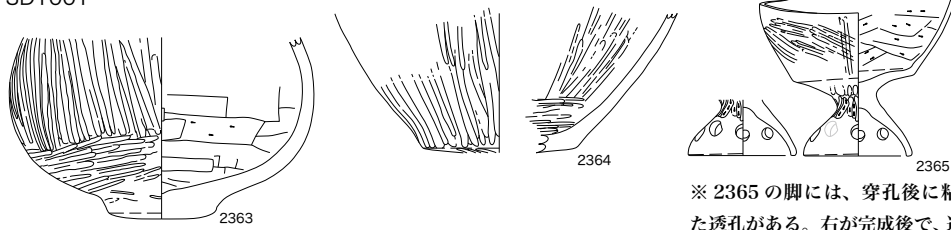
図 3-200 06B 区全景



図 3-198 06Cb 区全景

06Ca 区

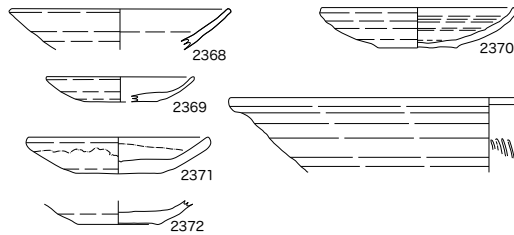
SD1001



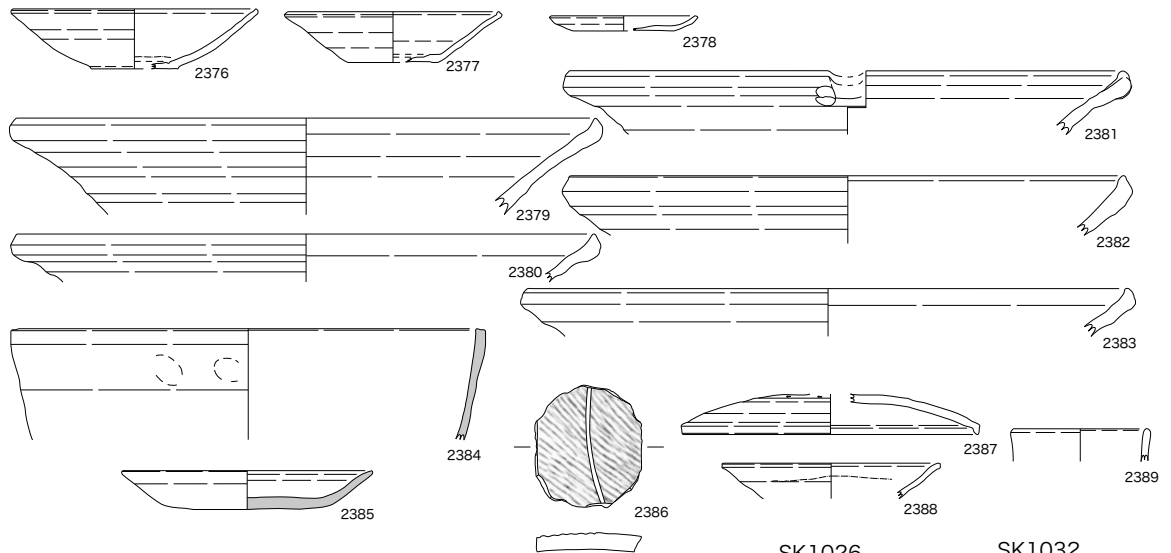
SD1002



SD2001



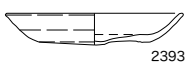
SD2004



SD2007



SK1052



SK1053

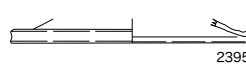


SK1025

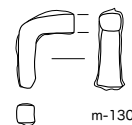
緑釉陶器



SK1055



SK1026



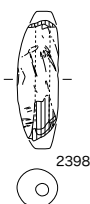
m-130

SK1032

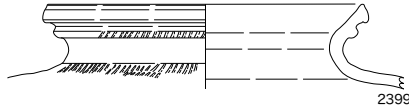


m-131

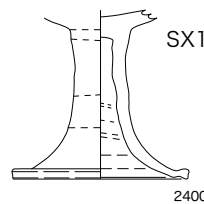
SK1047



SX1001

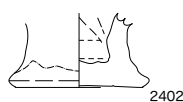


SX1003



2401

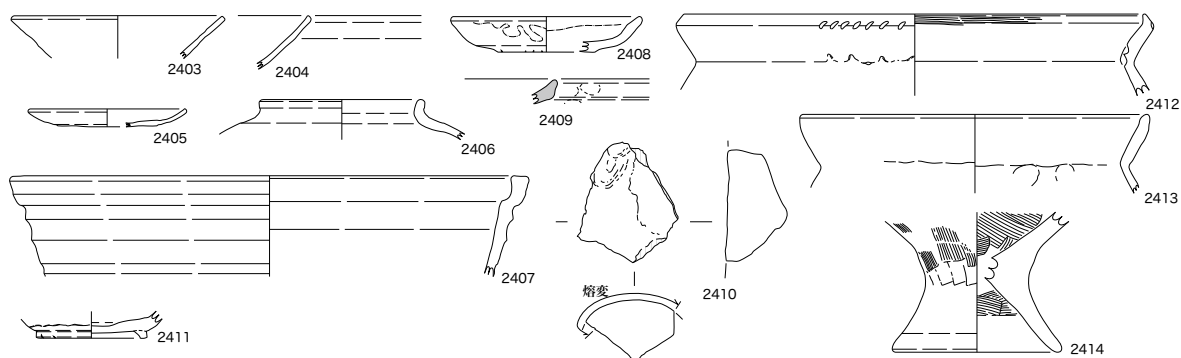
トレンチ



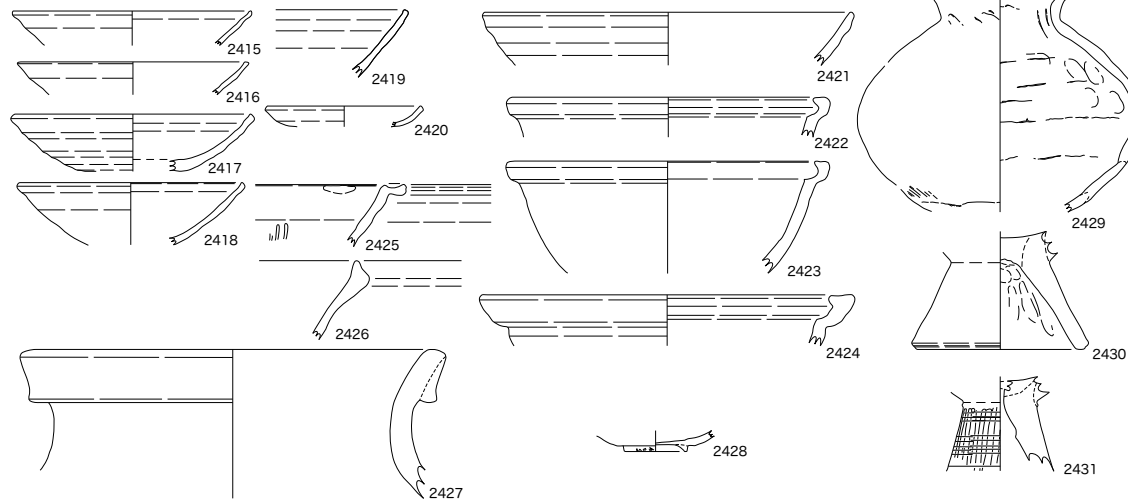
2402

図 3-201 06Ca 区遺構内出土遺物 (1) (加工円盤 1/4・土錘 1/3・鉄器 1/2)

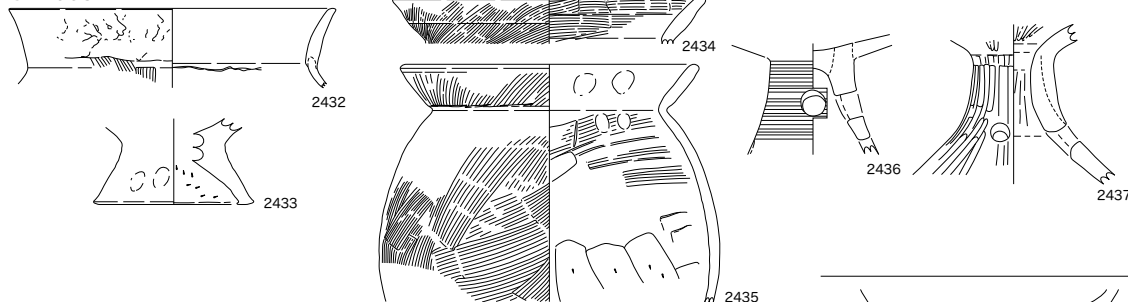
06Cb 区 SD1001



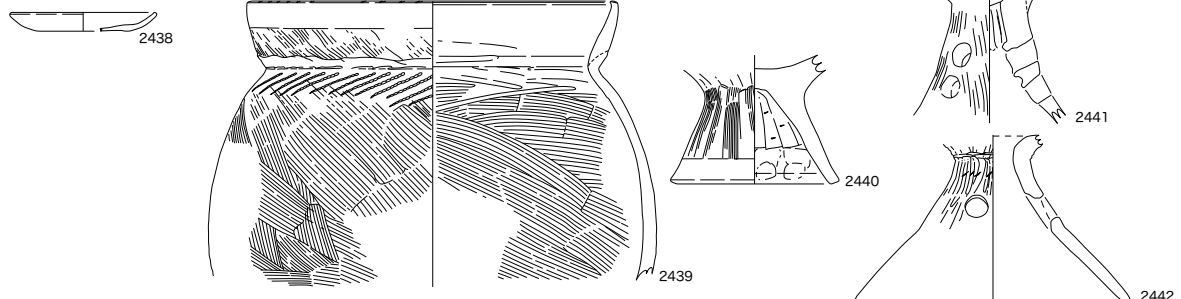
SD1002



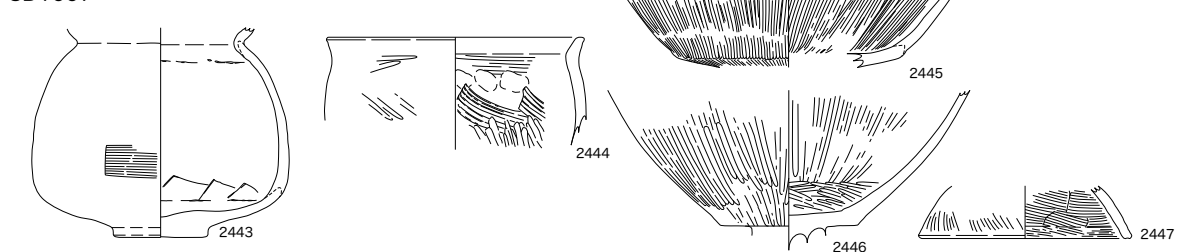
SD1003



SD1004



SD1007



06Cb 区
SD2001

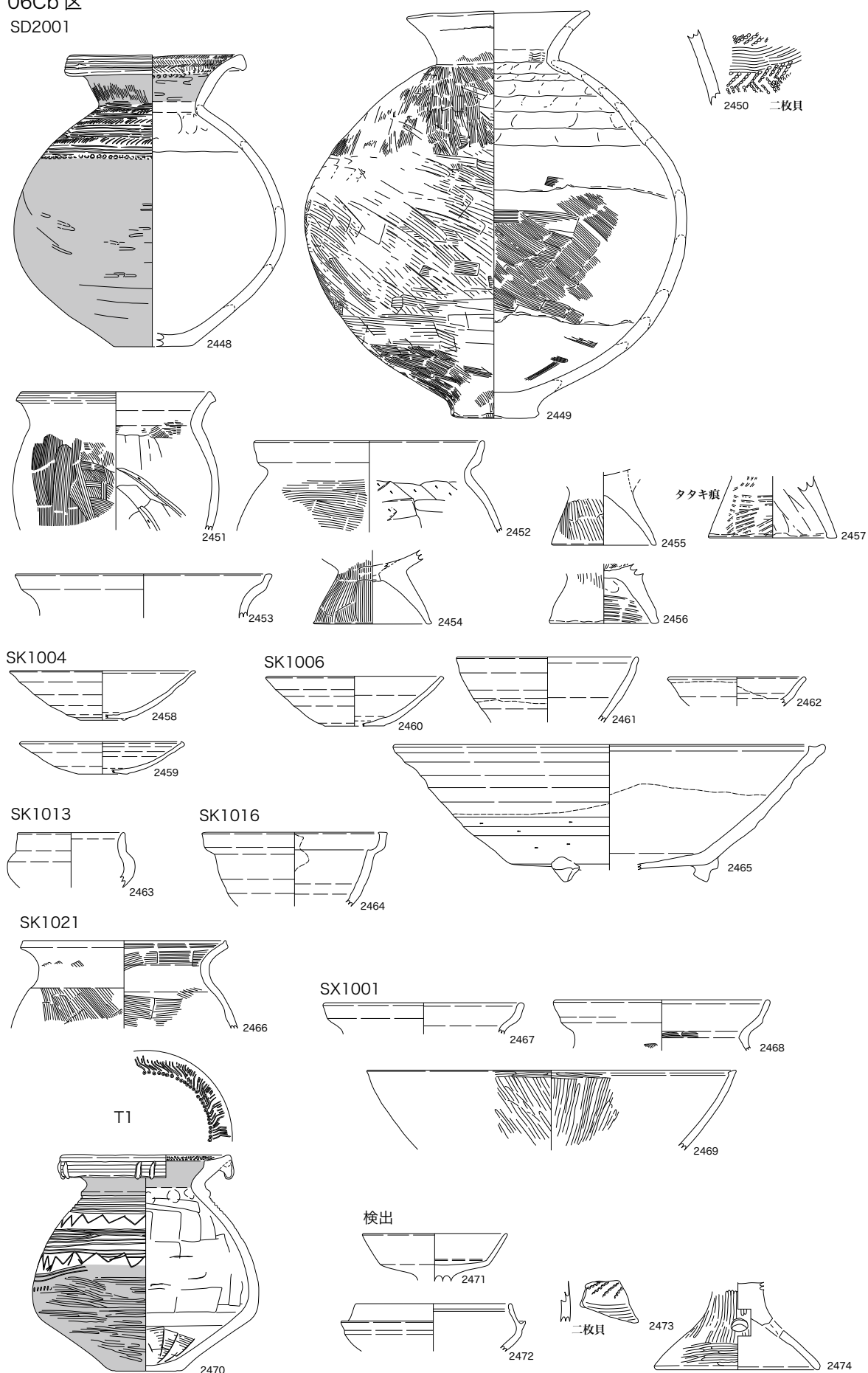
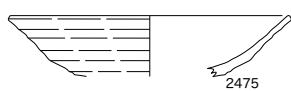
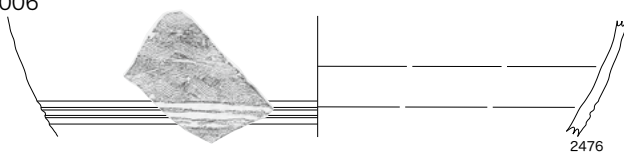


図 3-203 06Cb 遺構内出土遺物 (2)

06A 区
SD2001

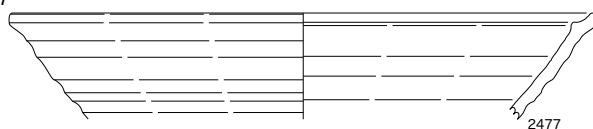
2475

SD2006

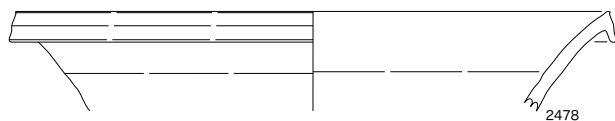


2476

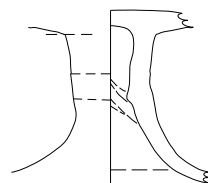
SD2007



2477

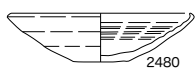


2478

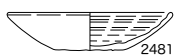


2479

SD2008



2480



2481



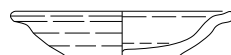
2482



2483

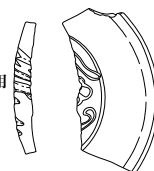


2484

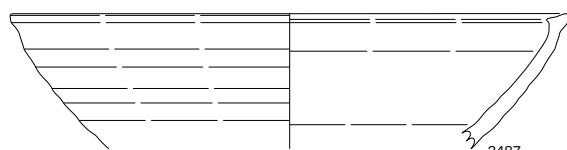


2485

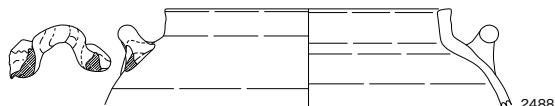
破面を砥石に使用



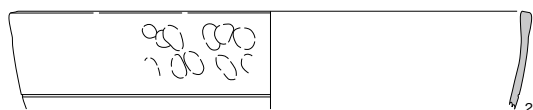
2486



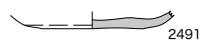
2487



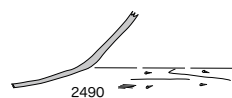
2488



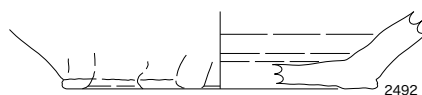
2489



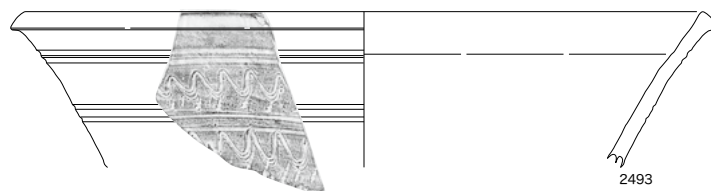
2491



2490



2492



2493

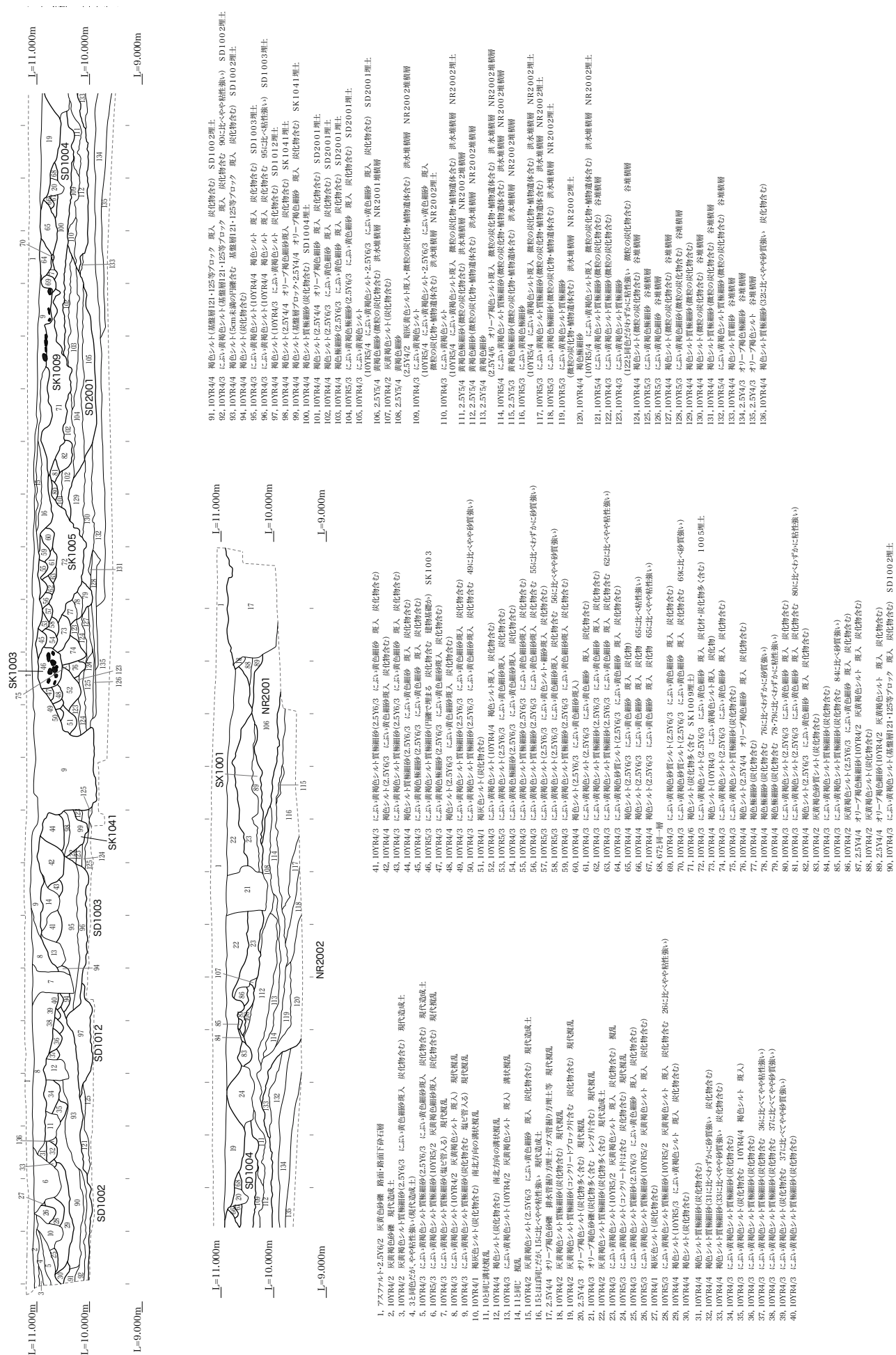


図 3-205 06Cb 区南壁土層セクション 1/100

(2) 小結

A. 縄文後期後葉から弥生中期

古五条川の右岸微高地（07D・E区）では、黒色シルト上面*1を地表面として、土器や石器等が出土して一定程度の活動痕跡が認められた。

問題は土坑状の「落ち込み」で、人為・自然と調査担当者で評価は分かれる。しかし、冷静に観察すれば、遺物を含まないこうした不定形な落ち込み、埋没状況を人為とする方が根拠が問われる。基本的には植生や倒木痕を含む自然形成によって生じた「落ち込み」が大半を占めるものと判断されるのであり、仮に居住域が存在したとすれば、北部に諸施設の設置を含めた活動の中心地があり、今回の調査区の状況はその縁辺であったといえよう。あるいは、出土遺物の希薄さは「遺物散布地」の状況を示すものであって、廃棄帯といえる状況でもない。よって、調査区内について「集落」と認定する要件は満たしていないと考える。

B. 弥生後期終末～古墳前期

西区の古五条川右岸微高地（07D・E区）、東1区の左岸微高地（05B区）、そして東2区の旧河道左岸微高地に竪穴建物群が展開する。それぞれ西部居住域、中部居住域、東部居住域と呼ぶことができる。

西部居住域では弥生後期終末に竪穴建物が構築され、古墳1期には南北方向に2条単位（居住域側が深く、外側が浅い）の溝群を掘削した。後世の削平を考慮しても居住域がさらに西方へ広がる様相は窺えず、基本的には谷に沿う幅の狭い居住域であったと考えられる。特徴的なのは、竪穴建物の掘り方底面の支柱を結ぶラインと外形線の間が少し深くなる「幅広周溝」をもつ竪穴建物跡と、地床炉の片側に寄った位置に棒状礫が埋め込まれる「埋め石炉」が設けられた竪穴建物跡が認められたことである。両者が一つの竪穴建物跡で共存する事例は確認できなかったが、これらの矢作川流域に共通する属性は注目される。

中部居住域では上昇する基盤礫層上面のうち、おそらくシルト層から極細粒砂が堆積する部分に竪穴建物を配置しており、土坑等も同様である。古墳1期の遺物は出土するが、遺構は特定できていない。おそらく、安定して建物等が構築されるのは西部居住域に大きく遅れて古墳2期であろう。竪穴建物掘り方は礫層でとどまり、04A-SB003からは打製石器が出土した。

中部と東部の間は緩やかな起伏をもつ地形で、間に点在する谷上部から土器は出土するが、その周辺での居住は窺えず、出土土器の年代が埋積時期を示していない可能性がある。つまり、中部居住域と東部居住域の間は河川活動の影響を遅くまで受け、それが安定した遺構形成を遅らせた要因であったと考えられる。

東部居住域では竪穴建物跡少数と方形周溝墓1基が検出された。方形周溝墓は東辺の中央が切れるB形墳であるが、周溝からは弥生後期中葉の赤彩壺片が出土しており、周溝の土層断面観察によっても2時期（方形周溝墓Ⅰ・Ⅱ）の周溝掘削が窺えたので、まず、弥生後期中葉に造営され、弥生後期終末期にプランの変形があったものと推測される。完全な形の土器は新しい造墓に伴うもので、周溝外として取り上げられた赤彩壺が周溝内に転落してたものとすれば墳形は前方後方形であった可能性も生じる。なお、微高地西隣の旧河道からは弥生後期終末期でも他に比べて先行する資料群が出土しており、他の居住域に先行する「集落（居住域と墓域のユニット）」が存在した可能性が高い。

3つの居住域のうち、古墳前期後半まで継続するのは西部と中部で、いずれも古墳2期に盛期を迎えてから3期の移行期に洪水層で覆われて終焉を迎えている。05B-SB1029や04A-

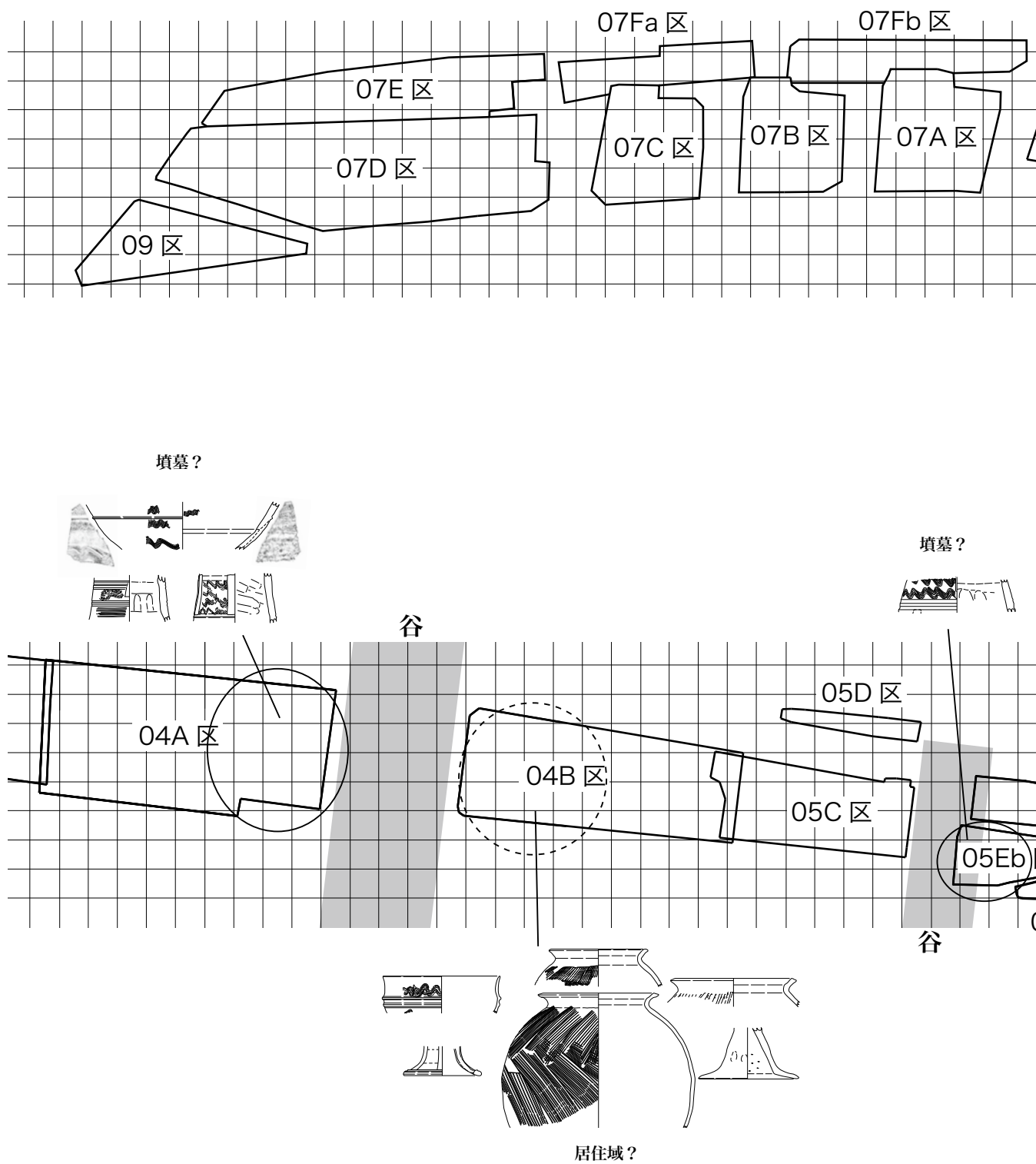
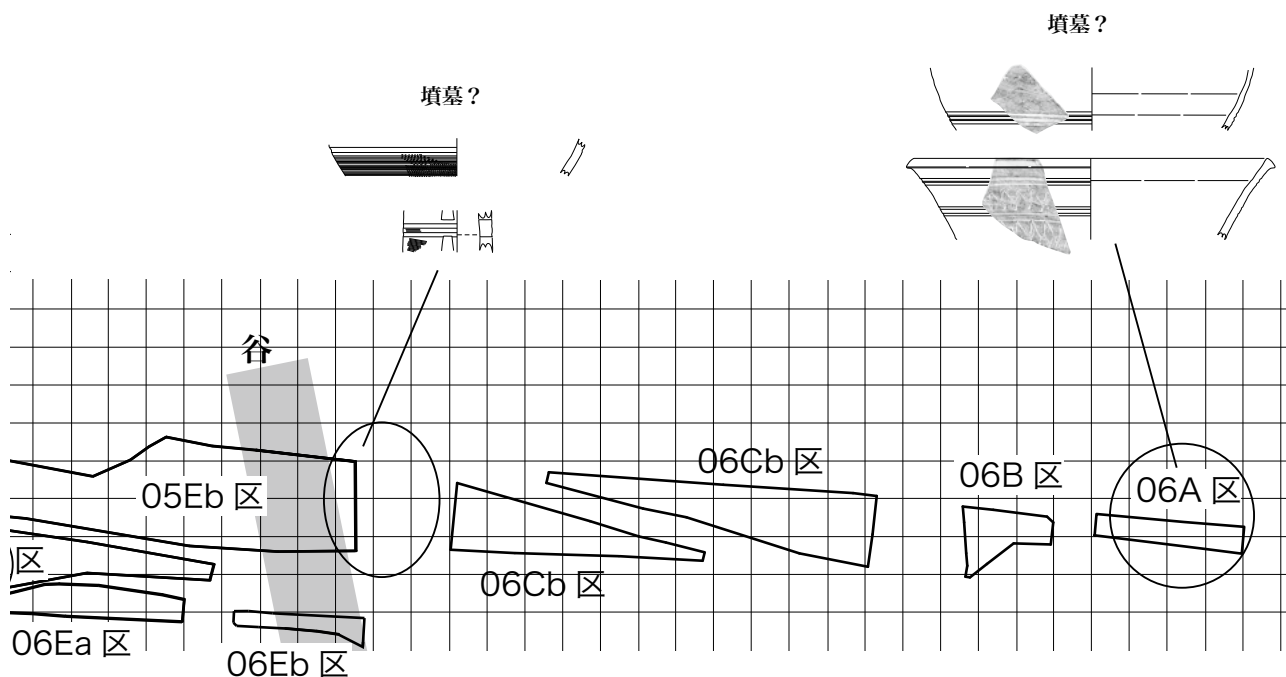
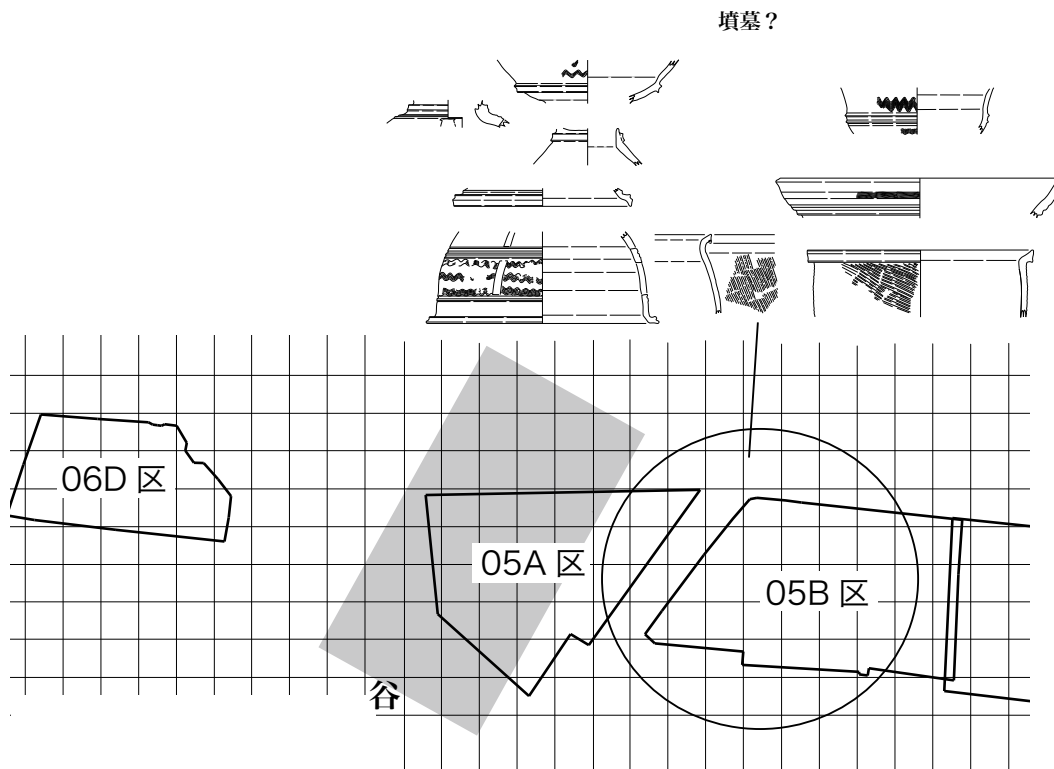


図 3-207 須恵器大型器種の分布 1/1000



SB1004 出土資料には口縁端部が肥厚する S 字甕、肩部ヨコハケメを喪失した S 字甕、屈折脚高杯が含まれており、古墳 3 期につながる要素が色濃い。新しい土器相が完成する前に洪水によって集落が途絶えている点は社会情勢上も注目すべき点である *2。

C. 古墳中期以降

西区では当該時期の遺物は出土せず、東 1 区・東 2 区からの出土に限られる。土坑は 04B 区で検出されているのみで、集落の影は薄い。かわって須恵器の大型器種の散漫な分布に示されるように墳墓の存在が窺える。周溝の痕跡が直接検出できたわけではないが、05B 区には弧状の溝（05B-SD1014）が検出されており注目される。

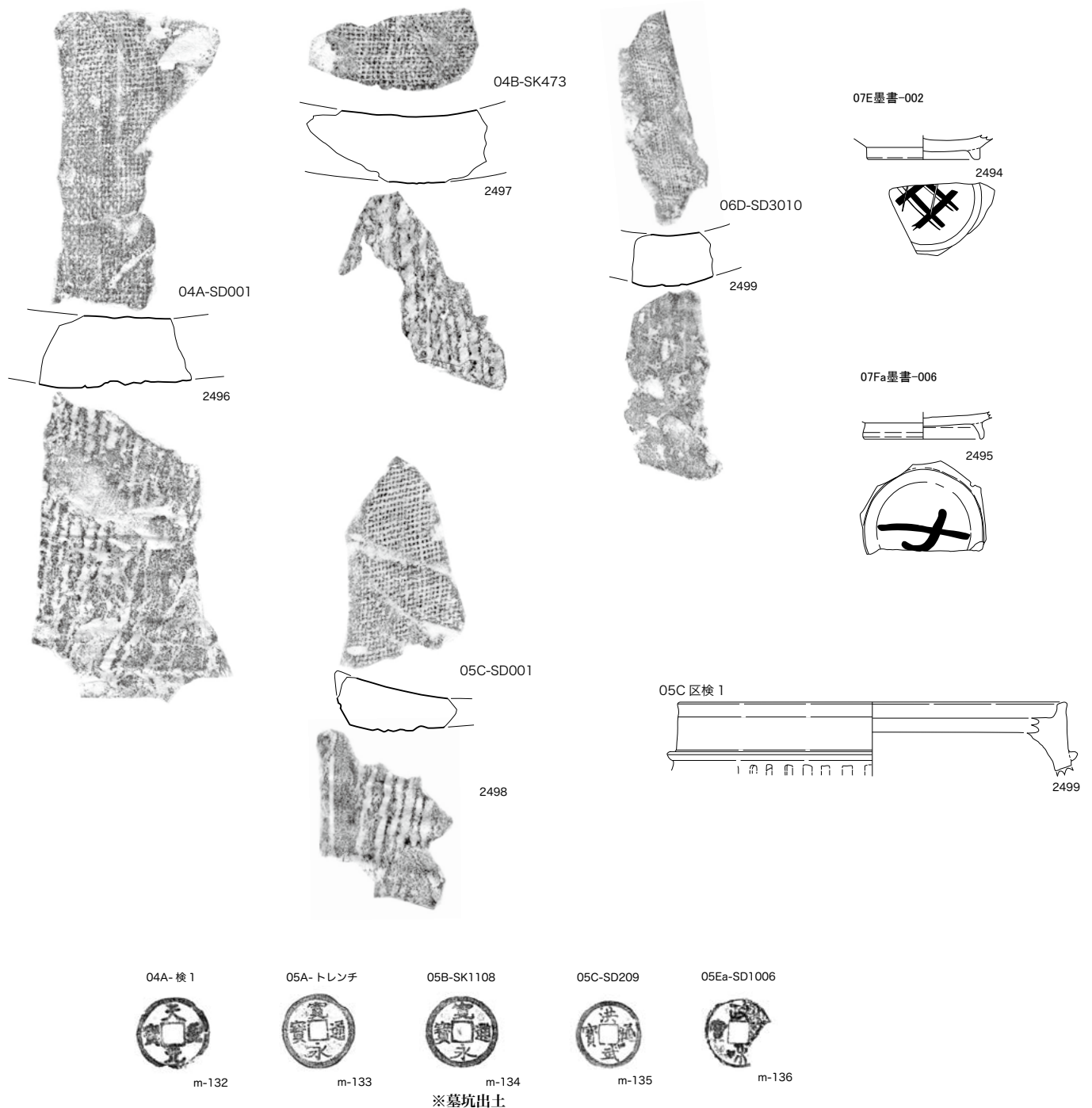


図 3-208 碗・瓦 (1/4)・墨書陶器 (1/4)・銭貨 (1/2)

このように東2区を含めて旧河道上部における遺構形成が古墳中期に始まったことは、洪水後の濃尾平野における再開発との関連を窺わせる。とくに、古墳前期との不連続は地域社会の再編成を意味し、墳墓の造営もそれに深く関わりと考える必要がある。御山寺遺跡に限らず5世紀代における墳墓の造営は濃尾平野低地部のかなり範囲で進んでいる*3。

D. 古代

時期を問わなければ、全域で遺物が出土している。このうち、東1区に集中度合いが高く、

時間幅も7世紀から10世紀までと長期にわたる。居住域は竪穴建物と掘立柱建物からなるが、井戸や廃棄土坑は不明である。竪穴建物跡には上部の削平にもかかわらずカマドを付設する事例が多く確認できたことから、竪穴建物の床面は地表からそれほど深くはなかったものと考えられる。注目される点に、柵柱の抜き穴に灰釉陶器を詰め込んだり(04B-SK092)、総柱建物の柱の抜き穴に土錘を一括して破棄する(04B-SK340)等の事例である。

出土遺物では、円面硯や石製帯具、「新」の墨書が施された須恵器が出土し、瓦も平瓦片が少量だが出土した。墨書が8世紀後葉の古い時期に属することは1文字のため意味の判読は難しいとはいえ、木簡に比肩できる資料価値があろう。また、緑釉香炉蓋片がこれも小片とはいえ出土していることは、平安期に遺跡の濃度が増すだけでなく、加えて公的機構との関係を示唆し、全体の分布状況から調査区北部に中枢域が存在する可能性は高い。

なお、多量に出土した土錘は04B-SK340を始めとして紡錘形が主で、重量は7～10gに集中する。河漁での使用が想定されるものであり、遺跡の環境を反映している。

E. 中世前半

古代末からの連続を考慮すれば、西区(07D・E区)の礫群とその下から検出された土坑群が特異である。礫そのものは基盤に含まれており採取は容易だが、痕跡は検出されていない。戦国期以降の河川活動で河床礫が流失した可能性はあるものの、やはり来歴が問題となろう。礫群には10世紀から13世紀までの長期にわたる遺物が共伴しており、最終段階に大きく移動したとすれば、もともとの集積が微高地上で行われた可能性が高い。それが「築堤」に伴うものでなければ非日常的活動と想定できよう。

この点で、時期が確定できなかった多数の小穴に柱通りから建物が復元できない理由に、小屋程度の簡易な建物が多かったからだとすれば、両者の関連性も浮上する。

古代に引き続き東1区04B・05C区における遺構・遺物の集中度が高い。04B区では根石を伴う柱穴が幾つかあり、これを含めて集中する柱穴群がこのエリアが居住域であることをよく示している。古代との空白は調査区内の問題ではなく、居住地中枢域の拡大と縮小の動態が反映されている可能性はある。その意味でも縁辺であることは変わらない。

F. 中世後半から近世初期

東1区・西部(04A区)では14世紀後半から15世紀前半に溝群や建物群がめまぐるしく変遷する様相が窺え、隣の04B区も同様である。とくに05C・05Ea区では深い大型の土坑・溝が多数設けられて地層の攪乱が進んだ為に、本来は居住域であり古代の建物が展開したはずだが、その多くは破壊された。

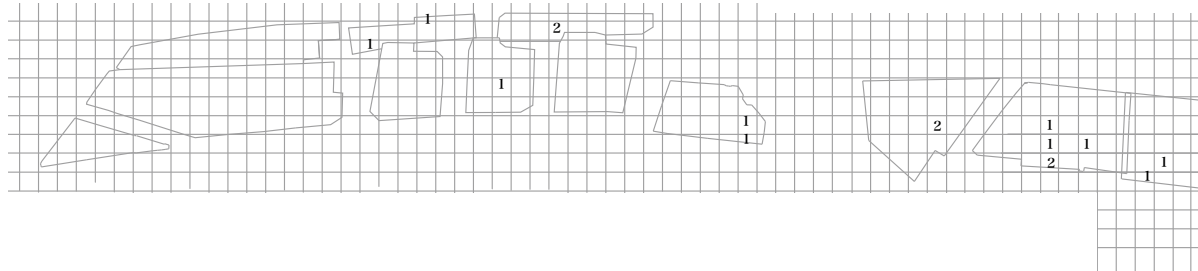
東1区東部(05Ea・05Eb区)では上部の削平で建物跡は不明だが、井戸群の展開から居住域の存在が窺える。しかし、もともと旧河道であった低い場所であったとすれば、通常の居住域であったともいえず、ましてや拠点性は想定できないだろう。

これらを一旦リセットするように15世紀後半に東西を貫く大溝が掘削される。大溝への遺物廃棄は集積するというほどではなく、周辺の土坑にも廃棄が行われており器種も限られることから、大溝に隣接して安定した居住域が形成されているという印象は薄い。むしろ、大溝の掘削によって多くの遺構が滅失したと考えられる。

東西の大溝は、東1区西部でも掘削されており、西端では北東から南西に走る大溝に接続する。東西方向の大溝がすべて接続するとは言えない状況だが、軸線の存在は認めて良いとすれば大きな「地割り」の存在を考える必要がある。つまり、集住域の形成と縁辺の区画という全体プランとの関係である。実際、大溝底面は一方向への傾斜ではないので、水路機能は明確ではない。

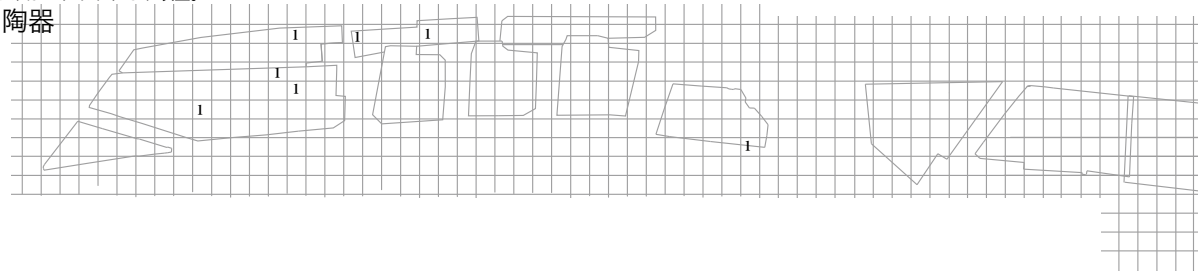
※アミかけは1グリッド5ヶ以上。

土錘



※アミかけは1グリッド3ヶ以上。

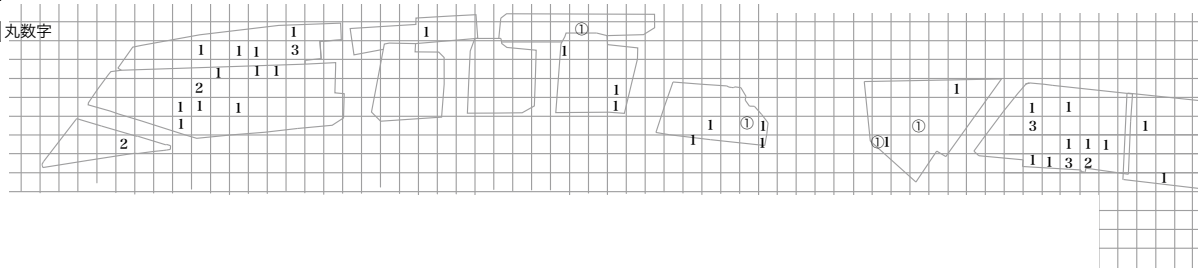
緑釉陶器



※アミかけは1グリッド10ヶ以上。

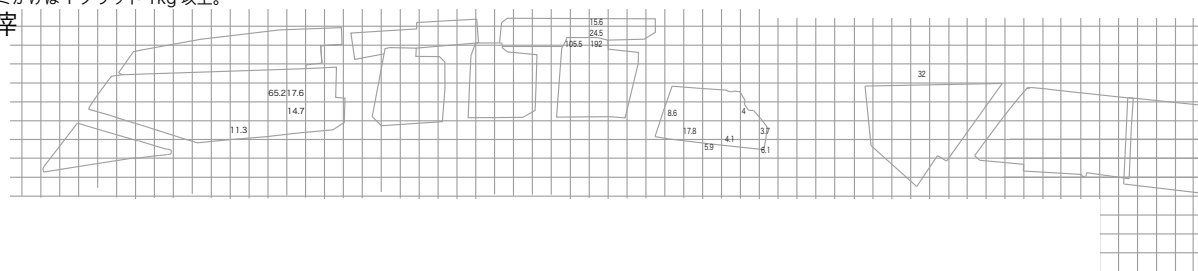
鐵器

羽口丸数字



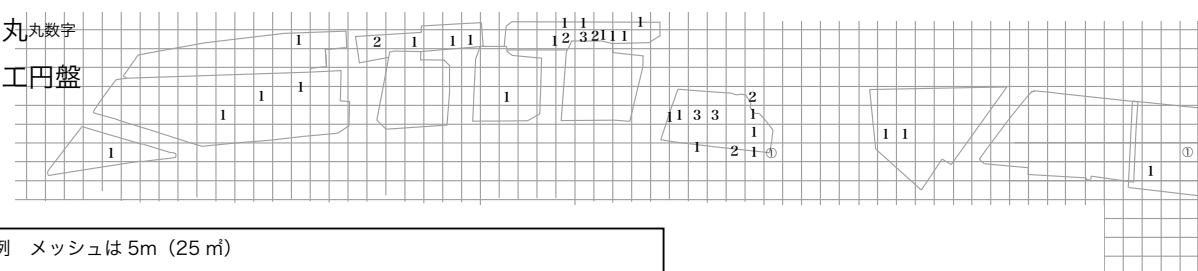
※アミかけは1グリッド1kg以上。

鋤滓



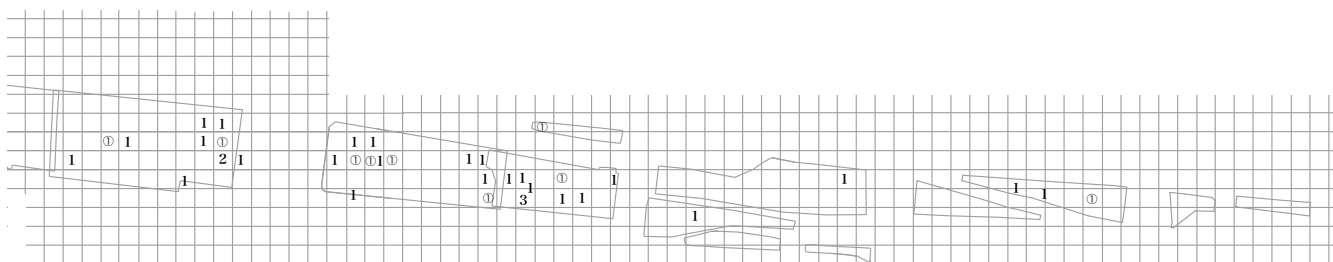
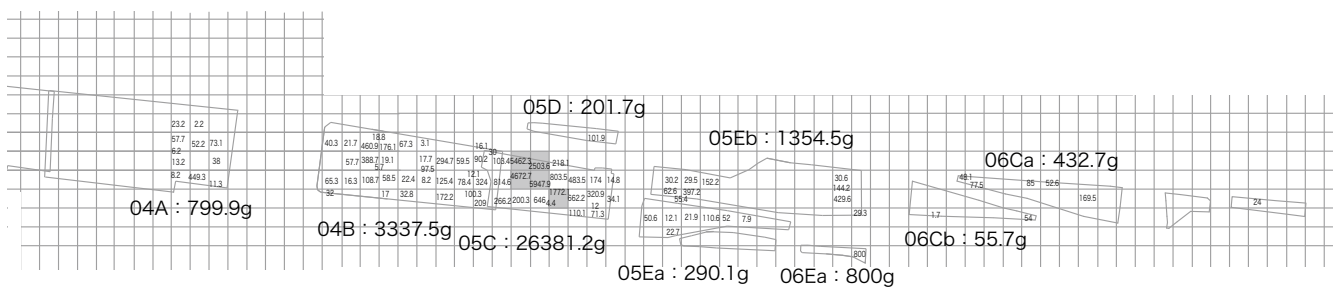
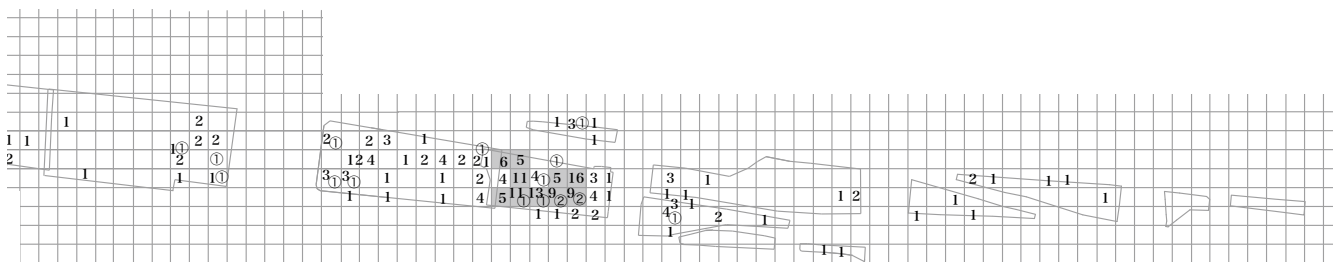
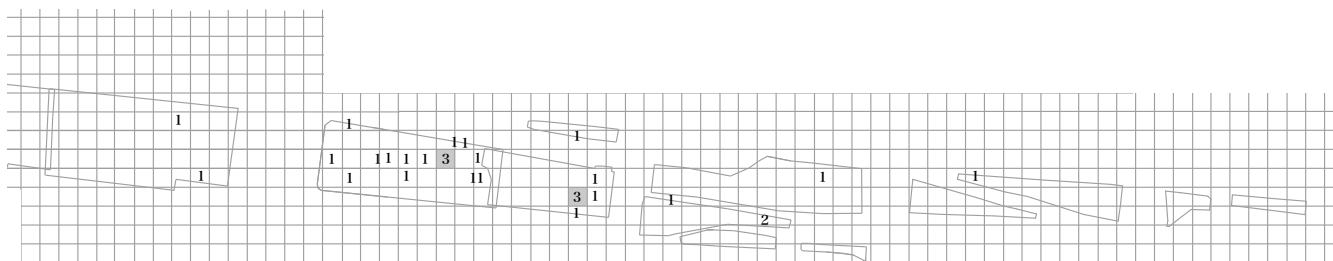
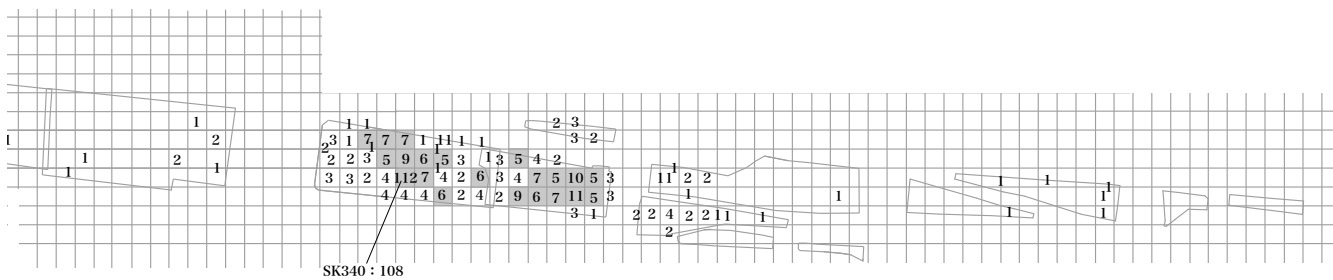
陶丸丸数字

加工円盤



凡例 メッシュは 5m (25 m²)

数字は個数（鉱滓はg）、メッシュ線上の数字は両グリッドにまたがる資料



大溝の掘削を前後して 05B 区では墓地が営まれた。05B-SK1011 出土人骨の歯の年代測定結果（AD1440-1480 年）は、調査区に南隣する畑で山茶碗 11 型式（脇之島）の碗・小皿の完品が出土している点に深く関係し、調査区南部へも墓地が広がる可能性を強く示している。

出土した人骨は解剖学的位置を保っていないことから座位（胡座）であったこと、当然空間があつて直接土で覆われていなかったからのようだが、土坑の形状から棺構造を復元することは難しい。しかし、一部で金具が出土していることは「桶」ではない可能性を示唆する。なお、1 点墓坑外から焼骨が出土しており付近で火葬が行われた可能性もあるが、時期は不明であり、墓葬としては確定できない。

この後、全域は耕作地となり、一部は近世の水田造成によって削平された。

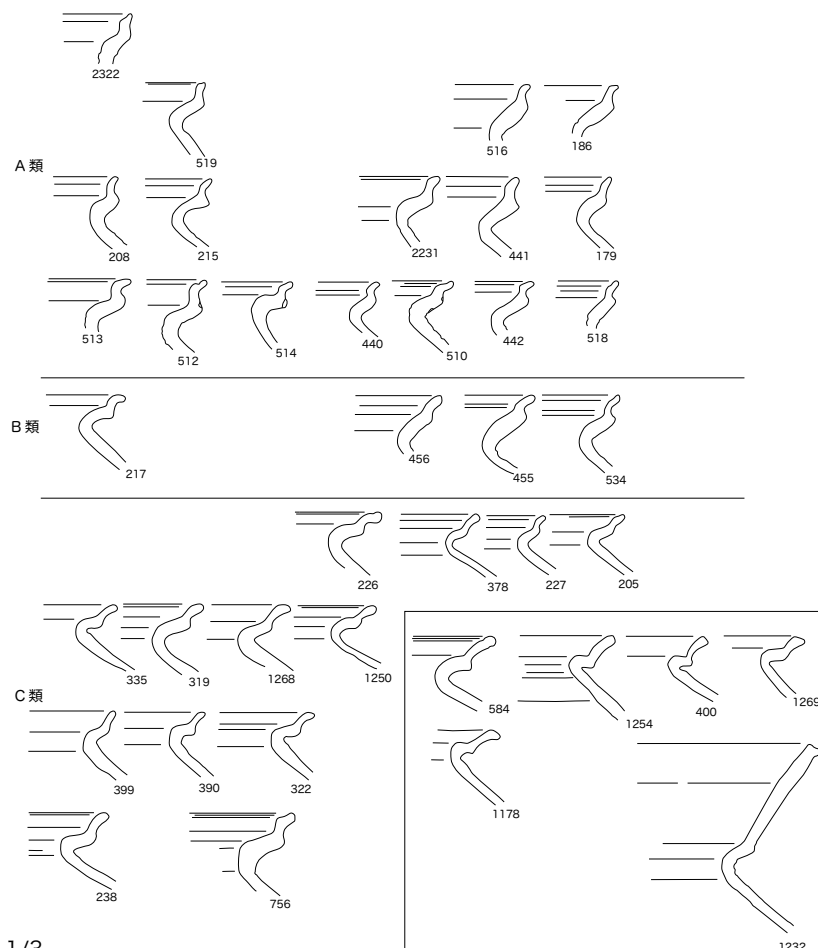
註

*1 黒色シルトは堆積層ではなく、黒色化層である。だから、黒色土層中の遺物がまとまっていても、掘り込みは見つからない。もし、黒色層上面から掘り込まれていれば、埋土は黒色土や基盤土の小さなブロックを含み、また黒色土層を切り込む不整合面も見つかったはずだが、縄文後期以前の遺構はそうではない。岩倉市権現山遺跡でも堅穴建物跡覆土は黒色層ではないし、清須市朝日遺跡の縄文遺構もそうである。

*2 古墳 3 期（松河戸 1 式）には濃尾平野全域で洪水層が確認されている。その空白期を挟んで遺跡が再形成される。つまり、清須市廻間遺跡は濃尾平野低地部、春日井市松河戸遺跡は庄内川に面する段丘にあるというように、土器編年の連続が同一遺跡では保たれていない点に編年を超える濃尾平野の歴史性がある。

*3 濃尾平野は広すぎて高所に墳墓を造営できないので、生産地に不向きな至近の場所に墳墓を造営する。清須市朝日遺跡、同土田遺跡、一宮市八王子遺跡、同門間沼遺跡。同池田遺跡、稲沢市塔の越遺跡では、5～6 世紀の墳墓跡が見つかった。それらに対峙することが古墳群研究の要点である。

宮腰健司 2002 「尾張低地部における小規模古墳の様相」『研究紀要 第 3 号、pp.57-67、愛知県埋蔵文化財センター



御山寺遺跡における S 字状口縁台付甕口縁部形態の変異

御山寺遺跡出土の S 字甕をみると、口縁部外面にハケメ以外の工具を含めて刺突や押し引きが施される A 類は肩部羽状ハケメ段階（A2 類）に相当して変異幅が広く、反対に頸部内面のハケメを残す B 類はわずか、頸部内面のハケメが消失して肩部ヨコハケメを引き継ぐ C 類になると再び変異幅を広げる。

A 類から続く口縁部上端の面は B 類に続くが C 類で不明確となる。C 類では「S 字状」から「受け口状」への変化があり、口縁部が大きくのびる有段口縁もその延長にある。「受け口状」口縁には口縁端部に面をもつものがあり、形状は D 類とおなじだが、肩部にヨコハケメが施されるために分類上は C 類となる。この場合、肩部ヨコハケメの有無を型式区分の指標にするということだが、やはり屈折脚高杯の出現が重要な指標となるのだろう。それ以後は、C・D 類区分に大きな意味があるようにはみえない。

4. 自然科学分析

(1) 御山寺遺跡の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

A. はじめに

御山寺遺跡は、愛知県岩倉市に所在する。ここでは、旧河川埋土を試料とし、中世の古植生および古環境を復元する目的で花粉化石群集の検討を行った。

B. 試料

花粉化石群集の検討は、2 地点で採取された試料 1 ～ 3 の合計 3 試料について行った。以下に、各試料の記載を示す。

[06D 区IX I20o グリッド (試料 1、2)]

本地点は、5 層に層位区分される。上位より、水田層 (ST5011)、灰褐色砂混じり粘土層、16 層 (NR6001; 旧河川)、17 層 (NR6001)、灰色砂層である。砂層の下位には、重機での深堀により、礫層 (円礫; ϕ max10cm 以上～20cm 程度) が確認されている。試料は、16 層 (試料 1)、17 層 (試料 2) より採取され、灰色粘土で砂が少し混じり、褐鉄鉱が発達する。時代については、いずれも 16 世紀後半と考えられている。

[06D 区 T11 北側 1m 地点 (試料 3)]

本地点は、5 層に層位区分される。上位より、灰褐色砂と粘土の互層、灰褐色砂層 (所々に粘土が混じる)、灰褐色砂層、灰色粘土層、灰色砂層である。本地点も砂層の下位には、礫層が確認されている。試料は、旧河川埋土の灰色粘土層下部より採取された。木本遺体を含み、下位の砂層との境界付近には、褐鉄鉱が発達する。時代については、14 世紀後半～15 世紀と考えられている。

C. 方法

花粉化石の抽出は、試料約 2～3g を 10% 水酸化カリウム処理 (湯煎約 15 分) による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理 (約 30 分) による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理 (氷酢酸による脱水、濃硫酸 1 に対して無水酢酸 9 の混液で湯煎約 5 分) の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離 (臭化亜鉛を比重 2.1 に調整) による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

D. 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉 34、草本花粉 28、形態分類で示したシダ植物胞子 2 である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

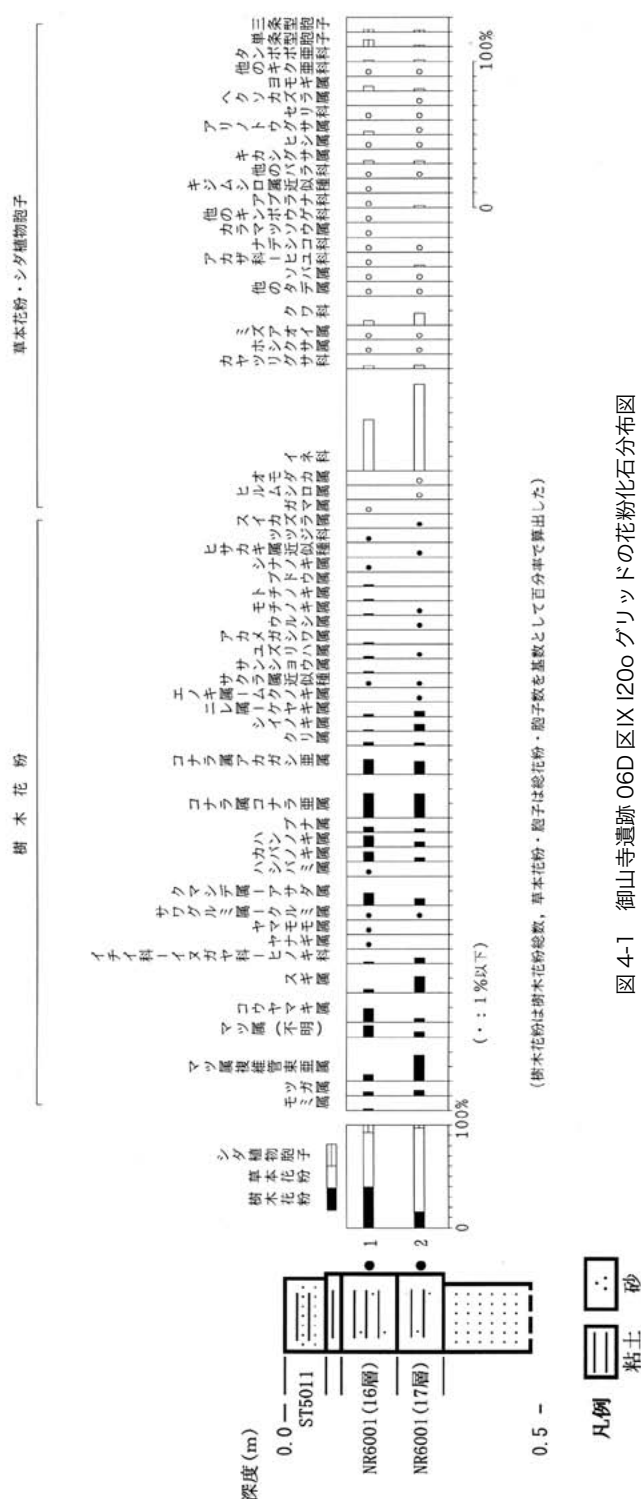
[06D 区IX I20o グリッド (試料 1、2)]

樹木花粉の割合は、下位の試料 2 は約 16% と非常に低率であり、試料 1 は約 40% とやや低

表 4-1 花粉化石産出一覧表

和名	学名	1	2	3
樹木				
モミ属	<i>Abies</i>	2	-	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	5	4	1
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	8	19	19
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	14	4	5
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	17	3	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	5	12	3
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	2	4	4
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	-	1
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	1	1	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	16	5	8
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	12	3	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	14	4	7
ブナ属	<i>Fagus</i>	7	3	5
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	31	18	18
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	19	10	16
クリ属	<i>Castanea</i>	4	2	3
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	2	5	4
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	3	4	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	2
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	1	1	1
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	2	-	1
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	3	1	-
アカメガシワ属	<i>Nallotus</i>	2	-	-
ウルシ属	<i>Ehus</i>	-	1	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	2	1	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	2	-	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	2	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1	-	-
ヒサカキ属近似種	cf. <i>Eurya</i>	-	1	-
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	1	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	1	-
草本				
ガマ属	<i>Typha</i>	1	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	1	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-
イネ科	Gramineae	161	409	185
カヤツリグサ科	Cyperaceae	11	19	15
モシクサ属	<i>Eriocaulon</i>	1	3	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	2	4	7
クワ科	Moraceae	13	56	38
他のタデ属	other Polygonum	1	1	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	1	1
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	2	7	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3	4	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	2	-	-
アブラナ科	Cruciferae	3	12	7
キジムシロ属近似種	cf. <i>Potentilla</i>	1	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	1	-
キカングサ属	<i>Rotaia</i>	9	13	7
ヒシ属	<i>Trapa</i>	1	1	2
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	9	6	5
セリ科	Umbelliferae	1	2	-
ガガブタ	<i>Nymphoides indica</i> O.Kuntze.	-	-	1
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	1
アカネ属-ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	-	-	1
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	14	9	7
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	4	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	5	8	6
シダ植物				
単条型胞子	Monolete spore	23	9	6
三条型胞子	Trilete spore	9	9	7
樹木花粉	Arboreal pollen	181	108	106
草本花粉	Nonarboreal pollen	246	563	288
シダ植物胞子	Spores	32	18	13
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	459	689	407
不明花粉	Unknown pollen	13	17	13

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



率である。いずれの試料もアカガシ亜属が約 17%と最も高率な傾向であり、コナラ亜属も 10 %程度で比較的高率である。しかし、針葉樹の出現率に差があり、試料 2 ではマツ属複維管束亜属(約 18%)、スギ属(約 11%)が比較的高率であるのに対して、試料 1 では、これらの出現率は低く(3~4%程度)、コウヤマキ属(約 9%)が比較的高率である。他では、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属、クリ属、シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属、サクラ属近似種、ユズリハ属、モチノキ属などがいずれの試料からも出現する。また、試料 2 ではヒサカキ属近似種、試料 1 ではモミ属、ヤマモモ属、サンショウ属、アカメガシワ属、トチノキ属、ブドウ属などが低率で出現する。草本花粉は、イネ科が約 35

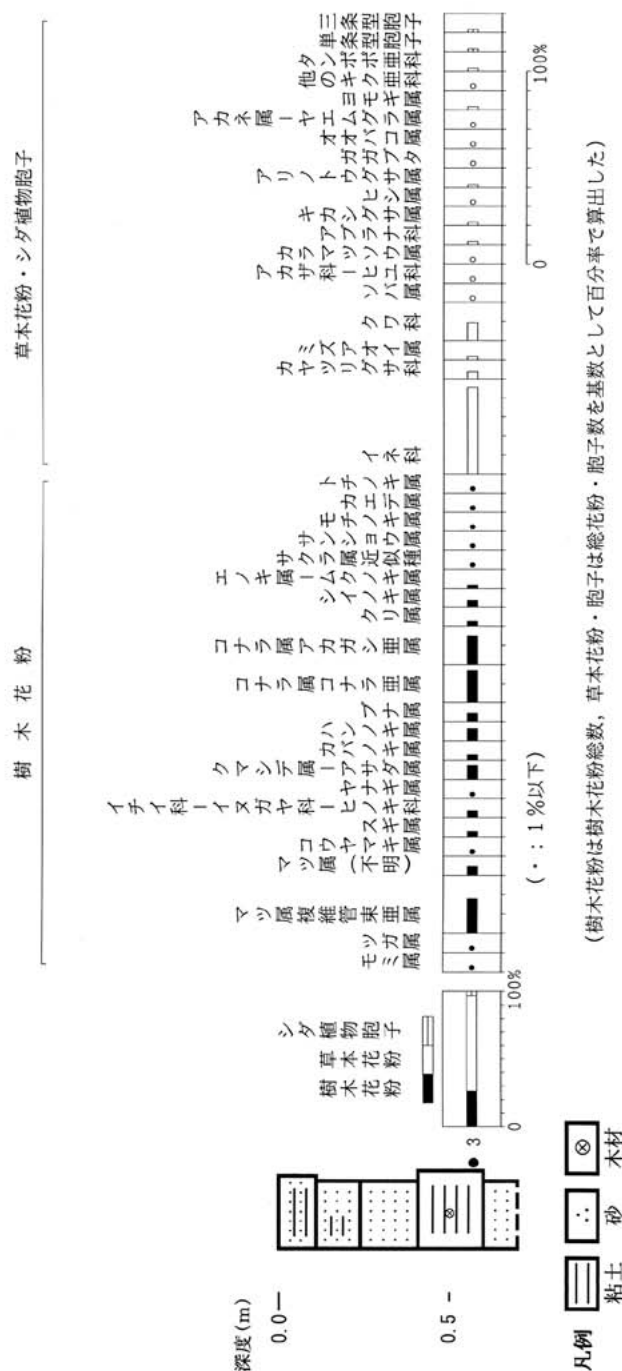


図4-2 御山寺遺跡06D区T11北側1m地点の花粉化石分布図

% (試料 1) ~ 59% (試料 2) で高率であり、クワ科も約 3% (試料 1) ~ 8% (試料 2) と若干目立つ。他に、低率ではあるが、カヤツリグサ科、ホシクサ属、ミズアオイ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、キカシグサ属、ヒシ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などがいずれの試料からも出現する。また、試料 2 では、ヒルムシロ属、オモダカ属、試料 1 ではガマ属、カラマツソウ属なども出現する。

[06D 区 T11 北側 1m 地点 (試料 3)]

樹木花粉の占める割合は、約 26% と低率である。その中で高率なのは、マツ属複維管束亜属、コナラ亜属、アカガシ亜属の順で約 15 ～ 18% である。他に、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ハンノキ属、ブナ属、シイノキ属が 4 ～ 8% 程度でやや目立ち、スギ属、カバノキ属、クリ属、エノキ属－ムクノキ属、カエデ属なども出現する。草本花粉は、イネ科が約 45% と高率であり、クワ科も約 9% と比較的高率である。他に、カヤツリグサ科が約 4% で若干目立ち、ミズアオイ属、アブラナ科、キカシグサ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科が 2% 未満、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、カラマツソウ属、ヒシ属、ガガブタ、オオバコ属などが 1% 以下で出現する。

E. 考察

[14 世紀後半～15 世紀 (試料 3)]

針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占する森林が成立していたと考えられる。また、針葉樹のスギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属、ハンノキ属なども主要素として混じっていたであろう。河川内ないし周辺には、イネ科が卓越し、抽水植物のミズアオイ属、キカシグサ属、浮葉植物のヒシ属、ガガブタが生育していたと考えられ

る。池や沼に生育するヒシ属、ガガブタが河川内に生育していたのだとすれば、河川は幾分水深があり、流れは伴っていないか緩やかなものであったと推定される。また、ミズアオイ属、キカシグサ属は、水田にしばしば雑草として生育するいわゆる水田雑草であり、イネ科の高率出現・イネのプラント・オパールが多産も考慮すると、河川周辺に水田が存在していた可能性が高いと考えられる。栽培状況については、ソバ属の出現からソバの栽培地が存在していたと考えられ、そのような耕作地ないし路傍などの人の影響を強く受ける場所に、クワ科、アカザ科－ヒユ科、アリノトウグサ属、オオバコ属、タンポポ亜科などが生育していたと考えられる。

[16 世紀後半 (試料 1、2)]

[16 世紀後半 (試料 1、2)]

引き続き、コナラ亜属、アカガシ亜属の優占する森林が成立しており、試料 2(17 層)の堆積期には、マツ属複雑維管束亜属、スギ属も多く生育していたと考えられる。試料 1(16 層)の

堆積期には、マツ属複維管束亜属、スギ属が減少した可能性もあるが、これらやコウヤマキ属といった針葉樹は、花粉生産量の極めて多い風媒花であり、堆積の場による集積の差異が出ている可能性もある。このことから、マツ属複維管束亜属、スギ属の減少が短期間のうちに、実際に見られたかどうかを言及するには、周辺遺跡などのデータの蓄積を要するであろう。なお、この時期の主要素としては、落葉広葉樹のクマシデ属—アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属などが生育しており、希少なながらもヤマモモ属、サクラ属近似種、ユズリハ属、アカメガシワ属、モチノキ属、トチノキ属、ヒサカキ属近似種なども混じっていたであろう。河川 (NR6001) や周辺の環境は、14 世紀後半～15 世紀と同様であったと推定される。すなわち、水田が存在していた可能性が高く、ソバの栽培地が存在していたと考えられる。

F. おわりに

旧河川埋土を検討した結果、次のようなことが推定された。14 世紀後半～15 世紀 (試料 3) には、マツ属複維管束亜属、コナラ属、アカガシ属が優占する森林が成立していた。河川内ないし周辺には、イネ科が卓越し、ミズアオイ属、キカシグサ属、ヒシ属、ガガブタといった水生植物が生育していた。河川周辺には、水田が存在していた可能性が高く、ソバの栽培地

も存在していた。

16 世紀後半 (試料 1、2) は、引き続き、同様な森林の成立が考えられたが、マツ属複維管束亜属、スギ属、コウヤマキ属に増減が見られた可能性も考えられた。河川 (NR6001) や周辺の環境は、14 世紀後半～15 世紀と同様であったと推定された。

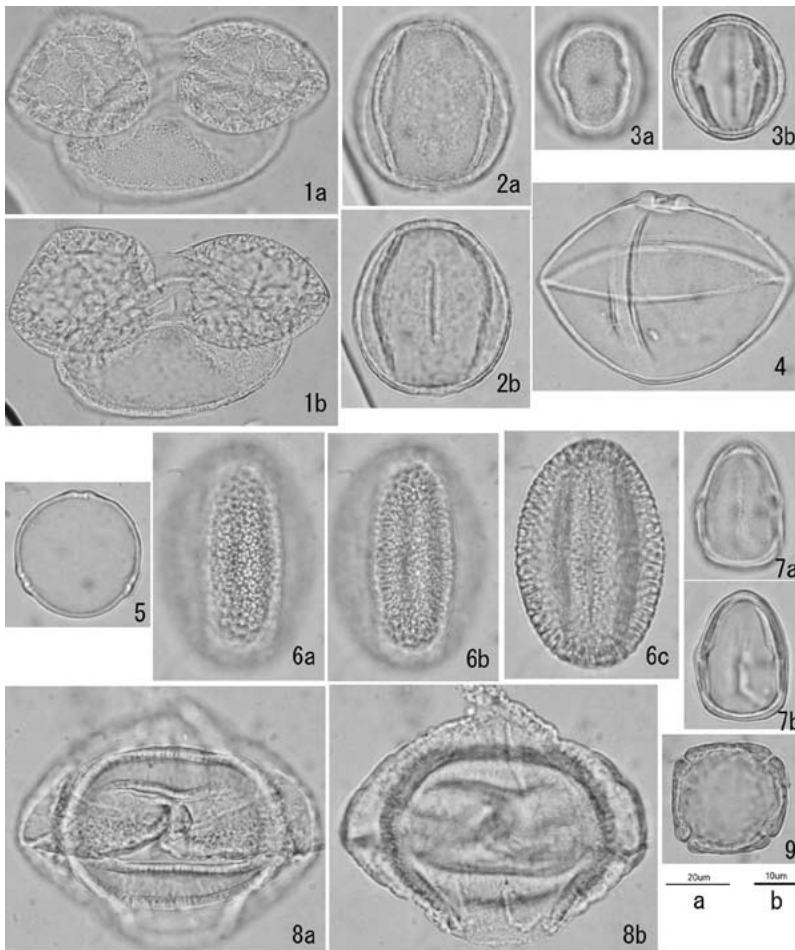


図 4-3 産出した花粉化石 (scale bar a:1 b:2～9)

1. マツ属複維管束亜属、試料 2、PAL.MN 2405
2. コナラ属コナラ亜属、試料 1、PAL.MN 2409
3. コナラ属アカガシ亜属、試料 3、PAL.MN 2410
4. イネ科、試料 2、PAL.MN 2406
5. クワ科、試料 2、PAL.MN 2407
6. ソバ属、試料 3、PAL.MN 2411
7. キカシグサ属、試料 2、PAL.MN 2404
8. ヒシ属、試料 2、PAL.MN 2403
9. アリノトウグサ属、試料 1、PAL.MN 2408

(3) 放射性炭素年代測定 - その 2

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

A. はじめに

愛知県岩倉市に位置する御山寺遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

B. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 4-2 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 4-2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4200	御山寺遺跡	試料の種類：左下顎M1歯 状態：dry カビ：無	コラーゲン抽出	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・ 1.5SDH

C. 結果

表 4-3 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、1950 年以降の試料については 1950 年の大気中の ^{14}C 濃度を 1 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す $F^{14}\text{C}$ 値を、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 4-4 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表 4-3 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-4200	-18.22 $\pm$ 0.12	405 $\pm$ 25	<u>1440AD(68.2%)1480AD</u>	<u>1430AD(87.3%)1520AD</u> 1600AD(8.1%)1620AD

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対

し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09、1950 年以降の試料については Post-bomb atmospheric NH2) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Hua, Q. and Barbetti, M. (2004) Review of Tropospheric Bomb ^{14}C Data for Carbon Cycle modeling and Age Calibration Purposes, Radiocarbon, 46, 1273-1298.

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』 pp. 3-20

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

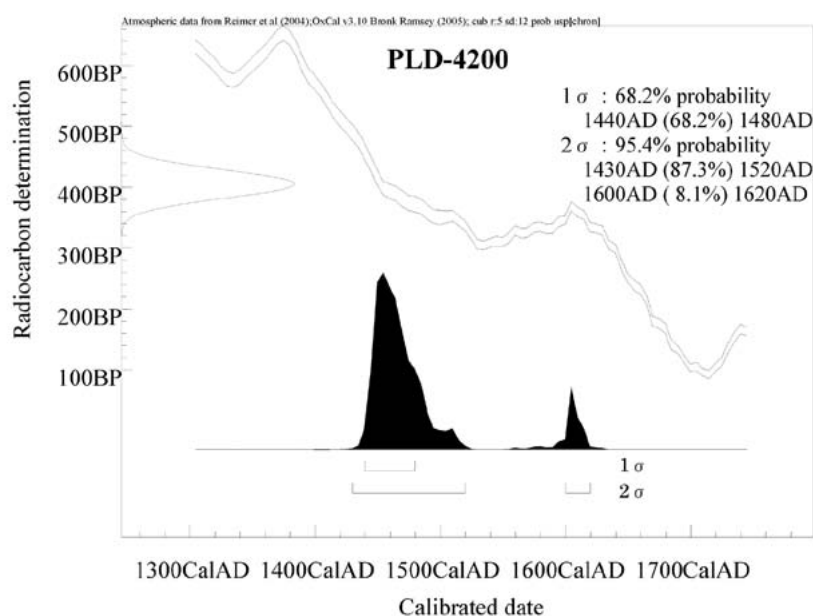


図 4-4 暦年較正結果

(3) 放射性炭素年代測定 - その 2

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani

A. はじめに

愛知県岩倉市に位置する御山寺遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

B. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 4-4 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

C. 結果

表 4-5 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、1950 年以降の試料については 1950 年の大気中の ^{14}C 濃度を 1 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す $F^{14}\text{C}$ 値を、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 4-5 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09、1950 年以降の試料については Post-bomb atmospheric NH2）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program.

Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Hua, Q. and Barbetti, M. (2004) Review of Tropospheric Bomb ^{14}C Data for Carbon Cycle modeling and Age Calibration Purposes, Radiocarbon, 46, 1273-1298.

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』 pp.3-20

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

表 4-4 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-16169	調査区：IRGJ05A 位置：南西壁，深掘 試料No.14C-No.1 その他：050614	試料の種類：生の草本 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-16170	調査区：IRGJ05A 位置：南西壁，深掘 試料No.14C-No.2 その他：050614	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-16171	調査区：IRGJ07D 位置：深掘 試料No.14C-1 その他：070927	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分 106 μm 酸洗浄(塩酸:1.2N)
PLD-16172	調査区：IRGJ07E 位置：深掘 層位：中粒砂層と砂質シルト層の互層 試料No.14C-1 その他：071227	試料の種類：生材 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-16173	調査区：IRGJ07E 位置：深掘 層位：灰色粘土層 試料No.14C-2 その他：071227	試料の種類：生材(枝,一部炭化) 試料の性状：最外年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)

表 4-5 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	$F^{14}\text{C}$	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-16169	-31.80 ± 0.22	-640 ± 19	-640 ± 20	1.0830 ± 0.0026	Bomb04NH2: 1957AD(32.4%)1957AD 1998AD(35.8%)...	1956AD(45.2%)1957AD 1997AD(50.2%)...
PLD-16170	-26.77 ± 0.19	682 ± 20	680 ± 20	-	1280AD(56.8%)1298AD 1372AD(11.4%)1378AD	1275AD(68.9%)1306AD 1363AD(26.5%)1385AD
PLD-16171	-24.14 ± 0.22	2972 ± 23	2970 ± 25	-	1260BC(49.5%)1192BC 1177BC(10.2%)1161BC 1144BC(8.6%)1132BC	1295BC(95.4%)1123BC
PLD-16172	-25.65 ± 0.23	1285 ± 21	1285 ± 20	-	680AD(39.7%)715AD 745AD(28.5%)768AD	671AD(95.4%)773AD
PLD-16173	-28.81 ± 0.20	1266 ± 21	1265 ± 20	-	690AD(42.1%)729AD 736AD(16.0%)751AD 762AD(10.1%)771AD	674AD(95.4%)779AD

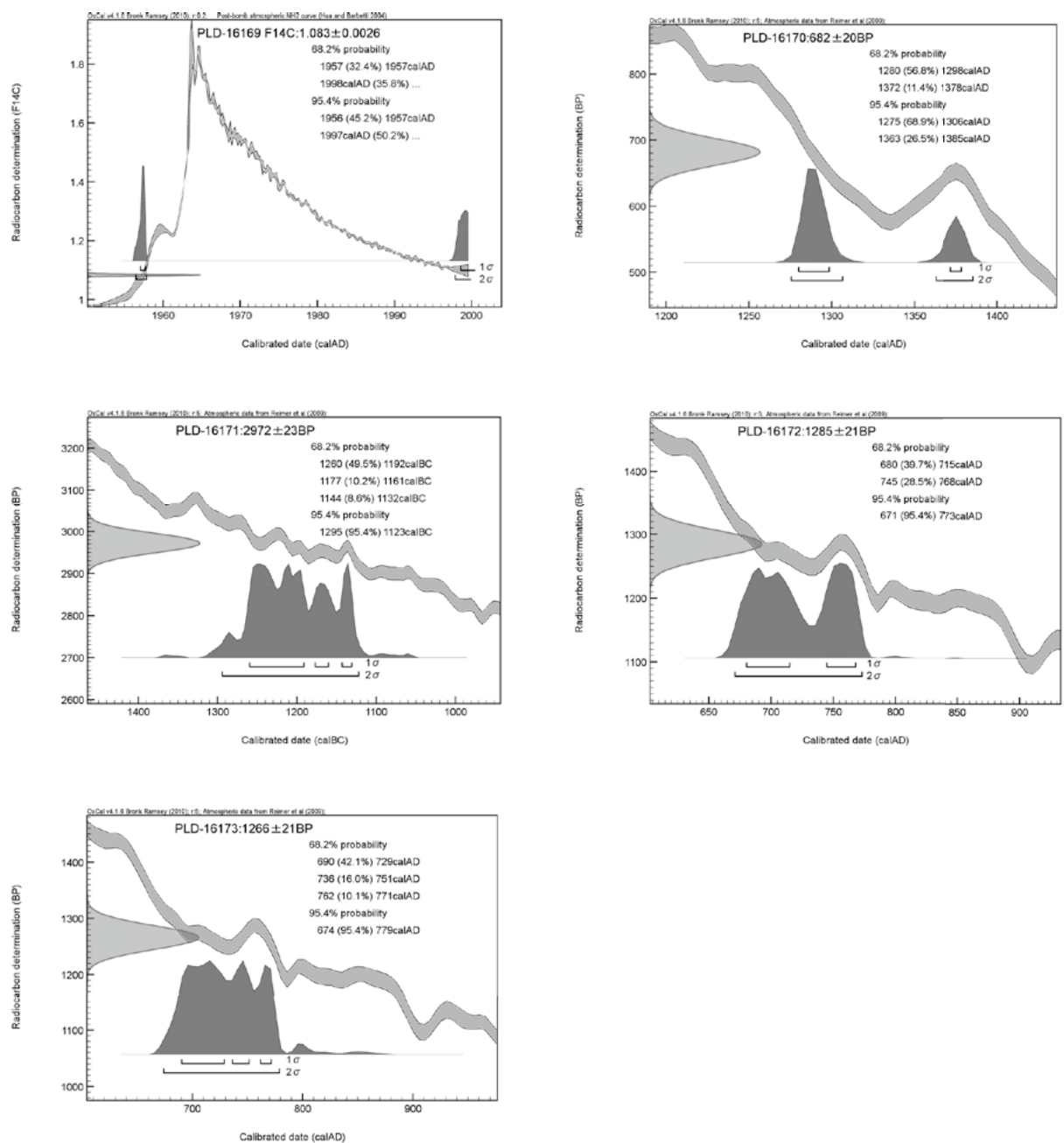


図 4-5 暦年較正結果

(4) 御山寺遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

A. はじめに

御山寺遺跡は岩倉市中野町から鈴井町にかけて所在する遺跡で、縄文時代から近世以降までの各時代の遺構が検出されている。ここでは出土した木製品 38 点の樹種同定を行なった。

B. 試料と方法

試料は調査区 04B 区から 2 点 (No.1、2)、05A 区から 6 点 (No.5、6、66～69)、05Ea 区から 3 点 (No.12～14)、05Eb 区から 3 点 (No.16～18)、06Cb 区から 1 点 (No.21)、06D 区から 19 点 (No.26～29、33～40、42～44、46～49)、06Eb 区から 2 点 (No.50、51)、07E 区から 1 点 (No.52) の合計 38 点である。なお、同一試料内に複数の樹種が確認された場合、試料番号の後ろに補助番号を設けた。

方法は、剃刀を用いて試料の 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラルで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行なった。

C. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亜属、ツガ属、スギ、ヒノキ、アスナロの 5 分類群、広葉樹はブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節と呼ぶ）、モクレン属、アカメガシワ、モチノキ属の 6 分類群が確認され、不明樹皮 1 分類群と併せて合計 12 分類群が確認された。全体ではヒノキが最も多く 13 点、次にマツ属複維管束亜属が 9 点、スギが 6 点、クヌギ節が 2 点検出され、その他の樹種は各々 1 点ずつの検出であった。遺構別に樹種をまとめたものを表 4-6 に、結果一覧を表 4-7 に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

a. マツ属複維管束亜属 *Pinus Subgen. Diploxylon* マツ科 図 4-6 1a-1c(No.67)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側へ向かって鋸歯状の突起がみられる。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。

表 4-6 調査区別の樹種同定結果のまとめ

樹種/調査区	04B	05A	05Ea	05Eb	06Cb	06D	06Eb	07E	合計
マツ属複維管束亜属		6				3			9
ツガ属	1								1
スギ			3			3			6
ヒノキ	1			3		7	1	1	13
アスナロ						1			1
ブナ属						1			1
アカガシ亜属						1			1
クヌギ節							2		2
モクレン属						1			1
アカメガシワ					1				1
モチノキ属						1			1
樹皮						1			1
合計	2	6	3	3	1	19	3	1	38

材は油気が多く、韌性は大である。

b. ツガ属 *Tsuga* マツ科 図 4-6 2a-2c(No.2)

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。放射組織の上下に放射仮道管があり、有縁壁孔によって確認することができる。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で1分野に2～4個存在する。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコメツガがある。材はやや強い程度で耐朽・保存性は中庸、割裂・乾燥は容易である。

c. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図 4-6 3a-3c(No.13)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する。材は比較的軽軟で切削加工は容易、保存性は中庸で、割裂性は大きい。

d. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図 4-7 4a-4c(No.17)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く狂いが少ない。

e. アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図 4-7 5a-5c(No.39)

仮道管、樹脂細胞、放射組織からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、樹脂細胞が豊富である。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は加工性・割裂性は中庸だが、耐朽・保存性が高い。

f. ブナ属 *Fagus* ブナ科 図 4-7 6a-6c(No.42)

やや小型の道管が密に散在し、晩材部では徐々に径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬・緻密・韌性があるが保存性は低い。

g. コナラ属 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図 4-8 7a-7c(No.46)

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管の穿孔は単一で、放射組織は同性で単列ものものと広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、イチイガシ、アカガシ、ハナカガシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。材はきわめて堅硬・強靱で弾性があり、水湿に強い。

h. コナラ属 クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図 4-8 8a-8c(No.51-2)

年輪界はじめに大型の道管が並ぶ環孔材で、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する。道管の穿孔は単一で、軸方向柔組織は周囲状およびいびつな線状となる。放射組織は単列同性のものと広放射組織とが存在する。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギ・アベマキがある。材は全体的に重硬である。

i. モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図 4-8 9a-9c (No.34)

やや小型の道管が単独もしくは3～4個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁

は薄く、道管相互壁孔は対列～階段状となる。道管の穿孔は単一でやや縦に長い。放射組織は1～2細胞幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞を有する異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木・高木で、タイサンボク、ホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度、緻密で狂いが少なく加工が容易である。

j. アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg. トウダイグサ科 図 4-9 10a-10c(No.21)

やや厚壁で丸い道管が晩材部に向けて徐々に径を減じ、晩材部では小道管が放射方向に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は線状ないし短接線状となる。道管の穿孔は単一で、道管放射組織間の壁孔は円形である。放射組織はほぼ単列の異性である。

アカメガシワは宮城県・秋田県以西の温帯から暖帯に分布する落葉高木で、日当たりのよい二次林にふつうに生育する。材は軽軟で耐久性が低い。

k. モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図 4-9 11a-11c(No.29)

小型の道管が放射方向に数個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は横棒の多い階段状で、道管要素にはらせん肥厚が明瞭である。道管相互壁孔は対列～階段状、放射組織は多列でほぼ同性である。

モチノキ属は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。日本には23種があるが、大きく常緑性のモチノキ亜属と落葉性のウメドキシ亜属に分けられる。

l. 樹皮 Bark 図 4-9 12a(No.33)

師細胞および師部放射組織からなる二次細胞および周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

D. まとめ

調査区別に見ると、04B区ではヒノキとツガ属が1点ずつ確認された。05A区の木製品はすべて点灯具であったが、これらはすべてマツ属複雑管束亜属であった。マツ属は樹脂が豊富に含まれており、油分が豊富なため点灯具として多用される。05Ea区の井戸内出土材はスギ、05Eb区出土の曲物はヒノキであった。06Cb区はアカメガシワが1点確認された。06D区はヒノキを中心とする針葉樹が多いものの、漆器にブナ属が用いられている他、モチノキ属やモクレン属、アカガシ亜属などの広葉樹もみられる。06Eb区はヒノキとクヌギ節、07E区ではヒノキが検出された。

本遺跡の近隣に位置する伝法寺本郷遺跡では古代の流路から出土した自然木を調査した結果、ヒノキ、ツガ属、コナラ節、カバノキ属が多く、同じく近隣に位置する中之郷北遺跡では古代の旧河道出土材調査の結果、杭材はヤナギ属やフジキを中心とした落葉広葉樹、材はヒノキを中心とした針葉樹が検出された。ヤナギ属やフジキ、コナラ節などの材は遺跡周辺に生育していたものと思われるが、ヒノキやツガ属、カバノキ属などは周囲の丘陵などから集積されたものと考えられている(植田 2006a・2006b)。本遺跡周辺は標高10 m前後の沖積低地であることから、検出されたヒノキやツガ属などはやはり周辺からもたらされたものと思われる。一方、アカガシ亜属やモチノキ属などを含む照葉樹林は暖温帯に属している遺跡周辺の自然植生と一致すると言えるが、マツ属複雑管束亜属、クヌギ節、アカメガシワなどの二次林要素の強い樹種も検出されていることから、周辺植生は二次林化が進んでいたと推測される。

引用文献

植田弥生 2006a 「伝法寺本郷遺跡 A 区 NR01 出土自然木の樹種同定」『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』

pp.94-99、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

植田弥生 2006b 「中之郷北遺跡出土木材・杭材の樹種同定」『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』

pp.252-262、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

表 4-7 樹種同定結果一覧

写真番号	調査区	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り
1	04B	X A1k	SK092	-	ヒノキ	破片状（炭化）
2	04B	X A2m	SK020	-	ツガ属	板目
5	05A	X J1b	SD2002 上層	点灯具	マツ属複維管束亜属	割材
6	05A	X J1c	SD2002 上層	点灯具	マツ属複維管束亜属	割材
12	05Ea	-	SE2001	井戸枠	スギ	板目
13	05Ea	-	SE2001	杭	スギ	角材
14	05Ea	-	SE2001	杭	スギ	角材
16	05Eb	X B4o	SE2001	曲物（上）	ヒノキ	板目
17	05Eb	X B4o	SE2001	曲物（下）	ヒノキ	板目
18	05Eb	X B4o	SE2001	曲物（下）	ヒノキ	板目
21	06Cb	X C4b	重機深掘り	-	アカメガシワ	丸木
26	06D	IX I19p	SD3011	-	マツ属複維管束亜属	割材
27	06D	IX I201	SD3017	-	ヒノキ	割材
28	06D	IX I19p	SD3018	-	スギ	削出
29	06D	IX I20p	SD3019	-	モチノキ属	削出
33	06D	IX I19q	SD3004	-	樹皮	不明
34	06D	IX I19k	ST1007 下層	-	モクレン属	割材
35	06D	IX J20o	ST4002	-	スギ	割材
36	06D	IX I20m	ST4020	-	スギ	割材
37	06D	IX I20k	ST4046	-	マツ属複維管束亜属	割材
38	06D	IX I20o	ST5007	-	ヒノキ	丸木
39	06D	IX I19o	ST5012	-	アスナロ	丸木
40	06D	IX I20n	ST5014	-	ヒノキ	割材
42	06D	IX I20n	NR6001	漆器	ブナ属	横木取り
43	06D	IX I19o・p	検4	-	ヒノキ	破片状
44	06D	IX I19p	検4（アゼ）	-	ヒノキ	柾目
46	06D	IX I19o	検5（アゼ）	-	アカガシ亜属	割材
47	06D	IX I20a	検5	-	マツ属複維管束亜属	割材
48	06D	IX I20p	検5	-	ヒノキ	割材
49	06D	IX J19o	検6（アゼ）	-	ヒノキ	割材
50	06Eb	X B6k	SE1001 抜き取り層	-	クスギ節	丸木
51-1	06Eb	X B6k	SE1001 枠内	井戸枠	ヒノキ	板目
51-2					クスギ節	丸木
52	07E	9H16k	115SK Dot. 1111	-	ヒノキ	板目
66	05A	IX J19c	SD2001 下層	点灯具	マツ属複維管束亜属	割材
67	05A	IX J19c	SD2001 下層	点灯具	マツ属複維管束亜属	割材
68	05A	IX J19d	SD2001 下層	点灯具	マツ属複維管束亜属	割材
69	05A	IX J19d	SD2001 下層	点灯具	マツ属複維管束亜属	割材

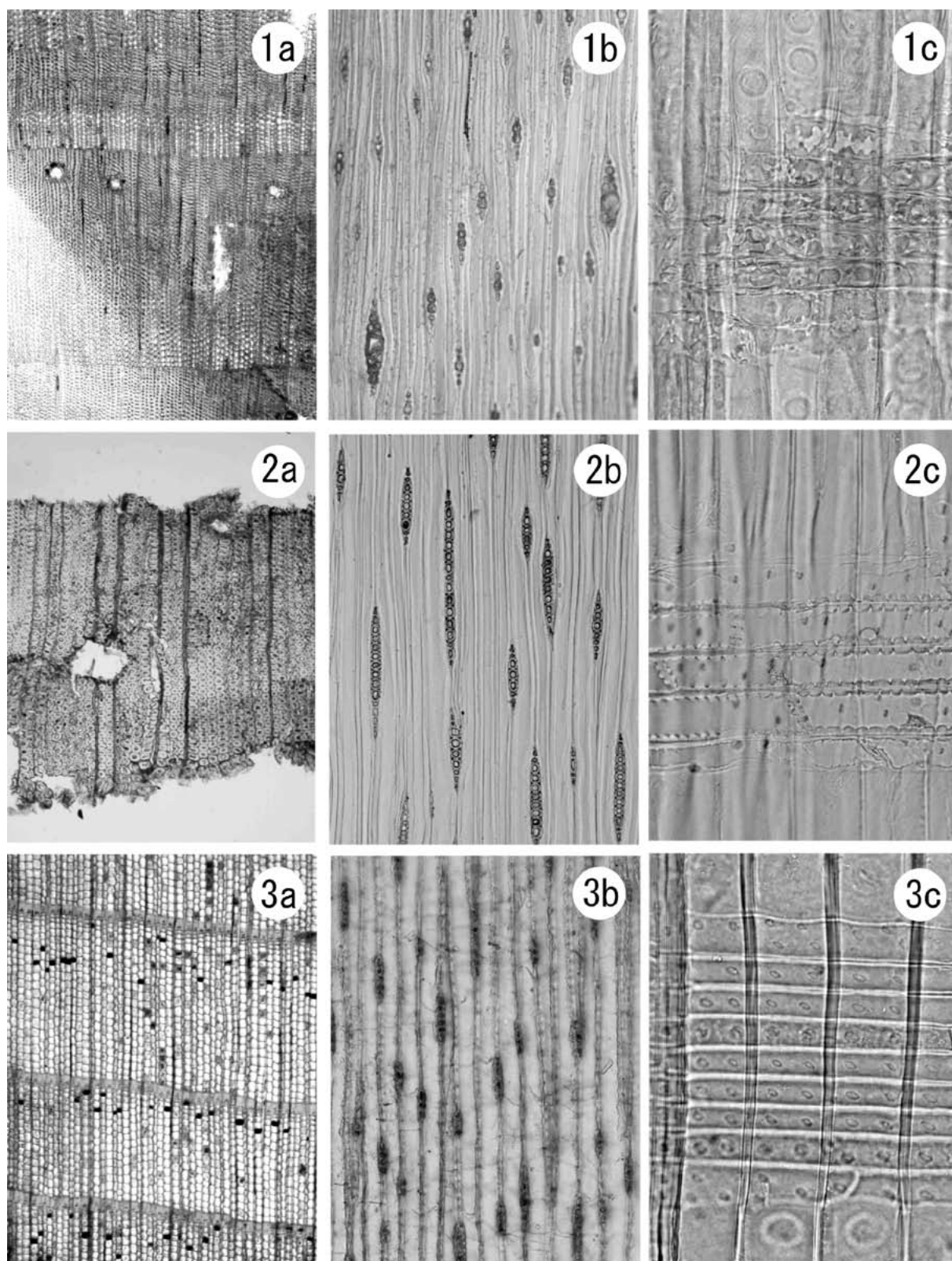


図 4-6 御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (1)

1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 67)、2a-2c. ツガ属 (No. 2)、3a-3c. スギ (No. 13)

a: 横断面 (スケール = 500 μ m)、b: 接線断面 (スケール = 200 μ m)、c: 放射断面 (スケール = 50 μ m)

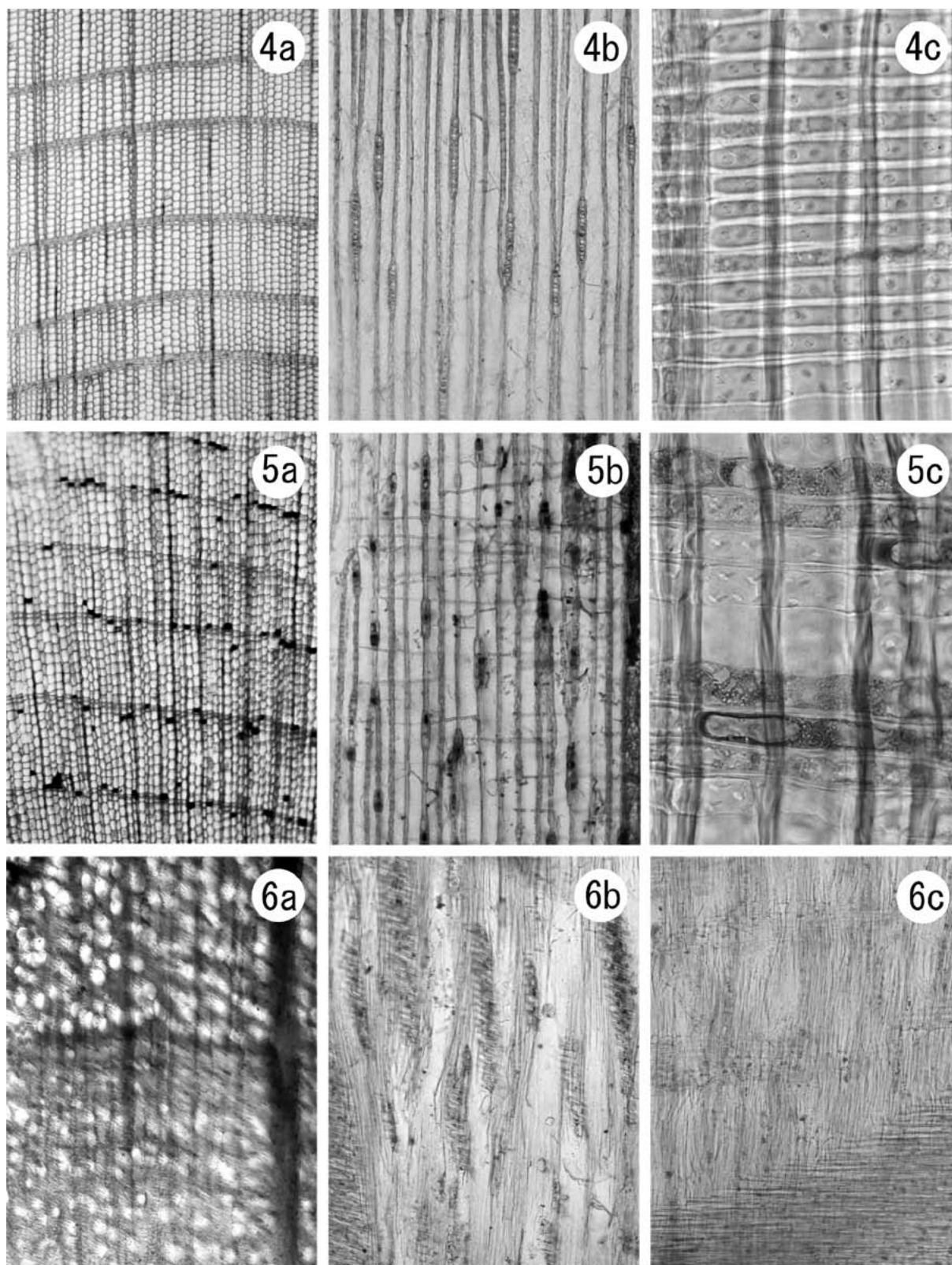


図 4-7 御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (2)

4a-4c. ヒノキ (No. 17)、5a-5c. アスナロ (No. 39)、6a-6c. プナ属 (No. 42)

a: 横断面 (スケール = 500 μ m)、b: 接線断面 (スケール = 200 μ m)、c: 放射断面 (スケール = 4c-5c: 50 μ m、6c: 200 μ m)

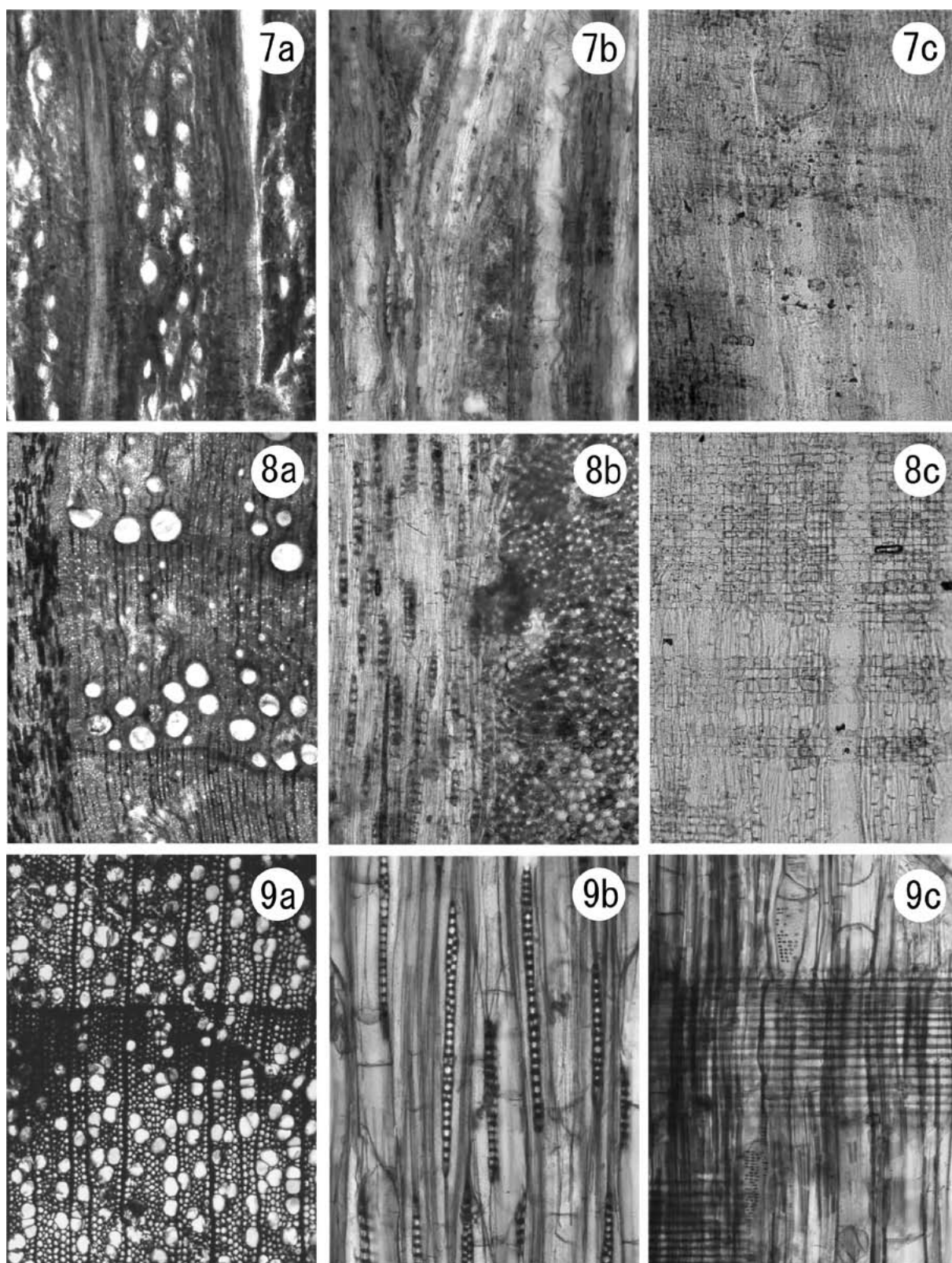


図 4-8 御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (3)

7a-7c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 46)、8a-8c. コナラ属クヌギ節 (No. 51-2)、9a-9c. モクレン属 (No. 34)

a: 横断面 (スケール = 500 μ m)、b: 接線断面 (スケール = 200 μ m)、c: 放射断面 (スケール = 200 μ m)

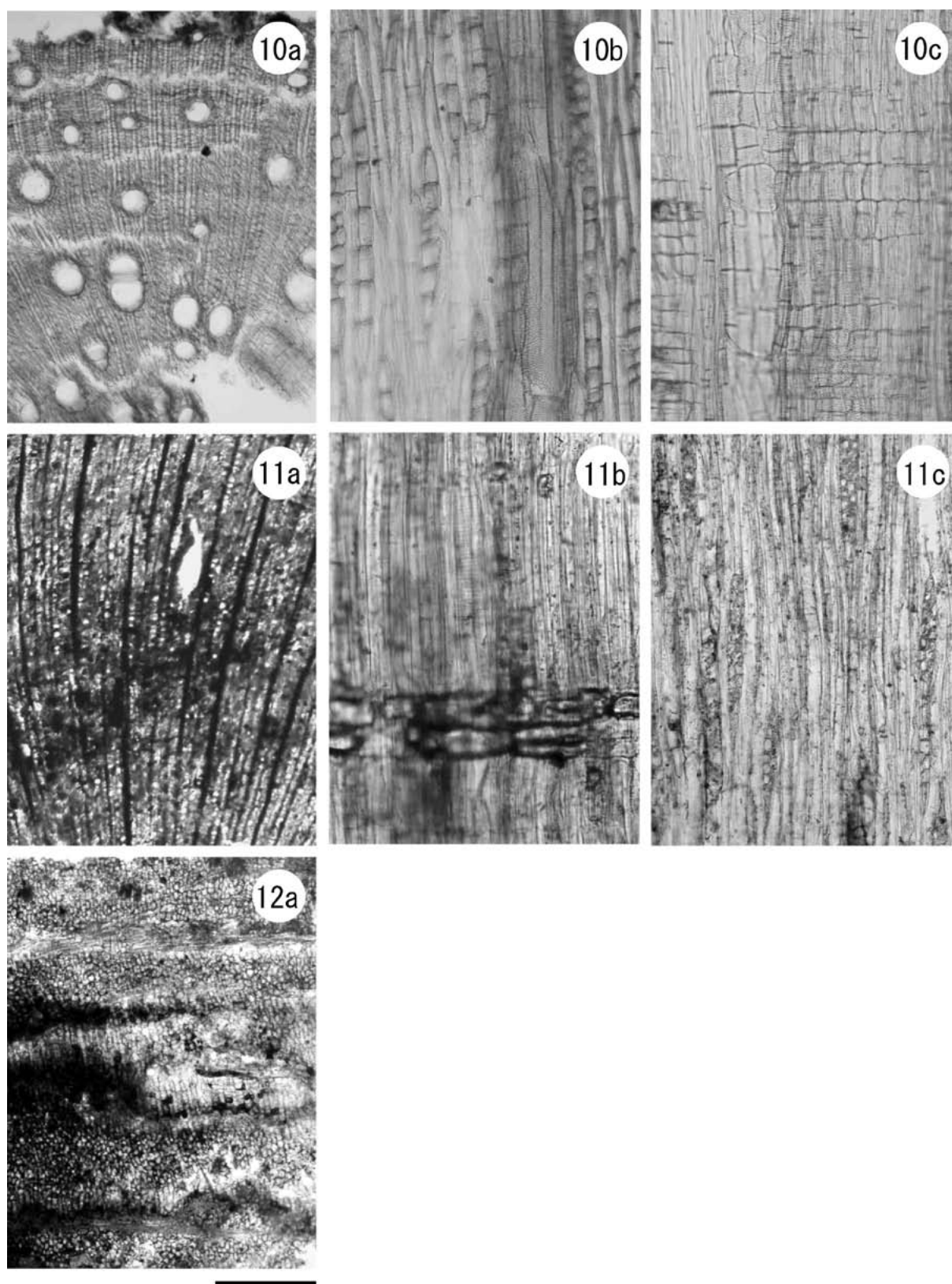


図 4-9 御山寺遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (4)

10a-10c. アカメガシワ (No. 21)、11a-11c. モチノキ属 (No. 29)、12a. 樹皮 (No. 33)

a: 横断面 (スケール = 500 μ m)、b: 接線断面 (スケール = 200 μ m)、c: 放射断面 (スケール = 10c:200 μ m、11c:100 μ m)

(5) 御山寺遺跡出土骨の自然科学分析

金井 慎司 (パリノ・サーヴェイ)

はじめに

御山寺遺跡(愛知県岩倉市中野町に所在)は、犬山扇状地から沖積平野の移行する箇所にあたり、旧五条川が東に強く屈曲する部分の北東に位置し、古墳時代以降の遺構が確認されている。今回、調査区内で検出された火葬施設や溝跡などから出土した骨について、その種類を明らかにした。

A. 試料

試料は、04A区、05A区、05B区、05C区、05E区、05Eb区、06D区、07E区の遺構内や包含層から出土した骨 32 試料(No.1～32)である。大半は 1 試料につき 1 点の骨片であるが、中には複数点の骨がみられる場合もある。また、No.1～31 はクリーニングが終了して骨単独の状態となっており、No.32 は土壌の中に骨片が混じる状態である。なお、試料の詳細については結果とともに表示する。

B. 分析方法

骨に土壌が付着している場合は、竹串・ブラシ、水に浸した筆で除去する。また、No.32 については土壌内に骨片がみられるため、0.5mm の篩で水洗する。自然乾燥後、一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。

試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、部位の名称については、ウマを例として下図に示す。

C. 結果および考察

同定された種類(分類群)は、ヒト、ウマ、ニホンジカの 3 種類である(表 4-8)。No.1、2、6～10、18、28、32 を除く骨は、白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じおり、焼骨である。大半は小さな破片で、種類・部位を特定できない骨が多い(表 4-9)。

ヒトは、No.7、13 で確認される。No.7 は、歯牙が 2 点みられる。1 点は破片のため部位を明らかにできない。残り 1 点は

右下顎第 1/2 大白歯の歯冠部である。咬頭が僅かに磨耗する程度で、年齢的に若いと判断される。焼骨でないことから土葬人骨と考えられる。No.13 は、頭蓋骨の破片で、後頭骨ないし側頭骨の一部の可能性がある。火葬された人骨である。なお、馬場ほか(1986)によると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされて

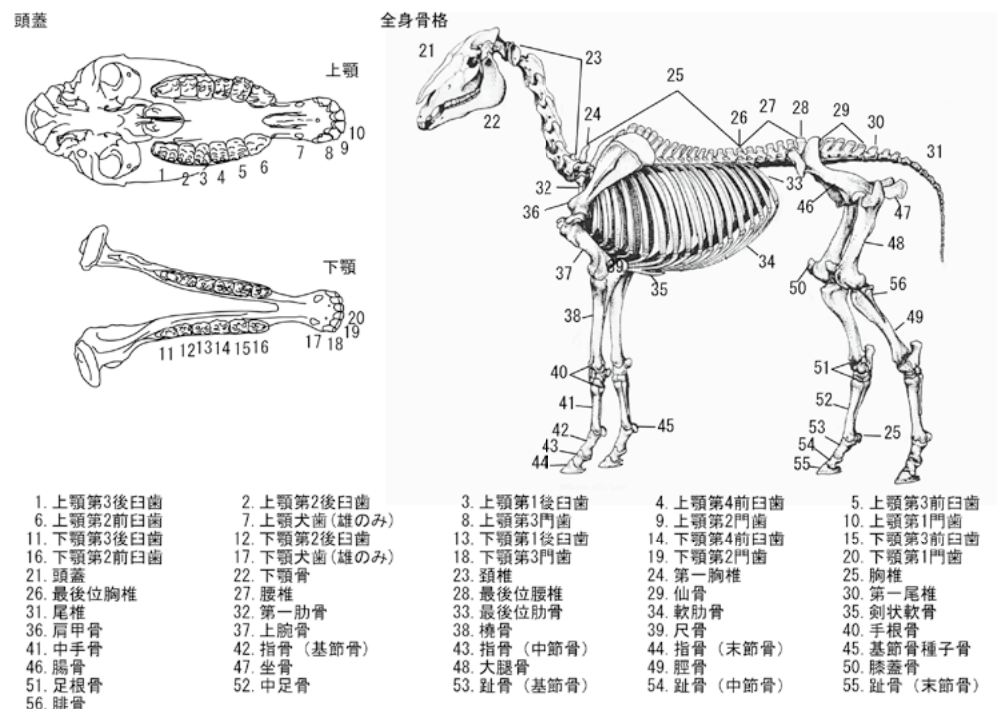


図 4-10 ウマの骨格(全身骨格は、加藤・山内 2003 に加筆)

表 4-8 抽出分類群一覧

脊椎動物門	Phylum	Vertebrata
哺乳綱	Class	Mammalia
サル目(霊長目)	Order	Primates
ヒト科	Family	Hominidae
ヒト		<i>Homo sapiens</i>
ウマ目(奇蹄目)	Order	Perissodactyla
ウマ科	Family	Equidae
ウマ		<i>Equus caballus</i>
ウシ目(偶蹄目)	Order	Artiodactyla
シカ科	Family	Cervidae
ニホンジカ		<i>Cervus nippon</i>

いる。これより、本人骨は 800℃以上で火葬されたとみられる。

ウマは、No.1、2、6、18、28 で確認される。いずれも焼けていない。このうち、No.1 が形状を比較的保った状態である。左上顎第 1 ～ 3 後臼歯、左下顎第 3 前臼歯～第 2 後臼歯、および下顎骨がみられる。臼歯高は、下顎第 4 前臼歯が 26.7mm、下顎第 1 後臼歯が 28.9mm を計る。西中川ほか (1991) に基づくと、14 歳程度の高齢なウマと推定される。

ニホンジカは、No.21 で確認される。焼けており、小さな破片である。中手骨・中足骨の溝が確認された。周辺で狩猟されたものが、食料資源などとして利用された後に骨となった状態で、焼却・廃棄されたと考えられる。

これら以外の焼骨は、頭蓋骨、歯牙、肋骨、四肢骨、肋骨 / 四肢骨などが確認されたが、破片で特徴的な部分がみられず、種類を明らかにするまでにはいたらない。

引用文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986『根古屋遺跡出土の人骨・動物骨・霊山根古屋遺跡の研究 一福島県霊山町根古屋における再埋葬群一』福島県霊山町教育委員会、pp.93-113

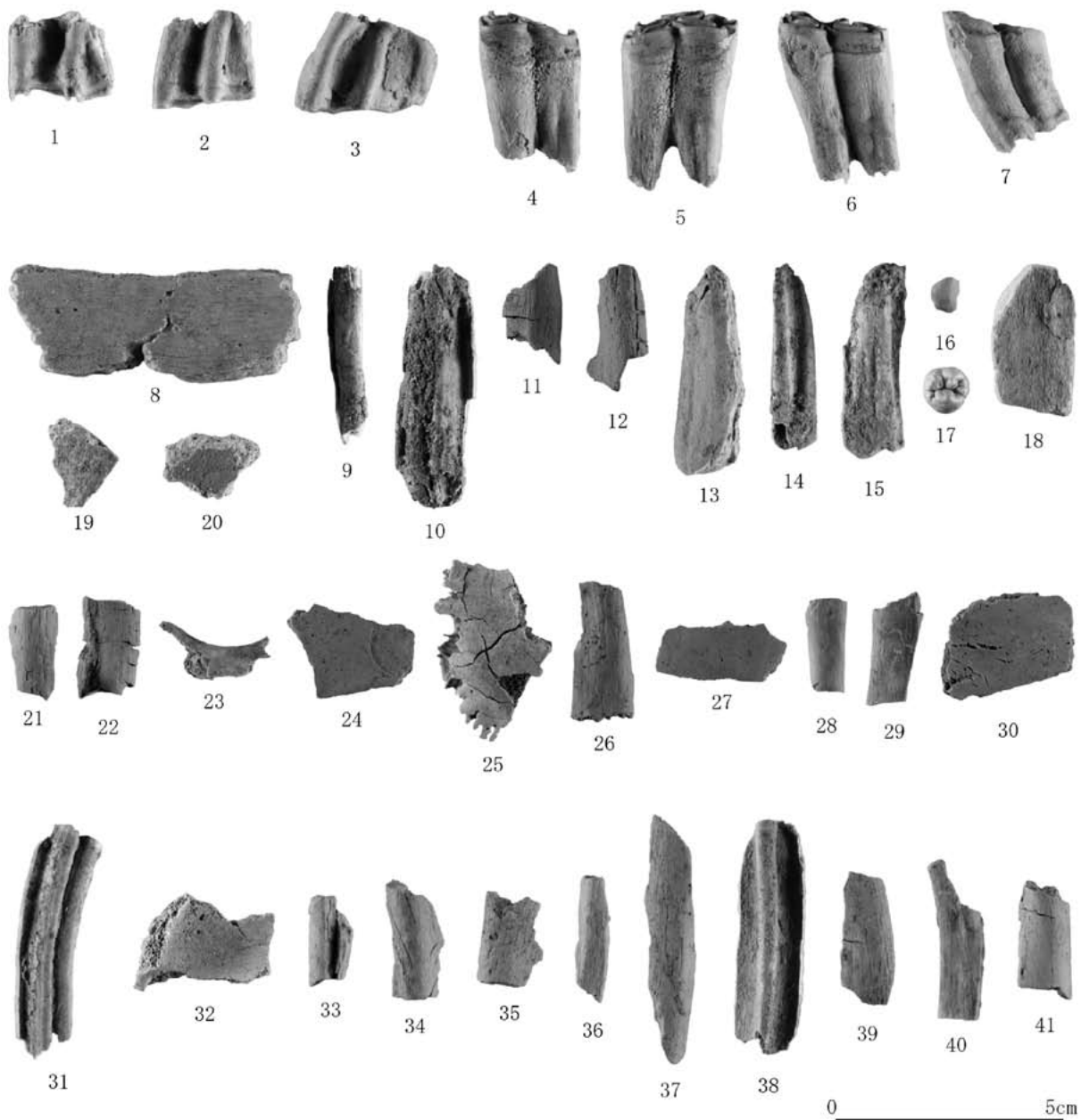
加藤嘉太郎・山内昭二 2003『新編 家畜比較解剖図説 上巻』養賢堂、p315

表 4-9 骨同定結果

No.	調査区	グリッド	遺構／採取地点	種類		部位	部分	数量	備考
1	04A	XJ3o	SD001 礫層	哺乳綱	ウマ	下顎骨	破片	1	
						顎骨	破片	3	
						上顎第1後臼歯(左)	破損	1	
						上顎第2後臼歯(左)	破損	1	
						上顎第3後臼歯(左)	破損	1	
						下顎第3前臼歯(左)	破損	1	
						下顎第4前臼歯(左)	破損	1	臼歯高26.7mm
						下顎第1後臼歯(左)	破損	1	臼歯高28.9mm
						下顎第2後臼歯(左)	破損	1	
						歯牙	破片	22 +	
2	04A	XJ3q	トレンチ	哺乳綱	ウマ	歯牙	破片	8 +	
3	05A	XJ1b	SD2002 上層	哺乳綱	哺乳類	四肢骨	破片	2	焼骨
4	05A	XJ2c	検出II	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	1	焼骨
5	05A	IXJ18g	SK2007	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	1	焼骨
6	05A	IXJ20f	検出II	哺乳綱	ウマ	歯牙	破片	7 +	
7	05B	XJ1j	SK1115(墓)	哺乳綱	ヒト	下顎第1/2大臼歯(右)	歯冠部	1	
						歯牙	破片	1	
8	05B	XJ2j	検I	哺乳綱	哺乳類	四肢骨	破片	7	
9	05B	XJ2m	SK1098	哺乳綱	哺乳類	頭蓋	破片	7 +	
10	05B	IXJ19k	トレンチA	哺乳綱	哺乳類	肋骨/四肢骨	破片	3	焼骨
11	05B	IXJ19j	SK1121(火葬施設)	哺乳綱	哺乳類	肋骨	破片	1	焼骨
						不明	破片		焼骨
12	05B	IXJ19i	検I	哺乳綱	哺乳類	頭蓋	破片	1	焼骨
13	05B	IXJ20j	検I	哺乳綱	ヒト	頭蓋	破片	1	焼骨
14	05B	IXJ20k	SK1037(火葬施設)	哺乳綱	哺乳類	肋骨/四肢骨	破片	1	焼骨
15	05B	IXJ20k	SK1045	哺乳綱	哺乳類	頭蓋	破片	5	焼骨
						肋骨/四肢骨	破片	3	焼骨
16	05B	IXJ20k	検I	哺乳綱	哺乳類	頭蓋	破片	1	焼骨
17	05B	IXJ20i	検I	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	4	焼骨
18	05C	XA3t	SD001 上層	哺乳綱	ウマ	歯牙	破片	17 +	
19	05C	XA3t	検I	哺乳綱	哺乳類	頭蓋?	破片	3 +	焼骨
20	05C	XB3a	SD001 上層	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	1	焼骨
21	05C	XB3a	SD001 中層	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨/中足骨	破片	1	焼骨
22	05C	XB3b	SD001 上層	哺乳綱	哺乳類	四肢骨	破片	1	焼骨
23	05C	XB3c	検Iー3	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	1	焼骨
24	05C	XB4a	検I	哺乳綱	哺乳類	四肢骨	破片	1	焼骨
						肋骨/四肢骨	破片	1	焼骨
25	05E	XB5h	SD2002 下層	哺乳綱	哺乳類	肋骨/四肢骨	破片	1	焼骨
						不明	破片	2	焼骨
26	05E	XB5k	検II	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	1	焼骨
27	05E	XB5m	SD1006	哺乳綱	哺乳類	不明	破片	1	焼骨
28	05Eb	XB4q	SD1004 上層	哺乳綱	ウマ	上顎歯牙	破片	10 +	
29	05Eb	XB4q	SD1006	哺乳綱	哺乳類	肋骨/四肢骨	破片	1	焼骨
30	06D	IXI19k	SK1001	哺乳綱	哺乳類	肋骨	破片	1	焼骨
31	06D	IXI20q	SD3009	哺乳綱	哺乳類	四肢骨	破片	1	焼骨
32	07E	9H16k	115SK	哺乳綱	哺乳類	歯牙	破片	91 +	

西中川駿・本田道輝・松元光春 1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成 2 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B) 研究成果報告書、p99

図4-11 出土骨



1. ウマ左上顎第1後臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
2. ウマ左上顎第2後臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
3. ウマ左上顎第3後臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
4. ウマ左下顎第3前臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
5. ウマ左下顎第4前臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
6. ウマ左下顎第1後臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
7. ウマ左下顎第2後臼歯 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
8. ウマ下顎骨 (No. 1:04AXJ3oSD001 礫層)
9. ウマ歯牙 (No. 2:04AXJ3qトレンチ)
10. ウマ歯牙 (No. 2:04AXJ3qトレンチ)
11. 哺乳類四肢骨 (No. 3:05AXJ1bSD2002 上層)
12. 哺乳類四肢骨 (No. 3:05AXJ1bSD2002 上層)
13. ウマ歯牙 (No. 6:05AIXJ20f検出II)
14. ウマ歯牙 (No. 6:05AIXJ20f検出II)
15. ウマ歯牙 (No. 6:05AIXJ20f検出II)
16. ヒト歯牙 (No. 7:05BXJ1jSK1115 (墓))
17. ヒト右下顎第1/2大臼歯 (No. 7:05BXJ1jSK1115 (墓))
18. 哺乳類四肢骨 (No. 8:05BXJ2j検I)
19. 哺乳類頭蓋 (No. 9:05BXJ2mSK1098)
20. 哺乳類頭蓋 (No. 9:05BXJ2mSK1098)
21. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 10:05BIXJ19kトレンチA)
22. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 10:05BIXJ19kトレンチA)
23. 哺乳類肋骨 (No. 11:05BIXJ19jSK1121 (火葬施設))
24. 哺乳類頭蓋 (No. 12:05BIXJ19i検I)
25. ヒト頭蓋 (No. 13:05BIXJ20j検I)
26. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 14:05BIXJ20kSK1037 (火葬施設))
27. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 15:05BIXJ20kSK1045)
28. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 15:05BIXJ20kSK1045)
29. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 15:05BIXJ20kSK1045)
30. 哺乳類頭蓋 (No. 16:05BIXJ20k検I)
31. ウマ歯牙 (No. 18:05CX A3tSD001 上層)
32. 哺乳類頭蓋? (No. 19:05CX A3t検I)
33. ニホンジカ中手骨/中足骨 (No. 21:05CX B3aSD001 中層)
34. 哺乳類四肢骨 (No. 22:05CX B3bSD001 上層)
35. 哺乳類四肢骨 (No. 24:05CX B4a検I)
36. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 24:05CX B4a検I)
37. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 25:05EX B5hSD2002 下層)
38. ウマ上顎歯牙 (No. 28:05Eb X B4qSD1004 上層)
39. 哺乳類肋骨/四肢骨 (No. 29:05Eb X B4qSD1006)
40. 哺乳類肋骨 (No. 30:06DIXJ19kSK1001)
41. 哺乳類四肢骨 (No. 31:06DIXJ20qSD3009)

(6) 御山寺出土人骨について

山田博之*・堀木真美子

* 元愛知学院大学歯学部解剖学教室講師

05B 区より出土した人骨について、残存部分の記載を行う。保存状態が悪く、歯以外の部位は同定できる遺物が少なかった。そこで歯の観察と歯冠近遠心径 (MD) と歯冠頬舌径 (BL) の計測を実施した。なお、大白歯の形態分類においては、上顎は Dahlberg(1956)、下顎は Hellman(1928) の分類基準に準じた。

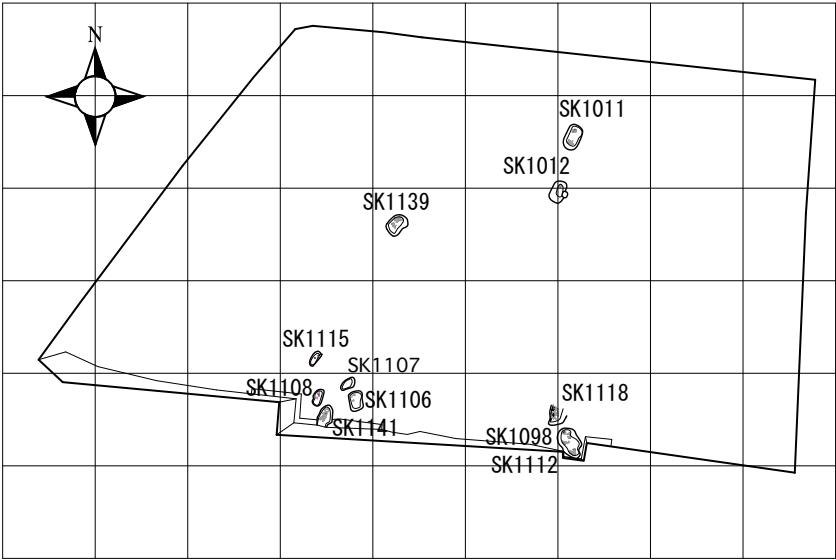


図 4-12 05B 区 人骨出土位置図

SK1011

○検出状況

検出時の状況から、頭位は北東を示す。また歯列の出土状況から、顔面は西を向いていたと考えられる。人骨以外の出土物は確認されていない。

○残存状況と部位

骨の保存状態は不良である。残存部位は、左大腿骨近位端の一部、長骨片、頭蓋骨片、右下顎骨、上顎前部、28 本の歯。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	(M ¹)	(M ²)	(M ³)
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂		

左上顎の第 2 小白歯と
左下顎第 1～3 大白歯は
確認されていない。上顎
歯の咬耗はエナメル質ま
でのものが多く、下顎
では象牙質に達するも
のが多い。上顎左側の
中切歯はシャベル型切

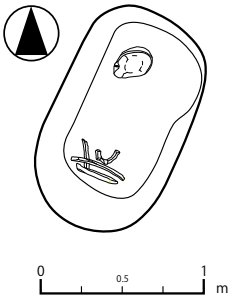


図 4-13 SK1011 出土状況

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ¹				
	I ²	7.20	6.29	Enamel	切痕
	C	8.50	8.51	Dentin	男性か? 20~25 才
	P ¹	7.00	9.28	Enamel	
	P ²	6.40	9.03	Enamel	
	M ¹	10.28	11.02	Dentin	4
	M ²	9.97	11.24	Enamel	4
上顎左	M ³	8.10	10.40	Enamel	3
	I ¹	8.71	7.38	Enamel	shovel(c)
	I ²	7.28	6.17	Enamel	斜切痕
	C	7.30	8.25	Enamel	
	P ¹	7.48	9.43	Dentin	
	I ₁	5.61		Dentin (線状)	
	I ₂	5.90		Enamel	
下顎右	C	7.08	7.47	Dentin	
	P ₁	6.90	7.56	Enamel	
	P ₂	6.96	8.02	Enamel	
	M ₁	11.58	10.7	Dentin	Y ₅
	M ₂	11.29	9.73	Dentin	Y ₅
	M ₃	9.97	9.37	Enamel	X ₅
	I ₁				
下顎左	I ₂	6.05	6.44	Dentin (線状)	
	C	6.71	7.33	Dentin	
	P ₁	6.92	7.3	Dentin	
	P ₂	7.17	8.04	Enamel	

(単位: mm)

表 4-10 SK1011 出土人骨 計測値及び観察結果

歯 (Shovel(c)) である。上顎右側の側切歯に切痕、上顎左側の側切歯に斜切痕が見られた。上顎大白歯の遠心舌側咬頭の退化は上顎右第 1・第 2 大白歯が "4"、第 3 大白歯が "3" であった。下顎大白歯の溝型と咬頭数は、下顎左側の第 1・第 2 大白歯が Y₅、第 3 大白歯が X₅ であった。

○特記事項

これら各歯の咬耗の程度や上顎右側の犬歯の形状から、20～25 才位の男性と推測される。また左上顎第 1 大白歯を用いた ¹⁴C 年代測定結果では、AD1440-AD1480(1 σ) 年という値が得られている (パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ, 2011)。

SK1012

○検出状況

北東-南西にのびる楕円の土壌において、頭部のみが出土した。頭部は土壌の北側で検出されている。

○残存状況と部位

保存状態は不良である。残存部位は以下の通りである。左側頭骨下部、右側頭骨下部、後頭骨の一部、右鎖骨、右上顎の一部、下顎 (左下顎枝を欠く)、歯 22 本。

M ²	M ¹	m ²	P ¹	C	I ²				C	P ¹	P ²	M ¹
M ₁	m ₂	m ₁	c	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	m ₁	m ₂	M ₁	

上顎では、右側の側切歯、犬歯、第 1 小臼歯、第 2 乳臼歯、第 1・第 2 大白歯、左側の犬歯から第 1 大白歯までが確認された。下顎では右側の中切歯、側切歯、乳犬歯、第 1・第 2 乳臼歯、第 1 大白歯、左側の中切歯から犬歯、第 1・第 2 乳臼歯、第 1 大白歯が確認された。上顎右側の犬歯ではエナメル質減形成が確認され、舌側にのみエナメル質にとどまる咬耗がみられた。上顎右側の側切歯は、犬歯化および矮小化している。上顎左側の犬歯ではエナメル質減形成が、第 1 小臼歯では介在結節が見られた。上顎右側の第 2 大白歯は未萌出であった。上顎大白歯の遠心舌側咬頭の退化は、左右の第 1 大白歯が "4"。下顎大白歯の咬合面浮彫像は、左右の第 1 大白歯がともに Y₅。

○特記事項

歯列の状況と上顎左側の第 1 大白歯の咬耗から、8～10 才と推定される。上顎左側の犬歯の形状から男性と推測される。また、中切歯と側切歯の近遠心径 (MD) は、側切歯の方が大きくなるのが一般的であるが、この個体は、中切歯の方が大きな値を示した。

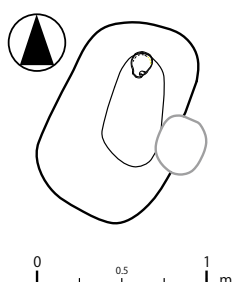


図 4-14 SK1012 出土状況

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ² ?	5.28		nothing	犬歯化、矮小化
	C	7.19	7.91	Enamel (舌側) 左右の違いが大	Enamel hypoplasia
	P ¹	7.09		nothing	
	m ²	8.79	9.73	Dentin	
	M ¹	9.74	10.80	Enamel	4
	M ²				未萌出
上顎左	C	7.87	7.98	nothing	Enamel hypoplasia, 男性か
	P ¹	7.22		nothing	介在結節
	P ²	6.94	9.26	nothing	
	M ¹	10.02	10.61	Enamel 4", 8~11 才	
下顎右	I ₁	4.71	5.29	Enamel	
	I ₂	4.69		Enamel	
	c	4.93		Dentin	乳犬歯
	m ₁	8.20	7.59	Dentin	
	m ₂	10.54	9.10	Dentin	
	M ₁	11.03	10.40	Enamel	Y ₅
下顎左	I ₁	4.77	5.36	Dentin (線状)	
	I ₂	4.69	5.73	Enamel	
	C				
	m ₁	8.15	7.19	Dentin	
	m ₂	10.62	8.66	Dentin	
	M ₁	11.02	10.54	Enamel	Y ₅

(単位: mm)

表 4-11 SK1012 出土人骨 計測値及び観察結果

SK1098

○検出状況

北西-南東にのびる楕円の土壌より出土。頭位は北西。顔面は歯列の出土状況から、南を向いていたと考えられる。なおこの土壌は、SK1112と切り合っていたが、基盤層が砂であったため、2つを区分しながらの調査は困難であった。そのため出土状態図では、一つの土壌内に2つのまとまりがあるように記されているが、南部に出土している人骨は、SK1112の出土である。

○残存状況と部位

保存状況は不良。後頭骨の一部、左右頭頂骨、左右側頭骨の一部、長骨片、右足根骨（舟状骨、不明骨片）。歯は5本が確認された。

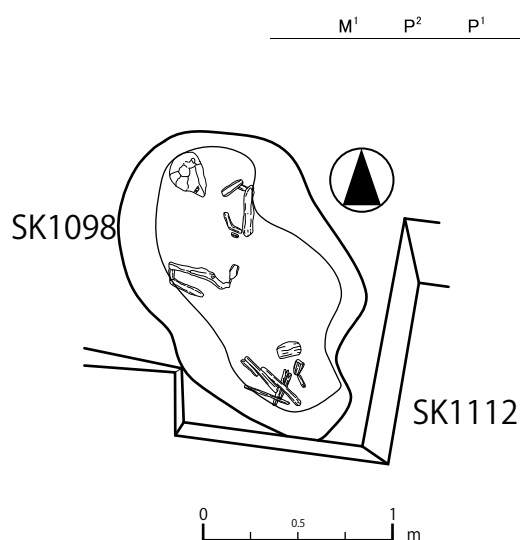


図 4-15 SK1098・SK1112 出土状況

M ¹	P ²	P ¹	C
			P ₁

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	P ¹	7.04	9.30	Dentin Buccal cusp	
	P ²			Enamel	
	M ¹				4 型
上顎左	C	8.06	8.72	Dentin 遠心切縁	
下顎左	P ₁	6.54	7.82	Enamel 頬側面に強い咬耗	

表 4-12 SK1098 出土人骨 計測値及び観察結果

上顎右側の第1小臼歯は頬側咬頭に象牙質までの、第2小臼歯はエナメル質までの咬耗が確認された。第1大臼歯の遠心舌側咬頭の退化は"4"。左側の犬歯は遠心切縁に象牙質に達する咬耗がある。下顎左側の第1小臼歯は頬側面に強い咬耗が見られた。

SK1112

○検出状況

SK1098に切られた土壌 SK1112。

○保存状況

検出作業においては、長骨を確認する事ができたが、保存状態が悪く、取り上げられなかった。

SK1106

○検出状況

北北西-南南東に軸をもつ長方形の土壌の中央西側から頭部が確認された。

○保存状況

検出作業においては、頭部を確認する事ができたが、保存状態が悪く、歯以外は取り上げられなかった。確認された歯は以下の20本。

	M ¹	m ²	P ¹	C	I ²		I ¹	C	P ¹	P ²
M ₂	M ₁	m ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₂	C	P ₁	
		P ₂								

上顎は、右側が側切歯、犬歯、第1小臼歯、第2乳臼歯、第1大臼歯、左側が中切歯、犬歯、第1・第2小臼歯。下顎は、右側が中切歯から第2小臼歯、第2乳臼歯、第1・2大臼歯、左側が側切歯、犬歯、第1小臼歯。咬耗が見られないものが多い。上顎右側の側切歯はシャベル型切歯（shovel(f)）、下顎右側の側切歯はシャベル型切歯（shovel(a)）。上顎左右の第1小臼歯

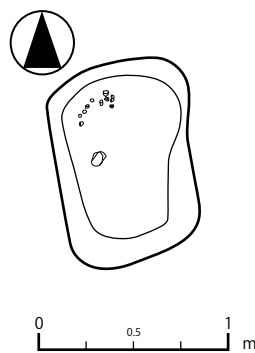


図 4-16 SK1106 出土状況
に介在結節が認められた(++)。上顎右側の第1大臼歯にカラベリー結節は認められない。

下顎では左右の犬歯が形成不全、右側の第2乳臼歯に屈曲隆線が見られた。上顎右側の第2乳臼歯の遠心舌側咬頭の退化は"4-"。下顎右側の第2小臼歯の溝型はH。下顎大臼歯の咬合面浮彫像は右側の第1大臼歯がY₅、第2大臼歯がX₅。

○特記事項

永久歯では切歯と上顎右側の第1大臼歯、左側の犬歯以外に咬耗が認められるものがない。また歯列の状況から10才から20才と推測される。

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ²	7.27		nothing	Shovel(f)
	C	8.00	8.00	nothing	
	P ¹	7.33	9.39	nothing	介在結節(++)
	m ²	9.05	10.07	Enamel	4-.3才以上
	M ¹	10.08	11.12	Enamel	カラベリーは認められない。
上顎左	I ¹	8.27		Enamel 切縁	
	C	7.86		Enamel 尖頭	
	P ¹	7.35	9.68	nothing	介在結節(++)
	P ²	6.42	8.78	nothing	
下顎右	I ₁	5.45		?	
	I ₂	6.17		Enamel 舌側	shovel(a)
	C	6.95		nothing	Enamel hypoplasia
	P ₁	7.15	7.45	nothing	
	P ₂	7.50	7.68	nothing	H型(溝)
	m ₂	10.32	8.93	Enamel	屈曲隆線(deflecting wrinkle)
	M ₁	11.08	10.25	nothing	Y ₅
	M ₂			nothing	X ₅
下顎左	I ₂	6.06		Enamel 舌側	
	C	7.01		nothing	Enamel hypoplasia
	P ₁	7.45	7.25	nothing	

(単位: mm)

表 4-13 SK1106 出土人骨 計測値及び観察結果

SK1107

○検出状況

北西-南東に軸線をもつ土壌。底部より人頭大の円礫が出土した。その円礫上に歯の破片が数点出土した。

○保存状況

歯は破片のみで、同定に至らなかった。ただし、人骨である。

SK1108

○検出状況

北東-南東に軸線をもつ土壌。北部に頭部を確認でき、土壌のほぼ中央部で長骨を確認した。

○保存状況

調査現場において、頭部や長骨を確認する事ができたが、取り上げる事が不可能であった。かろうじて歯を7点採取する事ができた。この確認された歯は、以下の7本である。

	M ¹	m ²			M ₁
	M ₁		I ₁		m ₁ M ₁

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	m ²				
	M ¹	11.61	12.47	nothing	4
上顎左	M ¹	11.47	12.48	nothing	4
下顎右	I ₁	5.84		nothing	切縁結節
	M ₁	12.51	12.10	nothing	Y ₅ 第6咬頭(+)
下顎左	m ₁	8.28		Enamel	
	M ₁	12.62	12.00	nothing	Y ₅

(単位: mm)

表 4-14 SK1108 出土人骨 計測値及び観察結果

図 4-17 SK1108 出土状況

上顎は、右側の第2乳臼歯、第1大臼歯、左側の第1大臼歯。下顎は右側の中切歯、第1大臼歯、左側の第1乳臼歯、第1大臼歯。これらのうち咬耗が認められるのは、下顎左側の第1乳臼歯のみで、エナメル質まで。上顎大臼歯の遠心舌側咬頭の退化は左右の第1大臼歯がともに"4"。下顎大臼歯の溝型と咬頭数は、左右の第1大臼歯がY₅であった。右側の第1大臼歯は第6咬頭(+)が確認された。

SK1115

○検出状況

北東-南西にのびる土壌である。人骨が出土したのは、中央部よりやや東に寄ったところである。

○保存状況

保存状況は、骨以外は非常に悪く、取り上げに耐えられなかった。歯は以下の22本が確認されている。

	m ²	m ¹	c	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	c	m ¹	m ²	M ¹
	M ₁	m ₂	C	I ₂	I ₁	I ₂	I ₂	C	c	m ₂	M ₁	

上顎は、右側の中切歯、側切歯、乳犬歯、第1・第2乳臼歯、左側の中切歯、側切歯、犬歯、乳犬歯、第1・第2乳臼歯、第1大臼歯。下顎は右側が中切歯、側切歯、犬歯、第2乳臼歯、第1大臼歯、左側が側切歯、犬歯、乳犬歯、第2乳臼歯、第1大臼歯。咬耗は10本の歯でエナメル質までのものが存在した。上顎右側の乳犬歯はエナメル質から象牙質にいたる咬耗が確認された。しかし9本の歯では咬耗が確認されなかった。下顎右側の乳臼歯では、唇側に傾斜した咬耗が見られた。上顎では左右の中切歯、右側の側切歯、左側の犬歯、下顎では右側の中切歯、左右の側切歯と犬歯にエナメル質減形成が見られた。上顎左右の中切歯は、シャベル型切歯(shovel(h))。上顎左側の犬歯は未萌出であり、エナメル質減形成が見られた(+）。上顎左右の第2乳臼歯の遠心舌側咬頭の形態は"4"、左側の第1大臼歯は"4"。下顎左右の犬歯は未萌出である。下顎左右の第2乳臼歯と第1大臼歯の溝型と咬頭数は、いずれもY₅。

○特記事項

年齢については、上顎左側の犬歯より10才くらい、上顎左側の第1大臼歯より7才前後かと推測される。下顎では右側の第1大臼歯から6才前後、左側の側切歯より7～8才頃と推測される。これらより、7～8才程度であろうか。

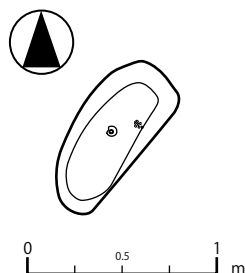


図4-18 SK1115 出土状況

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ¹	9.20		nothing	Enamel hypoplasia shovel(h)
	I ²	6.65		nothing	Enamel hypoplasia
	c	7.10		Enamel-Dentin	乳犬歯
	m ¹	7.86	9.22	Enamel	
	m ²	10.16	10.18	Enamel	4 - 型
上顎左	I ¹	9.37		nothing	Enamel hypoplasia shovel(h)
	I ²	7.28		nothing	Enamel hypoplasia
	C	8.31		nothing (未萌出)	Enamel hypoplasia(+) 10才位?
	c				乳犬歯
	m ¹	7.76	9.32	Enamel	
	m ²	10.21	10.16	Enamel	4 -
下顎右	M ¹	10.94	11.27	Enamel (一部)	4 7才前後?
	I ₁				
	I ₂	6.43		Enamel (舌側)	Enamel hypoplasia
	c	5.91		Enamel	乳犬歯 唇側傾斜
	C	7.45		nothing (未萌出)	Enamel hypoplasia(+)
	m ₂	10.80	9.26	Enamel	Y ₅
下顎左	M ₁	12.27	10.64	nothing	Y ₅ 6才前後
	I ₂	6.45	7.15	Enamel (舌側)	Enamel hypoplasia 7-8才頃か
	C	6.90		nothing (未萌出)	Enamel hypoplasia(+)
	m ₂	10.83	9.12	Enamel	Y ₅
	M ₁	12.13	10.43	nothing	Y ₅

(単位: mm)

表4-15 SK1115 出土人骨 計測値及び観察結果

SK1118

○検出状況

北東-南西にのびる土壌で北部を溝に切られている。この溝のすぐ南側で頭部が確認された。長骨が6本程確認できたが、調査時には部位の特定ができなかった。

○保存状況

保存状況は不良である。確認された部位は以下の通り。上顎骨の一部。右側頭骨の一部。左下顎枝、犬歯付近の下顎骨片。手指骨の一部2片と、手根骨7点。右大腿骨の骨体遠位部。歯が21本。

M ²	M ¹	P ²	P ¹		I ¹	I ¹	I ²		P ¹	P ²	M ¹	M ²
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C				C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂

上顎は右側の中切歯、第1小白歯から第2大臼歯、左側では中切歯、側切歯、第1小白歯から第2大臼歯。下顎は、右側の犬歯から第2大臼歯、左側は犬歯から第2大臼歯。上顎左側の第2大臼歯以外は象牙質までの咬耗が見られる。上顎左側の第2大臼歯はエナメル質まで咬耗がある。上顎右側の中切歯はシャベル型切歯 (shovel(f))、左側の中切歯もシャベル型切歯 (shovel(g))。上顎左側の側切歯では斜線痕が見られた。下顎の左右の犬歯に象牙質に達するダイヤモンド型の咬耗が見られる。左側の犬歯にエナメル質減形成が見られた。右側の犬歯は形成不全である。下顎左側の第1小白歯は虫歯。上顎大臼歯の遠心舌側咬頭の退化は、右側の第1大臼歯が"3+"、第2大臼歯が"3"、左側の第1大臼歯が"4"、第2大臼歯が"3"。下顎大臼歯の溝型と咬頭数は、右側の第1大臼歯がY₅、第2大臼歯はX₄、左側の第2大臼歯はX₅。下顎左側の第1大臼歯は咬耗が激しく、溝は不明であるが、5咬頭である。

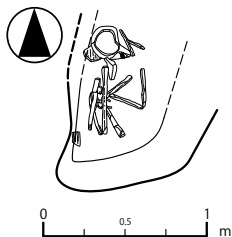


図 4-19 SK1118 出土状況

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ¹	7.25		Dentin	shovel(f)
	P ¹	6.48	8.64	Dentin	
	P ²	6.60	8.46	Dentin	
	M ¹	10.02	10.88	Dentin	3+
	M ²	9.96	11.08	Dentin	3
上顎左	I ¹	9.09		Dentin 線状	shovel(g)
	I ²	7.39	6.05	Dentin	斜切痕
	P ¹				
	P ²	6.84	8.43	Dentin	
	M ¹	10.06	10.91	Dentin	4
下顎右	M ²	10.21	11.15	Enamel	3
	C	6.97		Dentin ダイヤモンド形	Enamel hypoplasia
	P ₁	6.72	6.52	Dentin	
	P ₂	6.60	7.82	Dentin	
	M ₁	11.51	10.34	Dentin	Y ₅
下顎左	M ₂	11.38	10.08	Dentin	X ₄
	C	6.91		Dentin ダイヤモンド形	Enamel hypoplasia
	P ₁				虫歯
	P ₂			Dentin	
	M ₁	11.58	10.01	Dentin	5 咬頭 溝は Wear で不明
	M ₂	9.85	9.40	Dentin	X ₅

(単位: mm)

表 4-16 SK1118 出土人骨 計測値及び観察結果

SK1139

○検出状況

北東-南西の軸をもつ土壌より出土。頭は北に位置しており、調査時には長骨が9本程確認されたが、いずれも保存状態がわるく、取り上げることも部位の特定もできなかった。顔面は南の方角の下方を向く。

○保存状況

保存状態は不良で、長骨片と頭蓋骨のかけらと歯が32本確認された。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

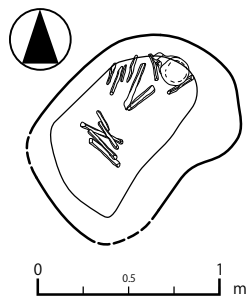


図 4-20 SK1139 出土状況

上顎が右側の中切歯から第3大臼歯、左側も中切歯から第3大臼歯。下顎は右側の中切歯から第3大臼歯、左側の中切歯から第3大臼歯。咬耗はエナメル質のことが多い。上顎右側の側切歯と左右の犬歯は、象牙質までの咬耗。上顎左右の第1・第2小臼歯はエナメル質まで、第1大臼歯は象牙質まで、第2大臼歯は

エナメル質までの咬耗が存在したが、左右の第3大臼歯には見られなかった。下顎では右側の中切歯と左側の側切歯に線状で象牙質に達する咬耗が存在した。左側の犬歯は象牙質に達するダイヤモンド形の咬耗が存在した。左右の第1・第2小臼歯と第2大臼歯はエナメル質まで、第1大臼歯は象牙質に達している咬耗が見られた。左右の第3大臼歯は上顎同様、咬耗は見られなかった。上顎左右の中切歯がともにシャベル型切歯(shovel(c))。上顎大臼歯の遠心舌側咬頭の退化は、右側の第1大臼歯と左側の第1から第3大臼歯までが"4"。右側の第2・第3大臼歯は"4"。下顎大臼歯の溝型と咬頭数は、右側の第1大臼歯でY₅、第2大臼歯は+₄、第3大臼歯はX₅。左側の第1大臼歯は+₅、第2大臼歯は+₄、第3大臼歯の溝型はX、咬頭数は3。

○特記事項

上顎右側の犬歯の形状から男性と推測される。また下顎右側の第2大臼歯の形状や他の歯の咬耗から13～18才程度と推測される。

SK1141

○検出状況

北東-南西にのびる土壌より出土。頭は北部で確認された。四肢骨の一部と思われる長骨が頭部より南で観察されたが、頭部よりも北部分よりも骨片が出土していた。

○保存状況

保存状態は悪く、確認された骨片は、長骨と頭蓋骨の一部と歯18本である。

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ¹				shovel(c)
	I ²			Dentin 尖頭	Enamel hypoplasia
	C	8.09	8.71	Dentin 尖頭	男性? Hypoplasia
	P ¹			Enamel	
	P ²	6.62	8.43	Enamel	
	M ¹	10.49	11.14	Dentin	4
	M ²	10.09	11.37	Enamel	4-
	M ³	9.99	10.78	nothing	4-
上顎左	I ¹			Enamel	shovel(c)
	I ²				
	C	9.24		Dentin	
	P ¹			Enamel	
	P ²	6.72	8.40	Enamel	
	M ¹	10.51	11.17	Dentin	4
	M ²	9.88	10.93	Enamel	4
	M ³	10.13	10.81	nothing	4
下顎右	I ₁	5.28	5.88	Dentin 線状	
	I ₂				
	C				
	P ₁	6.86	7.21	Enamel	
	P ₂	6.93	8.11	Enamel	
	M ₁	11.08	10.93	Dentin 頰側咬頭	Y ₅
	M ₂	10.96	10.11	Enamel	+ ₄ , 13~18才
	M ₃	11.35	10.32	nothing	X ₅
下顎左	I ₁				
	I ₂	5.85		Dentin 線状	
	C	7.04	7.65	Dentin ダイヤモンド形	Enamel hypoplasia
	P ₁	6.87	7.46	Enamel	
	P ₂	7.11	8.18	Enamel	
	M ₁	10.73	11.26	Dentin	+ ₅
	M ₂	11.32	10.14	Enamel	+ ₄
	M ₃	10.03	9.28	nothing	3咬頭

(単位: mm)

表 4-17 SK1139 出土人骨 計測値及び観察結果

M ³	M ²		P ¹	I ²	I ¹	I ¹	C		M ¹	M ³
M ₃		M ₁	P ₂	C		I ₂	C	P ₁	M ₁	M ₂

上顎は右側の中切歯、側切歯、第1小白歯、第2・第3大臼歯、左側は中切歯、犬歯、第1大臼歯、第3大臼歯。下顎は右側が犬歯、第2小白歯、第1大臼歯、第3大臼歯、左側が側切歯、犬歯、第1小白歯、第1・第2大臼歯である。咬耗は、上顎右側の第3大臼歯がエナメル質で、残りの歯は象牙質まで達している。上顎の左右の中切歯と右側の側切歯では切縁のみに咬耗が認められた。下顎左側の犬歯は尖頭でダイヤモンド型の咬耗が見られた。下顎左側の第1大臼歯では頬側に咬耗が見られた。上顎右側の中切歯はダブルシャベル型(-)はみられなかった。上顎右側の側切歯と左側の中切歯はシャベル型(shovel(b))。下顎左側の側切歯もシャベル型切歯(shovel(a))。上顎大臼歯の遠心舌側咬頭の退化は、左側の第1大臼歯で"4"、第3大臼歯は"3"。下顎大臼歯の咬合面浮彫像は、左側の第1大臼歯でY₅。

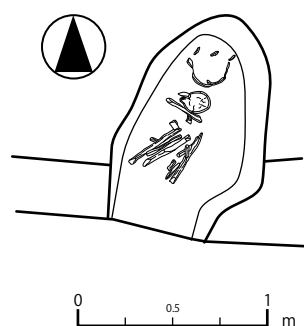


図 4-21 SK1141 出土状況

		MD	BL	Wear	備考
上顎右	I ¹			Dentin	Double shovel(-)
	I ²	7.14		Dentin (切縁のみ)	shovel(b)
	P ¹	6.40	8.53	Dentin	
	M ²			4	
上顎左	I ¹	7.91		Dentin (切縁のみ)	shovel(b)
	C				
	M ¹	9.72		Dentin	4
	M ³	7.76		Enamel	3
下顎右	C				
	P ₂	6.78	7.84	Dentin	
	M ₁				
	M ₃				
下顎左	I ₂	5.92		Dentin	shovel(a)
	C	6.73		Dentin (尖頭)	Enamel hypoplasia
	P ₁	6.48	7.37	Dentin	
	M ₁			Dentin (頬側)	Y ₅
	M ₂				

(単位: mm)

表 4-18 SK1141 出土人骨 計測値及び観察結果

まとめ

05B 区の 11 基の墓壇から出土した人骨（15 世紀～ 17 世紀に属す）は、いずれも保存状態が悪く、歯以外のものは部位の同定や測定が充分に行えなかった。そこで歯について詳細な観察・計測結果を行った。その結果、05B 区において出土した人骨は少なくとも 9 体あり、年齢や性別が特定できるものは少ないものの、おおむね 20 才以下である事が判明した。

参考文献

- Dahlberg A.A. (1956) Materials for the establishment of standards for classifications of tooth characters, attributes and techniques in morphological studies of the dentition. University of Chicago.
- Hellman M. (1928) Racial characters in human dentition. Proceedings of the American Philosophical Society. Philadelphia, 67:157-174.

5. 考察

(1) 御山寺遺跡の古代

永井邦仁

A. はじめに

御山寺遺跡では、縄文時代から近世まで数多くの時代にわたる遺構・遺物が検出されている。しかし、それは単純な人為の連続であったことを示しているのではなく、その変遷には連続に加えて断絶の様相も含まれている。本項では、8世紀から10世紀までのいわゆる古代の御山寺遺跡に展開した集落遺跡すなわち古代集落遺跡の調査結果を総括する。その目的は2つあって、①古代集落を遺跡変遷の連続と断絶の中に位置づけること、②古代丹羽郡南西部地域の動態の中に位置づけること、である。古代丹羽郡南西部地域とは、律令制下で固定された丹羽郡域の南西部地域を指すが、そこは犬山扇状地の扇端と自然堤防地帯の境界という尾張平野における地形変換点でもある。

御山寺遺跡で検出された古代の遺構は、竪穴建物17棟、掘立柱建物1（～4）棟、土坑多数、溝1条である。また遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器などの土器・陶器に加え石製袴帯具なども出土している。これらの遺構・遺物は西から07D・05B・04B・05C・05D・05Eの各調査区に分布する。そのうち07D区を除くと、東西方向約0.6kmの御山寺遺跡全調査区のうち概ね東半部を占めることになる。これには御山寺遺跡が立地する地形が大きく関わる。すなわち全調査区の東半部（05B区以東）は微高地上、その西側は谷（06A・05A区）を挟んで島状の微高地（07D・E・09区）にある。まずは古代における地形環境を把握することが必要である。

B. 古代における微地形と人為改変

御山寺遺跡の所在地は地形分類でみると自然堤防地帯にあたる。しかしすぐ北東方向には犬山扇状地が広がっており、その扇端が張り出していることから、その影響下に形成された自然堤防でもある。実際、遺跡が立地する地層を観察すると、扇状地由来の円礫が多く含まれる地点（04A・05B区など）とシルト主体の地点（04B区以東）が見られる。すなわち前者についていえば扇状地そのものではないが地表面を利用する人間にとっては「礫の多い高い所」という印象になったものと思われ、シルト地層とは異なる意識や方法で開発に臨んだと考えられる。

また自然堤防の形状も扇端付近特有のものといえる。すなわち扇状地では河道は伏流するか直線的な進路をとるが、自然堤防地帯では蛇行するのが一般的である（図5-4参照）。発掘調査では、05A・06A区で北東方向から南西方向へ抜ける河道（埋積谷）が確認されているが、この河道は、岩倉市井上町で現在の五条川河道と分岐し直線的に流下してきたものである。05A区で埋没した河道の縁を現在の水路（二ノ井用水）が同じ方向にのびることからわかるように、河道の痕跡は現在の水路にみることができる（図5-1）。河道は、遺構検出面から約1.8m下の堆積層で15世紀代の常滑産甕が出土していることから、戦国時代以前の河床は大きな谷になっていたと推測される。そして明治時代の地籍図等を参照するとこの河道は調査区南方で大きく東へ向きを変える時期のあったことが判明する。このことから、御山寺遺跡の地形は北東～南西方向を軸とする直線的な自然堤防を基盤としつつ、蛇行を開始した河道によって形成された自然堤防と後背湿地が遺跡南方を横切るという地形環境が考えられる。まさに扇状地と自然堤防地帯の境界のような位置にあるといえよう。

御山寺遺跡南側の後背湿地は微高地内にできた窪地のように把握される。窪地は05D区東

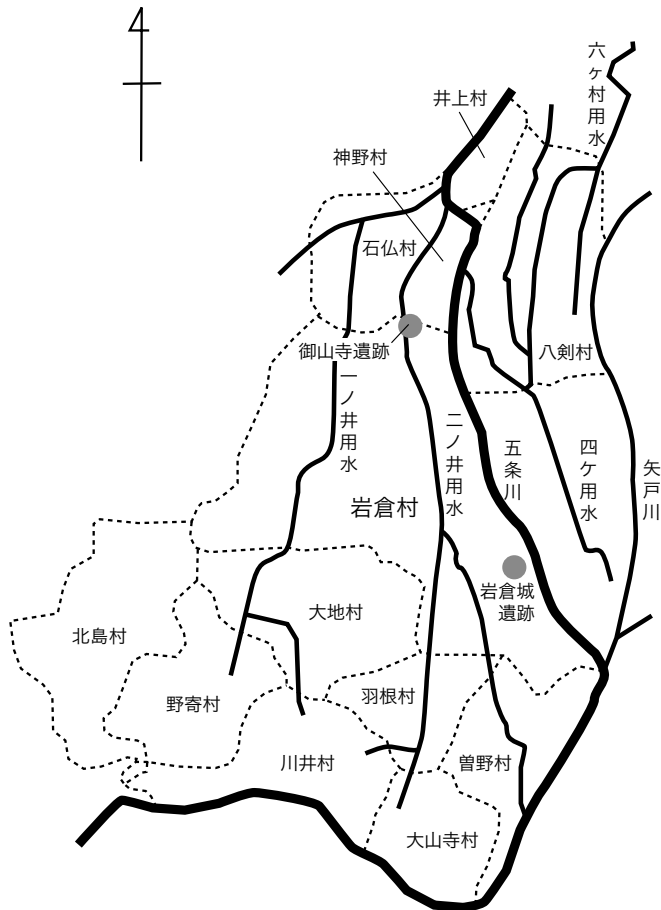


図 5-1 江戸時代末期の岩倉市域の用水路（『岩倉市史』をもとに作成）

端から 05E 区で最も顕著にみられ、05Ea 区 SX02 では古墳時代前期前半の土器が大量に出土した土層を検出した。つまりこの頃は、古代集落の遺構が検出される地点から約 1m も下がる窪地（標高 9.0m）が存在したのである。この湿地状土層はその後堆積を続け、奈良時代には標高 9.50m となっている。ここまで浅くなると窪地は克服可能な地形と見なされたとし、人為的な埋め立てによって平坦面の造成がなされている。この埋め立て土層は粒～ブロック状の黄褐色シルトが多く含まれたもので、微高地を削平して生じた土を使用しているものと考えられる（図 5-2a）。

こうして造成された平坦面には竪穴建物（05Ea 区 SB2001）がつくられた。その時期は出土した須恵器から 8 世紀中葉とみられ、奈良時代半ばに活発な

地形の人為改変があったことを示している。しかし造成されたとはいえ 05Ea 区 SB2001 の検出された標高は約 10.00m であり、04B・05C 区北半～05D 区の竪穴建物や掘立柱建物が比較的多く検出された地点が標高 10.50m であるのに比べると低い。後者では帯金具や円面硯などが出土している点や、さらに調査区北方の畑地で須恵器や灰釉陶器が採集される点から集落の中心は北側のより高位地点と考えられる。

一方、河道に沿った礫の多い自然堤防上は、古代集落域にならなかったようである。04A・05B 区では古墳時代前期に堤防頂部を削平して集落域にしていたが、同後期には墓域となる。しかしながら古代の遺物はほとんど出土しないことから墓域も含めた土地利用そのものがなかった可能性が考えられる。次にまとめた遺物が出土するのは中世でありそれまでの間に断絶がある。

これに関連して御山寺遺跡では古代集落へと連続する古墳時代後期の集落が検出されていない点も注目される。古代集落の中心を調査区北側高位地点に見積もる先の見解から、同様の立地でより狭い範囲に展開していた可能性も考えられるが、顕著な遺物の出土は確認されていない。したがって現状では 8 世紀中葉以降に新たな集落が形成されたとみるのが自然であろう。この点については後述する。

C. 御山寺遺跡の古代集落

次に御山寺遺跡で検出された古代の遺構・遺物について整理しておこう。概ね奈良時代末～平安時代前期に中心があるといっていよい。

建物配置で特徴的な点は見出しにくいだが、個々の建物は、遺跡北側の河道や自然堤防の向きに合わない北から少し東へ振れた方向に軸線をとるものが多い。04B 区で検出された掘立柱建物は総柱建物であり、倉庫の可能性はあるが並立していても 2 棟程度と考えられる（図 5-2b）。同建物の時期は決め手に欠けるが、竪穴建物と重複していないことからそれと大きく

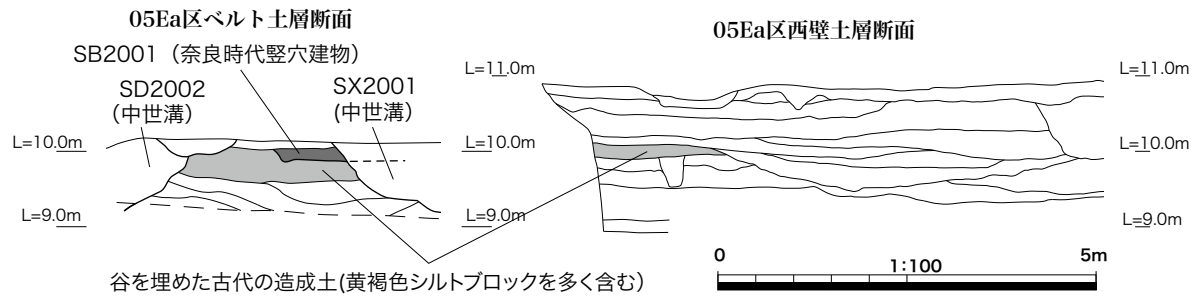


図 5-2a 御山寺遺跡における古代の造成

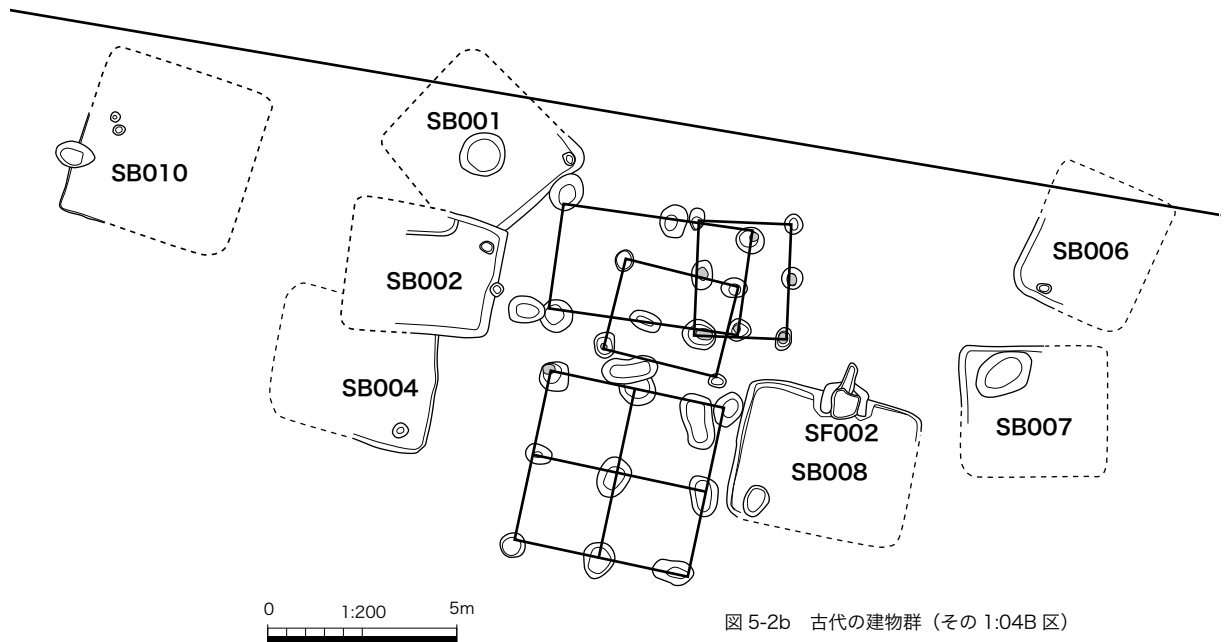


図 5-2b 古代の建物群 (その 1:04B 区)

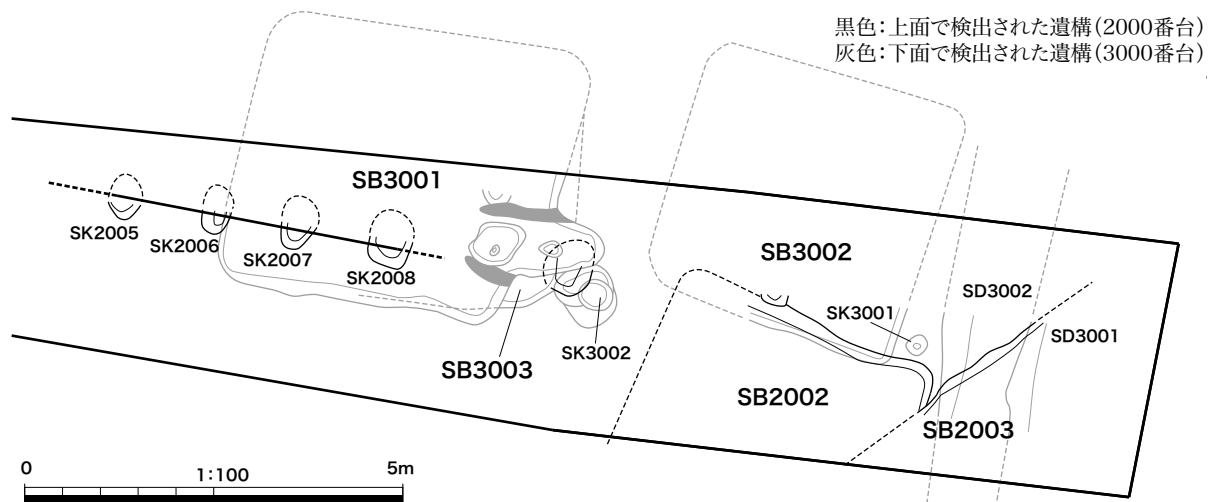


図 5-2c 古代の建物群 (その 2:05D 区)

図 5-2 御山寺遺跡における古代の造成層と建物配置

隔たことはないであろう。この仮定どおりとすると、数棟の倉庫に竪穴建物が付属する作業場あるいは厨房的な施設であったと想像される。05C区のように調査区の大半が15世紀代の大溝によって占められている調査区では、古代集落遺構の滅失も考慮せねばならないが、主体が竪穴建物となることは変らないであろう。竪穴建物は小型で、そのうち造り付けカマドのあ



図 5-3 尾張平野の伊勢神宮領の分布
(水野 1959 を改変)

るものは 04B 区 SB008 (北壁) と 05D 区 SB3001 (東壁) である。

05D 区 SB3001 のカマドは煙道が明瞭で、焚き口には支脚の円礫を据えた直径 8cm の穴も検出された。煙道では小型土師器甕が伏せた状態で、焚き口付近では須恵器こね鉢がいくつかの破片となって出土した。土師器甕は 8 世紀末～9 世紀前葉、須恵器は 8 世紀後半とみられる。出土位置から土師器甕は煙突として、こね鉢(片)はカマド構築材としてそれぞれ転用されたものと考えられる。一方 SB3001 の埋土全体からは灰釉陶器が出土しており、建物の時期は概ね 9 世紀代以降であり 10 世紀代には廃絶したとみられる。これまで葉栗郡や中島郡域における古代集落遺跡の発掘調査では、竪穴建物の造り付けカマドを良好に検出できた事例が少なかったが、本例は微細な部分も検出されたものとして貴重である。またカマド遺構からの出土遺物がそのまま竪

穴建物使用時期を示しているわけではないことも注意されよう。なお SB3001 の位置は古代の遺構群の中で最も重複が激しい地点であり、先行する竪穴建物 (05D 区 SB3003) や土坑 (05D 区 SK3001) に加えて廃絶後には掘立柱列がつくられている (図 5-2c)。

出土遺物で特記されるのは、05C 区で出土した石製袴帯具 (丸鞆) や円面硯である。石製袴帯具は概ね平安時代前期、円面硯も同時期とみられる。これらの遺物からは官人層の存在をうかがわせる。また付近からは灰釉陶器香炉蓋や銅製品片も出土しており、これらは仏教関連遺物と捉えることもできる。これらを同一空間で用いることができるのは一般の集落成員より高い階層と推定され、遺物からみると集落内における階層差が明瞭になっていることを示している。ただし、このような官人層に関わる遺物の出土から遺跡の中に官衙を想定しがちであるが、建物配置からは高度な規格性がみえてこないうえに施設や官職名を記した文字資料の出土もないことから、当該遺跡は一般集落の範疇でとらえるべきであろう。

その文字資料であるが、墨書土器は 05C 区の中世大溝 (SD001) 出土須恵器蓋外面および 05D 区 SK3001 出土須恵器杯底部外面に書かれた「新」である。1 文字なので様々な解釈が可能であるが、遺跡南方に立地する新溝神社に残る「新溝」の地名に由来する可能性もあろう。墨書された須恵器はいずれも O-10 号窯期 (8 世紀後葉) とみられ、もし「新溝」に関わるものであるとすれば文字資料として最古のものとなる。そこで以下に検討する。

「新溝」地名に関しては、①古代東海道の駅家である新溝駅家、②伊勢神宮の荘園である新溝御厨、の 2 つが知られる。①については『延喜式』諸国駅伝馬に記載され尾張国馬津渡と両村駅家の間に位置することがわかる。馬津渡は津島市内、両村駅家は豊明市内に比定されていることから、新溝駅家はそれぞれから 4 里 (16km) の距離にある名古屋市熱田区付近に比定するのが近年最も有力な説である (金田 1978)。新溝駅家を御山寺遺跡付近に想定するためには、各駅家との距離を矛盾なく古代東海道のルートを説明しなければならず、これはひじょうに困難である。したがって新溝神社が新溝駅家の遺称である可能性は低くなる。これは墨書土器についても同様である。一方②については、伊勢神宮関連の文書で 12 世紀代に「新溝御厨」と記され、また『神鳳抄』に列举された中世伊勢神宮の御厨・御領の中に同名がある。所在地は不明であるが、尾張国域の御厨・御領所在地を歴史地理学から比定した水野時二作成の図 (図 5-(1)-3) によると、御厨は尾張平野の沖積地に分布する傾向がうかがえる。この傾向は、尾張地域における中世の農業生産基盤が自然堤防地帯を中心に展開していたことを示すものであり、自然堤防地帯に立地する御山寺遺跡とその周辺を新溝御厨に比定するのも差し支えないと思われる。しかしながらこの「新溝」地名は墨書土器の時期から数世紀を隔てており、直接的な関わりがあるとはいえない。

このように古代の遺構・遺物から御山寺遺跡をみると、NN-32 号窯期（8 世紀中葉）に造成を伴う開発をおこない、O-10 号窯期（8 世紀後葉）以降には官人としての地位も得た村落首長層に率いられた集落の存在が考えられる。その消長は O-10 号窯期～K-90 号窯期（8 世紀後葉～9 世紀後半）に最盛期があり、O-53 号窯期（10 世紀前半）まで継続する。しかし 10 世紀後半以降は遺構・遺物ともに変化がみられる。遺跡の範囲で捉えれば断絶とはならないものの、集落の中心などが変わるのである。次に 10 世紀以降の様相をみていく。

御山寺遺跡 04B 区では、SK092 で O-53 号窯期～H-72 号窯期（10 世紀前半～11 世紀前半）の灰釉陶器がまとまって出土した。また同区 SK340 では河漁に使ったと考えられる管状土錘が多数出土しているほか、SK313 では灰釉陶器耳皿が出土した。このことから 04B 区が 10～11 世紀の集落域の中心であったと想定される。ただし、これらの出土遺物の中に土師器鍋がほとんどみられない点は注意しておきたい。煮炊具が鉄製であった可能性もあるが、それならばお階層の高さを示していることにならないだろうか。耳皿もそういった使用の場が限定される器である。

一方、遺物に対してこの時期に限定しうる遺構は少ないため、集落景観は不明とせざるを得ない。しかし遺物の出土分布と重複するようにして、04A 区東半部から 04B 区で 13～14 世紀代の掘立柱建物・堀と区画溝が集中してみられることから、同様の構成であった可能性も考えられる。8～10 世紀の集落が 04B 区より東側で集中していたことから、10 世紀代に集落の中心や構成が変動する画期があったと想定しておきたい。しかもこの変動によってつくられた景観が、その後 13 世紀代まで継続していた可能性を示す状況が 07D・E 区で検出されている。これらの調査区は、04A・B 区などのある自然堤防とは約 200m 離れた西方に位置する。その間には旧五条川の流路が谷地形をつくっている。それに面した地点(07D 区 NR138)では、灰釉陶器から山茶碗の碗・皿・瓶類と併行期の土師器鍋・陶製羽釜が大量に出土した。灰釉陶器は O-53 号窯期以降であり、山茶碗尾張第 6 型式の時期へと連続する。これらの土器・陶器は集積された円礫とともに流路側へ流れ落ちた状況が考えられる。おそらく 10～13 世紀代にわたって焼き物を蓄積する行為が連綿と営まれていたのであろう。ここからは動物骨や桃核も出土したとされ、祭祀の跡であったとも想像される*1。当該地点は自然堤防の北端であり、現在も集落の端に位置する。またすぐ北隣には八幡社があることも注意されよう。調査区内では他に当該期の集落遺構が検出されていないことから、ここには特殊な場だけが隔絶されて存在した可能性が高い。

以上のように御山寺遺跡では、O-53 号窯期（10 世紀前半）に集落遺跡としての画期があったことが理解できる。ここでは、古代集落にない大きさと構成を有し鎌倉時代以降へと継続する集落を中世集落と呼ぶことにしたい。この中世集落は、先に述べた新溝御厨の一部である可能性が考えられるが、他の御厨推定地での検討も交えて今後の課題としておきたい。

D. 丹羽郡南西部地域の古代集落

古代丹羽郡は概ね犬山扇状地を占めるが、その郡家は扇端近くつまり南西部地域にある。江南市小折本町とその周辺は「こおり」地名から丹羽郡家の推定地とされる（赤塚 2001）。この地域では横穴式石室の前方後円墳（古墳時代後期）の曾本二子山古墳があり、7 世紀後半には長福寺廃寺が創建される。扇状地は農業を中心とした土地利用には不向きであるため扇端からその下流の自然堤防・後背湿地帯に偏らざるを得ず、地域の中核も同じ立地となったのであろう。郡家と寺院からなる丹羽郡の中核は青木川と五条川に挟まれた地域にあるが、特に五条川に関しては現在も水路の取水口がここに位置する。ここから分岐する水路は岩倉市西部～一宮市東部の農業地帯には欠かせない存在になっている（図 5-1：岩倉市の水路）。先に触れたよ

うにこの水路は中世以前の五条川（旧五条川）河道の名残でもあり、旧五条川が分流（あるいは移動）していた様子をトレースしている。つまり旧五条川の岐点に丹羽郡家が位置しているのである。しかしながら7世紀代の当該地域における集落については未だ不明な点が多い。長福寺廃寺周辺の扇端上も想定されるが現状では考古学的情報に乏しい。

一方で自然堤防上の遺跡からは古墳時代中～後期の遺物が多数採集されている事例がある。

天神遺跡は御山寺遺跡の南方0.5kmに位置し、御山寺遺跡の立地する自然堤防とは河道を挟んだ南側の自然堤防上に立地する。1985年に岩倉市教育委員会によって発掘調査がなされた他、地元の個人によって遺物採集もなされている（図5-5）。遺物は松河戸様式以降の土師器や須恵器が主体であり、勾玉や石製模造品も採集されている。遺物の内容から、古墳時代中～後期の集落が存在し奈良時代以降も継続していたと推定される。

岩倉城遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の集落に重複して6～7世紀の墓域が展開する。古墳の周溝や集石墓の基部が検出されており、周溝からは円筒埴輪も出土している。御山寺遺跡では埴輪の出土がなかったものの、当該期の墓域が想定されており類似する展開といえよう。岩倉城遺跡では奈良時代前半の遺構・遺物はなく、建物遺構は検出されていないもののO-10号窯期（8世紀後葉）～9世紀代の須恵器・灰釉陶器が出土していることから、当該期に集落が展開した可能性が考えられる。この点も御山寺遺跡に類似する。

下新田遺跡は御山寺遺跡西方約0.6kmに位置する。平成21年度に愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこない、弥生時代中期後葉の墓域と奈良時代および中世の集落遺跡であることが確認された。遺跡は天神遺跡から連続する自然堤防の北縁に立地（標高約10m）に立地するが、古墳時代の遺構・遺物はなく、集落は奈良時代に新興したものである。

以上3遺跡からうかがえる御山寺遺跡南方自然堤防上の集落展開は、天神遺跡に古墳時代中～後期の集落を想定しつつ、その東方に後期の新溝古墳（新溝神社境内）、南東方向に岩倉城遺跡などの墓域が認められる。その後8世紀中～後葉を画期として自然堤防縁辺やかつて墓域であったところへの開発が始まったものと考えられる。そこで別の自然堤防上で8世紀後葉に

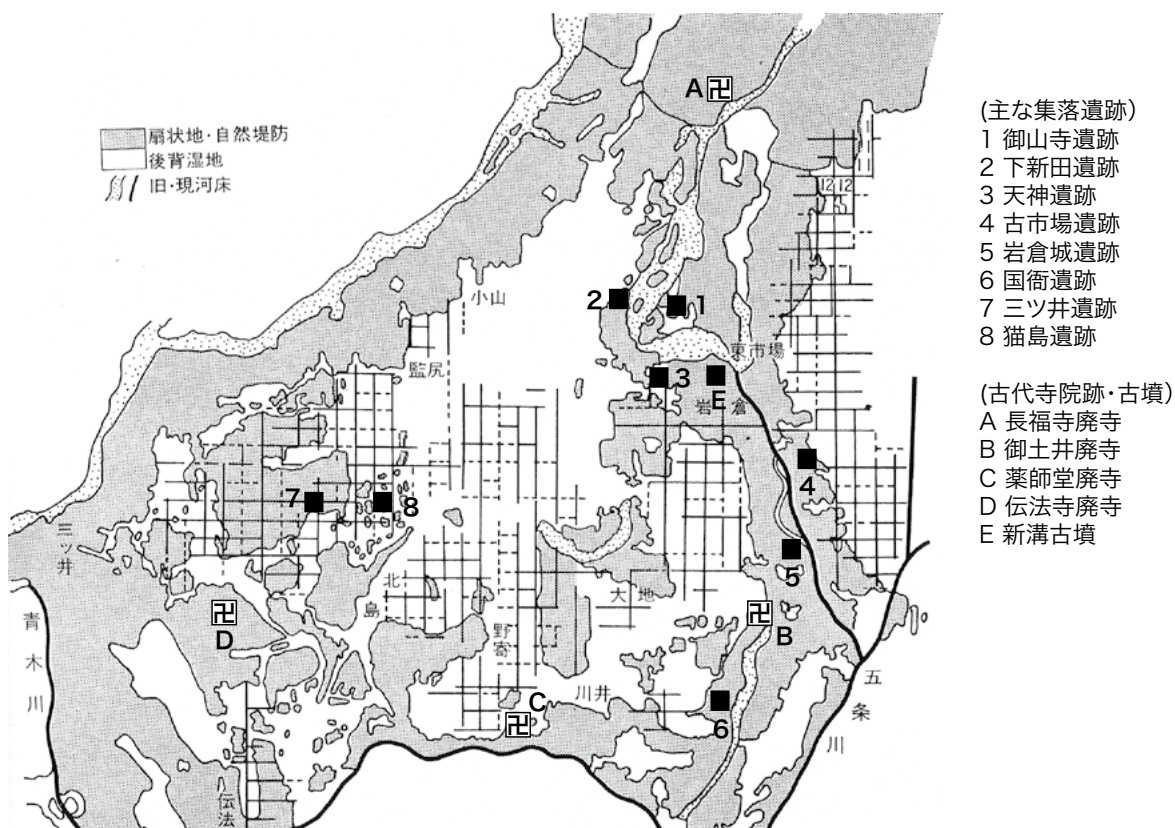


図5-4 丹羽郡西南部地域の自然地形と条里地割（金田1980を改変）

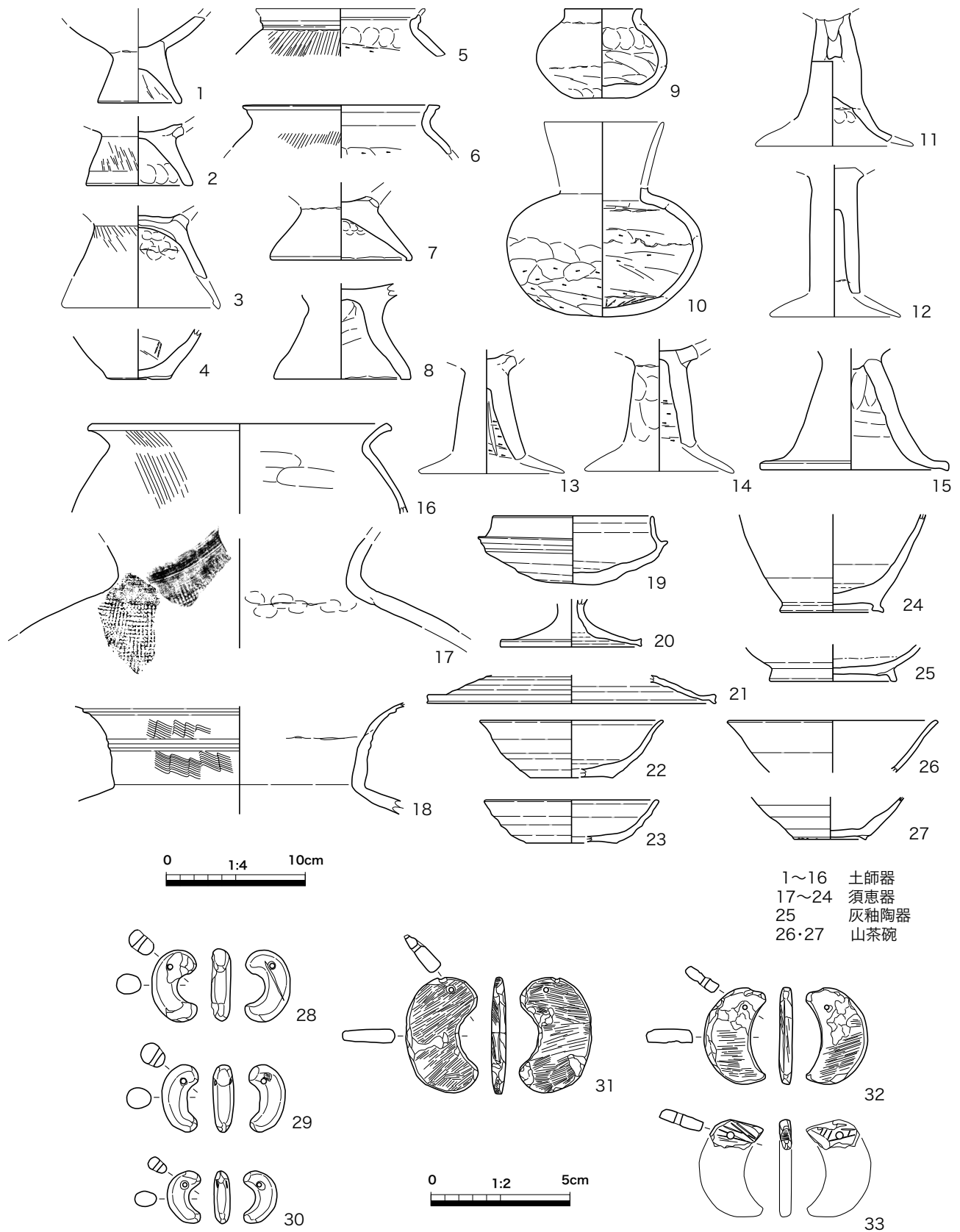


図 5-5 岩倉市天神遺跡出土土器・石製模造品実測図

新興する集落についてみてみよう。

一宮市三ツ井遺跡は青木川に沿った自然堤防上に立地する集落遺跡である。1995～97年に愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した（田中 2000）。古墳時代前期までの集落が断絶し次に集落が形成されるのは O-10 号窯期（8 世紀後葉）である。検出された遺構は竪穴建物 1 棟のみと複数条の溝であることから、集落縁辺を検出した可能性が考えられる。遺構は、青木川の河道と同じ方向である北東～南西を向いており、集落は河道や自然堤防の向きに合わ

せた軸線で開発を進めていったものと考えられる。出土遺物の時期からおよそ 10 世紀代までは同様の展開であったであろう。溝は屈曲しないので区画目的よりも自然堤防上の水を制御するための用排水路であったと推測される。遺構としては確認されていないが溝周辺の自然堤防上に耕作地が展開した可能性が高い。このような状況から、当該期は後背湿地の用排水を進めて耕作地を拡大させる段階にまでは至ってなかったと思われる。また三ツ井遺跡とその周辺地域は、尾張平野でも比較的条里地割が残存していることで著名であるが、調査成果によると各遺構の軸線が条里地割に合わさってくるのは平安時代後期～鎌倉時代であり、付近の残存条里地割が奈良時代～平安時代前期の耕作地を示している可能性は低い。後背湿地を中心に条里地割に基づく開発が進行するのは平安時代後期以降と想定しておきたい*2。

8 世紀中～後葉における丹羽郡南西部自然堤防地帯の集落開発をモデル化すると以下のようになろう。自然堤防の縁辺を削平して生じた土砂で隣接する小さな後背湿地を埋め立てることで集落域を形成し、同時に溝の掘削によって主として排水を進めて可耕地を確保したと考えられる。ただしその面積は条里地割からイメージされる広範なものではなく、その中心も自然堤防上にあったと考えられる。この開発は概ね 10 世紀前半まで継続したと考えられ、その間に可耕地はある程度拡大したと考えられるが、文献史料で確認される当該期の洪水被害の記録を考慮すると一方向的な進展ではなかったとみられる。

開発の先導は村落首長層が想定されるが、御山寺遺跡での状況から官人としての地位を固めた存在であったと考えられる。しかしたとえ官人の権威があったとしても、彼らの動員可能な人数や技術力は限界があったわけで、8 世紀代からの継承・連続的な開発手段だけでは集落の発展はおろか維持さえもままならなかったのではないだろうか。もっともそれは、官人権威＝古代国家の衰退という理論だけで説明できるものではないはずである。条里地割を施工できるような新たな主体へ替わられた可能性を始め、まずは地域での動向を検討していかなければならない。その意味で御山寺遺跡における 10 世紀前半の変化は、一見集落の小移動と考えてしまいがちであるが、この地域における中世集落との断絶の時期だったといえるかもしれない。

註

*1 9～10 世紀代の集落遺跡から 1 文字程度の墨書がなされた土器碗・皿が比較的まとまって出土する事例が東日本を中心にみられる。愛知県内でもいくつかあるが、特に 10 世紀以降もしばらくの間行なわれていた遺跡として春日井市・勝川遺跡や安城市・惣作遺跡が挙げられる。ともに自然流路に面した遺跡で 7 世紀後半に創建された古代寺院が近隣にあるという共通点がある。このことから 1 文字墨書土器使用の祭祀が仏教的背景があってなされていたと考えられる。一方同時期にあたる御山寺遺跡では、器は大量に使用されるものの墨書は伴っておらず古代寺院も付近にはない。一見似た行為ではあるがその背景はかなり違ったものであったと考えられる。

*2 金田章裕は岩倉市西部から一宮市東部で復元される条里地割をもとに、後背湿地を中心に小地域単位ごとの開発が「律令時代」に進行したと考えた（金田 1980）が、発掘調査成果によるとこの見通しは否定される。むしろ注目されるのは、比較的自然堤防上でみられない条里地割が、三ツ井遺跡周辺の自然堤防上では多数検出されている点である。自然堤防上で古代になされた開発を基礎とせずに全く異なった手法を取り入れて再開発しているわけで、より強制力をもった開発主体が想定されよう。

引用文献

赤塚次郎ほか 2001『江南市史』本文編、江南市

金田章裕 1978「尾張国」『古代日本の交通路 I』藤岡謙二郎編、大明堂

金田章裕ほか 1980『愛知県開拓史』愛知県

水野時二 1959『尾張の歴史地理』名古屋鉄道

田中伸明編 1999『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

(2) 尾張低地帯の縄文時代晩期の様相について

—主に遺跡の形成と出土土器について—

川添和暁

A. はじめに

御山寺遺跡では、07D・07E・09 区で、縄文時代晩期前半を中心とした遺物散布が確認された。当時期の尾張低地帯での人間活動を考える上で、数少ないデーターのひとつとなったことはもちろんのこと、短期間で形成が終了していることから、当時期の活動様相を把握するのに好資料となっている。本稿では、これまで尾張低地帯で確認されている当該時期の資料について概観し、当時の活動様相について考察していく。図 5-6 は、尾張低地帯で確認された、縄文時代の主要遺跡である。北西側から伸びる犬山扇状地から連続する形で、沖積低地の広がり南西方向に向かって確認でき、ここでは主に沖積低地で確認された遺跡位置を示した。西日本域の縄文時代遺跡が台地上ではなくて沖積低地内の自然堤防上に形成されていることが指摘されて久しい（渡辺編 1975 など）。尾張低地帯では、現況と当時の地形との変化が著しく、広域の発掘調査などによってこれからも資料の発見が期待される地域である。

尾張低地帯で遺跡の確認は、縄文時代中期後半までさかのぼる。一宮市佐野遺跡・岩倉市ノ

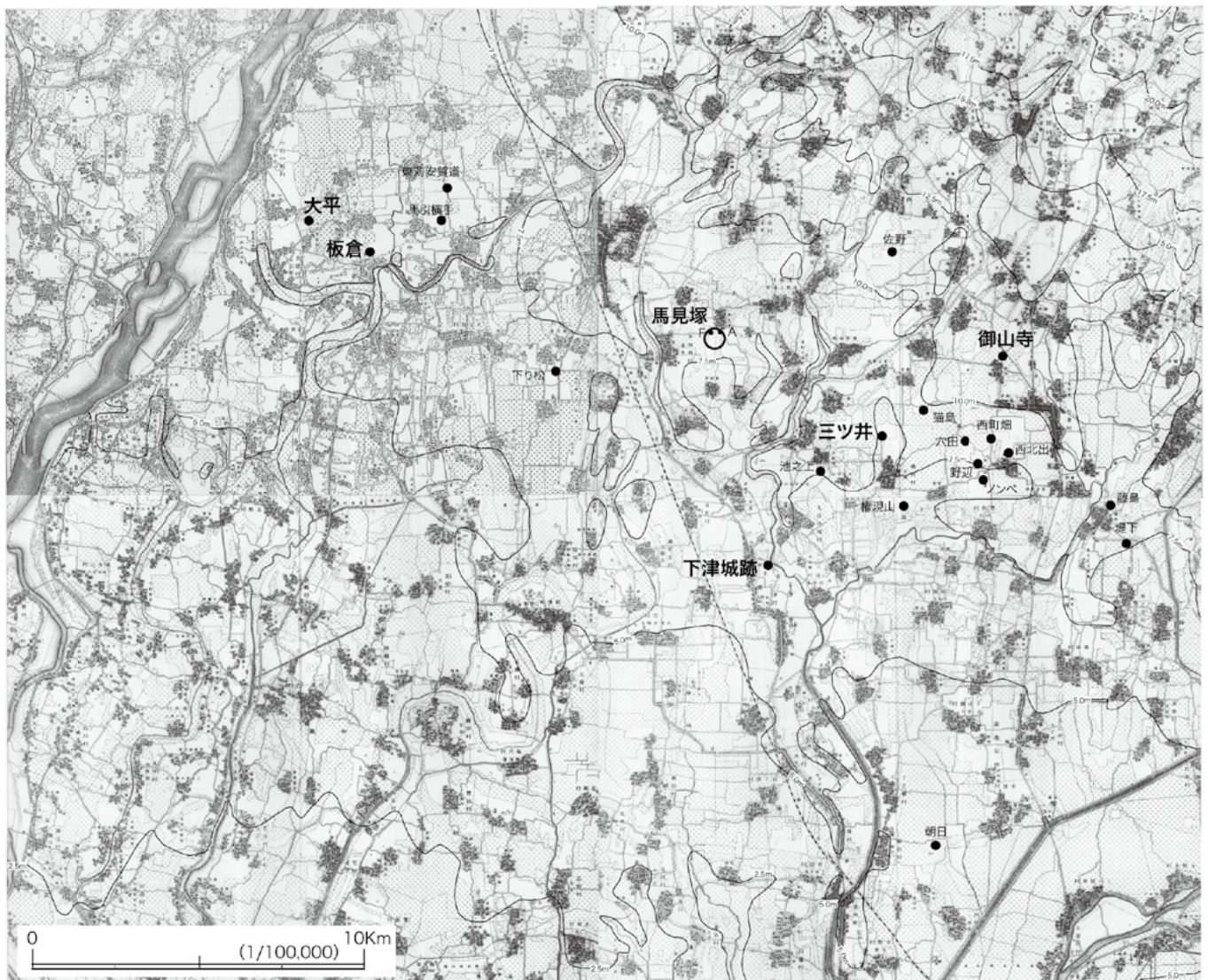


図 5-6 御山寺遺跡および尾張低地帯縄文時代主要遺跡（明治 24 年陸地測量部作成 2 万分の一地形図「一宮町」「稲沢町」「清須町」「竹鼻町」より）

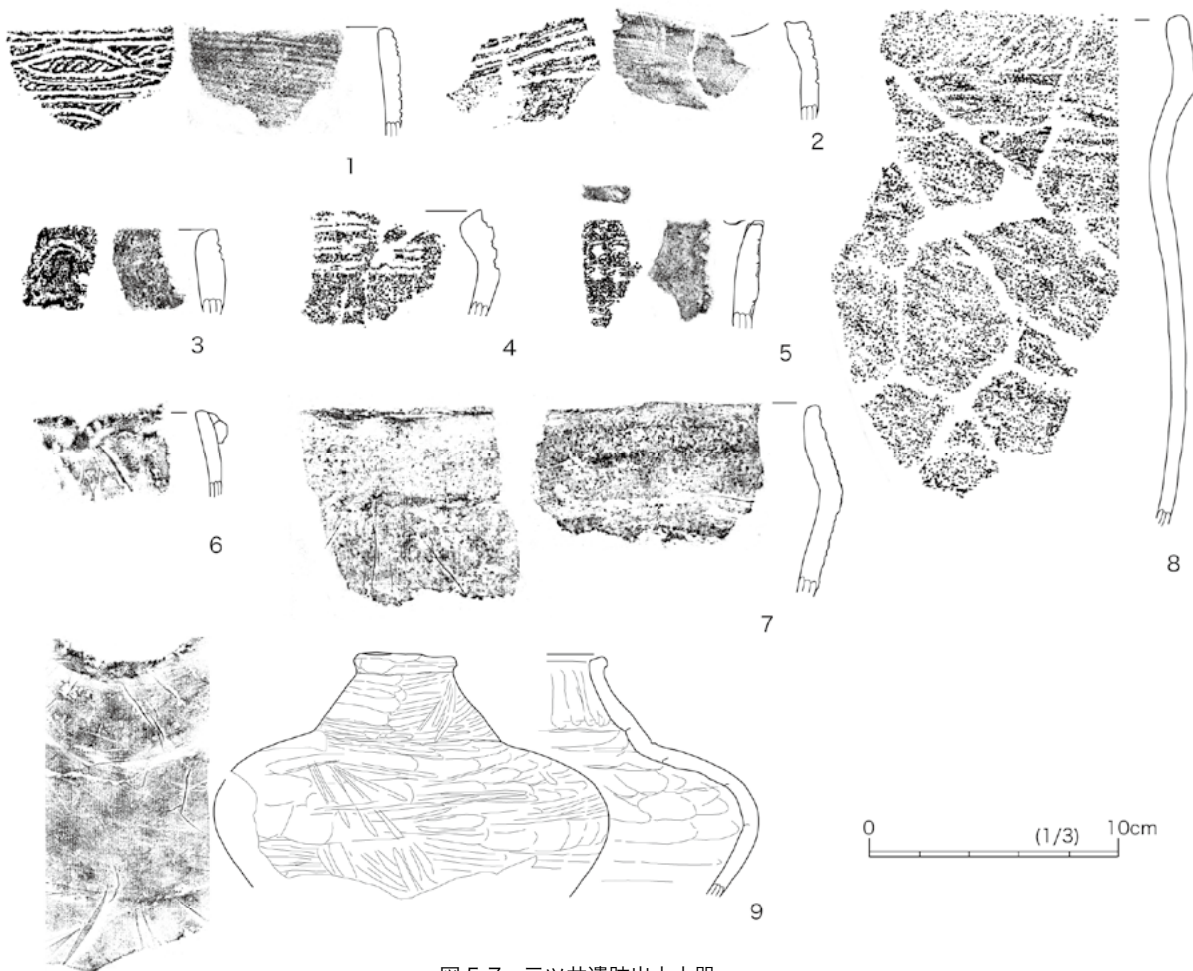


図 5-7 ミツ井遺跡出土土器

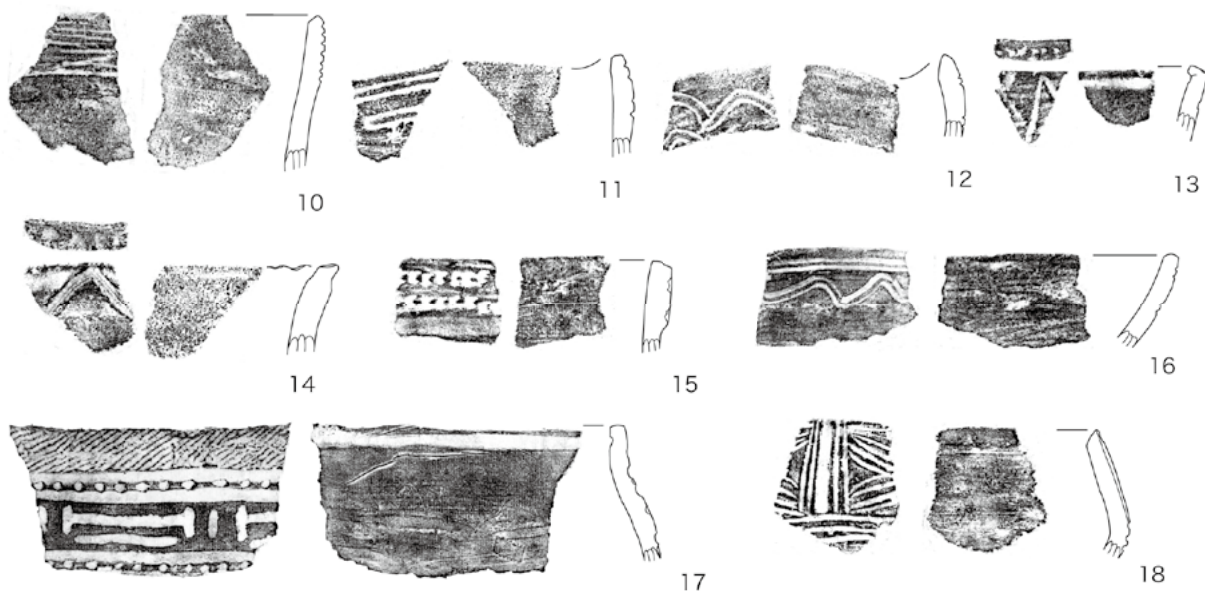


図 5-8 馬見塚遺跡出土土器

ンベ遺跡・北名古屋市堤下遺跡などがこれにあたる。中期末～後期前葉では、岩倉市権現山遺跡・清須市朝日遺跡が、後期中葉～末では、岩倉市西北出遺跡・小牧市藤島遺跡などが知られている。ここでは、晩期前半の資料が出土している遺跡を中心に、遺跡の様相を概観する。

B. 各遺跡の様相

ここでは、先に報告した御山寺遺跡に加えて、三ツ井遺跡・馬見塚遺跡・板倉遺跡・大平遺跡・下津城跡（下津遺跡）についてごく簡単に取り上げる。なお、後期末から晩期前半の土器

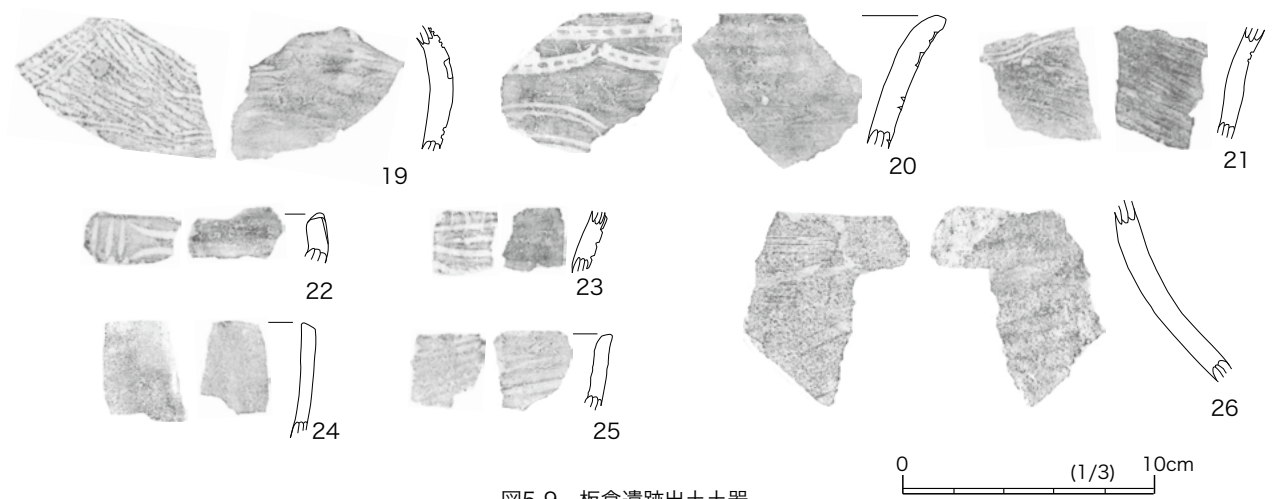


図5-9 板倉遺跡出土土器

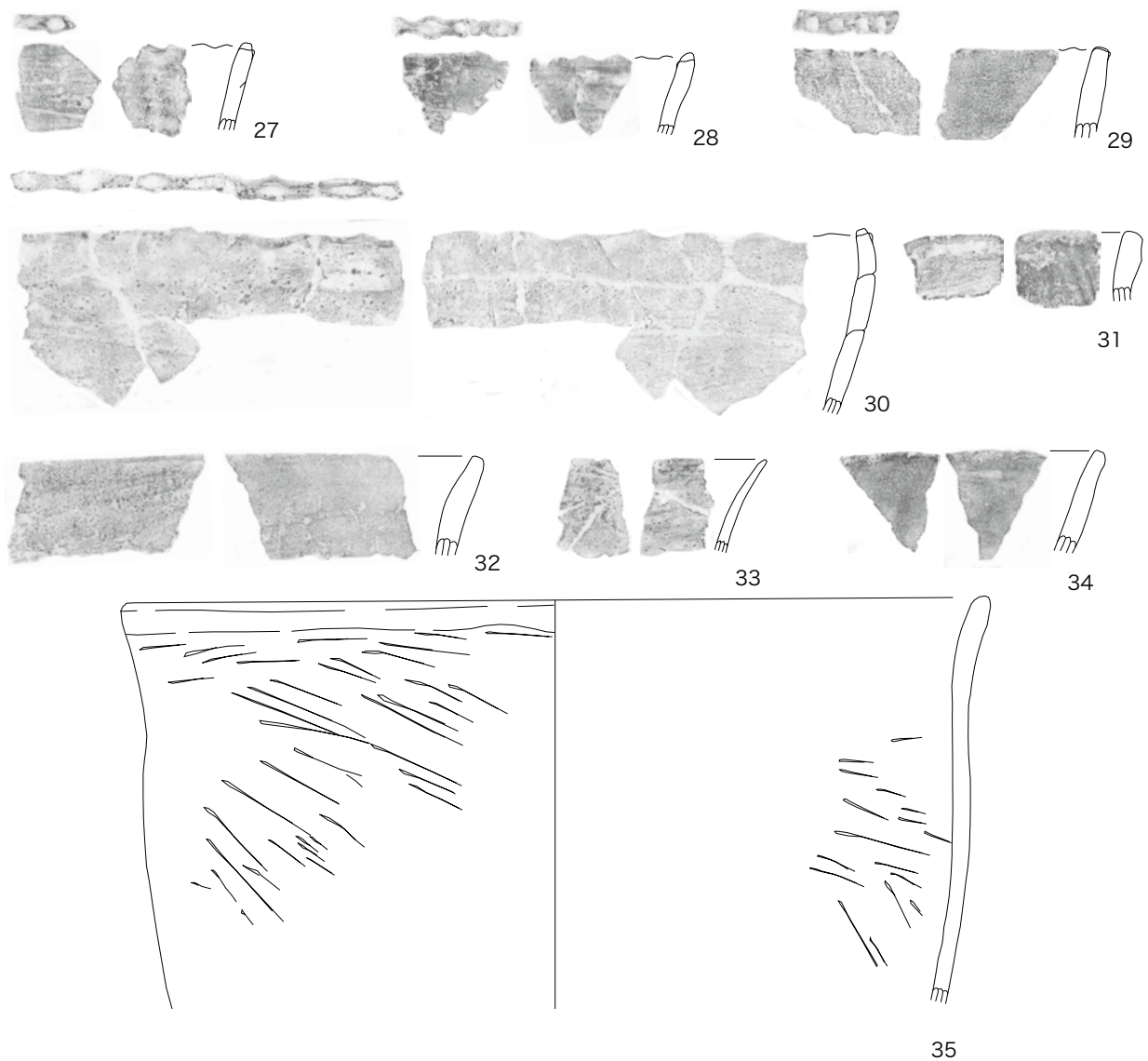


図5-10 大平遺跡出土土器

の施文に特徴的な半截竹管文について、原体の多くは巻貝工具である可能性を筆者は想定している（川添 2008）。

a. 三ツ井遺跡（田中編 1999）（図 5-7）

一宮市丹陽町、標高約 7.2m の自然堤防上に立地する。後期前葉から晩期前葉にかけて遺物が出土しているが、後期前葉から中葉までの資料が調査区 97B 区の微高地上に比較的まとまっており、土坑のほか、人為的に持ち込まれた大型棒状礫などが報告されている。後期末から晩期前葉の資料は地形全体を覆う黒色土層および下位層から出土し、磨石・敲石類などの石器を包

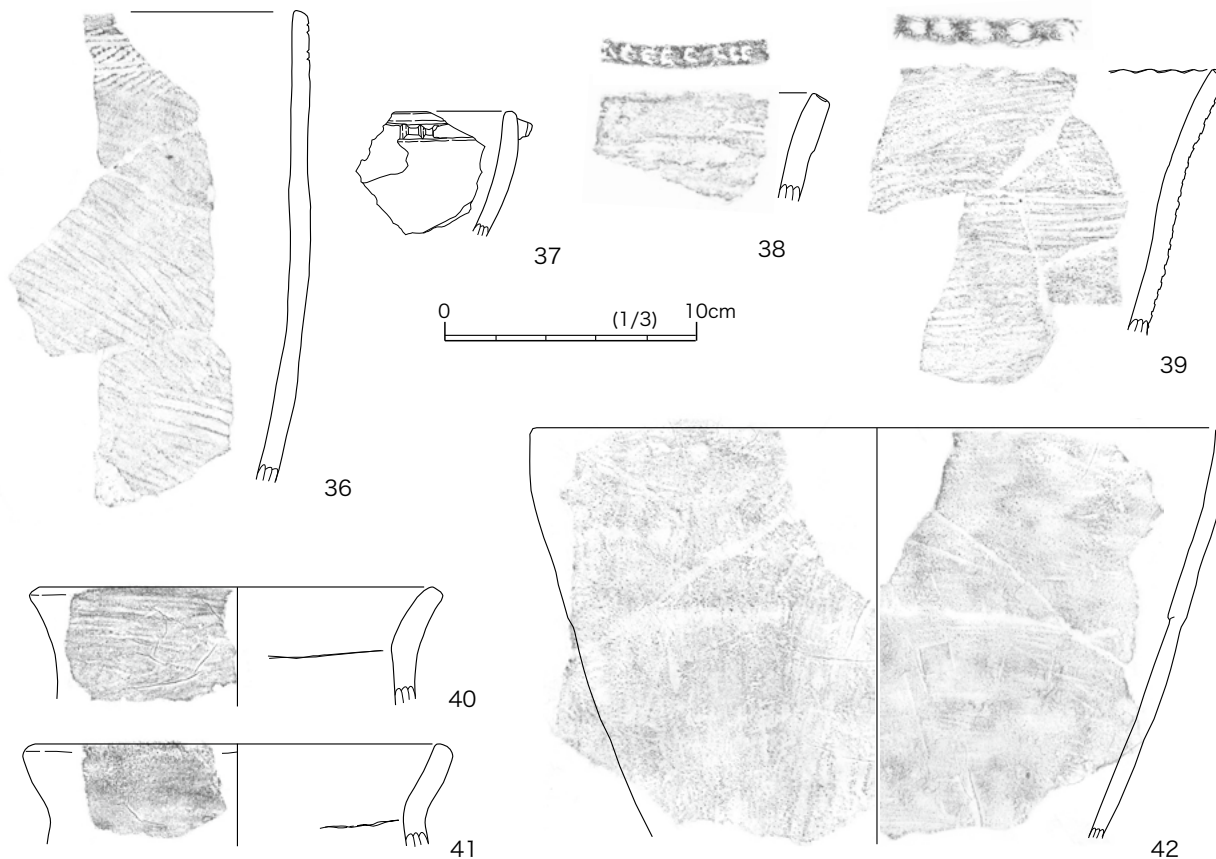


図5-11 下津城跡(下津遺跡)出土土器

含する遺構などがみついている。出土遺物は、土器のほか、石鏃・石錐・スクレイパー・打製石斧・刃器・磨製石斧・打欠石錘・磨石敲石類などの石器や、玉類が出土しており、縄文時代後期後葉から晩期に特徴的な形態のスクレイパーも認められる（報告書第79図53）。

b. 馬見塚遺跡（岩野ほか 1970）（図5-8）

一宮市馬見塚、標高約7.5mの自然堤防上に立地し、土取が行なわれる前は畑地であったといわれている。遺跡の範囲は東西約300m・南北約200mで、この中に調査地点によるA～H地点の呼称が付けられている。このうち縄文時代の遺構・遺物がまとまって出土したのは、A・D・G・F・H地点である。A地点からは晩期後半の土器棺墓4基が検出され、F地点からも同様の土器棺墓5基・炉跡・焼人骨が含まれるピットなどの遺構の検出があった。馬見塚F地点の遺物包含層は10YR4/1（褐灰）シルトと考えられ、表土より60cm下で55cmの厚さが確認された。ここでは晩期後半の資料が主体であるが、層位的区別などはできないものの、後期後葉から晩期前半までの遺物も含まれた状態である。出土遺物は土器のほか、石鏃・石錐・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石敲石類などの石器や石棒石剣類・石冠・垂飾などの石製品、土偶・骨鏃の出土があるが、晩期前半に属するものも含まれていると思われるが、多くは晩期後半に属するものかもしれない。

c. 板倉遺跡（川添・鬼頭 2008）（図5-9）

一宮市三条に位置する遺跡で、標高は約6mである。地表下4～5mと推定されるレベルからカキ・ハマグリを貝種とする貝層が見つかり、土器も出土した。土器群は縄文時代晩期初頭が主体と考えられる。鬼頭は地形解析・ボーリング試料などの分析から、板倉遺跡の北東方向には北東-南西方向に活動的河川流路があり、それが放棄されたのちに閉じた池状の止水環境ができ、その縁辺で板倉遺跡を形成したヒトが活動した可能性を提示した（同：7頁）。

d. 大平遺跡（伊藤 1990）（図5-10）

一宮市三条に位置する遺跡で、標高は約5mである。調査では標高4m前後のレベルから灰層を三ヶ所検出しており、灰層1（65×40×5cm）と灰層2（282以上×30×5cm）からは、

稲荷山式と考えられる晩期土器片が出土している。また、包含層（黄褐色砂層か）からは同時期の土器片のほか土製品も出土している。

e. 下津城跡（下津遺跡）（日野・北條 1986、1988）（図 5-11）

稲沢市下津高戸町ほかに位置する遺跡で、標高は 6～7m である。調査では、後世の堀埋立土および自然流路から遺物の出土が多く確認されているが、一部、安定した遺物包含層（黒色土層）からの出土も確認された。後期後葉から晩期前半期の遺物が出土しており、土器のほか石鏃などの石器もごく若干出土している。

C. 活動様相について

尾張低地帯における活動痕跡のなかでは、板倉遺跡の貝層形成、大平遺跡の灰層などがやや明瞭な活動痕跡と考えられる。但し、遺跡形成の期間は長くなく、短期間の作業に伴う活動痕跡と考えられる。一方、御山寺遺跡の遺物集中域や下津城跡、馬見塚遺跡では、いわゆる遺物包含層からの出土である。馬見塚遺跡では、晩期前半の様相は、散漫としており、晩期後半に集中して遺物の廃棄および遺跡の形成が行なわれている状況とは対照的である。

活動様相を考慮する上で、遺物の出土状況も重要な情報となる。今回の検討資料では、馬見塚遺跡以外では、石器・石製品・土製品の出土が顕著ではない。一方、土器についてはいえば、浅鉢・壺・注口土器の存在や精製土器の存在など、並製あるいは粗製深鉢以外の器種の出土状況が注目できる。三ツ井遺跡については図 5-7 の 9 のような壺あるいは注口土器の存在、馬見塚遺跡での図 5-8 の 16～18 のような精製鉢もしくは浅鉢の存在*1 は、当地の活動がより複合的であることを示しているといえる。この点、御山寺遺跡の遺物集中区は、活動がより単的であることを示しているといえよう。

D. 御山寺遺跡出土土器の位置づけ

尾張低地帯では、これまで述べたように、まだ資料自体が多くなく、土器群資料が出土すると全く同様の様相を呈する事例を示すことが難しい。御山寺遺跡遺物集中区資料は、ごく若干の有文深鉢土器と大多数の粗製深鉢土器のみで構成されており、雷 IIc 式や元刈谷式の新段階などといわれる時期に比定できるものと考えた。その根拠は、① 770 のような有文土器の存在、② 口縁部上端にユビの連続押厚および工具の連続刺突が施されている資料が多くはないが一定量存在していること、などがある。なお、この段階は尾張低地帯の型式として増子によって又木式が設定されているが、今回の御山寺遺跡遺物集中区の土器群は、この又木式の範疇のものとは異なると考えた。その根拠は下の通りである。

又木式は、仮称馬見塚 i 地点の溝状遺構埋土中資料を指標として、設定された（増子 1981、【初版 1975】）。資料の総量はリング箱約 4 箱分出土したとある。土器群を 6 群にわけ、1 類は近畿晩期前半の半精製深鉢に類似するもの、2 群は本刈谷式特有の半截竹管文土器、3 類は東日本系精製土器、4 類は檀原式精製土器、5 類は暗褐色磨研浅鉢、6 類は主体となる無文・条痕文土器とした。筆者が注目するのは 6 類土器の様相であるが、増子によると、75%の組成率を占め、器面調整は小巻貝約 3 割、サルボウ約 1 割、ほかはヘラ仕上げと粗面が相半ばする、とある（同：83 頁）。一方、今回報告した御山寺遺跡遺物集中区の土器群で、器面調整が確認できた 180 点について検討したところ（表 5-1）、器面表の調整が、巻貝条痕調整が 23 点（12.78%）、二枚貝条痕が 43 点（23.89%）、削痕が 24 点（13.33%）、ナデが 89 点（49.44%）となり、削痕は二枚貝条痕と同一工具による調整効果の変異と考えるならば、両者を併せて 67 点（37.22%）となり、巻貝条痕＜二枚貝条痕・削痕＜ナデとなる。器面裏面の調整については、巻貝条痕は器面表裏両面に認められる場合が多い一方、二枚貝条痕では器面表面のみで

裏面には決して認められないことなど、両者の様相は大きく異なる。巻貝条痕と二枚貝条痕は

表5-1 御山寺遺物集中区土器器面調整の様相

器面表調整	器面裏調整	点数	比率 (%)
巻貝条痕	巻貝条痕	12	6.67
巻貝条痕	ナデ	8	4.44
巻貝条痕+ナデ	巻貝条痕 (+ナデ)	3	1.67
二枚貝条痕	ナデ	43	23.89
二枚貝条痕+ナデ	巻貝条痕	1	0.56
削痕	ナデor削痕	24	13.33
ナデ	ナデ	89	49.44
計		180	100.00

互いに背反する関係であることが多いなか、777 のような、二枚貝工具と巻貝工具の共存を示す土器の存在は、この御山寺土器集中区においては、巻貝工具と二枚貝工具とを用いて製作した集団が同一あるいは極めて近接していたことを示す事例であるといえる。770・771 の沈線原体の解明をも含めて、この現象の解明が今後の課題となる。

御山寺遺跡遺物集中域と又木式との相違の理由については、筆者はまだ明確な回答を有していない。以上のように、二枚貝条痕調整が多用される状況と口縁端部上面への押圧が認められる状況から、御山寺遺跡遺物集中域の土器群は又木式とする土器群よりも新相である可能性が指摘できるかもしれない。一方、大平遺跡では、稲荷山式の範疇に入る土器群のまとまりが知られている（図 5-10）。御山寺遺跡遺物集中域資料は巻貝条痕の存在などから、これらの土器群よりは古相を呈するものと考えられる。このように、時期的段階によるとするならば、このような変遷案を提示することができよう。また、小地域的差がより強く表出したとするならば、尾張低地帯東部・中部・西部での様相差の事情もあるかもしれない。

E. まとめ

御山寺遺跡の 07E 区を中心とした遺物集中域は、短期間のヒトの活動様相を呈しているものと考えられる。晩期前半の三ツ井遺跡は初頭から前葉までの様相は窺えられるが、晩期中葉の活動痕跡は極めて不明瞭な状況にある。そのあとを受けた活動痕跡として、御山寺遺跡の遺物集中域が存在すると考えた。石器群が若干であることと、土器群では深鉢のみで構成されていることなどから、居住域は調査区外北側に形成されているのか、やや離れた別地点に形成されているのか分らないが、散発的な活動痕跡と埋葬遺構・居住空間を含め、大平遺跡周辺・馬見塚遺跡周辺・御山寺遺跡周辺の微高地を中心とした大凡半径 5km 圏を活動エリアとした範囲として想定することもできるものと考えられる。

註

*1 図 5-8 の 16 は、器面調整表裏ともに巻貝条痕で、器面表には巻貝工具による半截竹管文が施されている浅鉢である。この調整・文様はいわゆる有文土器と関連性が高いと考えられるものである。浅鉢や精製鉢については、雷文や檀原文様や北陸系といわれる口縁端部上面の縄文および貼付装飾、無文であるがミガキや赤彩による精製土器など、有文深鉢とは別の製作状況を示す事例が多いなかで、この浅鉢の存在は土器製作者を考える上で大いに注目できるものである。なお、器面調整は巻貝条痕であるが、胎土や焼成などの効果であろうか、表面は丁寧な仕上がりとなっている。

資料の所在

1～35：一宮市教育委員会、36～42：稲沢市教育委員会

参考文献

- 川添和暁 2008 「施文と調整から見た土器の検討」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター 2007 年
次報告書 付編研究会・シンポジウム資料』pp.302-323、南山大学人類学博物館
- 川添和暁 2009 「縄文時代後晩期集落研究の現状と課題」『大坪西遺跡』pp.65-70、愛知県埋蔵文化財センター
- 佐野 元 2001 「東海地方西部縄文晩期縁帯文土器様式の様相 瀬戸市大六遺跡出土晩期前葉遺物を中心として」
『研究紀要』9、pp.1-82。財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 佐野 元 2008 「「体部条痕系縁帯文土器」型式群最末の「桜井式」」『丸根遺跡・丸根城跡』pp.286-314、豊田
市教育委員会
- 増子康眞 1981 (初版 1975) 「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』pp.42-
97、名古屋、紅村弘
- 増子康眞 1985 『愛知県を中心とする縄文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』愛知
- 増子康眞 2003 「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人』63、pp.15-47 頁、名古屋考古学会
- 増子康眞 2008a 「晩期半截竹管文土器」『総覧 縄文土器』774-781 頁。『総覧 縄文土器』刊行委員会。
- 増子康眞 2008b 「丸根遺跡の縄文晩期住居址と土器群」『丸根遺跡・丸根城跡』pp.268-285、豊田市教育委員
会
- 吉田富夫・杉原荘介 1939 「東海地方先史土器の研究」『人類学・先史学講座』13、pp.1-51、東京、雄山閣
- 渡辺 誠編 1975 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館

報告書など

- 伊藤和彦 1990 『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会
- 岩野見司ほか 1970 『新編 一宮市史 資料編一』一宮市
- 川添和暁・鬼頭 剛 2008 「板倉遺跡の再評価 出土遺物・遺跡立地を中心に」『研究紀要』9、pp.1-10、愛知
県埋蔵文化財センター
- 田中伸明編 1999 『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 日野幸治・北條献二 1986 『下津城跡発掘調査報告書 (II)』稲沢市教育委員会
- 日野幸治・北條献二 1988 『下津城跡発掘調査報告書 (IV)』稲沢市教育委員会

(3) 御山寺遺跡の地下層序と表層地形解析

鬼頭 剛

A. はじめに

濃尾平野北東部、岩倉市中野町・鈴井町の御山寺遺跡にて深掘および試錐調査によって地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する。

B. 試料および分析方法

地下層序解析のため、各調査区において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

試錐調査は2004年（平成16年）、04A区においてアオイテック株式会社に依頼し、ハンドフィールドロータリ式ボーリングマシンを用いてオールコアで実施した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μm の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された放射性炭素年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県岩倉市発行の「都市計画図 (1/2500)」および一宮市発行の「都市計画基本図 (1/2500)」にプロットされた標高値を用いた。

C. 分析結果

a. 深掘層序

東西の総延長 580m の各調査区でバックホーによる掘削を実施しているが、それらのうち主要な 8 地点の深掘層序断面を示す（図 5-12・図 5-13）。各地点の層序の特徴をまとめて以下に述べる。

調査区西端の地点 1（07D 区）では深度約 2.5m の深掘断面を得た。下位層より標高 8.80 ～ 9.50m は長径 6cm を超える円礫からなる大礫層である。基質は極粗粒砂からなる礫支持礫

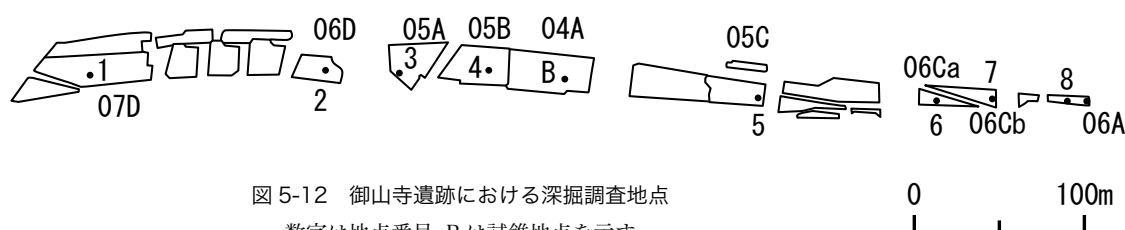


図 5-12 御山寺遺跡における深掘調査地点
数字は地点番号, B は試錐地点を示す

層である。標高 9.50 ～ 9.57m は明褐色の砂粒子の混じるシルト質粘土層である。標高 9.57 ～ 9.76m はシルトの混じる中粒砂層からなる。標高 9.76 ～ 10.12m は黒褐色粘土のブロックが無秩序に堆積するブロック混在層である。長径 8cm の礫の混じる場合がある。本層の最下部、標高 9.78m で放射性炭素年代測定用の試料（以下試料を使い、すべて放射性炭素年代測定用である）を採取した。標高 10.12 ～ 10.40m は黄褐色を呈するシルト質粘土層である。標高 10.40 ～ 11.00m は暗灰色の砂混じりシルト質粘土層である。標高 11.00 ～ 11.10m は下位層と同じく暗灰色の砂混じり粘土層からなる。標高 11.10 ～ 11.30m は暗灰色のシルト質粘土層であるが、本層は人工的な盛り土である。

地点 2（06D 区）では深度約 3m の深掘断面を得た。下位層より標高 8.03 ～ 8.53m は長径 25cm を超え最大 40cm の円礫がみられる巨礫層である。本層下部では基質を極粗粒砂が充填し礫どうしが密に詰まった礫支持礫層であり、上部では基質が粗粒砂と若干細かくて基質量の多い基質支持礫層となる。標高 8.53 ～ 8.65m は淘汰良好な粗粒砂層である。標高 8.65 ～ 9.03m は暗灰色を呈するシルト質粘土層である。全体に塊状かつ均質で、堆積構造は認められない。本層最下部の標高 8.67m で試料を採取した。標高 9.03 ～ 9.49 は灰色粘土層と中粒砂層との互層からなる。砂層は側方への連続性が悪くレンズ状を呈する。標高 9.49 ～ 10.10m は砂粒子の混じるシルト質砂層である。標高 10.10 ～ 10.99m は礫の混じる人工的な盛り土である。

地点 3（05A 区）では深度約 4m の深掘断面を得た。下位層より標高 6.46 ～ 6.98m は長径 20 ～ 30cm の円礫からなる巨礫層である。極粗粒砂により基質が充填された礫支持礫層である。標高 6.98 ～ 8.52m は中粒砂層からなり、下部では長径 10cm 程度の粘土ブロックを含む場合がある。標高 8.52 ～ 8.74m は暗灰褐色の粘土層、標高 8.74 ～ 8.99m は灰褐色の粘土層、標高 8.99 ～ 9.29m は褐色のシルト質粘土層となり、粘土が卓越する地層となる。標高 8.52 ～ 8.74m の暗灰褐色粘土層の最下部、標高 8.53m と、標高 8.99 ～ 9.29m の褐色シルト質粘土層の上部、標高 9.20m の層準で試料を採取した。標高 9.29 ～ 9.39m は褐色を呈する細粒砂層である。標高 9.39 ～ 9.77m は灰褐色の砂質シルト層、標高 9.77 ～ 9.89m は灰黒色の砂質シルト層である。標高 9.89 ～ 10.69m は礫の混じる人工的な盛り土である。

地点 4（05B 区）では深度約 3m の深掘断面を得た。下位層より標高 8.00 ～ 9.00m は淘汰良好な極細粒砂層である。本層の最下部（標高 8.00m）にて 3 点の試料を採取した。標高 9.00 ～ 10.40m は長径 20 ～ 30cm の円礫からなる巨礫層である。極粗粒砂により基質が充填された礫支持礫層である。標高 10.40 ～ 11.00m は発掘調査終了後に埋め戻された人工的な盛り土である。

地点 5（05C 区）では深度約 4m の深掘断面を得た。下位層より標高 6.87 ～ 9.37m は淘汰良好な粗粒砂層である。標高 9.37 ～ 9.51m は褐色を呈する粗粒砂混じりの粘土層からなり、粘土ブロックを無秩序に含むブロック混在層の層相を呈する。標高 9.51 ～ 9.92m は淘汰良好な粗粒砂層である。砂層は全体に淘汰良好であるが、塊状を呈し堆積構造は認められない。標高 9.92 ～ 10.91m は褐色を呈する砂粒子の混じる粘土質シルト層からなる。標高 10.91 ～ 11.06m は現代の盛り土である。

地点 6（06Cb 区）では深度約 3.5m の深掘断面を得た。下位層より標高 7.63 ～ 8.53m は黒灰色を呈するシルト質粘土層からなる。標高 8.53 ～ 10.23m はシルト質砂層である。全体に塊状・均質で堆積構造はみられない。本層上部、標高 9.83m が古墳時代の検出面である。本層最上部、標高 10.19m で試料を採取した。標高 10.23 ～ 10.93m は砂質シルト層である。堆積構造はみられない。本層は土器片を含む。本層最上部、標高 10.89m にて試料を採取した。標高 10.93 ～ 11.15m は明治時代の盛り土であることがわかっている。

地点 7（06Ca 区）では深度約 3m の深掘断面を得た。下位層より標高 7.64 ～ 8.24m は暗

灰色を呈するシルト質砂層からなる。標高 8.24～8.54m は紫灰色～暗灰色を呈する粘土層である。本層最下部、標高 8.26m で試料を採取した。標高 8.54～8.74m は灰色のシルト質中粒砂層である。標高 8.74～9.04m は灰色を呈する砂質シルト層である。標高 9.04～9.60m は褐色の粘土質シルト層であり、本層から鉄やマンガンに由来する斑状構造が卓越するようになる。本層の標高 9.50m 付近が検出面である。標高 9.60～10.54m は褐色を呈する粘土質シルト層である。標高 10.54～11.04m は現代の舗装道路の碎石である。

地点 8 (06A 区) では深度約 3m の深掘断面を得た。下位層より標高 7.47～7.66m は淘汰良好な中粒砂層である。本層の最下部、標高 7.47m で試料を採取した。標高 7.66～7.76m は暗灰色の粘土層である。本層の標高 7.68m から試料を採取した。標高 7.76～9.16m は暗灰色を呈するシルト質粘土層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の標高 8.54m で試料を採取した。標高 9.16～9.66m は淘汰良好な中粒砂層である。塊状で堆積構造はみられない。標高 9.66～10.23m は褐色を呈する粘土質シルト層である。本層は江戸時代の地層である。標高 10.23～10.43m は礫の混じる盛り土である。

b. 試錐層序

04A 区の発掘調査終了後に地表（標高 11.40m）から深度 10m の試錐資料を得た（図 5-14）。下位層より順に記載する。標高 1.40～3.40m は礫径 50～60mm の中礫層である。まれに礫径 80mm のものもみられた。円磨度は角礫ないしは亜角礫～亜円礫からなる。基質は粗粒砂からなり、地層全体に基質の量が多いが、特に標高 2.94～3.40m で多く基質支持礫層となる。本層上部の基質部分においてレンズ状に挟まれる標高 3.05m の土壌（試料 1）と、本層を覆うシルト質粘土層との境界（標高 3.40m）にみられた土壌（試料 2）を採取した。標高 3.40～4.20m は黄灰色（2.5Y4/1：マンセルの表記。標準土色帖を使用。以下同じ）の粗粒砂の混じるシルト質粘土層である。本層の中部（標高 3.56～3.94m）には礫径 40～50mm の中礫サイズの亜角礫を含んでいる。また、上部（標高 3.94～4.20m）は粘土成分が多く、地層全体が黒褐色（2.5Y3/1）を呈する。亜角礫を含む層準に挟まれたレンズ状の土壌（標高 3.90m：試料 3）と、本層を覆う粘土層との境界に含まれていた木片（標高 4.20m：試料 4）を採取した。標高 4.20～5.84m は砂粒子の混じるシルト質粘土層で、標高 5.5m 付近までは黄灰色（2.5Y4/1）であるが、標高 5.5～5.8m までは黒褐色を呈する。全体に塊状・均質で固結度も高く、堆積構造は認められない。下部よりそれぞれ標高 4.40m（試料 5）、標高 4.60m（試料 6）、標高 4.80m（試料 7）、標高 5.00m（試料 8）、標高 5.20m（試料 9）、標高 5.42m（試料 10）の 6 試料を採取した。標高 5.84～6.54m は黄灰色（2.5Y4/1）を呈するシルト質粘土層である。全体に塊状・均質で堆積構造はみられない。下部から標高 5.90m（試料 11）、

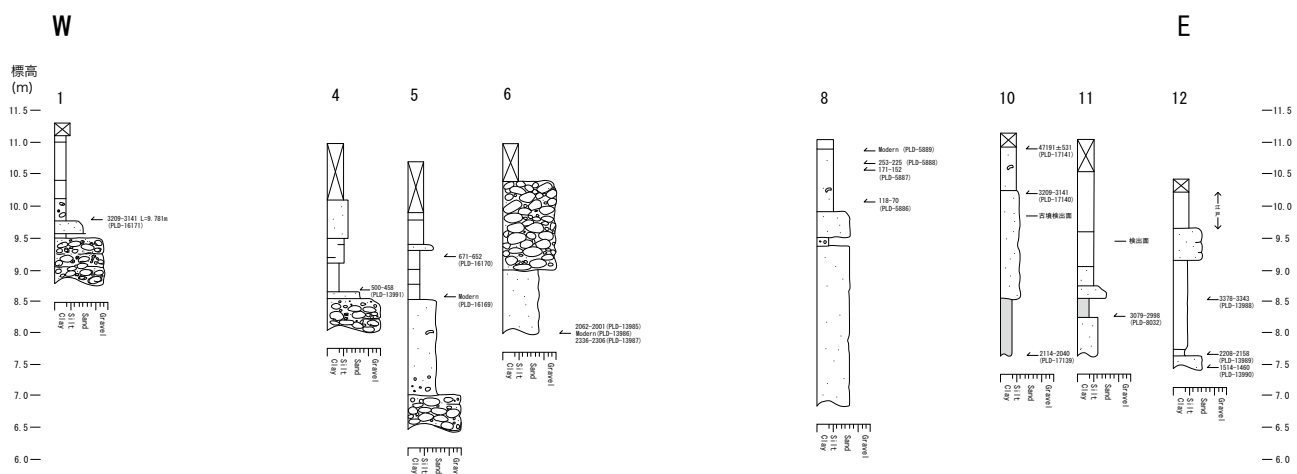


図 5-13 御山寺遺跡における深掘層序断面図

標高 6.10m (試料 12)、標高 6.40m (試料 13) では土壌試料を、標高 6.50m (試料 14)、標高 6.52m (試料 15) では炭化物試料を採取した。標高 6.54 ~ 6.90m は砂質シルト層である。シルト成分が優勢である。地層全体に塊状で、堆積構造はみられない。標高 6.80m で炭化物試料 (試料 16) を採取した。標高 6.90 ~ 7.04m は砂粒子の混じるシルト質粘土層である。堆積構造は認められない。標高 7.04 ~ 7.10m は黒褐色 (2.5Y3/1) を呈する粘土層である。地層全体に塊状・均質で、堆積構造は認められない。本層を覆う砂層との層理面 (標高 7.10m) で土壌試料 (試料 17) を採取した。標高 7.10 ~ 9.00m までは中粒砂層と粗粒砂層とが交互に繰り返す互層となる。全体ににぶい黄色 (2.5Y6/3) ~ 黄褐色 (2.5Y5/4) を呈する。砂の淘汰は良好で、基質にシルトや粘土といった細粒な堆積物を含まない。中粒砂層と粗粒砂層との層理面はあまりはっきりしない。それぞれ層厚約 40 ~ 60cm で繰り返している。標高 9.00 ~ 10.02m はシルト質砂層である。本層は色調と、砂とシルトとの量比からさらに下部と上部に分けられる。下部 (標高 9.00 ~ 9.60m) は暗褐色 (10YR4/2) で砂粒子に富み、上部 (標高 9.60 ~ 10.02m) は暗褐色 (10YR3/3) でシルトが卓越する。堆積構造はみられない。標高 10.02 ~ 11.40m は発掘調査により埋め戻された埋土であり、標高 11.40m が地表面である。

c. 放射性炭素年代測定

深掘に伴う各地点で合計 18 試料の放射性炭素年代測定値を得た (表 5-2)。較正曲線範囲外の試料を除くと、古い値では地点 1 (07D 区) の黒褐色粘土ブロックの混在層の標高 9.78m から採取した土壌が 3209-3141 cal yrs BP(PLD-16171)、地点 7 (06Ca 区) の紫灰色~暗灰色粘土層の標高 8.26m から採取した土壌が 3079-2998 cal yrs BP(PLD-8032) と、約 3000 年前代の値であった。いっぽう、新しい値では地点 2 (06D 区) の暗灰色シルト質粘土層の標高 8.65m から採取したヒシ属の種実が 500-458 cal yrs BP (PLD-13991) と新しい値が得られた。

04A 区で実施したボーリングコア資料からは、各層準から合計 17 試料の放射性炭素年代測定値を得た (表 5-3)。古い値では標高 3.05m の土壌が 8212-8175cal yrs BP(PLD-13923)、標高 3.40m の中粒砂~粗粒砂混じりの粘土層から採取した土壌が 10439-10373cal yrs BP(PLD-13922) の数値年代であった。いっぽう、新しい値では標高 6.50m のシルト質粘土層から採取した炭化物が 4408-4347cal yrs BP(PLD-13910)、標高 6.52m の同じシルト質粘土層から採取した炭化物が 4406-4294cal yrs BP(PLD-13907) とほぼ同じ値であった。そのシルト質粘土層を覆う砂質シルト層の標高 6.80m から採取した炭化物が 4441-4417cal yrs BP(PLD-13909) の値であった。

d. 遺跡周辺の等高線図

東西約 1.8km、南北約 2.6km の範囲全体では標高 7.4m から標高 12.2m までの等高線が描かれ、北方向で相対的に高く、南側で低い傾向がある (図 5-15・図 5-16)。本地域の等高線を概観すると、南北方向の地形の谷状あるいは尾根状を呈する部分が東西に並ぶ。

さらに詳しく地形要素をみてみる。まず谷地形がもっとも顕著に現われているのが、図の中央部、現在の五条川の流路に現われる標高約 8m から約 11m までの谷地形である。

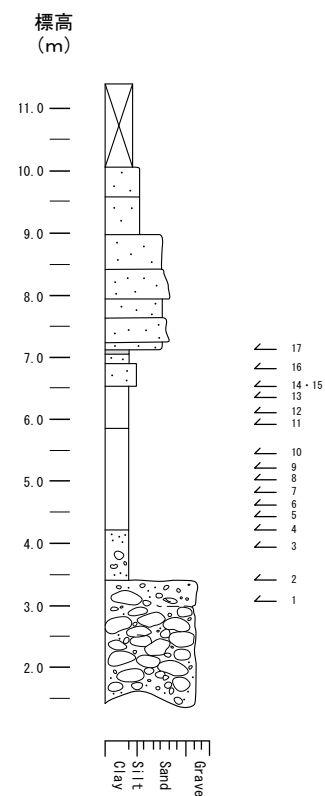


図 5-14 04A 区における試錐柱状図
柱状図横の矢印は放射性炭素年代測定
の試料採取層準と試料番号を示す

表 5-2 深掘層序の放射性炭素年代測定結果

地点	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
1	07D	9.78	黒褐色粘土ブロックの混在層	土壌	2972±23	-24.14±0.22	BC1260-1192(49.5%) BC1177-1161(10.2%) BC1144-1132(8.6%)	3209-3141(49.5%) 3126-3110(10.2%) 3093-3081(8.6%)	PLD-16171(AMS)
2	06D	8.65	暗灰色シルト質粘土層	種実(ヒシ属)	385±21	-22.63±0.19	AD1450-1493(57.3%) AD1602-1613(10.9%)	500-458(57.3%) 348-338(10.9%)	PLD-13991(AMS)
3	05A	8.54	暗灰褐色粘土層	草本	-640±19	-31.80±0.22	Bomb04NH2: AD1957-1957(32.4%) AD1998(35.8%)	Bomb04NH2: 1957AD-1957AD(32.4%) 1998AD(35.8%)	PLD-16169(AMS)
	05A	9.20	褐色シルト質粘土層	炭化材	682±20	-26.77±0.19	AD1280-1298(56.8%) AD1372-1378(11.4%)	671-652(56.8%) 579-572(11.4%)	PLD-16170(AMS)
4	05B	8.00	極粗粒砂層	炭化材	2080±19	-23.06±0.14	BC113-52(57.1%) BC152-138(11.1%)	2062-2001(57.1%) 2101-2087(11.1%)	PLD-13985(AMS)
	05B	8.00	極粗粒砂層	径9mmの枝状生材	-586±18	-27.31±0.19	Bomb04NH2: AD1956-1957(51.5%) AD1999(16.7%)	Bomb04NH2: 1956AD-1957AD(51.5%) 1999AD(16.7%)	PLD-13986(AMS)
	05B	8.00	極粗粒砂層	炭化材	2255±22	-23.64±0.13	BC387-357(34.4%) BC283-257(24.8%) BC246-235(9.1%)	2336-2306(34.4%) 2332-2206(24.8%) 2195-2184(9.1%)	PLD-13987(AMS)
5	05C	10.05	褐色砂混じり粘土質シルト層	炭化物・材	125±19	-28.65±0.14	AD1833-1880(33.1%) AD1684-1706(11.6%) AD1915-1929(8.9%)	118-70(33.1%) 266-245(11.6%) 35-22(8.9%)	PLD-5886(AMS)
	05C	10.55	褐色砂混じり粘土質シルト層	炭化物・材	210±20	-26.31±0.17	AD1720-1733(7.7%) AD1807-1819(6.9%) AD1779-1799(34.6%)	230-217(7.7%) 143-132(6.9%) 171-152(34.6%)	PLD-5887(AMS)
	05C	10.64	褐色砂混じり粘土質シルト層	炭化物・材	95±20	-27.45±0.15	AD1656-1670(20.1%) AD1943-1953(13.6%) AD1697-1725(24.2%)	295-281(20.1%) 7-(-2)(13.6%) 253-225(24.2%)	PLD-5888(AMS)
	05C	10.85	褐色砂混じり粘土質シルト層	炭化物・材	-1173±22	-25.81±0.12	AD1815-1835(17.1%) AD1878-1896(15.1%) AD1903-1917(11.8%)	136-115(17.1%) 73-55(15.1%) 48-38(11.8%)	PLD-5889(AMS)
6	06Cb	7.63	シルト質粘土層	枝材(最外年輪)	2095±21	-28.03±0.20	較正曲線範囲外 BC165-91(60.6%) BC70-60(7.6%)	較正曲線範囲外 2114-2040(60.6%) 2019-2009(7.6%)	PLD-17139(AMS)
	06Cb	10.19	シルト質砂層	土壌	2972±22	-23.86±0.20	BC1260-1192(49.9%) BC1177-1161(9.6%) BC1144-1132(8.6%)	3209-3141(49.9%) 3126-3110(9.6%) 3093-3081(8.6%)	PLD-17140(AMS)
	06Cb	10.89	砂質シルト層	炭化材	47191±531	-26.67±0.20	較正曲線範囲外 BC1130-1049(58.7%)	較正曲線範囲外 3079-2998(58.7%)	PLD-17141(AMS)
7	06Ca	8.26	紫灰色～暗灰色粘土層	土壌	2913±25	-25.44±0.22	BC1156-1145(5.6%) BC1189-1181(4.0%) AD436-491(51.7%)	3105-3094(5.6%) 3138-3130(4.0%) 1514-1460(51.7%)	PLD-8032(AMS)
	06A	7.47	中粒砂層	草本	1570±19	-24.99±0.20	AD509-518(8.9%) AD528-536(7.6%)	1442-1432(8.9%) 1422-1414(7.6%)	PLD-13990(AMS)
	06A	7.68	暗灰色粘土層	炭化材	2214±20	-19.12±0.19	BC259-209(36.3%) BC312-277(25.3%) BC359-350(6.6%)	2208-2158(36.3%) 2261-2226(25.3%) 2308-2299(6.6%)	PLD-13989(AMS)
	06A	8.54	暗灰色シルト質粘土層	土壌	3125±20	-19.22±0.15	BC1429-1394(68.2%)	3378-3343(68.2%)	PLD-13988(AMS)

表 5-3 04A 区試錐層序の放射性炭素年代測定結果

No.	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
1	3.05	中礫と粗粒砂の混じるシルト質粘土層	土壌	7391±28	-25.86±0.12	BC 6263-6226(36.0%) BC 6351-6311(32.2%)	8212-8175(36.0%) 8300-8260(32.2%)	PLD-13923(AMS)
2	3.40	中粒～粗粒砂混じり粘土層	土壌	9234±33	-25.95±0.20	BC 8490-8424(32.4%) BC 8543-8506(18.2%) BC 8376-8349(12.3%) BC 8405-8392(5.3%)	10439-10373(32.4%) 10492-10455(18.2%) 10325-10298(12.3%) 10354-10341(5.3%)	PLD-13922(AMS)
3	3.90	中礫を含む粗粒砂混じりシルト質粘土層	土壌(砂混じり)	5956±26	-25.36±0.13	BC 4849-4793(60.7%) BC 4881-4871(7.5%)	6798-6742(60.7%) 6830-6820(7.5%)	PLD-13921(AMS)
4	4.20	粗粒砂混じり粘土層	生材	4484±24	-29.91±0.13	BC 3329-3263(32.2%) BC 3250-3216(15.5%) BC 3123-3100(10.8%) BC 3180-3159(9.8%)	5278-5212(32.2%) 5199-5165(15.5%) 5072-5049(10.8%) 5129-5108(9.8%)	PLD-13920(AMS)
5	4.40	砂混じりシルト質粘土層	土壌	5409±28	-28.86±0.11	BC 4328-4281(50.5%) BC 4274-4257(17.7%)	6277-6230(50.5%) 6223-6206(17.7%)	PLD-13919(AMS)
6	4.60	砂混じりシルト質粘土層	土壌	5495±25	-28.63±0.13	BC 4358-4333(68.2%)	6307-6282(68.2%)	PLD-13918(AMS)
7	4.80	砂混じりシルト質粘土層	土壌	5256±24	-26.87±0.11	BC 4024-3993(25.8%) BC 4063-4036(20.6%) BC 4155-4133(14.3%) BC 4223-4210(7.5%)	5973-5942(25.8%) 6012-5985(20.6%) 6104-6082(14.3%) 6172-6159(7.5%)	PLD-13917(AMS)
8	5.00	砂混じりシルト質粘土層	土壌(植物片混じる)	5138±25	-29.50±0.14	BC 3981-3943(66.6%) BC 3852-3849(1.6%)	5930-5892(66.6%) 5801-5798(1.6%)	PLD-13916(AMS)
9	5.20	砂混じりシルト質粘土層	土壌	5061±25	-26.80±0.18	BC 3942-3896(30.1%) BC 3881-3856(18.5%) BC 3821-3801(14.5%) BC 3844-3836(5.1%)	5891-5845(30.1%) 5830-5805(18.5%) 5770-5750(14.5%) 5793-5785(5.1%)	PLD-13915(AMS)
10	5.42	砂混じりシルト質粘土層	土壌	5354±25	-24.59±0.18	BC 4203-4167(25.0%) BC 4260-4227(23.0%) BC 4098-4076(10.7%) BC 4128-4117(5.2%) BC 4312-4302(4.3%)	6152-6116(25.0%) 6209-6176(23.0%) 6047-6025(10.7%) 6077-6066(5.2%) 6261-6251(4.3%)	PLD-13914(AMS)
11	5.90	シルト質粘土層	土壌	5072±24	-24.11±0.20	BC 3878-3804(55.6%) BC 3946-3928(12.6%)	5827-5753(55.6%) 5895-5877(12.6%)	PLD-13913(AMS)
12	6.10	シルト質粘土層	土壌	4869±24	-24.21±0.19	BC 3661-3639(59.5%) BC 3692-3686(8.7%)	5610-5588(59.5%) 5641-5635(8.7%)	PLD-13912(AMS)
13	6.40	シルト質粘土層	土壌	5039±28	-26.32±0.22	BC 3938-3861(52.4%) BC 3812-3788(15.8%)	5887-5810(52.4%) 5761-5737(15.8%)	PLD-13911(AMS)
14	6.50	シルト質粘土層	炭化物	3893±22	-12.65±0.23	BC 2459-2398(41.9%) BC 2385-2346(26.3%)	4408-4347(41.9%) 4334-4295(26.3%)	PLD-13910(AMS)
15	6.52	シルト質粘土層	炭化物	3889±22	-12.10±0.18	BC 2457-2345(68.2%)	4406-4294(68.2%)	PLD-13907(AMS)
16	6.80	砂質シルト層	炭化物	3970±22	-21.56±0.21	BC 2492-2468(39.7%) BC 2561-2536(28.5%)	4441-4417(39.7%) 4510-4485(28.5%)	PLD-13909(AMS)
17	7.10	砂混じりシルト質粘土層	土壌	5370±26	-22.13±0.14	BC 4266-4230(33.0%) BC 4322-4292(20.9%) BC 4196-4174(14.3%)	6215-6179(33.0%) 6271-6241(20.9%) 6145-6123(14.3%)	PLD-13908(AMS)

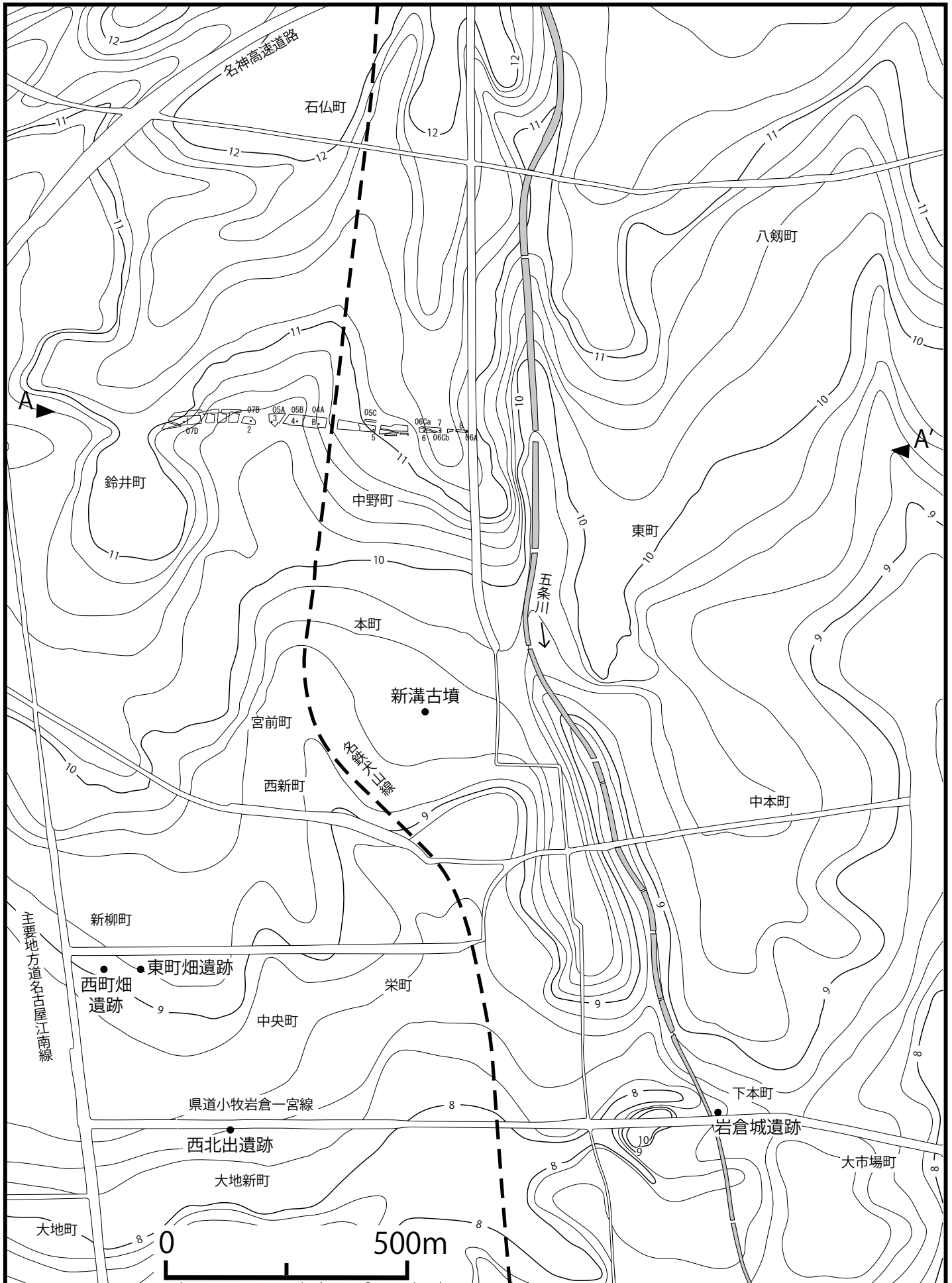


図 5-15 御山寺遺跡周辺の表層地形等高線図

この谷は最大幅約 200m で、岩倉市八劔町（図の全域が岩倉市になるため以下では町名のみを記す）から東町、下本町までに明瞭に現われている。北の八劔町では標高 11m から 12m において、現在の五条川の流路方向の谷と、流路から西に分岐する谷地形が認められ、それらが八劔町付近で合流する。また、現在の五条川流路から隔たった西と東にも、流路に平行な南北方向の谷地形が認められる。特に西側でみられる谷地形には、現在の五条川の流路幅よりも広い谷地形が読み取れる。それは標高 8m から 12m にかけてみられ、北の石仏町から神野町、中野町、本町、泉町、栄町を通り、下本町に至る。推定される谷幅は栄町付近で最大約 600m におよび、谷の底にあたる地点を南北方向に結んだ線は、ちょうど名鉄犬山線の線路方向と一致する。北の石仏町において標高 11.2 ～ 12.2m まで谷幅約 200m であったものが、神野町、鈴井町付近で急に谷幅を増加させる。この部分に御山寺遺跡の調査範囲がある。対して、五条川流路の東には標高 8.8 ～ 11.4m に谷状地形が認められる。北の八劔町から東町まで谷幅 100 ～ 300m であったものが、東町から中本町までの南へ向かうに従い幅 600m 以上と谷幅を増す。ところで、先に述べた現在の五条川流路に現われた谷地形に関して、八劔町から東町を通り中本町までの約 2.2km に渡って、五条川の流路と谷状地形とが調和的であったが、名鉄岩倉駅を南へ過ぎた下本町では、流路と谷状地形との関係は不明瞭となる。さらに、それまでの南北方向とは直交するような、標高 7.2 ～ 8.6m までの東西方向の谷地形が現われる。

いっぽう、尾根状地形について、現在の五条川流路の東西の両脇には、それぞれ流路に沿って標高 8.6m から 12m には尾根状地形が認められる。流路の東側では八劔町、東町、中本町にかけて、西側では石仏町、神野町、本町、栄町にかけて認められる。これら尾根地形も谷地形と同様に、南側の下本町において、それまで連続していた尾根状の地形は途切れるようである。五条川流路から西へ約 600 ～ 800m 離れた石仏町や鈴井町には標高 10.4 ～ 12.2m の尾根状の地形があり、特に鈴井町では等高線が南側で閉じた舌状地形をしている。なお、地形的に特異なものとして、尾根や谷地形のところで述べたように、解析範囲南側の下本町では、それまで連続していた谷地形あるいは尾根状地形が認められなくなり、下本町付近で東側が閉曲線からなる閉じた谷地形が現われる。また、谷地形に囲まれるように標高 9 ～ 10m の閉曲線からなる凸地形が現われる。

D. 考察

a. 地形と遺跡との対応

表層地形解析により、解析範囲には現在の五条川の流路に平行な谷地形が大きく 2 つ認められた。ひとつは現在の五条川の流路の西側に、流路から約 350 ～ 400m 隔たって南北方向を示し、北の標高約 12m の石仏町から神野町、本町、泉町、宮前町を通り、標高約 8m の下本町に至る解析範囲内だけでも延長約 2.3km の谷地形である。谷の最深部、いわゆる谷の底にあたる所を結ぶと、ちょうど名鉄犬山線にあたる。現在ここを流下する河川はみられない。もうひとつは五条川の流路から東へ約 700m 隔たった、八劔町から東町、中本町に至る延長約 1.1km の谷地形である。この谷の底から東へ約 50 ～ 100m 隔たったところを現在の矢戸川が南流する。このような 2 つの谷地形のうち、五条川流路の西側にみられる谷地形が御山寺遺跡に関係のある表層地形であり、御山寺遺跡の調査区範囲を通るラインで東西地形断面図を描くと（図 5-17）、調査範囲は谷地形をちょうど横断するように設定されていることがわかる。ここで表層地形解析の等高線と東西断面図とを参考にして各調査区の地形的な特徴を記すと、調査区西側より順に、09 区・07D 区・07E 区・07C 区・07F 区は、鈴井町でみられた標高 10.4 ～ 12.2m の舌状を呈する尾根状地形の地形傾斜面縁辺にあたっている。07A 区・06D 区・05A 区・05B 区・04A 区は谷地形の標高 10.2 ～ 10.4m における最深部にあたっている。04B 区・

区があたっており、これらの調査区には古墳時代から 13～14 世紀、15 世紀～近世までの遺物・遺構が検出されている。これは離水した乾燥地が本地点にあったことを示しており、表層地形解析から尾根状の地形が想定され周囲よりも標高の高い場所であったこととも合致する。このように、表層地形解析で認められた地形的な特徴は、考古学的な発掘所見と調和的であることがわかった。

b. 地下層序からわかる古環境

表層地形解析から読み取れる遺跡周辺の地形の特徴と考古学的な発掘所見とはよい対応がみられた。次にそれらの地形がいつ頃どのように形成されたのか検討をしたい。なお、ここでは主に考古遺跡の立地に関係のある地下層序上部の堆積物について検討する。

本地域の表層地形解析範囲には南北方向にのびる谷と尾根状地形がみられた。それに対して調査区は表層地形を横断するように東西方向に設定されているため、深掘で得られた地下層序は地形に直交する断面をみていることになる。それらの地下層序を観察すると、下位層でみられる堆積物の粒度の差によって大きく 2 つに分けられる。西側の地点 1～4 では下位層に礫層が卓越し、東側の地点 5～8 では礫層を欠き、下位層は砂層やシルト層・粘土層から構成された。この層相の変化する境界は地点 4 (05B 区) と地点 5 (05C 区) との間にありそうである。

西側の地点 1～3 では、下位層は大礫～巨礫層であった。礫層はいずれの地点でも極粗粒砂を基質とする礫支持礫層であり、活動的流路内の堆積物であったことがわかる。礫層からは残念ながら年代の得られる試料は採取できなかった。しかし、礫層を覆って、地点 1 の標高 9.76～10.12m にみられた黒褐色粘土層をブロックとして含むブロック混在層の土壤が 3209-3141(49.5%) cal yrs BP(PLD-16171) の数値年代を示しており、礫層はそれよりも前には堆積していたことがわかった。また、地点 1～3 では下位層から上位層にかけて礫層から砂層、そしてシルト質粘土層へと上方細粒化傾向を示しており、西側では水理学的なエネルギーが次第に減少していったことがわかる。例外的に地点 4 (05B 区) では現在の畑地の約 20cm 直下に礫径 20～30cm の巨礫層がみられた。

いっぽう、東側の地点 5～8 では西側でみられた下位層の礫層はまったくみられなくなる。代わりに下位層は粗粒な砂層からなり、その上をシルト層や粘土層が覆うようになる。砂層からは年代測定に有効な試料を採取できなかったが、地点 7 (06A 区) では標高 7.47～7.66m の中粒砂層中の標高 7.47m で採取した草本が 1514-1460(51.7%) cal yrs BP(PLD-13990) の年代値であった。また、直接砂層より採取したわけではないが、地点 8 (06Ca 区) の標高 7.64～8.24m のシルト質砂層を覆う紫灰色～暗灰色粘土層の標高 8.26m の土壤が 3079-2998(58.7%) cal yrs BP(PLD-8032) と、より古い値を示した。

ところで、04A 区の試錐調査では地表から深度 10m の地下層序が得られた。それにより御山寺遺跡の地下には下位層から礫層、シルト質粘土層、それを覆う中粒砂～粗粒砂層、シルト質砂層の層相の変化が捉えられた (図 5-14)。それらの堆積年代について、下位層の礫層上部から、その礫層を覆うシルト質粘土層までに約 8000 年前代から約 4000 年前代までの数値年代が得られた (表 5-3)。シルト質粘土層を覆って標高 7.10～9.00m までは中粒砂層と粗粒砂層との互層からなり、御山寺遺跡の調査地点に活動的な河川流路が流下するようになったことがわかる。また、堆積物を運搬する河川流路が調査地点に近づいたことにより、標高 9.00～10.02m のシルト質砂層が上方に累積したことがわかる。発掘調査において人為活動による遺物や遺構は標高 9～10m 付近に集中する。活動的な河川流路の側方移動に伴う水理エネルギーの低下により人が利用できる環境が出現して以降、速やかに人為活動が行なわれたことが示唆される。

御山寺遺跡の深掘層序において、地点1（07D区）では下位の礫層を覆う標高9.76～10.12mの黒褐色粘土層の粘土ブロック混在層の標高9.78mの土壌が3209-3141 cal yrs BP(PLD-16171)、地点7(06Ca区)の標高7.64～8.54mの紫灰色～暗灰色粘土層の標高8.26mの土壌が3079-2998 cal yrs BP(PLD-8032)と約3000年前代を示す数値年代が得られた。表層地形解析により調査範囲には谷地形が認められるため、谷の埋積が約3000年前代には始まっていたことがわかる。それは地点1（07D区）において粘土ブロック混在層を覆う地層から縄文時代晩期の土器片が出土すること（川添2008）とも調和的である。いっぽうで、例えば地点2（06D区）や地点3（05A区）の標高8.5～9.5m付近のシルト質粘土層からは、地点2（06D区）の標高8.65mのシルト質粘土層内から採取した種実（ヒシ属）が500-458 cal yrs BP(PLD-13991)、地点3（05A区）の標高9.20mのシルト質粘土層から採取した炭化材が671-652 cal yrs BP(PLD-16170)と、先の約3000年前代を示した堆積物とほとんど変わらない標高値をもちながらも、新しい数値年代を示した。この原因について、表層地形解析により御山寺遺跡には谷地形があり、北の石仏町から認められる谷地形は07A区・06D区・05A区・05B区・04A区において谷の底にあたっていた。上流部で集水された水はより低い場所を目指して流下するが、先の調査区付近が谷にあたるため、流下する水と運搬される碎屑物は絶えずこれらの調査区で堆積と削剥を繰り返したことであろう。発掘調査では07D区に古墳時代前期以前や近世初期の河川流路が、06D区・07A区にも近世初期の河川流路が想定されており、表層地形解析および地下層序から推定される堆積環境と考古学的な調査結果には良好な対応関係がみられた。

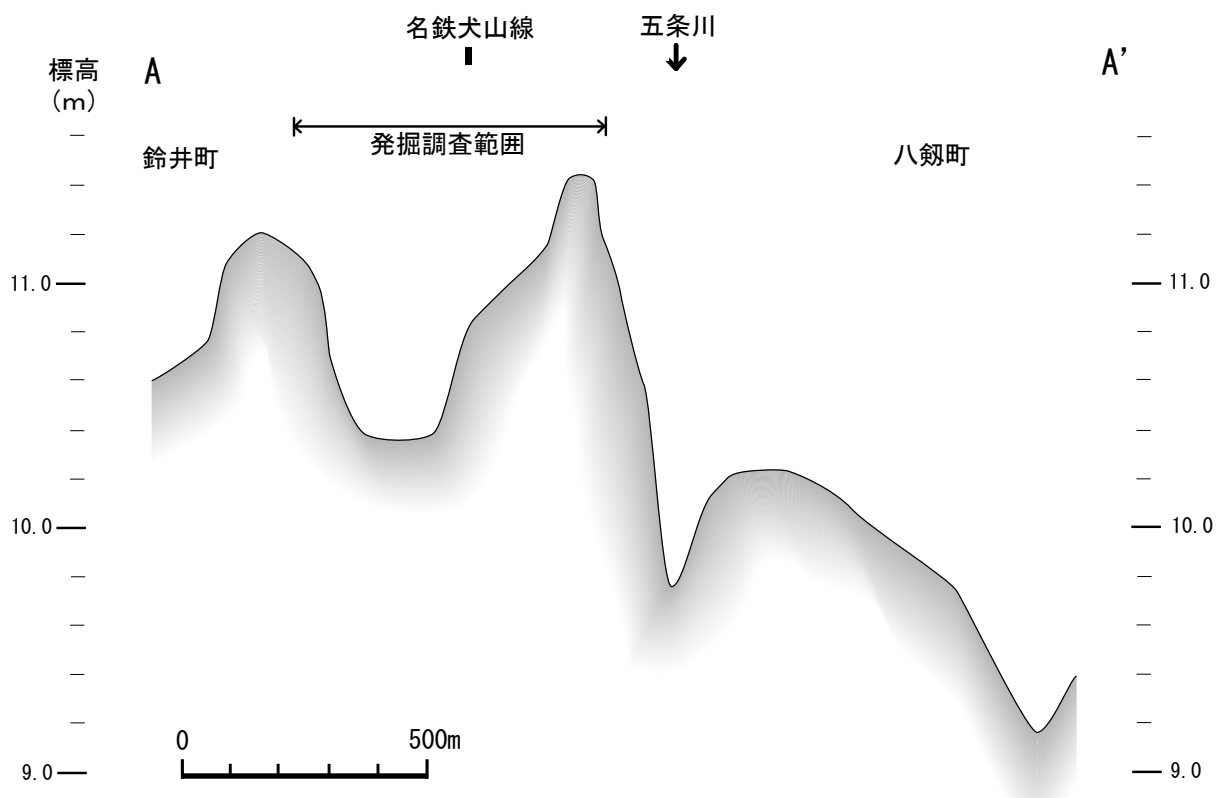


図 5-17 調査区範囲を通る東西地形断面図

作成地点は図 5-15 参照。水平距離に比べて垂直方向を強調していることに注意

謝辞

本論を作成するにあたり、試錐調査ではアオイテック株式会社に、鳥瞰図の作成では国際文化財株式会社に、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの小林紘一氏・丹生越子氏・伊藤 茂氏・山形秀樹氏・瀬谷 薫氏・Zaur Lomatatidze 氏・Ineza Jorjoliani 氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 川添和暁 2008 「御山寺遺跡」『平成 19 年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、pp.8-13
- 永井邦仁 2006 「御山寺遺跡」『平成 17 年度愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター、pp. 8-13

6. 総括

今回の発掘調査・諸分析によって明らかになったのは以下の諸点である。

- ①弥生中期以前の地表面は黒色（化）層であり、調査区の西端（07D 区）では検出できたが、以東で全く確認できなかったのは、大きな谷地形（旧河道）が存在していたことによる。おそらく、原五条川の氾濫する低地となっていたのであり、東端は小牧段丘に達するものと推測される。縄文後期後葉にはこの黒色（化）層上面で人々の活動が始まり、その痕跡が 07D・E 区に残された。岩倉市権現山遺跡を除く濃尾平野の他の遺跡と同様の希薄さである。
- ②上記の谷が埋積する過程で河道も度々流れる場所を変えたであろう。05B 区の微高地が形成された弥生後期にはおおよそ現在の流路に近づきつつあったようだが、なお 04A 区から 05E・06E 区の間は低いままで、安定するのは古墳前期になってからである（ただし 05Ea 区西部では砂層が上昇しているので、幅は狭いがこの部分だけ多少は高かったかもしれない）。
- ③弥生後期後半になってようやく東端エリア（05Eb・06Ca 区）で集落の影が見え始める。竪穴建物は明確ではないが、方形周溝墓の造営を行っており、集落が存在した可能性が高い。方形周溝墓は弥生終末期に改修されて墳形（前方後方形？）を変えている。
- ④弥生終末期には旧河道の右岸（07D・E 区）でも居住が始まり、やや遅れて左岸（05B 区）やその他の地点でも散在的ながら人々の営みが始まった。07D・E 区の竪穴建物跡の属性によれば、これらの人々は濃尾平野外（矢作川流域か？）から移住してきた可能性がある。
- ⑤古墳前期の竪穴建物跡や溝群は、最終段階には洪水砂によって覆われている。洪水によって集落が廃絶したのかどうかはわからないが、濃尾平野低地部全域が不安定化したことは明らかで、御山寺遺跡もその渦中にあった。
- ⑥4 世紀から 5 世紀前半の御山寺遺跡は様相がまったくつかめない。人々の活動が再開するのは 5 世紀でも終わり頃で、須恵器の大型器種の分布からみると、生活空間というより葬祭空間としてであった。
- ⑦7 世紀は再び様相がつかめなくなる。竪穴建物など生活諸施設が現われるのは 8 世紀後半以降であり、9 世紀から 10 世紀に盛期を迎える。調査区内は集落の縁辺のようだが、それでも社会上層に関係する遺物の存在は御山寺遺跡の政治経済的基盤の一端を示す。つまり、交通路の要衝としての位置である。
- ⑧古代末から中世始めにかけて御山寺遺跡はまた茫漠となるが、西端の川岸では礫の集積等を伴う特殊な活動が長期間にわたって行われた。

この後、13 世紀を中心とする時期と、15 世紀から 16 世紀にかけて遺構・遺物集中度を高める。前者では建物群の存在は確かだが、屋敷地を配置するなどの様相は特に窺えない。むしろ 15 世紀以降に屋敷地の区画が設けられ、その後に東西に走る大溝が掘削されるなど、目まぐるしい遺構変遷をたどる。こうした動態が岩倉城とどのように同期しているのか詳細な検討は今後の課題である。

- ⑨遅くとも 15 世紀中頃には 05B 区は墓地となったが、埋葬されたのは 20 才以下の若年者、もしくは年少者であり、成人墓地とは地点を異にしている。東西の大溝（05B-SD001）掘削後にも墓地は継続する。

- ⑩御山寺遺跡は古代までは地形の形成に合わせて人々の活動が様々に変化する様子を明らかにした。その古代には一定程度の造成が行われて、安定した環境の確立が行われ、中世へと続く。つまり、自然環境との調和から、自然環境からの自立、そして自然環境の改変へという方向性である。今回の調査もまた自然環境改変の現代的対応である。

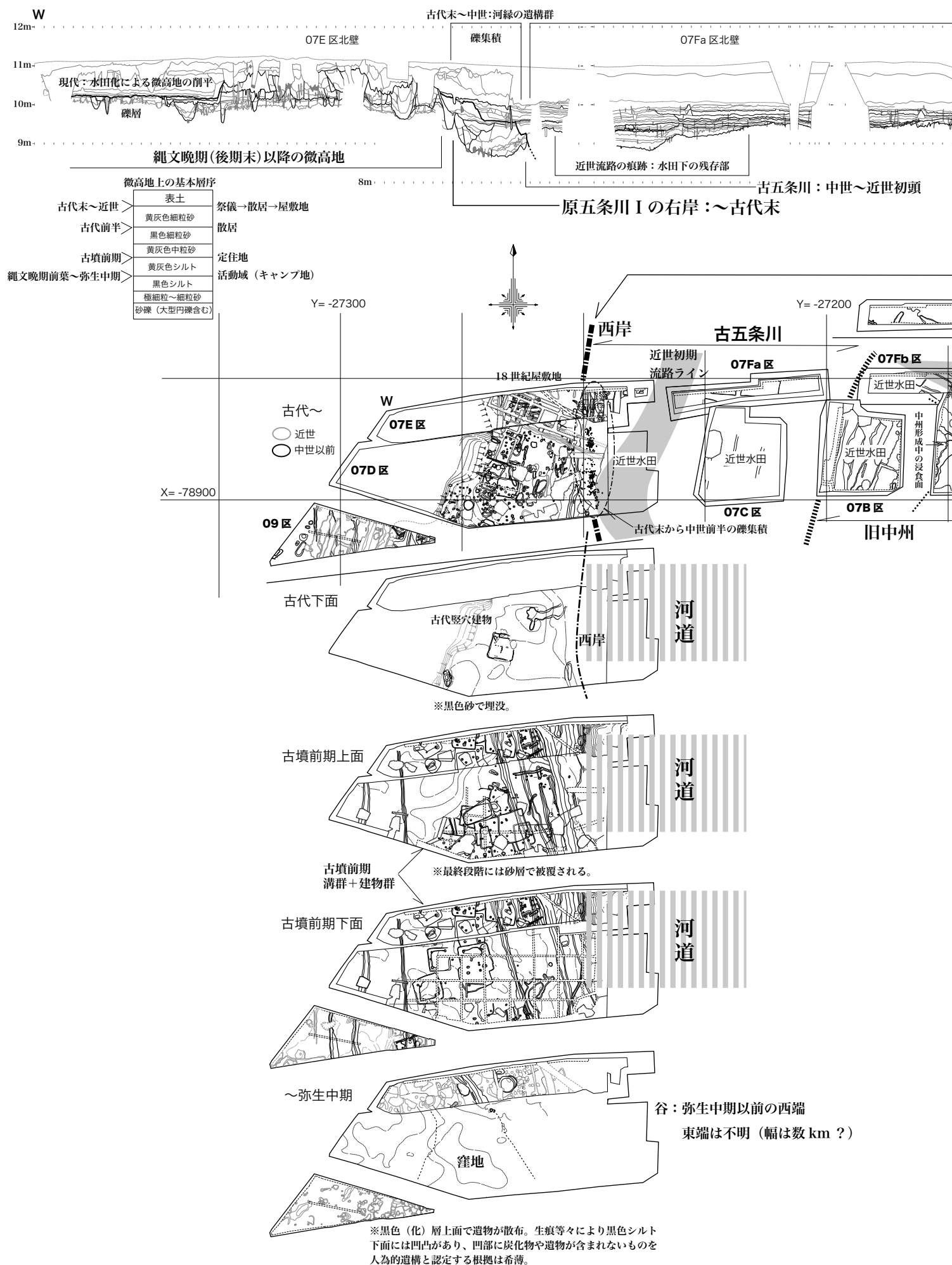
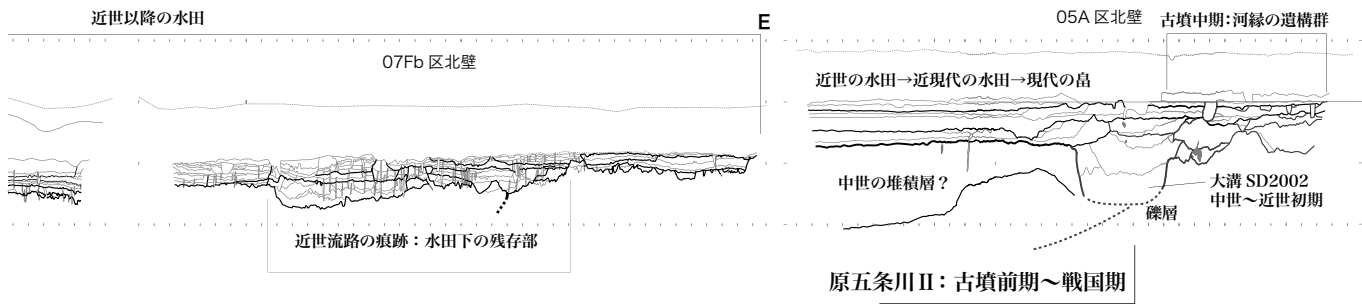
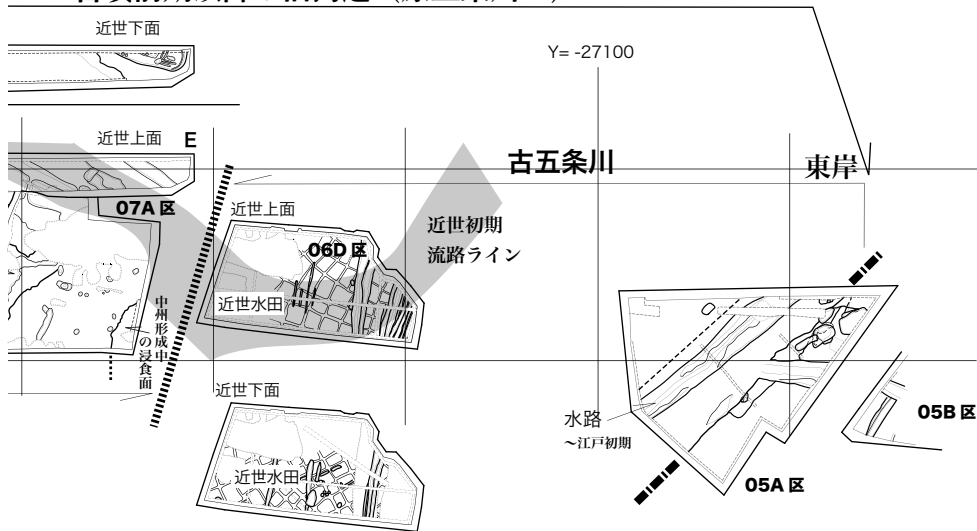


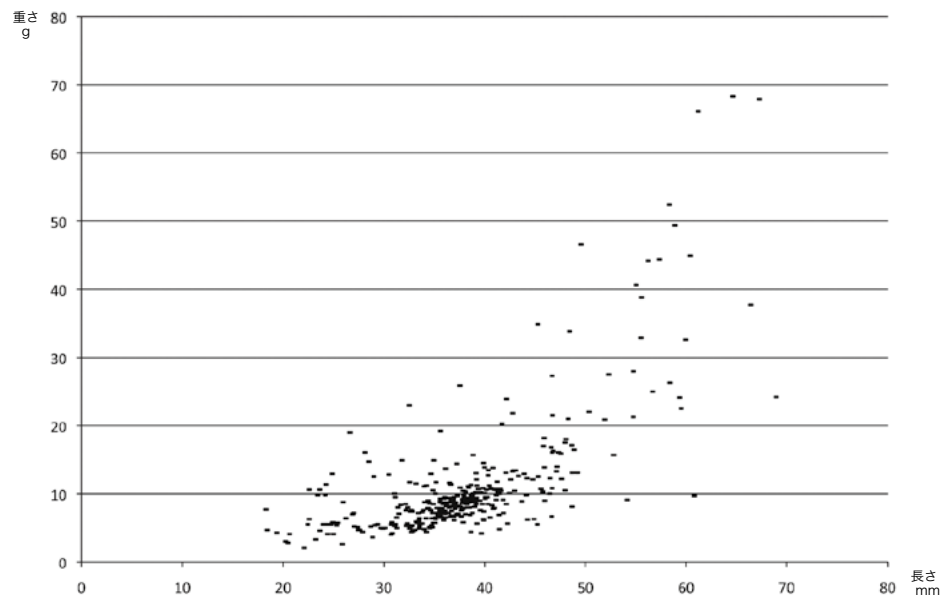
図 6-1 御山寺遺跡西区・中央区概念図 1/1000



古墳前期以降の旧河道（原五条川Ⅱ）



すべての土錘



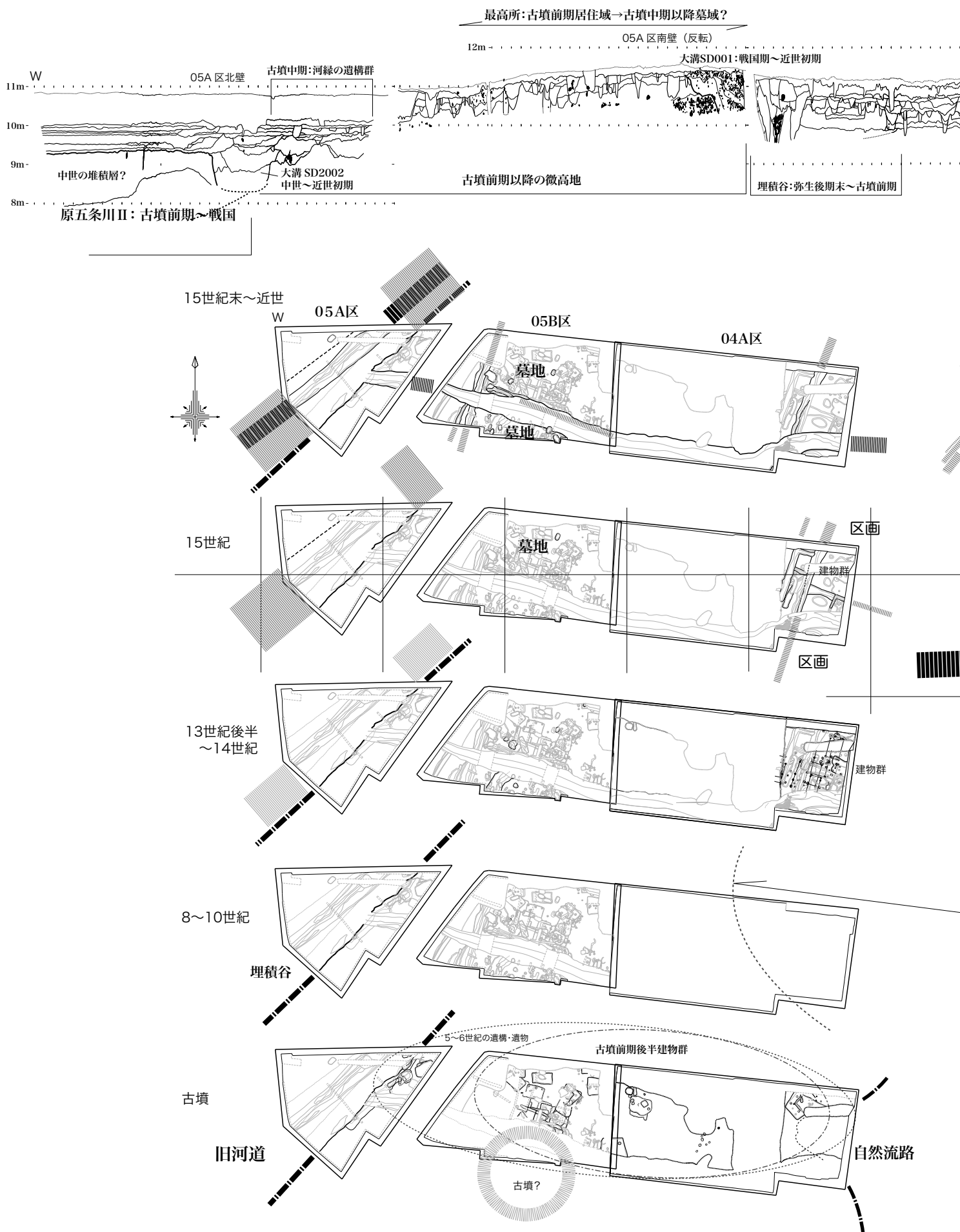
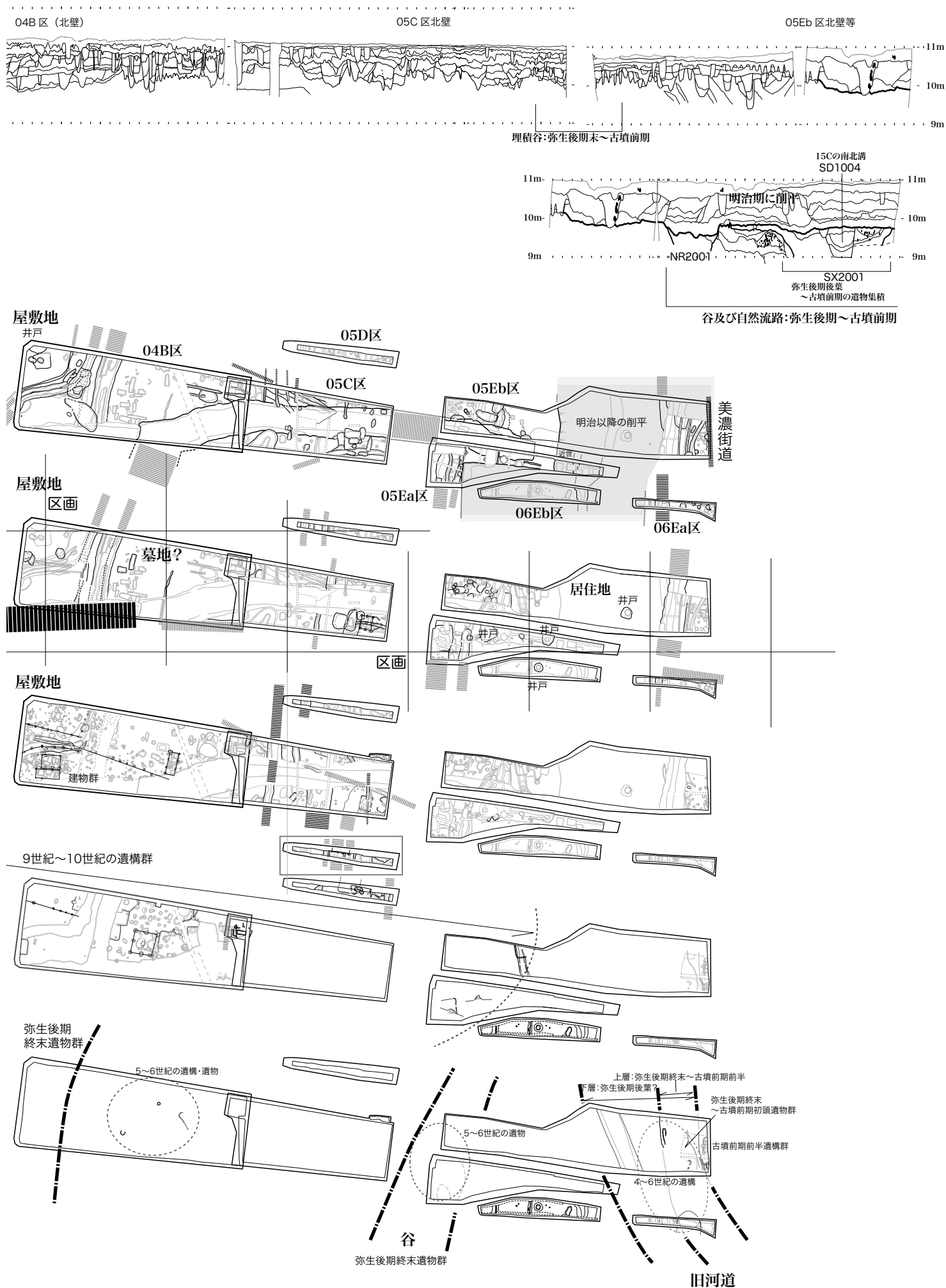


図 6-2 御山寺遺跡東 1 区概念図 1/1000



遺構図版 1



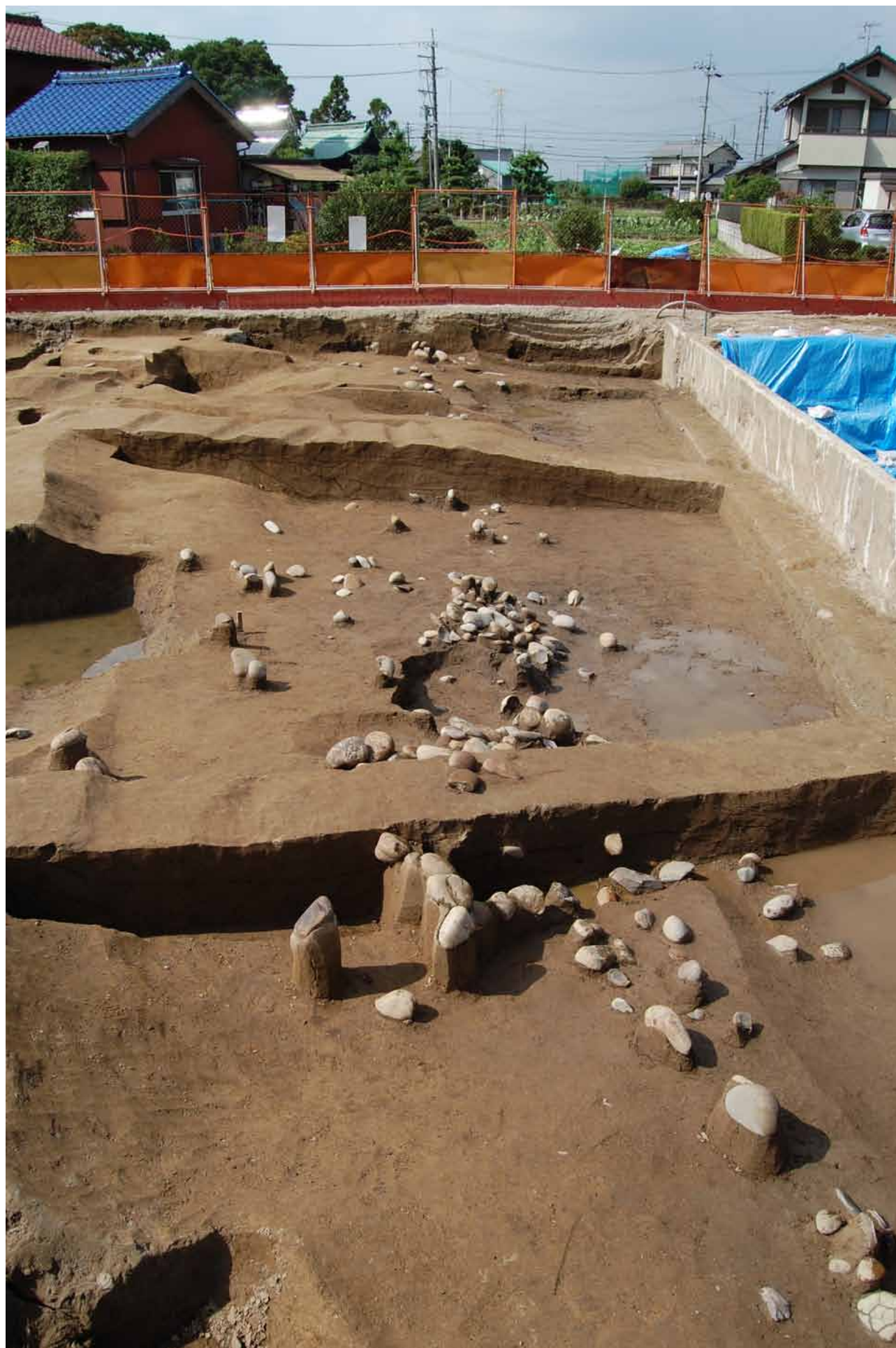
09区2面西部



07D区1面 西から



07D区1面全景 東から

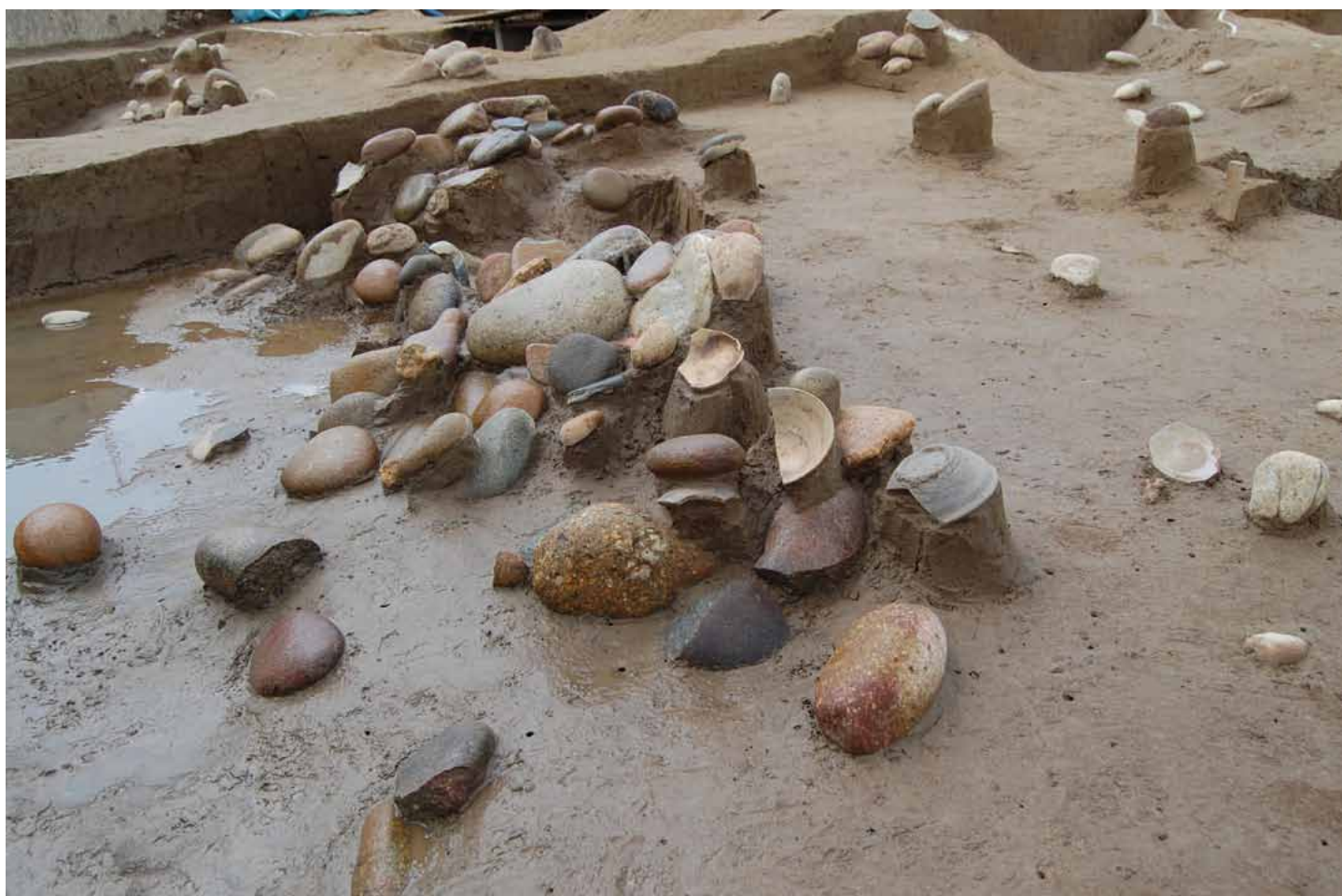


07D 区 NR138 礫群 南から

遺構図版 4



07D 区 NR138 礫群 北から



07D 区 NR138 礫群細部 北から

遺構図版 5



07D 区 SB300 上：南西から 下：西から



07D 区 SB300 出土須恵器



07D 区 SB331 北東から



07D 区 SB331 南から

07D 区 SB350・SB411
南から

遺構図版 7



07D 区黒色シルト上面遺構検出状況 東から

遺構図版 8



07D 区西部 黒色シルト上面検出遺構



07D 区東部 黒色シルト上面検出遺構



07D 区 SB472・474 南から



07D 区 SB491・492 南から

07D 区中央部黒色シルト上面
南から

07D 区 SD312 南から



07D 区 SU310 遺物出土状況



07D 区 SU347 遺物出土状況

遺構図版 11



07D 区 SD367 遺物出土状況 上：南から 右：東から



07D 区 SU426 遺物出土状況 南東から



07D 区 SD428 遺物出土状況 南西から



07E 区 1 面全景 東から

遺構図版 13



07E 区 1 面 南東から



07E 区 1 面西部近景 南東から



07E 区 NR024 礫群 北東から



07E 区 NR024 礫群 北から



07E 区 NR024 礫群断面 北から



07E 区 NR024 礫群近景 北から



07E 区 NR024 土層セクション 北から



07E 区 NR024 下部礫群と土坑 北西から



07E 区 2 面 東から



07E 区西部 2 面 西から



07E 区西部 2 面近景 西から



07E 区 SB070
北から



07E 区 SB072
北西から



07E 区 SB082
南から



07E 区 SE124・SB082

東から



07E 区 SE124・SB082

南から



07E 区 SE124 土層セクション

南から



07E 区

- SD047 南から
- SD049 南東から

07E 区

- SD125 南東から
- SD086 南から
- SD086 南から
- SD086 南から



07E 区 3 面全景

遺構図版 22



07E 区 3 面検出状況 南東から



07E 区 3 面遺物出土状況 南東から



07E 区 3 面検出状況 東から



07E 区 SX161 遺物出土状況 南西から



07E 区 SX160 遺物出土状況 南西から

07E 区 3 面
石鑿出土状況07E 区 3 面
石鑿出土状況

07E 区 SD124 遺物出土状況 南東から

07E 区 3 面
縄文土居出土状況

07E 区 SX162 土層セクション





07Fa・Fb区全景 東から



07Fb 区 NR027 南東から

07Fb 区 NR027 近景 南東から





05A 区遠景 西から

05A 区大溝 北西から





05A 区 SD2002・SD2003 南西から



05A 区 SD2003 東から

05A 区 SD2001
北から



05A 区土坑群
北から



05A 区 SX2004 土器出土状況
南東から





05B 区全景 西から

05B 区近景 西から





05B 区

- SB1001 西から
- SB1004 周辺 北から
- SB1029 東から
- SB1029 土器出土状況 西から



- SB1029 土器出土状況 北東から
- SB1029 土器出土状況 西から





05B 区 SK1007 北から



05B 区 SK1124 南から



05B 区西部 北から

05B 区 SD001 西から



05B 区 SK1141 人骨 北から



05B 区 SK1011 南から



05B 区 SK1092 南から





04A 区全景 西から



05B

● SB002 西から

● SB003 西から

● SB003 北から

04A 区 SB004 北西から



04A 区 SK051



04A 区 SB003 掘り方出土石器



04A 区 SD001 内 SX001 北から



04A 区 SD001 東から



04A 区上面東部 西から

04A 区上面東部近景 北から





04B 区西部上面 西から

04B 区西部上面 東から





04B 区西部下面 西から

04B 区西部下面 東から



遺構図版 37



◀ 04B 区
SD003a
西から



◀ 04B 区
SD006
北から



◀ 04B 区
SD004・
006
西から



◀ 04B 区
北西部
南東から

04B 区 ▶
下面西部
南から



04B 区 ▶
下面南西部
北から



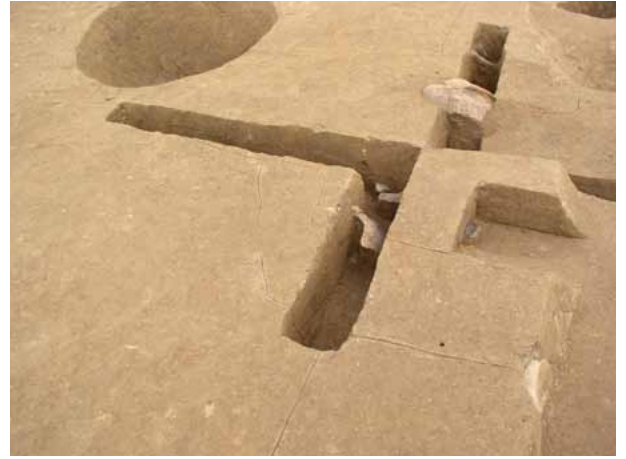
04B 区 ▶
下面南西部
西から



04B 区 ▶
下面西部
南西から



04B 区 ▶
下面西部
南から



04B 区

- SB008 カマド (SF002)

検出時 南東から

- SF002 掘り下げ中 南から

- SF002 完掘状況 南から

04B 区

- SB010 東から

- SB002 北から

- SB004 南から

- SK092 東から



04B 区
SK42204B 区
SK43204B 区
SU004

05C・D 区 1 面 東から



05C・D 区 2 面 東から

遺構図版 40



05Ea 区

- SD2001・SX2001 北西から
- SD2001・SX2001 南東から
- 上面 西から

05Ea 区

- SB2002 カマド 南から
- SB2002 カマド 西から
- SD2001・SX2001 北西から



05Ea 区 SK2023 (カマド)

遺構図版 42

05Eb 区西部
上面
東から



05Eb 区西部
下面
東から



05Eb 区東部

上面

05Eb 区東部

SK2074 遺物出土状況



遺構図版 44

05Eb 区東部上面
西から



05Eb 区東部下面
SX2001
北西から





上：06Ca 区上面 西から 下：SD2001（方形周溝墓） 西から



07D 区南壁



07D 区から東の眺望

遺構図版 47



遺構図版 48



04A 区

05D 区 SB3001



05Ea 区 SB2002



05D 区 SB3001 カマド



05Ea 区 SB2002



04B 区西壁 (04B-1742) 出土状況



04B 区 SK340 土錘



04B 区 SK252



04B 区 SK432



04B 区 SB008 カマド (SF002)

遺物図版 1



07D-768



07D-769



07D-770



07D-774



07D-775



07D-780



07D-776



07D-780



07D-788



07D-786



07D-794



07D-902



07D-803



07D-804



07D-807



07D-806



07D-834



07D-833



07D-843



07D-856



07D-859



07D-873



07D-878



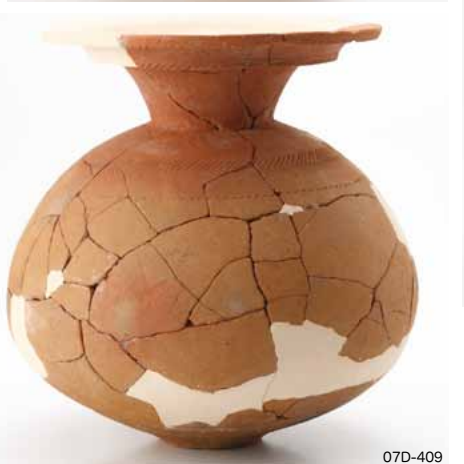
07D-874



07D-862



遺物図版 5



遺物図版 6



07D-470



07E-122



05A-1151



07D-473



07E-143



07E-146



05B-1169



07D-500



07E-154



07E-155



05B-1218



07E-162



05B-1227



07D-561



07D-551



07E-746



07D-576



05A-1156



05B-1226



07D-593



05A-1146



05B-1231



07E-636



07E-7 20



05B-1203



05B-1183

遺物図版 7



遺物図版 8



04B-1731



04B-1933



04B-1938



04B-1939



04B-1940



04B-1746



04B-1753



04B-1755



04B-1885



04B-1742



04B-1593



04B-1741



04B-1326



05C-1408



05C-1473



05C-1964



05C-1381



05C-1502



05C-1506



05C-1533



05C-1538



05C-1532



05C-1968



05C-1474

遺物図版 9



遺物図版 10



05Eb-2160



05Eb-2314



06Cb-2439



05Eb-2170



05Eb-2287



05Eb-2187



05Eb-2236



06Cb-2470



05Eb-2190



05Eb-2303



05Eb-2208



05Eb-2305



06Cb-2488



05Eb-2178



06Cb-2449



05Eb-2268



05Eb-2269

ふりがな	ごさんじいせき							
書名	御山寺遺跡							
副書名								
巻次								
スリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第167集							
編著社名	石黒立人・永井邦仁・川添和暁・鬼頭剛・堀木真美子・山田博之・新山雅広・黒沼保子・金井慎司・伊藤茂・尾畠大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani							
編集機関	公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
ごさんじいせき 御山寺遺跡	あいちけん 愛知県 いわくらし 岩倉市 なかのまち 中野町 すずいまち 鈴井町	23228	110007	35度 17分 18秒	136度 52分13 秒	2004.4（範囲 確認） 2004.6～9（本 調査） 2005.4～9 2006.5～11 2007.4～ 2008.2 2009.5～6	2,580㎡ 3,890㎡ 3,000㎡ 4,150㎡ 350㎡	県道一宮春日井線街路新設改良工 事 緊急地方道路整備事業3・3・8 号一宮春日井線 緊急地方道路整備事業3・3・8 号一宮春日井線 緊急地方道路整備事業3・3・8 号一宮春日井線 緊急地方道路整備事業3・3・8 号一宮春日井線
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
御山寺遺跡	集落	縄文時代 ～ 江戸時代		竪穴建物跡、 方形周溝墓、 掘立柱建物、 溝、 井戸 墓地等		縄文土器、 土師器、 須恵器、 灰釉陶器、 瀬戸美濃窯産陶器、 金属製品等		縄文晩期前半土器 方形周溝墓 中世・戦国期の東西に走る大 溝
文書番号	発掘届出	(15埋セ第115号・2004.3.2、16埋セ第113号・2005.3.8、17埋セ第123号・2006.3.20、18埋セ第106号・2007.3.20、21埋セ第2号・2009.3.30)						
	通知	(15教生第72～12号・2004.3.17、16教生第2082号・2005.3.11、18教生第44号・2006.4.12、19教生第1号・2007.4.3、21教生第115号・2009.4.13)						
	終了届 保管証 発見届	(16埋セ第55号・2004.9.30、17埋セ第61号・2005.10.3、18埋セ第63号・2006.11.14、19埋セ第113号・2008.3.11、21埋セ第37号・2009.6.29)						
要約	本遺跡は、犬山扇状地端部付近に立地しており、西部では旧五条川の流路によって分かれている。調査では主に古墳時代前期から中世にかけての遺構や遺物が確認された。古墳時代には旧五条川の両岸に集落が営まれて、東端に方形周溝墓が築かれた。古代から中世前半には主に左岸側で集落が継続して営まれた。中世後半には集落南縁を区切るように幅6mの大溝が東西方向に掘削された。江戸時代初期には旧五条川左岸地区に墓地が設けられた。今調査で当該地域の長期にわたる集落を含めた景観変遷を復元する上で貴重な資料を得ることができたと考える。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 167 集

御山寺遺跡

2011 年 3 月 31 日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 サンメッセ株式会社